秋田県文化財調査報告書第91集

東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ

――上葛岡Ⅳ遺跡・駒林遺跡・案内Ⅱ遺跡・猿ヶ平Ⅰ遺跡――

1982・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

序

十和田湖の南玄関口である鹿角市に，東北縦貫自道車道の建設計画が立てられ，現在工事進行中であります。

この道路通過地（八幡平・十和田錦木間）に埋蔵文化財包蔵地が33ヶ所あることが判明し，秋田県教育委員会は日本道路公団の委託を受け，昭和54年度から発掘調査を実施しております。昭和55年度は19遺跡の発掘調査を無事終了し，今回上葛岡Ⅳ遺跡，駒林遺跡，案内Ⅱ遺跡，猿ヶ平Ⅰ遺跡の発掘調査成果を報告書として刊行することになりました。

本報告書は，今まで不明分野の多かった鹿角地方の歴史解明に役立つものと考えられ，広く永く活用されることを望むものであります。

最後に発掘調査から報告書刊行までに顧問，専門指導員，日本道路公団，鹿角市，同教育委員会はじめ関係各位から多大の協力を得ましたことについて，心から感謝の意を表するものであります。

昭和57年３月

秋田県教育委員会

教育長　畠　山　芳　郎

例　　言

1．本書は東北縦貫自動車道路線内に位置する昭和55年度発掘調査19遺跡のうち，上葛岡Ⅳ遺跡（遺跡番号No.13），駒林遺跡（遺跡番号No.14），案内Ⅱ遺跡（遺跡番号No.19），猿ヶ平Ⅰ遺跡（遺跡番号No.20）の発掘調査報告書である。

2．遺跡については機会を見て発表してきたが，本報告書を正式のものとする。

3．発掘調査遺跡の記載は，岩手県境から付した遺跡番号による。

4．報告遺跡の発掘調査においては，次の各氏からご助言，ご教示をいただいた。

秋田大学教授	新　野　直　吉
秋田県鹿角市立十和田中学校長	安　村　二　郎
秋田県立秋田高等学校教諭	塩　谷　順　耳
秋田県立十和田高等学校教諭	大　里　勝　蔵
秋田県鹿角市大日堂禰宜	安　倍　良　行

5．本書　Ⅱの1「地形と地質」は，秋田県立能代北高等学校教諭藤本幸雄氏の執筆である。

6．古陶磁器類の鑑定は，金沢大学法文学部助教授佐々木達夫氏にお願いした。

7．土器の産地同定は，奈良教育大学教授三辻利一氏にお願いした。

8．石器の石質鑑定は，秋田県立博物館学芸主事嵯峨二郎氏にお願いした。

9．^{14}C年代測定は，日本アイソトープ協会にお願いした。

10．花粉分析は，パリノ・サーヴェイ株式会社にお願いした。

11．遺構内外の土壌の燐分析は，秋田県農業試験場環境部にお願いした。

12．報告書に使用した地図は，建設省国土地理院発行5万分の1，2万5千分の1，日本道路公団作成の1,000分の1の地形図である。

13．遺跡の土層，遺物の色調記載は，農林省農林水産技術会議事務局監修，財団法人日本色彩研究所，色票監修『新版，標準土色帖』を使用した。

14．遺物の実測には，画像工学研究所のスケッチグラフ卓上型を活用した。

15．遺物の細部観察には，ニコン実体顕微鏡ＳＭ２―10を使用した。

16．本書は下記の調査員，補佐員が協議して作成した。

Ⅰ，Ⅱの2　岩見　誠夫

駒林遺跡，上葛岡Ⅳ遺跡，案内Ⅱ遺跡

小林　克，　関　直，　田中　和徳，　石木田　正幸，　花田　孝夫

阿部　義行

遺物の実測・採拓・トレース・整理には，上記調査員・補佐員の他次の者があたった。

浅石　恵留子　　三上　美子　　小田島　礼子　　苗代沢　ノブ

小田島　キクエ　　三上　スガ子　　浅石　悦子　　田中　春美

加藤　正子　　原　ツヨ　　才田　環　　小松　睦子

猿ヶ平Ⅰ遺跡

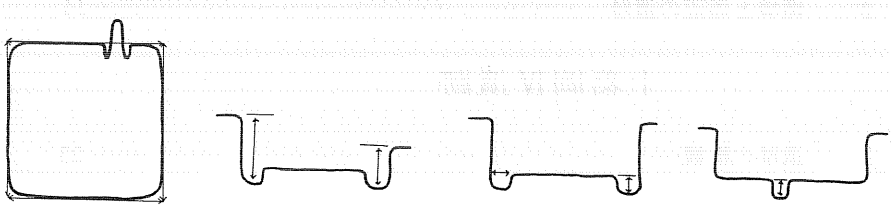
岩見　誠夫　　栗沢　光男　　藤井　安正　　松岡　忠仁　　児玉　悦朗

高橋　学　　奈良　義博

遺物の実測・採拓・トレース・整理には，上記調査員・補佐員の他次の者があたった。

津島　満子　　安保　幸子　　池田　邦子　　畠山　千代美　　奈良　恵

17．住居跡計測方法は以下の通りである。



○壁長は各壁の外接線の交点から交点までを計測した。

○壁高は周溝のある場合は周溝底から，ない場合は床面からの高さを計測した。

○傾斜角は断面形における床面と壁面の外接線の交叉の内角を計測した。

○周溝幅は床面レベルでの幅を計測した。

○周溝深は床面レベルからの深さを計測した。

○ピットは床面における開口部径と深さを計測した。

○面積は遺構上端の占地面積である。計測にはプラニメーターを用い，3回計測して平均値を算出した。

○計測値単位はcmを用い，面積はm^2を用いた。推定のものには〈　〉を付した。

18．土器の計測はcmの単位で行い，推定のものには（　）を付した。

目　　次

序
例　言

I　はじめに…… 1
1　発掘調査に至るまで…… 1
2　発掘調査経過…… 2
3　調査の組織と構成…… 4
4　調査の方法…… 5
II　遺跡の立地と環境…… 7
1　地形と地質…… 7
2　環境と周辺の遺跡…… 14

上葛岡Ⅳ遺跡

1　遺跡の概観…… 23
2　調査の方法…… 24
3　調査経過…… 24
4　遺跡の層位…… 26
5　遺構と遺物…… 28
6　まとめ…… 134

駒　林　遺　跡

1　遺跡の概観…… 181
2　調査の方法…… 181
3　調査経過…… 181
4　遺跡の層位…… 183
5　遺構と遺物…… 189
6　まとめ…… 241

案内II遺跡

1　遺跡の概観……275
2　調査の方法……275
3　調査経過……276
4　遺跡の層位……276
5　遺構と遺物……279
6　まとめ……313

猿ヶ平I遺跡

1　遺跡の概観……341
2　調査の方法……341
3　調査経過……341
4　遺跡の層位……342
5　遺構と遺物……388
6　まとめ……390

挿　図　目　次

II．遺跡の立地と環境

第１図　段丘地形図……8
第２図　露頭柱状図……10
第３図　周辺遺跡分布図……15
第４図　秋田県鹿角市における東北縦貫自動車道路上の遺跡分布図……19・20

上葛岡Ⅳ遺跡

第１図　上葛岡Ⅳ遺跡グリッド配置図……25
第２図　遺跡の層位……27
第３図　第１号土壙～第４号土壙……30
第４図　遺構外遺物出土状況……31
第５図　遺構外出土遺物……32
第６図　遺構外出土遺物……33
第７図　遺構外出土遺物……34
第８図　遺構外出土遺物……35
第９図　遺構外出土遺物……36
第10図　遺構外出土遺物……37
第11図　第１号住居跡……41～44
第12図　第１号住居跡カマド……45
第13図　第１号住居跡出土遺物……46
第14図　第２号住居跡……48
第15図　第２号住居跡カマド……49
第16図　第２号住居跡出土遺物……50
第17図　第２号住居跡出土遺物……51
第18図　第３号住居跡……54
第19図　第３号住居跡カマド……55
第20図　第３号住居跡出土遺物……56
第21図　第４号住居跡カマド……58
第22図　第４号住居跡……59～62

第23図　第４号住居跡出土遺物……63
第24図　第５号住居跡……65
第25図　第５号住居跡カマド……66
第26図　第５号住居跡出土遺物……67
第27図　第６号住居跡……69
第28図　第６号住居跡カマド……70
第29図　第６号住居跡出土遺物……75　71
第30図　第７号住居跡出土遺物……74
第31図　第７号住居跡……81～78
第32図　第８号住居跡カマド……80
第33図　第８号住居跡……81～84
第34図　第８号住居跡出土遺物……85
第35図　第８号住居跡出土遺物……86
第36図　第８号住居跡出土遺物……87
第37図　第９号住居跡カマド……90
第38図　第９号住居跡……91～94
第39図　第９号住居跡出土遺物……95
第40図　第10号住居跡……97～00
第41図　第10号住居跡出土遺物……01
第42図　第11号住居跡……103～06
第43図　第11号住居跡カマド……107
第44図　第11号住居跡出土遺物……108
第45図　第11号住居跡出土遺物……109
第46図　第12号住居跡カマド……112
第47図　第12号住居跡……113～116
第48図　第12号住居跡出土遺物……117
第49図　第５号土壙～第７号土壙……119
第50図　第８号土壙～第10号土壙……121
第51図　第11号土壙～第14号土壙……123
第52図　第15号土壙～第21号土壙……125
第53図　各土壙内出土遺物……126
第54図　掘立柱建物跡……128

第55図　第１号溝跡……129
第56図　第２号溝跡……130
第57図　第３号溝跡……131
第58図　遺構外出土遺物……132
第59図　遺構外出土遺物……133
付図１　上葛岡Ⅳ遺跡遺配置図

駒林遺跡

第１図　駒林遺跡グリッド配置図……182
第２図　遺跡の層位……184
第３図　駒林遺跡（農道北側区）遺構配置図……185～188
第４図　集礫遺構……190
第５図　トレンチ内遺物出土状況図……192
第６図　縄文時代土器拓影（１）……193
第７図　縄文時代土器拓影（２）……194
第８図　縄文時代土器拓影（３）……195
第９図　縄文時代土器拓影（４）……196
第10図　縄文時代土器拓影（５）……197
第11図　弥生時代土器拓影……198
第12図　縄文時代土器実測図（１）……199
第13図　縄文時代土器実測図（２）……200
第14図　トレンチ調査区内出土石器・鉄器実測図……201
第15図　遺構外出土石器実測図……202
第16図　第１号住居跡……204
第17図　第１号住居跡カマド……206
第18図　第１号住居跡出土土器（１）……205
第19図　第１号住居跡出土土器（２）……207
第20図　第１号住居跡出土土器（３）……208
第21図　第１号住居跡出土土器（４）……219
第22図　第１号住居跡出土土器拓影……210
第23図　第１号住居跡出土石器・土製品……211
第24図　第２号住居跡……215

第25図　第２号住居跡カマド……216
第26図　第２号住居跡出土土器（１）……217
第27図　第２号住居跡出土土器（２）……218
第28図　第２号住居跡出土土器（３）……219
第29図　第２号住居跡出土土器（４）……220
第30図　第２号住居跡出土土器（５）……221
第31図　第２号住居跡出土土器（６）……222
第32図　第２号住居跡出土土器（７）……223
第33図　第２号住居跡出土土器（８）……224
第34図　第２号住居跡出土土器・石器……225
第35図　第３号住居跡……230
第36図　第３号住居跡カマド……231
第37図　第３号住居跡出土土器……232
第38図　第３号住居跡出土土器拓影……233
第39図　第１号土壙～第４号土壙……234
第40図　掘立柱建物跡……236
第41図　遺構外出土土器（１）……237
第42図　遺構外出土土器（２）……238

案内Ⅱ遺跡

第１図　案内Ⅱ遺跡グリッド配置図……277
第２図　遺跡の層位……278
第３図　第１号住居跡……280
第４図　第１号住居跡出土土器……281
第５図　第２号住居跡……283
第６図　第３号住居跡……285
第７図　第３号住居跡出土土器……286
第８図　第４号住居跡……287～290
第９図　第４号住居跡出土土器……291
第10図　第１号土壙～第３号土壙……294
第11図　第４号土壙～第６号土壙……296
第12図　第７号土壙～第９号土壙……298

第13図　第10号土壙～第11号土壙……300
第14図　第12号土壙……301
第15図　各土壙内出土土器……302
第16図　埋設土器遺構……304
第17図　埋設土器……305
第18図　配石遺構……307～311
第19図　配石遺構周辺出土土器……311
第20図　遺構外出土遺物……312
付図 2　案内II遺跡遺構配置図

猿ヶ平I遺跡

第１図　グリッド配置図……343
第２図　遺構配置図……345・346
第３図　ＳＩ001竪穴住居跡実測図……344
第４図　ＳＫ001，002，003，004土壙実測図……348
第５図　ＳＫ005，006，007，008土壙実測図……350
第６図　ＳＫ009，010，011，012土壙実測図……352
第７図　ＳＫ013，014，015，016土壙実測図……354
第８図　ＳＫ017，018，019，020土壙実測図……356
第９図　ＳＫ(Ｆ)001，002，003，004フラスコ状ピット実測図……358
第10図　ＳＫ(Ｆ)005，006，007，008，009フラスコ状ピット実測図……360
第11図　ＳＫ(Ｆ)010，011，012フラスコ状ピット実測図……362
第12図　ＳＫ(Ｆ)013，014，015，016フラスコ状ピット実測図……364
第13図　ＳＫ(Ｔ)001落し穴状遺構，ＳＸ(Ｆ)001焼土遺構，ＳＸ(Ｕ)001埋設土器……366
第14図　ＳＩ001竪穴住居跡，ＳＫ001，002土壙出土土器(１)……368
第15図　ＳＫ002，003，004土壙出土土器(２)……369
第16図　ＳＫ016土壙出土土器(３)……370
第17図　ＳＫ(Ｆ)001フラスコ状ピット出土土器(４)……370
第18図　ＳＫ(Ｆ)005，006フラスコ状ピット出土土器(５)……371
第19図　ＳＫ(Ｆ)007，009フラスコ状ピット出土土器(６)……372
第20図　ＳＸ(Ｕ)001埋設土器実測図(７)……372
第21図　遺構外出土土器（１）……373

第22図　遺構外出土土器（２）……374
第23図　遺構外出土土器（３）……375
第24図　遺構外出土土器（４）……376
第25図　遺構外出土土器（５）……377
第26図　遺構外出土土器（６）……378
第27図　遺構外出土石器……379

表　目　次

Ⅱ．遺跡の立地と環境

第１表　重鉱物組成……11
第２表　周辺遺跡一覧……16

上葛岡Ⅳ遺跡

第１表　第１号土壙観察表……29
第２表　第２号土壙観察表……29
第３表　第３号土壙観察表……29
第４表　第４号土壙観察表……29
第５表　第１号住居跡観察表……40
第６表　第１号住居跡出土遺物観察表……46
第７表　第２号住居跡観察表……47
第８表　第２号住居跡出土遺物観察表……52
第９表　第３号住居跡観察表……53
第10表　第３号住居跡出土遺物観察表……55
第11表　第４号住居跡観察表……57
第12表　第４号住居跡出土遺物観察表……63
第13表　第５号住居跡観察表……64
第14表　第５号住居跡出土遺物観察表……67
第15表　第６号住居跡観察表……68
第16表　第６号住居跡出土遺物観察表……71
第17表　第７号住居跡Ａ観察表……72

第18表　第７号住居跡Ｂ観察表……73
第19表　第７号住居跡出土遺物観察表……74
第20表　第８号住居跡観察表……79
第21表　第８号住居跡出土遺物観察表……88
第22表　第９号住居跡観察表……89
第23表　第９号住居跡出土遺物観察表……95
第24表　第10号住居跡観察表……96
第25表　第10号住居跡出土遺物観察表……101
第26表　第11号住居跡観察表……102
第27表　第11号住居跡出土遺物観察表……110
第28表　第12号住居跡観察表……111
第29表　第12号住居跡出土遺物観察表……117
第30表　第５号土壙観察表……118
第31表　第６号土壙観察表……118
第32表　第７号土壙観察表……118
第33表　第８号土壙観察表……120
第34表　第９号土壙観察表……120
第35表　第10号土壙観察表……120
第36表　第11号土壙観察表……122
第37表　第12号土壙観察表……122
第38表　第13号土壙観察表……122
第39表　第14号土壙観察表……122
第40表　第15号土壙観察表……124
第41表　第16号土壙観察表……124
第42表　第17号土壙観察表……124
第43表　第18号土壙観察表……124
第44表　第19号土壙観察表……124
第45表　第20号土壙観察表……124
第46表　第21号土壙観察表……124
第47表　各土壙内出土遺物観察表……124

駒林遺跡

第１表　第１号住居跡観察表……203
第２表　第１号住居跡出土遺物観察表……212
第３表　第１号住居跡出土遺物観察表……213
第４表　第２号住居跡観察表……214
第５表　第２号住居跡出土遺物観察表……226
第６表　第２号住居跡出土遺物観察表……227
第７表　第２号住居跡出土遺物観察表……228
第８表　第３号住居跡観察表……229
第９表　第３号住居跡出土遺物観察表……233
第10表　遺構外出土遺物観察表……239
第11表　遺構外出土遺物観察表……240

案内Ⅱ遺跡

第１表　第１号土壙観察表……293
第２表　第２号土壙観察表……293
第３表　第３号土壙観察表……293
第４表　第４号土壙観察表……295
第５表　第５号土壙観察表……295
第６表　第６号土壙観察表……295
第７表　第７号土壙観察表……296
第８表　第８号土壙観察表……296
第９表　第９号土壙観察表……296
第10表　第10号土壙観察表……299
第11表　第11号土壙観察表……299
第12表　第12号土壙観察表……299

猿ヶ平Ⅰ遺跡

第１表　ＳＫ001 竪穴住居跡観察表……347
第２表　ＳＫ001 土壙観察表……349
第３表　ＳＫ002 土壙観察表……349
第４表　ＳＫ003 土壙観察表……349

第５表　ＳＫ004 土壙観察表……349
第６表　ＳＫ005 土壙観察表……351
第７表　ＳＫ006 土壙観察表……351
第８表　ＳＫ007 土壙観察表……351
第９表　ＳＫ008 土壙観察表……351
第10表　ＳＫ009 土壙観察表……353
第11表　ＳＫ010 土壙観察表……353
第12表　ＳＫ011 土壙観察表……353
第13表　ＳＫ012 土壙観察表……353
第14表　ＳＫ013 土壙観察表……355
第15表　ＳＫ014 土壙観察表……355
第16表　ＳＫ015 土壙観察表……355
第17表　ＳＫ016 土壙観察表……355
第18表　ＳＫ017 土壙観察表……357
第19表　ＳＫ018 土壙観察表……357
第20表　ＳＫ019 土壙観察表……357
第21表　ＳＫ020 土壙観察表……357
第22表　ＳＫ（Ｆ）001 フラスコ状ピット観察表……359
第23表　ＳＫ（Ｆ）002 フラスコ状ピット観察表……359
第24表　ＳＫ（Ｆ）003 フラスコ状ピット観察表……359
第25表　ＳＫ（Ｆ）004 フラスコ状ピット観察表……359
第26表　ＳＫ（Ｆ）005 フラスコ状ピット観察表……361
第27表　ＳＫ（Ｆ）006 フラスコ状ピット観察表……361
第28表　ＳＫ（Ｆ）007 フラスコ状ピット観察表……361
第29表　ＳＫ（Ｆ）008 フラスコ状ピット観察表……361
第30表　ＳＫ（Ｆ）009 フラスコ状ピット観察表……363
第31表　ＳＫ（Ｆ）010 フラスコ状ピット観察表……363
第32表　ＳＫ（Ｆ）011 フラスコ状ピット観察表……363
第33表　ＳＫ（Ｆ）012 フラスコ状ピット観察表……363
第34表　ＳＫ（Ｆ）013 フラスコ状ピット観察表……365
第35表　ＳＫ（Ｆ）014 フラスコ状ピット観察表……365
第36表　ＳＫ（Ｆ）015 フラスコ状ピット観察表……365

第37表　ＳＫ（Ｆ）016 フラスコ状ピット観察表……365
第38表　ＳＫ（Ｔ）001溝状土壙観察表……367
第39表　ＳＸ（Ｆ）001 焼土遺構観察表……367
第40表　ＳＸ（Ｕ）001 埋設土器観察表……367
第41表　竪穴住居跡，土壙，フラスコ状ピット出土土器観察表……380
第42表　土壙，フラスコ状ピット出土土器観察表……381
第43表　フラスコ状ピット出土土器，埋設土器観察表……382
第44表　遺構外出土土器観察表……383
第45表　遺構外出土土器観察表……384
第46表　遺構外出土土器観察表……385
第47表　遺構外出土土器観察表……386
第48表　遺構外出土石器観察表……387

図　版　目　次

上葛岡Ⅳ遺跡

図版１　航空写真，遺跡遠景……137
図版２　農道南側区全景，農道北側区全景……138
図版３　遺跡層序……139
図版４　第１号住居跡確認状況　第１号住居跡覆土堆積状況……140
図版５　第１号住居跡完掘状況　第１号住居跡カマド……141
図版６　第２号住居跡確認状況　第２号住居跡カマド……142
図版７　第２号住居跡カマド，第４号住居跡完掘状況……143
図版８　第３号住居跡完掘状況，第３号住居跡カマド……144
図版９　第５号住居跡完掘状況，第５号住居跡煙道……145
図版10　第６号住居跡完掘状況，第６号住居跡カマド……146
図版11　第７号住居跡完掘状況，第７号住居跡カマド……147
図版12　第８号住居跡完掘状況，第８号住居跡カマドＡ……148
図版13　第８号住居跡カマドＢ，第12号住居跡完掘状況……149
図版14　第12号住居跡カマド，第11号住居跡礫出土状況……150
図版15　第11号住居跡礫出土状況，第11号住居跡完掘状況……151
図版16　第11号住居跡カマド，第９号・第10号住居跡完掘状況……152

図版17　第10号住居跡炭化材出土状況，第９号住居跡カマド……159
図版18　第９号住居跡カマド，掘立柱建物跡……154
図版19　第１号溝跡（西▶東），第１号溝跡（南▶北）……155
図版20　第１号土壙完掘状況，第２号土壙完掘状況……156
図版21　第11号土壙完掘状況，第５号土壙完掘状況……157
図版22　第６号土壙完掘状況，第７号土壙完掘状況……158
図版23　第８号土壙完掘状況，第10号土壙完掘状況……153
図版24　第12号土壙内覆土堆積状況，第12号土壙完掘状況……160
図版25　第13号第14号土壙完掘状況，第３号土壙完掘状況……161
図版26　遺構外遺物出土状況……162
図版27　遺構外遺物出土状況……163
図版28　遺構外出土遺物……164
図版29　遺構外出土遺物……165
図版30　遺構外出土遺物，第１号住居跡出土遺物……166
図版31　第２号住居跡出土遺物……167
図版32　第３号住居跡出土遺物……168
図版33　第４号住居跡，第５号住居跡，第６号住居跡出土遺物……169
図版34　第７号住居跡出土遺物……170
図版35　第８号住居跡出土遺物……171
図版36　第８号住居跡出土遺物……172
図版37　第９号住居跡出土遺物，第10号住居跡出土遺物……173
図版38　第11号住居跡出土遺物……174
図版39　第11号住居跡出土遺物……175
図版40　第12号住居跡出土遺物，各土壙内出土遺物……176
図版41　遺構外出土石器……177
図版42　遺構外出土土器（須恵器，陶器）……178

駒林遺跡

図版１　遺跡遠景，遺跡全景……245
図版２　農道北側調査区，農道南側調査区……246
図版３　農道北側区層序，農道南側区トレンチ内層序……247
図版４　第１号住居跡完掘状況　第１号住居跡カマド……248

図版 5　第 1 号住居跡カマドセクション　第 1 号住居跡カマド煙道…… 249
図版 6　第 1 号住居跡ピット内出土土師器坏，第 1 号住居跡覆土内出土土師器甕…… 250
図版 7　第 2 号住居跡完掘状況　第 2 号住居跡カマド…… 251
図版 8　第 2 号住居跡カマド内遺物出土状況，第 2 号住居跡炭化材出土状況…… 252
図版 9　第 3 号住居跡確認状況　第 3 号住居跡完掘状況…… 253
図版10　第 3 号住居跡カマド遺物出土状況，掘立柱建物跡…… 254
図版11　第 1 号土壙完掘状況，集礫遺構…… 255
図版12　遺構外遺物出土状況，遺構外（トレンチ内）遺物出土状況…… 256
図版13　遺構外（トレンチ内）遺物出土状況…… 257
図版14　第 1 号住居跡出土遺物…… 258
図版15　第 1 号住居跡出土遺物…… 259
図版16　第 2 号住居跡出土遺物…… 260
図版17　第 2 号住居跡出土遺物…… 261
図版18　第 2 号住居跡出土遺物…… 262
図版19　第 2 号住居跡出土遺物…… 263
図版20　第 3 号住居跡出土遺物…… 264
図版21　遺構外出土縄文時代土器…… 265
図版22　遺構外出土縄文時代土器…… 266
図版23　遺構外出土縄文時代土器…… 267
図版24　遺構外出土縄文時代土器，遺構外出土弥生時代土器…… 268
図版25　遺構外出土土器（土師器）…… 269
図版26　遺構外出土土器（須恵器，陶器）…… 270
図版27　遺構外出土石器…… 271

案内II遺跡

図版 1　遺跡遠景，遺跡近景…… 317
図版 2　遺跡全景，トレンチ調査区…… 318
図版 3　遺跡層序，第 1 号住居跡完掘状況…… 319
図版 4　第 2 号住居跡完掘状況，第 3 号住居跡完掘状況…… 320
図版 5　第 4 号住居跡完掘状況，第 4 号住居跡内遺物出土状況…… 321
図版 6　土器埋設遺構，同断面…… 322
図版 7　配石遺構，同近接…… 323

図版８　配石遺構配石状況，同配石除去後……324
図版９　第１号土壙完掘状況，第２号土壙遺物出土状況，同断面，同完掘状況……325
図版10　第３号土壙断面，同完掘状況，第５号第６号土壙完掘状況……326
図版11　第５号土壙断面，同完掘状況，第６号土壙断面，同完掘状況……327
図版12　第８号土壙断面，同完掘状況，第９号土壙断面，同完掘状況……328
図版13　第10号土壙断面，同完掘状況，第11号土壙断面，同完掘状況……329
図版14　第７号土壙断面，同完掘状況，第４号土壙完掘状況……330
図版15　第１号住居跡出土土器……331
図版16　第３号住居跡出土土器……332
図版17　第４号住居跡出土土器……333
図版18　各土壙内出土土器……334
図版19　埋設土器……335
図版20　配石遺構周辺出土土器……336
図版21　遺構外出土土器……337

猿ヶ平Ⅰ遺跡

図版１　遺跡全景（北▶南）上　発掘調査前……393
下　発掘調査後……
図版２　(上)調査終了後遺跡全景（南東▶北西）……394
(下)　（東▶西）……
図版３　(上)調査風景……395
(下)調査風景……
図版４　(上)ＳＩ001竪穴住居跡確認状況（南▶北）……396
(下)ＳＩ001竪穴住居跡（北▶南）……
図版５　(上)ＳＩ001竪穴住居跡と炉（西▶東）……397
(下)ＳＩ001竪穴住居跡・炉の下のＳＫ020土壙（西▶東）……
図版６　(上)ＳＫ016土壙（東▶西）……398
(下)ＳＫ016土壙土器出土状況……
図版７　(上)ＳＫ(Ｆ)012フラスコ状ピット（南▶北）……399
(中)ＳＸ(Ｆ)001焼土遺構（南東▶北西）……
(下)ＳＸ(Ｕ)001埋設土器（南▶北）……
図版８　(上)９－Ｓグリッド土器出土状況……400
(中)蓋出土状況……

(下)耳飾出土状況……
図版 9　ＳＩ 001 竪穴住居跡・ＳＫ001，002，003，004土壙……401
ＳＫ(Ｆ)001フラスコ状ピット出土土器（１）……
図版10　ＳＫ（Ｆ）005，006，007，009フラスコ状ピット出土土器（２）……402
図版11　ＳＫ 016 土壙，ＳＸ(Ｕ)001埋設土器，遺構外出土土器，土製品（３）……403
図版12　遺構外出土土器（４）……404
図版13　遺構外出土土器（５）……405
図版14　遺構外出土石器……406

Ⅰ　は　じ　め　に

1．発掘調査に至るまで

秋田県の北東部，鹿角市と鹿角郡小坂町を通過する東北縦貫自動車道の建設計画の魁は，昭和40年11月公表の鹿角市・青森市間，同42年11月公表の盛岡市・鹿角市間の基本計画である。次いで昭和43年４月の鹿角市・青森市間約81kmの第２次施行命令と同46年６月の岩手県二戸郡安代町・鹿角市間約37kmの第５次施行命令によって，その通過予定区域が知られ，これを受けて同47年11月27日に，鹿角市十和田錦木・小坂町間の路線発表があって，ようやくその具体的な姿を県民に表わしたのである。

このため，秋田県教育委員会では，文化庁と日本道路公団が交わした覚書に基づき，昭和44年８月，鹿角市十和田地区から鹿角郡小坂町の青森県境まで，幅４km，延長25kmにわたって遺跡の分布調査を行い，67遺跡を確認し，その成果を公表した。(註１) 昭和48年８月には，鹿角市八幡平，尾去沢，花輪地区で，幅４km，延長20kmの遺跡分布調査と試掘を実施して，46ヶ所の遺跡を確認した。(註２)

昭和51年２月12日になると，昭和48年８月実施の鹿角市内遺跡分布調査結果をふまえて，日本道路公団から鹿角市八幡平から同市十和田錦木に致る延長約21.1kmの路線の発表があり，測量が実施されるに及んだ。

秋田県教育委員会では，日本道路公団仙台建設局鹿角工事事務所の依頼により，昭和52年10月にこの路線上の遺跡分布調査を行い31遺跡の存在を確認した。(註３) 昭和55年に新たに２遺跡が発見追加され，現在総計33遺跡となっている。

その後，遺跡の処遇や調査方針について日本道路公団仙台建設局と秋田県教育委員会の間に協議が持たれ，最終的に遺跡は記録保存が決定した。昭和54年２月に遺跡の発掘調査依頼があり，秋田県教育委員会では昭和54年度八幡平地区７遺跡の発掘調査を行った。昭和55年度は追加委託契約をも含めて八幡平，花輪地区19遺跡の発掘調査が４月から実施されたのである。

註１　秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第20集　1970年

註２　秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第24集　1972年

註３　秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書（八幡平～十和田錦木）』秋田県文化財調査報告書第56集　1978年

2．発掘調査経過

発掘調査は昭和55年４月15日から12月13日まで行われた。

４月14日鹿角市花輪中央公民館に発掘調査に参加する作業員に集まってもらい，調査の目的，発掘の仕方と諸注意，勤務内容，賃金等について説明と連絡を行う。４月15日歌内遺跡（小玉班）と，駒林遺跡（小林班），小豆沢館遺跡取付道路部分（桜田班）の発掘調査に入る。駒林遺跡は工事用車道に予定されている西側部分から発掘を行う。４月16日北の林Ⅰ遺跡（岩見班），４月22日飛鳥平遺跡（橋本班）の発掘調査に入る。

５月１日駒林遺跡工事用道路部分の発掘調査完了。直ちに隣接部分の調査に移行す。遺構は検出されず，遺物は縄文土器片のみ，小豆沢館遺跡農道上部の拡幅予定地から縄文時代のフラスコ状ピット，竪穴住居跡，平安時代の竪穴住居跡，中世の掘立柱建物跡などを検出，重複多く調査は難行す。５月29日工事用重機待機の中で小豆沢館遺跡取付道路部分の発掘調査を終了す。一方飛鳥平遺跡，北の林Ⅰ遺跡では表土除去も順調に進み，数棟の縄文・平安時代竪穴住居跡の検出報告がされた。

６月１日北の林Ⅱ遺跡，２日上葛岡Ⅱ遺跡の発掘調査に入る。これは桜田班が併行して担当。６月９日鳥居平遺跡の粗掘りを橋本班が飛鳥平遺跡と併行して進める。

６月８日小林班は駒林遺跡に実測班を残し，上葛岡Ⅳ遺跡の発掘調査にとりかかる。６月16日駒林遺跡の発掘調査終了。検出遺構は平安時代の竪穴住居跡３棟である。歌内遺跡の発掘調査では，縄文時代のフラスコ状ピット，平安時代の竪穴住居跡の検出が相次ぐ。

７月22日道路公団鹿角工事事務所にて，用地未解決であった発掘調査予定地について協議す。７月30日橋本班中の崎遺跡の刈払いとグリット設定に入る。

７月23日小林班案内Ⅱ遺跡の試掘と刈払いに入り，８月６日猿ヶ平Ⅰ遺跡の試掘と刈払いに移行す。８月８日上葛岡Ⅱ遺跡の発掘調査終了。検出遺構は縄文前期竪穴住居跡２棟。８月18日道路公団鹿角工事事務所と今後の発掘調査行程について協議。８月21日鳥居平遺跡発掘調査終了。本年度追加発掘調査契約６遺跡について文化課から指示あり。22日文化課門間光夫参事，富樫泰時学芸主事来所し，追加契約遺跡の現地踏査を行い，調査員と発掘調査方法について協議す。同日中の崎遺跡発掘調査開始。８月23日追加契約遺跡発掘調査につき，道路公団鹿角工事事務所と用地等の件について協議す。８月28日県立博物館庄内昭男主事，鈴木秋良補佐員，花田孝夫補助員発掘調査応援に来所。８月29日金沢大学法学部助教授佐々木達夫先生発掘調査視察。

９月６日庄内昭男主事，鈴木秋良補佐員，花田孝夫補助員帰秋。９月９日財団法人岩手県埋蔵文化財センター高橋文夫，四ツ井謙吉氏発掘調査視察。９月10日調査専門指導員国学院大学

助教授小林達雄先生各発掘調査現場を視察し指導くださる。９月11日県広報課県政ニュース作成のため北の林Ⅰ遺跡地を取材す。９月12日文化課船木義勝学芸主事，熊谷太郎，柴田陽一郎文化財主事，佐々木金正補助員発掘調査応援に来所。熊谷調査員すぐ下乳牛遺跡の試掘に入る。９月16日飛鳥平遺跡調査終了。縄文中期，後期，晩期の竪穴住居跡，土壙，平安時代の竪穴住居跡の遺構が確認された。同日乳牛，東山地区所在の追加契約遺跡である妻の神Ⅱ遺跡（船木班）と案内Ⅰ遺跡(柴田班)，それに上葛岡Ⅳ遺跡の調査を終了した小林班の案内Ⅱ遺跡の発掘調査が開始された。粗掘の段階では遺物の発見は僅少である。調査顧問奈良国立文化財研究所所長坪井清足先生各遺跡の発掘調査状況を視察し指導くださる。９月24日２ヶ年継続調査の歌内遺跡の発掘終了。ここからは縄文時代のフラスコ状ピット，縄文時代竪穴住居跡１棟，平安時代の49棟に及ぶ竪穴住居跡と，12棟の中世の掘立柱建物跡の遺構の検出があった。９月26日青森県埋蔵文化財調査センター所長北山峰一郎氏と調査第三課長工藤泰博氏来所し，北の林Ⅱ遺跡他を視察する。９月27日歌内遺跡の発掘調査を終了した小玉班，西町地区の西町Ⅱ遺跡の発掘調査に入る。中の崎遺跡では排水溝のある平安時代の竪穴住居跡，土師器合口甕棺が発見される。

10月４日東山地区の猿ヶ平Ⅰ遺跡の発掘調査に岩見班が入る。同日岩手県北上市教育委員会沼山源喜治氏歌内遺跡他を視察する。西町Ⅱ遺跡は時期不明の竪穴住居跡２棟が検出されたのみで遺物の出土は殆んどない。10月18日小玉班は西町Ⅱ遺跡の調査と併行し，丘陵上の西町Ⅰ遺跡の調査を開始する。10月後半は降雨多く発掘調査難行。北の林Ⅰ遺跡，同Ⅱ遺跡とも遺構の実測に終始する。10月25日北の林Ⅰ遺跡で縄文時代竪穴住居跡３棟，平安時代竪穴住居跡22棟，土壙等の検出実測を終え調査終了する。10月28日明堂長根遺跡の南方で新たに土師器を出土する遺跡を発見，一本杉遺跡（遺跡番号No.33）と命名する。

11月８日船木調査員払田柵跡調査事務所へ帰る。案内Ⅰ遺跡，同Ⅱ遺跡，猿ヶ平Ⅰ遺跡では縄文後期の竪穴住居跡，フラスコ状ピットの検出がある。各遺跡の発掘調査とも午前中は，降霜の処理に時間を費やす。11月11日西町Ⅰ遺跡発掘調査終了。出土遺物は縄文土器，弥生土器，遺構は検出されなかった。11月12日西町Ⅱ遺跡及び上葛岡Ⅰ遺跡で縄文中期の竪穴住居跡１棟を検出し調査終了する。11月25日館跡でもあり，縄文中期，平安時代，中世の竪穴住居跡の検出された妻の神Ⅱ遺跡の発掘調査終了する。11月27日道路公団鹿角工事事務所と来年度調査予定の小坂町地内路線上の遺跡分布調査について協議す。案内Ⅱ遺跡下方の平場で縄文土器と竪穴住居跡の一部が検出され，新発見遺跡と認定される。遺跡名は案内Ⅲ遺跡(遺跡番号No.34)とする。

12月２日縄文後期の竪穴住居跡，フラスコ状ピットの検出のあった案内Ⅱ遺跡の発掘調査終了する。12月３日秋田大学教授新野直吉先生，北の林Ⅱ遺跡他を視察する。熊谷太郎，柴田陽一郎調査員能代，秋田に帰る。12月６日猿ヶ平Ⅰ遺跡降雪の中で発掘調査終了する。12月８日

孫右ェ門館遺跡より，平安時代の竪穴住居跡１棟検出。焼失家屋のもよう。12月12日小坂町地内の縦貫道路線踏査を実施するも残雪と枯草多く，遺跡の確認は来春の試掘に待つ。孫右ェ門館の発掘調査終了する。12月13日北の林Ⅱ遺跡，中の崎遺跡，下乳牛遺跡の発掘調査が済み，発掘作業はすべて終了する。

３．調査の組織と構成

調査主体	秋田県教育委員会		
調査顧問	坪井　清足	奈良国立文化財研究所所長	
	芹沢　長介	東北大学教授	
専門指導員	小林　達雄	国学院大学助教授	
	林　　謙作	北海道大学助教授	
	桑原　滋郎	多賀城跡調査研究所研究第一科長	
	藤沼　邦彦	東北歴史資料館考古研究科長	
	須藤　　隆	東北大学助教授	
調査担当者	岩見　誠夫	秋田県教育庁文化課	北の林Ⅰ・猿ヶ平Ⅰ遺跡
	船木　義勝	秋田県教育庁文化課	妻の神Ⅱ遺跡
	熊谷　太郎	秋田県教育庁文化課	下乳牛遺跡
	桜田　　隆	秋田県教育庁文化課	小豆沢館，北の林Ⅱ，上葛岡Ⅰ・Ⅱ遺跡
	柴田陽一郎	秋田県教育庁文化課	案内Ⅰ，孫右衛門館遺跡
	小玉　　準	秋田県教育庁文化課	歌内，西町Ⅰ・Ⅱ遺跡
	橋本　高史	秋田県教育庁文化課	飛鳥平，鳥居平，中の崎遺跡
	小林　　克	秋田県教育庁文化課	駒林，上葛岡Ⅳ，案内Ⅱ遺跡
調査補佐員	栗沢　光男，藤井　安正，関　　直，山崎　文幸		
	三ヶ田俊明		
補　助　員	松岡　忠仁，阿部　明人，石木田正幸，神田　公男		
	北川　恵一，児玉　悦郎，田中　和徳，畠山　　圭		
	福島　昭彦，小田島幸二，佐藤　幸夫，児玉　　均		
	米村　博美，佐々木金正		
事務補助員	佐藤　順子，金沢万里子		
調査協力	庄内　昭男，秋田県立博物館主事　補佐員　鈴木秋良　補助員		

花田　孝夫

調査協力機関　鹿角市教育委員会　東北縦貫自動車道対策事務所，鹿角市建設部建設課高速道路対策室

4．調査の方法

(1)　発掘区の設定

東北縦貫自動車道の調査では，路線内の遺跡地に５ｍ×５ｍのグリッドを設定して発掘を行う。グリッド設定基準線は，歴史時代の遺跡は方位に合わせ，他は日本道路公団の設置した任意二本の中心杭を結ぶ線を設定基準線とし，路線の進行方向に沿わせる。

(2)　測量と実測

地形や遺構状況に応じて，遣り方測量，平板測量，航空写真測量の方法をとる。遺構の実測の縮尺は1/20，遺構配置図は1/200，竪穴住居跡のカマド，石囲炉などの平面図，断面図，土層断面図は1/1.0を原則とするが，必要に応じて任意の縮尺も活用する。

(3)　遺構発掘と遺物のとりあげ

遺構の発掘は４分割法を原則とし，平面，断面，層序，レベル，遺物の実測は県統一のセクショントレスターに記入し，水糸高は標高を記入する。

遺物の取りあげは，１点１袋，１括１袋とし，遺跡名，グリッド名，遺物の種類，層位，出土年月日の記入された遺物カードを同封する。

遺構・遺物記号は，平城京発掘調査で実施しているものを参考に定めたものを使用する。

記号	遺構	記号	遺構	記号	遺構・遺物	記号	遺物
SA	柵列・柱列	SK	土壙	SX(F)	焼土遺構	RQ	石製品
SB	建物跡	SK(F)	フラスコ状ピット	SX(R)	捨場	RT	貝製品
SC	廊	SK(I)	竪穴状遺構	SX(S)	配石(集石・立石・組石 ストンサークル)	RU	人骨
SD	溝・堀・濠	SK(P)	ピット	SX(U)	土器埋設遺構	RV	紙・布製品
SE	井戸跡	SK(S)	墓	RC	炭化物	RW	木・竹製品
SF	築地・土塁	SK(T)	溝状土壙	RM	金属製品	RY	その他
SG	苑池	SL	河川	RN	自然遺物		
SH	広場	SM	道路・橋・階段	RO	骨角製品		
SI	住居跡	SX	その他	RP	土製品		

(4) 写真撮影

実測と同様記録保存の要である写真撮影には，35㎜判小型カメラ２台（ニコンＦＥ）と６×９判の大型カメラ（ホースマンプレス），ゼンザブロニカＥＴＲＳ６×4.5判とポラロイドカメラを使用する。

35㎜判カメラは，モノクロとカラーリバーサル用に使い分け，大判カメラは特に重要な遺構遺物の検出記録に，フィルムパックを交換し，モノクロ，カラーの撮影をする。撮影は遺構，出土遺物とも１方向三枚撮影を原則とする。また，ポラロイドカメラを日誌や遺構の検討，打合会に活用する。

(5) 遺物整理と実測

① 出土遺物は遺物台帳に記入し，写真や実測図とのスムーズな活用をはかる。

② 土器の内面実測が必要と思われるものは，４分割方法をとり，左½に外面，右½に内面および断面を記載する。実測図には輪積痕，巻上げ痕，文様，調整痕を主として記載する。

③ 大破片の実測は，土器の中心線を算出し180度回転して作図する。

④ 破片の拓本は，土器の外面を左に置き，中央に断面，右に内面図を表す方法をとる。

⑤ 石器の実測は，原則として第三投影図法をとる。

II　遺跡の立地と環境

1．地形と地質

(1)　地形・地質の概要

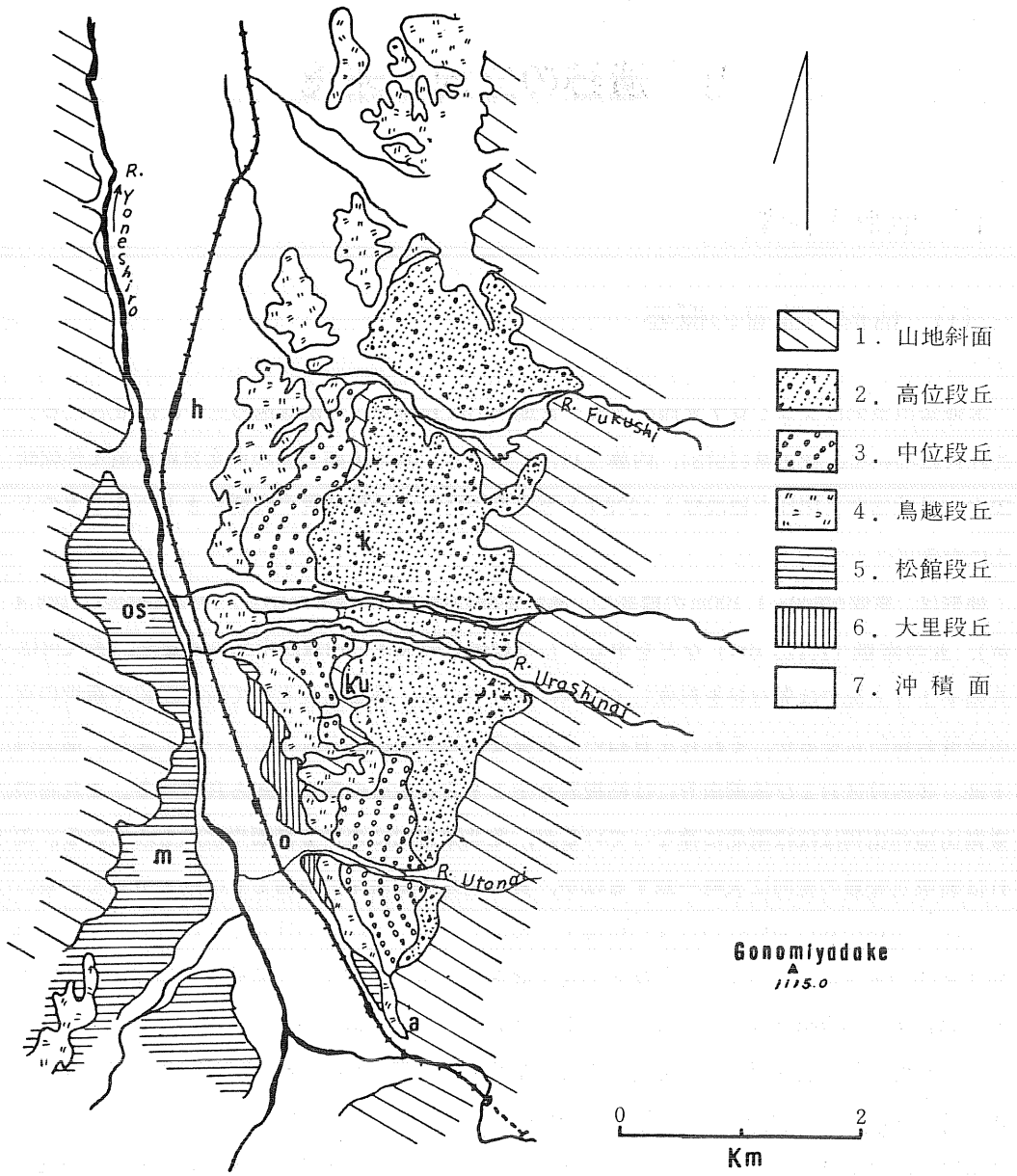
本地域の地形は大きく見て東西の山地，盆地内の段丘地形，沖積低地の三つに区分される。これらについて，秋田県(1973)，内藤（1970）および，日本道路公団の東北自動車道土性縦断図表（日本道路公団仙台建設局：1978年）等を参考にして地形地質の概要をまとめると次のようになる。

地形は，東側が800～1,100mの標高で，満壮年期のけわしい地形を示し，特に皮投岳(1,122.4m)，五の宮嶽（1,115.0m）などを中心とした起伏量の大きい山塊が南部に連なり，米代川は八幡平より上流では先行谷を形成して東西に流れている。地質は主として新第三紀中新世の火山砕屑岩類からなるが，それらを貫ぬいて石英安山岩や安山岩も分布している。また，福士川上流，谷内付近および湯瀬南方には粘板岩を主とする古生層の露出も知られている。これらの東側山地の山列はほぼ南北に連なっているが，北北東方向にのびる斜面や水系もみられる。これは新第三紀層の走向に大略一致するほか，貫入岩類や断層系の方向ともほぼ一致している。

一方，西側山地は400～ 600 mの標高で，山容も東側山地ほどのけわしさは見られない。地質は東側山地と同様に新第三紀中新世の火山砕屑岩を主とするが，大葛層，大滝層などでは砂岩，泥岩などの砕屑岩が広く発達している。これらの走行は南北方向のものが多い。

花輪盆地南部の段丘面は，花輪高位段丘，花輪中位段丘（内藤，1970）※，鳥越段丘（秋田県，1973），松館段丘，大里段丘の5段に区分できる。このうち，鳥越段丘は秋田県（1973），では鳥越段丘と関上段丘に区分されたものであるが，後者は前者の河成二次堆積面であり，構成層の時代的な差異も区分を必要とするほど大きいとはみられないことから一括して使用する。また，松館，大里の各段丘は，内藤（1970）の花輪低位段丘群とされたものである。なお，本報告書Ⅰ（秋田県教育委員会，1981）において，中位段丘と関上面，鳥越面を一括して180～250m面としたが，試錐資料および露頭の観察結果などから中位段丘構成層が花輪以南でやや広く分布することが明らかになったのでこれを区別することにする。次にそれぞれについて簡単に記載する。

※以下，高位段丘，中位段丘と略称する。



第1図　段丘地形図

高位段丘：福士川，浦志内川，歌内川等が盆地に注ぐ山地の末端部からなだらかな斜面で扇状地状に広く分布する。かなり開析されているものの明らかに平坦面を残している。

標高は1／2.5万地形図から，浦志内川左岸の扇頂部で350 m，葛岡北東の末端部で240 mであり，平均こう配は7.2％（4.1°）となる。また，歌内川流域でも320 mから250 mまでの高度差を持つ。一方，福士川左岸では350 mから250 mまでであるが，右岸では花輪スキー場北東の300 mから女森西方の200 mまでと明らかに低い。また，平均こう配も福士川以北では4.4

%（2.5°）と小さくなる。

構成層は径数cmから50cm前後までの亜角礫が雑然と混入した不淘汰礫層であり，地表面に近い部分は数mにわたって風化が進み，礫はくさってマトリックスと大して変わらないかたさになることが多い。段丘面の分布範囲のほかに，葛岡西方では鳥越軽石質火山灰層（内藤，1970）の下に見られたりする。全体的に扇状地堆積物としての層相をよく残している。また，上部は数mが赤褐色の粘土質土になっており，中に未風化の亜角礫もしばしばみられる。最上部には粘土質になった火山灰層もみられる。

ところで内藤（1970）は，上田（1965）の産土神断層をさかいにしてそれ以北の高位面が240m前後，以南が290m前後と異なること，さらに中位段丘の分布範囲が以南に限られること等から断層以南は以北に対して50m程度隆起したことを指摘した。かりに断層以北の河床が安定しているとすれば，前述した福士川をさかいにした（産土神断層およびその延長にほぼ一致する）高位面の平均こう配のちがいは，断層以南のブロックの西に傾動した隆起運動を示唆するものかも知れない。

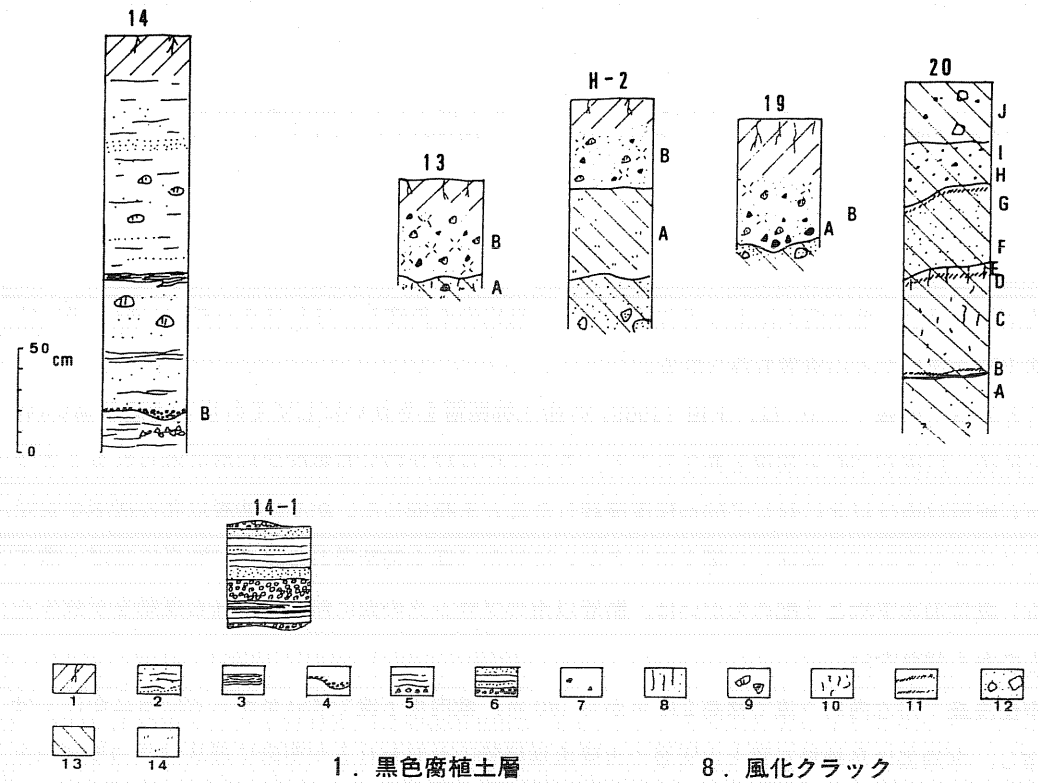
中位段丘：浦志内川下流で標高230mから180m，歌内川下流で270mから220mにかけて分布し，末端部は鳥越軽石質火山灰層の火砕流堆積物におおわれるが明瞭に扇状地状の地形面を残している。平均こう配は柏木森の西方で6.0%（3.5°）である。

構成層は黄褐色のシルトないし砂のマトリックス中に数cmから30cm以上の角礫ないし亜角礫が雑然と混入する礫層で，全体的に塊状であるが末端部では厚さ数cmの連続性のわるいシルトないし砂の薄層を含むこともある。葛岡南方ではN値が70以上の高位段丘礫層の土に，最大6mの厚さの泥炭質粘土層が発達する。この付近は浦志内川の扇状地地形と，歌内川の扇状地にはさまれた湖沼的な堆積環境にあったものであろう。なお，この粘土層の上位に5～6mの厚さで重なる中位段丘構成層は，すでにのべたように不良淘汰の亜角礫からなる礫層であるが，全体的にマトリックスは灰緑色を呈する。同様の色調の構成層は花輪東方の鳥越軽石質火山灰層の下位にもみられる。

鳥越段丘：鳥越軽石質火山灰層の堆積面であり，標高は福士川の右岸で170m，左岸から浦志内川にかけて180～190m，歌内川下流で190～200mとなる。火砕流台地としての形態を示しており，段丘面は平坦で段丘崖は急崖となることが多い。

松館段丘：米代川左岸に沿い，尾去から松館，荒町にかけて広く分布し，標高は160～170mで夜明島川，黒沢川等による扇状地の開析された段丘とみられる。構成層は未確認である。

大里段丘：米代川右岸沿いに大里付近まで分布する面で，標高は150～155mと低平であり，構成層も上部はくずれやすい河床性の礫層を主とし，田泥質の砂礫層が重なっている。葛岡西方の段丘崖の下部から中部にかけて，固結度のよい成層した円磨礫を含む砂礫，粘土層が見ら



1．黒色腐植土層
2．灰茶褐色粘土質砂礫
3．暗茶褐色粘土
4．降下軽石質火山灰
5．茶褐色粘土（礫まじり）
6．砂礫粘土層
7．安山岩片
8．風化クラック
9．軽石
10．白色のしま模様
11．暗赤色層
12．高位段丘礫層
13．粘土質
14．火山灰質

第２図　露頭柱状図

れるが，これは上部の堆積物と一括するには問題があり，段丘基盤の更新統の一部である可能性がつよい。

ところで，この地域の第四紀地質と地形を特徴づけるものに花輪断層と十和田火山起源の火山砕屑物層があげられる。

花輪断層はほぼ直線的に米代川沿いに北上しており，東西における山地の起伏層，山容のちがい，段丘の非対称的分布等は，東側山地を含む断層の東部地塊が第四紀を通じて上昇傾向がより強かったことを物語っており，注目に値する。一方，火山砕屑物層については内藤（1966, 1970），中川・他（1972）等によりくわしく知られており，古い方から高市軽石質火山灰層（25,850±1,360），鳥越軽石質火山灰層（12,000±250），申ヶ野軽石質火山灰層（8,600±250），大湯軽石質火山礫層（3,680±130），毛馬内軽石質火山灰層（1,280±90）に区分されている。このうち大湯軽石質火山礫層と毛馬内軽石質火山灰層については同一火山活動にと

もなう降下堆積物，火砕流堆積物であることが知られている。(大池，1974：藤本，1980)※。

第1表　重鉱物組成

サンプルNo. ＼ 重鉱物	鉄鉱物	角閃石 Ho	単斜輝石 Cpx	斜方輝石 Opx	Opx/Cpx	Cpx/Ho	測定個数
14 — B	60		5	35	7.0		332
14 — A	56	7	10	27	2.7	1.4	418
14 — C	57	18	7	18	2.6	0.4	332
13 — A	66.1	1.8	5.3	26.5	5.0	2.9	393
13 — B	16.9	13.5	33.5	36.1	1.1	2.5	266
H — 2A	43.7	0.5	17.1	38.7	2.3		387
H — 2B	10.9	12.0	36.6	40.5	1.1	3.1	276
19 — A	36.2	8.3	18.5	37.0	2.0	2.2	335
19 — B	9.4	22.1	32.0	36.5	1.1	1.5	244
20 — J	70.7	5.6	5.6	18.1	3.2	1.0	425
20 — I	61.7	1.7	5.7	30.9	5.4	3.4	418
20 — H	70.8		6.6	22.6	3.4		380
20 — G	76.0	0.2	3.5	20.2	5.8		430
20 — F	49.0	0.2	11.4	39.4	3.5		412
20 — E	40.9		15.2	43.9	2.9		369
20 — D	20.2	0.2	29.5	50.0	1.7		312
20 — C	13.5		35.2	51.3	1.5		193
20 — B	18.7	0.4	32.5	48.4	1.5		283
20 — A	79.4	3.7	5.1	11.8	2.3	1.4	296

申ヶ野軽石質火山灰層は角閃石が少なく，Cpx／Hoは2.6（8個平均）に対し，鳥越軽石質火山灰層は1.4（20個平均）

※　すなわち，中川，ほかにより大湯浮石のC^{14}年代とされたものは同層の下位の炭質物についての値であり，同層の降下時期よりも古い年代値を与えているものであろう。

(2)　発掘地点の地質

駒林遺跡

大里段丘上にある。山側ほど田泥質の砂礫層が厚いが，その下に大湯軽石質火山礫層が分布し，さらに下部は亜角礫を含む砂礫層になる。砂礫中には5cm以上の軽石片が散在するが，これは鳥越軽石質火山灰層起源のものである。（第1表の14－A，14－C）。

ところで大里面の構成層のうち下部のものは砂礫層，粘土層，砂層の互層であり，成層状態がよく，しまっていてかたい（第2図の14－1）。これと同質の砂礫層は本遺跡西方の段丘崖においても見られる。14－1においては露頭と大里面のあいだは約5m位であって田泥質砂礫層との直接の関係は不明であるが層相が極めて異なることから一連の構成層として一括するには疑問が残る。高位段丘構成層より古い盆地内の更新統の一部と考えられる。

上葛岡Ⅳ遺跡

標高214～215ｍで中位段丘上にある。上部は10cmの黒色腐植土層で，その下にオレンジ色の軽石（0.3～0.8cm）に富み，安山岩の岩片（0.5～1.5cm）が目立つ火山灰層が35cmの厚さでみられる（13－Ｂ）。この火山灰と同質な火山灰は本遺跡の東方の高位段丘上にも30cmの厚さで分布しており（Ｈ－2Ｂ），降下火山灰である。これらは重鉱物組成では申ヶ野軽石質火山灰層の特徴に似ている。次に，この火山灰の下にはかなり風化した軽石を含む粘土質灰茶褐色の火山灰層（13－Ａ）が見られるが，これは乾燥部でたてにクラックが入っていることが多い。

案内Ⅱ遺跡

標高209～211ｍで高位段丘の末端部にあり，開析されて丘陵状であるがよく原面を保存している。最上部の黒色腐植土（26cm）中に大湯軽石質火山礫層をうすく含み，その下は33cmでオレンジ色軽石を含む火山灰に変る。これは軽石が0.4～1cm，岩片が0.2～1.5cm（時に4.5cm）の降下火山灰で，重鉱物組成上申ヶ野軽石質火山灰層に似る19－Ａ，19－Ｂ。この火山灰層より下位は赤褐色の粘土で，未風化の角礫が散在しており，高位段丘の堆積物とみられる。

猿ヶ平Ⅰ遺跡

標高203～205ｍで高位段丘上にある。最上部は約60cmの厚さで黒色腐植土が発達し，この中に地表から30cm位のところに2～7cmの厚さで大湯軽石質火山礫層が含まれる。黒色腐植土層の下位には所によりオレンジ色軽石と安山岩片の細礫を含む火山灰が見られるが，これは上葛岡Ⅳ遺跡や案内Ⅱ遺跡で見られるものと同質の降下火山灰層である。次に本遺跡の黒色腐植土層より下1.6ｍの土壌断面で見られた火山灰層について記載する。

この断面では肉眼的に5層の火山灰層が識別されるが，いずれも風化して粘土質になっており軽石は含まれない。最下位の火山灰（Ａ）は茶褐色粘土質で礫質の部分はなく，水洗しても細粒の砂，粘土以外はほとんど残らない。角閃石を含んでいる。この上は白色のすじ(不規則)が入る火山灰層で（Ｂ，Ｃ，Ｄ）上下を赤色層（2cm）にはさまれ，上部はクラックがたてに入っている（Ｅ)。なお，Ｂの部分は1～3mmの黒色の岩片が目立つ。更に上位は径0.1～0.6cmの黒色安山岩礫を含む火山灰層で灰茶褐色を呈し，上下が暗赤褐色（2～4cm）になっている（Ｆ，Ｇ)。この上位は重鉱物組成は大して変らないものの（Ｈ)，白っぽい礫（1.0～0.2cm）が目立つ黄褐色火山灰で，更に上位は径2.0～3.5cmの安山岩礫が散在する粘土質火山灰になる（Ｊ)。Ｊは下位の火山灰とは異なり角閃石を比較的多く含んでいる。Ａ～Ｊは，花輪盆地内では異質な火山灰であり，簡単に対比はできないが，今後，広く追跡する必要がある。

参考文献

内藤博夫「秋田県米代川流域の第四紀火山砕屑岩と段丘地形」　『地理学評論』　第39巻第７号　1966年

内藤博夫「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」　『地理学評論』　第43巻第10号　1966年

中川久夫・他「十和田火山発達史概要」　『東北大地質古生物研究邦報』　第73号　1972年

大池昭二「十和田火山は生きている」　『国土と教育』　第26号　1972年

秋田県　『秋田県総合地質図幅，花輪』　1973年

藤本幸雄「十和田火山起源の火山灰層の重鉱物組成（その１）大館，花輪盆地における火山灰層」『大館工業高校研究紀要』　1980年

上田良一「秋田県北部の第三系の層位と造構造運動について」　『秋田大地下資源開発研究所報告』　第32号　1965年

2．環境と周辺の遺跡

東北縦貫自動車道の通過する鹿角は，秋田県の北東隅に位置する。ここは米代川の最上流部にあたり，奥羽山脈中に形成された壮年期の山々と断層盆地からなる。年間の平均気温は花輪の観測によると9.8℃，冬期の最底気温は－22℃にも達したことがあり，年間を通して風向は西にかたむき，風速は小さく，積雪もあまり多くない昼夜の温度較差の大きい内陸的気候(註1)を示す土地である。

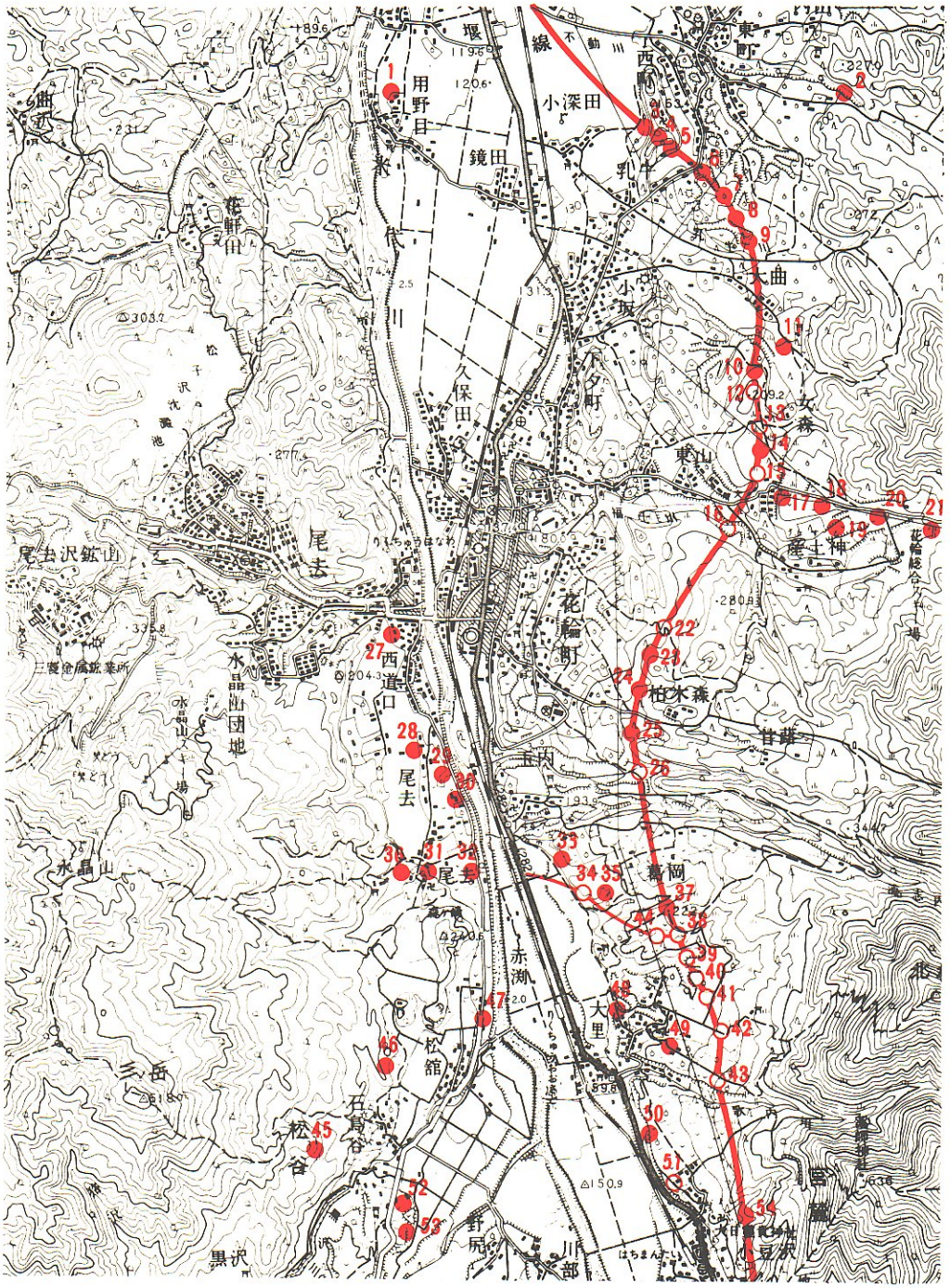
盆地の東には五の宮嶽（1,150ｍ），皮投岳（1,122ｍ），中岳（1,024 ｍ）などの急峻な地形の壮年期の山が連なり，花輪盆地東の出口，湯瀬渓谷から流れくる米代川の本流は，八幡平地区で熊沢川，夜明島川，歌内川，浦志内川を合流させて盆地の西部を北流し，花輪柴平地区では福士川，乳牛川，間瀬川，草木川，北西の十和田地区にて西流する大湯川，小坂川を入れて大館盆地へ流れ去る。

この水系や盆地周辺には花輪高位段丘，鳥越段丘などと呼ばれる数段の段丘の発達(註2)が見られ，段丘上には大湯環状列石をはじめとし，450 ヶ所以上に及ぶ縄文時代から中世にかけての遺跡(註3)が確認されている。

東北縦貫自動車道の通過が予定され，今年度19遺跡の発掘調査の行われた八幡平地区の小豆沢，大里，玉内（宮麓地区），花輪地区東の新興住宅地東山と乳牛，東町の柴平の地域には花輪高位段丘，中位段丘，鳥越段丘，大里段丘と呼ばれる標高 150 ～ 270 ｍにかけて４段の段丘面が確認されており，ここに存在する遺跡は「秋田県遺跡地名表」と「鹿角市遺跡地図」に記載のあるように，54ヶ所以上の多さにわたる。旧石器時代の遺跡の発見はなく，縄文時代から中世にかけての複合遺跡が殆んどである。米代川対岸の松館，尾去地区にも松館面と呼ばれる標高 160 ～ 170 ｍの段丘面が開析されており，ここも遺跡が多い。

縄文時代の遺跡は，今年度発掘調査の行われた上葛岡Ⅳ遺跡の早期末のものからはじまり，前期は円筒土器を出土する遺跡が多い。それらの中の一つ，清水向遺跡は昭和29年に発掘調査が行われ，秋田県で最初に２棟の竪穴住居跡が報告されている(註4)。中期になると，円筒土器とともに大木式土器を出土する遺跡が多くなる。飛鳥平遺跡，北の林Ⅰ遺跡などでは，円形で石組炉を持つ中期末大木10式の竪穴住居跡が報告されている(註5)。後期は十腰内式土器を出土する飛鳥平遺跡，案内Ⅰ遺跡があり，晩期の遺跡は，前半期の配石を伴う玉内遺跡(註6)と東在家遺跡が著名である。

弥生時代の遺跡は少量の撚糸文土器を出土する上葛岡Ⅲ遺跡，天王山式土器を出土する猿ヶ平Ⅰ遺跡がある。立地は高位の段丘上で遺構は確認されておらず，稲作農耕の可能性は低い。



○　昭和55年度発掘調査遺跡

第3図　周辺遺跡分布図

第2表 周 辺 遺 跡 一 覧

番号	遺 跡 名 (所在地)	時代・時期	遺 跡 ・ 遺 物
1	用野目 (用野目)	平安	須恵器
2	餅野IV (餅野)	平安	土師器
3	西町II (西町)	縄文	縄文土器
4	西町I (西町)	縄文、弥生	縄文土器、弥生土器
5	下乳牛 (下乳牛)	縄文、平安	平安竪穴住居跡、フラスコ状ピット、縄文土器、土師器、須恵器
6	乳牛平 (乳牛平)	縄文、平安、中世	縄文土器
7	妻の神III (妻の神)	縄文、平安、中世	平安竪穴住居跡、土壙墓、堀立柱建物跡、フラスコ状ピット、縄文土器、土師器
8	妻の神II (妻の神)	縄文、平安	縄文竪穴住居跡、平安竪穴住居跡
9	妻の神I (妻の神)	縄文、平安	平安竪穴住居跡、土師器、縄文土器、フラスコ状ピット
10	猿ケ平II (猿ケ平)	縄文(早期～晩期)	縄文土器(早期、円筒下層b、大木9、10式、十腰内、大洞B)、縄文竪穴住居跡
11	大曲 (大曲)	縄文、平安	縄文土器、土師器
12	猿ケ平I (猿ケ平)	縄文(中期～晩期) 弥生	縄文土器(大木8a式、十腰内I式、大洞B、BC、C_1式)
13	案内II (案内)	縄文	縄文土器(前期、後期)、竪穴住居跡、土壙、配石遺構
14	案内III (案内)	縄文、平安	縄文土器(前期、後期)、土師器、須恵器、縄文竪穴住居跡、平安竪穴住居跡
15	案内I (案内)	縄文、平安	縄文土器(十腰内I式)、土師器、縄文竪穴住居跡、平安竪穴住居跡
16	孫右ケ門館 (孫右ケ門館)	縄文、平安	縄文土器、土師器、平安竪穴住居跡、屋外炉
17	東山A (東山)	縄文、弥生	縄文土器(晩期)、弥生土器
18	東山B (東山)	弥生	弥生土器
19	赤坂B (赤坂)	縄文、続縄文	縄文土器、続縄文土器
20	赤坂A (赤坂)	縄文	縄文土器
21	日向屋敷II (日向屋敷)	縄文	縄文土器
22	中の崎 (中の崎)	縄文、平安	縄文土器(後期、晩期)、平安竪穴住居跡、土師器、須恵器、掘立柱建物跡
23	柏木森 (柏木森)	縄文、平安	縄文土器(早期、後期、晩期)、土師器、土壙、フラスコ状ピット
24	明堂長根 (明堂長根)	縄文	縄文土器(後期、晩期)、土壙、フラスコ状ピット、溝状遺構
25	一本杉 (一本杉)	縄文、平安	縄文土器、土師器、須恵器、縄文竪穴住居跡、平安竪穴住居跡、掘立柱建物跡
26	上葛岡IV (上葛岡)		
27	下平 (下平)	弥生	弥生土器
28	六角平 (六角平)	縄文	縄文土器(大湯式)
29	三光塚2号 (東在家)	平安	硝子玉
30	三光塚1号 (東在家)	平安	玉類、勾玉
31	東在家 (東在家)	縄文(晩期)	縄文土器(大洞BC、C_1式)、土偶
32	尾去 (尾去)	縄文	縄文土器
33	清水向 (清水向)	縄文	縄文土器(円筒下層c、d式、大木b式、円筒上層a、d式)、竪穴住居跡
34	駒林 (駒林)	縄文	縄文土器、住居跡
35	下館 (下館)	中世	
36	尾去A～D (尾去)	縄文、平安	縄文土器、土師器
37	上葛岡III (上葛岡)	縄文	縄文土器
38	上葛岡I (上葛岡)	縄文	縄文竪穴住居跡、縄文土器
39	北の林I (北の林)	縄文、平安	
40	北の林II (北の林)	縄文、平安	縄文竪穴住居跡、土壙、縄文土器(大木10式)、平安竪穴住居跡、掘立柱建物跡
41	飛鳥平 (飛鳥平)	縄文、平安	縄文竪穴住居跡、縄文土器(十腰内I式)、平安竪穴住居跡、土師器
42	鳥居平 (鳥居平)	縄文	縄文土器、縄文竪穴住居跡
43	歌内 (歌内)	縄文、平安	縄文竪穴住居跡、土壙、縄文土器(大木8式、後期)、平安竪穴住居跡、土師器
44	上葛岡II (上葛岡)		
45	石鳥谷 (竹鼻)	縄文	縄文(円筒上層a、b層)
46	後口田II (後口田)	縄文	縄文土器
47	岩淵 (岩淵)	縄文	縄文土器
48	大里館 (大里、掘合)	中世	
49	大里 (大里)	縄文	縄文土器(大木9式)
50	下鷲の巣 (下鷲の巣)	縄文	縄文(中期、後期)
51	小豆沢館 (小豆沢)	縄文、中世	縄文土器
52	下モ和志賀 (下モ和志賀)		土器
53	田中館	中世	土器
54	堂の上 (堂の上)	縄文	縄文土器

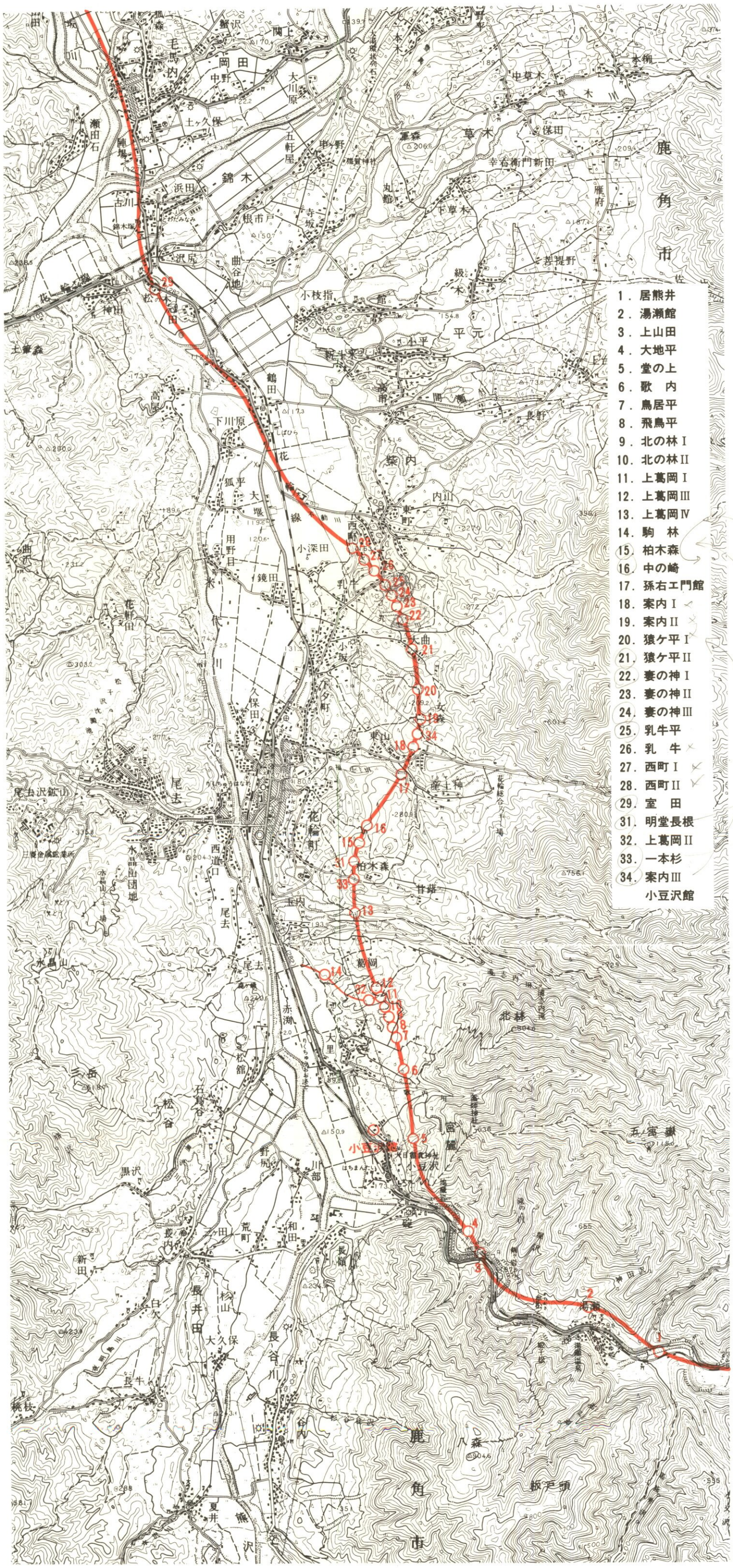
奈良平安期の遺跡としては，県内で墳丘の残っている唯一の古墳，尾去地区の三光塚古墳(註7)と東北縦貫道路線上の遺跡，歌内，北の林Ⅰ，同Ⅱ，上葛岡Ⅳ，中の崎，案内Ⅱ遺跡など，数十棟の竪穴住居跡の検出されている平安期後半の集落跡がある。

環状列石と終末期古墳群のほかに，鹿角の特色ある遺跡を求めるとすれば，中世の館跡があげられよう。42館，もしくは48館と称される城館がせまい盆地周辺に群在する(註8)。

鎌倉時代後期に関東から移住した成田，安保，秋元，奈良の4氏に始まるとされるこの中世の城館は，大里館，玉内館，尾去館，古館，乳牛館などの地名で村落に残る。就中，大里館は鎌倉時代以来安保一族の惣領の本拠で，史料の初見は南北朝にさかのぼる。すなわち，建武3年（1336年）と4年（1337年）に陸奥国北朝党のため攻撃された記録（南部文書）がそれである。大里館以外の館は，戦国期における南部氏と安東氏の確執の記録に散見するが，創建期など不明部分が多い。これらの館は平地に臨む舌状台地を空掘で分断し，主郭を中心に数個の郭を配しており，館上面の平場は，縄文，弥生，奈良，平安時代の人々の居住地でもあって，各時代各種の遺構遺物が出土する。

註1　秋田県教育研究所　『秋田県地誌』　研究No.104　1969年
註2　藤本幸雄氏の(1)「地形・地質」による。
註3　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』　1977年
　　鹿角市教育委員会『埋蔵文化財の保護と開発に関する説明会資料』　1979年
註4　大和久霈平・奈良修介『秋田県史考古編』　1960年
　　奈良修介・豊島昂　『秋田県の考古学』　1967年
　　岩見誠夫　『半田先生と秋田県の考古学』　981年
註5　秋田県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告会発表要旨』　1981年
註6　阿部義平　「配石墓の成立」『考古学雑誌54－1』　1965年
註7　註4に同じ
註8　沼館愛三著・盛田稔編『津軽諸城の研究』（草稿）　青森県文化財保護協会　1977年
　　塩谷順耳　「鹿角の館」『秋田県立博物館研究報告』第3号　1978年

第4図　秋田県鹿角市における東北縦貫自動車道路線上の遺跡分布図



上　葛　岡　Ⅳ　遺　跡

遺　跡　番　号	No.13
所　　在　　地	鹿角市八幡平字上葛岡
調　査　期　間	昭和55年６月８日～９月19日
発掘調査予定面積	4,400㎡
発　掘　面　積	4,000㎡

1．遺跡の概観

遺跡は，国鉄花輪線陸中花輪駅南東2.2km米代川右岸の標高215m前後の台地上に位置する。遺跡の立地する台地は，花輪盆地の東側に広がる一連の台地の一画，標高804 mの北林山の裾野北端に位置する。北林山から広がる裾野には，米代川へ注ぎ込む浦志内川，歌内川がそれぞれ西流して，台地を画しており，遺跡地北側は比高差約210 mの急斜面となって浦志内川へと続いている。

遺跡地は，本来台地を東西に貫く市道葛岡線の南側を含めてその範囲と推定されるが，現在この市道の南側は整地のため削平されていた。したがって調査区は市道から北側，浦志内川によって画される台地縁辺までの幅約50m程の現在畑地として利用されている箇所に限られた。また台地は全体に北西側に向って緩い傾斜を呈するが，調査区南側⅓程を横切る農道付近で3～5m前後の段差があり，便宜上調査区をこの農道を境として南側と北側とに分けている。

遺跡の立地する台地は，東北縦貫自動車道の予定線でも多くの遺跡が確認されており，南側から平安時代竪穴住居跡50数基を検出した歌内遺跡（遺跡番号No.6　55年度調査，東北縦貫自動車道発掘調査報告書II所収），飛鳥平遺跡（遺跡番号No.7　55年度調査，同報告書III所収），縄文時代後期と平安時代の複合遺跡である飛鳥平遺跡（遺跡番号No.8　55年度調査，同報告書III所収），平安時代竪穴住居跡の検出された北の林I遺跡（遺跡番号No.9　55年度調査，同報告書III所収），北の林II遺跡（遺跡番号No.10　55年度調査　同報告書III所収），縄文時代中期の上葛岡I遺跡（遺跡番号No.11　55年度調査　同報告書IV所収），縄文時代後期の上葛岡II遺跡（遺跡番号No.32　55年度調査　同報告書IV所収），上葛岡III遺跡（遺跡番号No.12　54年度調査，同報告書I所収）等がある。これらの遺跡は，歌内川と浦志内川に狭まれた標高200 m前後の一つづきの台地上に位置するが，本遺跡と同じように平安時代竪穴住居跡を検出した遺跡は，より狭小な沢筋によって区切られた舌状に張り出した台地上に立地している。また，立地の条件を異にするが，浦志内川の左岸より低位の標高約180 mの台地上には県内で初めての住居跡を検出した縄文時代前期の清水向遺跡，右岸の標高約155 mの台地上には，立石を伴った環状の組石の検出された縄文時代晩期の玉内環状列石がある。さらに，本遺跡と浦志内川の対岸にあたる台地には，やはり平安時代竪穴住居跡を検出した一本杉遺跡が遺跡番号No.33として追加され，昭和56年度に調査が実施されている。

2．調査の方法

調査は，日本道路公団設置の東北縦貫自動車道予定地内中心杭STA110＋80とSTA111を結ぶ直線を基線とし，STA110＋80を基準点として方眼杭を設置し，5m×5mのグリットを設定して行った。

調査区は前述したように，農道によって南側区と北側区とに分かれていたため，便宜上その呼称を用いた。また，南側区と北側区では5m程度の高低差があり，粗掘作業はその両区で併行しながら行った。調査区はその大半が畑地で整地が行われていた。畑地の耕作は鍵層となるべき浮石層を貫いて行われており，部分的には所謂地山面まで及んでいた。このため，粗掘作業では，浮石層下の黒色土までを除去した。次いで遺構のプラン確認にあたっては，地山面の精査によって行い，部分的プランの不鮮明な箇所には試掘溝を入れる等の措置をとった。

遺跡基本層序の観察は，Fライン，及び4ライン，11ラインに残した畔によっておこなったが，前述したように，調査区の表土以下地山までは耕作のための整地が行われており，遺跡全体を通しての基本層序の把握は困難であった。最終的には，比較的表土の厚く残っていた16－Bグリットに設けた試掘坑の断面によって観察を行った。

粗掘作業での遺物のとりあげは，方眼杭によって設定したグリッド毎に行い，遺構精査中に出土した遺物については，その遺構名を付してとりあげたが，その際原則として遺構内の出土位置及びレベルを記録することとした。

3．調査の経過

本遺跡の調査は，昭和56年6月8日から開始し同9月19日までの約3ヵ月間を費して行われてた。なお粗掘作業の開始前に遠景の写真撮影を5月23日に，また仮杭の設置を5月24日からおよそ1週間をかけて行っている。

6月8日以降の調査概略は以下の通りである。

6月8日　農道北側台地縁辺部の雑木刈払い，及びグリッドの設定，粗掘作業開始

6月10日　第12号住居跡プラン確認

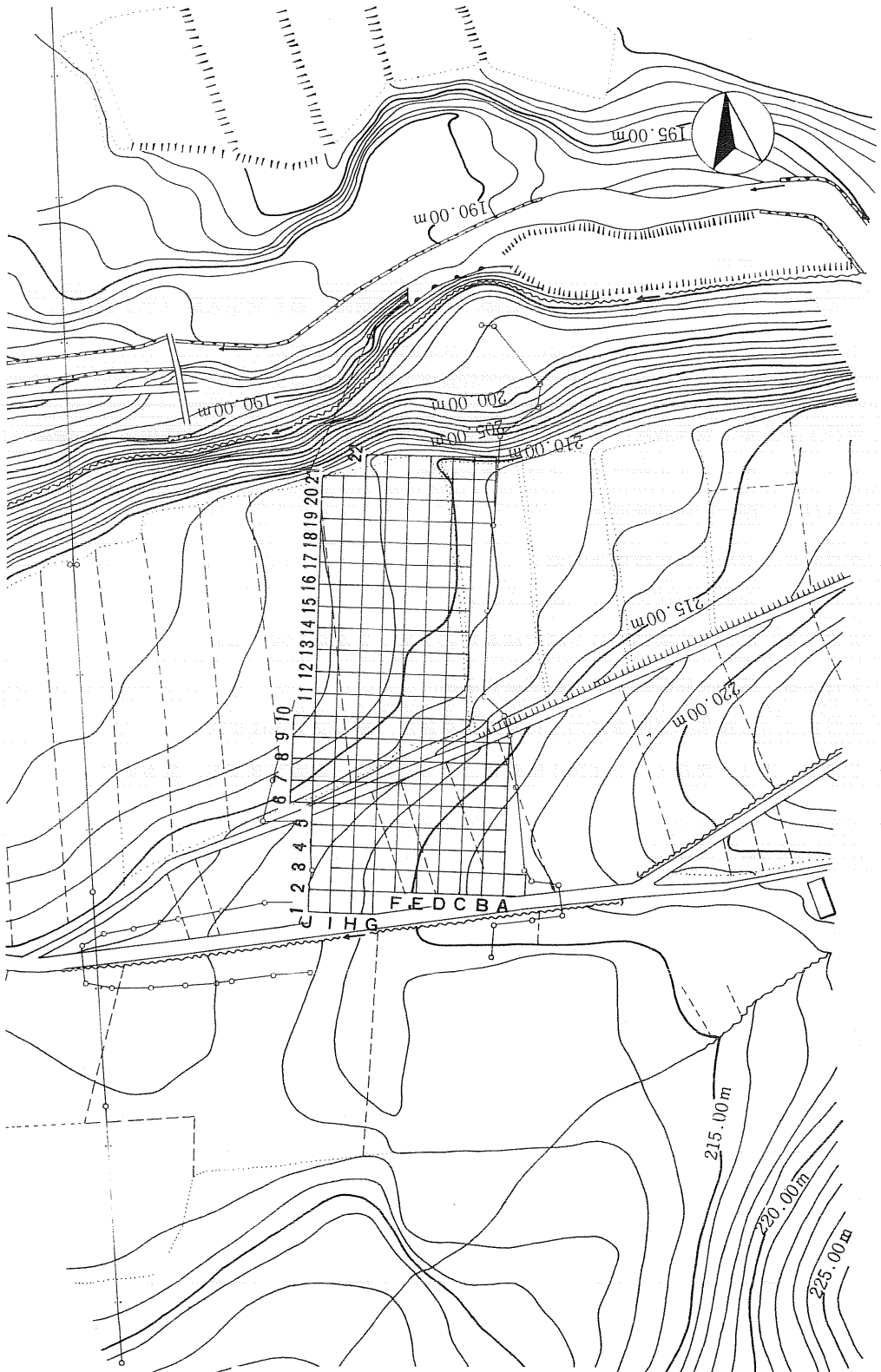
6月23日　縄文時代晩期土器片，及び石棒出土

6月24日　縄文時代前期一括土器片の出土

6月25日　農道南側区粗掘作業開始，第1号住居跡プラン確認

6月26日　縄文時代後期一括土器片の出土

6月27日　第8号住居跡プラン確認



第１図　上葛岡Ⅳ遺跡グリッド配置図

6月30日　第1号溝跡プラン確認

7月2日　農道南側区粗掘作業終了

7月7日　粗掘作業終了，遺構確認面精査開始，方眼杭設置

7月9日　方眼杭設置終了

7月10日　第2号住居跡プラン確認，第1号，7号，8号，9号，12号，13号，土壙プラン確認

7月11日　第3号住居跡，第4号住居跡，第5号住居跡，第6号住居跡プラン確認

7月14日　農道南側区プラン確認，第1号住居跡から精査開始

7月22日　第2号，3号，4号，5号，21号，23号，土壙プラン確認，精査開始

8月1日　第7号住居跡，第8号住居跡プラン確認，精査開始，第2号溝跡プラン確認

8月7日　第9号住居跡プラン確認，精査開始

8月18日　掘立柱建物跡精査

8月23日　第12号住居跡精査開始

8月26日　農道南側区のピット群精査開始

8月28日　第11号住居跡プラン確認精査開始，第3号溝跡プラン確認

9月3日　第10号住居跡プラン確認精査開始

9月16日　遺跡基本層序確認のため試掘坑を設け，断面図を作成する

9月18，19日　調査区の全体図平板測量によって作成，全体写真撮影，調査完了

4．遺跡の層位

本遺跡の上層堆積状態を確認するためトレンチを設け，土層断面図を作成した結果，次のⅠ～Ⅸまでの9つに分類することができる。

Ⅰ：色調は上層では，黒褐色を呈し，下層黒色へと漸移する。比較的孔隙が多く，粘性も少い。径1㎜～7㎜程のパミスを3～5％含むが，その量もまた上層少から下層多と漸移する。パミスの混入状態は本遺跡の竪穴内に充填する埋土と共通する上層は，耕作による攪乱を多くうけている。

Ⅱ：十和田火山灰に由来すると思われるパミス層である。堆積状態は良好とは言えず部分的に認められたにすぎない。黒褐色土中に，パミスがかなりの量混入した程度である。特に上層では混入量は希薄となり，Ⅰ層下部へと漸移する。本遺跡住居跡に若干ながらブロック状のパミスの混入を確認したが，そのあり方はⅡ層下部のパミスの凝縮した形である。

Ⅲ：色調は，黒色を呈する。比較的均質であり，孔隙も少なく粘性もやや認められる。パミス等の混入も殆んど認められない。

Ⅳ：色調は，上層では黒褐色を呈し下層はにぶい黄褐色へと漸移する。均質であり，孔隙は少なく粘質である。

Ⅴ：色調は，明黄褐色を呈する。細砂及びシルトよりなる。粘性は殆ど認められないが，孔隙はなく硬く締っている。

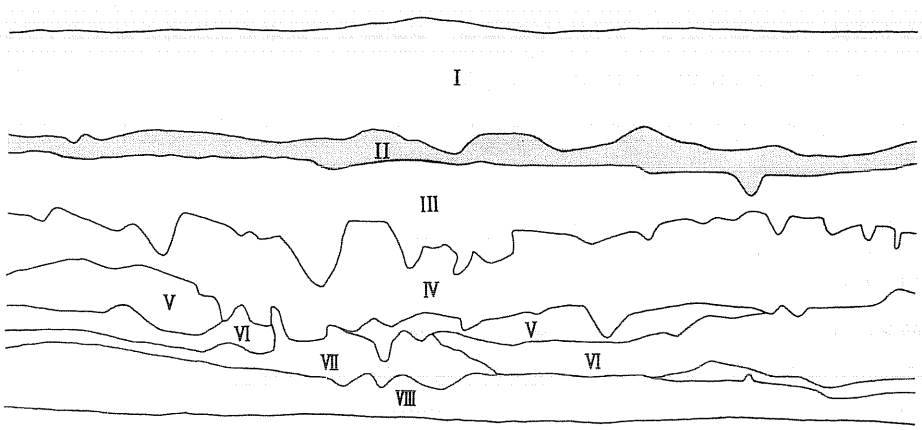
Ⅵ：色調は，黄褐色を呈する。粗砂及び細砂よりなる。Ⅴ層と同様，粘性はないが，硬く締っている。

Ⅶ：色調は，明黄褐色を呈する。シルトを主体とし若干細砂が混じる。粘性なく硬く締る。

Ⅷ：色調は，にぶい黄褐色を呈する。粘土層である。

Ⅸ：色調は，にぶい黄褐色を呈する。凝灰岩（色調は緑灰色を呈し径15～20cm程度）を多く含む。

以上，土層中，本遺跡での竪穴及び土壙等の確認はⅣ層上面で行われ，また，縄文時代後期及び晩期土器片はⅣ層上層から前期の土器はⅣ層下層からⅤ層上層にかけて出土している。また，Ⅶ層は第７，８号住居跡の床面をなしており，第10，11号住居跡はほぼⅨ層上面まで掘り込まれている。



第２図　遺跡の層位

5．遺構と遺物

(1) 縄文時代の遺構と遺物

遺構としては，土壙4基があげられるが，これらの土壙については積極的に縄文時代の所産とする根拠がない。伴出する遺物があっても縄文土器の細片である。ここで，縄文時代の遺構として記すのは，1つに他に確認されている土壙が一定の型をもって検出されているからであり，また調査区全体を通して出土している遺物が縄文時代と平安時代とに限られるという，甚だ消極的な理由に依る。したがって，縄文時代という大枠の中に入れることは可能であるが，より細かな時期の特定及び性格の把握は困難である。

縄文時代出土遺物は，早期後葉から晩期に至る各期の土器片及び石器類である。これらの遺物は遺構に伴って出土したものではなく，その殆どが遺構外から出土している。また，各期の遺物はそれぞれ平面的な分布を異にしてはいたものの，層位的な事実の観察は困難であった。

遺構外出土土器の大半は単独の破片として出土したもので，一括の出土例，単独の破片どおしが接合した例は極めて稀である。

第4図は一括で出土した土器の出土状況を示したものである。

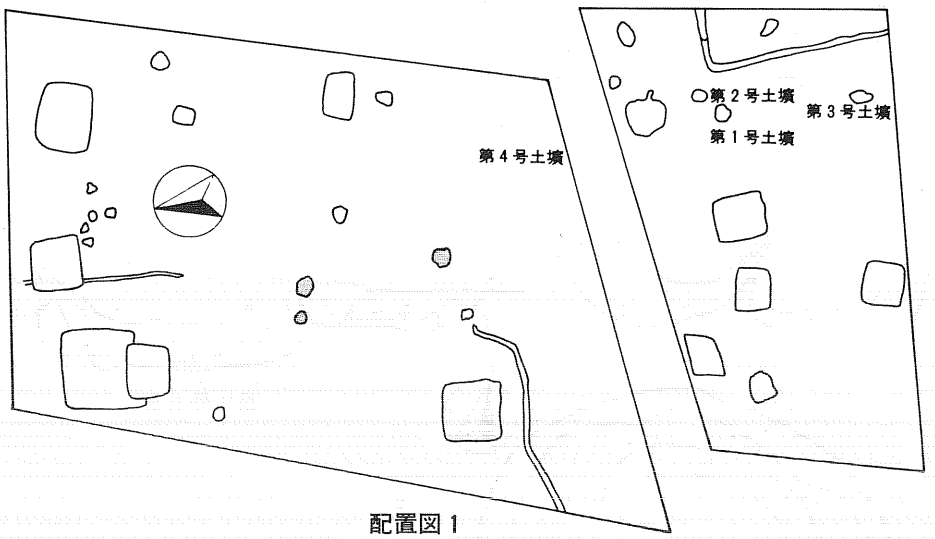
第5図1～7は，所謂表裏縄文の施された土器である。原体はＲＬを用いているが，**6**のみＬＲの原体を使用している。胎土には若干の繊維を含み，焼成も良好で全体に薄手に作られている。この種の土器は，赤御堂貝塚(註1)，崎山弁天遺跡(註2)，早稲田貝塚等(註3)で出土例があり，また県内では大地平遺跡（遺跡番号No.4，昭和54年度調査，東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ所収）でも出土している。早期後葉に位置づけられよう。

第8図は，尖底の深鉢形土器で器表全面にＲＬＲとＬＲＬの複節の原体が結束されて横位に回転されている。器内面は，指頭による粗い調整が施されている。胎土にはかなり多量の繊維を含み，かなり厚手につくられている。この種の土器は沢内Ｂ遺跡等(註4)に出土例があり，早期末葉～前期初頭に位置づけられよう。

第5図8，9は2条1組の撚糸圧痕の施された土器であり，平行並びに波状の文様が描かれる。薄手につくられてはいるが，中期初頭円筒上層ａ式に比定される。

第5図10，11は折り返し口縁上に粘土紐によって鋸歯状の貼付文が施されたものであり，**12～17**は粘土紐による隆帯上及び隆帯に沿ってヘラ状工具による刻目の施されたものである。いづれも中期前葉円筒上層ｂ式に比定される。

第5図18，19は2条の平行沈線文が文様を構成している。**19**は沈線間が微隆帯となり，波状口縁の波頂部には，刺突が施される。後期前葉十腰内Ⅰ式に比定される。



配置図1

第1表　第1号土壙観察表

第1号土壙	挿図	3	図版	20
検出区	6－B			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	250	140	50	103°～116°
覆土	1．10YR3/2 黒褐色 粘性少なく孔隙多い 2．10YR2/1 黒色 粘性少なく孔隙多い 黄褐色土粒子10%混入する 植物根はいる 3．10YR3/2 黒褐色 粘性少なく孔隙多い 黄褐色土粒子20%程度入 植物根はいる　混 4．10YR5/6 黄褐色 粘性多く孔隙少ない 黒褐色土粒子7%程混入する 5．10YR3/2 粘性少なく孔隙多い 黄褐色土粒子1%および植物根混入す 6．10YR3/2 黒褐色 粘性少なく孔隙多い 黄褐色土粒子10%混入 植物根多くはいる 7．10YR3/2 黒褐色 粘性少なく孔隙多い 黄褐色土粒子20%混入 植物根はいる 8．10YR3/3 黒褐色 粘性少なく孔隙多い 黄褐色土粒10%混入す			
出土遺物	縄文土器2片を覆土中から出土			

第2表　第2号土壙観察表

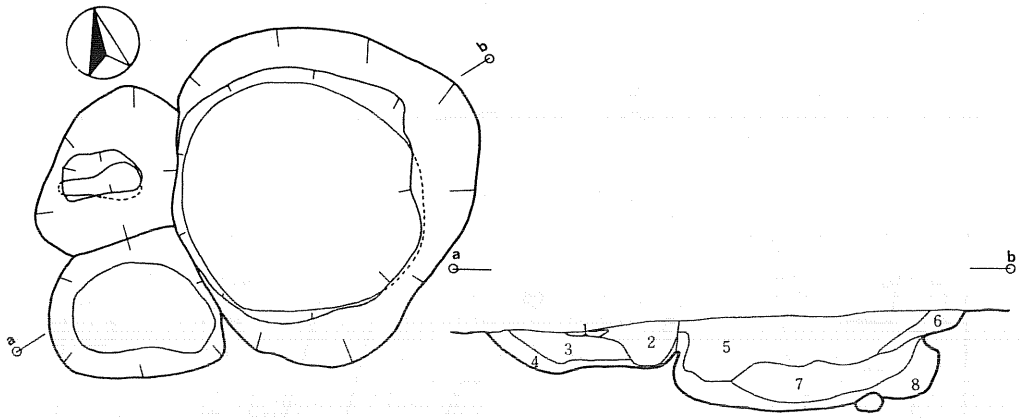
第2号土壙	挿図	3	図版	20
検出区	6－C			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	218	94	40	
覆土	1．10YR3/2 黒褐色 粘性少 孔隙大 黄褐色土粒子2%混入する 植物根はいる 2．10YR3/3 黒褐色 粘性少 孔隙大 黄褐色土粒子20%混入する 3．10YR3/4 暗褐色 粘性少 孔隙大 植物根はいる 4．10YR3/3 黒褐色 粘性大 孔隙少 植物根はいる			

第3表　第3号土壙観察表

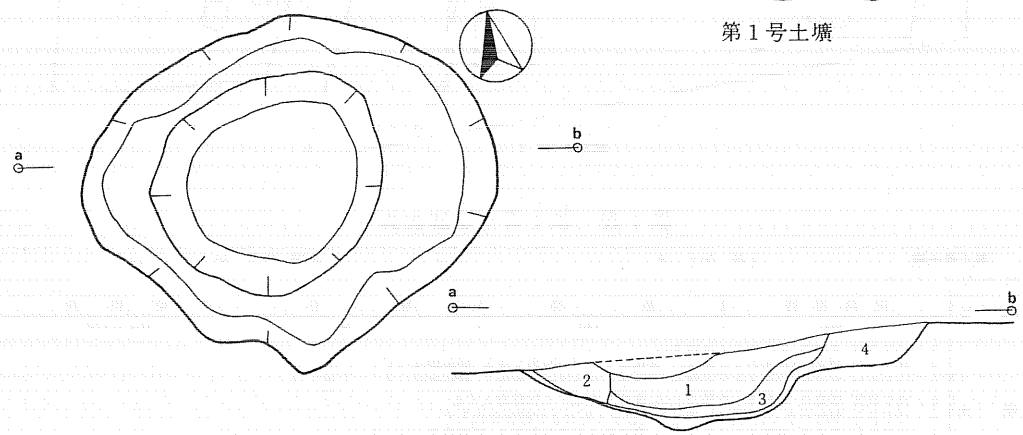
第3号土壙	挿図	3	図版	25
検出区	3－B			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	180×94	140～38	64	123°－126°
覆土	1．10YR8/2 灰白色 粘性極小 孔隙極小 粒状構造極小（径1㎜以下） 2．10YR8/4 浅黄橙色 砂質土 孔隙大 浮石層粒状構造小（径1～2㎜） 3．10YR3/3 黒褐色 粘性やや大 孔隙小 浮石粒1%混入 4．10YR2/1 黒色 粘性大 孔隙なし 黄褐色土粒子1%混入			
備考	第1層から第3層までパミス層である 第1層→第3層と粒径が大きくなる			

第4表　第4号土壙観察表

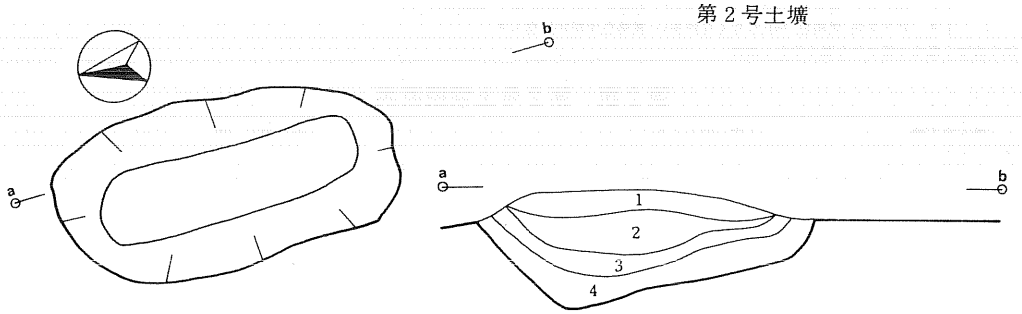
第4号土壙	挿図	3	図版	
検出区	9－D			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	96	84	16	102°－110°
覆土	1．10YR3/3 粘性大 孔隙小 黄褐色土粒5～10%混入 2．10YR3/2 粘性やや有 黄褐色土粒20～30%混入			
出土遺物	縄文土器1片を覆土中から出土			



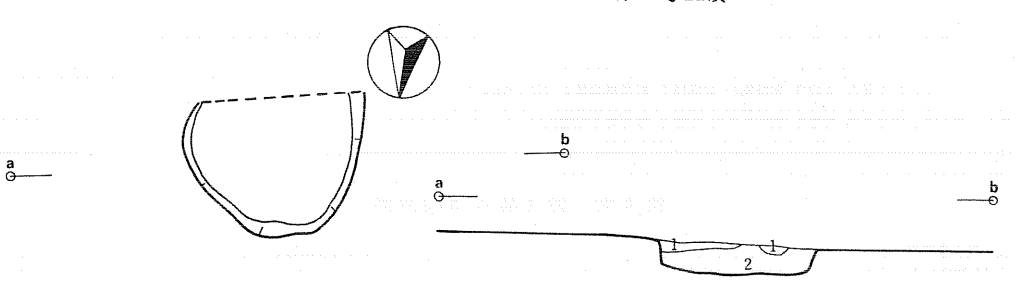
第１号土壙



第２号土壙



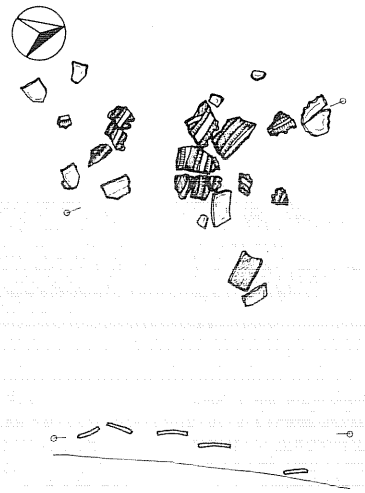
第３号土壙



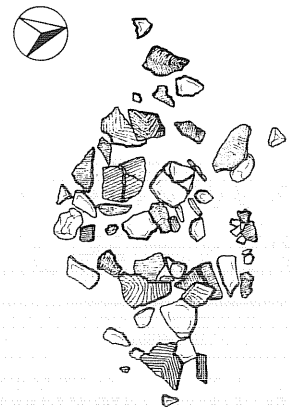
第４号土壙

0　　2m

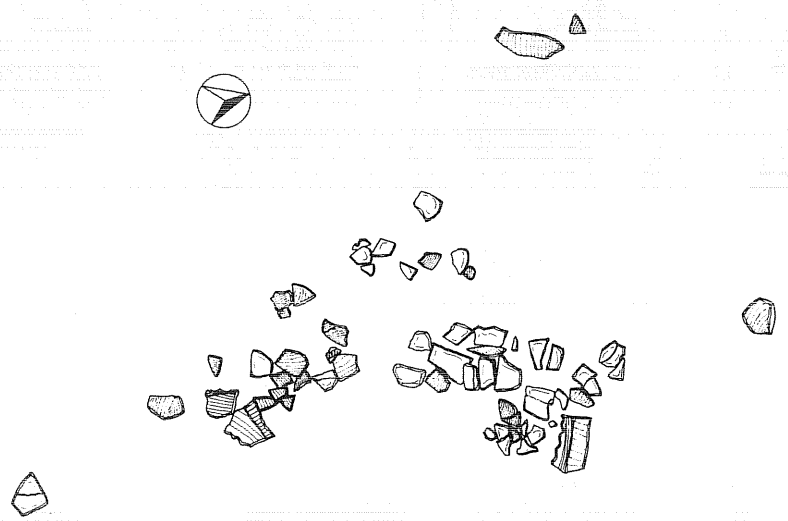
第３図　第１号土壙～第４号土壙



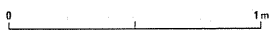
第７図１に対応



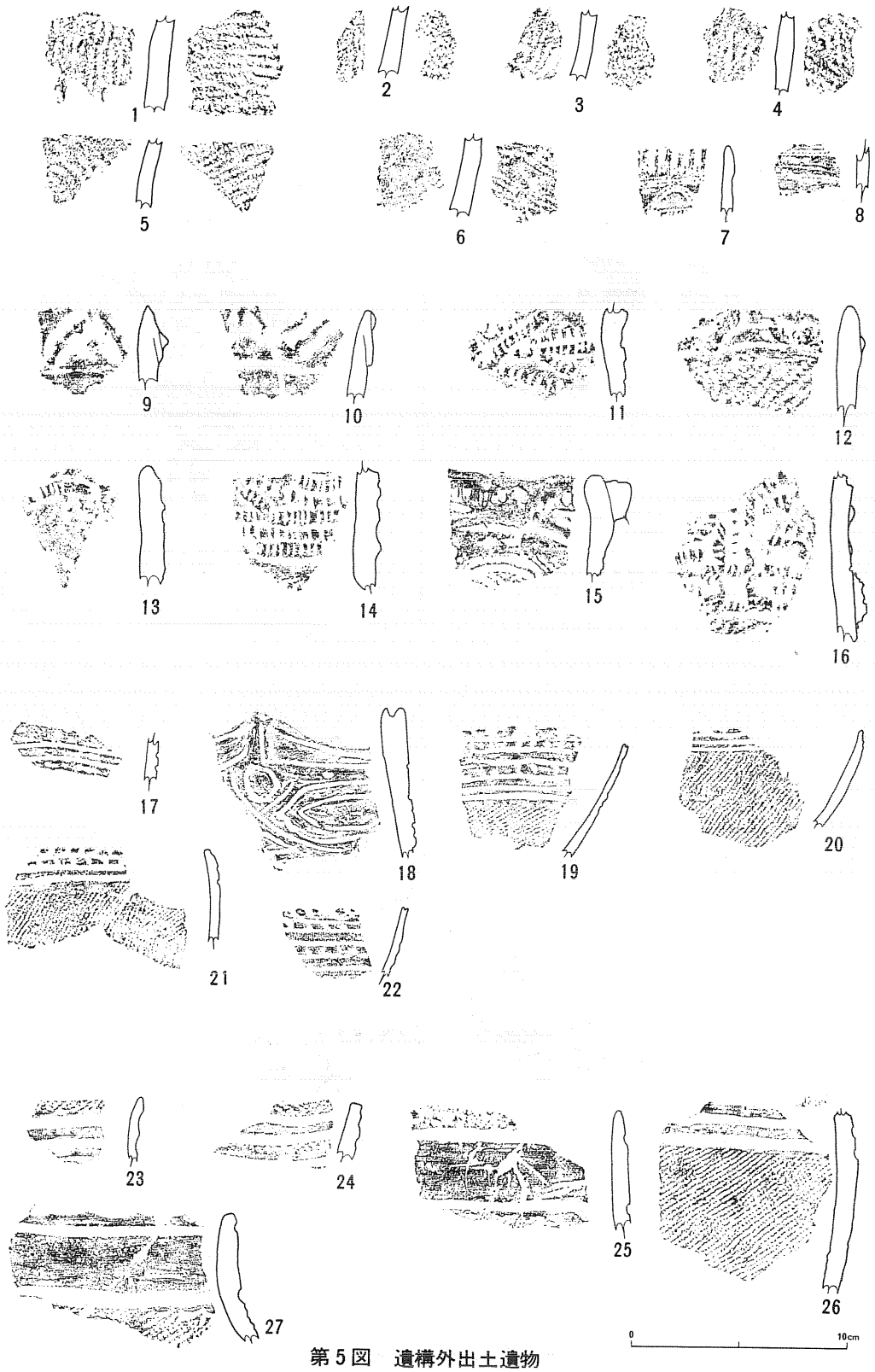
第８図に対応



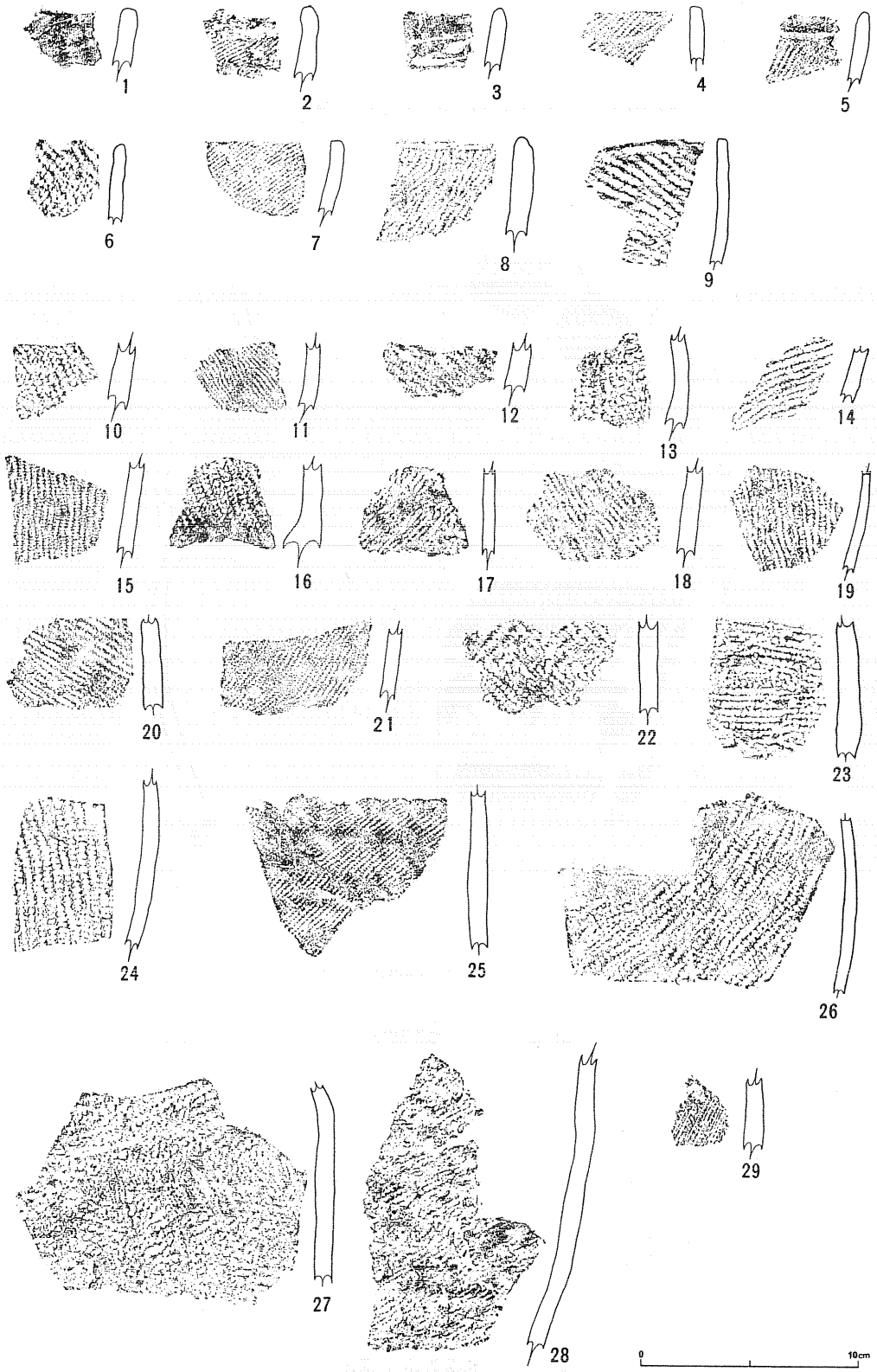
第７図２に対応



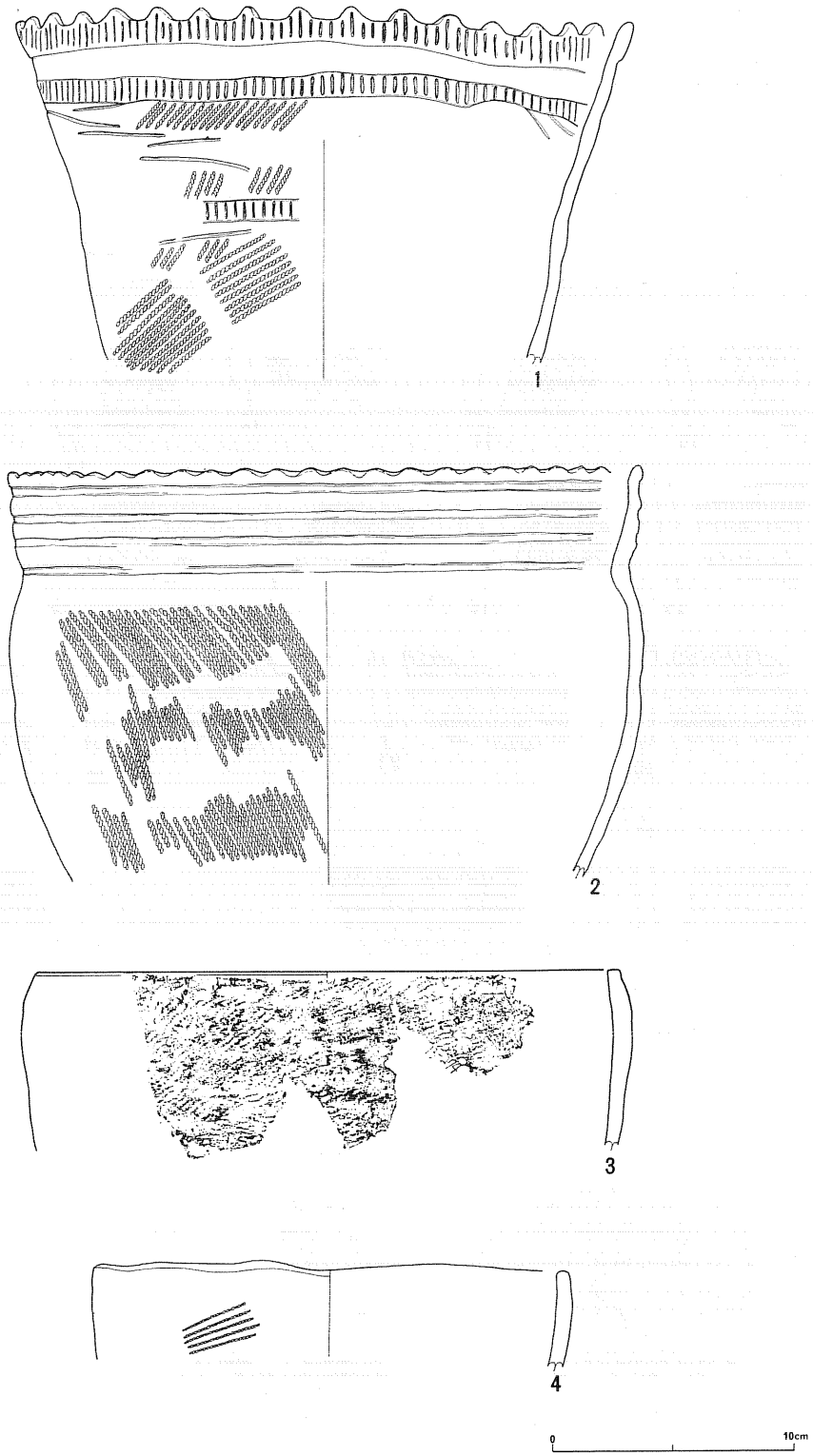
第４図　遺構外遺物出土状況


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
10cm

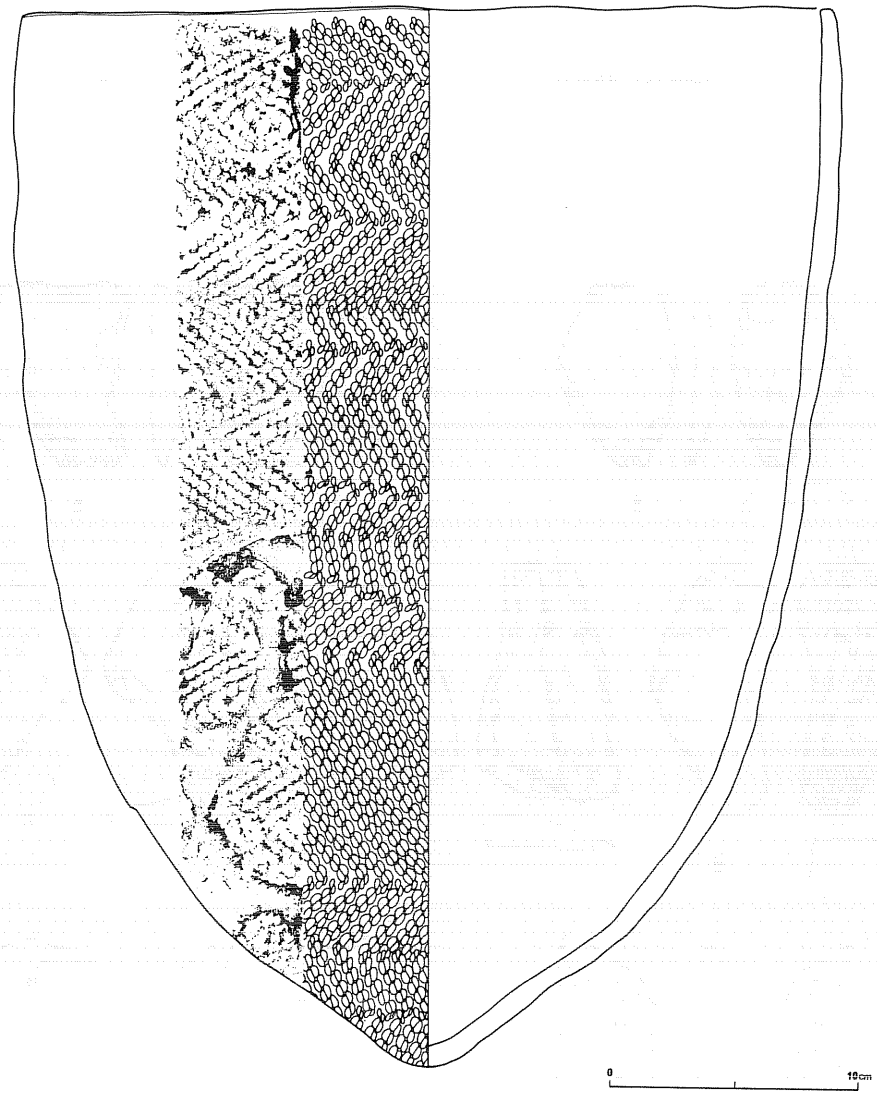
第５図　遺構外出土遺物


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10cm

第６図　遺構外出土遺物



第７図　遺構外出土遺物

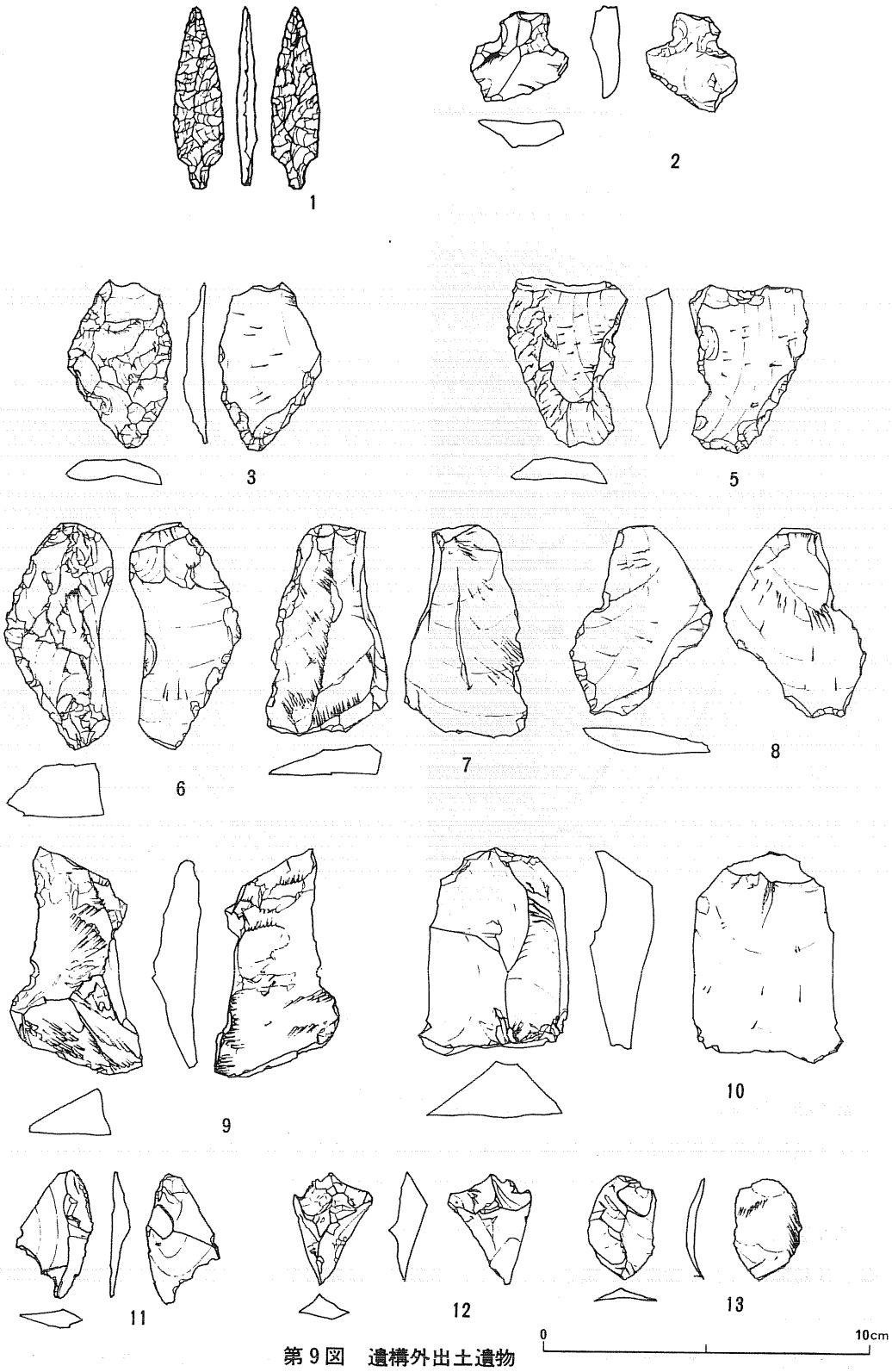


第8図　遺構外出土遺物

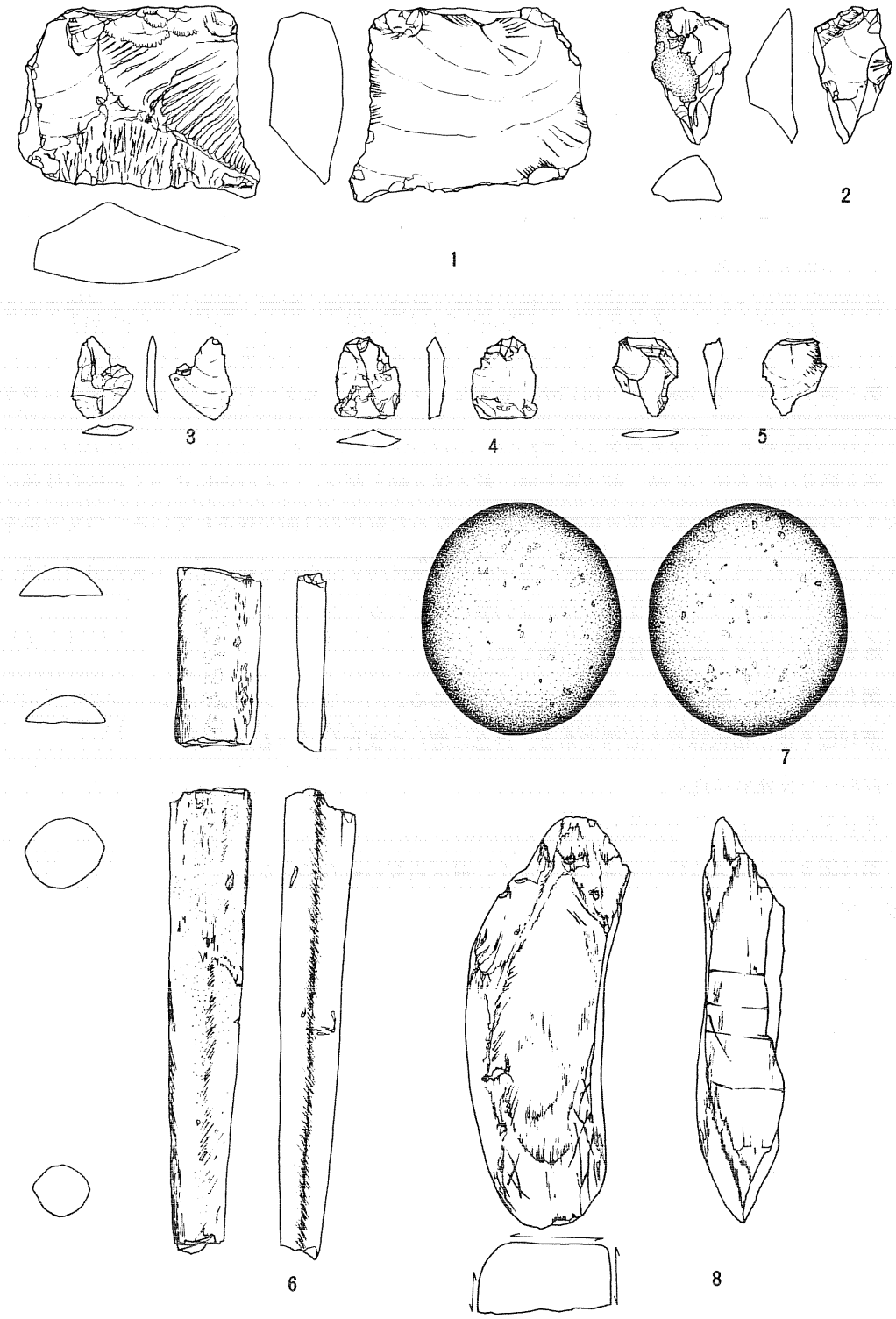
第7図1は波状の折り返し口縁の鉢形土器であるが，口頸部に3段の刻目帯がめぐる。2段及び3段目の刻目帯の中には，粗雑な横位の沈線がひかれている。地文にはＬＲの原体が用いられている。おそらく後期後葉の入組文系土器に比定されよう。

第5図20～23は口縁に2個1対の所謂Ｂ突起が作出され，口頸部の文様帯には数条の平行沈線と沈線間に大きな截痕列が施されている。体部以下は細密なＬＲ原体が全面に横位に回転押捺される。

第5図24～28，第7図2は口縁に数条の平行沈線が描かれ，体部以下には全面縄文が施され



第９図　遺構外出土遺物



第10図　遺構外出土遺物

ている。**第7図2**のように頸部に屈曲をもつものと，もたないものがある。体部に施される縄文は，**第7図2**のＲＬを除いて全てＬＲ原体が用いられている。後晩期に位置づけられるものと思われる。

第6図2～28，**第7図3**，**4**は全面縄文の施された破片である。口縁は平縁でやや内に傾くものが多い。**第6図1**のように無文，**29**のように条痕のものも同様と思うが，やはり後晩期に伴った粗製土器であろう。

遺構外から出土している石器は，石鏃，石匙，掻器，石棒，磨石，砥石，フレイク等である。石棒，磨石，砥石以外の剥片を用いて製作された石器及びフレイクは全て頁岩製である。

第9図1，最大長56㎜，最大幅15㎜，最大厚6㎜を測る。有茎の石鏃である。両面から丹念な調整剥離が施され形状を整えている。

第9図2，最大長 28㎜，最大幅30㎜，最大厚9㎜を測る。つまみ部に比べて刃部の極端に大きな石匙である。つまみ部分頂部には素材となった剥片の打面が残されている。つまみ部を作出するための抉り込みの部分を除いては調整剥離は殆ど行われておらず，主要剥離面の側，つまみとの反対側の刃部に僅かに細かな剥離が施されるのみである。

第9図3～7は不定形の掻器を一括した。

第9図8～13，**第10図1～5**は全て剥片類である。

第10図6は，粘板岩製の石棒である。丹念に磨いて製作しているが，断面形はやや菱形に近い。

第10図7は，安山岩製の磨石である。

第10図8は，縄文時代の所産ではないが，凝灰岩製の砥石である。三面を砥面としている。

(2) 平安時代の遺構と遺物

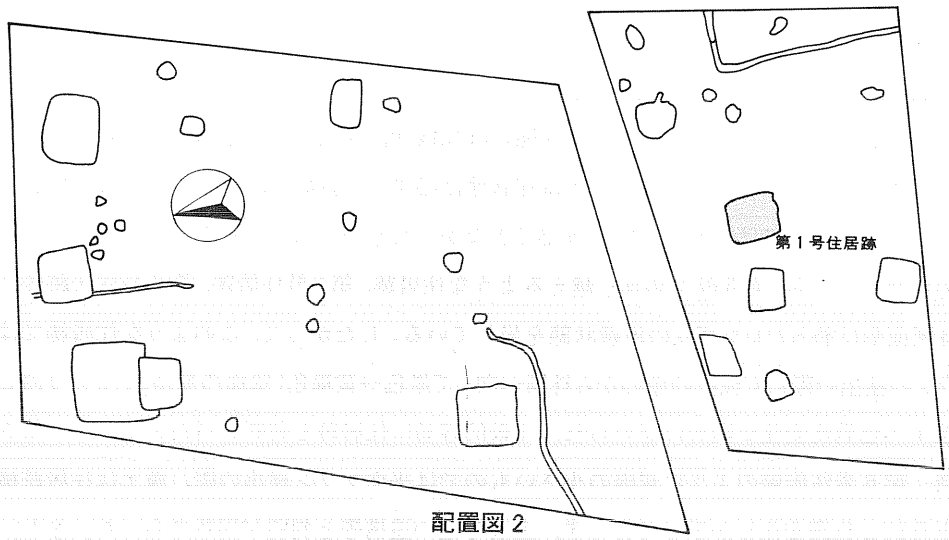
ア．住居跡

住居跡は農道南側区で６棟，北側区で６棟の計12棟検出された。検出面は第Ⅳ層上面である傾斜面に構築されているのと耕作のため遺存状態は必ずしも良好とは言えず，特に南側調査区で検出された住居跡では北西側の壁の確認できなかったものもある。覆土は，ある程度の規模の平面プランをもち，最深部で50cmを越えるような住居跡，第１号住居跡，第７号住居跡等にあっては断面形は整ったレンズ状の堆積状態を呈している。したがって，このような住居跡では平面プランの検出の際にも住居の中心から外側へ向って黒色→黄褐色(壁面の崩落土)という同心円状の覆土の色調度変化が顕著に認められ，比較的容易に住居跡と判断し得た。しかし，第５号住居跡，第６号住居跡のように規模の小さいものでは平面プラン検出の際，覆土は住居跡構築層へ漸移的な色調変化しか示しておらず，土壙等他の遺構等と判別が困難であった。また，覆土中には焼土，炭化物等の細粒，及び径１～３㎜程度の十和田降下火山灰に由来すると思われるパミスが含まれており，これらも検出の際の大きな目安となっている。但し，遺構外で部分的ではあるが層となって確認できたパミスは，住居跡内では覆土全体に粒状に混入するかブロック状の混入の状態しか示していない。

床面は，遺跡基本層序第Ⅶ層～第Ⅸ層中に掘り込まれている。第Ⅷ層が床面となっている場合は粘土質であるため硬く締った状態で確認できたが，第Ⅶ層を床面としている場合は砂質土であって良好な床面とは言い難い。また，大半の住居跡には床面の上に焼土及び炭化物の堆積層が広範囲に認められている。第10号住居跡では炭化した遺材も確認されており，第11号住居跡の中で確認された多量の礫も火熱を受けて赤変したものが多い。

カマドはどの住居跡も概して遺存状態が悪く，本体部分にしっかりした芯材が残っていないためか，袖部等に用いられた粘土は床に流れたような状態でしか確認できなかった。またカマド内に遺存する遺物も概して少ない。

出土した遺物は，土器，砥石，鉄器及び自然遺物であるが，その量は全般に少ない。土器は，大半が破片で出土しており，完形のままで出土するなど使用時の状態を示すような例はない。住居跡全体で見れば，やはりカマド付近に多く分布するが，覆土中から床面にかけて出土している。鉄器は釘状の鉄製品が出土している。鉄製品は覆土中にあってもより下部からの出土であり，床面から出土しているものが多い。自然遺物は，第１号住居跡から出土した炭化した栃ノ実，ヨシの他，第10号住居跡等で確認されている炭化した遺材があげられる。



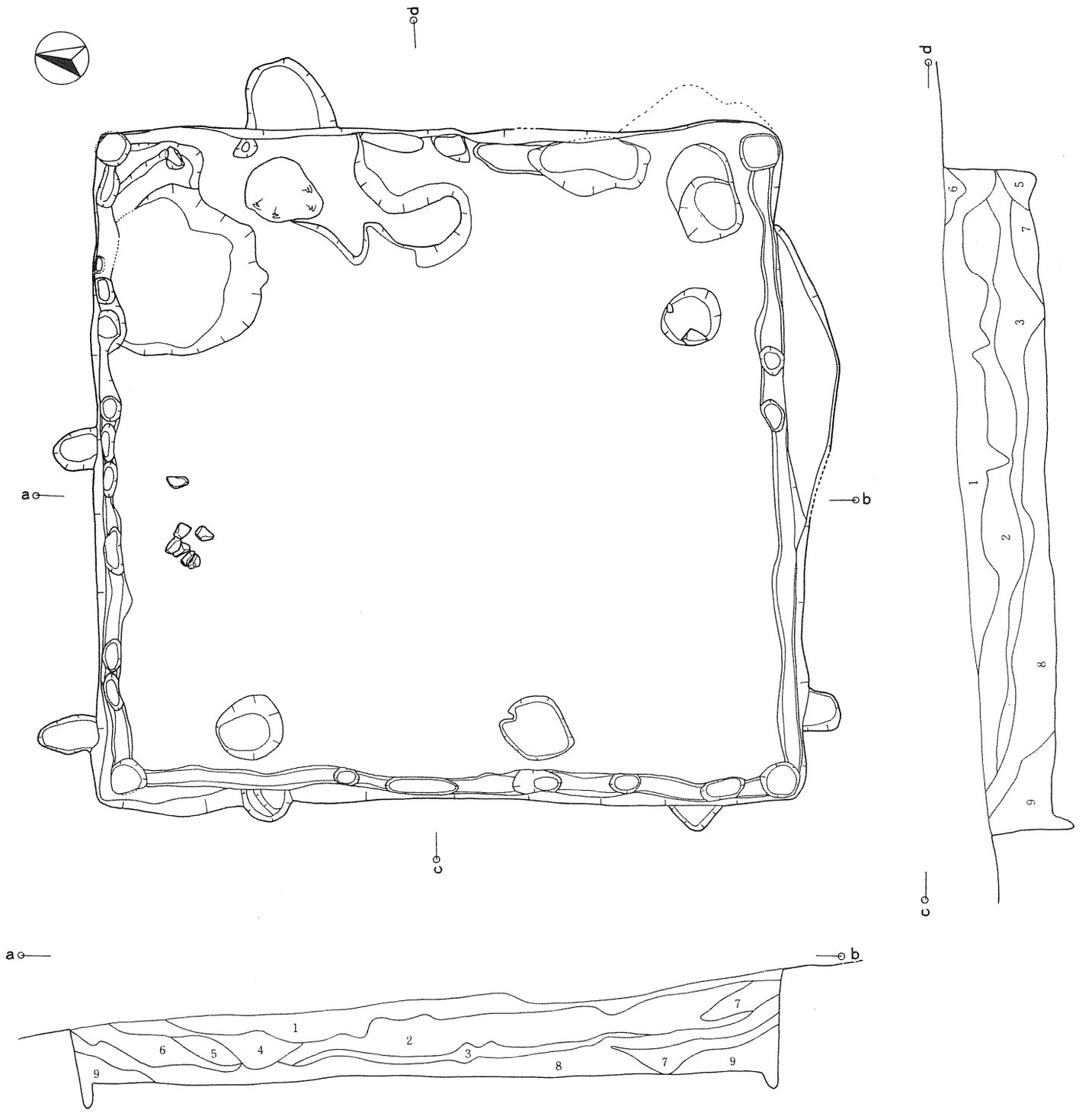
配置図２

第５表　第１号住居跡観察表

第１号住居跡	挿図	11, 12, 13	図版	4, 5, 30

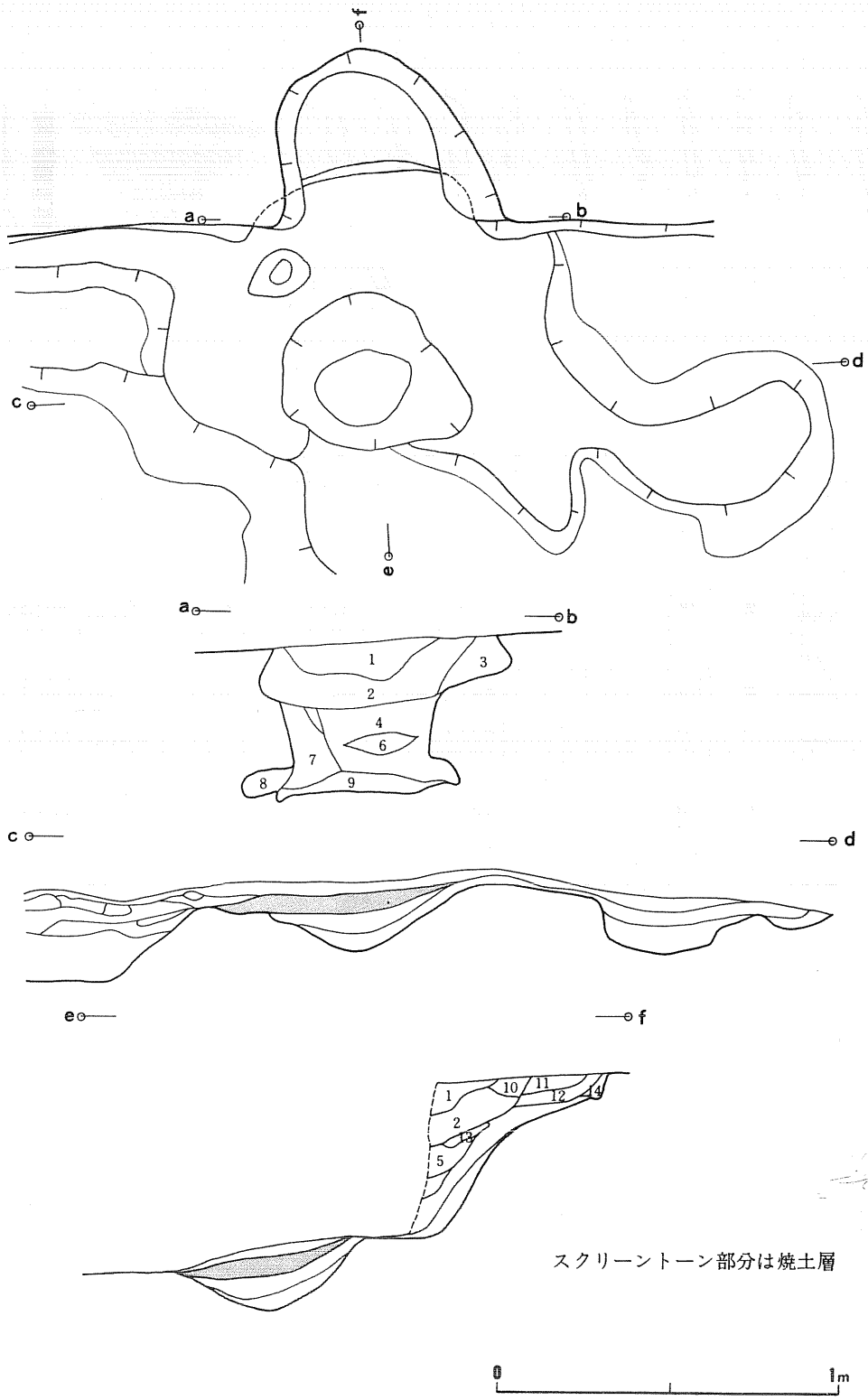
検出区	4－D, 4－E, 5－D, 5－E			
法量	東壁	西壁	南壁	北壁
壁長	456	514	480	486
壁高	46.5～67.5	33.5～58	59.5～74	30～50
周溝幅	22	——	22	19
周溝深	17	——	9.5	20
面積	24.64			
主軸方位	N－99.5°－W	形態	方形	

覆土	1．10YR2/1 黒色 粘性有 孔隙なし パミスをやや含む 2．10YR3/3 黒褐色 粘性有 孔隙稍有 パミスをやや含む 3．10YR3/4 暗褐色 粘性有 孔隙稍有 ロームブロックが約５％混入 4．10YR3/2 黒褐色 粘性有 孔隙稍有 パミスを少し含む 5．10YR3/3 暗褐色 粘性有 孔隙稍有 ロームブロックが約３％混入 6．10YR3/3 暗褐色 粘性有 孔隙稍有 ロームブロックが約５％混入 7．10YR3/3 黒褐色 粘性有 孔隙稍有 パミスをやや含む 8．10YR5/6 黄褐色 粘性有 孔隙稍有 ロームブロックが約５～20％混入 9．10YR4/4 褐色 粘性弱 孔隙大 ロームブロックが約２％混入 炭化物が約２％混入
壁	床面との傾斜角92°～110°を計る。
床	東壁付近全体にかなり広く炭化物の範囲を見ることができ，厚い所で４cm程ある。また，この炭化物中からトチの実がかなり多量に出土している。焼土も東壁付近一帯に見られる。
周溝	東壁の一部を除いてはすべての壁寄りに見られる。幅は約７～21cm，深さは9.5～20.0cm程で周溝内には多数の壁材を立てかけたと思われるpitが検出された。
ピット	P_1 26×29×26 住居跡南壁東側隅 P_2 25×28×27.5 南壁西側隅 P_3 23×26×23 北壁西側隅 P_4 23×25×23 カマド 北側隅 P_1～P_4までが支柱穴と思われる。 P_5 44×46×10 南壁東寄り P_6 40×46×25 南壁東寄り P_5より西側 P_7 45×52×８ 西壁南寄り P_8 44×47×12.5 西壁北寄り P_9 41×86×26.5 P_5より北側 P_{10} 24×28×15.5 住居跡外南壁に接して西側 P_{11} 23×35×17.5 西壁外に接して北側 P_{12} 26×43×14.5 北壁外に接して西側 P_{13} 28×31×15.0 P_{12}より東側
カマド 位置	東壁 北寄り
カマド 覆土	1．7.5YR3/4 黒褐色 シルト質 孔隙小 焼土粒１％ 火山軽石２～３％混入 2．7.5YR3/2 黒褐色 シルト質 孔隙中 焼土粒（５～10ミリ）15～20％ 火山軽石１％混入 3．10YR3/3 暗褐色 粘質土 孔隙小 黒褐色土20％位ブロック状に混入 やや灰色がかって見える。 4．7.5YR3/4 暗褐色 粘質土 孔隙小 黒褐色土が５％位 炭化物粒・焼土粒が１％位混入 5．7.5YR3/4 暗褐色 ４とほぼ同じだが，焼土・炭化物の混入がない。 6．10YR3/3 暗褐色 孔隙小 焼土粒１％ 炭化物粒20～30％混入 ―煙道― 7．7.5YR3/4 褐色 粘質土 地山にやや近いが焼土粒・炭化物粒が２～３％黒褐色土が20％混入して地山よりやや明るい 8．7.5YR3/4 褐色 粘質土 ７とほぼ同じだが焼土粒・炭化物粒の混入がない ややボロボロしている 9．10YR3/3 暗褐色 孔隙小 黒褐色土40～50％混入 3，6より暗く見える。 10．10YR3/2 黒褐色 孔隙小 粘土粒・焼土粒が５～６％混入 11．10YR3/3 黒褐色 孔隙小 良くしまっている 粘土粒20％ 焼土粒２～３％混入 12．10YR3/3 暗褐色 孔隙小 炭化物 地山の柱（２～３ミリ）５％混入 13．10YR3/4 暗褐色 孔隙中 地山がブロック状に混入 14．10YR3/3 暗褐色 シルト質 ※　図版上のスクリーントーンの部分はカマド本体部分における焼土の堆積状態を示す。
	カマド内から芯材などは検出されていない。煙道及び煙出し孔は平面プランで確認されたもので，その際煙出し孔は煙道部のプラン確認時にその先端部分に26×33cmほどの円形の黒褐色土のプランを確認し，これが煙出し孔ではないかと推測されたものである。

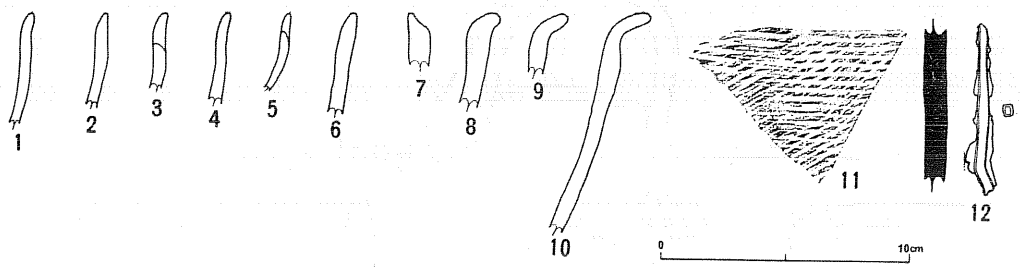


第11図　第１号住居跡

0　2m



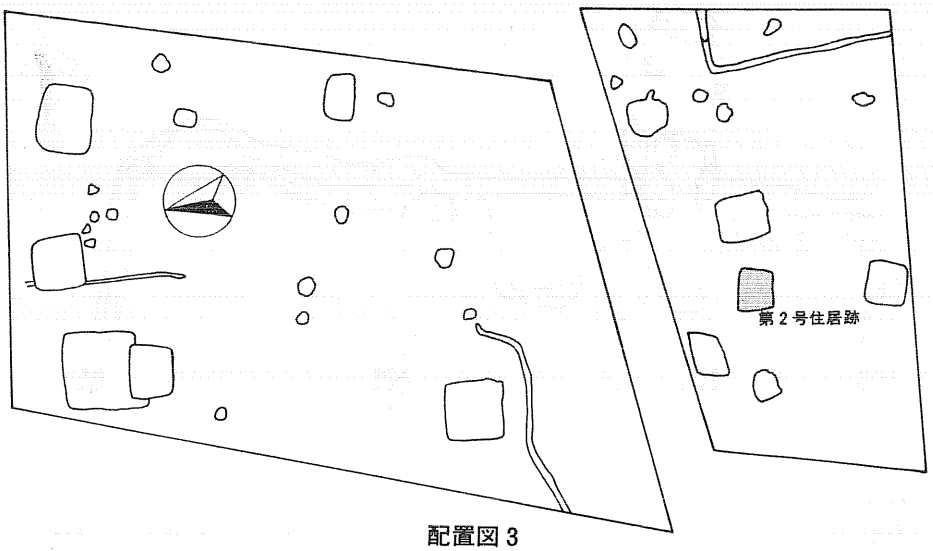
第12図　第1号住居跡カマド



第13図　第１号住居跡出土遺物

第６表　第１号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量（cm）				調整（地文）		成形	色調	胎土	焼成
				口径	体径	底径	器高	外面	内面				
1	第１号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
2	第１号住居跡	甕	口縁					斜位ナデ	斜位ナデ	積み上げ	橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
3	第１号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
4	第１号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を僅かに含む	良好
5	第１号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
6	第１号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ	明褐灰色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
7	第１号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
8	第１号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，縦位ナデ	縦位ナデ，横位ナデ	積み上げ	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
9	第１号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
10	第１号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
11	第１号住居跡	甕（須恵器）	胴					叩き目	——	積み上げ	灰色 灰色（N6/）	精選	良好
12	第１号住居跡	鉄　釘？	残存長6.7cm　径0.38×0.47cm					先端はやや丸みを帯，断面は中空である					



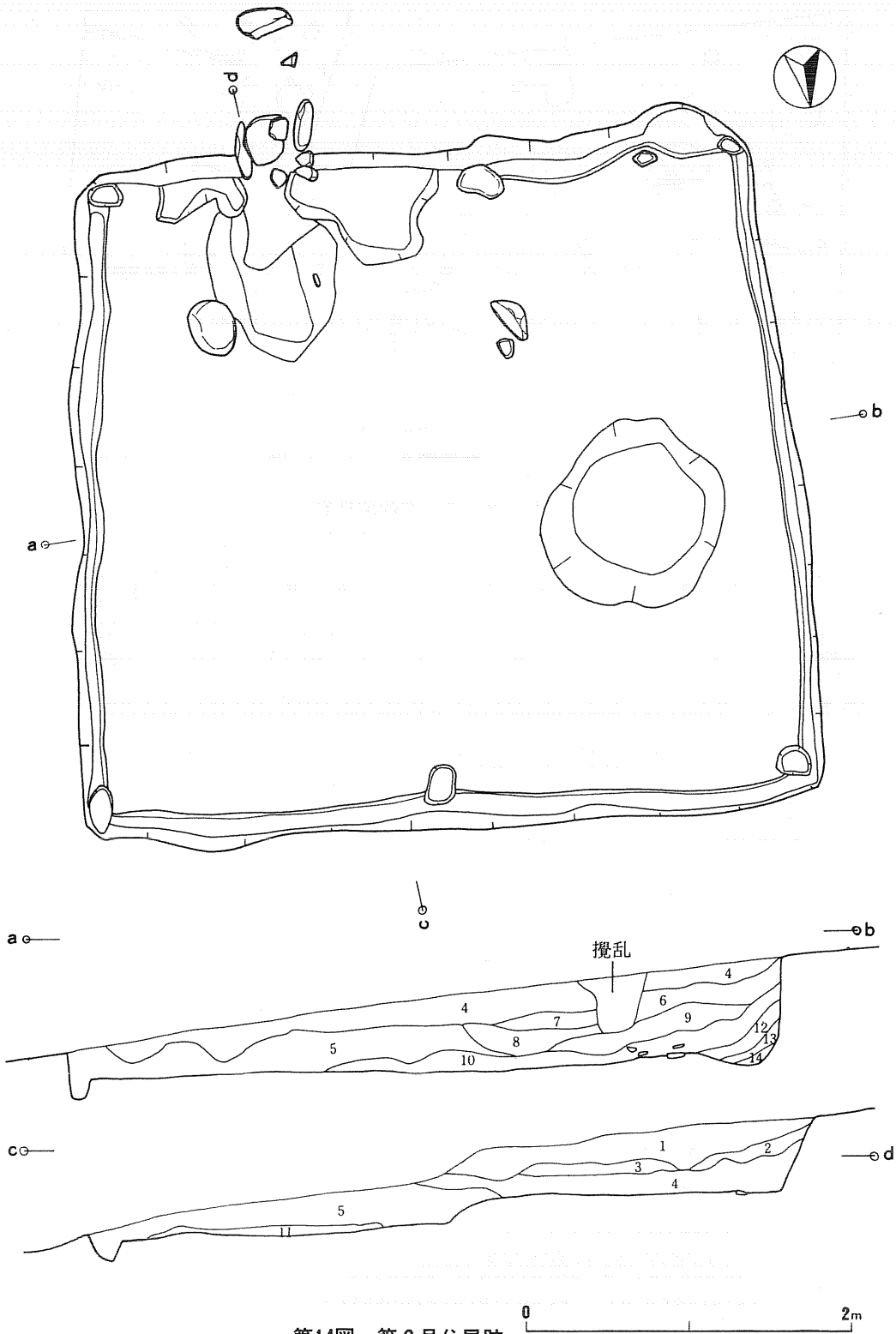
配置図3

第7表　第2号住居跡観察表

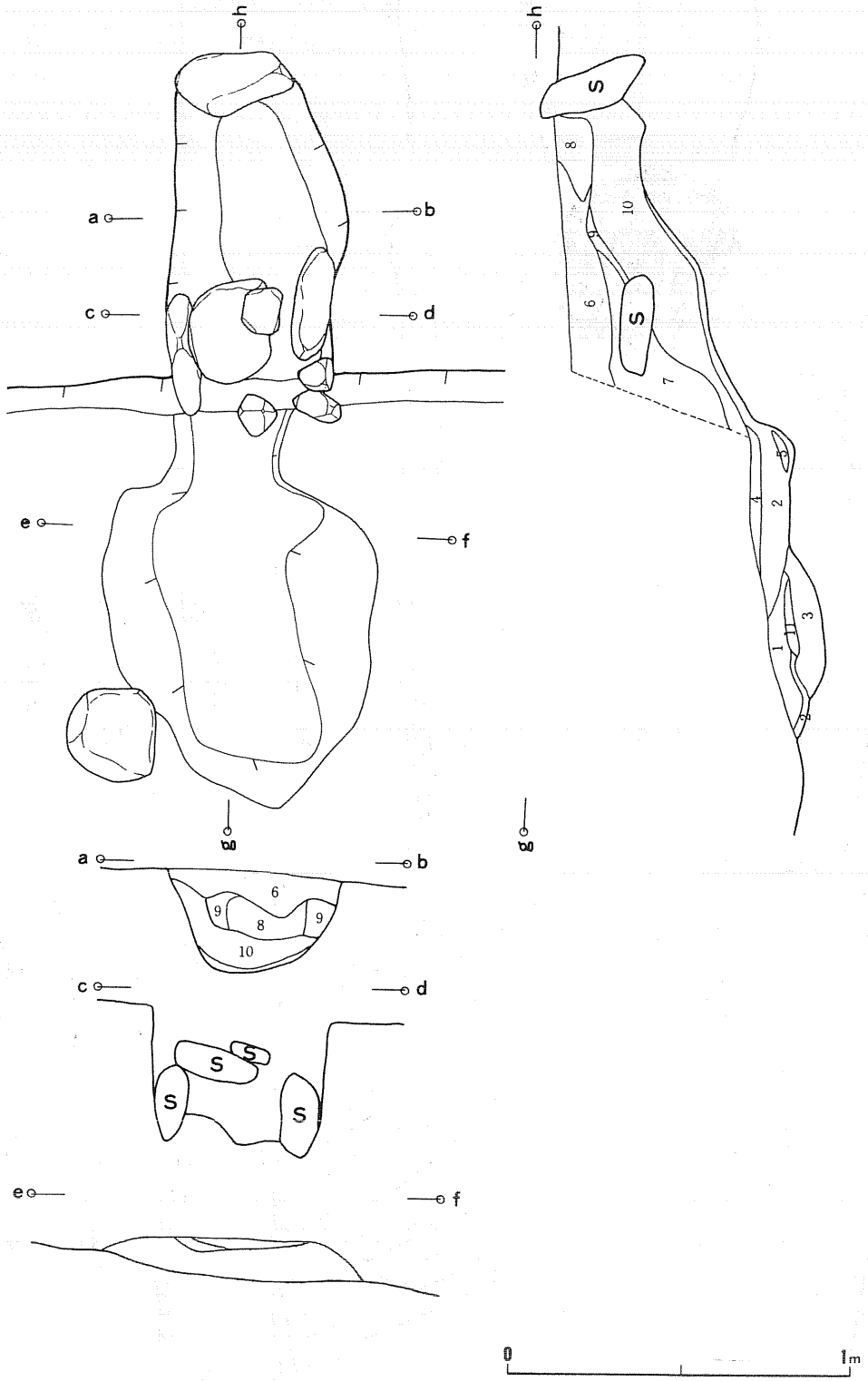
第2号住居跡	挿図	14, 15, 16, 17	図版	6, 7, 31

検出区	4－F, 4－G, 5－F, 5－G			
法量		東壁	西壁	南壁	北壁
	壁長	425	442	416	440
	壁高	38～55	1～24	41～60	4～32
	周溝幅	20	14	16	23
	周溝深	4	11	16	21
	面積	18.72			
主軸方位	N－2°－W	形態	方形		

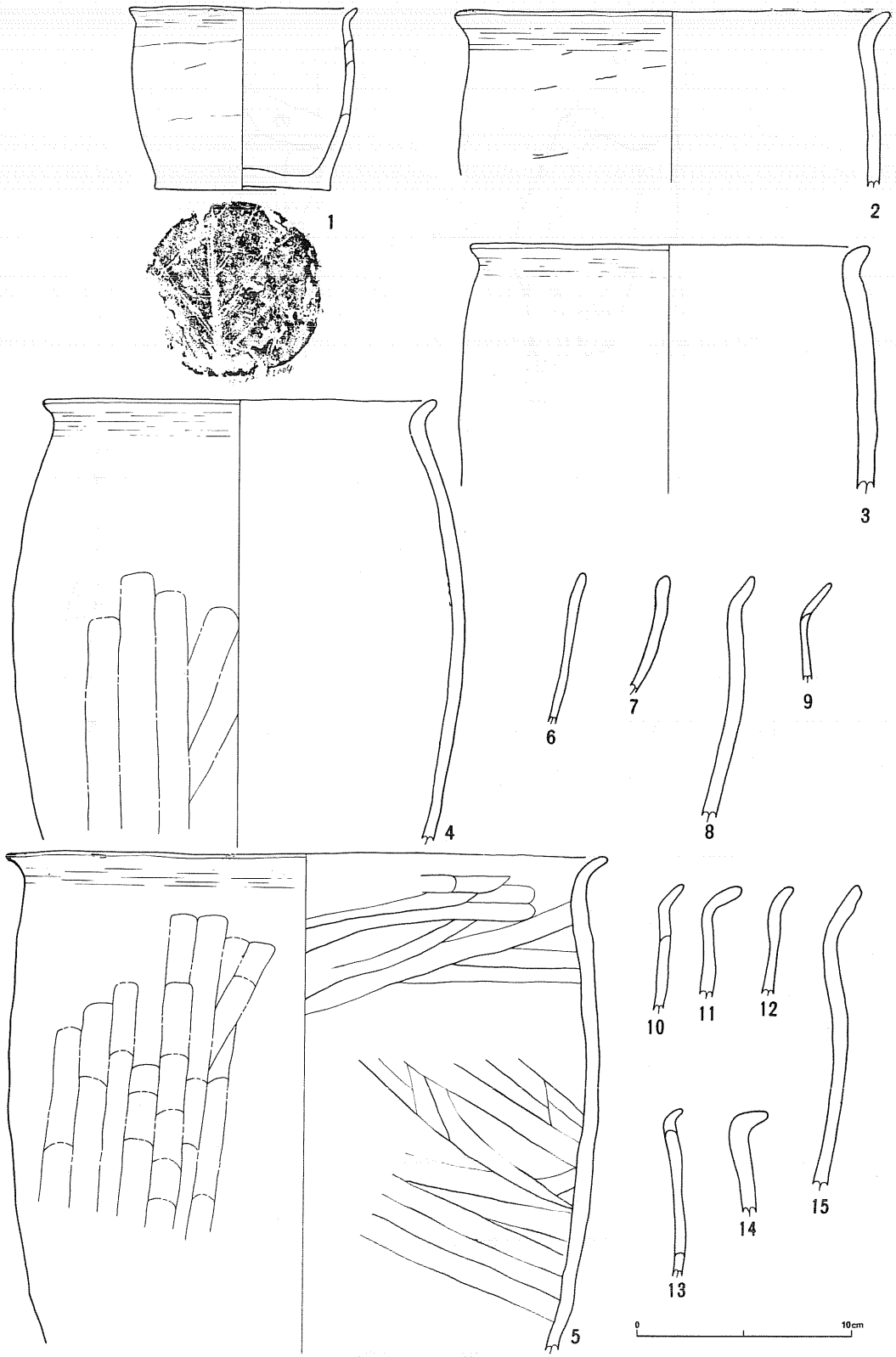
覆土	1．10YR3/4 暗褐色 粘性中 孔隙稍大 浮石粒子約5％混入 2．10YR3/4 黒褐色 粘性中 孔隙稍小 浮石約1％混入 3．10YR3/2 黒褐色 粘性稍弱 孔隙中 ロームブロック約7％混入 浮石約3％混入 4．10YR3/3 暗褐色 粘性弱 孔隙稍大 ロームブロック約10％混入 5．10YR3/4 暗褐色 粘性稍弱 孔隙稍小 浮石粒子約3％混入 ロームブロック約3％混入 6．10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性稍弱 孔隙中 浮石粒子約5％ ロームブロック約2％混入 7．10YR2/1 黒色 粘性弱 孔隙大 砂質土 粗砂50％以上混入 8．10YR2/2 黒褐色 粘性弱 孔隙稍大 炭化物約3％ 焼土約5％混入 9．10YR2/1 黒色 粘性稍弱 孔隙中 炭化物約3％パミス約10％混入 10．10YR3/6 黄褐色 粘性中 孔隙中 炭化物約1％ 焼土約1％ ロームブロック約5％混入 11．10YR4/6 褐色 粘性稍強 孔隙中 ロームブロック約5％混入 12．10YR2/1 黒色 粘性稍弱 孔隙中 パミス約10％混入 13．10YR3/4 にぶい黄褐色 粘性強 孔隙中 粘土である。 14．10YR2/1 黒色 粘性弱 孔隙大 パミス約50％以上混入
壁	床面との傾斜角は86°～112°までである。最も大きいのは北壁で，最も小さいのは東壁である。
周溝	南壁の極く一部を除いてはすべての壁寄りの面に見られる。幅5～30cm，深さ4～18cmで周溝内及びそれに接するような形でP_1～P_5まで5つの柱穴が検出された。
ピット	P_1 9×15×22 住居跡内南壁西側隅 P_2 18×20×21.5 北壁西側隅 P_3 16×25×30 北壁中央付近 P_4 14×30×37 北壁東側隅 P_5 14×22×31 カマド 東側隅 P_6 104×120×19.5 住居跡内西側 P_6の覆土に焼土の堆積が見られた P_1～P_5は柱穴である
カマド 位置	南壁 東寄り
カマド 覆土	1．10YR3/4 暗褐色 粘性小 孔隙中 焼土及び炭化物各10％混入 2．10YR1.7/1 黒色 粘性小 孔隙大 炭化物80％以上混入 3．2.5YR5/6 明褐色 粘性大 孔隙小 焼土層 4．10YR3/2 黒褐色 粘性小 孔隙稍大 焼土及び炭化物各10％混入 5．10YR5/4 黄褐色 粘性大 孔隙小 粘土層 6．10YR3/2 黒褐色 粘性中 孔隙中 パミス約10％混入 7．10YR3/3 暗褐色 粘性小 孔隙大 パミス約5％混入 8．10YR3/4 暗褐色 粘性大 孔隙小 焼土約5％混入 9．5YR3/4 暗赤褐色 焼土約30％ 炭化物約5％混入 10．10YR2/1 黒色 粘性小 孔隙大 炭化物50％以上 焼土約10％混入 11．10YR5/6 黄褐色 粘性小 孔隙小 良質の粘土が非常に高い温度で焼けた物
	カマド本体と煙道の際部分に芯材として用いられたと思われる河原石が検出された。 カマド本体内に炭化物の広い範囲が見られる。保存状態はあまりよくなく煙道・煙出し孔などは検出できなかったが，煙道の先端部に16×34cmほどの河原石が検出された。ここが煙出し孔にあたる部分と思われる。



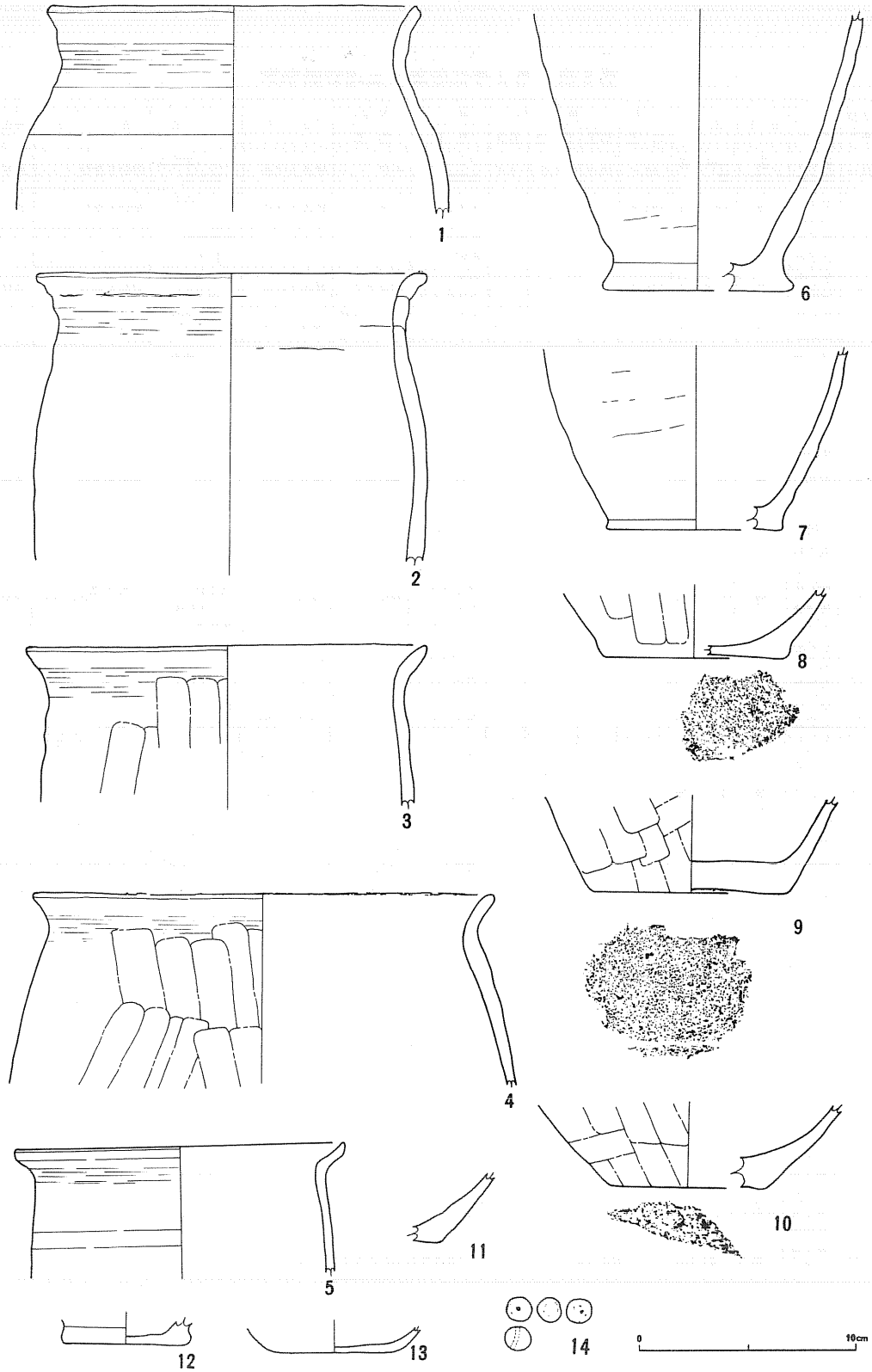
第14図　第２号住居跡



第15図　第２号住居跡カマド



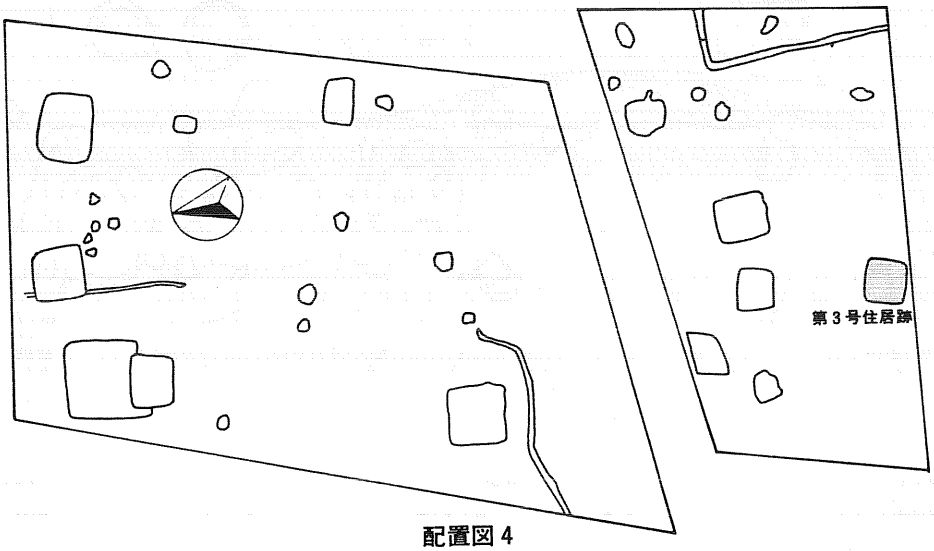
第16図　第２号住居跡出土遺物



第17図　第２号住居跡出土遺物

第8表　第2号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量（cm）				調整（地文）		成形	色調	胎土	焼成
				口径	体径	底径	器高	外面	内面				
16-1	第2号住居跡	甕（小形）	口縁～底部	10.7	10.4	8.2	8.5	ナデ 木葉痕	ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色（10YR）	砂粒を含む	良好
2	第2号住居跡	甕	口縁	(20.1)				ナデ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
3	第2号住居跡	甕	口縁	(18.6)				斜位ナデ 縦位ナデ	斜位ナデ	積み上げ法	灰黄褐色（10YR）	砂粒を含む	良好
4	第2号住居跡	甕	口縁～胴	(18 3)				ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	灰黄褐色（10YR）	砂粒を含む	良好
5	第2号住居跡	甕	口縁～胴	(27.9)				ナデ ヘラケズリ	ナデ，煤状炭化物付着	積み上げ法	にぶい黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
6	第2号住居跡	甕	口縁					ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい褐色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
7	第2号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい褐色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
8	第2号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（10YR）	砂粒を含む	良好
9	第2号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	灰褐色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
10	第2号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	褐灰色（10YR）	砂粒を含む	良好
11	第2号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色（10YR）	砂粒を含む	良好
12	第2号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ナデ	横位ナデ	積み上げ法	褐灰色（7.5YR）	砂粒を僅かに含む	良好
13	第2号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	褐灰色（10YR）	砂粒を含む	良好
14	第2号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
15	第2号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	橙色（5YR）	1～9mm位の砂粒を含む	良好
17-1	第2号住居跡	甕	口縁	(17.3)				横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色（10YR）	1～8mm位の砂粒を含む	良好
2	第2号住居跡	甕	口縁	(18.0)				横位ナデ ナデ	ナデ	積み上げ法	橙色（7.5YR）	1～2mm位の石と10～20mmの石を含む	良好
3	第2号住居跡	甕	口縁	(18.5)				ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色（7.5YR）	3～7mm位の砂粒を含む	良好
4	第2号住居跡	甕	口縁	(21.4)				横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色	砂粒を微かに含む	良好
5	第2号住居跡	甕	口縁	(15.2)				斜位ナデ	横位ナデ	ロクロ水挽き(?) 積み上げ法(?)	にぶい黄橙色	石英を含む精選	良好
6	第2号住居跡	甕	胴下半部～底部（¼）			(8.8)		ナデ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色（5YR）	1～1.5mm位の石を多く含む	良好
7	第2号住居跡	甕	底部			8.8		ナデ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色（5YR）	小石を含む，底部には5mm位の石が多く見られる	良好
8	第2号住居跡	甕	底部			(8.8)		ヘラケズリ 砂底	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色（7.5YR）	4mm位の砂粒（石英・長石）を含む	良好
9	第2号住居跡	甕	底部			(9.0)		ヘラケズリ 砂底	横位ナデ ナデ	積み上げ法	灰黄褐色（10YR）	1～6mm位の砂粒を含む	良好
10	第2号住居跡	甕	（½欠損）底部			(7.2)		ヘラケズリ 砂底	ナデ	積み上げ法	灰白色（10YR）	砂粒5mm位の小石を含む	良好
11	第2号住居跡	甕	底部					縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色（10YR）	砂粒	良好
12	第2号住居跡	甕	底部			(5.8)		?	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を微かに含む	良好
13	第2号住居跡	小形の甕(?)	底部			6.0		ナデ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙（5YR）	砂粒を含む	良好
14	第2号住居跡	土製玉	径1.2cm　孔径0.2cm					表面は丹念に磨きあげられている					



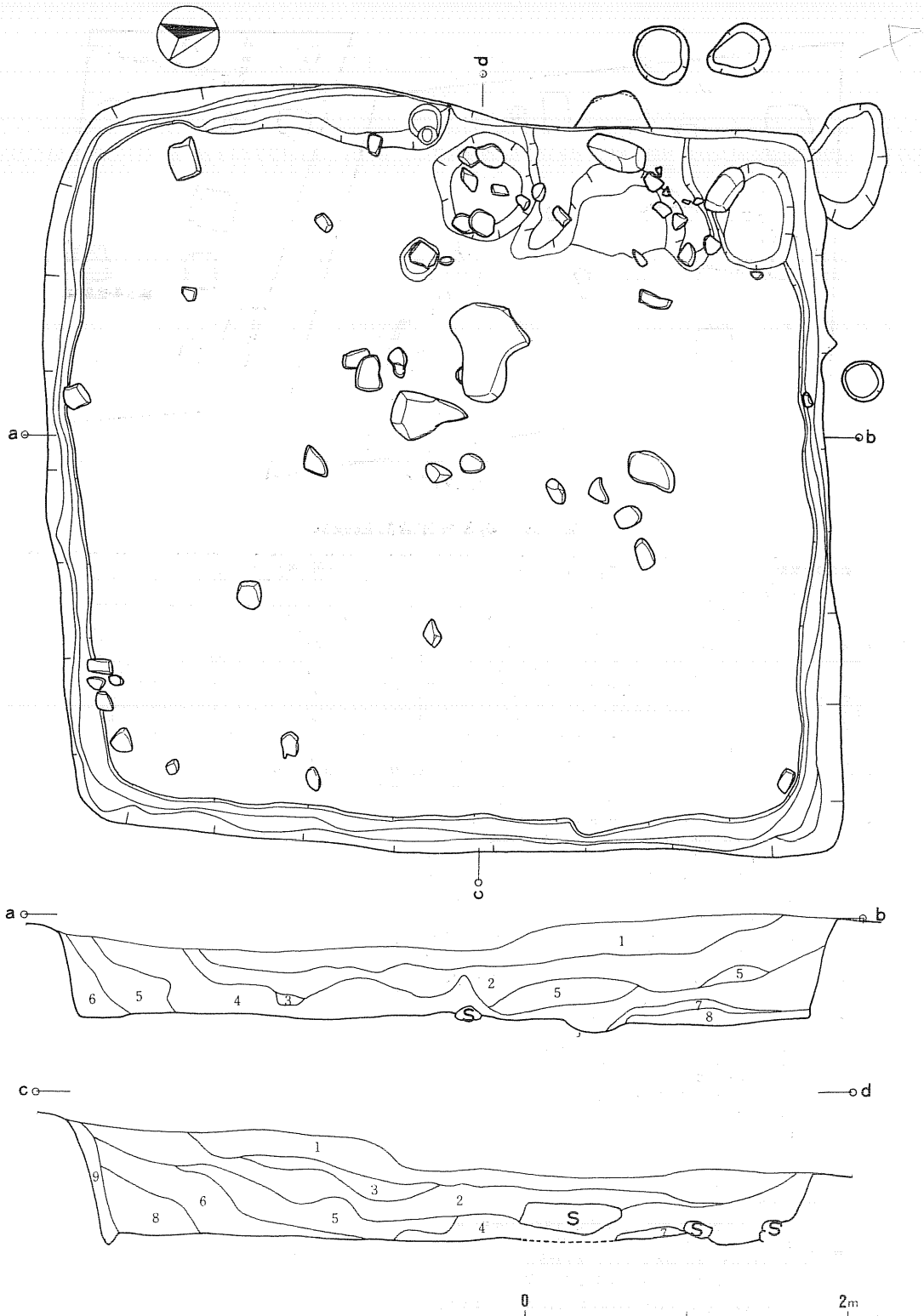
配置図4

第9表　第3号住居跡観察表

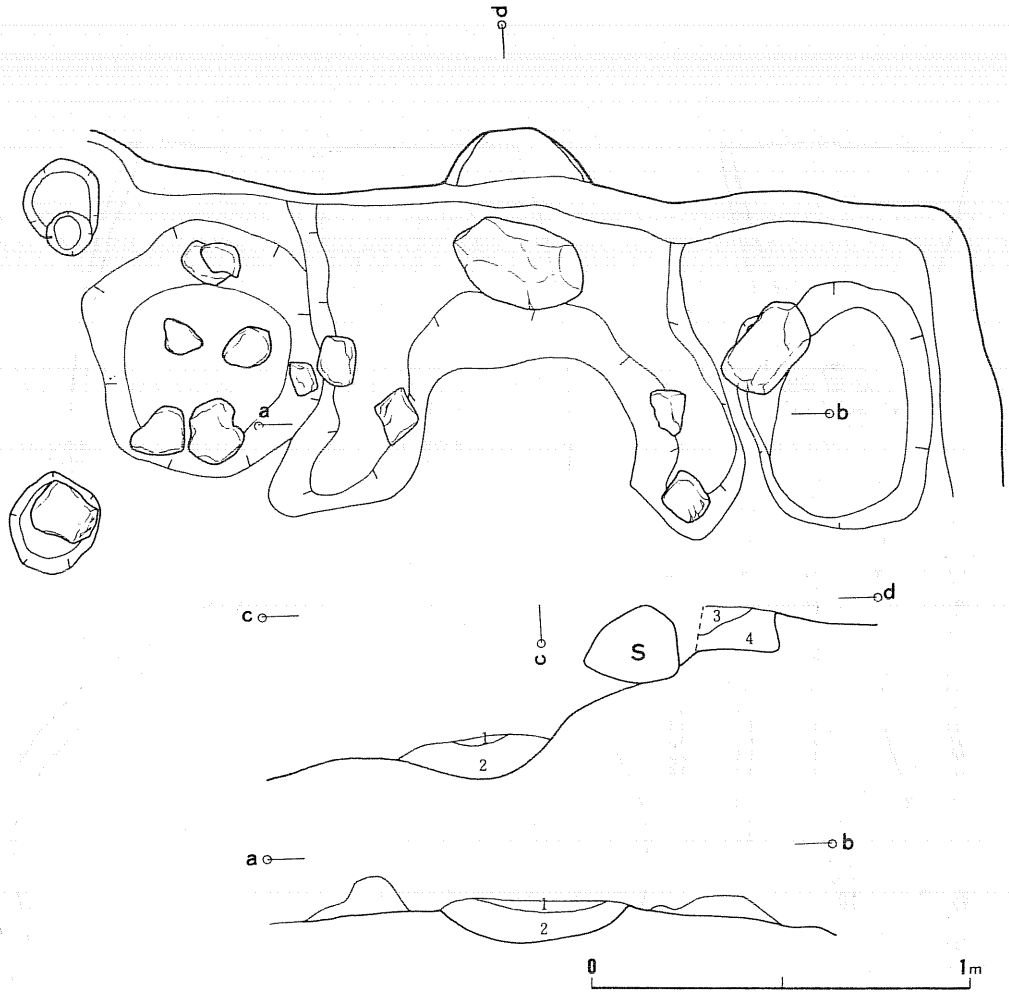
第3号住居跡	挿図	18, 19, 20	図版	8, 32

検出区	1－E, 1－F, 2－E, 2－F			
法量	東壁	西壁	南壁	北壁
壁長	490	498	498	447
壁高	70～76	20～28	36～74	52～72
周溝幅	24	16	22	14
周溝深	8	9	14	8
面積	24, 84			
主軸方位	N－108.5°－E	形態	方形	

覆土	1．10YR3/1 黒色 粘性強 孔隙なし バミス約3％混入 2．10YR3/2 黒褐色 粘性やや強 孔隙小 バミス2％混入 3．10YR3/1 黒色 粘性強 孔隙なし バミス約1％混入 4．10YR3/3 暗褐色 粘性やや強 孔隙小 バミス約1％混入 ロームブロック混入 5．10YR3/2 黒褐色 粘性やや弱 孔隙やや大 バミス約1％混入 ロームブロック混入 6．10YR3/1 黒色 粘性強 孔隙なし ロームブロック 炭化物混入 7．10YR1.7/1 黒色 粘性強 孔隙やや小 炭化物層 8．10YR5/6 明黄褐色 粘性強 孔隙なし ロームブロック多量に混入 9．10YR5/6 黄褐色 粘性弱 孔隙大 黄褐色土と炭化物の混合層
壁	傾斜角101～110°を計る。壁の立ち上がりが明瞭で遺存状態は良い。
床	中央の床面で径10～60cmの礫が検出され，カマド付近，南壁沿いにも径10～20cmの礫が検出されている。 凹凸が少なく，全体に平坦である。
周溝	10～30cmの幅で住居の壁沿に検出されている。
ピット	P_1 60×70×8 径10～15cmの礫 多量の土器片を検出 P_2 51×66×8 多量の土器片を検出 P_3 35×37×18 P_4 40×33×15 P_5 45×75×20 P_6 25×25×13
カマド 位置	西壁北寄
カマド 覆土	1．7.5YR3/4 褐色 粘性なく 孔隙小 高温のため非常に硬化 2．5YR3/6 赤褐色 粘性ややあり 孔隙小 均質でキメ細い 3．10YR3/6 褐色 粘性大 孔隙小 焼土粒混入 4．10YR3/2 黒褐色 粘性弱 孔隙大 焼土粒混入
カマド	カマド両袖は左右とも径20～30cmの粘土のたかまりにすぎない。 煙道部と燃焼部の境には長さ35cm幅22cm厚さ20cm程の礫が認められた。おそらく天井部の芯材として用いられたものであろう。



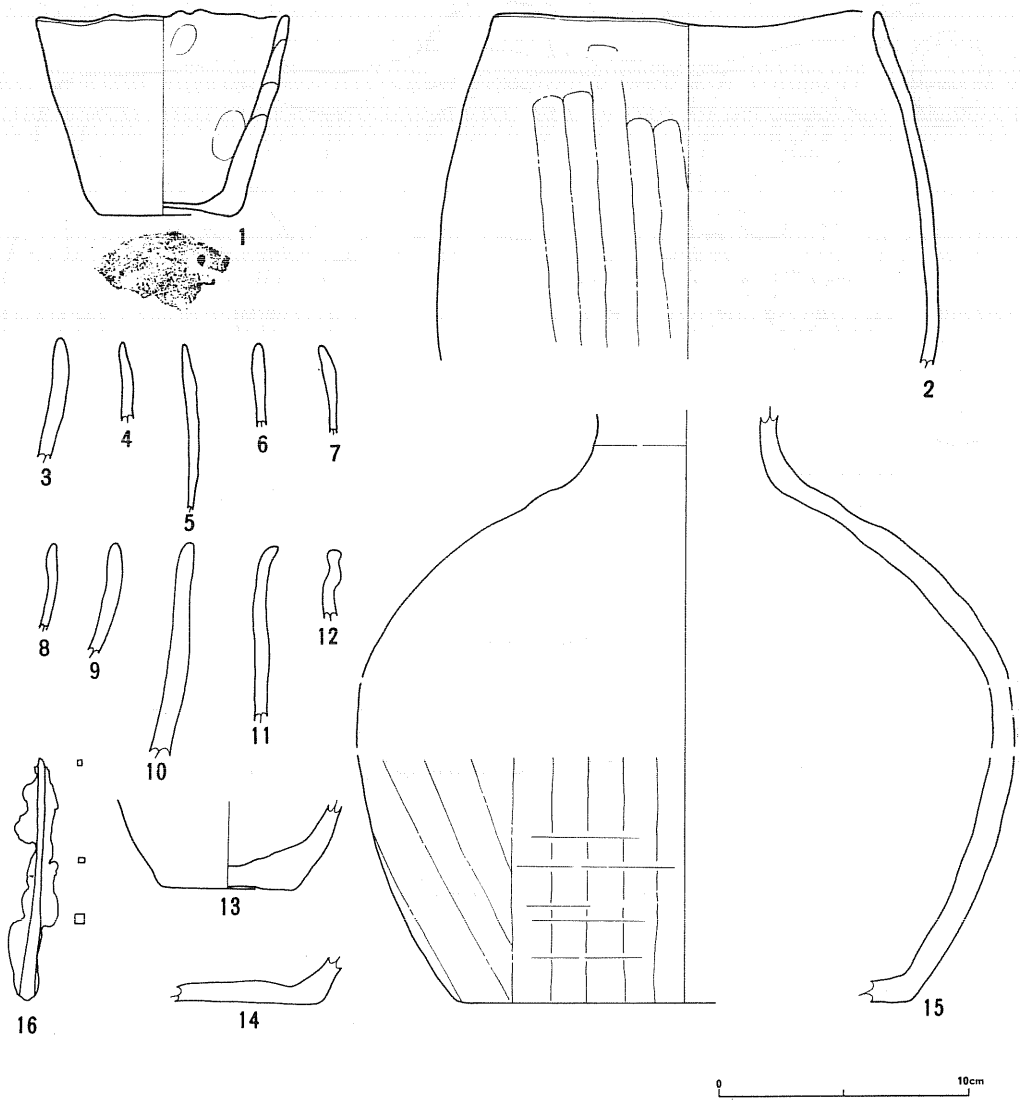
第18図　第３号住居跡



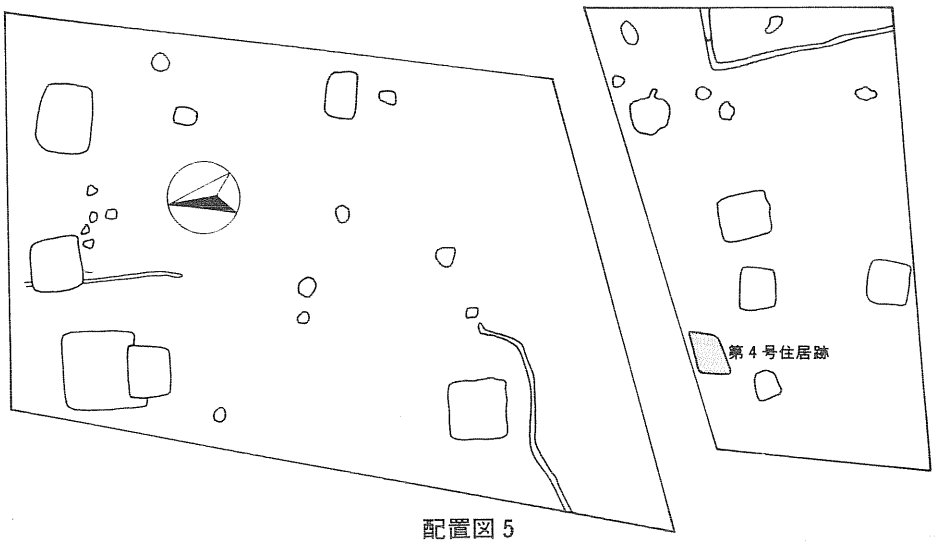
第19図　第３号住居跡カマド

第10表　第３号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量(cm) 口径	体径	底径	器高	調整(地文) 外面	内面	成形	色調	胎土	焼成
1	第3号住居跡	小形の甕	口縁～底部(与残存)	(10.1)		(5.6)	8.0	横位ナデ＋縦位ナデ，木葉痕	斜位ナデ(指頭圧痕)，胴下半から底部にかけて，スス付着	積み上げ法	灰白色～灰褐色 (7.5YR)	石英を含む 砂粒を含む	良好
2	甕	小形の甕	口縁～胴部	(15.6)				横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ 胴部内面に煤状の炭化物付着	積み上げ法	にぶい橙色 (7.5YR) 外，灰色～緑灰色	石英を含む 1～2mmの砂粒を含む	良好
3	甕	小形の甕	口縁					斜位ナデ	縦位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色 (7.5YR)	精選（微かに石英の砂粒を含む）	良好
4	甕	小形の甕	口縁					斜位ナデ	斜位ナデ	積み上げ法	橙色 (7.5YR)	砂粒を微かに含む	良好
5	甕	小形の甕	口縁					横位ナデ，斜位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色 (7.5YR)	砂粒を含む 石英も含む	良好
6	甕	小形の甕	口縁					横位ナデ，縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色 (10YR)	砂粒を含む 石英を含む	良好
7	甕	小形の甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色	砂粒を含む 石英を含む	良好
8	甕	小形の甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色 (7.5YR)	0.5～3mmの砂粒を含む（含，石英）	良好
9	甕	小形の甕	口縁					斜位ナデ	斜位ナデ	積み上げ法	橙（5YR）	砂粒を含む	良好
10	甕	小形の甕	口縁					横位ナデ，斜位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙 (7.5YR)	砂粒を含む 石英も含む	良好
11	甕	小形の甕	口縁					横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色 (7.5YR)	砂粒を含む 石英も含む	良好
12	甕	小形の甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	内側灰色 (10Y) 橙色 (7.5YR)	2～4mmの砂粒を含む	良好
13	甕(?)	小形の甕	底部			5.2		ナシ，ロクロ回転糸切り，底面回転糸切りの後，再調整される	ナシ	ロクロ水挽き	灰白色 (7.5YR)	精選(粘土粒が粗い)	良好
14	甕	小形の甕	底部					ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色(7.5YR)～にぶい褐色 (7.5YR)	石英・長石を含む 砂粒を含む	良好
15	壺	小形の甕	胴部～底部，胴部底部 一部欠損					斜位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	ロクロ使用 積み上げ法	浅黄橙色 (7.5YR)	2～6mmの砂粒を含む	良好



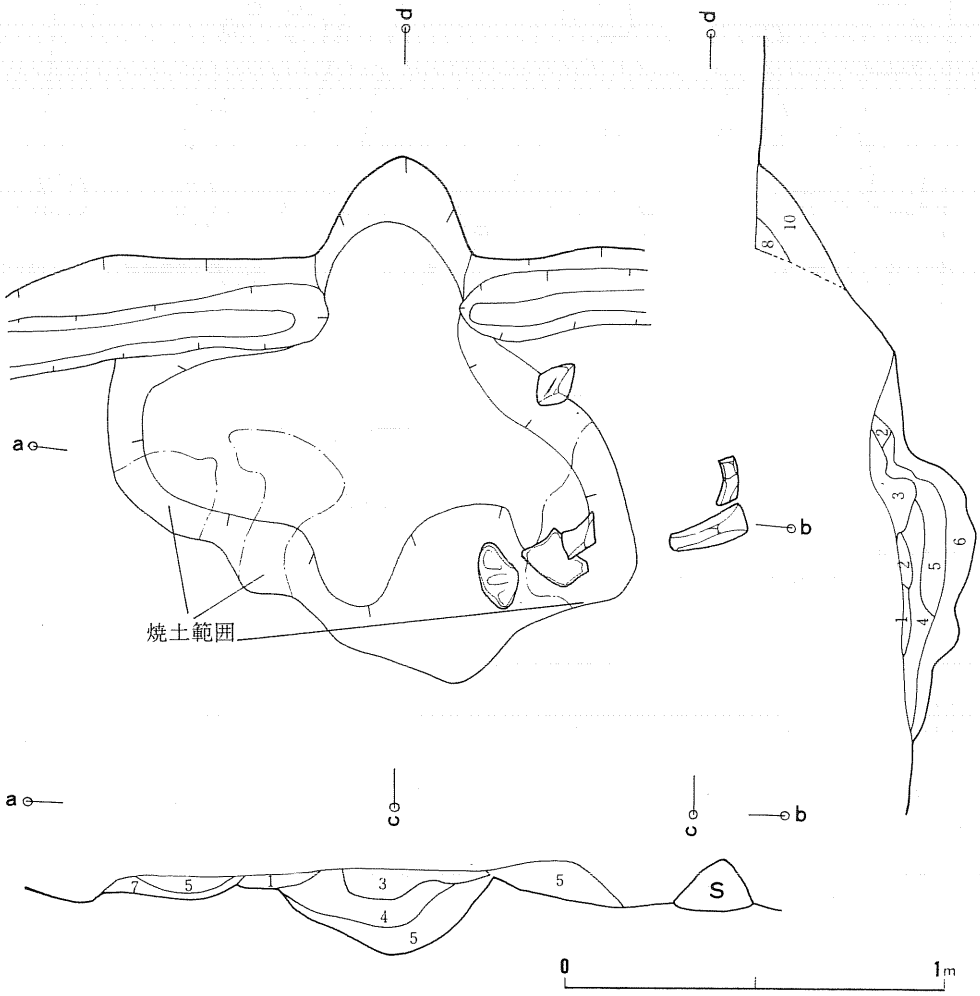
第20図　第３号住居跡出土遺物



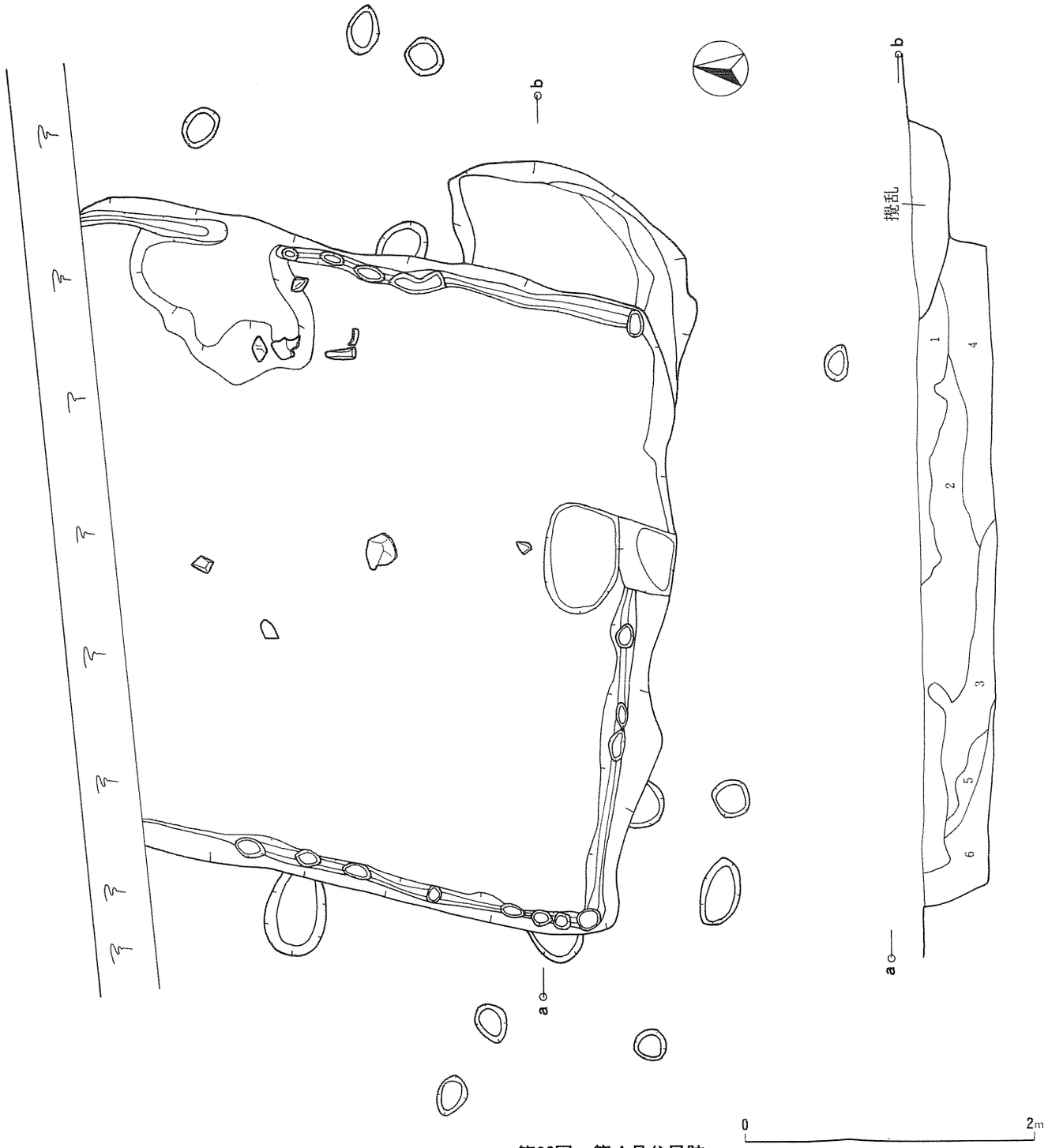
配置図５

第11表　第４号住居跡観察表

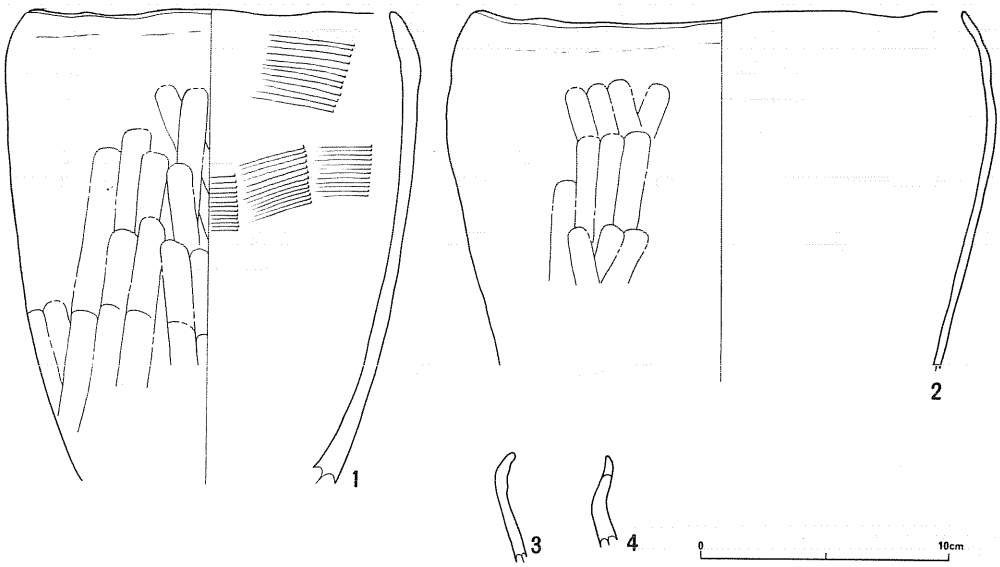
第４号住居跡		挿　図	21，22，23	図　版	7，33
検　出　区	5－G，5－H，6－G，6－H				
法量		東　壁	西　壁	南　壁	北　壁
	壁　長	——	——	448	——
	壁　高	32～40	13～41	55～72	——
	周溝幅	18	22	20	——
	周溝深	10	20.5	10	——
	面　積	17.28			
主軸方位	N－83°－W		形　態	方　形	
覆　土	1．10YR3/4 黒色 粘性やや大 孔隙小 パミス約３％混入 2．10YR3/3 黒褐色 粘性やや大 孔隙小 パミス約５％混入 黄褐色土粒約３％混入 3．10YR3/2 黒褐色 ロームブロック約３％混入 炭化物約１％混入 粘性やや大 孔隙やや小 4．10YR3/3 黒褐色 ロームブロック約２％混入 パミス約３％混入 粘性やや大 孔隙やや小 5．10YR3/4 暗褐色 粘性やや大 孔隙小 ロームブロック50％混入 6．10YR3/4 暗褐色 孔隙ややあり 粘性ややあり ロームブロック30％混入 炭化物５％混入			
壁	傾斜角103°～110°をはかる。北壁は調査区外のため検出不可能であり，東壁も激しく攪乱をうける。 攪乱壙から近代の鉄製品が出土している。				
床	中央付近に10～20cmの礫を検出している。				
周　溝	東壁及び南壁（カマド付近をのぞく）に沿って検出，南壁は中央より西側に検出する。				
ピット	P_1 15×16×20 P_2 20×12×20 主柱穴 P_3 76×51×13 多量の土器片を出土 P_4 47×39×20 P_5 35×18×18 P_6 50×27×10		P_7 26×26×10 P_8 26×18×7 P_9 25×34×15 P_{10} 27×26×16 P_{11} 35×22×20 P_{12} 27×23×23	P_{13} 55×43×20 P_{14} 30×20×8 P_{15} 25×24×8 P_{16} 20×35×14 P_{17} 22×23×8	
カマド	位　置	東壁北寄			
	覆　土	1．10YR3/3 黒褐色 粘性大 孔隙大 炭化物約３％混入 2．10YR5/6 黄褐色 粘性やや大 孔隙小 粘土層 3．10YR3/3 暗褐色 粘性大 孔隙大 焼土約10％混入 4．10YR4/4 褐色 粘性やや大 孔隙やや小 焼土約５％混入 5．5YR5/6 赤褐色 粘性大 孔隙なし 焼土層 6．10YR3/3 黒褐色 粘性やや大 孔隙やや小 炭化物約30％混入 7．10YR5/6 黄褐色 粘性やや大 孔隙小 ロームブロック約30％混入 8．10YR4/4 褐色 粘性大 孔隙なし 粘土層 9．7.5YR5/6 明褐色 粘性やや大 孔隙小 10．10YR3/3 黒褐色 粘性やや小 孔隙大 パミス約５％混入			
	遺存状態悪く，袖部の確認がむづかしい。わずかに右袖部の芯材と思われる礫が検出されている。				



第21図　第４号住居跡カマド



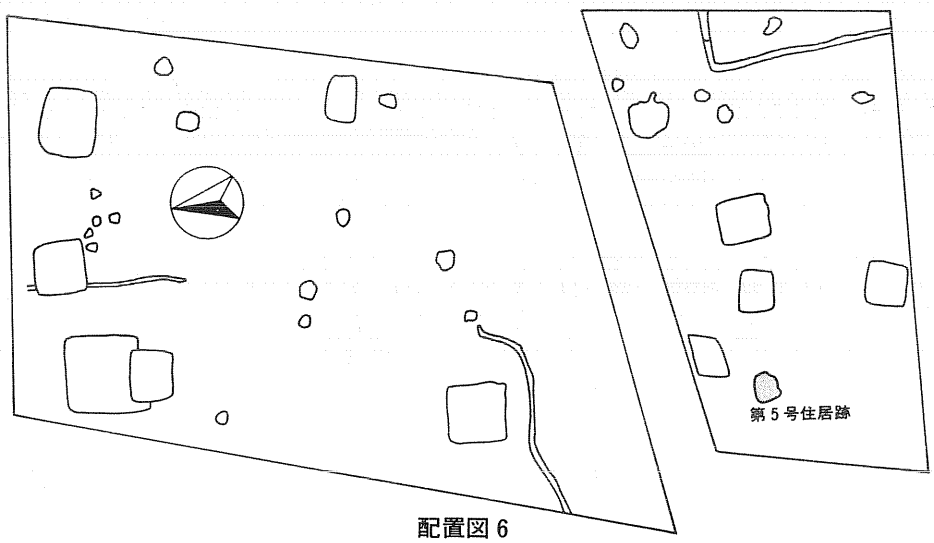
第22図　第４号住居跡



第23図　第４号住居跡出土遺物

第12表　第４号住居跡出土遺物観察表

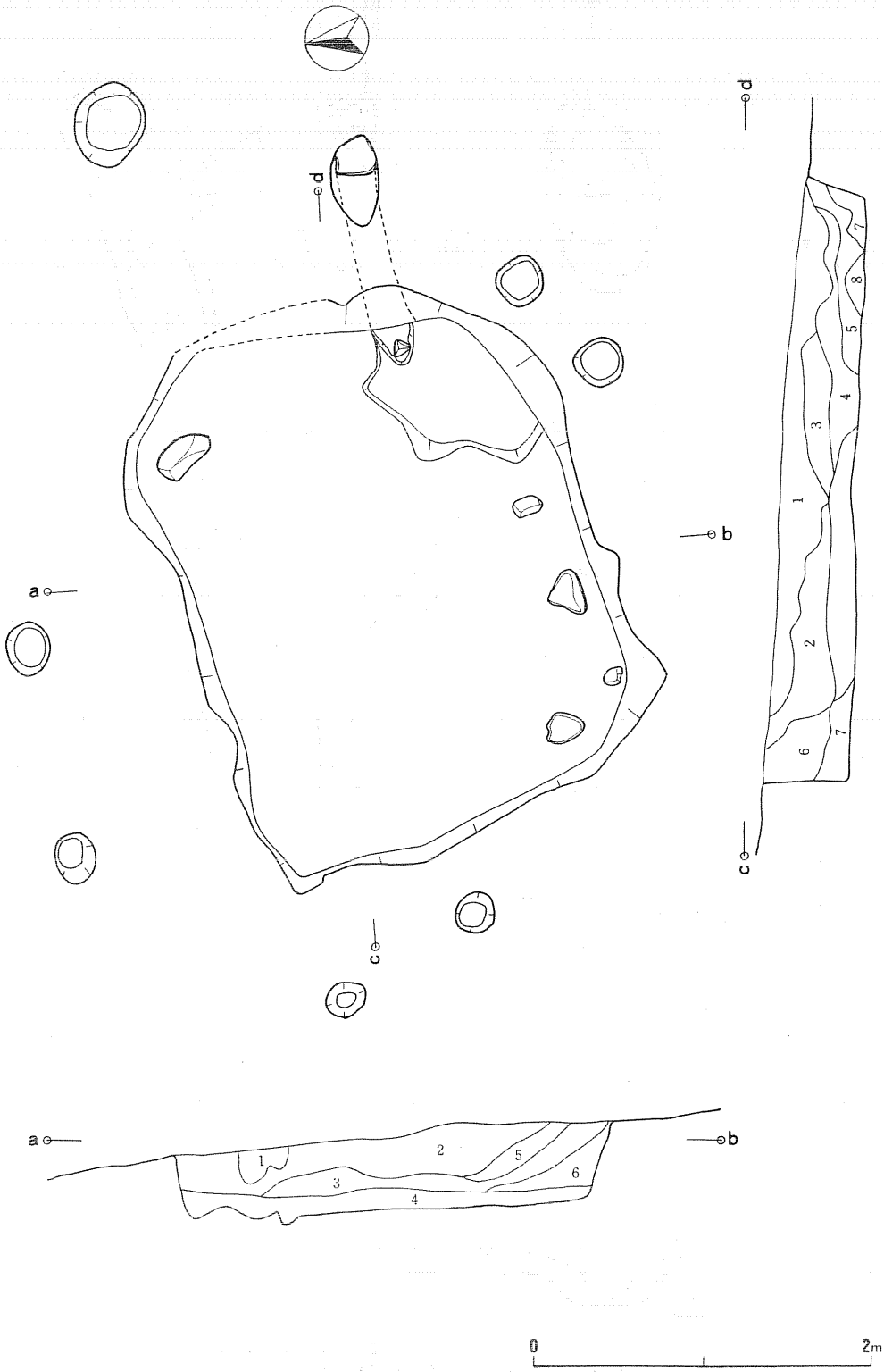
挿図番号	出土地点	器形	部位	法量 (cm) 口径	体径	底径	器高	調整（地文） 外面	内面	成形	色調	胎土	焼成
1	第４号住居跡	甕	口縁～胴部	(14.4)	ドウ (16.6)			横位ナデ ヘラケズリ	ハケメ	積み上げ法	橙色 (５ＹＲ)	1～7mmの砂粒を含む 石英，長石も含む	良好
2	第４号住居跡	甕	口縁～胴部	(19.6)	ドウ (22.0)			横位ナデ ヘラケズリ	ナデ，一部に煤状の炭化物(?)付着	積み上げ法	橙色 (7.5ＹＲ)	0.5～6mmの砂粒を含む，石英を含む	良好
3	第４号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	橙色 (7.5ＹＲ)	２～６mm位の砂粒を含む	良好
4	第４号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 斜位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	灰白色 (10ＹＲ)	精選，１～４mmの石英の砂粒	良好



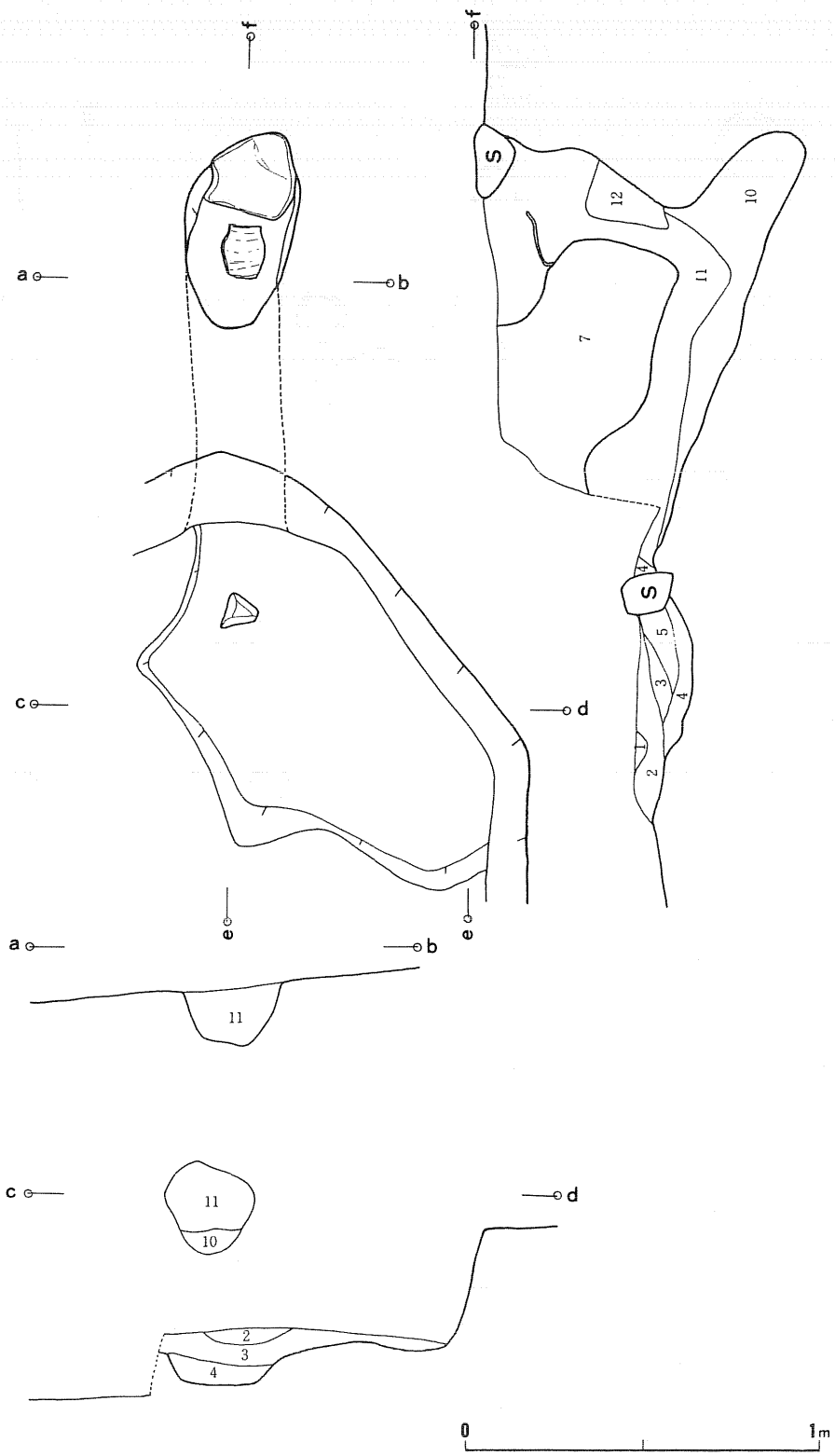
配置図６

第13表　第５号住居跡観察表

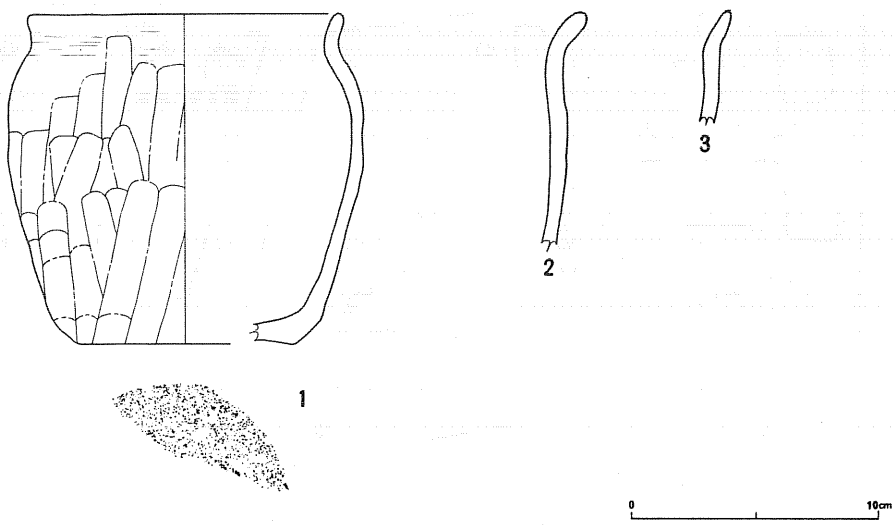
第５号住居跡		挿　図	24，25，26	図　版	9，33
検　出　区	3－H，4－H				
法量		東　　壁	西　　壁	南　　壁	北　　壁
	壁　長	264	282	336	342
	壁　高	39～52	35～48	44～51	36～39
	周溝幅	——	——	——	——
	周溝深	——	——	——	——
	面　積	8.08			
主軸方位	N－94°－W		形　態	不整方形	
覆　土	1．10YR3/3 黒褐色 粘性小 孔隙大 褐色土粒子40% ロームブロック10%植物根混入す。 2．10YR2/1 黒色 粘性中 孔隙大 褐色土粒子30% ロームブロック10%植物根混入す。 3．10YR3/3 黒褐色 粘性大 孔隙小 ロームブロック40%植物根混入す 炭化物１% 4．10YR3/3 黒褐色 粘性大 孔隙小 褐色土粒子10% ロームブロック40% 炭化物１%植物根混入す。 5．10YR2/1 黒色 粘性大 孔隙小 褐色土粒子10% ロームブロック30% 6．10YR4/6 褐色 粘性大 孔隙なし 7．10YR5/4 黄褐色 粘性大 孔隙なし 粘土である。 8．10YR4/4 褐色 炭化物５% ロームブロック10% 焼土２%混入 粘性大 孔隙ややや小 浮石１%混入				
壁	傾斜角92°～109.5°を計る。				
床	床面より北壁東寄に１個，南壁西寄に４個及びカマド燃焼部分に１個の礫が検出されている。				
ピット	P_1 24×21×12cm 西壁北寄外に位置する P_2 23×24×21cm 西壁中央外に位置する P_3 30×30×15cm 南壁東寄外に位置する P_4 28×30×14.5cm カマド煙道部南側に位置する P_5 42×50×24cm カマド，煙出部北側に位置する P_6 27×33×13cm 北壁，中央外に位置する P_7 25×30×17cm 北壁，西寄外に位置する 住居跡内にpitの検出はできなかった。				
カマド	位　置	東壁やや南寄			
	覆　土	1．7.5YR5/6 明褐色 粘性大 孔隙なし 粘土である 2．7.5YR4/4 褐色 粘性やや大 孔隙小 パミス約10%混入 3．10YR4/6 褐色 粘性大 孔隙なし パミス約３%混入 焼土約10% 4．5YR5/8 明黄褐色 粘性大 孔隙なし 焼土である 5．10YR4/4 褐色 粘性大 孔隙なし 粘土である 6．10YR3/4 暗褐色 粘性中 孔隙ややや大 炭化物を約50%混入 7．10YR5/4 にぶい黄褐色 粘性ややや大 孔隙小 ロームブロック約10%混入 8．7.5YR5/6 橙色 粘性大 孔隙なし 粘土層である 9．10YR4/3 灰黄褐色 粘性大 孔隙小 パミス約３%混入 10．10YR1.7/1 黒色 粘性小 孔隙大 炭化物を約80%以上混入 11．10YR3/4 暗褐色 粘性小 孔隙大 炭化物を50%以上混入 12．10YR5/6 黄褐色 粘性小 孔隙大 炭化物30%混入 径５mm位の黄褐色土塊約30%混入				
		遺存状態が悪く，煙道部及び袖部の確認がむずかしい。煙道部断面は円形であったと思われる。煙出部中央部分においては土器片が検出され，また，煙出部東寄には煙出部をおおうように礫（24×25cm）が検出されている。			



第24図　第５号住居跡



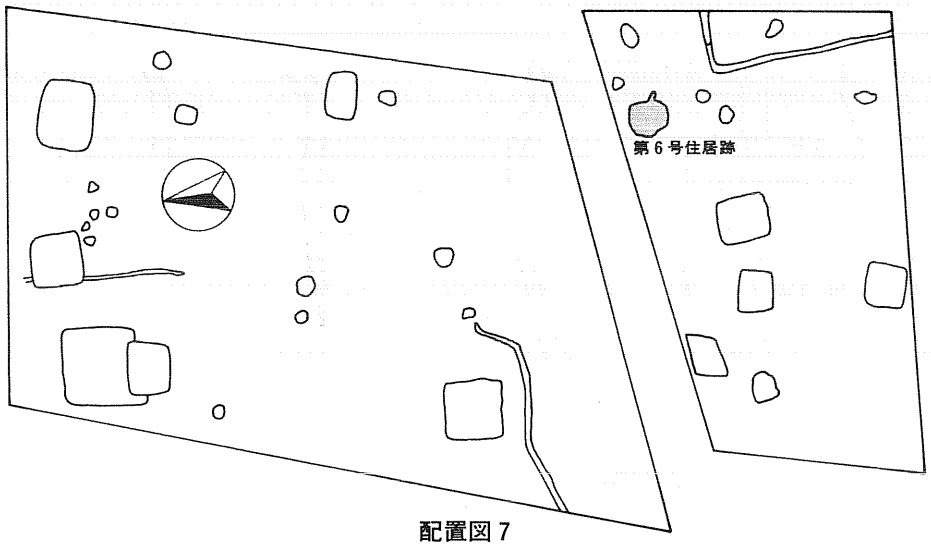
第25図　第５号住居跡カマド



第26図　第５号住居跡出土遺物

第14表　第５号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量（cm）				調整（地文）		成形	色調	胎土	焼成
				口径	体径	底径	器高	外面	内面				
1	第５号住居跡	小形の甕	口縁～底部 底部一部欠損	(12.7)		(8.7)	13.2	横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ，内面に煤状の炭化物が斑点状に付着	積み上げ法	橙色 （５ＹＲ）	3～5mmの砂粒を微かに含む	良好
2	第５号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙 （7.5ＹＲ）	２～５mmの砂粒を含む	良好
3	第５号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 縦位ナデ	横位ナデ，内面に煤状の炭化物付着	積み上げ法	にぶい橙色 （7.5ＹＲ）	砂粒を含む	良好



配置図7

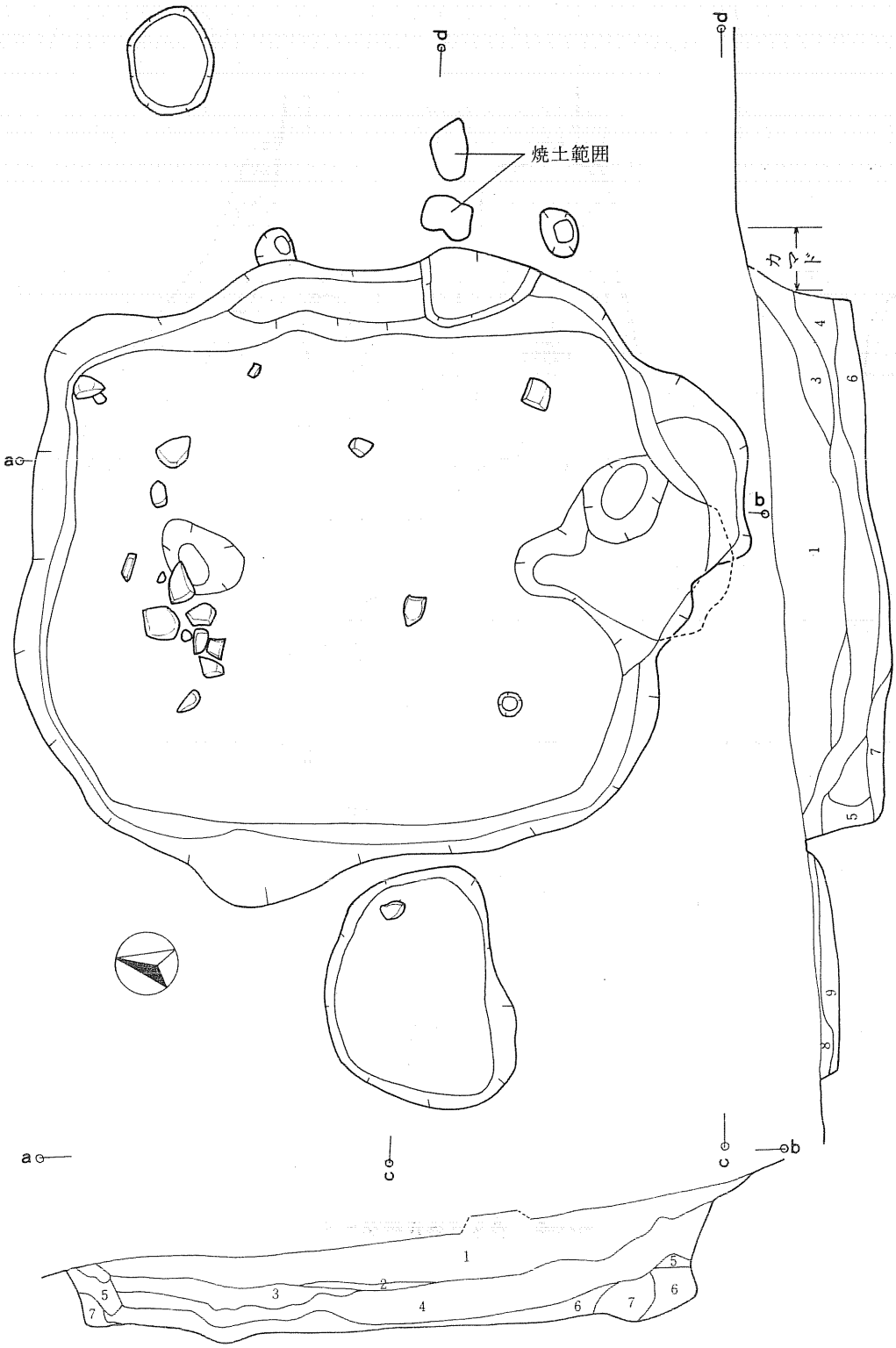
第15表　第6号住居跡観察表

第6号住居跡	挿図	27, 28, 29	図版	10, 33
検出区	7－B，7－C			

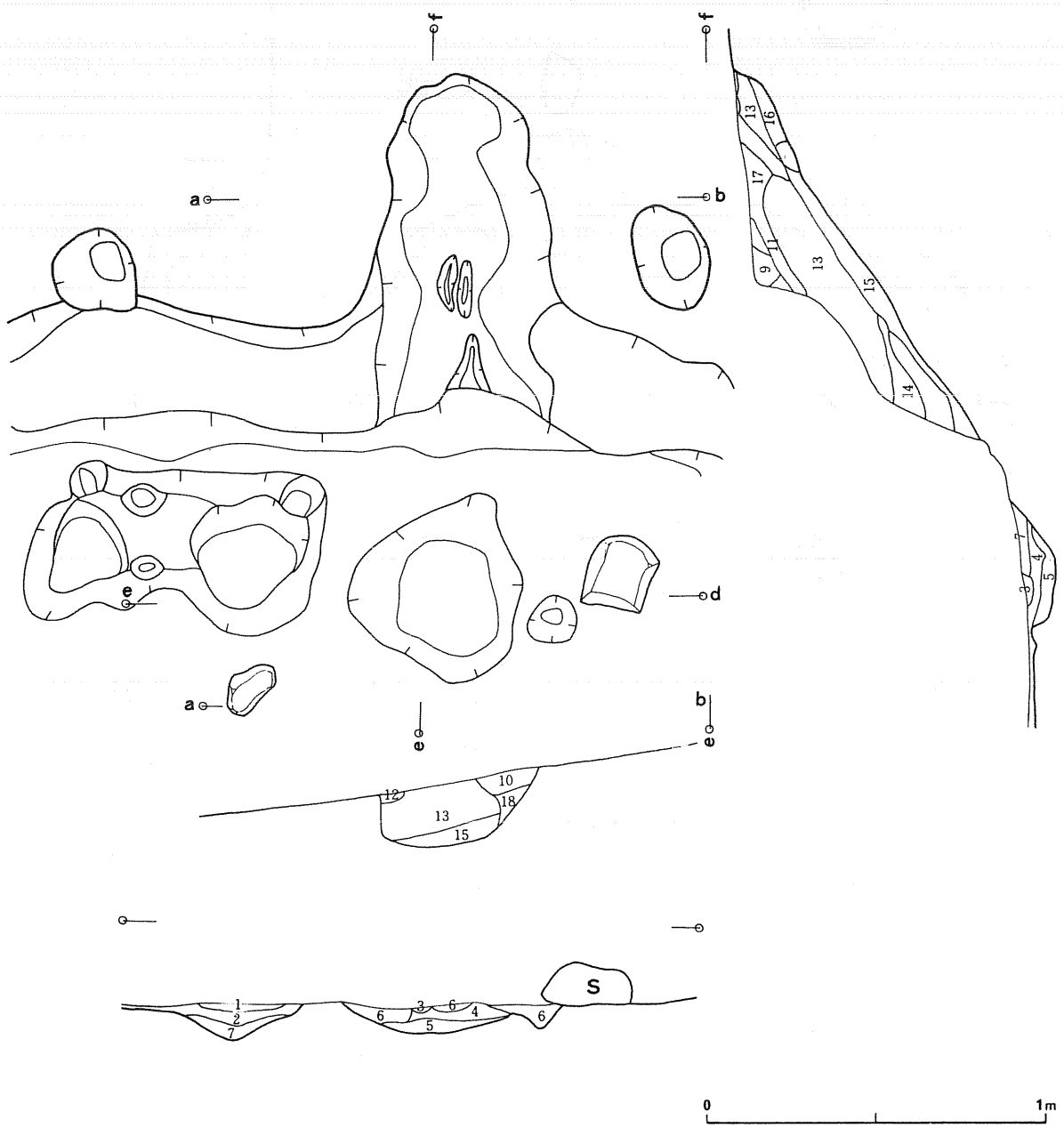
法量		東壁	西壁	南壁	北壁
	壁長	340	370	350	336
	壁高	40～83	32～49	67.5～72	17～25.5
	周溝深	——	——	——	——
	周溝深	——	——	——	——
	面積	12.08			

主軸方位	N－107°－W	形態	不整方形

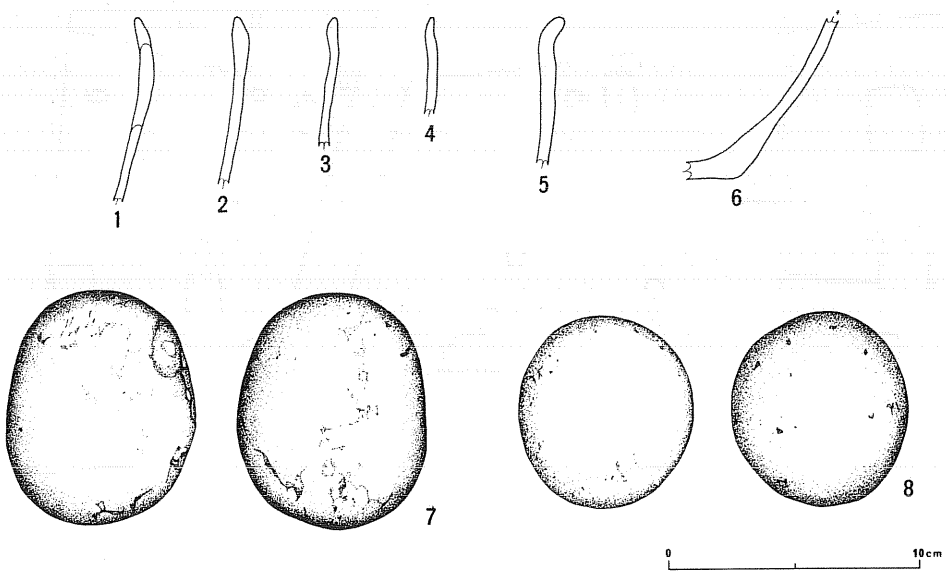
覆土	1．10YR3/2 黒褐色 粘性小 孔隙大 径1～5㎜程のパミス5～7％ 黄褐色土粒2～3％ 2．10YR3/1 黒色 粒性小 孔隙小 パミス1～2％ 3．10YR3/3 黒褐色 粘性やや有 孔隙やや有 黄褐色土粒10～15％ 炭化物1～2％ 4．10YR3/2 黒褐色 粘性やや有 孔隙小 黄褐色土ブロック25～30％ 5．10YR3/3 黒褐色 粘性小 孔隙小 キメ細かく均質 6．10YR3/2 黒褐色 粘性大 孔隙小 黄褐色土粒7～10％ 7．10YR4/4 褐色 粘性大 孔隙小 8．10YR3/2 黒褐色 粘性小 孔隙大 9．10YR4/4 褐色 粘性大 孔隙小
壁	傾斜角102°～112°を計る，あまり遺存状態のよい壁とはいえない。
床	北壁中央寄りのpitそばに5～30cm程の礫がかたまるようにして検出されている。
周溝	検出されず
ピット	P_1 50×60×19cm 東壁北側(外)に位置する P_2 25×20×485cm 東壁中央やや北寄り(外)に付設している P_3 23×32×43cm 東壁南側(外)に位置する P_4 48×52×10cm カマド 左袖東側に位置する P_5 48×53×15.5cm 北壁中央より約60cm程のところに位置する P_6 15×15×8cm カマド 右袖西側に位置し，多数の遺物を伴なう P_7 110×147×15cm 西壁中央(外)に位置する
カマド 位置	南壁やや中央
カマド 覆土	1．10YR5/6 黄褐色土 粘性弱 粒子は極めて細かい 黒色土が若干ではあるが滲くかぶさっている。 2．10YR3/1 黒色土 粘性有 しまりあり 5YR4/6 赤褐色焼土粒5％ 炭化物2％混入 3．5YR5/6 明赤褐色焼土 粘性なし 孔隙なし 小～大の固まりとなっている（固まりをくだくとキメ細かくさらさらしている）固くてもろい。 4．10YR5/2 灰黄褐色土 粘性有 孔隙なし 軟らかい 極小の明赤褐色焼土粒を多量に含んでいる。 5．5YR4/6 赤褐色焼土 粘性なし 孔隙なし（キメ細かい粒子のあつまり，さらさらしている）硬い。 6．10YR3/3 暗褐色土 粘性有 ややわらかい 5YR5/6 明赤褐色土粒15％ 炭化物5％混入 7．10YR3/3 暗褐色土 粘性有 ややわらかい 5YR4/6 赤褐色焼土のかたまり（小～中）10％混入 8．10YR5/6 黄褐色土 粘性有 孔隙なし しまりあり 5YR 赤褐色焼土（ボロボロする→モロイ）15％混入 9．10YR5/2 黒褐色土 粘性弱 軟らかい（10YR5/6褐色の）粘土のかたまり（10～15㎜）3％ 植物根混入 10．10YR3/1 黒色土 粘性有 孔隙なし 軟らかい 極小～小の小石を含む（覆土） 11．5YR3/3 暗赤褐色 粘性微弱 かたくてもろい。極小～極大までのかたまりがあつまっている（くだくとさらさらした粒子〈シルト〉となる） 12．10YR3/3 暗褐色土 粘性弱 孔隙なし 5YR3％ 暗褐色焼土のかたまり（10～15㎜）30％ 10YR4％ 褐色粘土のかたまり（10～15㎜）30％ 13．10YR5/2 黒褐色 粘性有 孔隙小 粘土（褐色 径10～20㎜）混入5％ 炭化物1％ 14．10YR3/1 黒褐色 粘性あり 粘土のかたまり（明黄褐色 極少～大）20％混入 15．10YR1/3 黒色 粘性あり 柔かく炭化物5％混入 16．10YR3/1 黒色 粘性あり 8aよりしまっている。炭化物3％混入 17．10YR3/2 黒褐色土 粘性あり しまりややあり 黄褐色粘土のかたまりが2％混入 18．10YR3/2 黒褐色土 黒褐色土をかこむように，黒褐色土のまわりに5YR4/6赤褐色焼土が認められる。粘性弱 モロイ ボロボロしている。
	燃焼部及び燃焼部東側のpitの底部には焼けたあとがみられる。また，袖部の芯材に用いられたと思われる。焼けたあとのある。27×37cmの礫と43×40cm（割れている）の礫が検出されている。また煙道部中央には煙道部の補強材を据えた跡と思われるpitが2つ検出されている。



第27図　第6号住居跡　0　2m



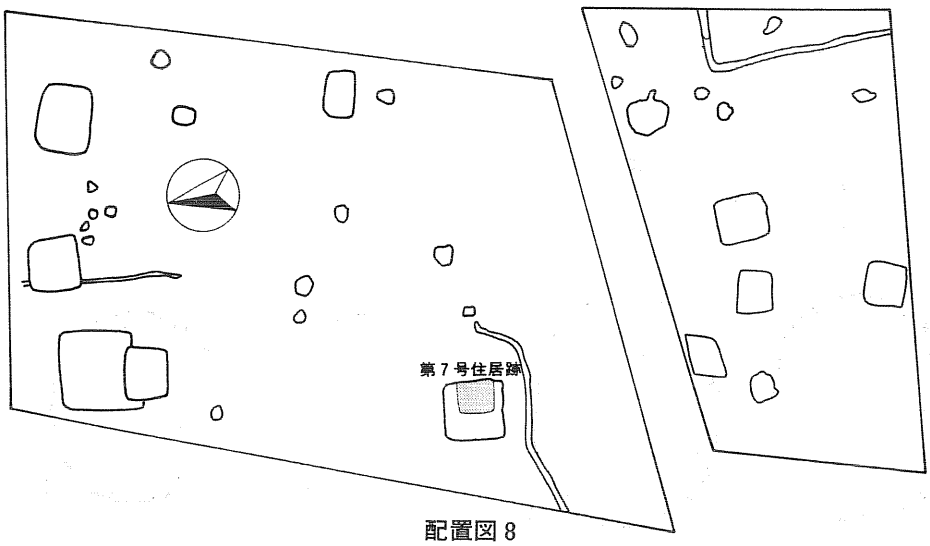
第28図　第６号住居跡カマド



第29図　第６号住居跡出土遺物

第16表　第６号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量(cm) 口径	体径	底径	器高	調整(地文) 外面	内面	成形	色調	胎土	焼成
1	第６号住居跡	甕	口縁					ナデ ヘラケズリ	ハケメ	積み上げ法	(外)にぶい橙色 (内)灰色（7.5Y）	１～４mmの砂粒を含む	良好
2	第６号住居跡	甕	口縁					ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色 （５ＹＲ）～褐色	砂粒を微かに含む	良好
3	第６号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ ナデ	積み上げ法	にぶい橙色 外面一部，緑灰色	砂粒を微かに含む 石英を含む	良好
4	第６号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色 （５ＹＲ）	砂粒を微かに含む 石英を含む	良好
5	第６号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい褐色 （7.5ＹＲ）	砂粒を微かに含む	良好
6	第６号住居跡	甕	底部					ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色 （５ＹＲ）	砂粒を含む石英を含む	良好
7	第６号住居跡	磨石		径9.3×7.5×5.7cm				石質　安山岩					
8	第６号住居跡	磨石		径7.5×7.0×7.3cm				石質　安山岩					

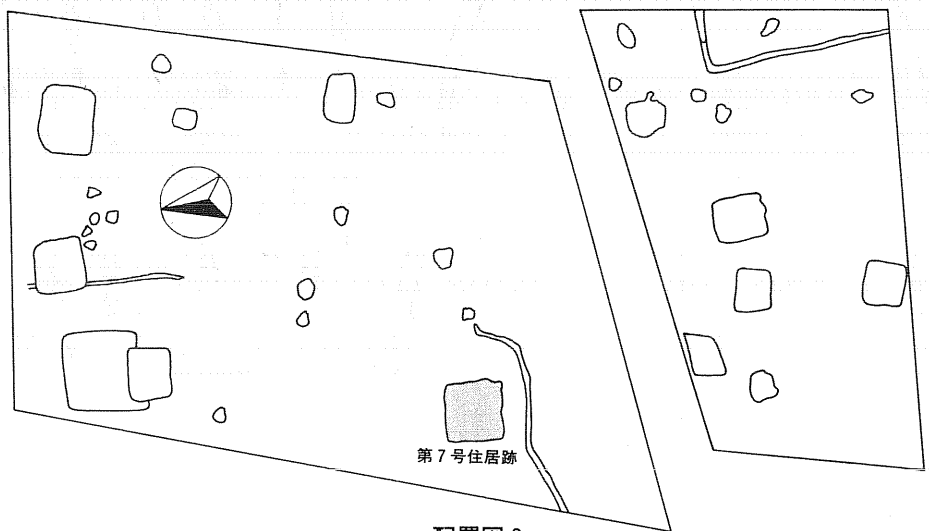


配置図８

第17表　第７号住居跡Ａ観察表

第７号住居跡Ａ	挿　図	30，31	図　版	11，34

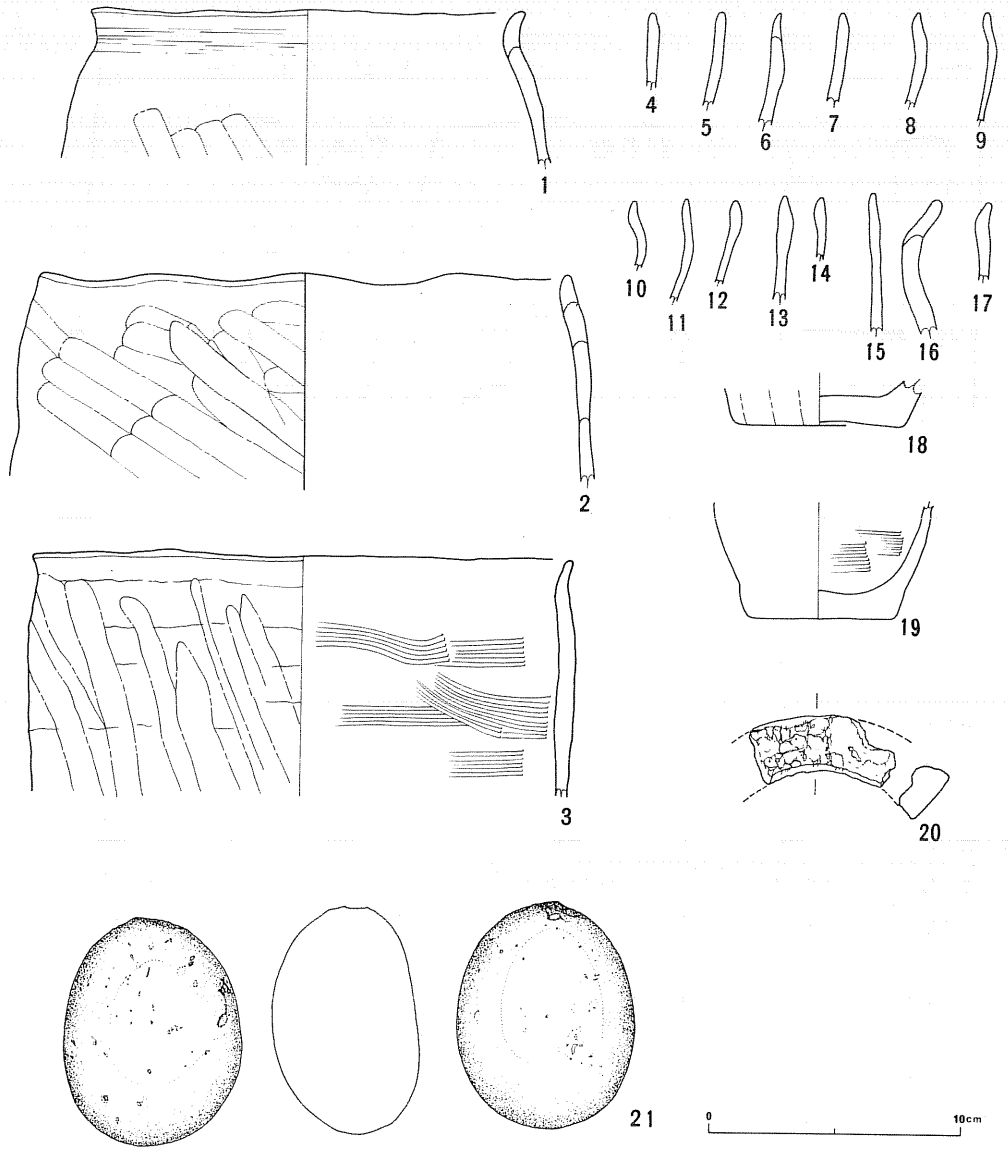
検出区		9－Ｉ，9－Ｊ，10－Ｉ，10－Ｊ			
法量		東　壁	西　壁	南　壁	北　壁
	壁長	〈444〉	〈456〉	〈443〉	〈449〉
	壁高	〈20.9～40.2〉	——	〈3.5～15.7〉	——
	周溝幅	5～13	——	5～10	——
	周溝深	3.0～18.3	——	0.9～9.0	——
	面積	〈20.24〉			
主軸方位		N－85°－E	形態	方　形	
覆土		1．10ＹＲ2/3 黒褐色 粘性大 孔隙小 粘土25～30％混入 2．10ＹＲ1.7/1 黒色 粘性やや有 孔隙大 黄褐色土粒15～20％混入 3．10ＹＲ4/6 褐色 粘性大 孔隙小 粘土で砂質粒がやや混入			
壁		北壁及び西壁がほとんど検出できなかった。 また検出された他の壁面の保存状態もきわめて悪い。			
周溝		東壁のカマド両側極く僅かと南壁の一部に検出することができた			
ピット		P_1 20×20×26.7 東壁南側隅 P_2 28×30×31.5 南壁外中央付近 P_3 15×26×7.8南壁西側 P_4 44×46×20 南壁西側 P_5 31×50×36.2 南壁西側隅 P_6 26×31×8 西壁南側 P_7 37×45×16.6 西壁中央付近 P_8 41×46×30 西壁北側隅 P_9 44×47×31 北壁東側 P_{10} 30×34×19.5 北壁東側隅 P_{11} 41×45×18.5 住居跡内北西側 P_{12} 115×168×17.8 北壁中央付近			
カマド	位置	東壁南寄り			
		カマド本体部分に芯材を立ててあったと思われるpitが検出されているが，芯材に使用されたと思われる石材は見あたらなかった。またこのカマドは拡張後もＳＩ007Ｂと共用したものと思われる。			



配置図９

第18表　第７号住居跡Ｂ観察表

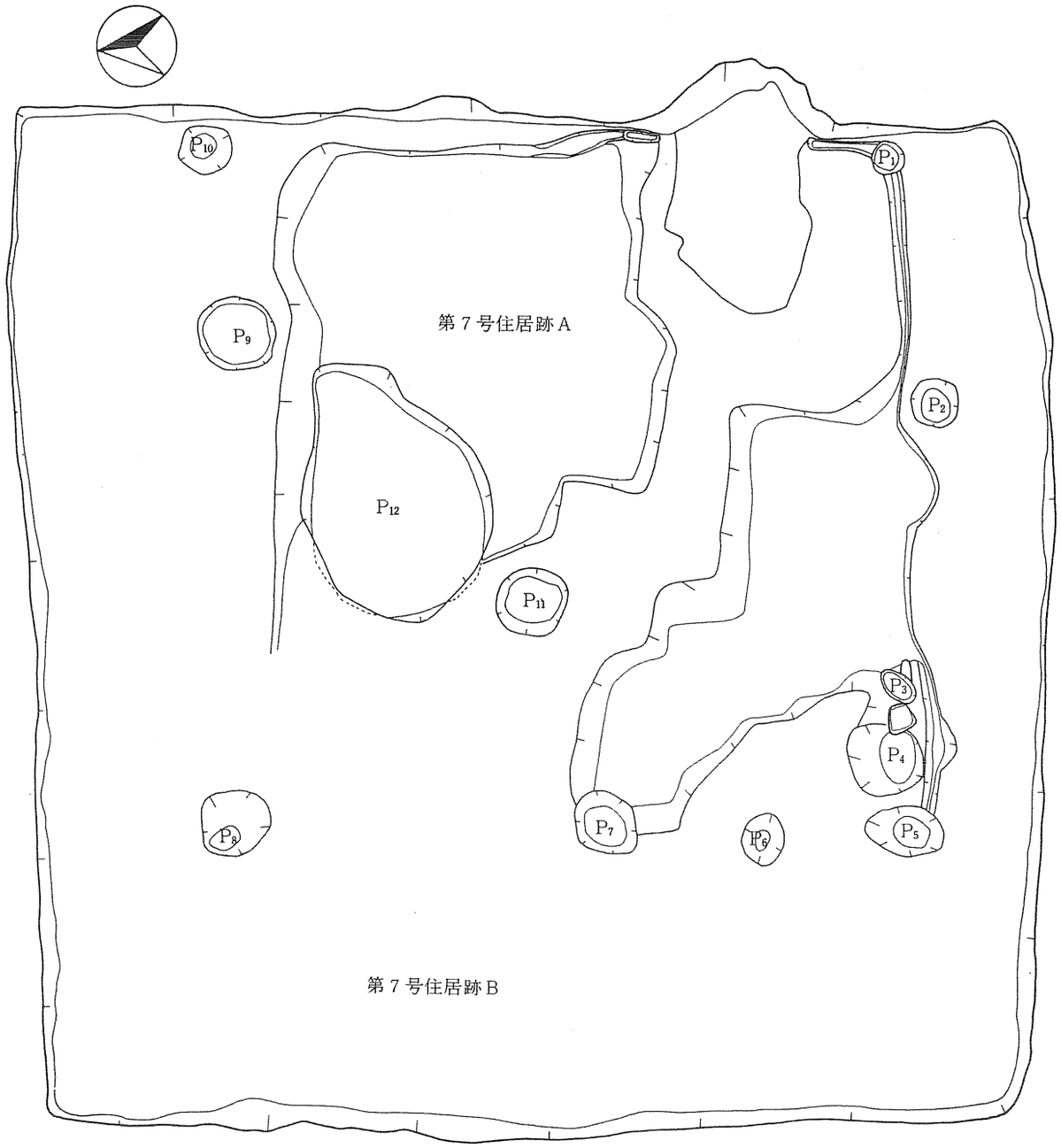
第７号住居跡Ｂ		挿　図	30，31		図　版	11，34
検　出　区		９－Ｉ，９－Ｊ，10－Ｉ，10－Ｊ				
法量		東　　壁	西　　壁	南　　壁	北　　壁	
	壁　長	702	600	618	684	
	壁　高	50.6～78.2	17.8～28.1	38.8～65.5	25.2～40	
	周溝幅	――	――	――	――	
	周溝深	――	――	――	――	
	面　積	39.6				
主軸方位		Ｎ－83.6－Ｗ		形　態	方　　形	
覆　　土		１．10ＹＲ2/3 黒褐色 孔隙大 ロームブロック20～30％混入 植物根入る ２．10ＹＲ2/2 黒褐色 孔隙小 パミス10～15％混入 ３．10ＹＲ2/1 黒色 孔隙小 ロームブロック５～７％混入 ４．10ＹＲ3/2 黒褐色 孔隙小 粘性有 黄褐色土粒40～45％混入 ５．10ＹＲ2/2 黒褐色 孔隙小 粘性有 ロームブロック２～３％混入 ６．10ＹＲ3/3 暗褐色 孔隙大 ロームブロック50～55％混入 ７．10ＹＲ2/3 黒褐色 孔隙小 ロームブロック60～65％混入				
壁		床面に対する傾斜角は98°～112°を計る				
カマド	位　置	東壁 南寄り				
		カマド本体部分に芯材を立ててあったと思われるpitが検出されているが，芯材に使用されたと思われる石材は見あたらなかった。またこのカマドはＳＩ007を拡張した後も共用したものと思われる。				



第30図　第７号住居跡出土遺物

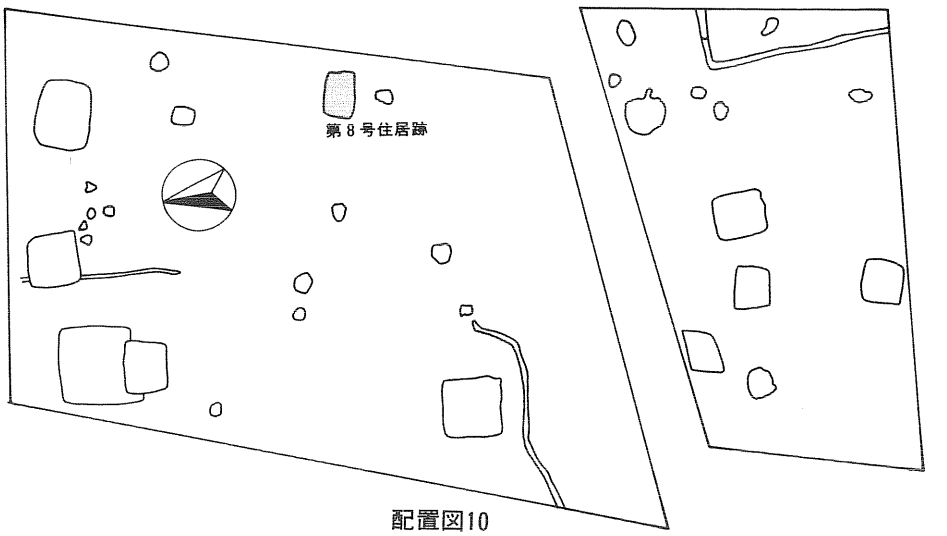
19表　第７号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量(cm) 口径	体径	底径	器高	調整(地文) 外面	内面	成形	色調	胎土	焼成
1	第７号住居跡A	鉢	口縁	(17.2)				横位ナデ，斜位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ，ハケメ，煤状の炭化物付着	積み上げ法	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
2	第７号住居跡B	鉢	口縁	(21.0)				横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい褐色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
3	〃	鉢	口縁	(21.4)	ドウ(21.7)	ケイ(21.0)		ナデ，ヘラケズリ	ハケメ	積み上げ法	にぶい褐色	3～5㎜程の砂粒を含む	良好
4	〃	鉢	口縁					横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙（7.5YR）	砂粒を微かに含む	良好
5	〃	鉢	口縁					横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
6	〃	鉢	口縁					横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい褐色（7.5YR）橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
7	〃	鉢	口縁					斜位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
8	〃	鉢	口縁					横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
9	〃	鉢	口縁					横位ナデ，縦位ナデ	斜位ナデ	積み上げ法	橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
10	〃	鉢	口縁					横位ナデ，縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（7.5YR）	3㎜位の砂粒を含む	良好
11	〃	鉢	口縁					横位ナデ，縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
12	〃	鉢	口縁					横位ナデ，縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	灰褐色(7.5YR)～にぶい橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
13	第７号住居跡A	鉢	口縁					横位ナデ，縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	灰褐色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
14	〃	鉢	口縁					横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	黒褐色(7.5YR)～にぶい褐色(7.5YR)	微かに砂粒を含む	良好
15	〃	鉢	口縁					横位ナデ，斜位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	橙色（5YR）	2㎜位の砂粒を含む	良好
16	〃	鉢	口縁					横位ナデ，縦位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	灰白色（10YR）～浅黄橙色（10YR）	砂粒を含む	良好
17	〃	鉢	口縁					横位ナデ，縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む，石英を含む	良好
18	〃	鉢	底部				6.7	ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	褐灰色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
19	第７号住居跡B	鉢	底部				5.8	斜位ナデ，横位ナデ，底部外面に黒斑あり	ハケメ	積み上げ法	にぶい橙色（7.5YR）	2～3㎜の砂粒を含む	良好
20	第７号住居跡A	?	?		（軸 径 ?）			ナシ	ナシ	?	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
21	第７号住居跡A	磨石		径9.1×7.0×5.7cm				石質　安山岩					



0 2m

第31図　第７号住居跡

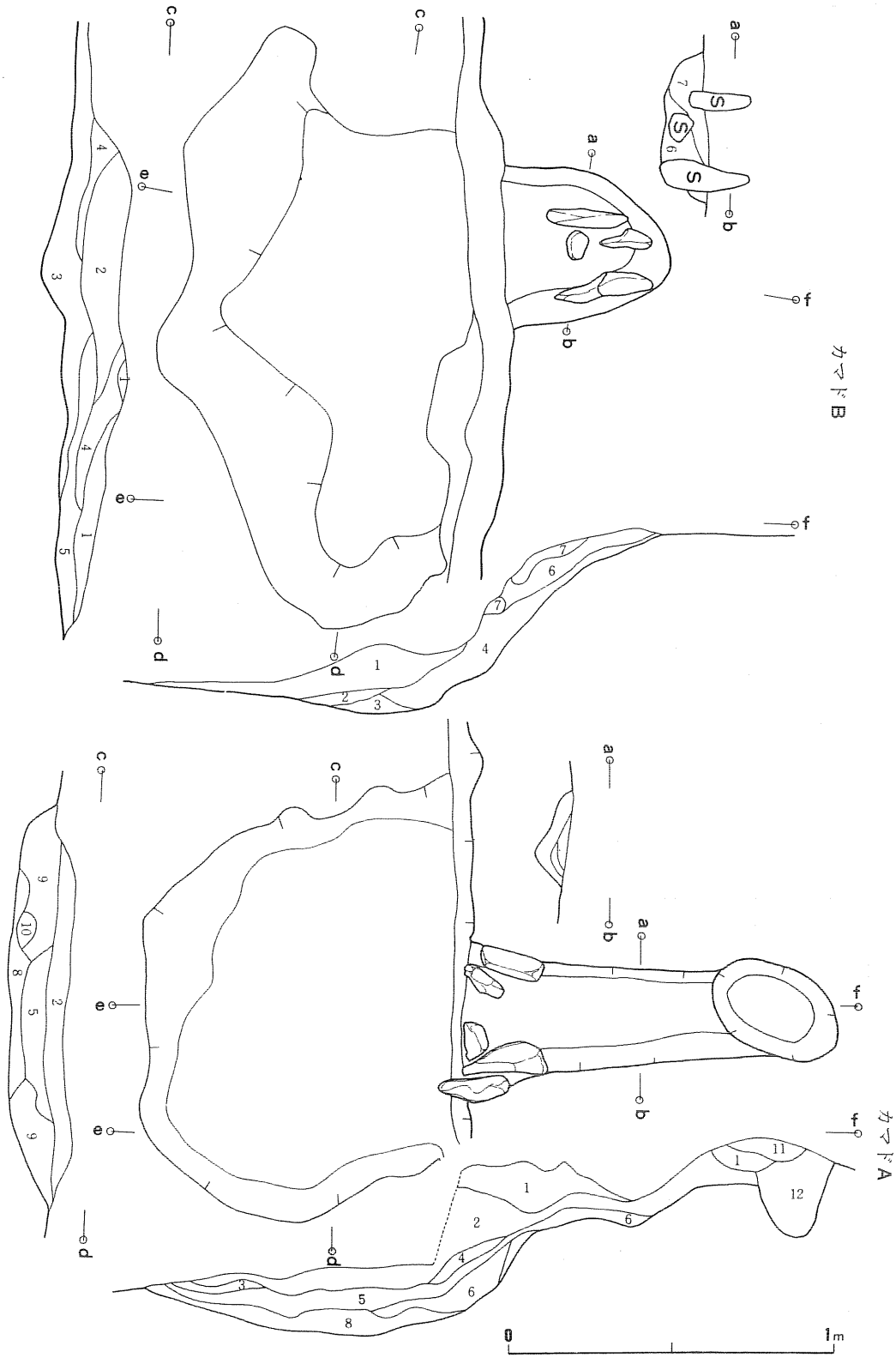


配置図10

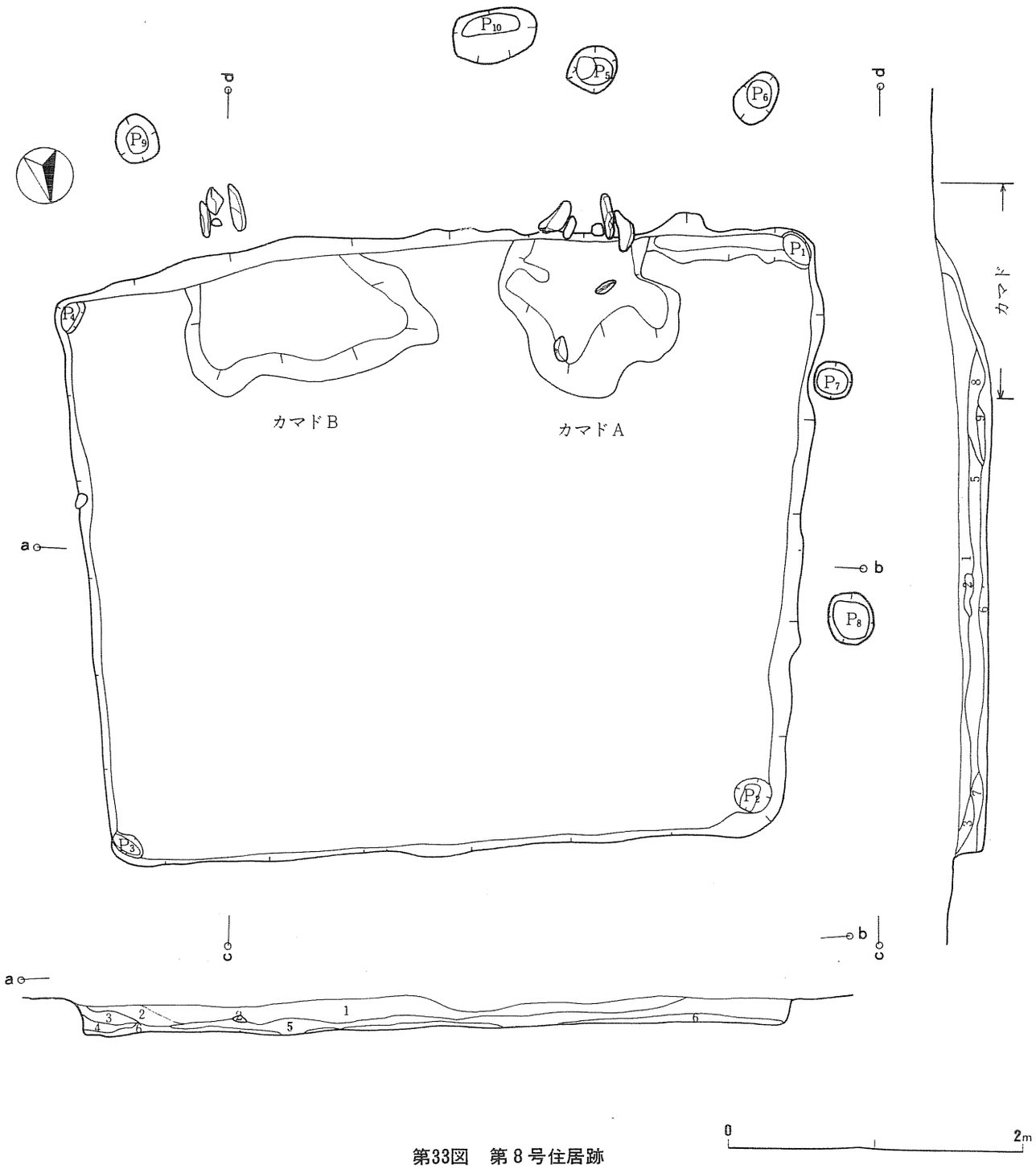
第20表　第８号住居跡観察表

第８号住居跡	挿　図	32, 33, 34, 35, 36	図　版	12, 13, 35, 36

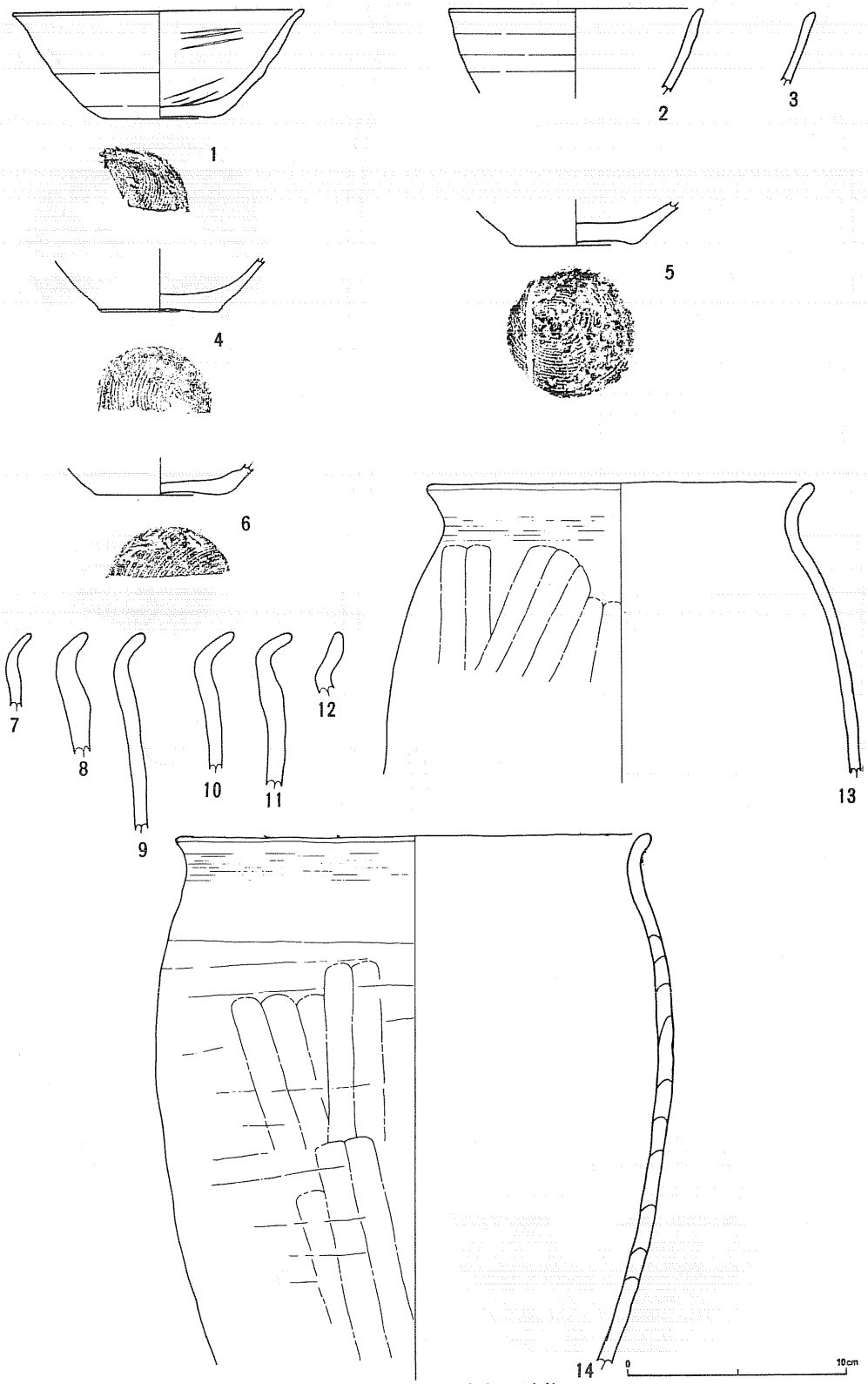
検　出　区	13—B, 13—C, 14—B, 14—C				
法量		東　壁	西　壁	南　壁	北　壁
	壁　長	420	435	531	455
	壁　高	24～36	12～19	23～45	15～23
	周溝幅	——	——	9.0～20.0	——
	周溝深	——	——	5.7～13.0	——
	面　積	20.0			
主軸方位	N—7°—E		形　態	長方形	
覆　土	1．10YR3/4 黒色 粘質なし 孔隙大 パミス10～15%含 部分的黄褐色土粒含む 2．10YR3/4 黒色 パミス下層50% 粘性弱 孔隙大 3．10YR3/3 暗褐色 やや粘質 孔隙小 まじり物なし 4．10YR3/3 黒褐色 やや粘質 孔隙小 パミス30～40% 5．10YR3/2 黒褐色 粘性弱 孔隙やや有 パミス７～10% 6．10YR3/3 黒褐色 粘性弱 孔隙大 パミス１% 7．10YR3/2 黒褐色 粘性弱 孔隙大 黄褐色土粒10～15% パミス３～５% 8．10YR3/2 黒色 粘性やや有 孔隙大 パミス20～30% 9．10YR3/4 黒色 粘性弱 孔隙大 パミス７～10%			
壁	傾斜角92.5°～99° 南側の壁だけ143.5°ありこれはセクション図の際，古いカマドの上を通したためである				
床	北西隅方向に37×39cm程の炭化物範囲が見られる				
周　溝	カマドＢ西側よりP_1までわずかではあるが周溝が見られる。その他には見られない。				
ピット	P_1 14×24×26.8 カマドＢ西側隅 P_2 12×24×16.3 住居跡北壁西側隅 P_3 13×23×11.1 住居跡北壁東側隅 P_4 13.5×20×20.9 住居跡南壁東側隅 P_5 30×36×24.8 カマドＢの煙出し孔 （主柱穴） P_6 25×37×15.6 カマドＢ煙道西側 P_7 25×25×10.8 住居跡西壁外南寄り P_8 31×35×13.7 住居跡西壁外北寄り P_9 28×32×20.8 カマドＡ煙道東側 P_{10} 35×56×18.8 カマドＢ煙道東側				
カマド	位　置	２つあり　カマドＡ　南壁東寄り　カマドＢ　南壁西寄り			
	覆　土	カマドＡ 1．7.5YR3/4 暗褐色 粘性大 孔隙小 焼土30% 炭化物10%混入 カマドＢと思われる方からよせられた焼土 2．10YR3/4 暗褐色 粘性小 孔隙大 焼土30% 炭化物７% 褐色土粒30%混入 3．10YR3/4 褐色 粘性中 孔隙小 黄褐色の砂質粒子30%混入 4．10YR3/3 黒褐色 粘性小 孔隙中 褐色土粒７% 焼土３%混入 5．10YR3/4 黒色 粘性大 孔隙大 焼土２～３%混入 6．10YR3/4 黒色 粘性大 孔隙中 褐色土粒３－４% 植物根混入 7．10YR4/6 褐色 粘土 混入物なし カマドＢ 1．10YR3/3 黒褐色 孔隙小 砂粒混入 植物根の攪乱やや有 2．10YR3/2 黒褐色 粘性中 孔隙大 黄褐色土粒混入 3．10YR3/4 暗褐色 粘性大 孔隙大 粘土層 4．7.5YR3/3 極暗褐色 粘性大 孔隙中 焼土層 5．7.5YR3/3 極暗褐色 粘性大 孔隙中 ４に比して熱変化弱い 6．10YR3/2 黒褐色 粘性大 孔隙中 7．7.5YR3/4 暗褐色 粘性大 孔隙大 焼土 8．10YR3/6 褐色 粘性小 孔隙小 砂質 9．10YR3/2 黒褐色 粘性大 砂粒混入 黄褐色土粒３～４%混入 10．10YR3/4 黒色 粘性大 孔隙小 ブロック 11．10YR4/4 褐色 粘性大 孔隙小 褐色土粒７% 粘性の焼土３%混入 12．10YR3/2 黒褐色 粘性小 孔隙大 ロームブロック３%混入			
	この住居跡には２つのカマドが見られる。南壁東寄りのカマドＡが古い方であり，その後南壁西寄りのカマドＢが使用されたものと思われる。双方とも煙道部分の芯材には河原石が用いられている。カマドＢの方は煙道及び煙出し孔は検出できたが，カマドＡは煙道も煙出し孔も検出できなかった。				
遺　物	カマドＡ本体部分より多数の土師器が出土している。				
備　考	カマドＡはカマドＢよりも新しい。				



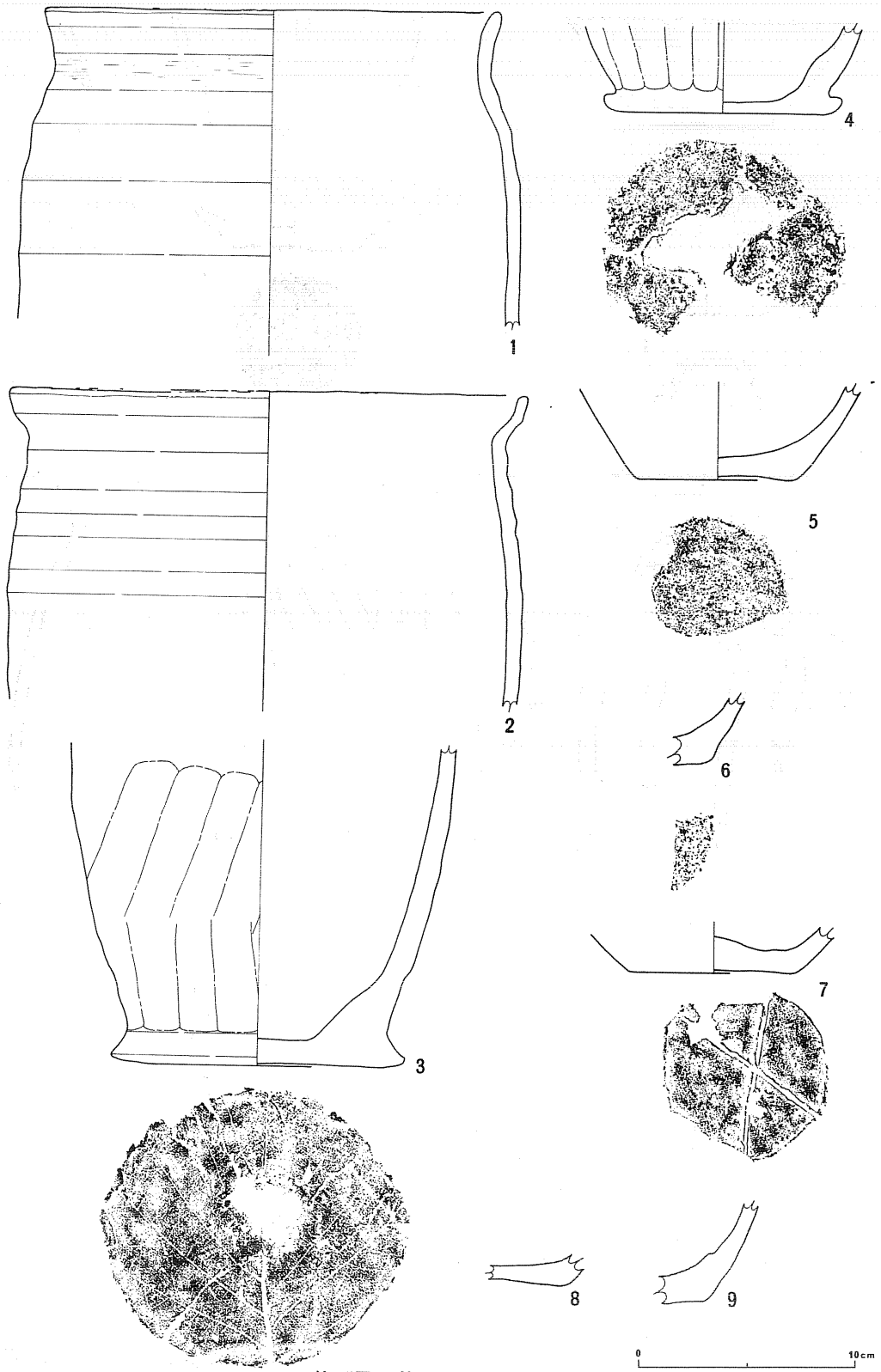
第32図　第８号住居跡カマド



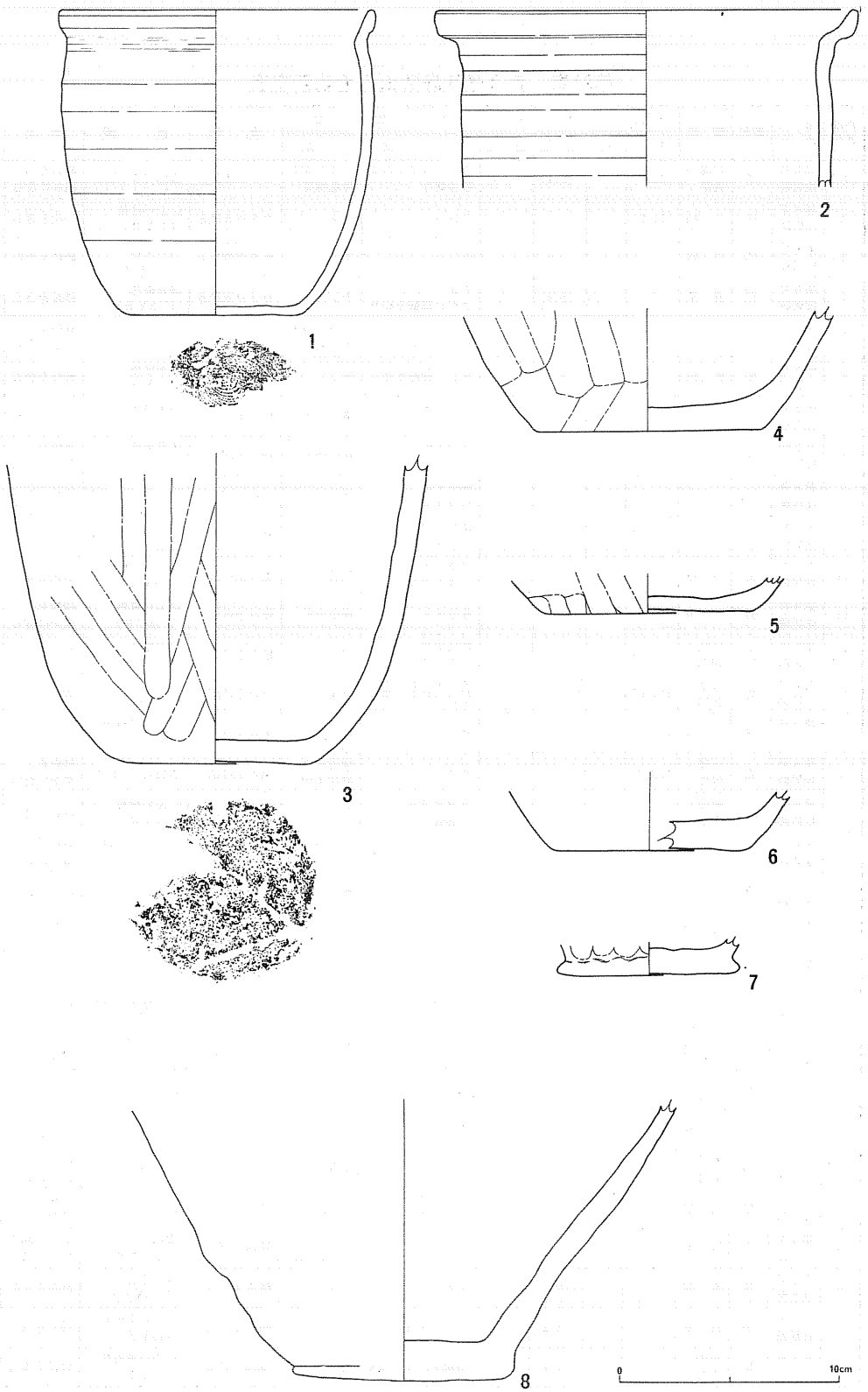
第33図　第８号住居跡



第34図　第８号住居跡出土遺物



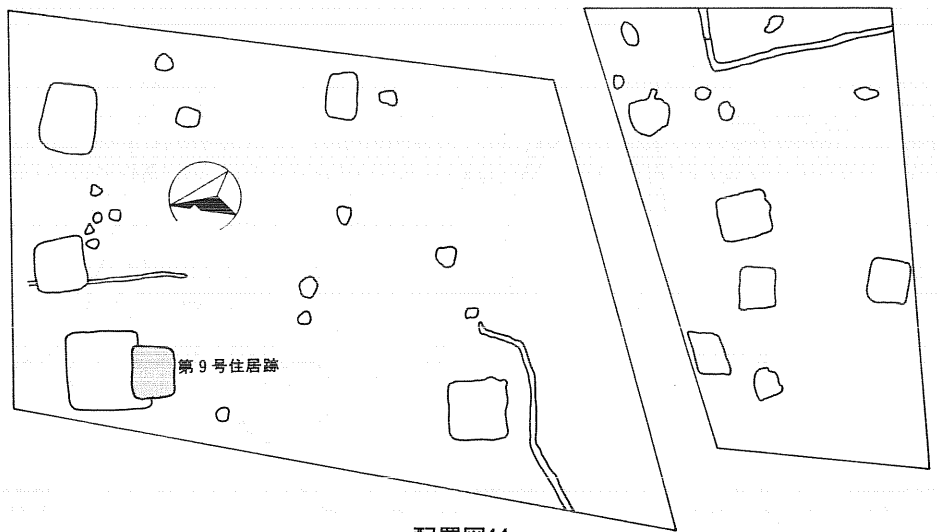
第35図　第８号住居跡出土遺物



第36図　第８号住居跡出土遺物

第21表　第８号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量(cm) 口径	体径	底径	器高	調整(地文) 外面	内面	成形	色調	胎土	焼成
34-1	第８号住居跡	坏	口縁～底部	(13.3)		(5.1)	(4.9)	ナシ，ロクロ右回転糸切り	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	橙色（５ＹＲ）	砂粒を微かに含む	良好
2	第８号住居跡	坏	口縁	(11.6)				ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	にぶい橙色（５ＹＲ）	砂粒を含む	良好
3	第８号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5ＹＲ）	砂粒を含む	良好
4	第８号住居跡	坏	底部			(5.4)		ナシ ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5ＹＲ）	砂粒を含む	良好
5	第８号住居跡	坏	底部			5.6		ナシ ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	にぶい黄橙色	砂粒を微かに含む	良好
6	第８号住居跡	坏	底部			(5.7)		ナシ，回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色（10ＹＲ）	砂粒を含む	良好
7	第８号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（7.5ＹＲ）	砂粒を含む	良好
8	第８号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	灰黄褐色（10ＹＲ）	砂粒を微かに含む	良好
9	第８号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	灰白色(10ＹＲ)	砂粒を含む	良好
10	第８号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(7.5ＹＲ)～にぶい黄橙色(10ＹＲ)	砂粒を含む	良好
11	第８号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色（10ＹＲ）	砂粒を含む	良好
12	第８号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色（7.5ＹＲ）	砂粒を微かに含む	良好
13	第８号住居跡	甕	口縁～胴部	(17.8)				横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（10ＹＲ）	砂粒を含む	良好
14	第８号住居跡	甕	口縁～胴部	(21.6)				積み上げ痕が多く認められる，横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい褐色（7.5ＹＲ）	砂粒を含む	良好
35-1	第８号住居跡	甕	口縁	(21.1)				横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色～橙色	砂粒を含む	良好
2	第８号住居跡	甕	口縁～胴部	(23.9)				ナデ	横位ナデ 縦位ナデ	積み上げ法	灰白色(10ＹＲ)	砂粒を微かに含む	良好
3	第８号住居跡	甕	胴部～底部			13.5		ヘラケズリ 木葉痕	斜位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色（５ＹＲ）	砂粒を含む	良好
4	第８号住居跡	甕	底部			11.0		ヘラケズリ，砂底	ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色（10ＹＲ）	砂粒を微かに含む	良好
5	第８号住居跡	甕	底部			(7.4)		ナデ，砂底	縦位ナデ	積み上げ法	淡赤橙色	砂粒を含む	良好
6	第８号住居跡	甕	底部					ナデ，砂底	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色	砂粒を微かに含む	良好
7	第８号住居跡	甕	底部			7.6		ナデ，ヘラケズリの×印がある	ユビナデ	積み上げ法	にぶい橙色（7.5ＹＲ）	砂粒を微かに含む	良好
8	第８号住居跡	甕	底部					ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	(外)にぶい橙色 (内)灰褐色（7.5ＹＲ）	砂粒を微かに含む	良好
9	第８号住居跡	甕	底部					ナデ，×印あり	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色（7.5ＹＲ）	砂粒を微かに含む	良好
36-1	第８号住居跡	甕	口縁～胴部	14.4		(7.8)	13.8	横位ナデ 回転糸切り	横位ナデ	ロクロ使用(?) 積み上げ法	橙色（2.5ＹＲ）	砂粒を含む	良好
2	第８号住居跡	甕	口縁	(19.2)				ナデ	ナデ	ロクロ使用 積み上げ法	浅黄橙色	２～６㎜の砂粒を含む	良好
3	第８号住居跡	甕	胴部～底部			8.4		ヘラケズリ，砂底	縦位ナデ	積み上げ法	褐灰色	砂粒を微かに含む	良好
4	第８号住居跡	甕	底部			(10.0)		ヘラケズリ スス付着	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙	砂粒を微かに含む	良好
5	第８号住居跡	甕	底部			(9.4)		ナデ，ヘラケズリ	ナデ（指頭圧痕）	積み上げ法	橙色とにぶい橙色	３～５㎜の砂粒を含む	良好
6	第８号住居跡	甕	底部			(8.4)		ナデ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（7.5ＹＲ）	砂粒を含む	良好
7	第８号住居跡	甕	底部			8.2		ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色（10ＹＲ）	砂粒を含む	良好
8	第８号住居	甕	胴部～底部			9.1		指頭圧による調整	縦位ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色（10ＹＲ）	砂粒を含む	良好



配置図11

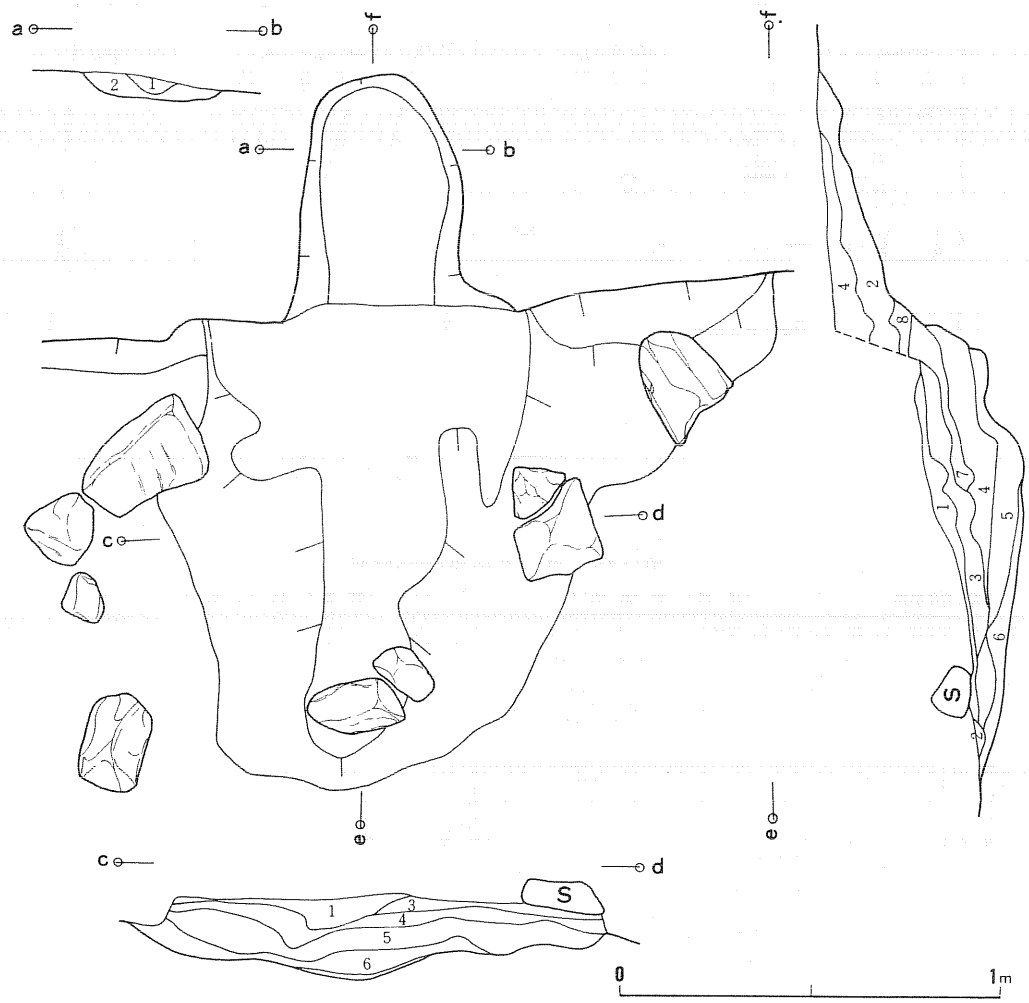
第22表　第９号住居跡観察表

第９号住居跡		挿図	37, 38, 39	図版	16, 17, 18, 37
検出区	16—Ⅰ, 16—Ｊ, 17—Ⅰ, 17—Ｊ				

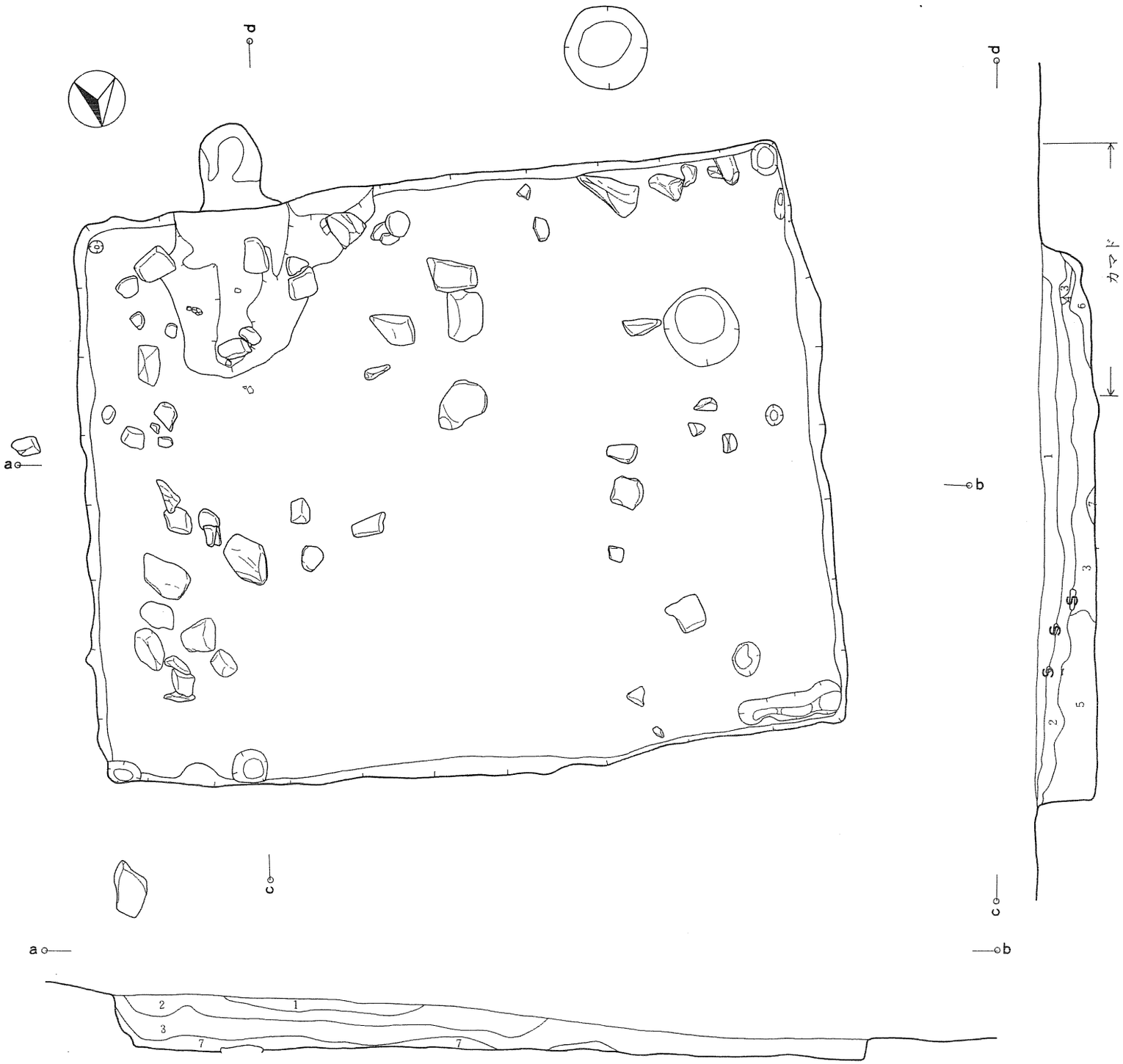
法量		東壁	西壁	南壁	北壁
	壁長	427	464	551	565
	壁高	32.4～47.6	8.3～19.2	13.6～42.3	27.9～39.6
	周溝幅	——	——	——	——
	周溝深	——	——	——	——
	面積	24.4			

主軸方位	N－2°－E	形態	長方形

覆土	1．10ＹＲ3/1 黒色 粘性少なくサラッとしている。パミス及び植物根を含む 2．10ＹＲ3/4 黒褐色 孔隙性少なくしまっている。植物根を含む 3．10ＹＲ3/2 黒褐色 粘性大でしまっている。炭化物及びロームブロックがある。 4．10ＹＲ3/4 にぶい黄褐色 ロームブロックかたくしまっている 5．10ＹＲ3/4 暗褐色 孔隙性大でロームブロックを20～25%含む 6．10ＹＲ3/1 黒色 サラッとしている 70～75%の浮石を含む 7．10ＹＲ3/3 黒褐色 粘質性がありしまっている。１～２%の浮石混入 植物根を含む
壁	傾斜角96°～112°を計る。壁材の確認はされていない
床	床面において10～30cmの礫が非常に多い。床面，西側中央に30cm×20cm程度の炭化物の範囲が確認されている
周溝	住居跡西壁南側隅から東に向かってわずかではあるが検出されている
ピット	P_1 25×17×20cm 北壁東側隅に位置する 主柱穴 P_2 25×25×16cm 北壁東側寄りに位置する P_3 15×25×14cm 北壁西側隅に位置する P_4 20×23×26cm 南壁西側隅に位置する P_5 10×10×23.5cm 南壁東側隅に位置する （P_3～P_5：主柱穴） P_6 56×58×40cm 西壁南寄り，壁より40cm程のところに位置する P_7 62×62×15cm 北壁西寄り，壁より40cm程のところに位置する P_8 61×61×30cm 南壁西寄り外側に位置する
カマド 位置	南壁東寄り
カマド 覆土	1．10ＹＲ3/1 黒褐色 焼土及び炭化物が点々と混じっている粘質性あり 2．10ＹＲ4/6 褐色 ロームブロック 3．10ＹＲ4/6 褐色 粘質性大で均質 焼土が混じっている 4．10ＹＲ3/2 黒褐色 粘質性大で均質 5．10ＹＲ4/4 褐色 孔隙性あり 焼土及びロームが15～20%含まれる 6．10ＹＲ5/6 黄褐色 サラッとした感があるが硬くしまっている 7．7.5ＹＲ3/4 暗褐色 粘質性に富みやわらかい 焼土を20～25%含む 8．10ＹＲ3/2 黒褐色 孔隙性あり ボソボソしている
カマド	燃焼部において炭化物が検出されている。また，芯材・補強材であったと思われる10cm～35cm程の礫が数個検出されている

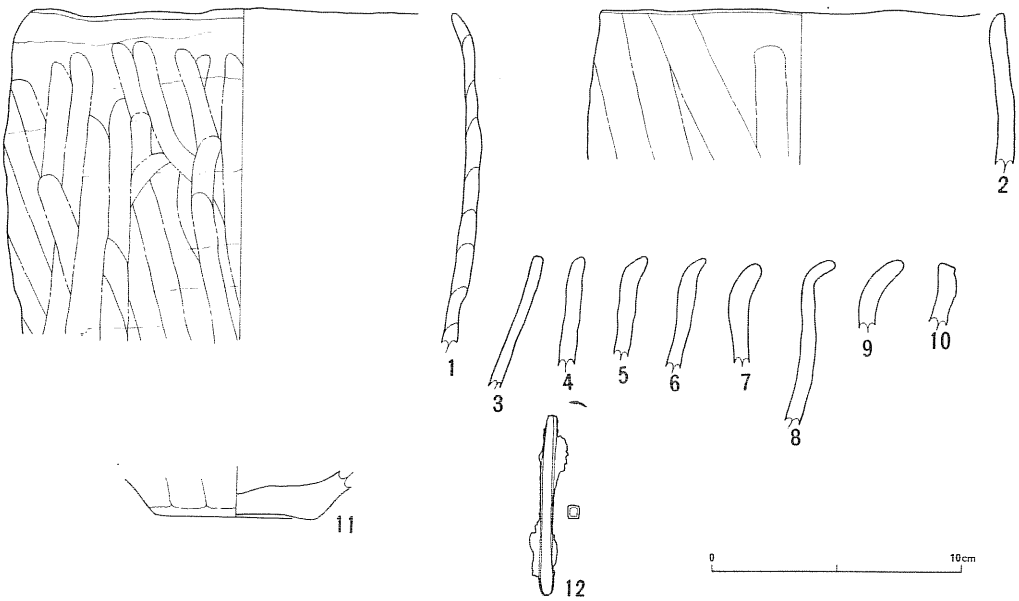


第37図　第９号住居跡カマド



第38図　第９号住居跡

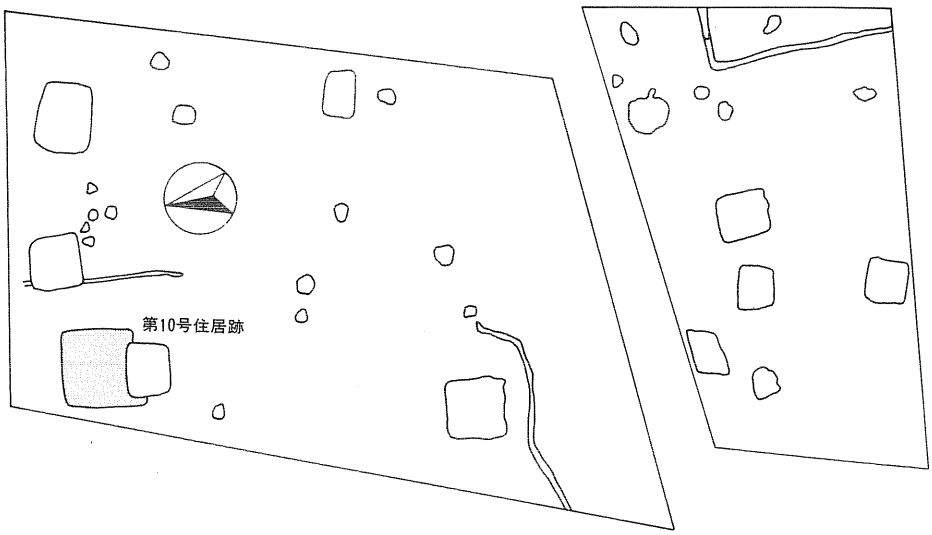
0　2m



第39図　第９号住居跡出土遺物

第23　第９号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量（cm）				調整（地文）		成形	色調	胎土	焼成
				口径	体径	底径	器高	外面	内面				
1	第９号住居跡	甕	口縁	(17.2)				横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい褐色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
2	第９号住居跡	甕	口縁	16.2				斜位ナデ＋ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
3	第９号住居跡	甕	口縁					ヘラケズリ ナデ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色 (7.5YR)	砂粒を微かに含む	良好
4	第９号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄色 (2.5Y)	砂粒を含む	良好
5	第９号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	灰褐色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
6	第９号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 斜位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	明褐灰色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
7	第９号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	明褐灰色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
8	第９号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	明褐灰色	砂粒を含む	良好
9	第９号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
10	第９号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法 ロクロ使用	浅黄橙色 (7.5YR)	砂粒を僅かに含む	良好
11	第９号住居跡	甕	底部					ヘラケズリ	ハケメ	積み上げ法	褐灰色 (7.5YR)	砂粒を僅かに含む	良好
12	第９号住居跡	鉄　釘？		残存長7.2cm　径0.35×0.3cm				断面は中空					



配置図12

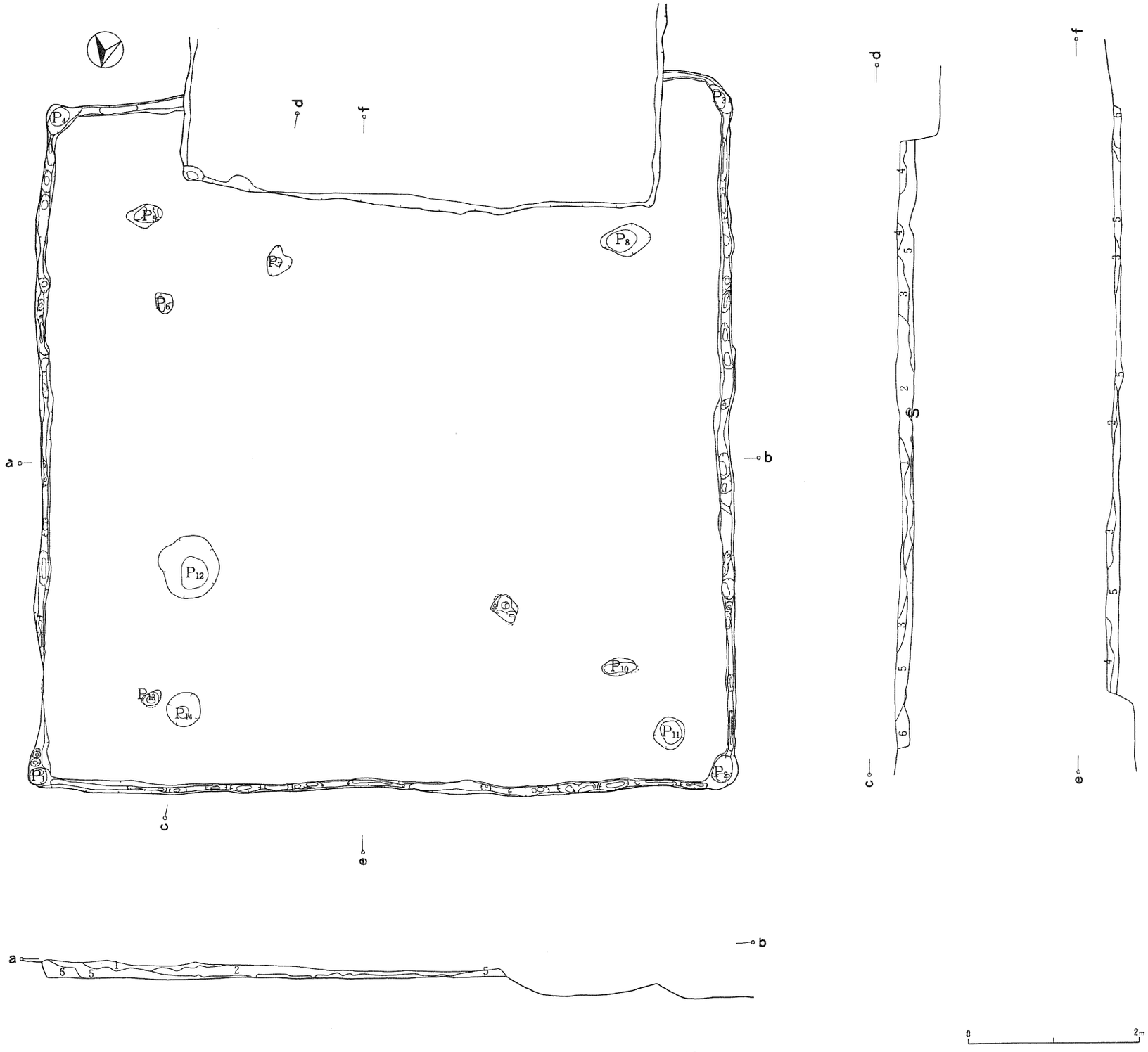
第24表　第10号住居跡観察表

第10号住居跡	挿　図	40, 41	図　版	16, 17, 37

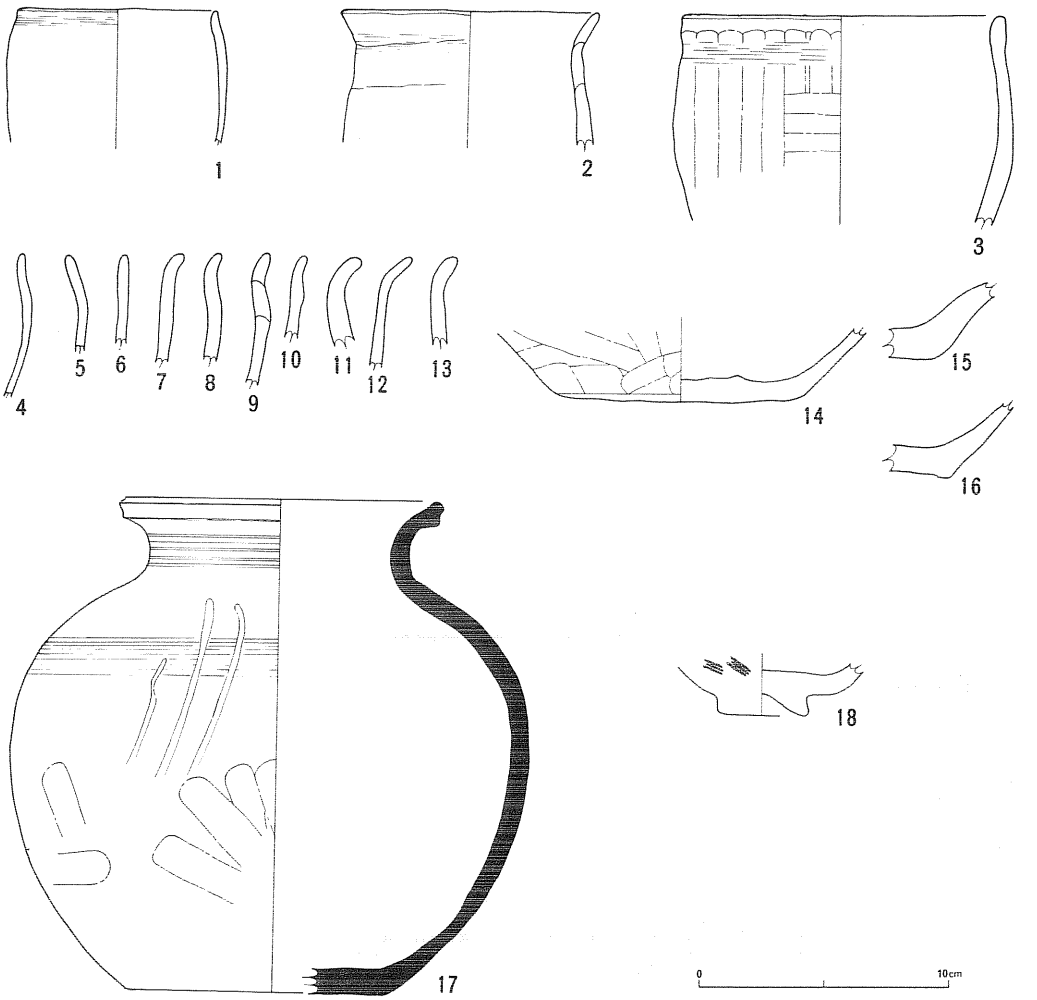
検出区	17—H, 17—I, 17—J, 18—H, 18—I, 18—J, 19—I			
法量	東　壁	西　壁	南　壁	北　壁
壁長	806	852	812	828
壁高	——	——	——	——
周溝幅	18	18		10
周溝深	12.5	16		13.8
面積	64.16			

主軸方位	N—2°5′—W	形態	方形

覆土	1．10YR3/2 黒褐色 粘性弱 孔隙大 植物根による攪乱多い。 2．10YR4/4 褐色 粘性弱 孔隙比較的少ない 植物根による攪乱多く，黄褐色土ブロックが混入する。 3．10YR3/2 黒褐色 粘性弱 孔隙比較的少ない 粘土粒及び炭化物粒若干含む 4．10YR2/1 黒色 粘性弱 孔隙大 5．10YR3/4 暗褐色 粘性有 孔隙比較的少ない 黄褐色土粒若干量混入する。 6．10YR3/3 黒褐色 粘性弱 孔隙大 非常にボソボソしている黄褐色土粒が多量に混入する。
壁	東壁及び北壁ともに102°を計る。南壁は第9号住居跡に切られているため検出はほぼ不可能であり，また西壁はほとんど掘りこまれずに周溝が検出されているのみである。
床	床全体に焼けた跡が残っており，焼失家屋であったと思われる。
周溝	切り合っている部分を除く部分で幅10～15cm程で検出されている。また10～50cmの礫が多数検出されている。
ピット	P_1 20×19×13.5cm 北壁の西側隅 P_2 23×32×14cm 北壁の東側隅 P_3 39×18×18.5cm 南壁の東側隅 P_4 40×34×8cm 南壁の西側隅 （主柱穴） P_5 42×28×22.5cm 西南隅 P_6 20×23×16cm 南壁の西側隅 P_7 34×29×13cm 南壁やや中央より西側 P_8 58×38×35.5cm 南壁の東側隅 P_9 32×30×11.5cm 北壁のやや中央より東側 P_{10} 40×21×48cm 北壁の東側隅 P_{11} 37×38×22.5cm 北壁の東側隅 P_{12} 71×73×18cm 北壁のやや中央より西側 P_{13} 21×17×45cm 北壁の西側隅 P_{14} 40×39×14.0 北壁の西側隅
カマド 位置	南壁東側寄りにあったものと思われる
カマド	カマドは第9号住居跡によって切られているため検出は不可能であった



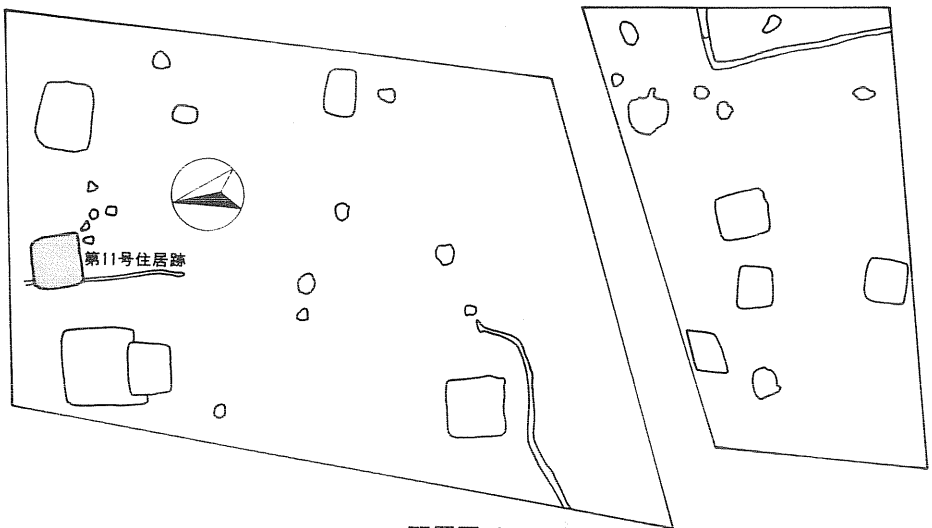
第40図　第10号住居跡



第41図　第10号住居跡出土遺物

第25表　第10号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量(cm) 口径	体径	底径	器高	調整(地文) 外面	内面	成形	色調	胎土	焼成
1	第10号住居跡	小形の甕	口縁	(8.0)				横位ナデ	横位ナデ，煤状炭化物付着	積み上げ	橙色（7.5YR）	砂粒を僅かに含む	良好
2	第10号住居跡	甕	口縁	(10.2)				横位ナデ	横位ナデ	積み上げ	灰白色（10YR）	砂粒を僅かに含む	良好
3	第10号住居跡	甕	口縁	(12.9)	ドウ(13.5)			ヘラケズリ，ナデ	横位ナデ	積み上げ	灰褐色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
4	第10号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ	橙色（2.5YR）	砂粒を含む	良好
5	第10号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	橙色（7.5YR）	砂粒を微かに含む	良好
6	第10号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色(10YR)	砂粒を微かに含む	良好
7	第10号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	褐灰色（7.5YR）	砂粒を微かに含む	良好
8	第10号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	橙色（7.5YR）	砂粒を微かに含む	良好
9	第10号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，ヘラケズリ，外面に黒斑がみられる	横位ナデ，内面に黒斑がみられる	積み上げ法	橙色（7.5YR）	砂粒を微かに含む	良好
10	第10号住居跡	甕	口縁					ナデ，ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	灰褐色（7.5YR）	砂粒を微かに含む	良好
11	第10号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（10YR）	砂粒を微かに含む	良好
12	第10号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	橙色（5YR）	砂粒を微かに含む	良好
13	第10号住居跡	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
14	第10号住居跡	甕	底部			(9.8)		ケズリ，ナデ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を微かに含む	良好
15	第10号住居跡	甕	底部					ヘラケズリ，砂底	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（10YR）	砂粒を微かに含む	良好
16	第10号住居跡	甕	底部					ケズリ，ナデ	ナデ	積み上げ法	橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
17	第10号住居跡	須恵器		(12.5)	(20.7)	(10.3)	(19.7)	ユビナデ，ヘラケズリ	ユビナデ	ロクロ使用，積み上げ法	褐灰色	精選	良好
18	第10号住居跡	台付の鉢						RL縄文	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（10YR）	砂粒を微かに含む	良好

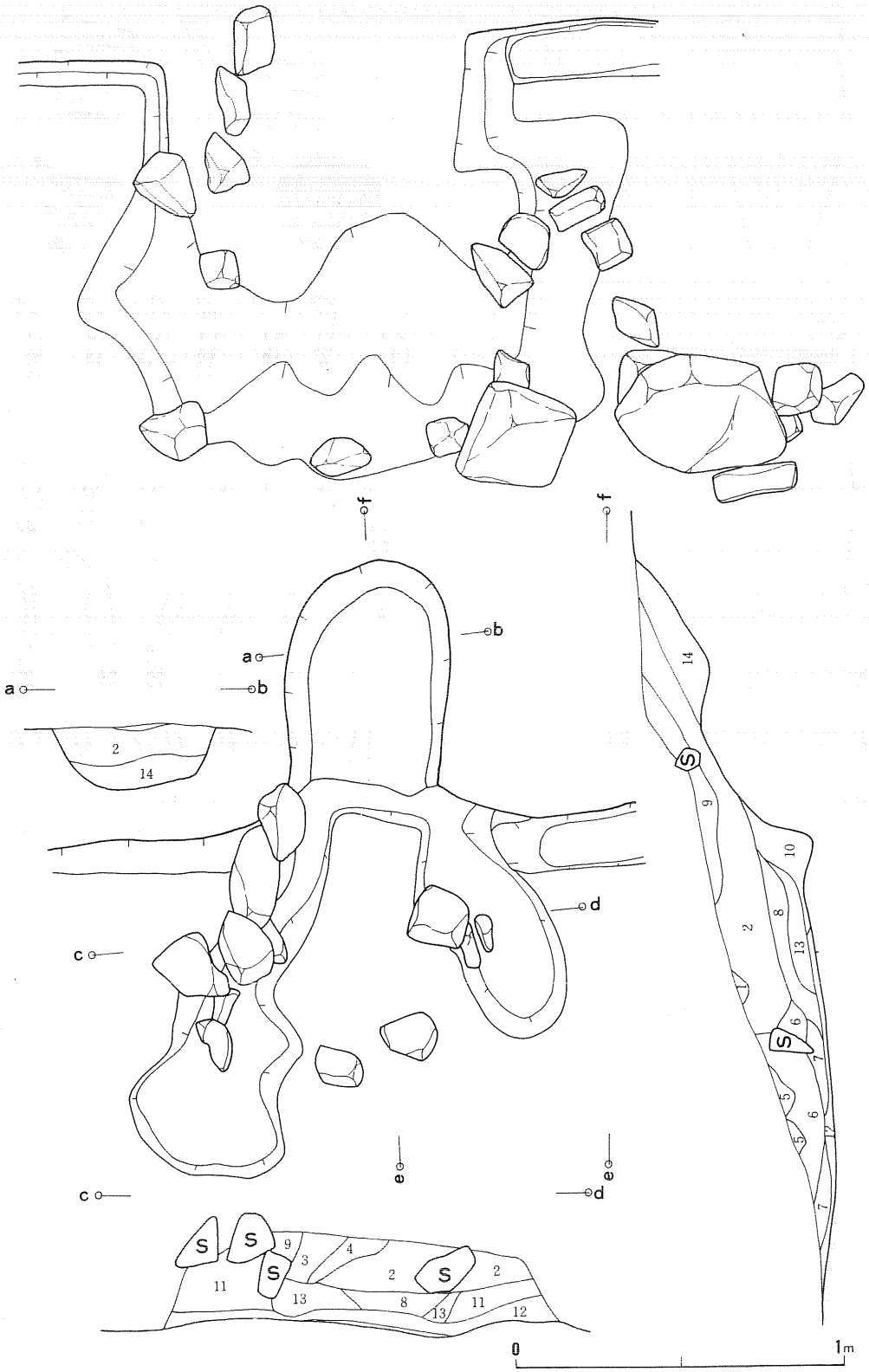


配置図13

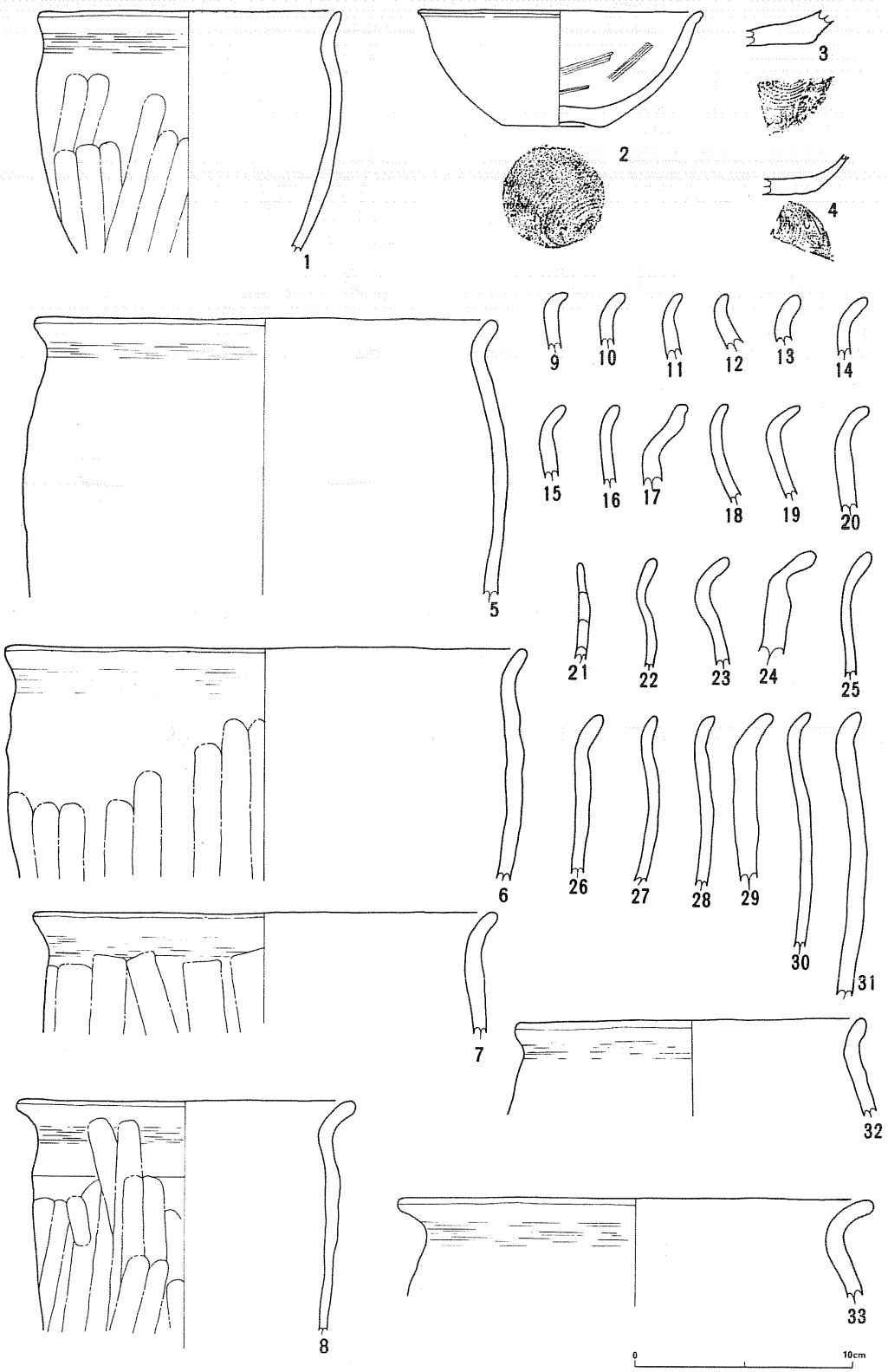
第26表　第11号住居跡観察表

第11号住居跡		挿図	42, 43, 44, 45	図版	14, 15, 16, 38, 39
検出区	18－G，18－H，19－G，19－H，20－G				
法量		東壁	西壁	南壁	北壁
	壁長	530	520	564	508
	壁高	32～48	18－36	30.5～49	19～34
	周溝幅	22	18	19	24
	周溝深	8.5	5.5	7	6
	面積	26.64			
主軸方位	N－1°－E		形態	方形	
覆土	1．10YR5/2 黒褐色 粘性弱 孔隙大 径10mm程の黄褐色土ブロック7～10% 炭化物2～3% パミス10～15%含む 2．10YR5/2 黒褐色 粘性弱 孔隙小 若干の黄褐色土粒 パミスを含む他は均質 3．10YR3/2 黒褐色 粘性弱 孔隙大 所部にパミスをブロック状もしくはstraum状に含む 黄褐色土粒3～5%含む 4．10YR5/4 黒褐色 粘性弱 孔隙小 黄褐色土 ブロック7% 炭化物3% 植物根混入す 5．10YR5/2 黒褐色 粘性弱 孔隙大 黄褐色土粒子7%～10% 6．10YR5/2 黒褐色 粘性弱 孔隙小 黄褐色土及びパミスのブロック状のものを3%～7%含む 7．10YR5/2 黒褐色 粘性弱 孔隙小 ロームブロックを40%～45%含む			
壁	傾斜角は99°～110°を計る				
床	床面においてカマド付近から中央部にかけて焼土の範囲が確認できる（その範囲は，カマド付近，中央部，中央部やや北側，南壁東側隅の4つに分けることができる）中央部やや北側の焼土範囲を囲むように数個の土器片が検出されている。 床面北側及びカマド付近に10～50cmの礫が多量に検出されている。特にカマド東側においては多量の礫が重なるようにして検出されている。				
周溝	遺存状態が非常によく南壁，西壁，北壁にそって周溝が検出されており，また東側においては壁より15～60cm程はなれた場所において検出されている。				
ピット	P_1 19×20×12.5cm 住居跡北壁東側隅に位置する P_2 23×23×12.5cm 住居跡北壁西側隅に位置する P_3 30×40×12.5cm カマド東側 南壁東側隅に位置するが このpitは焼土除去後に検出されたものである P_4 127×67×45.5cm 東壁南側隅外に位置し，住居跡に切られたように検出される P_5 115×137×48.4cm 東壁南寄外に位置し，P4に付設するように検出される				主柱穴 このpitはこの住居跡よりも古い可能性もある
カマド	位置	南壁中央やや西寄			
	覆土	1．10YR5/6 黄褐色 粘性有 パミス2%混入 2．10YR3/4 暗褐色 粘性有 焼土粒子3%混入 3．10YR3/3 暗褐色 粘性有 焼土10%混入 4．10YR3/1 黒褐色 粘性有 焼土10%混入 炭化物5%混入 黄褐色土粒子5%混入 5．5YR5/6 明赤褐色 粘性有 焼土層 6．7.5YR5/6 明褐色 粘性有 やや熱変化している 7．2.5YR4/6 赤褐色 粘性有 焼土層 8．5YR5/8 橙色 粘性有 7よりもうす赤 焼土片 9．10YR3/3 黒褐色 粘性有 焼土50%混入 炭化物5%混入 10．10YR3/4 暗褐色 粘性有 黄褐色土粒子約10%混入 11．10YR5/4 にぶい黄褐色 粘性あり 粘土層 カマドのソデの部分と思われる 12．10YR5/6 明黄褐色 粘性有 地山層 粘土層 地山第2層 13．7.5YR5/6 褐色 粘性有 焼土粒子30%混入 14．10YR3/4 褐色 粘性有 ほんのわずか熱変化をうけている 地山第1層			
	カマド付近に数多くの礫が見られるが，これはカマド本体，袖部分の芯材及び天井部の補強に用いられたものと思われる。煙道部の断面はほぼ半円であり，燃焼部から煙出部までは約1mである				

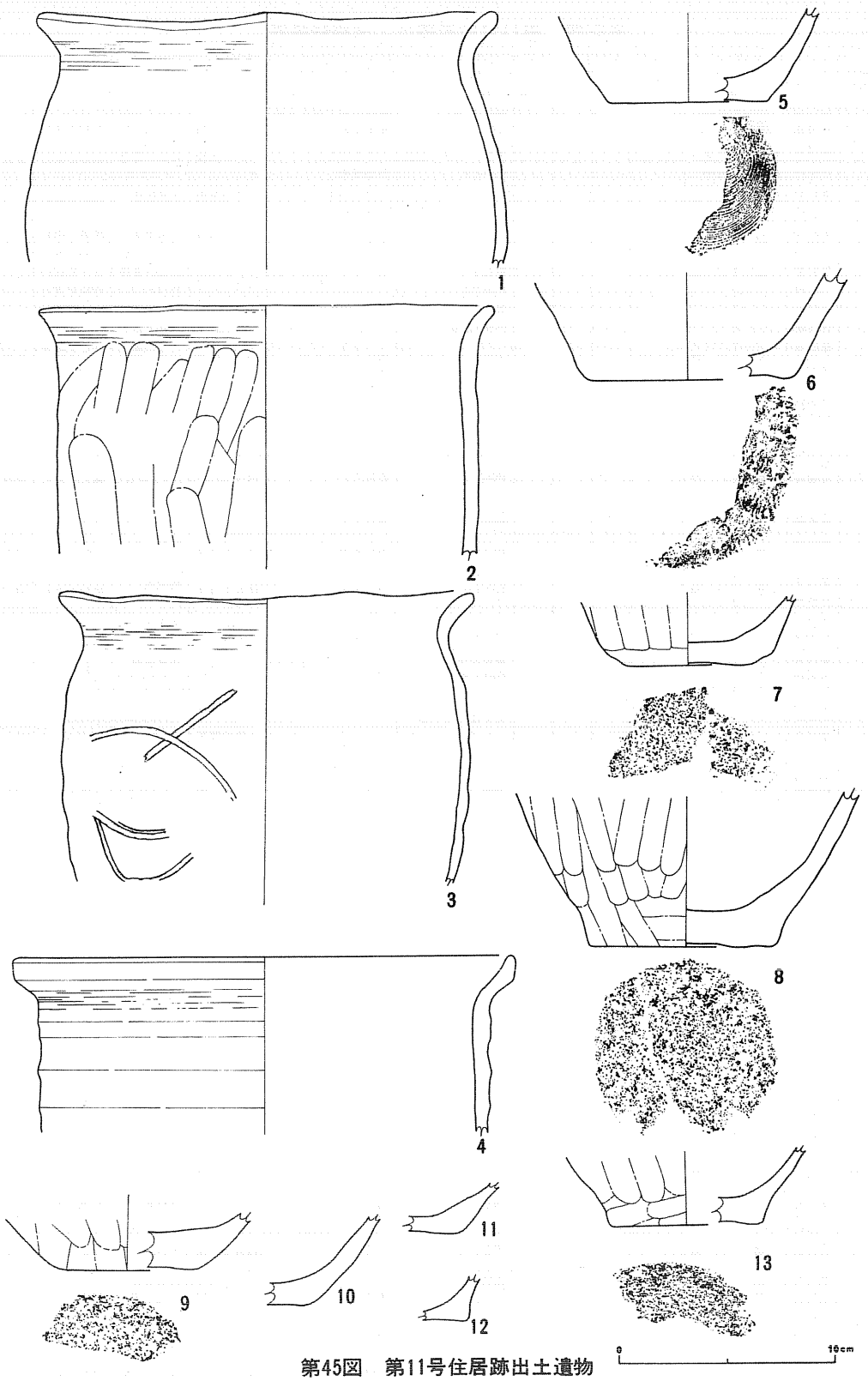
第42図　第11号住居跡



第43図　第11号住居跡カマド



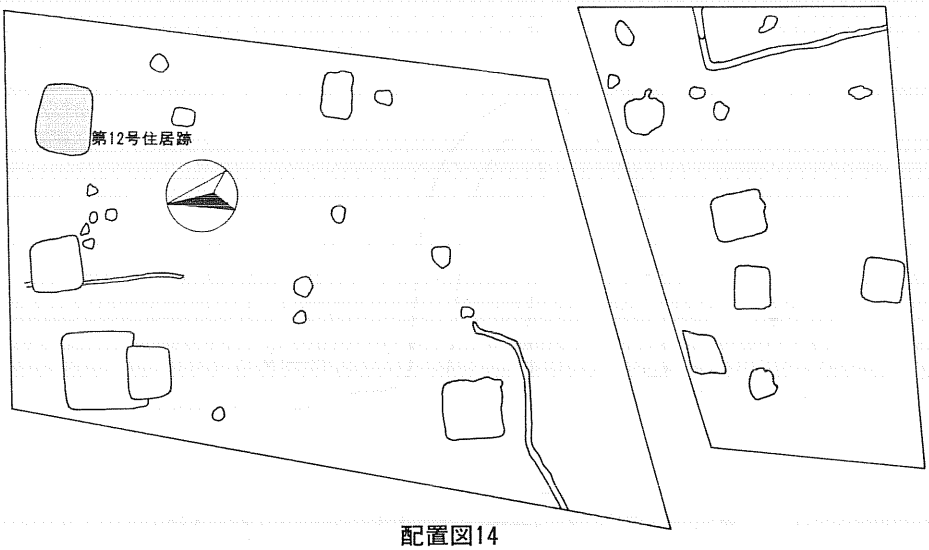
第44図　第11号住居跡出土遺物



第45図　第11号住居跡出土遺物

第27表　第11号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量(cm) 口径	体径	底径	器高	調整(地文) 外面	内面	成形	色調	胎土	焼成
44-1	第11号住居跡	甕	口縁～胴部	(13.9)				横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ，斜位ナデ 黒色処理	積み上げ法	オリーブ灰(2.5GY)	砂粒を含む	良好
2	第11号住居跡	坏（土師器）	口縁～底部	(13.0)		4.6	5.2	ナシ，ロクロ右回転糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水挽き	にぶい橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
3	第11号住居跡	坏（土師器）	底部					ナシ ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
4	第11号住居跡	坏	底部					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色(7.5YR)	精選，砂粒を極く微か	良好
5	第11号住居跡	甕	口縁	(21.2)				横位ナデ 縦位ナデ	横位ナデ，縦位ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色(10YR)	2～5㎜の砂粒を含む	良好
6	第11号住居跡	甕	口縁	(23.5)				横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ，斜位ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙(10YR)	砂粒を含む	良好
7	第11号住居跡	甕	口縁	(21.3)				ナデ，ヘラケズリ	擦痕，横位ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色	2～4㎜の砂粒を含む	良好
8	第11号住居跡	甕	口縁	(15.5)				横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	淡橙色(5YR)	砂粒を含む	良好
9	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ＋縦位ナデ(擦痕)，横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(10YR)	砂粒を含む	良好
10	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を微かに含む	良好
11	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 斜位ナデ	横位ナデ＋斜位ナデ 横位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色(7.5YR)	砂粒を微かに含む	良好
12	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	明褐灰色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
13	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	褐灰色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
14	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ，斜位ナデ	積み上げ法	褐灰色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
15	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 縦位ナデ	横位ナデ＋縦位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
16	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，二次加熱を受け表面がもろくなっている	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
17	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	ロクロ使用(?) 積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を微かに含む	良好
18	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
19	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
20	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(10YR)	砂粒を含む	良好
21	第11号住居跡	甕	口縁					ユビナデ	ユビナデ	積み上げ法	淡橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
22	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 斜位ナデ	横位ナデ，斜位ナデ	積み上げ法	にぶい橙色(5YR)	砂粒を微かに含む	良好
23	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	淡橙色(5YR)	砂粒を含む	良好
24	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 斜位ナデ	横位ナデ＋斜位ナデ 縦位ナデ，横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を微かに含む	良好
25	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，ナデ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(10YR)	砂粒を含む	良好
26	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，縦位ナデ 黒斑がみられる(?)	横位ナデ，斜位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
27	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ，ナデ(?)	横位ナデ，斜位ナデ 口縁内面に煤状の炭化物付着	積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
28	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 縦位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を微かに含む	良好
29	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ 横位ナデ＋斜位ナデ	積み上げ法	淡橙色(5YR)	精選（わずかに含む）	良好
30	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ，斜位ナデ 横位ナデ	積み上げ法	橙色(2.5YR)	砂粒を含む	良好
31	第11号住居跡	甕	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ，斜位ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(10YR)	砂粒を含む	良好
32	第11号住居跡	甕	口縁	(16.0)				横位ナデ	横位ナデ，擦痕 横位ナデ	積み上げ法	橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
33	第11号住居跡	甕	口縁	(21.8)				横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色(10YR)	砂粒を含む	良好



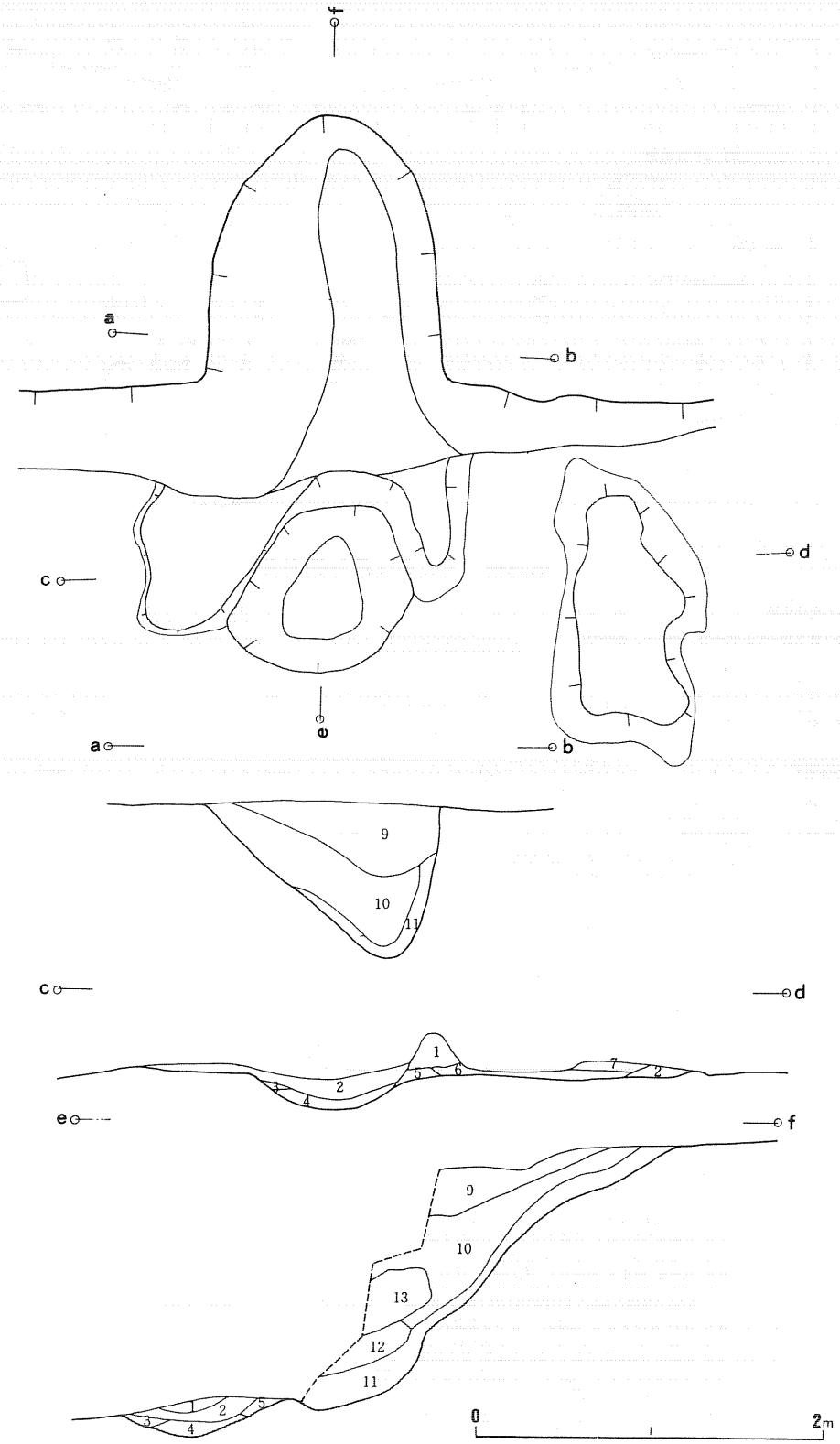
配置図14

第28表　第12号住居跡観察表

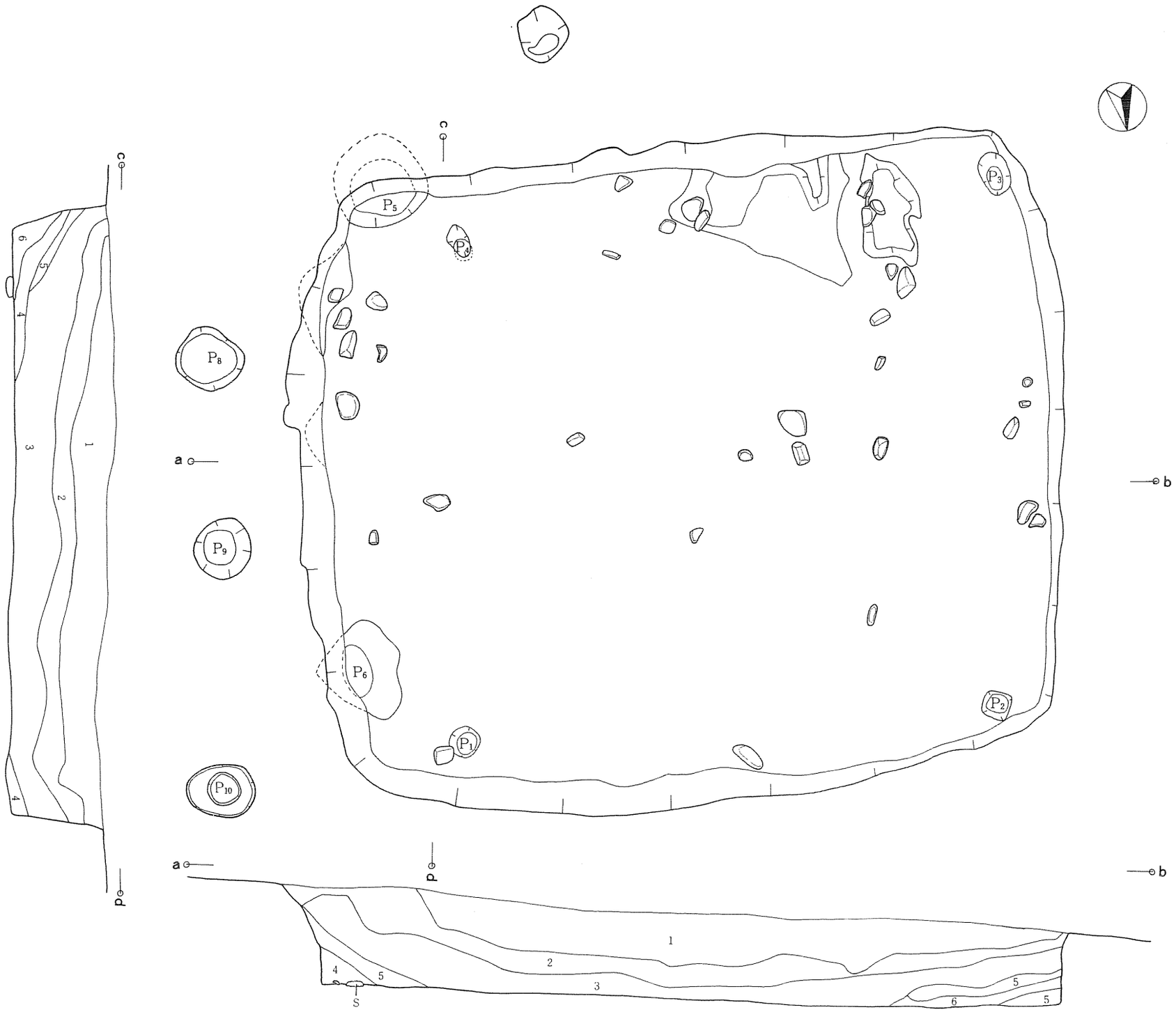
第12号住居跡	挿　図	46, 47, 48	図　版	13, 14, 40

検出区	19—C, 19—D, 20—C, 20—D			
法量	東　壁	西　壁	南　壁	北　壁
壁長	485	504	596	567
壁高	73～82	58—60	61～73.5	57～82
周溝幅	——	——	——	——
周溝深	——	——	——	——
面積	29.2			
主軸方位	N—6°—E	形態	長方形	

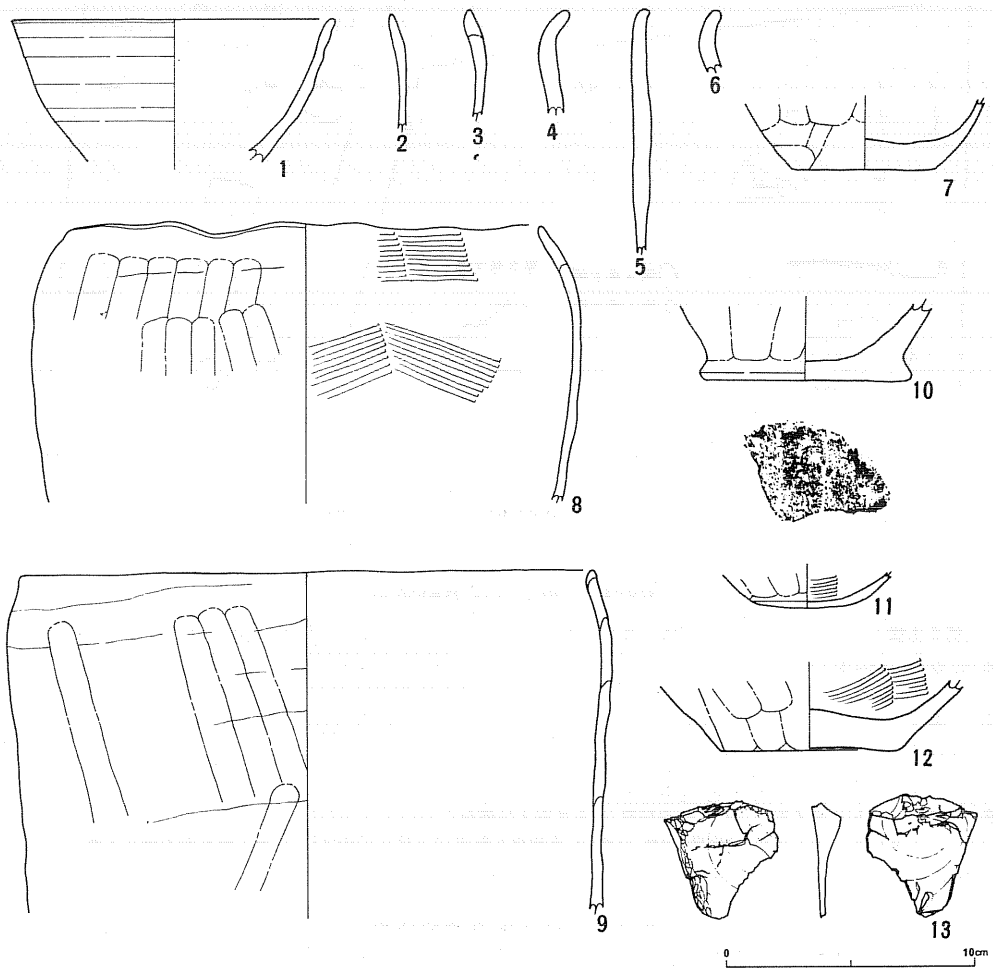
覆土	1．10YR1/7 黒色 粘性大 孔隙大 植物根混入 2．10YR5/4 黒色 粘性大 孔隙大 ロームブロック2～3％混入 3．10YR5/4 黒褐色 粘性大 孔隙大 砂質粒10～15％混入 4．10YR3/3 暗褐色 粘性大 孔隙大 5．10YR5/4 黒褐色 粘性大 孔隙中 6．10YR3/4 暗褐色 粘性大 しまりあり
壁	傾斜角94°～115°を計る。壁材等の遺材は検出していない
床	床面において5㎝～20㎝程度の礫が多数ある
ピット	P_1 25×24×23㎝ 住居跡 北壁東側隅に位置する P_2 26×25×13.5㎝ 住居跡 北壁西側隅に位置する P_3 23×33×16.5㎝ カマド西側 西壁隅に位置する P_4 18×26×25㎝ カマド東側に位置する （主柱穴） P_5 73×72×14㎝ カマド東側 東壁隅に位置し住居跡外側に掘りこまれている 貯蔵穴の可能性もある P_6 62×82×25㎝ 住居跡 東壁北側寄りに位置し，貯蔵穴の可能性もある P_7 40×45×42㎝ 住居跡 南壁外 中央やや東側寄りに位置する P_8 55×50×20.5㎝ 住居跡 東壁外南寄りに位置する P_9 45×48×32.5㎝ 住居跡 東壁外中央やや北側に位置する P_{10} 掘り方55×42×28 据え方26×26×30 住居跡東壁外北側に位置する
カマド 位置	南壁西寄
カマド 覆土	1．10YR5/6 黄褐色 粘性大 孔隙なし 粘土層である 2．10YR3/4 暗褐色 粘性あり 孔隙あり 炭化物3％ 焼土約10％混入 3．10YR1/7 黒色 粘性やや弱 孔隙やや大 炭化物の層である 4．5YR5/8 明赤褐色 粘性やや弱 孔隙やや大 焼土層である 5．5YR4/6 赤褐色 粘性あり 孔隙あり 焼土80％以上混入 6．10YR5/2 黒褐色 粘性やや大 孔隙弱 炭化物30％混入 7．10YR5/6 黄褐色 粘性大 孔隙なし 焼土約5％混入 粘土層である 8．10YR5/4 黄褐色 粘性大 孔隙やや弱 直径3㎝位の砂利石10％混入 粒度が非常に細かく粒径区分では，粘土灰色のしらす状のブロック（5～10㎝）を含む 9．10YR3/1 黒色 粘性やや大 孔隙弱 パミス3％混入 10．10YR3/4 暗褐色 粘性やや弱 孔隙やや大 黄褐色土粒子10％混入 11．10YR5/3 黒褐色 粘性弱 孔隙大 炭化物50％ 焼土10％混入 12．10YR5/6 明黄褐色 粘性大 孔隙なし 粒径区分ではシルト層じたいとしては非常に堅緻 13．10YR5/2 黒褐色 粘性有 孔隙有 パミス5％ ロームブロック約10％混入
カマド	カマド本体の遺存状態が非常に悪く，そのため袖部分の確認がむずかしい。また煙道部における断面の形態は三角形であり，カマドの芯材は検出されていない



第46図　第12号住居跡カマド



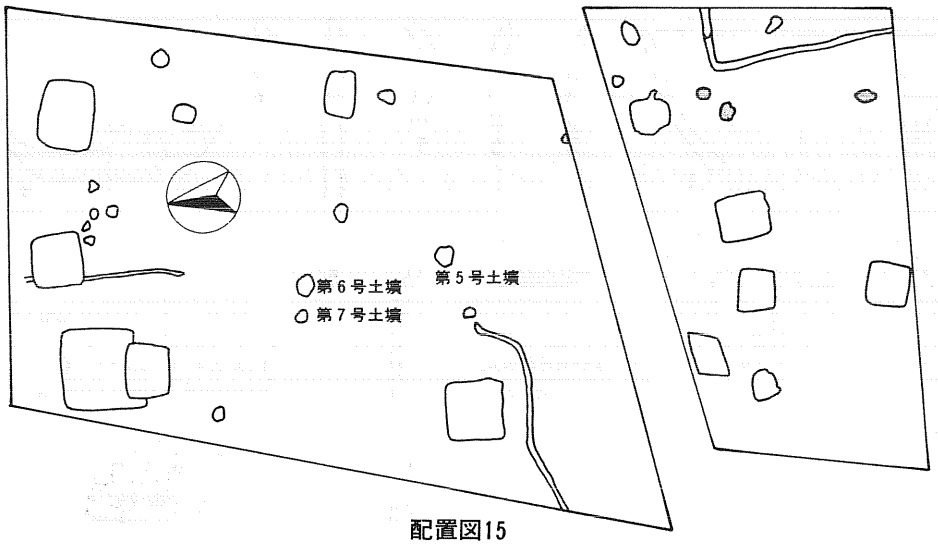
第47図　第12号住居跡



第48図　第12号住居跡出土遺物

第29表　第12号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量(cm) 口径	体径	底径	器高	調整(地文) 外面	内面	成形	色調	胎土	焼成
1	第12号住居跡	坏	口縁	(13.0)				ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色 (7.5YR)	砂粒を僅かに含む	良好
2	第12号住居跡	甕	口縁					斜位ナデ	ハケメ	積み上げ	灰褐色 (7.5YR)	砂粒を僅かに含む	良好
3	第12号住居跡	甕	口縁					ナデ	ハケメ	積み上げ	灰色 (10Y)	砂粒を含む	良好
4	第12号住居跡	甕	口縁					横位ナデ,縦位ナデ,ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ	にぶい褐色	砂粒を僅かに含む	良好
5	第12号住居跡	甕	口縁					ナデ, ヘラケズリ	ナデ	積み上げ	橙色 (7.5YR)	砂粒を僅かに含む	良好
6	第12号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ	にぶい黄橙色(10YR)	砂粒を含む	良好
7	第12号住居跡	甕	底部			(5.6)		ヘラケズリ	ハケメ	積み上げ	にぶい橙色 (5YR)	砂粒を僅かに含む	良好
8	第12号住居跡	甕	口縁	(18.9)				横位ナデ, ヘラケズリ	ハケメ	積み上げ	橙色 (5YR)	砂粒を含む	良好
9	第12号住居跡	甕	口縁	(23.1)				横位ナデ, ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ	橙色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
10	第12号住居跡	甕	底部			(8.5)		ヘラケズリ, 木葉痕	ナデ	積み上げ	灰白色 (10YR)	砂粒を僅かに含む	良好
11	第12号住居跡	甕	底部			(4.0)		ヘラケズリ	ハケメ	積み上げ	浅黄橙色 (10YR)	砂粒を僅かに含む	良好
12	第12号住居跡	甕	底部			(7.2)		ヘラケズリ	ハケメ	積み上げ	橙色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
13	第12号住居跡	最大長4.5　最大幅4.3　厚1.1						表面右下辺を刃部として使用					



配置図15

第30表　第5号土壙観察表

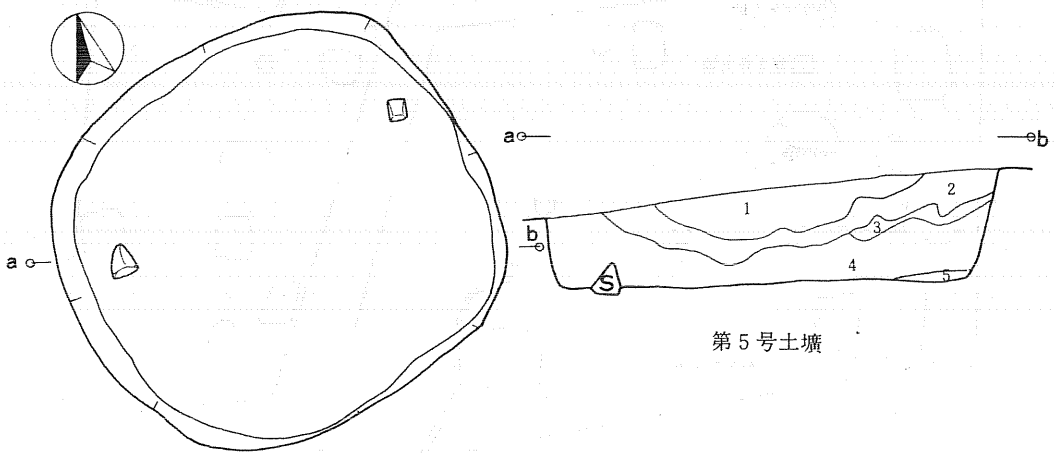
第5土壙	挿図	49	図版	21
検出区	14—F			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	240	196	50	98°～107°
覆土	1．10YR3/2 黒褐色 やや粘質 孔隙大 黄褐色土ブロック5～7％ パミス3～5％ 2．a．10YR1/7 黒色 孔隙稍大 パミス10～15％ b．10YR1/7 黒色 やや粘質 パミス混入は僅か 3．a．10YR3/2 黒褐色 粘質 孔隙小 黄褐色土粒及びブロック10～15％ 焼土粒も若干混入する b．10YR3/7 黒色 粘性小 孔隙大 パミス10～15％混入			

第31表　第6号土壙観察表

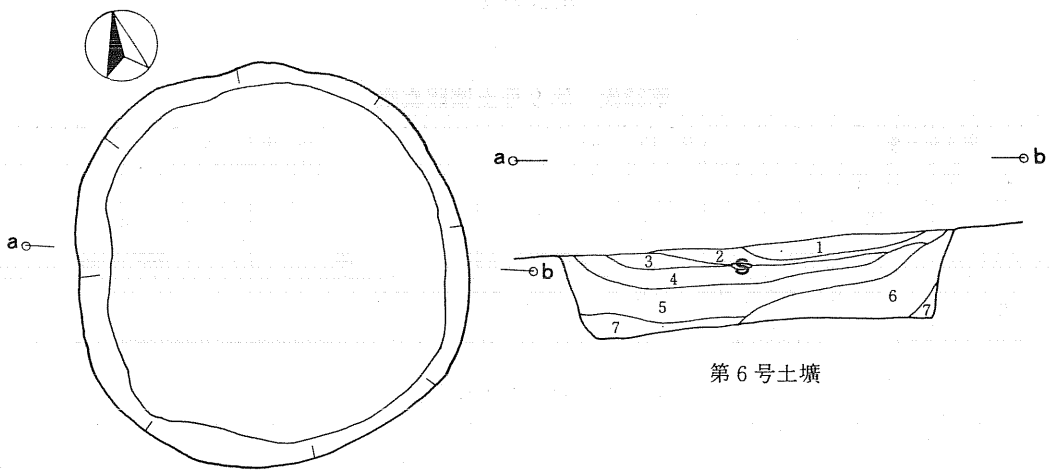
第6土壙	挿図	49	図版	22
検出区	14—G			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	216	176	40	106°～110°
覆土	1．10YR3/3 黒褐色 孔隙大 浮石混入 2．10YR3/7 黒色 炭化物混入 3．10YR3/3 黒褐色 焼土部分 4．10YR3/2 浮石2～3％混入 孔隙大 5．7.5YR3/2 黒褐色土 孔隙少 ロームブロック混入 6．10YR3/2 黒褐色土 孔隙大 7．7.5YR4/4 褐色 粘質性 しまる			

第32表　第7号土壙観察表

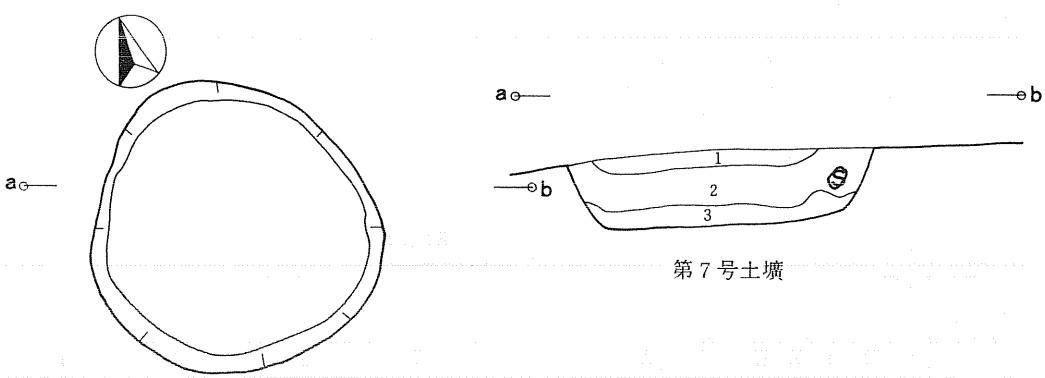
第7号土壙	挿図	49	図版	22
検出区	14—H			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	156	136	40	115°～118°
覆土	1．10YR3/7 黒色 やや粘質 孔隙少 2．10YR3/2 黒褐色 やや粘質 孔隙やや有 3．10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質 かたくしまる			



第５号土壙



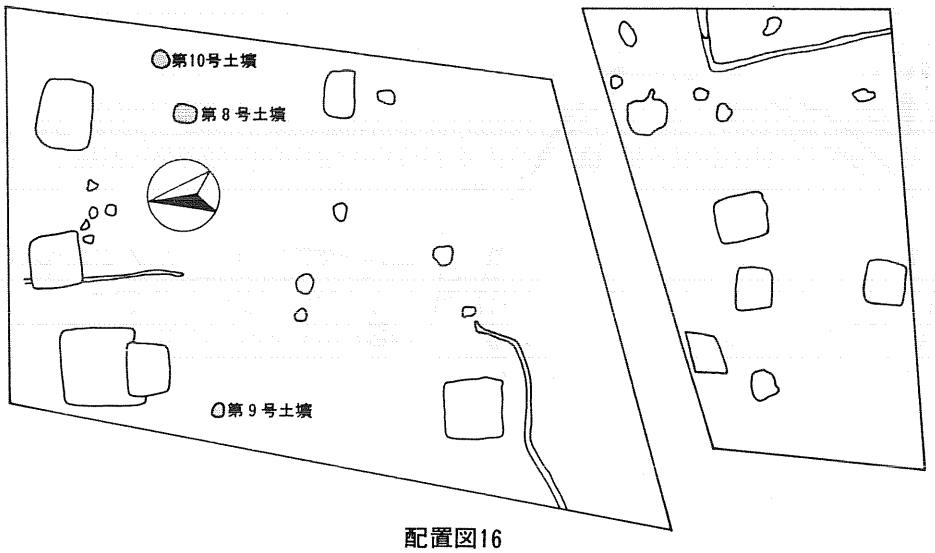
第６号土壙



第７号土壙

0　　2m

第49図　第５号土壙～第７号土壙



配置図16

第33表　第 8 号土壙観察表

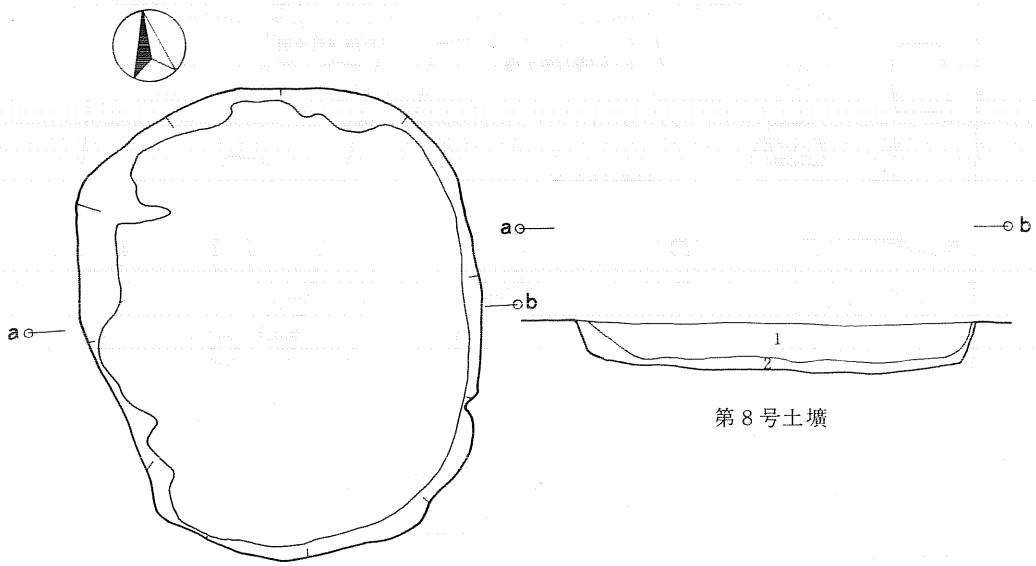
第 8 号土壙		挿　図	50	図　版	23
検 出 区	17—D				
法　量	開　口　部　径	底　　径	深　　さ	傾　斜　角	
	152	116	30	105°～110°	
覆　土	1．10YR⅔ 黒褐色 粘性 孔隙少 ロームブロック15～20%混入 2．10YR⅘ 褐色 粘質性 かたくしまる				

第34表　第 9 号土壙観察表

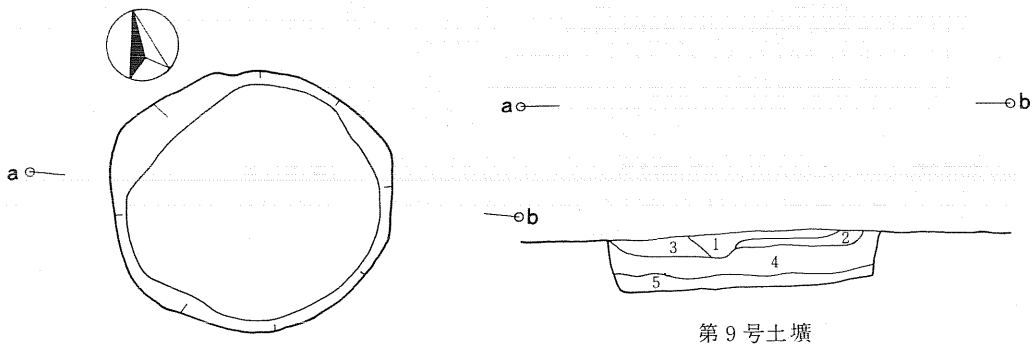
第 9 号土壙		挿　図	50	図　版	
法　量	開　口　部　径	底　　径	深　　さ	傾　斜　角	
	152	116	30	97°～103°	
覆　土	1．10YR⅔ 暗褐色 焼土部分 浮石2～3% 2．10YR⅔ 黒色 粘質性で孔隙小 3．10YR⅔ 黒褐色 孔隙やや有 4．10YR⅙ 褐色 粘性やや有 孔隙やや有 5．10YR⅚ 黄褐色 粘質性でかたくしまる				

第35表　第10号土壙観察表

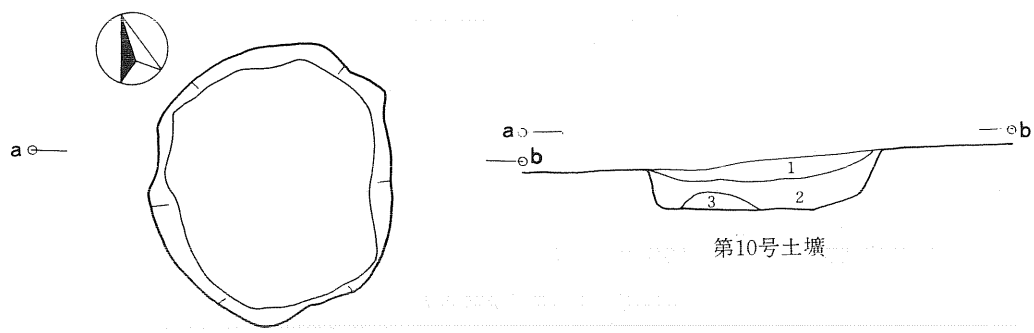
第10号土壙		挿　図	50	図　版	23
検 出 区	17—C				
法　量	開　口　部　径	底　　径	深　　さ	傾　斜　角	
	150	104	30	99°～117°	
覆　土	1．10YR⅔ 黒褐色 粘性孔隙小 2．a．10YR⅘ 褐色 粘性孔隙小 b．10YR⅚ 褐色 粘性かたくしまる				



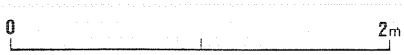
第８号土壙



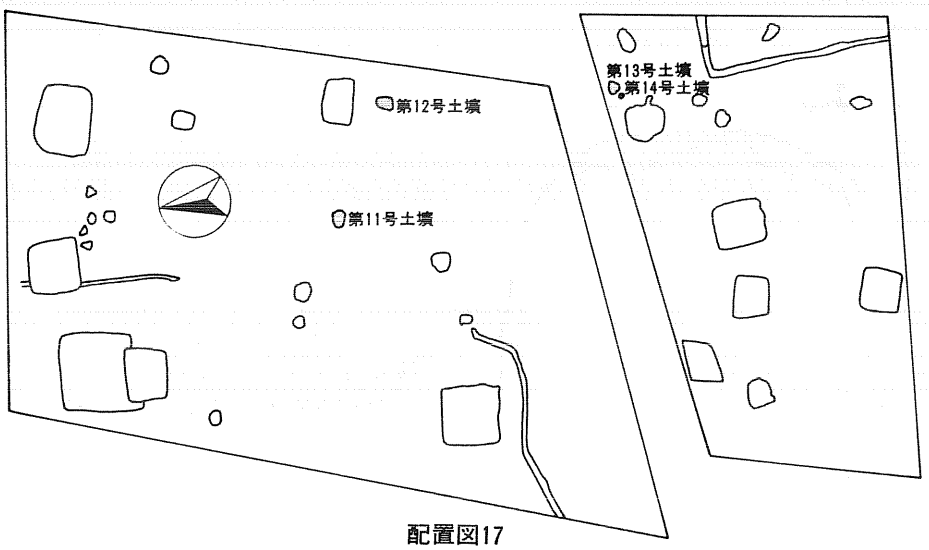
第９号土壙



第10号土壙



第50図　第８号土壙～第10号土壙



配置図17

第36表　第11号土壙観察表

第11号土壙	挿図	51	図版	21
検出区	13—F			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	194×148	166	48	108°～112°
覆土	1．10YR3/4 黒褐色 粘性極小 孔げき大 浮石粒子45%混入 2．10YR3/4 黒色 粘性極小 孔げき大 黄褐色土粒子３% 浮石粒子７% 植物根混入 3．10YR3/4 黒色 粘性小 孔げき大 ロームブロック２% 植物根混入 4．10YR3/4 黒褐色 粘性小 孔げきやや大 ロームブロック７% 浮石粒子３% 植物根混入 5．10YR3/4 黒褐色 粘性中 孔げき小 ロームブロック15% 植物根混入 6．10YR3/4 黒褐色 粘性中孔 げき小 植物根混入			

第37表　第12号土壙観察表

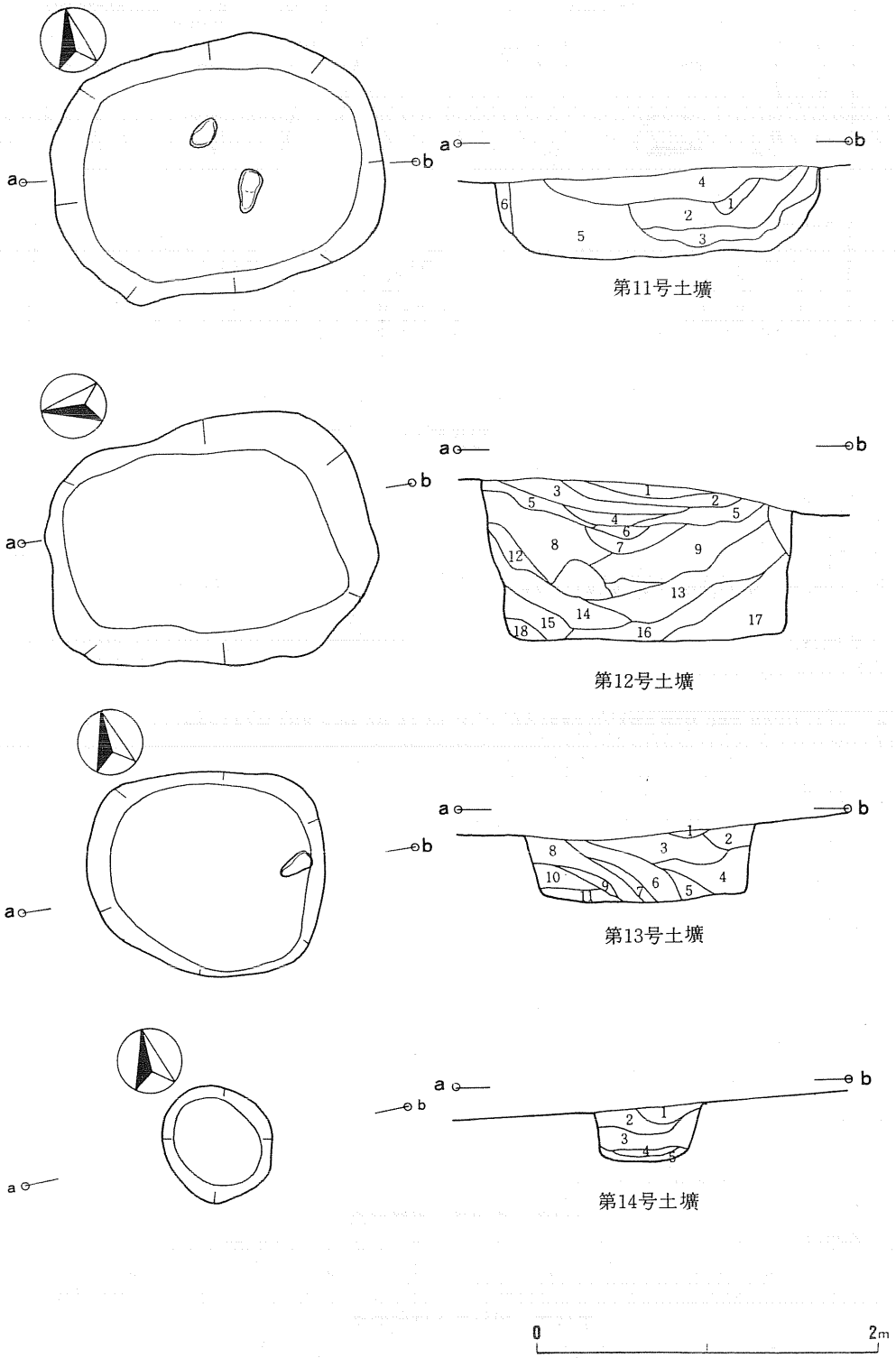
第12号土壙	挿図	5 51	図版	24
検出区	12—C			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	190×146	154×104	92	101°～106°
覆土	1．10YR3/4 黒色 粘質弱 孔隙大 径0.5～３ｍ程の粗砂を含む 2．10YR3/4 黒褐色 粘性弱 孔隙大パミス(径１㎜)30～40%含む 3．10YR3/4 黒褐色 粘性なし 上層砂質土 下層パミス50%含む 4．10YR3/4 黒褐色 粘性弱 孔隙大 パミス25～30%含む 5．10YR3/4 黒色 粘性ないが孔隙がなくしまっている 部分的に焼土粒が含まれる 黄褐色土粒子２～３% パミス15～20%含有 6．10YR3/4 にぶい黄褐色 大湯浮石層 7．10YR3/4 黒色 粘性弱 孔隙大 部分的に焼土粒子がはいる パミス10～15%黄褐色土粒子２～３% 8．10YR3/4 黒褐色 粘性弱 孔隙大 黄褐色土ブロック30～40% 9．10YR3/4 黒褐色 粘性弱有 孔隙小 黄褐色土ブロック25～30% パミス10～15% 10．10YR3/4 黒色 粘性なく 孔隙大 パミス２～３% 11．10YR3/4 黒褐色 粘性なく孔隙大 パミス２～７% 黄褐色土粒子５～７% 12．10YR3/4 黒色 粘性弱 孔隙小 まじり物なし 13．10YR3/4 黒褐色 粘性なく孔隙大 黄褐色土粒子10～15% 炭化物２～３% パミス５～７% 14．10YR4/4 褐色 粘性なく孔隙大 黒褐色土粒子20～25% 15．10YR3/4 黒褐色 粘性弱 孔隙小 まじり物なし 16．10YR3/4 黒褐色 粘性弱 孔隙大 パミス２～３% 17．10YR3/4 黒褐色 粘性弱 孔隙大 パミス２～３% 黄褐色土ブロック４～５% 18．10YR3/4 暗褐色 粘性稍有 孔隙小 黒色土粒子10～15%			

第38表　第13号土壙観察表

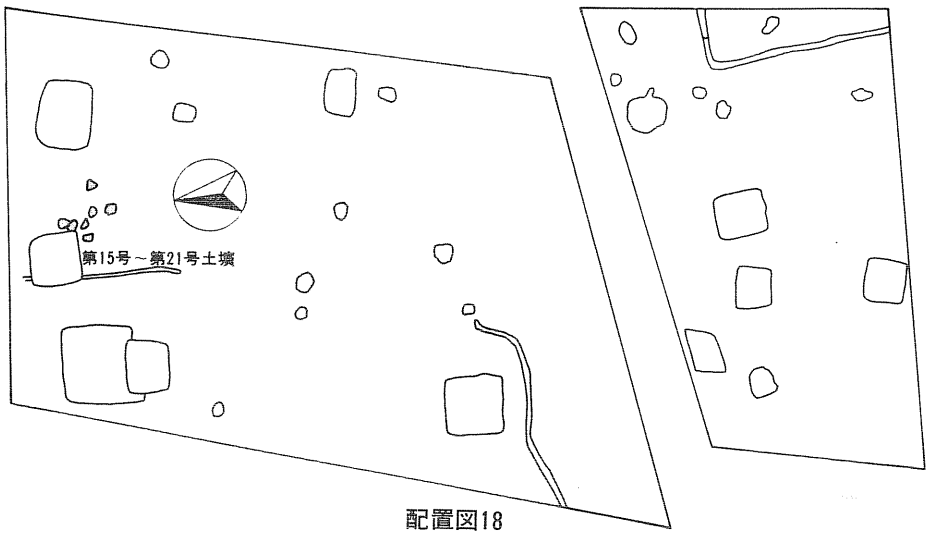
第13号土壙	挿図	51	図版	25
検出区	7—B			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	140	112	40	101°～104°
覆土	1．5YR4/6 赤褐色 焼土層 粘性大 孔隙小 2．10YR3/4 黒褐色 稍粘質 孔隙小 下部にローム粒10～15% 3．10YR3/4 黒色 粘性弱 孔隙大 キメ荒いロームブロック５～７% 焼土粒 若干のパミスを含む 4．10YR3/4 黒褐色 稍粘質 孔隙大 ローム粒３～５% 5．10YR3/4 黒褐色 粘性大 孔隙小 ローム粒20～25% 6．10YR3/4 暗褐色 粘性大 孔隙稍有 暗褐色土粒20～25% 7．10YR3/4 黒褐色 稍粘質 孔隙大 ローム粒15～20% 8．10YR4/4 褐色 粘性大 孔隙稍有 暗褐色土粒15～20% 9．10YR3/4 黒色 粘性弱 孔隙小 ローム粒７～10% 10．10YR3/4 暗褐色 粘性大 孔隙稍有 暗褐色土粒20～25% 11．10YR4/4 褐色 粘性大 孔隙大 暗褐色土粒10～15% （6～11）壁際からの崩落土と思われ，黒褐色土と褐色土が互層をなす			

第39表　第14号土壙観察表

第14号土壙	挿図	51	図版	25
検出区	8—B			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	68	56	32	106°～97°
覆土	1．10YR3/3黒色　2．10YR3/3黒褐色　3．10YR3/4暗褐色　4．5YR5/6赤褐色　5　10YR3/4暗褐色 4層は焼土層，3層中には灰もまじる			



第51図　第11号土壙～第14号土壙



配置図18

第40表　第15号土壙観察表

第15号土壙	挿図	52	図版	
検出区	18－F			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	140	88	80	135°～160°
覆土	1．10YR5/3 黒褐色 粘性弱 孔隙大 若干のバミス含む 2．10YR5/4 褐色 粘性大 孔隙大 地山層との断移層	※ 地山層は径15～20cm程の河原石を含む黄褐色土層		

第41表　第16号土壙観察表

第16号土壙	挿図	52	図版	
検出区	18－F			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	124	88	30	101°～118°
覆土	1．10YR5/3 黒褐色 粘性弱 孔隙大 バミス多量に含む 2．10YR5/3 黒褐色 粘性相有 孔隙大 比較的均質 3．10YR5/4 褐色 粘性大 孔隙小 地山層との漸移			

第42表　第17号土壙観察表

第17号土壙	挿図	52	図版	
検出区	18－F			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	108×78	90×64	26	98°～110°
覆土	1．10YR5/3 黒褐色 粘性弱 孔隙大 黄褐色土粒子及びバミスを40%含む 2．10YR3/4 暗褐色 粘性強 孔隙小 比較的均質 3．10YR5/3 黒褐色 粘性強 しまりあり 黄褐色土粒子20%含む			

第43表　第18号土壙観察表

第18号土壙	挿図	52	図版	
検出区	18－G			
法量	開口部径	底66径	深さ	傾斜角
	102	66	44	95°
覆土	1．10YR5/3 黒褐色 粘性弱 孔隙大 バミス40%含む 2．10YR5/3 黒褐色 粘性弱やや均質 黄褐色土粒及びバミスを30%含む 3．10YR5/3 黒褐色 粘性弱 孔隙大 バミスを3%－7%含む			

第44表　第19号土壙観察表

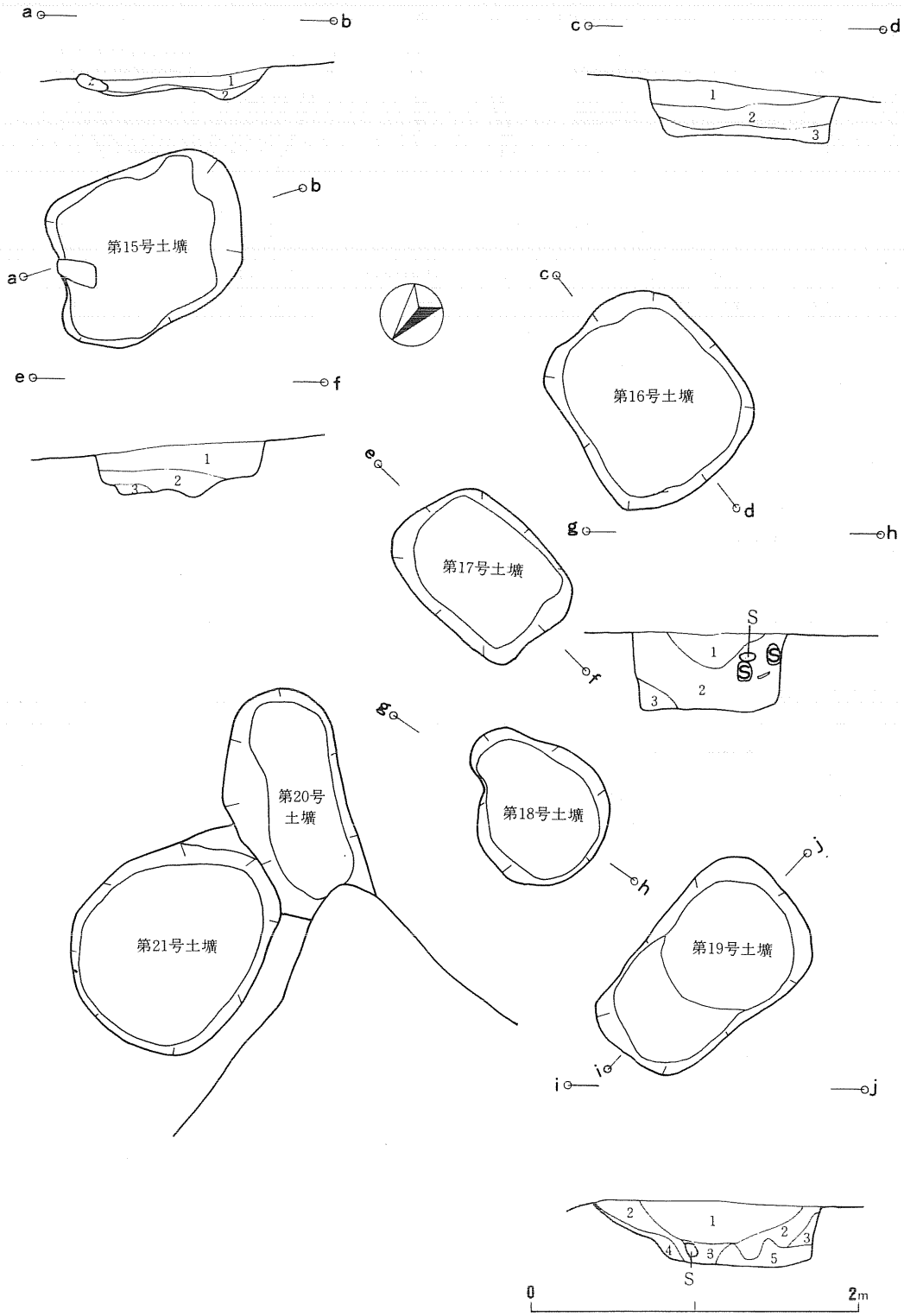
第19号土壙	挿図	52	図版	
検出区	18－G			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	140×80	102×66	38	99°～147°
覆土	1．10YR5/3 黒褐色 粘性弱 孔隙大 バミス30%含む 2．10YR5/3 黒褐色 粘性強 孔隙小 黄褐色土粒30%含む 3．10YR5/4 褐色 粘性強 しまりあり 少量のバミスを含む 4．10YR5/4 にぶい黄褐色 粘性強 孔隙小 しまりあり 5．10YR5/6 黄褐色 粘性強く孔隙小 均質			

第45表　第20号土塀観察表

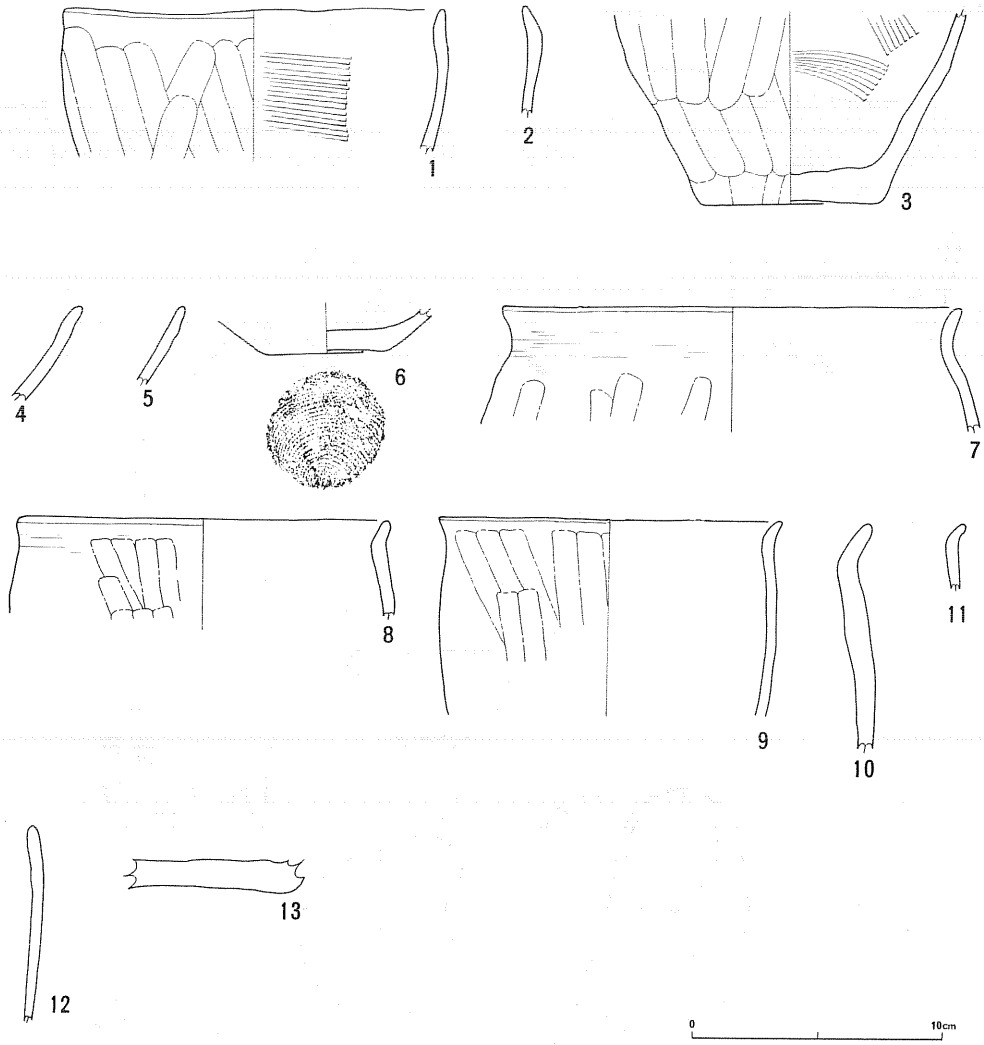
第20号土壙	挿図		図版	
検出区	18－G			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	128×74	120×40	34	108°～120°

第46表　第21号土堀観察表

第21号土壙	挿図		図版	
検出区	18－G			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	114×140	100×123	23	142°～151°



第52図　第15号土壙～第21号土壙



第53図　各土壙内出土遺物

第47表　各土壙内出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量（cm）				調整（地文）		成形	色調	胎土	焼成
				口径	体径	底径	器高	外面	内面				
1	第6号土壙	甕	口縁	(15.2)				横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ，ハケメ	積み上げ	橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
2	第6号土壙	甕	口縁					横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を僅かに含む	良好
3	第6号土壙	甕	底部			7.2		ナデ，ケズリ	ハケメ	積み上げ	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
4	第12号土壙	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
5	第12号土壙	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	橙色（5YR）	砂粒を含む	良好
6	第12号土壙	坏	底部			4.8		ナシ，ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ，黒色処理	ロクロ水挽き	にぶい黄橙色(10YR)	砂粒を含む	良好
7	第12号土壙	甕	口縁	(18.3)				横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ	浅黄橙色（10YR）	砂粒を僅かに含む	良好
8	第12号土壙	小形の甕	口縁	(14.4)				横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を僅かに含む	良好
9	第12号土壙	小形の甕	口縁	(13.8)				横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ	浅黄橙色（10YR）	砂粒を僅かに含む	良好
10	第12号土壙	甕	口縁					横位ナデ，ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
11	第12号土壙	甕	口縁					斜位ナデ	横位ナデ	積み上げ	灰白色（10YR）	砂粒を含む	良好
12	第12号土壙	甕	口縁					ヘラケズリ，ナデ	横位ナデ，縦位ナデ	積み上げ	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
13	第12号土壙	甕	底部					ヘラケズリ	ナデ	積み上げ	浅黄橙色（10YR）	砂粒を僅かに含む	良好

平安時代の土壙としてとりあげたのは南側調査区で確認した第13号，第14号土壙，及び北側調査区で確認した第５号～第12号，第15号～第21号土壙の計17基の土壙である。

平面プランの確認は住居跡と同様第Ⅳ層上面で行われた。覆土中には炭化物，焼土が粒状に混入しており，若干のパミスも混入している。これらの土壙は径２ｍを越える大形のものから70cm程度の小形のものまで規模にいくらかの開きがあり，また形態にも正円形を呈するもの，楕円形を呈するもの，方形のものと変化がある。しかし，いづれの土壙も覆土内から土師器片を出土しており，また焼土のレンズ状堆積が観察されたものも多い。

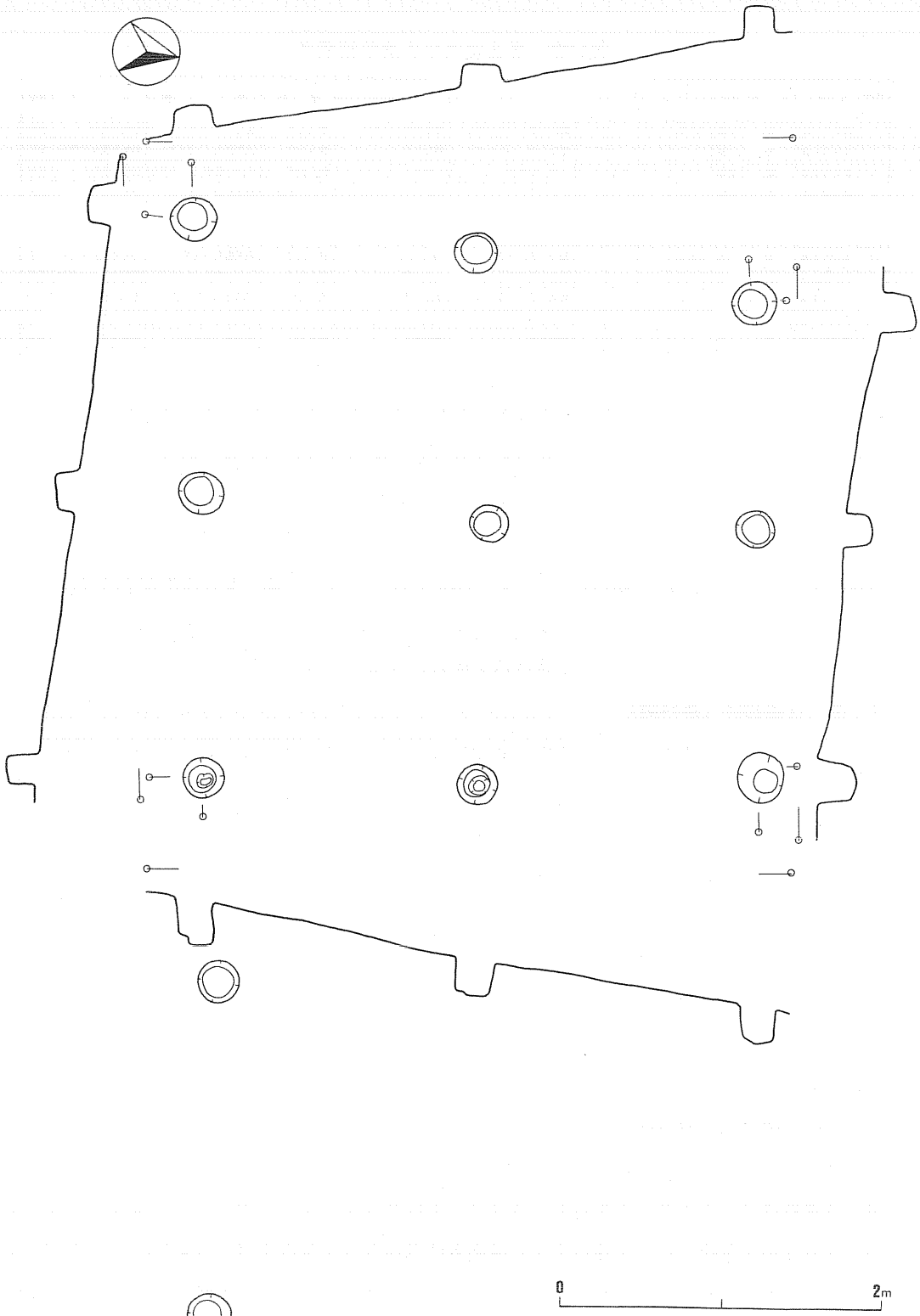
ウ．掘立柱建物跡（**第54図**）

10―Ｅグリッドで検出された。規模は北側柱穴列で300cm，西側柱穴列で350cm，東側柱穴列で350cm，南側柱穴列で350cmを計る。なお，P_{10}，P_{11}を含めた南側柱穴列の全体長は685cmである。全体の形状は，北側柱穴列よりも南側柱穴列の長い台形状を呈する。庇の存在を示すような柱穴は確認出来なかった。柱間間隔は，北側柱穴列で東から157cm＋143cm，西側柱穴列で北から175cm＋175cm，東側柱穴列で北から180cm＋170cm，南側柱穴列で東から180cm＋170cmを計る。各柱穴内には10ＹＲ3/3暗褐色を呈する粘質土が充塡しているが，掘り方，据え方を分けられるような断面は観察できなかった。但し，P_7，P_8では底面に僅かながら浅い窪みが認められ，これが据え方であった可能性もある。北側柱穴列との直交軸によって計測される磁北とのずれは，Ｎ―３°―Ｗである。

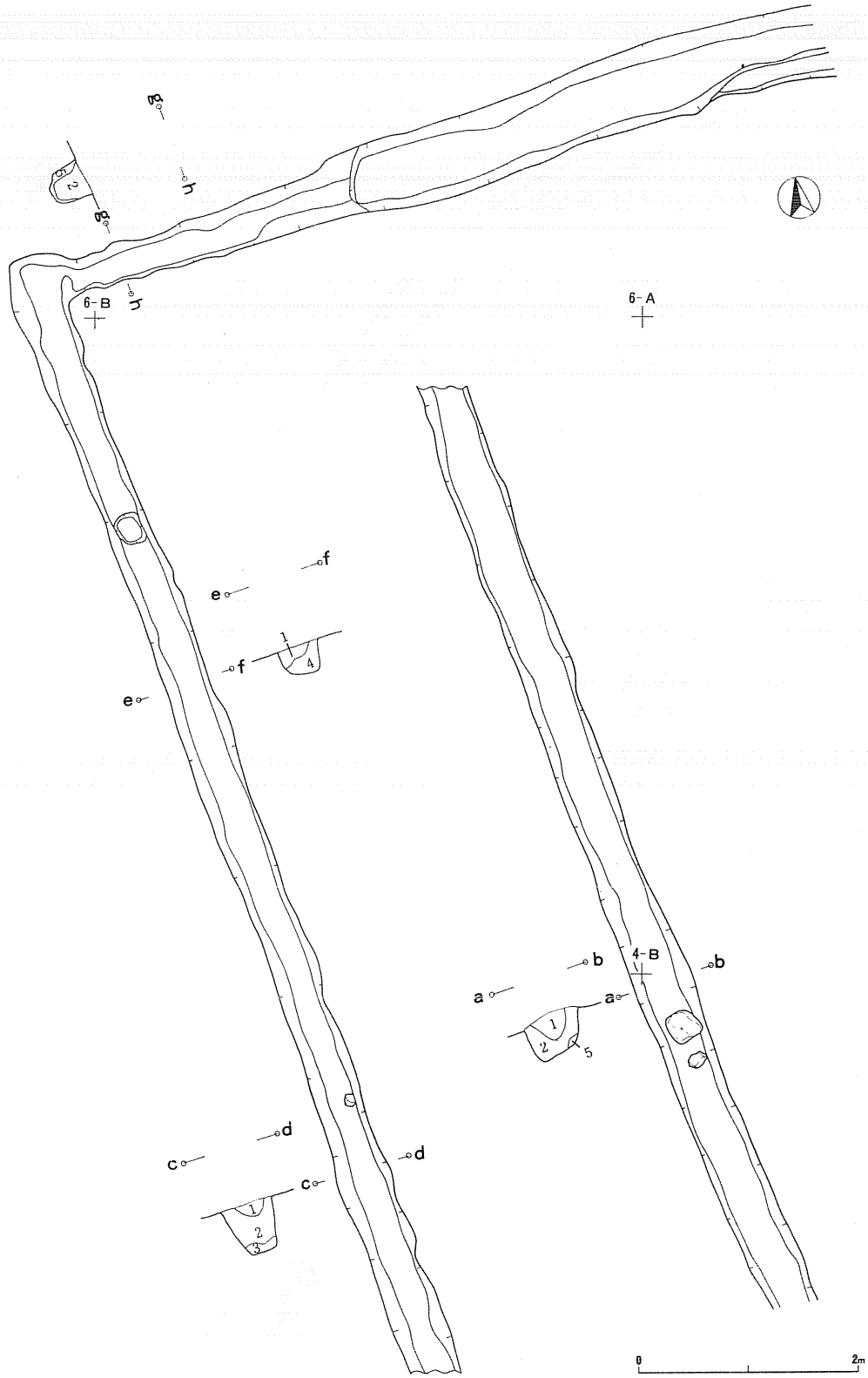
エ．溝跡（**第55図～第57図**）

３基検出されている。

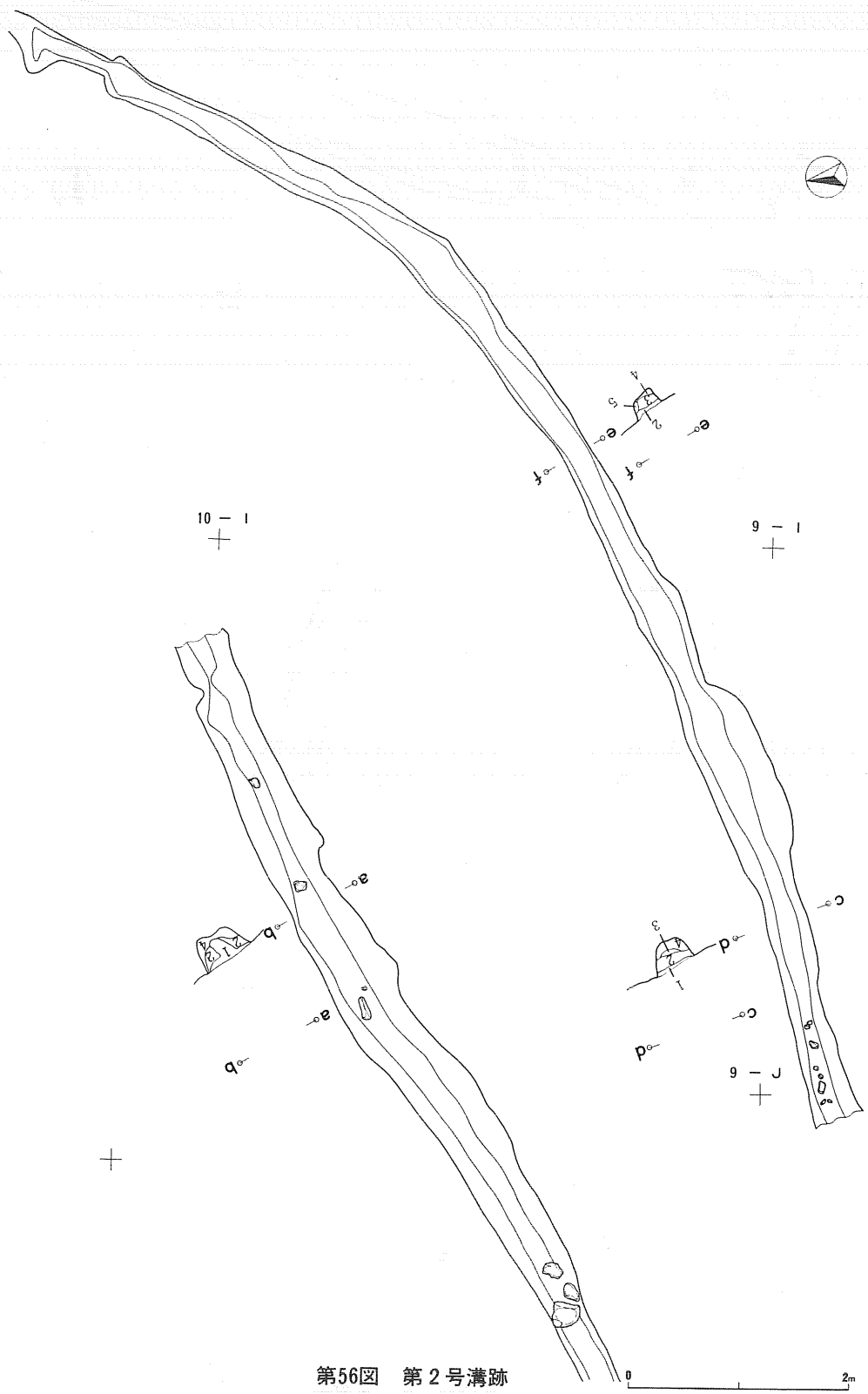
第１号溝跡は３―Ａグリッドから６―Ａグリッドに亘っている。３基の中では底面，側面とも最も良好な面を検出した。全体のプランは調査区外にも亘るため不明であるが，６―Ｂグリッドでほぼ直角に折れている。第２号溝跡は，９―Ｊ～10―Ｈ，第３号溝跡は16―Ｈ～19―Ｈのグリッドで検出され，第３号溝跡は，第11号住居跡を切っている。３基とも遺物の出土は認められない。



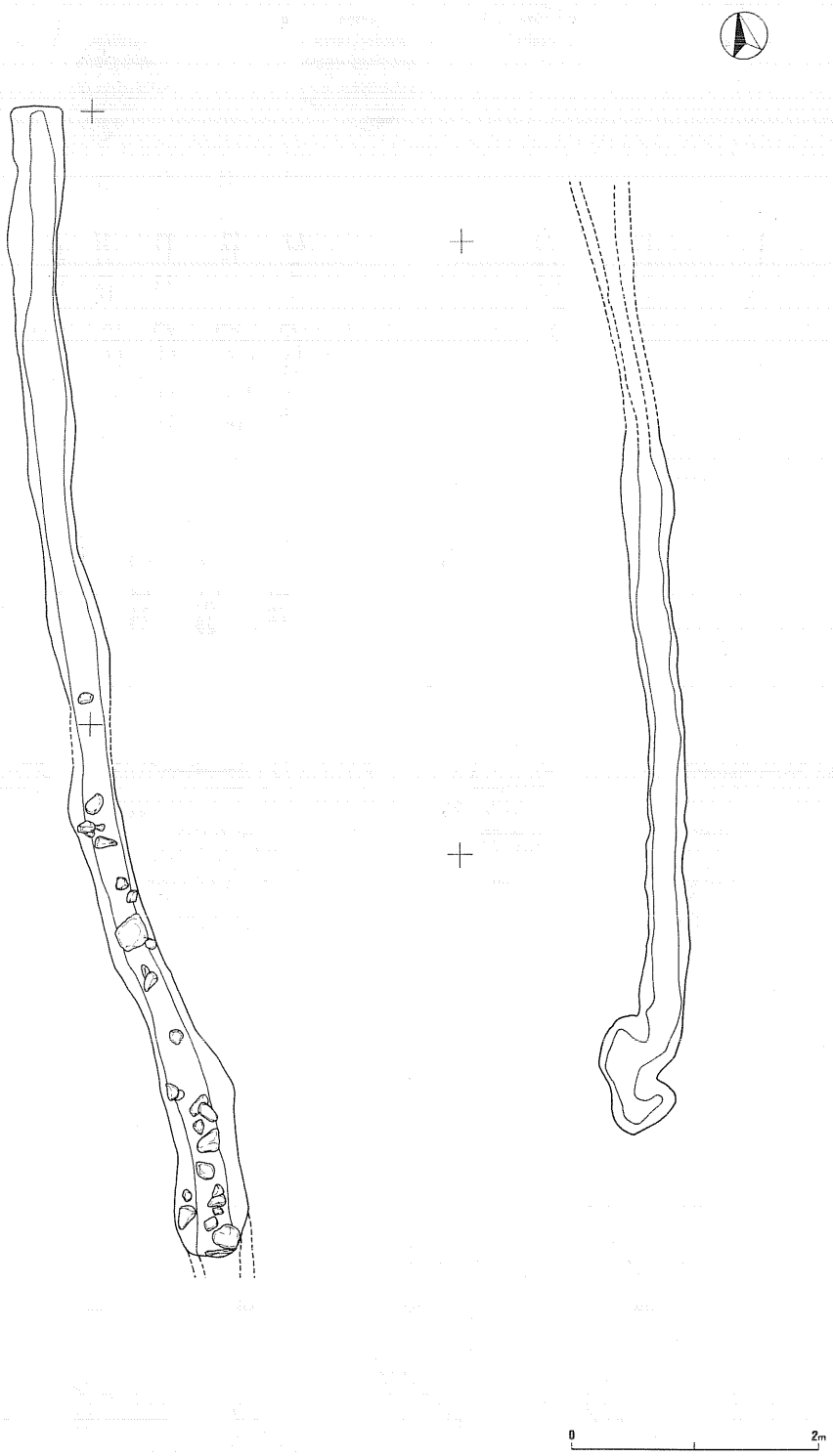
第54図　掘立柱建物跡



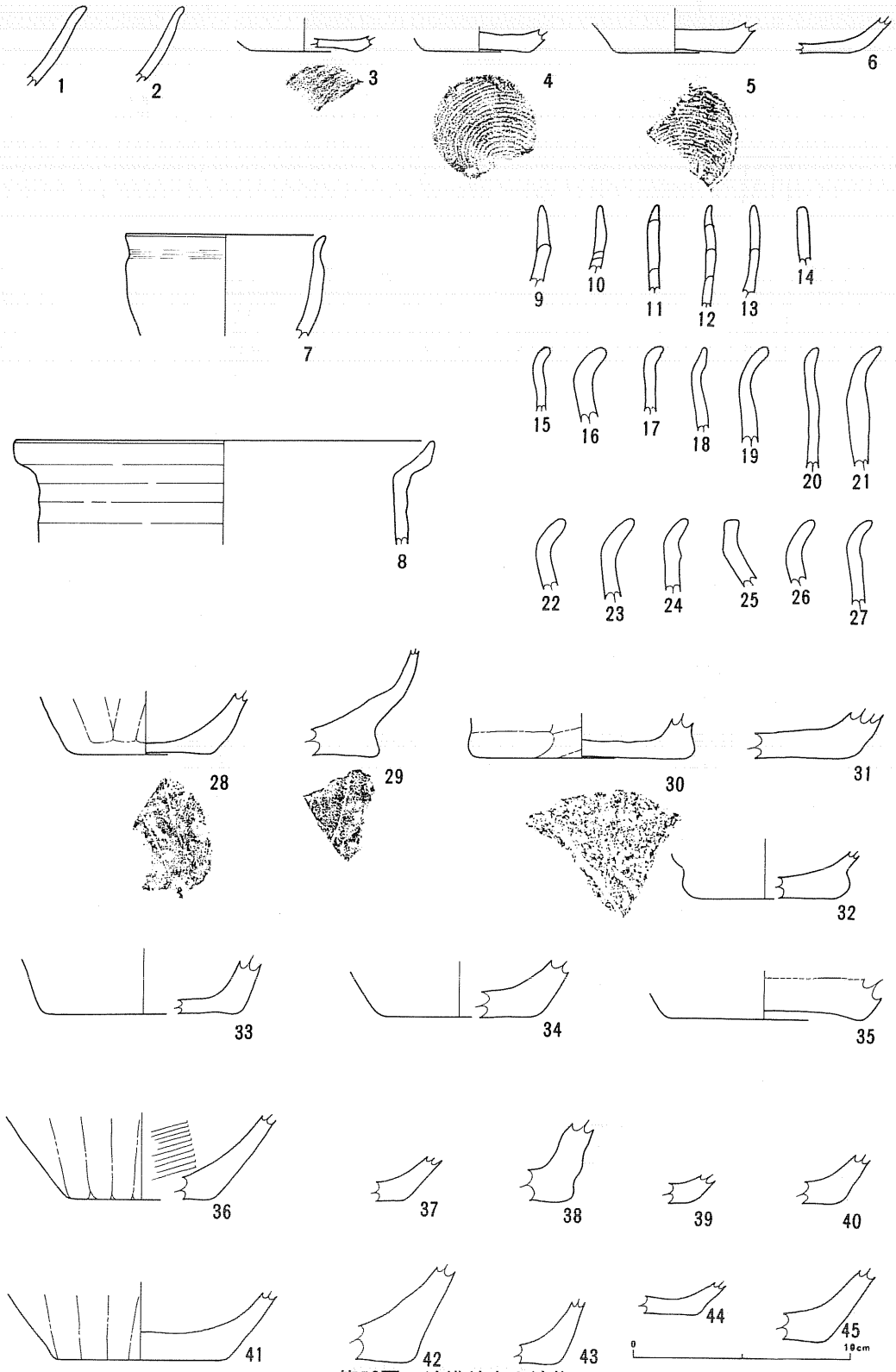
第55図　第１号溝跡



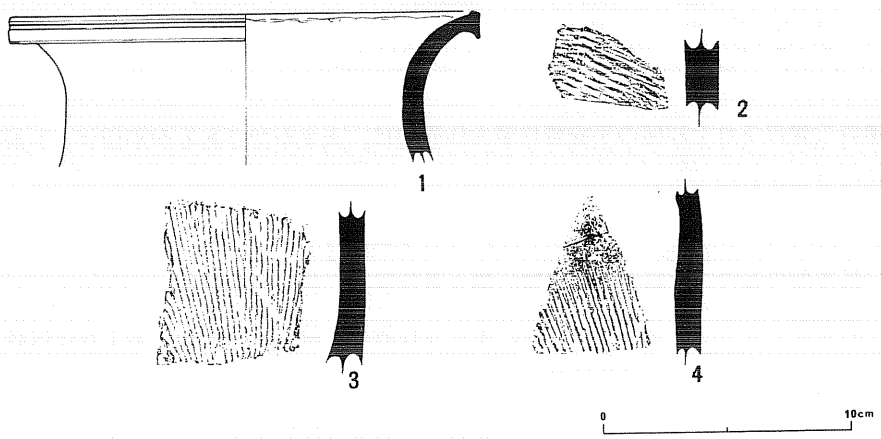
第56図　第２号溝跡



第57図　第３号溝跡



第58図　遺構外出土遺物



第59図　遺構外出土遺物

6．まとめ

本遺跡で検出された12棟の平安時代竪穴住居跡は，大まかではあるが平面プランから以下の3形態に分類が可能である。

a．不整方形のもの……第5号住居跡，第6号住居跡

b．長方形のもの……第8号住居跡，第9号住居跡，第12号住居跡

c．正方形のもの……第1号住居跡，第2号住居跡，第3号住居跡，第4号住居跡，第7号住居跡，第10号住居跡，第11号住居跡

不整方形のものとして分類した第5号住居跡，第6号住居跡は，壁長が300～350cm前後と小規模で，住居跡内に周溝，柱穴をもたない。また，カマドは燃焼部から煙出し口までの煙道部の長いもので，第5号住居跡の煙道は燃焼部と煙出し口の両方から穿ってつくられた所謂トンネル式のものである。

長方形のものとして分類した第8号住居跡，第9号住居跡，第12号住居跡は，南北壁が東西壁よりも長い。東西両壁長を1とした場合の南北壁長は第8号住居跡で1.12，第9号住居跡で1.25，第12号住居跡で1.17の値を示す。また，柱穴は住居跡内四隅にあるが，周溝はもたない。カマドは南壁にあり，煙道部の短いものである。

正方形のものとして分類した住居跡は規模が大きく第10号住居跡のように一辺が8mを越える大形のものもある。周溝をもち柱穴は周溝内四隅とその中間位置にあるが，第10号住居跡のように大形の住居であると住居跡内対角線上にも4個の柱穴をもつ。カマドは，煙道の短いものであるがその位置は一定しない。

以上が各分類及びその共通する特徴である。各分類間の差異は，おそらく時間差に起因するものと思われるが，今回は時間差を示唆できる程に各住居跡毎の遺物の詳細な検討ができなかった。ただ，第9号住居跡と第10号住居跡が示す切り合いの関係に依れば，長方形のプランを呈する住居跡は正方形プランのものよりも時間的に新しい可能性は指摘できる。

また，住居の形態とは別に，本遺跡検出の住居跡床面の焼土の堆積層や，炭化物の堆積層はこれら住居の廃絶が火災による焼失という形で行われたことを物語っている。

本遺跡出土の平安時代の土器は，坏，甕，壺からなるが，坏の量が極端に少ないことが特徴としてあげられる。坏は，第1号住居跡，第8号住居跡，第12号住居跡，第12号土壙及び遺構外から出土しているが，全て破片でかつ極く僅かな量であり，住居内ではその土器組成の中に主体的にはいるものではない。住居内における土器組成は殆ど甕によって成り立っている。

本遺跡出土の甕は口縁部の形状によって2つに分けられる。1つは口縁部の先端が肥厚して

外反し，他の１つは先端が薄く断面が鋭角となるもので，直立もしくは内傾する。後者では成形の際の積み上げの痕跡が明瞭に残り，外面は粗い縦方向のヘラケズリ，内面は横方向の刷毛目によって調整される。住居内出土の甕では第２号住居跡，第５号住居跡，第８号住居跡，第11号住居跡出土のものが前者に相当し，第１号住居跡，第３号住居跡，第４号住居跡，第６号住居跡，第７号住居跡，第９号住居跡，第10号住居跡，第12号住居跡のものが後者に相当する。底部の形状では，大きく外側へ張り出すものと直線的に降りるものとの２つがあり，前者は第２号住居跡，第８号住居跡に特徴的に認められる。底面は，所謂砂底のもの，木葉痕のもの，ヘラ状の工具によって調整され線刻の施されたもの等がある。

非常に大雑把な把え方をすれば，本遺跡出土土器の組成では坏が極端に少ないことをあげることができ，また組成の主体をなす甕については断面の鋭角となる口縁が直立へ内傾し，器外面を積み上げ痕を残したままの縦方向の粗いヘラケズリ，内面を横方向の刷毛目で調整していることを形態上の特徴としてあげることができる。この２点に鑑みれば，同じ鹿角の地域内では歌内遺跡（遺跡番号No.６），若干地域を拡げてみれば岩手県内では一戸町子守Ａ遺跡[註５]，青森県では碇ヶ関村永野遺跡[註６]が類似した特徴をもった遺跡と言える。これらの遺跡はいづれも最近調査されたものであり，出土した土器も未だ編年的な位置づけが明確であるとは言い難い。したがって，現在の段階では上葛岡Ⅳ遺跡の時期を明確には決し難い。

註１　「赤御堂貝塚発掘調査概要報告書」　昭和50年　八戸市教育委員会

註２　「崎山弁天遺跡」　昭和49年　大槌町教育委員会

註３　「青森県上北郡早稲田貝塚」佐藤　達夫　昭和33年　考古学雑誌

註４　「二戸市沢内Ｂ遺跡」　昭和53年　岩手県埋蔵文化財センター

註５　「一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ｉ」　昭和56年　一戸町文化財愛護協会
報告者は，出土した土師器の分析を通して子守Ａ遺跡を10ｃ後半に位置づけている。

註６　「永野遺跡発掘調査報告書」　昭和54年　青森県教育委員会

付

本遺跡第１号住居跡（コードＳＩ001），第９号住居跡（コードＳＩ023）出土炭化物の^{14}Ｃ測定を日本アイソトープ協会に依頼した。結果は以下の通りである。

測定結果報告書

昭和56年１月23日に受取りましたＣ—14試料の測定結果がでましたのでご報告します。

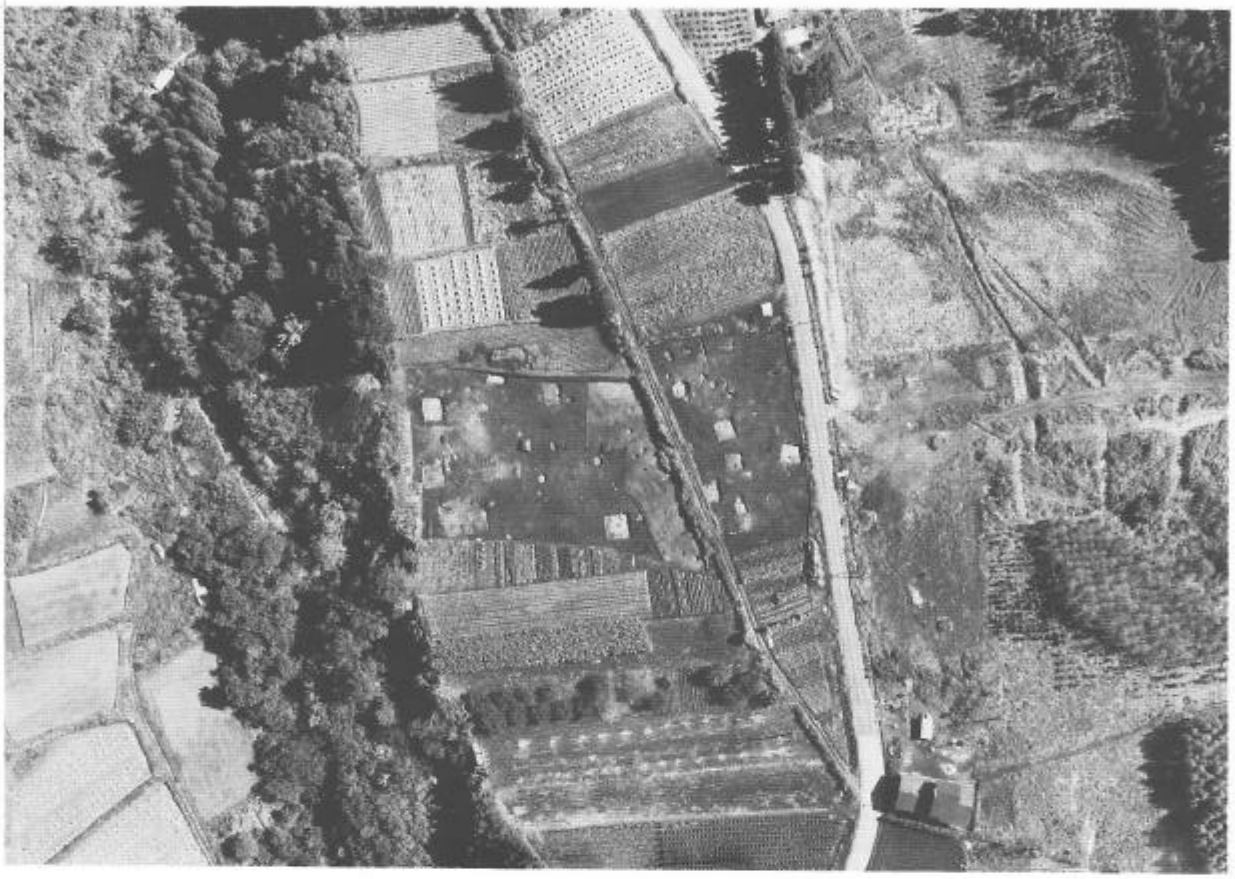
当方のコード	依頼者のコード	Ｃ—14年代
Ｎ—4132	ＴＷ13ＳＩ023	1090±80yB.P.（1050±75yB.P.）
Ｎ—4133	ＴＷ13ＳＩ001	910±75yB.P.（ 885±70yB.P.）

年代は^{14}Ｃの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され，西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は，放射線計数の統計誤差と，計数管のガス封入圧力および温度の読取りの誤差から計算されたもので，^{14}Ｃ年代がこの範囲に含まれる確率は約70％です。この範囲を２倍に拡げますと確率は約95％となります。なお^{14}Ｃ年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。

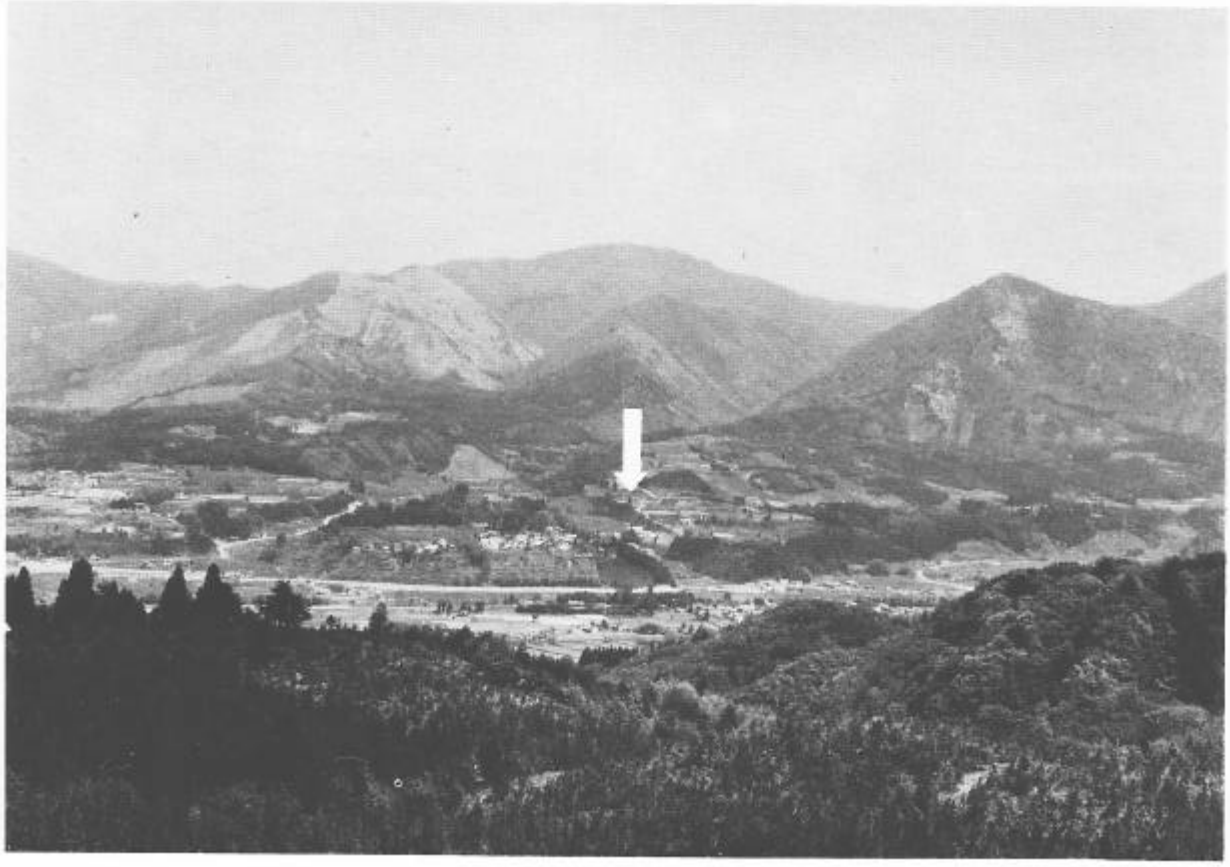
調査参加者

畠山　末治　　神田　良勇　　井上　政治　　奥村　一三　　梅戸　正次郎　　川又　秀也
川又　武司

豊田　よ里　　浅石　恵留子　　相川　金子　　川又　ヤエ　　兎沢　キヨエ　　奥村　初恵
中西　リチ　　相川　リヨ　　賀川　政子　　石鳥谷　妙子　　柳沢　ヤス　　三ヵ田　孝子
田中　ヨシエ　　作山　ミエ　　苗代沢　ノブ　　津江　和子　　金沢　ハルエ
小田島　礼子　　畠山　陽子　　阿部　シガ　　小田島　キク　　斉藤　キヨエ
浅石　タミ　　井上　トミエ　　工藤　スミ　　工藤　キヌ　　工藤　イツ　　阿部　シマ
佐藤　キエ　　松岡　トキヨ　　高畑　サキ　　阿部　シモ　　三上　美子　　三上　トヨ
柳沢　ヤス　　安保　柳

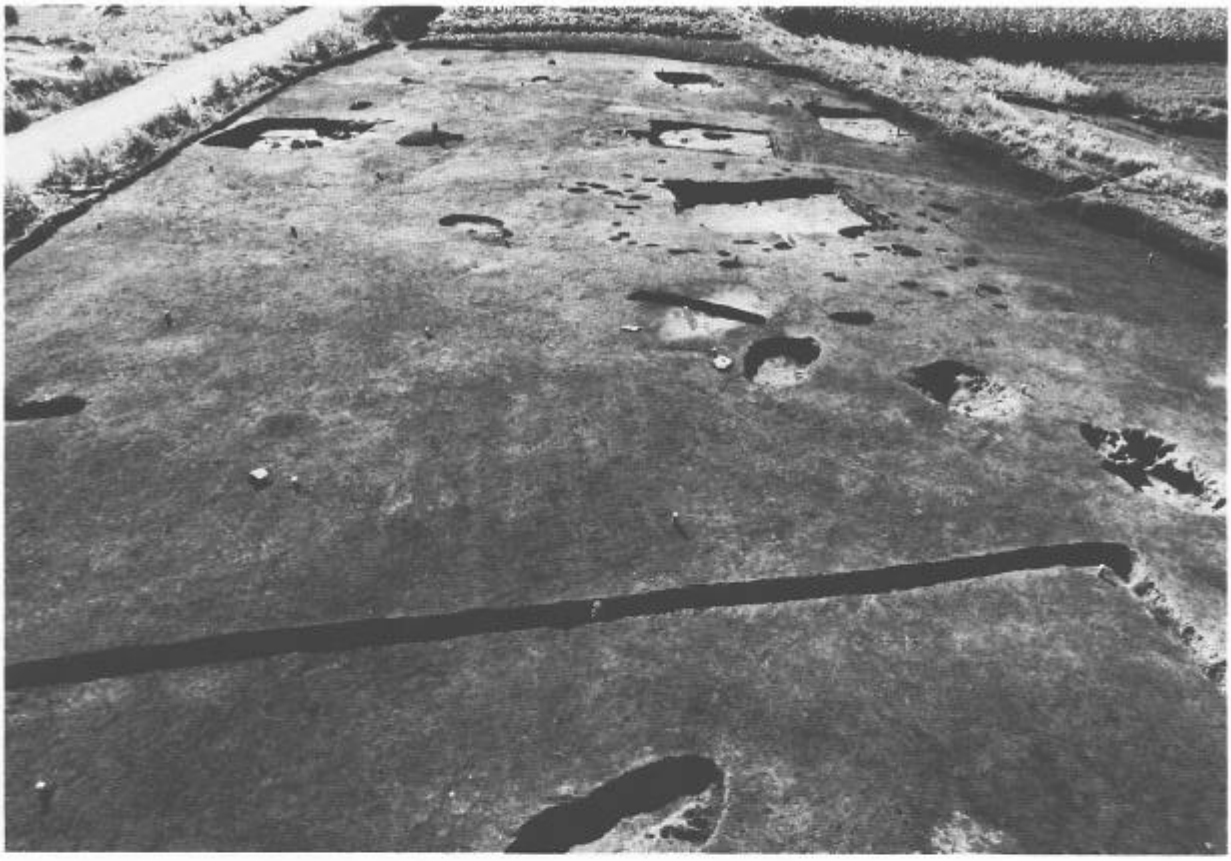


航空写真



図版 1

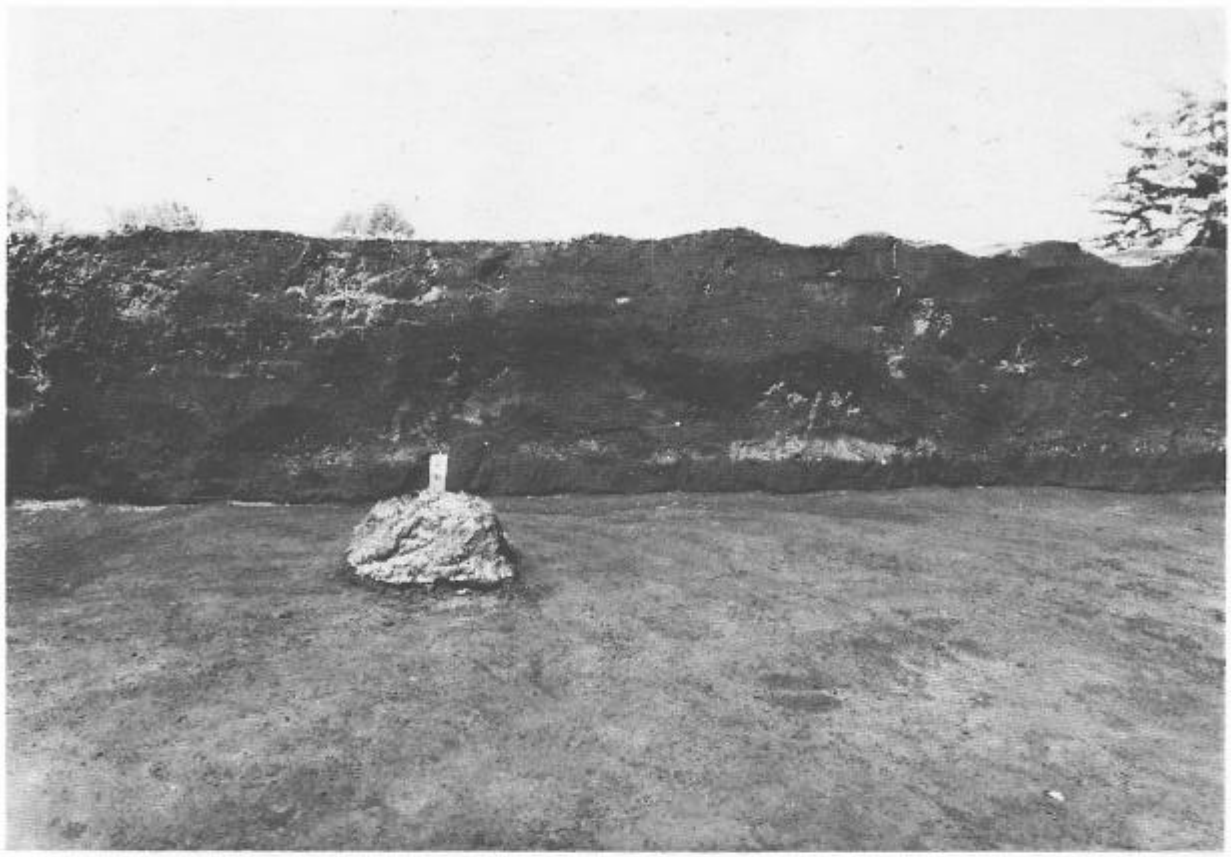
遺跡遠景



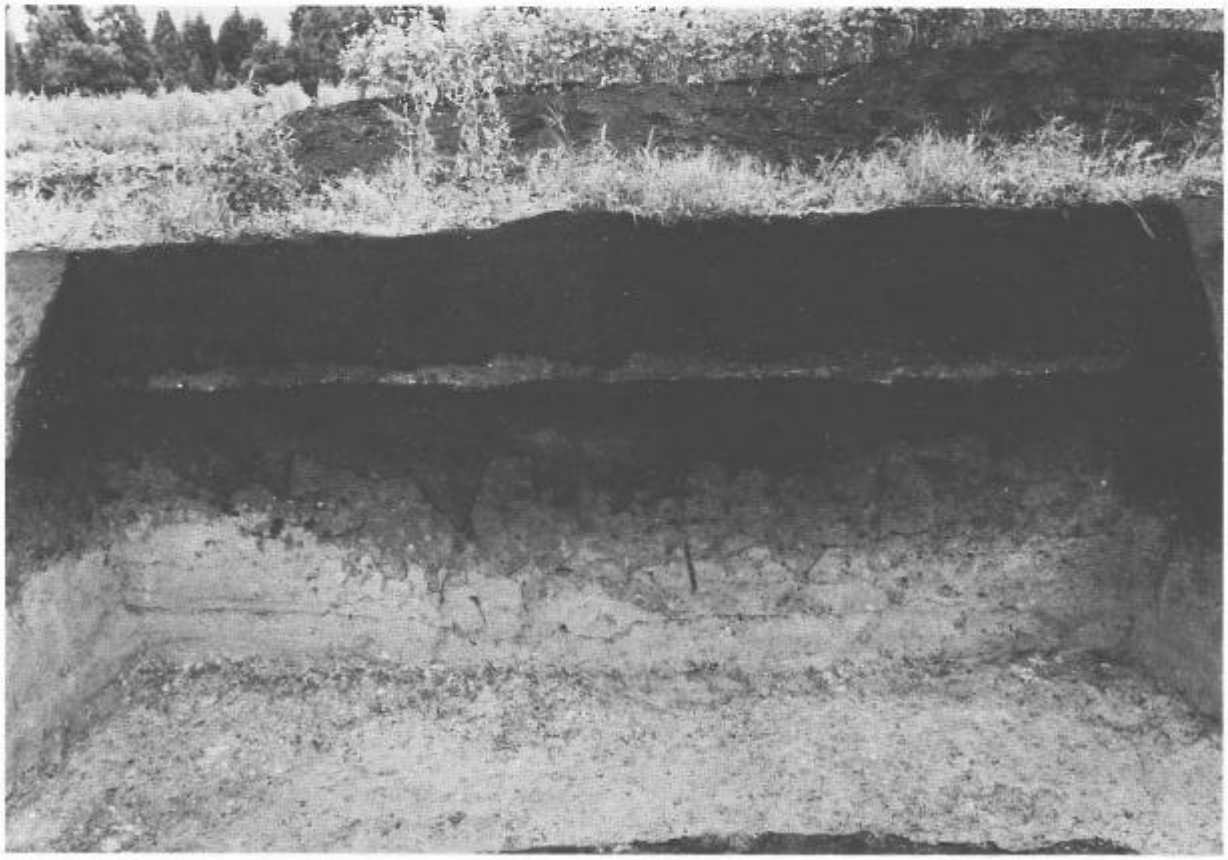
農道南側区全景

農道北側区全景

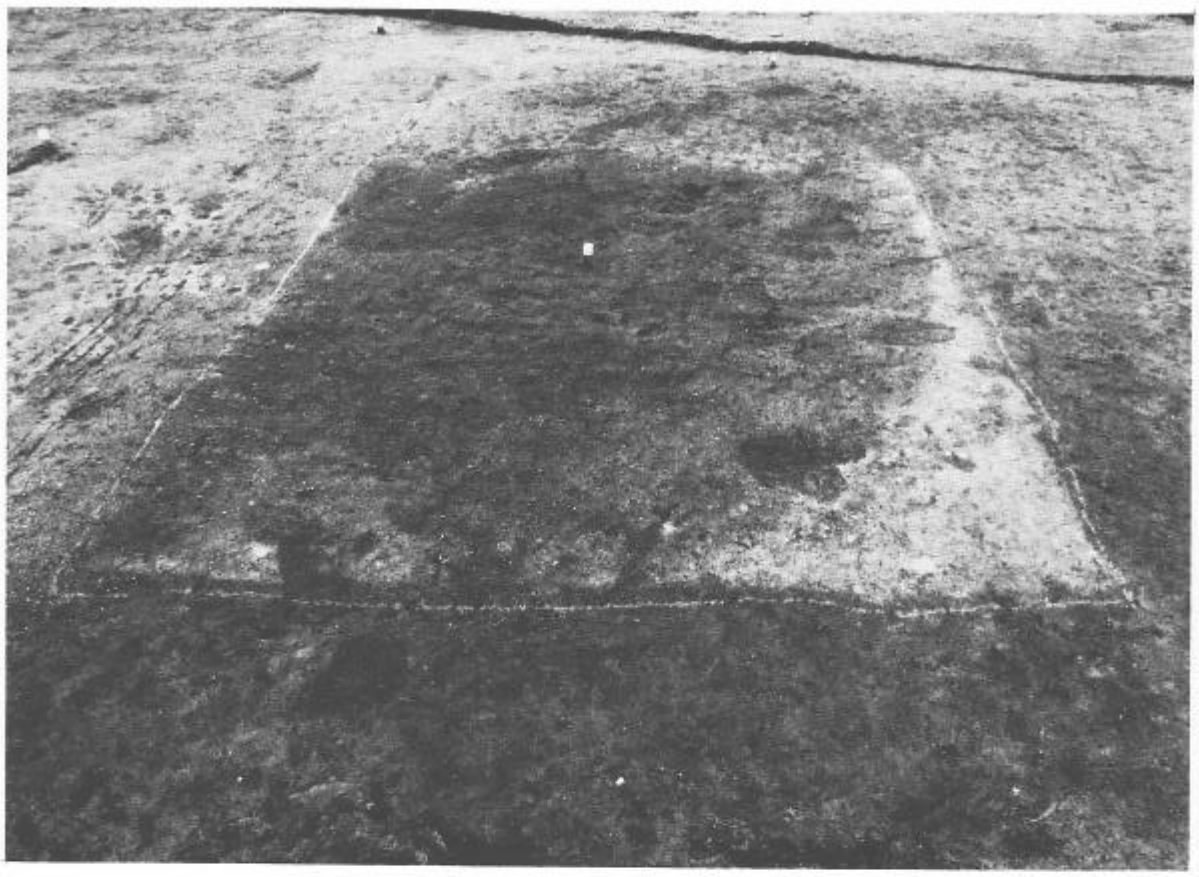
図版 2



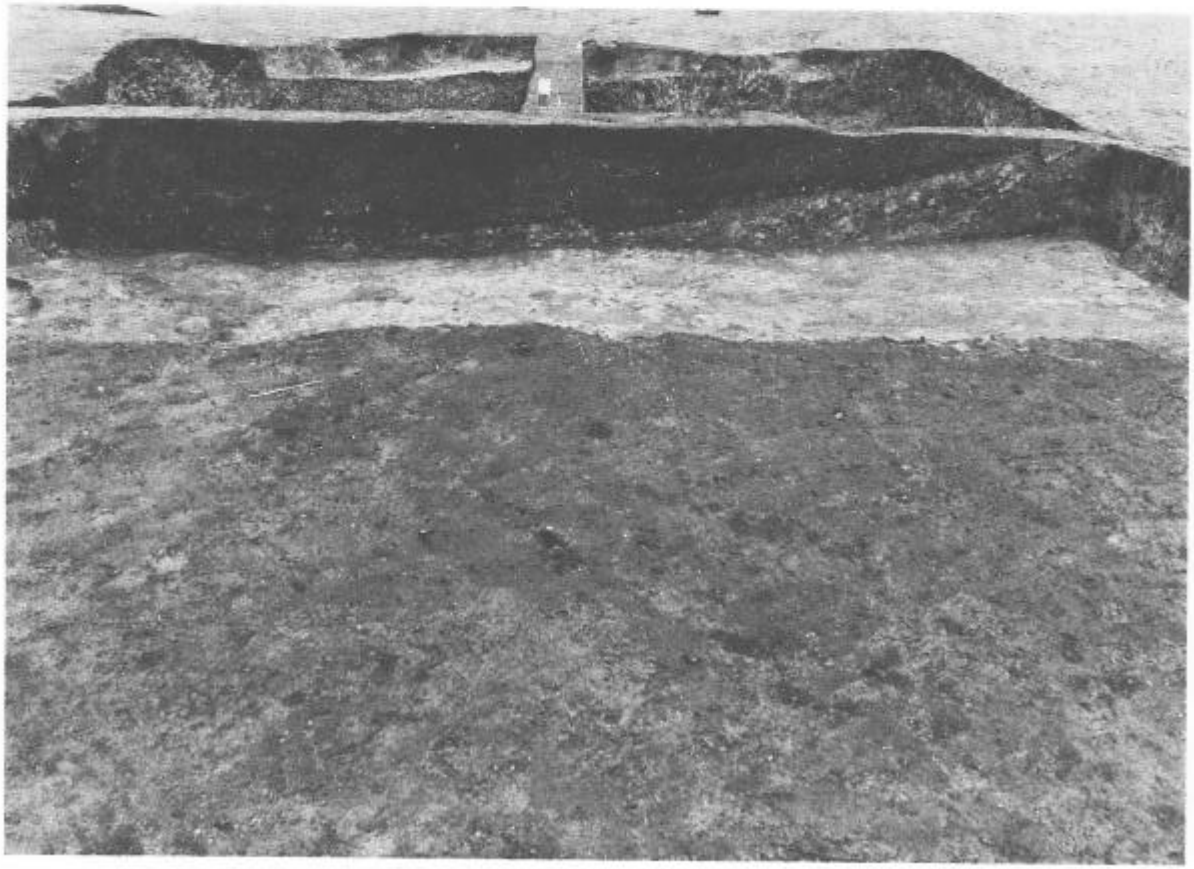
遺跡層序



図版 3　　遺跡層序

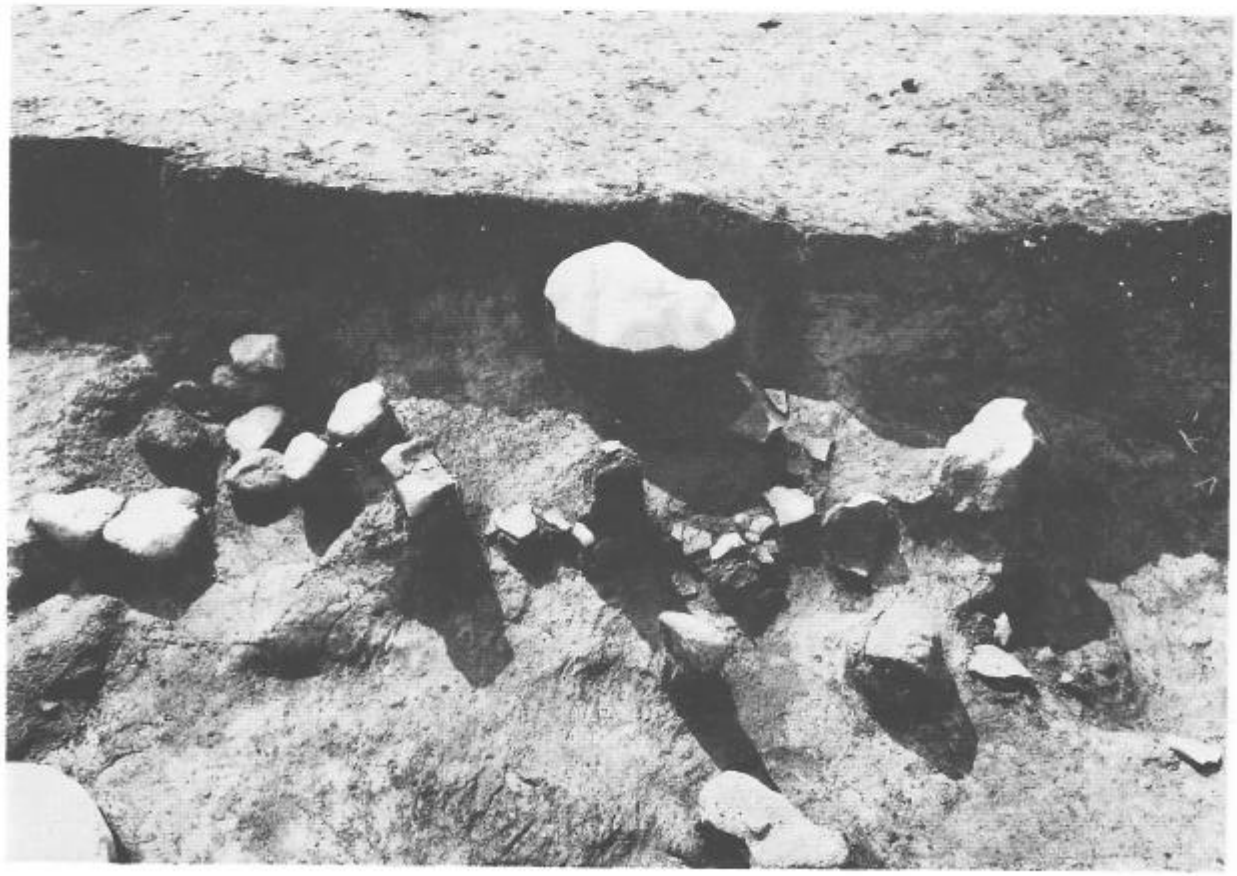


第１号住居跡確認状況



図版４　　第１号住居跡覆土堆積状況

第１号住居跡完掘状況



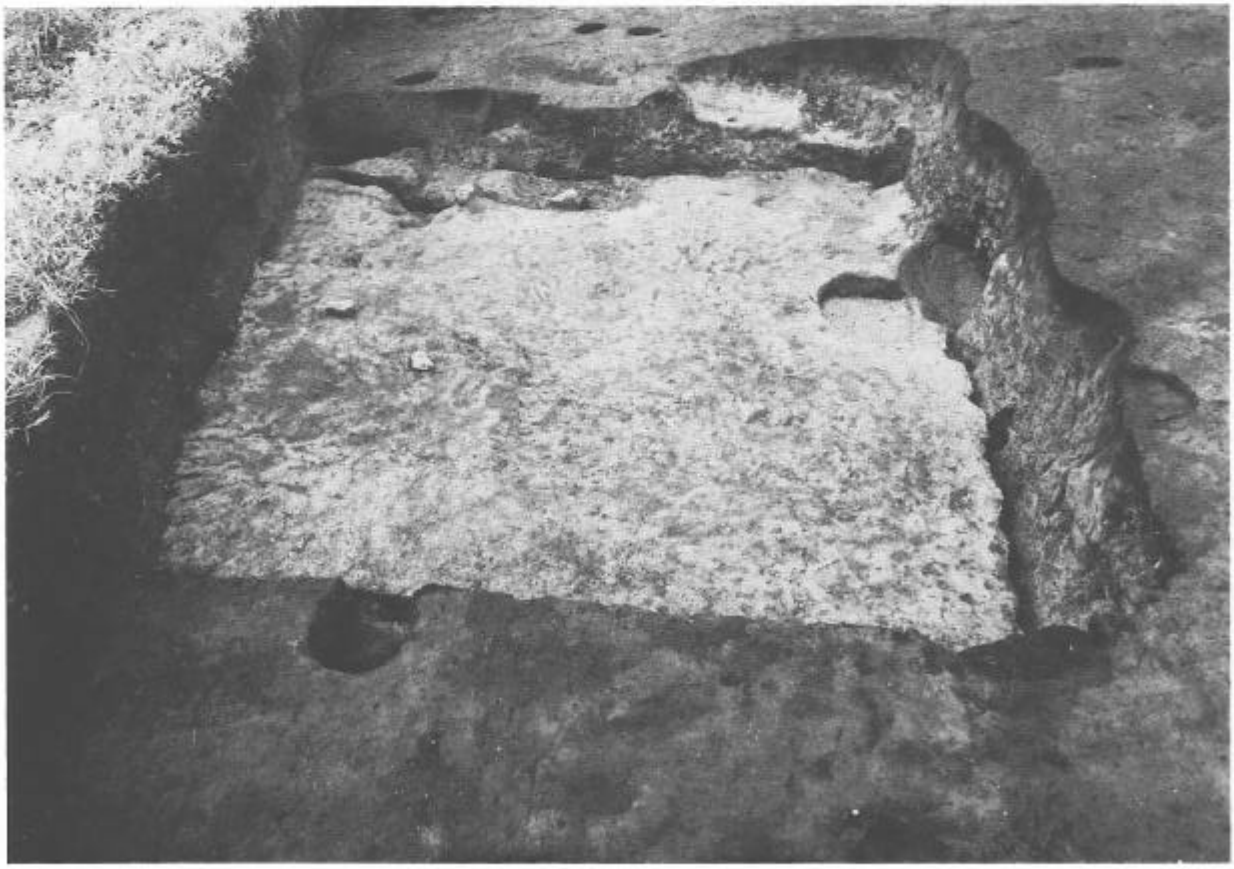
図版５

第１号住居跡カマド

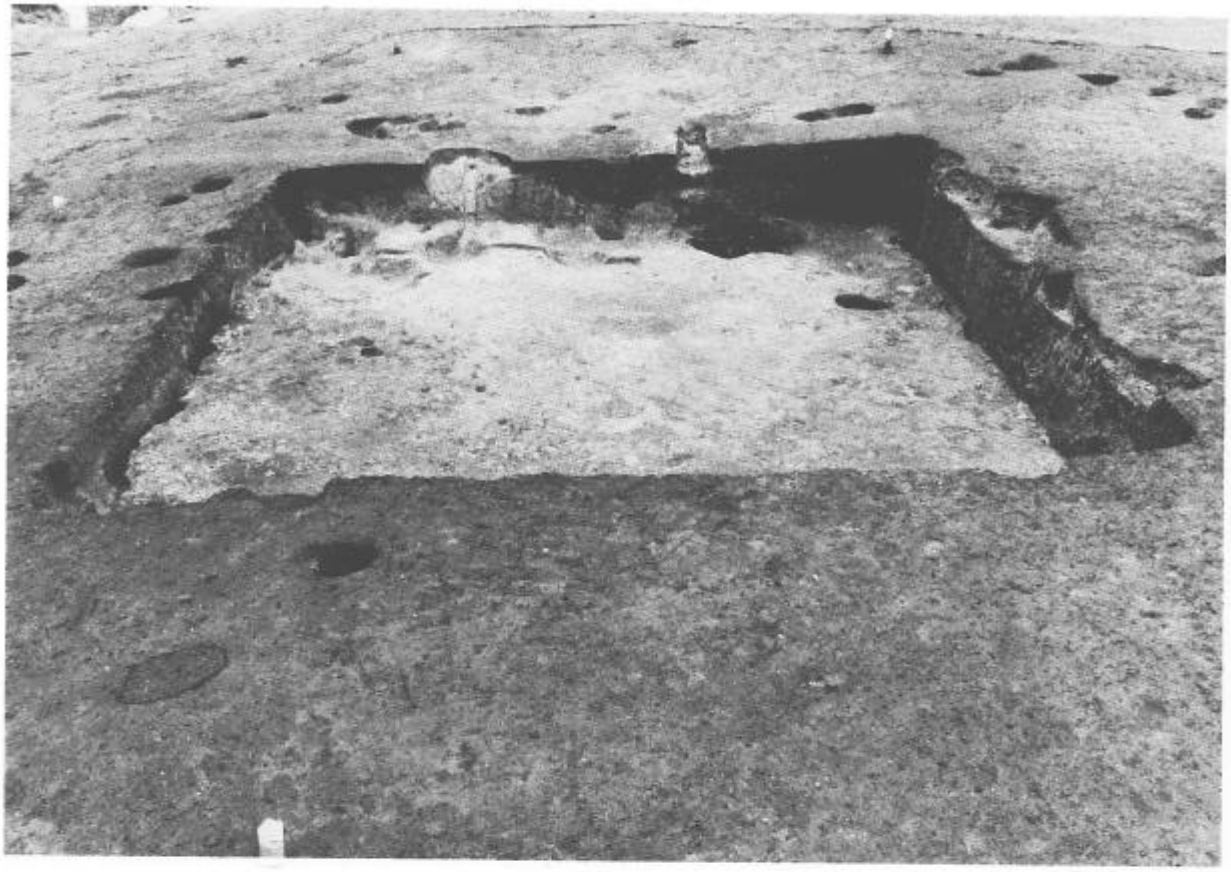
第２号住居跡確認状況

図版６　　第２号住居跡カマド

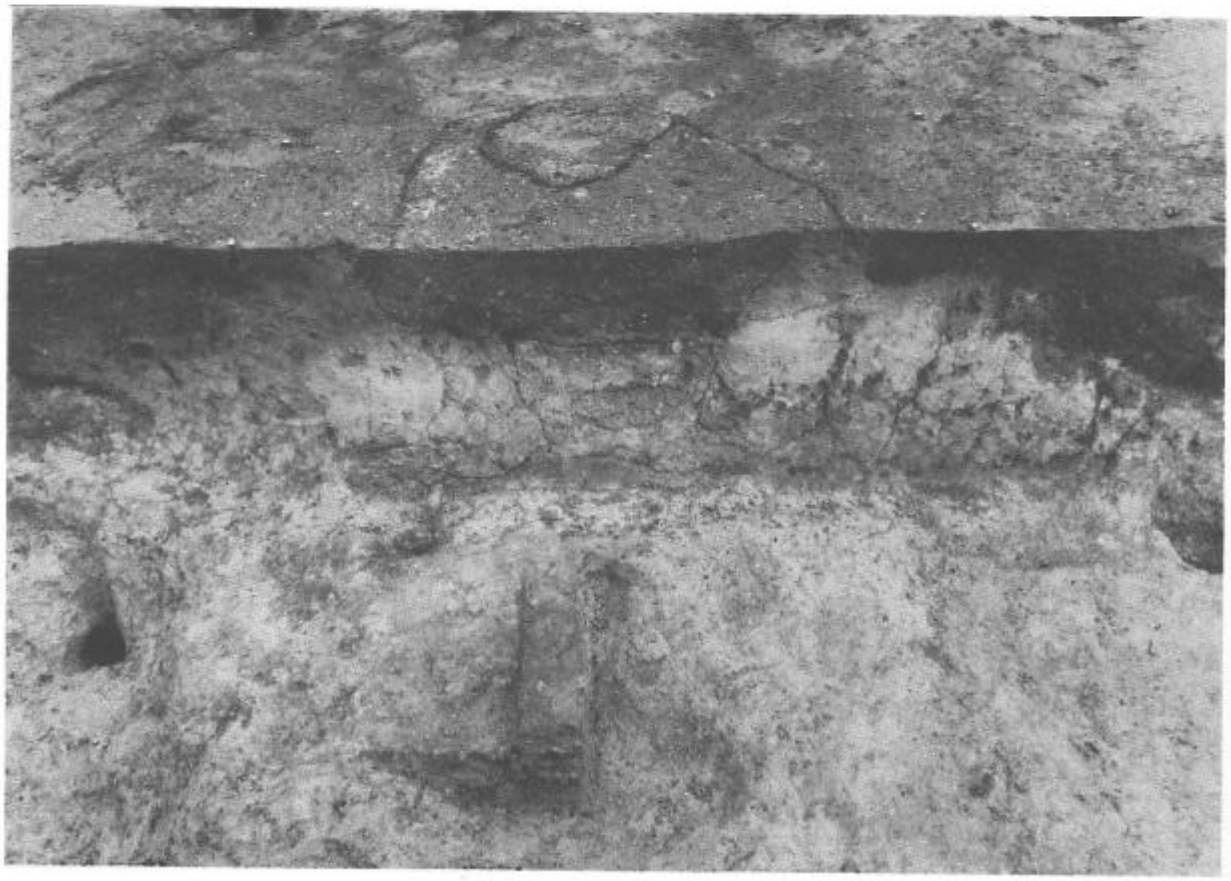
第２号住居跡カマド



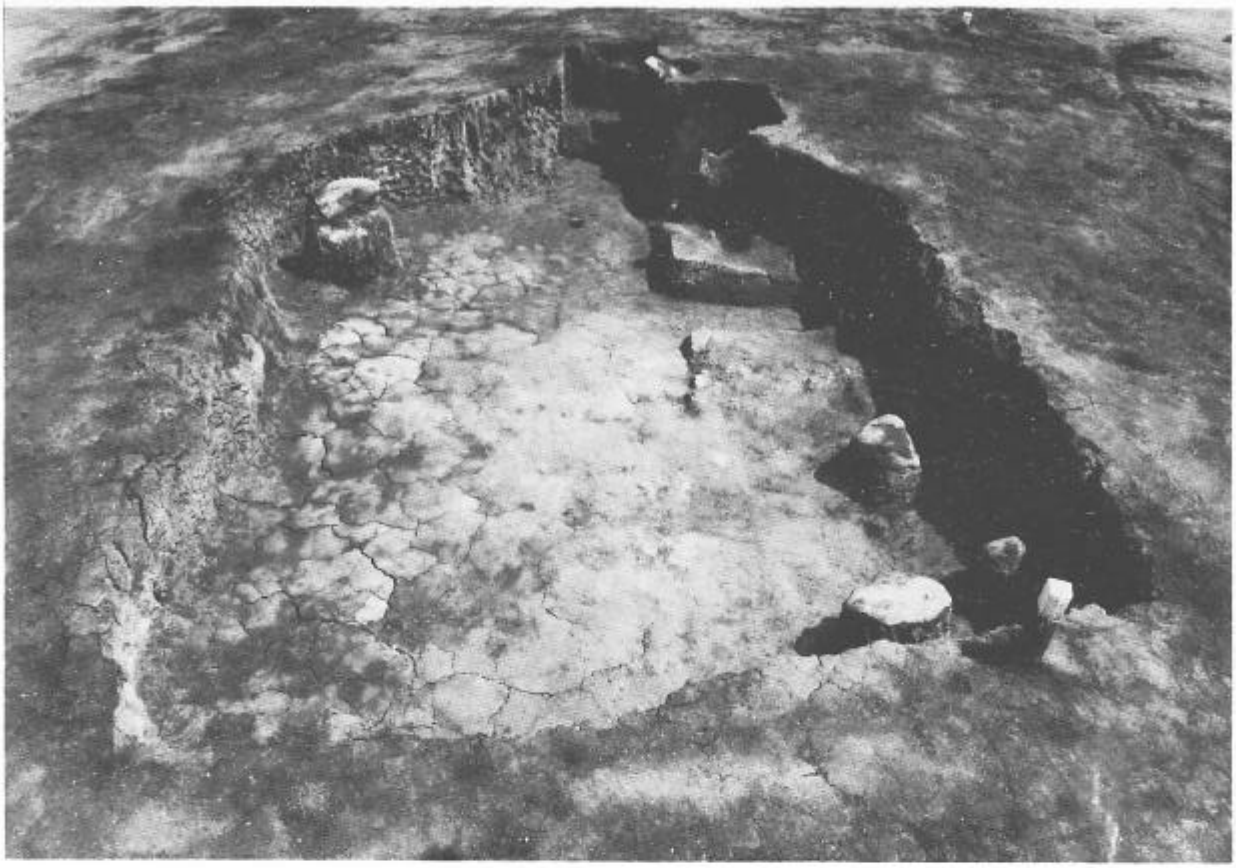
図版７　　第４号住居跡完掘状況



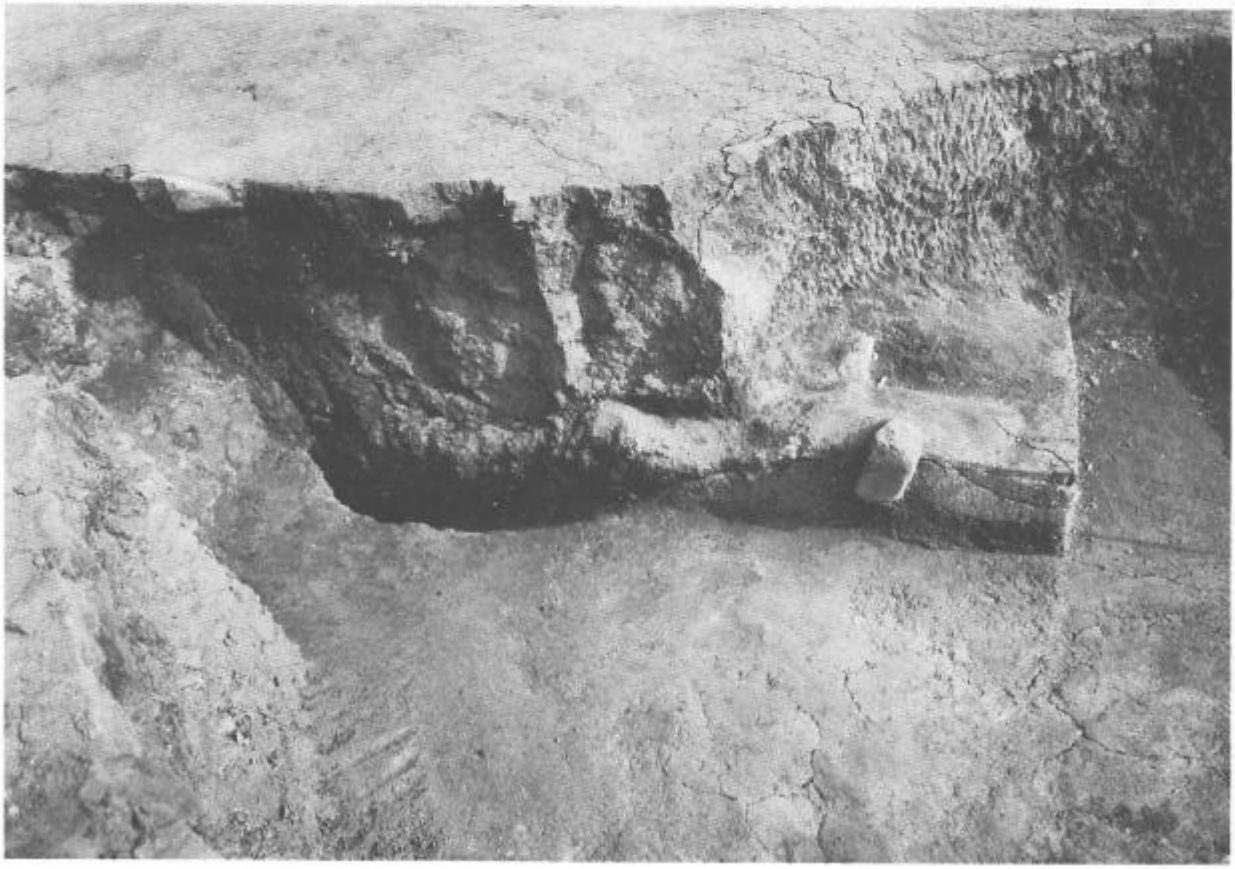
第３号住居跡完掘状況



図版８　　第３号住居跡カマド



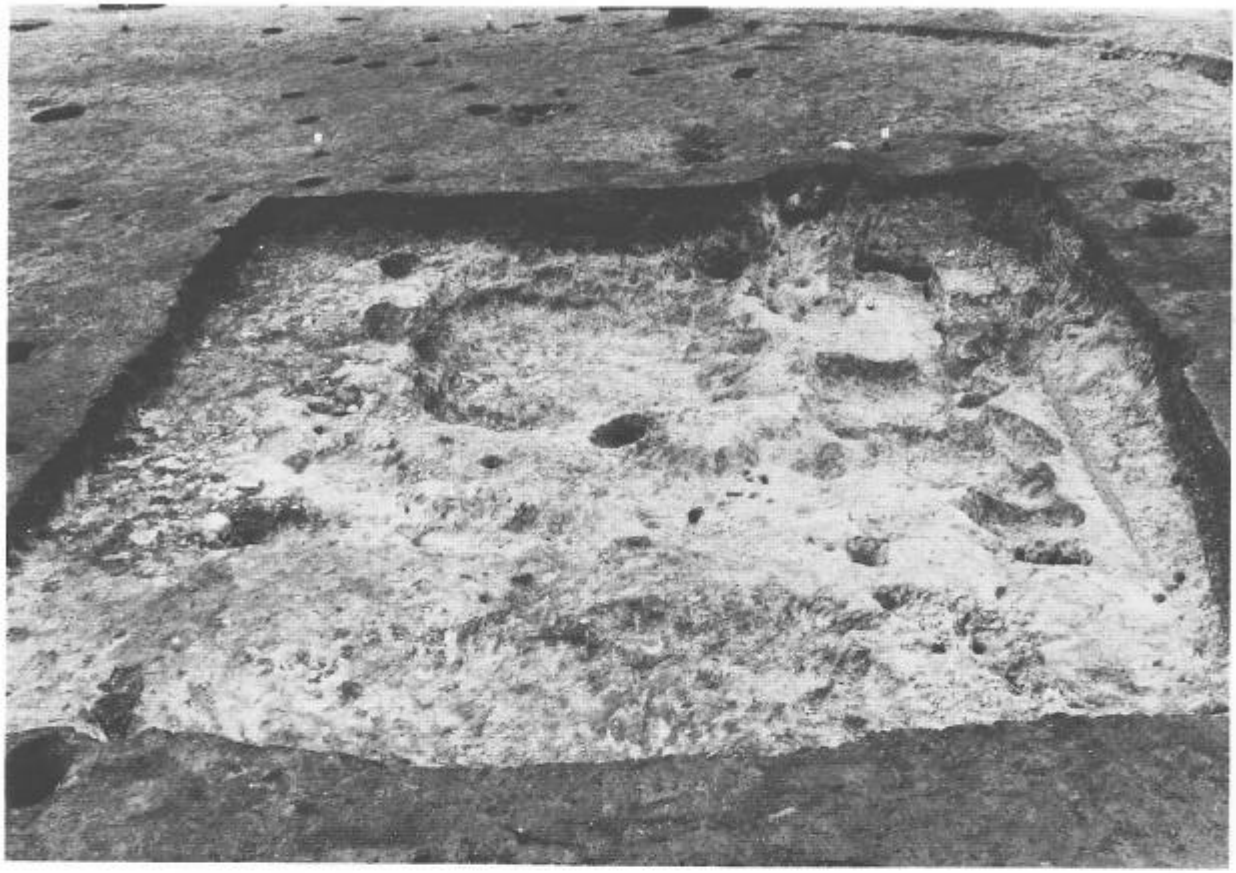
第５号住居跡完掘状況



図版９　　第５号住居跡カマド煙道

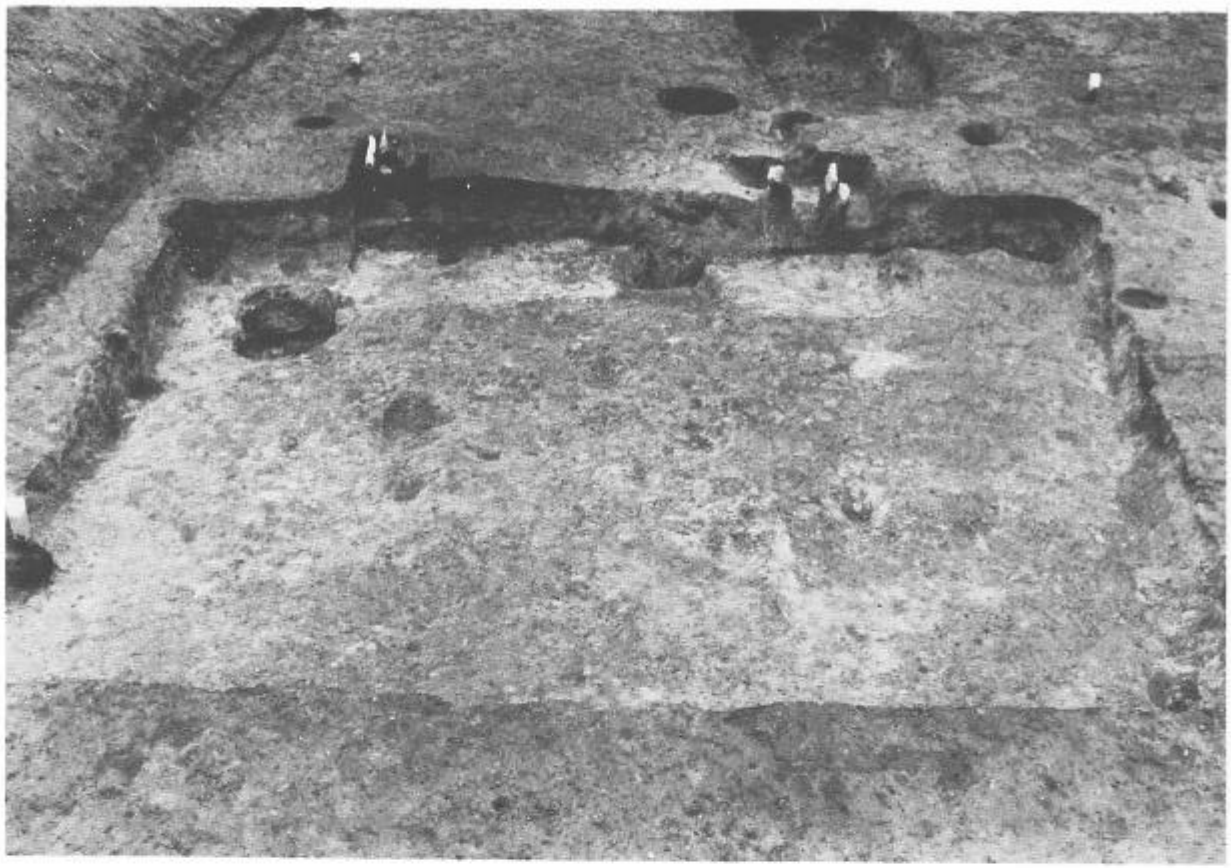
第６号住居跡完掘状況

図版10　　第６号住居跡カマド

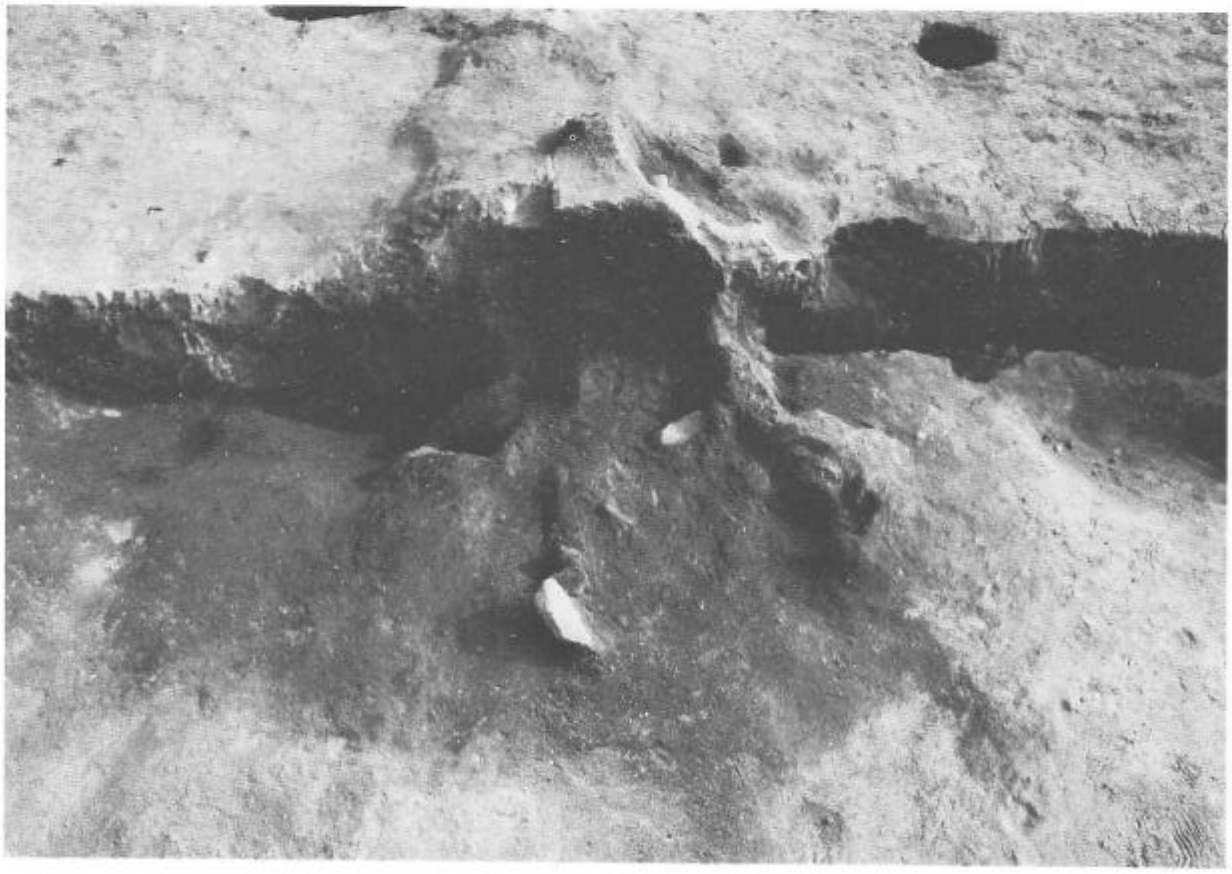


第７号住居跡(Ａ　Ｂ)完掘状況

図版11　　第７号住居跡カマド

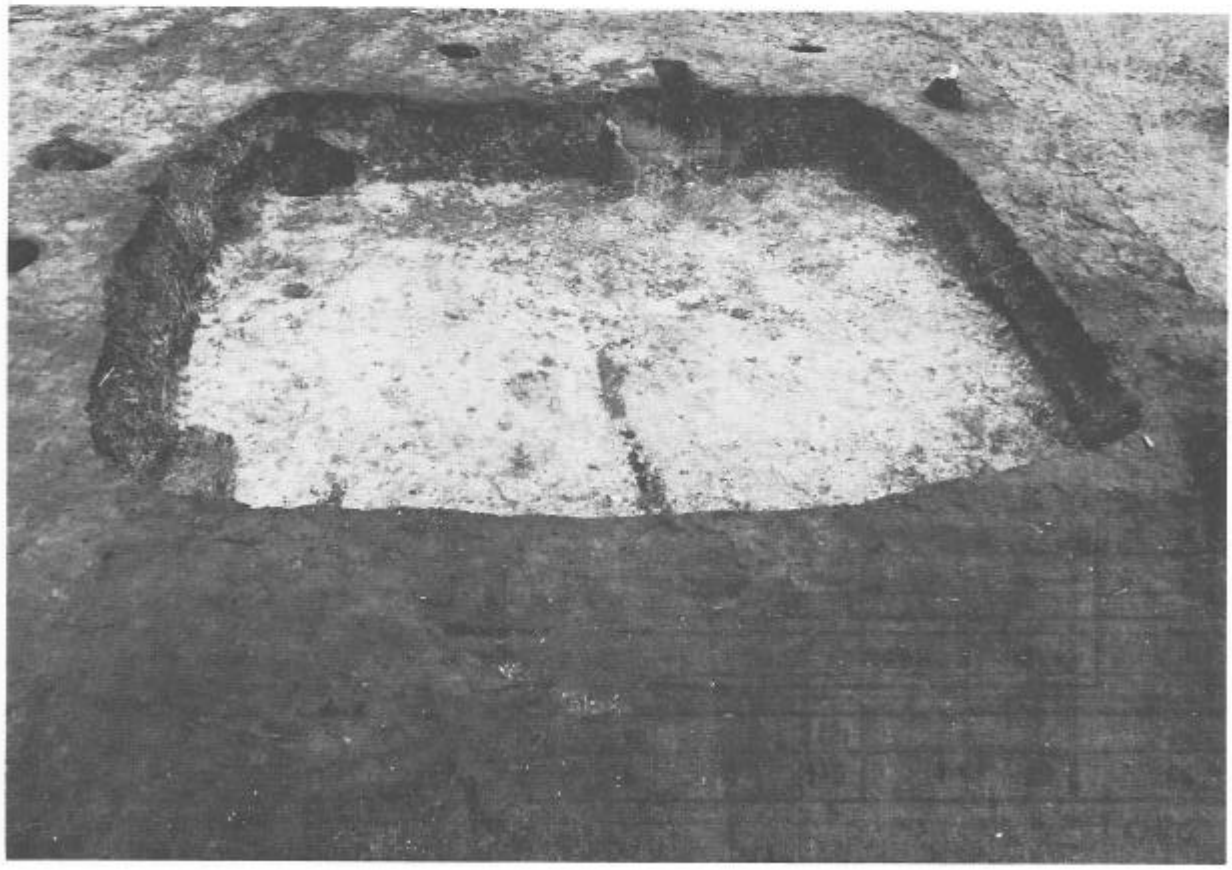


第８号住居跡完掘状況



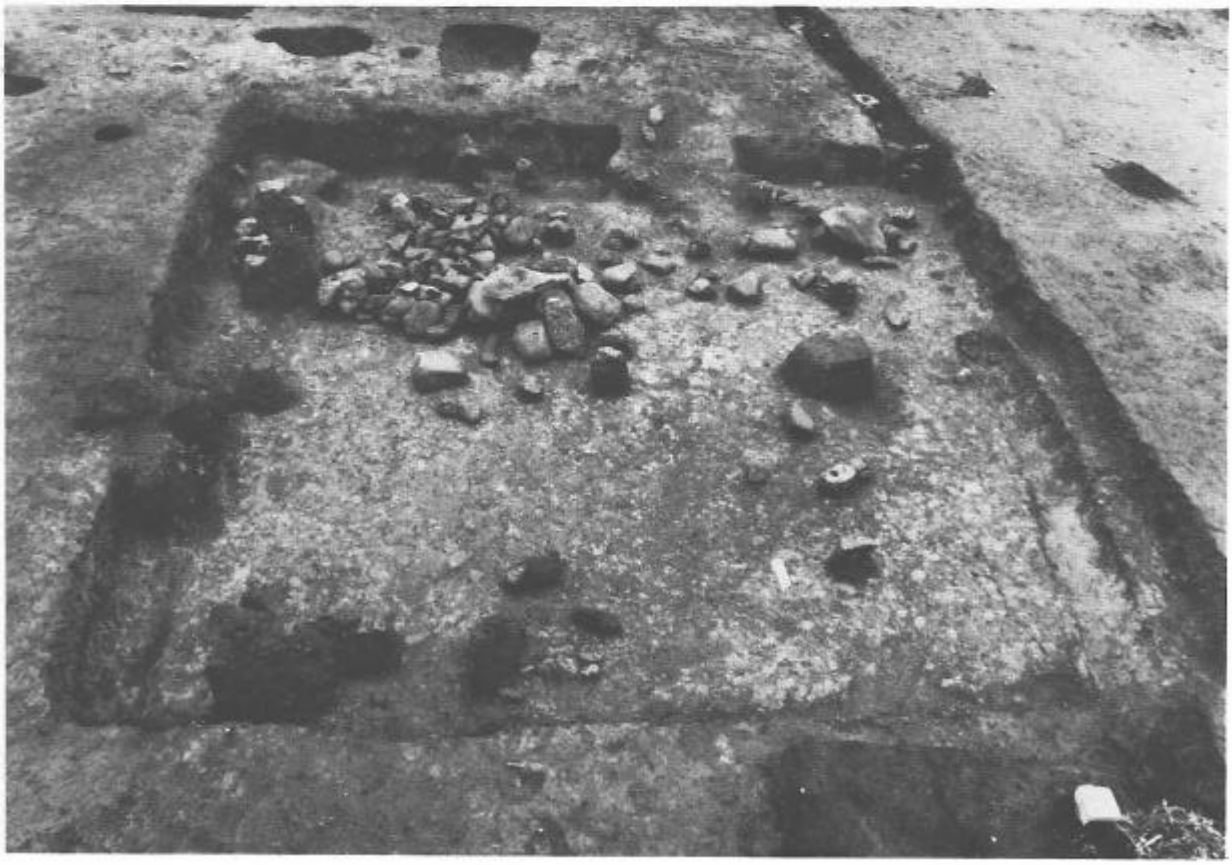
図版12　　第８号住居跡カマドＡ

第８号住居跡カマドＢ



第12号住居跡完掘状況

第12号住居跡カマド



第11号住居跡礫出土状況

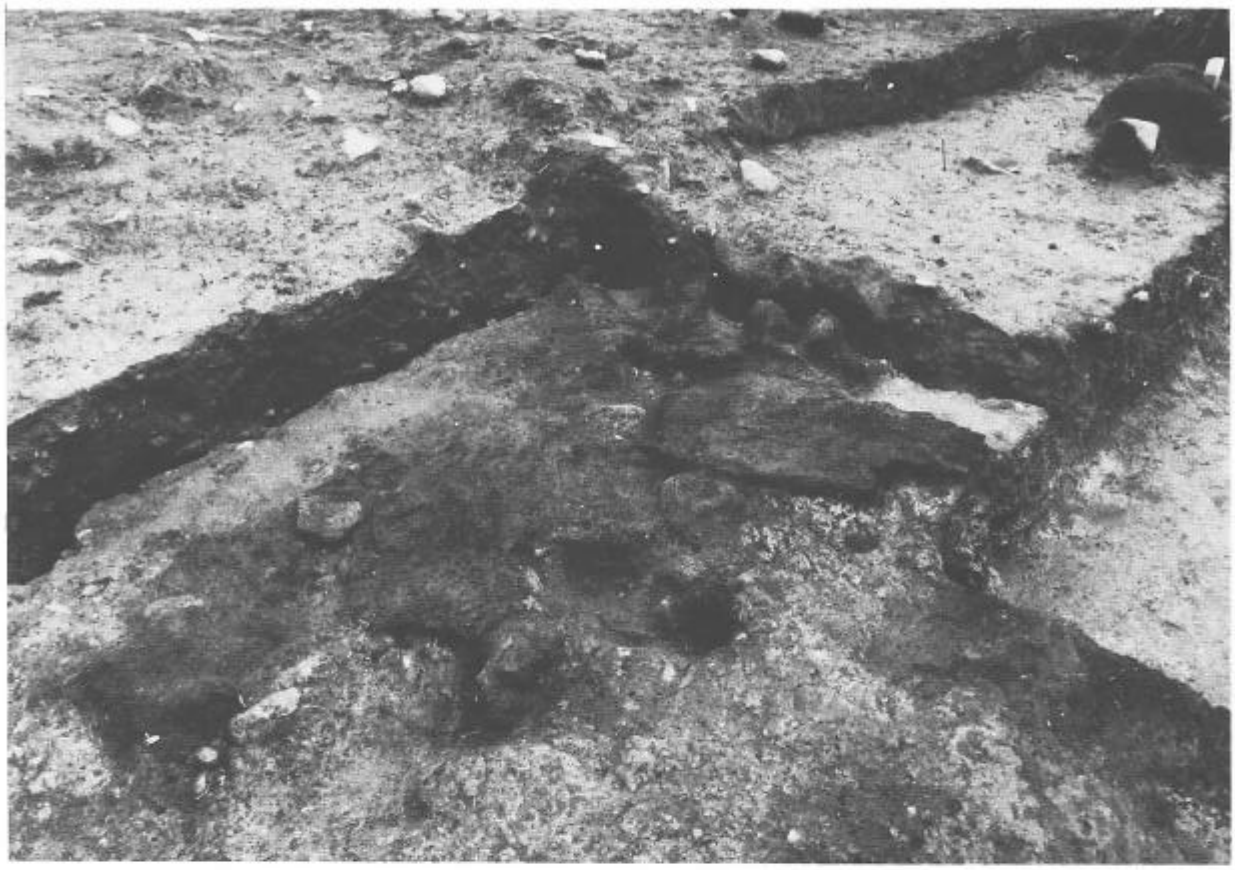
第11号住居跡礫出土状況

図版15

第11号住居跡完掘状況

第11号住居跡カマド

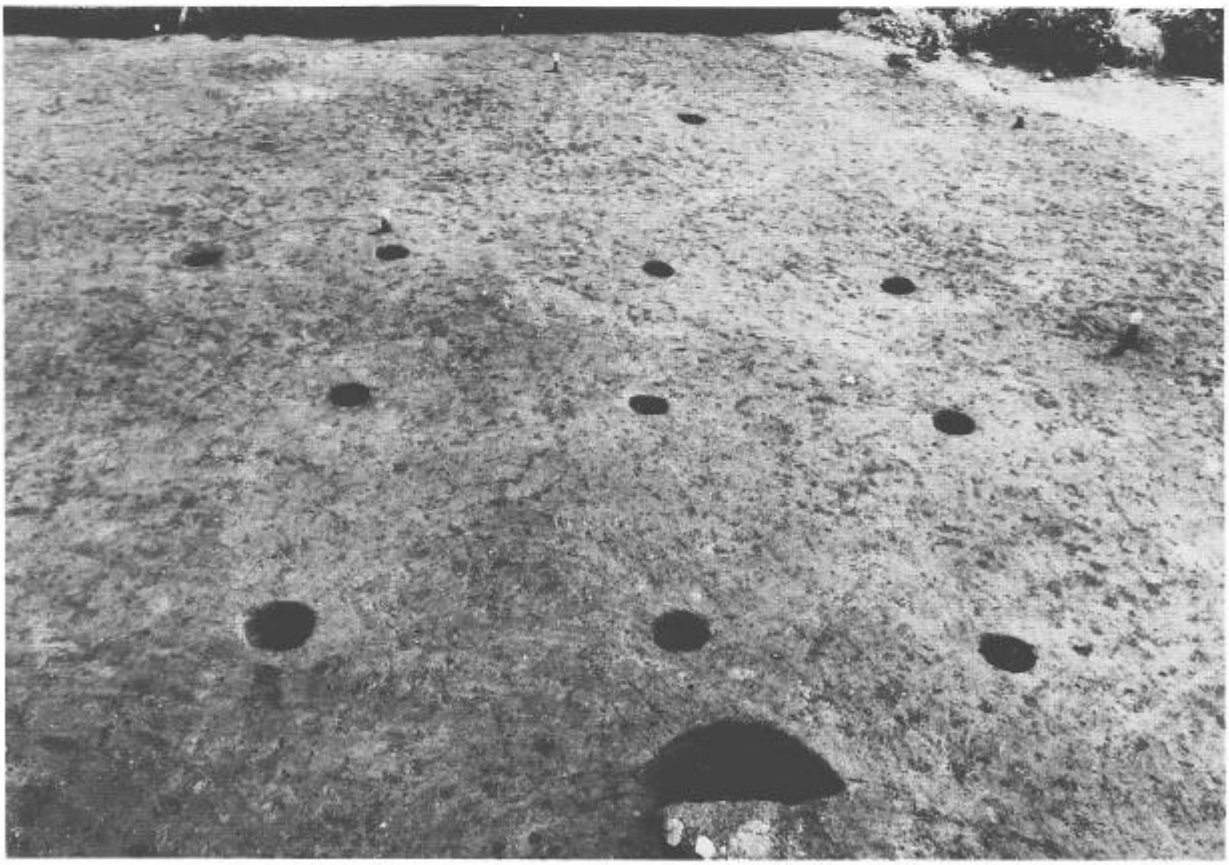
図版16　　第９号・第10号住居跡完掘状況



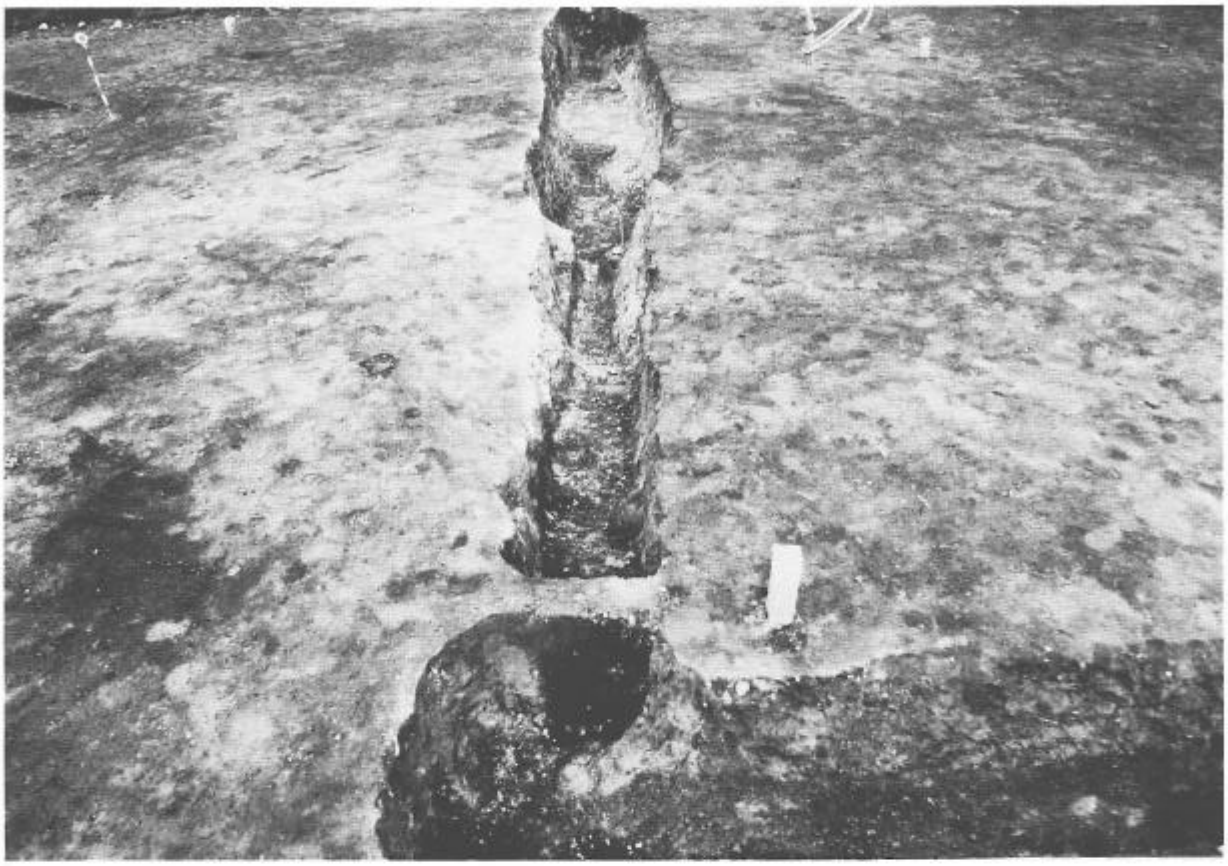
第10号住居跡炭化材出土状況

第９号住居跡カマド

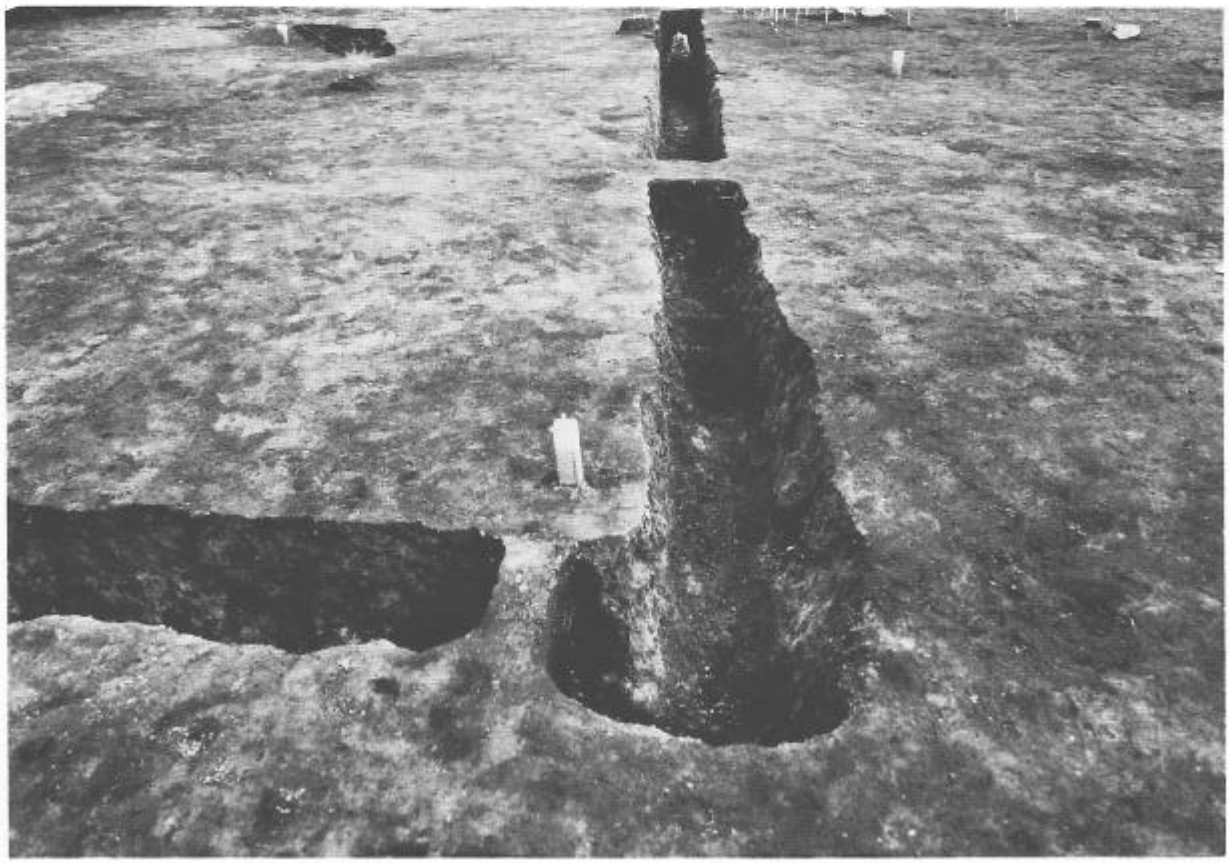
第９号住居跡カマド



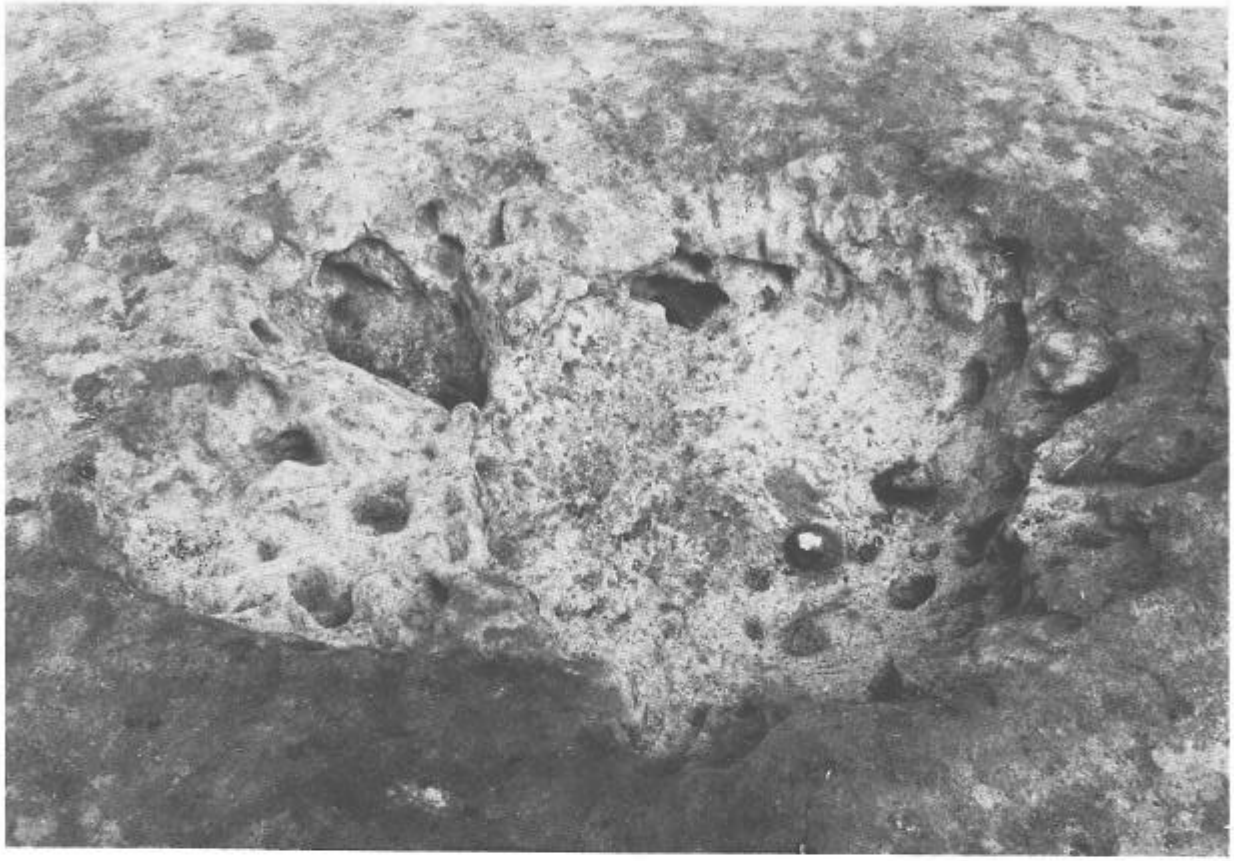
図版18　　掘立柱建物跡



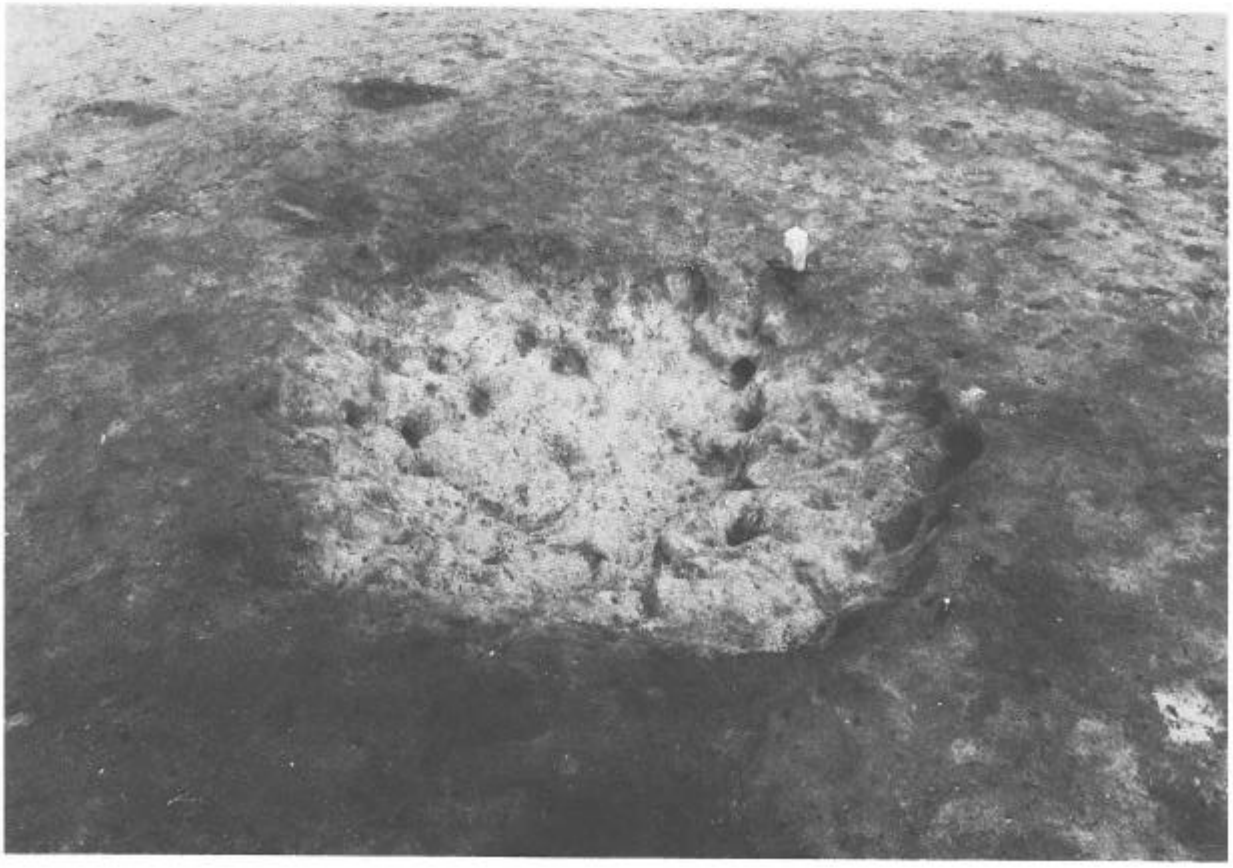
第1号溝跡（西▶東）



図版19　　第1号溝跡（南▶北）



第１号土壙完掘状況



第２号土壙完掘状況

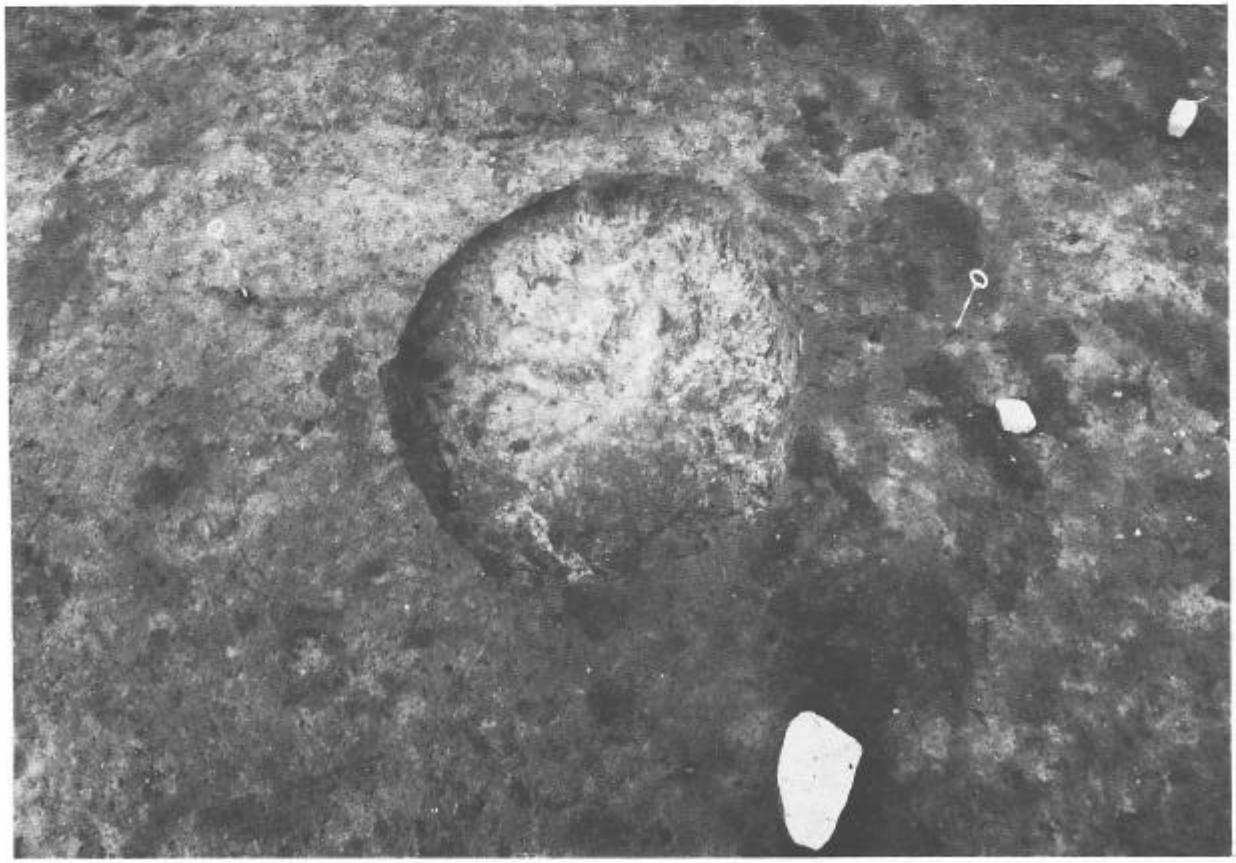
第11号土壙完掘状況

第５号土壙完掘状況

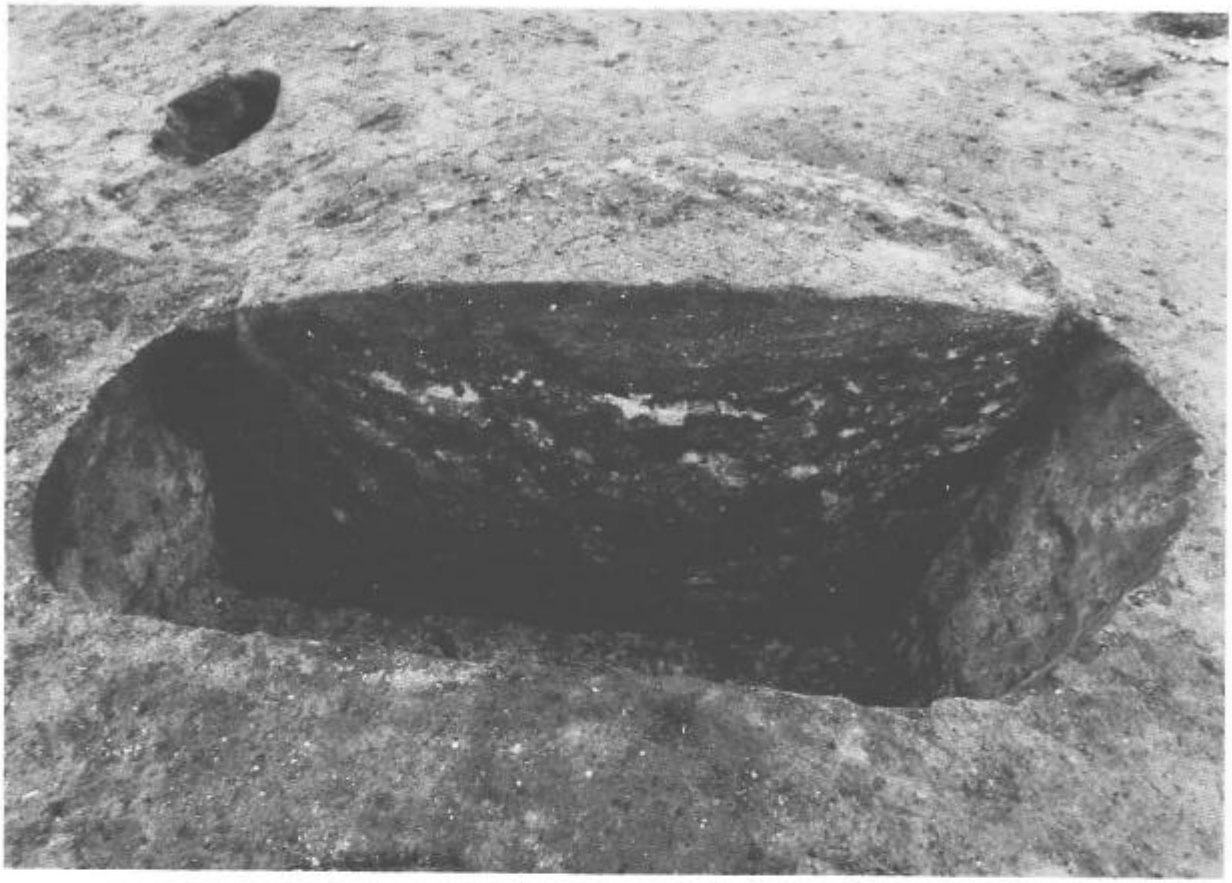
第6号土壙完掘状況

第7号土壙完掘状況

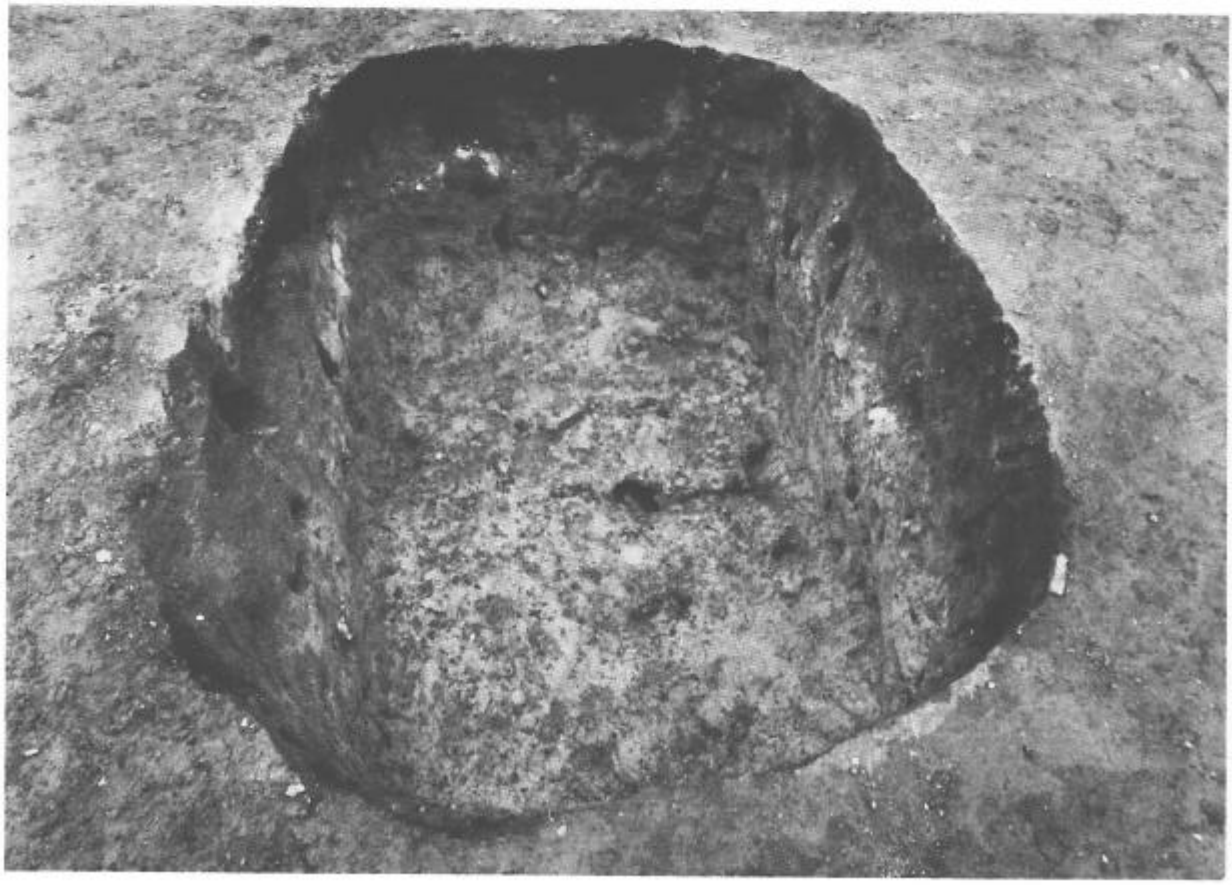
第８号土壙完掘状況



第10号土壙完掘状況

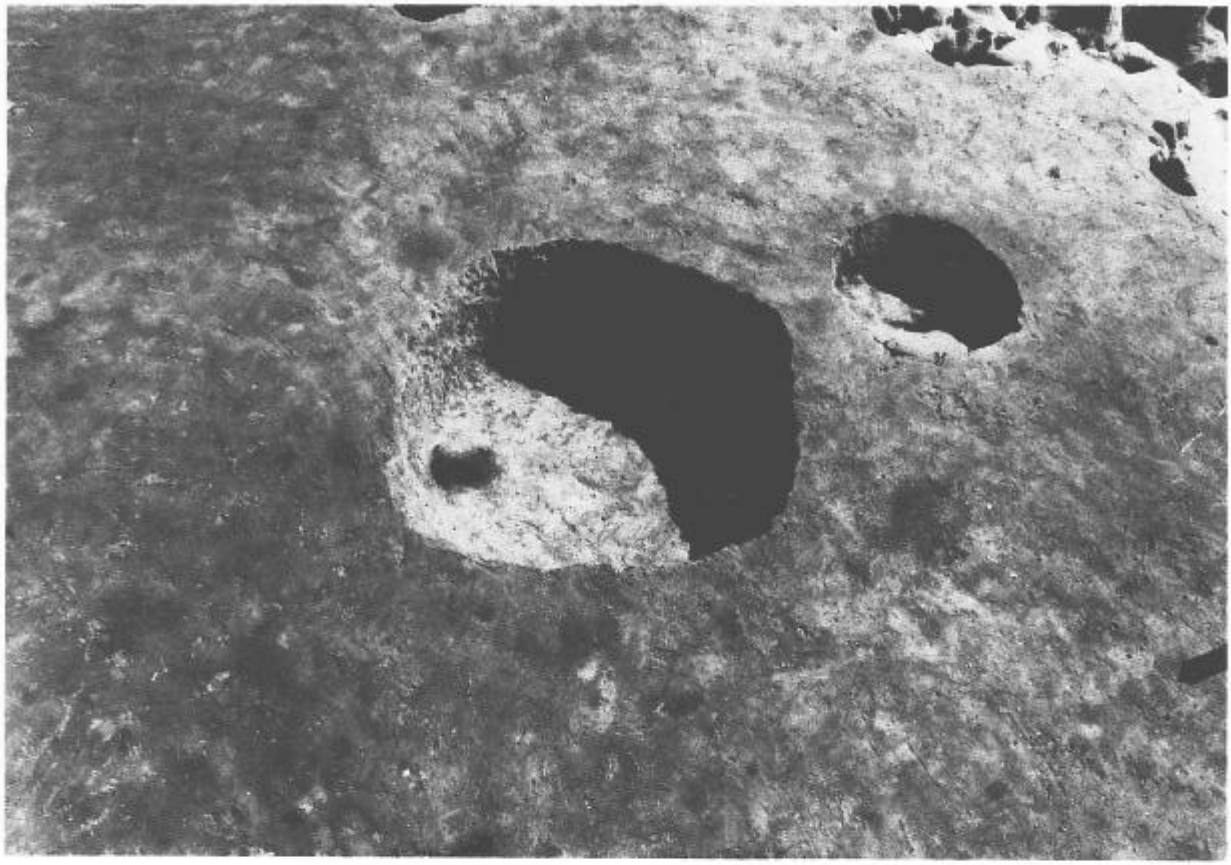


第12号土壙内覆土堆積状況

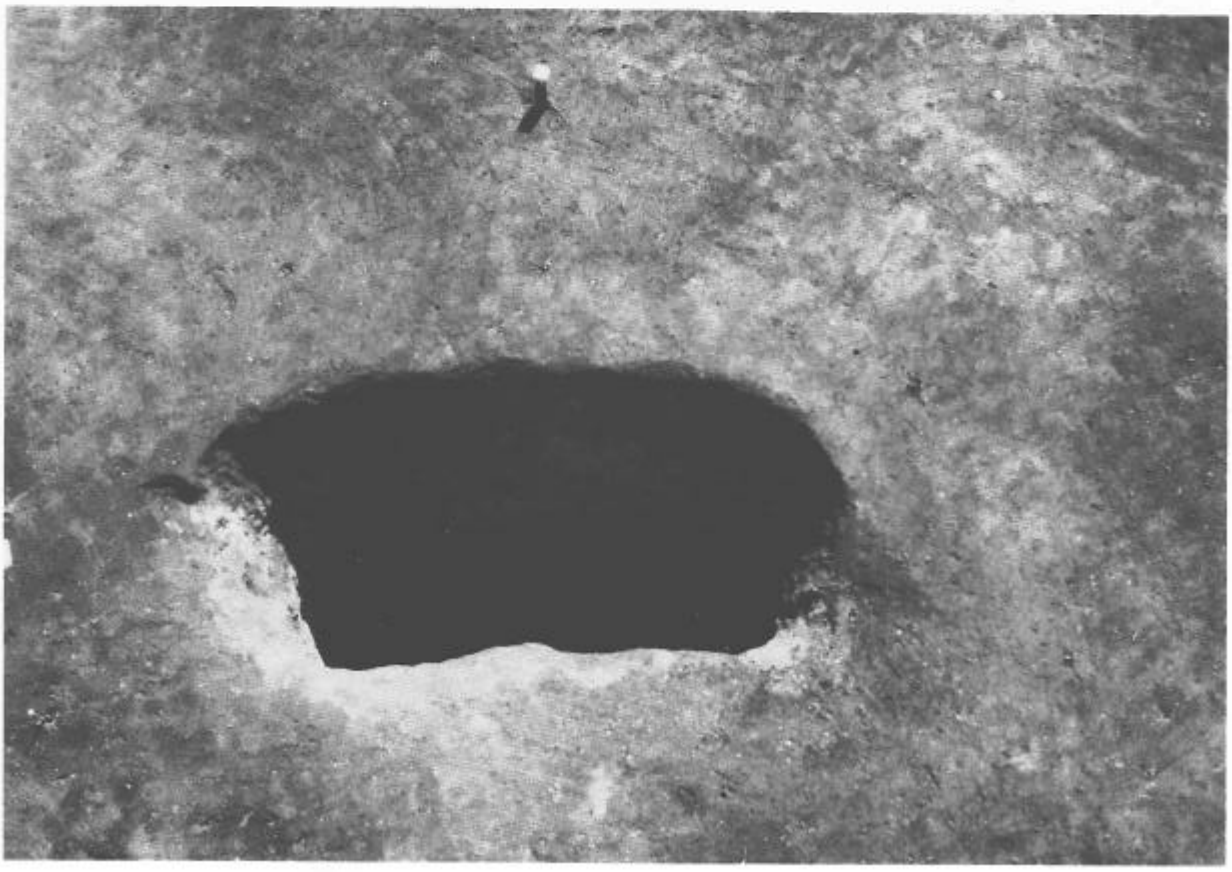


図版24

第12号土壙完掘状況

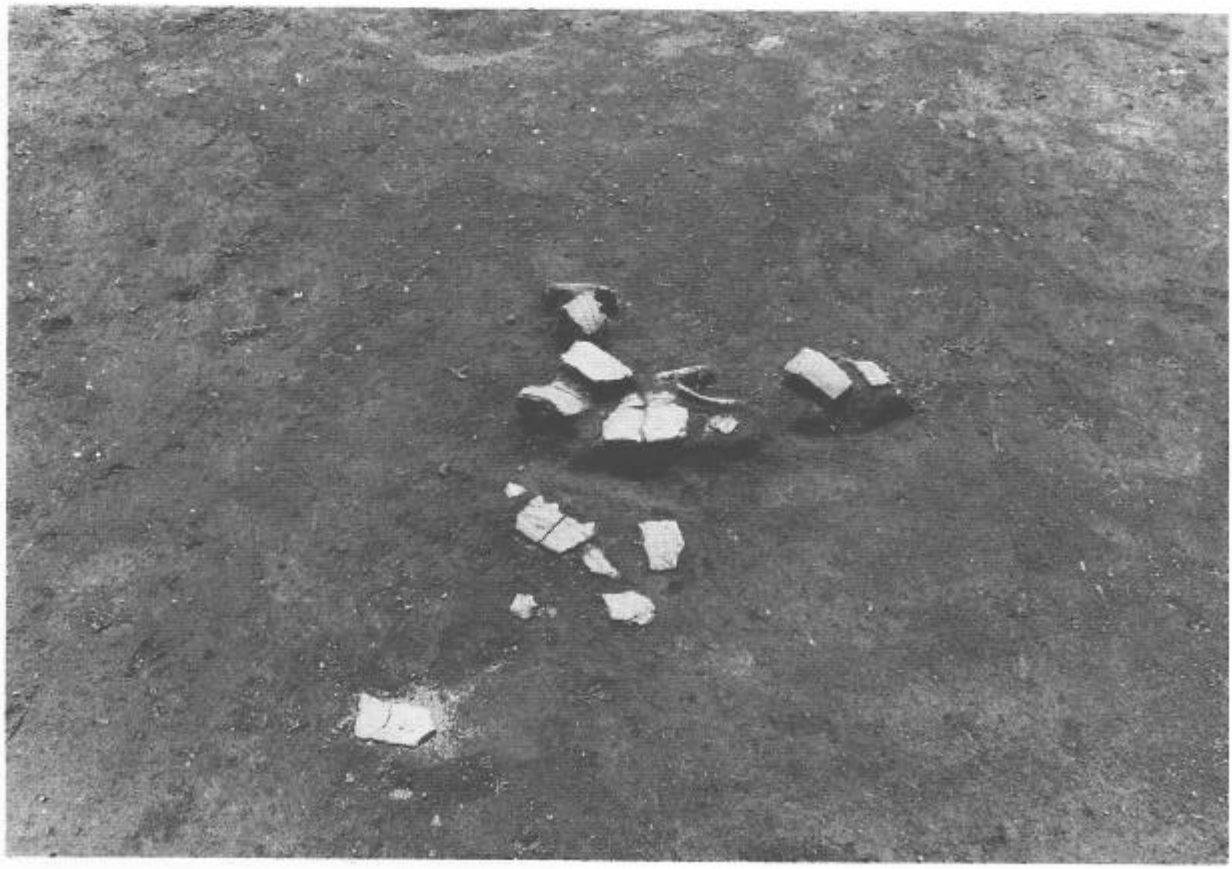


第13号，第14号土壙完掘状況



第３号土壙完掘状況

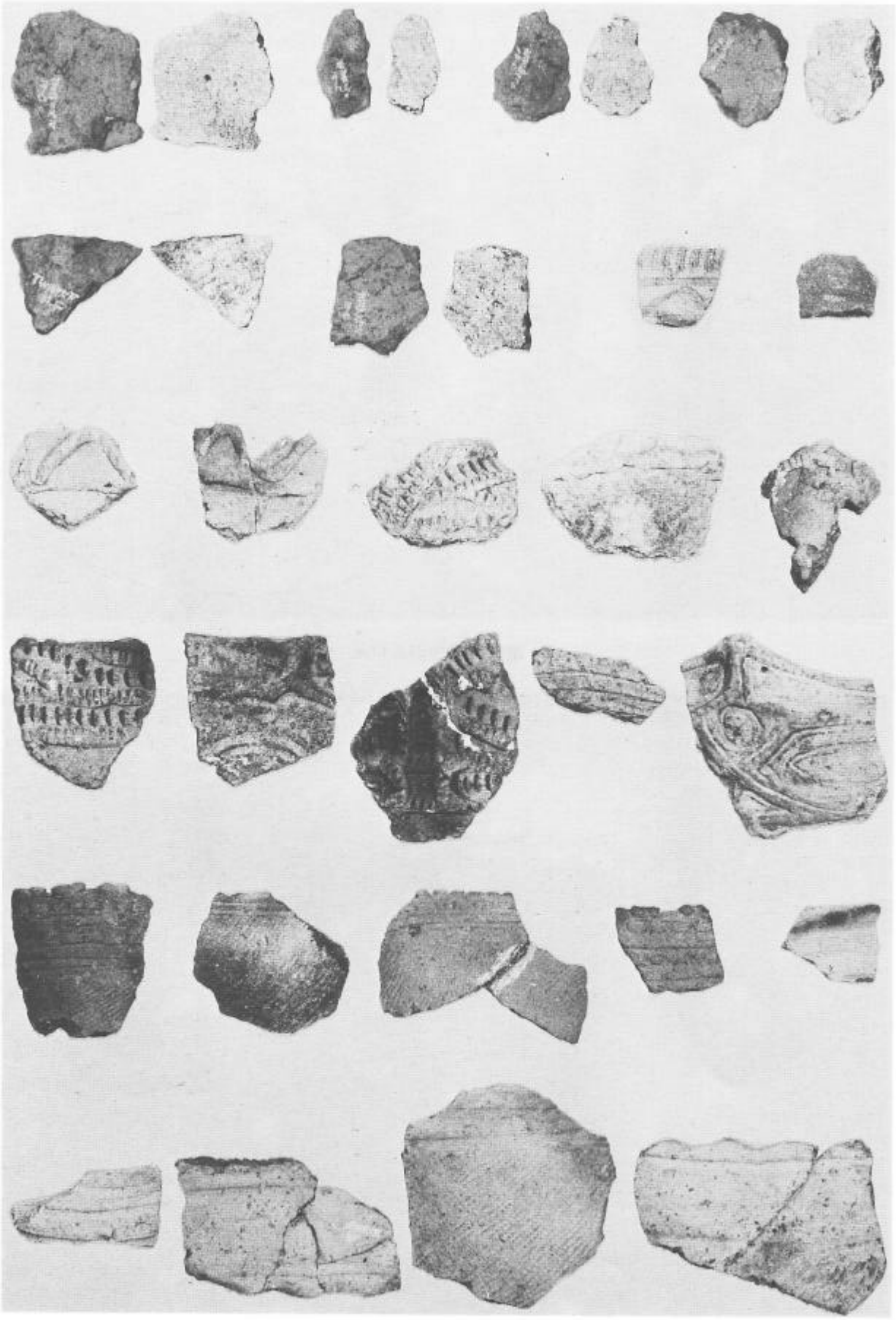
遺構外遺物出土状況



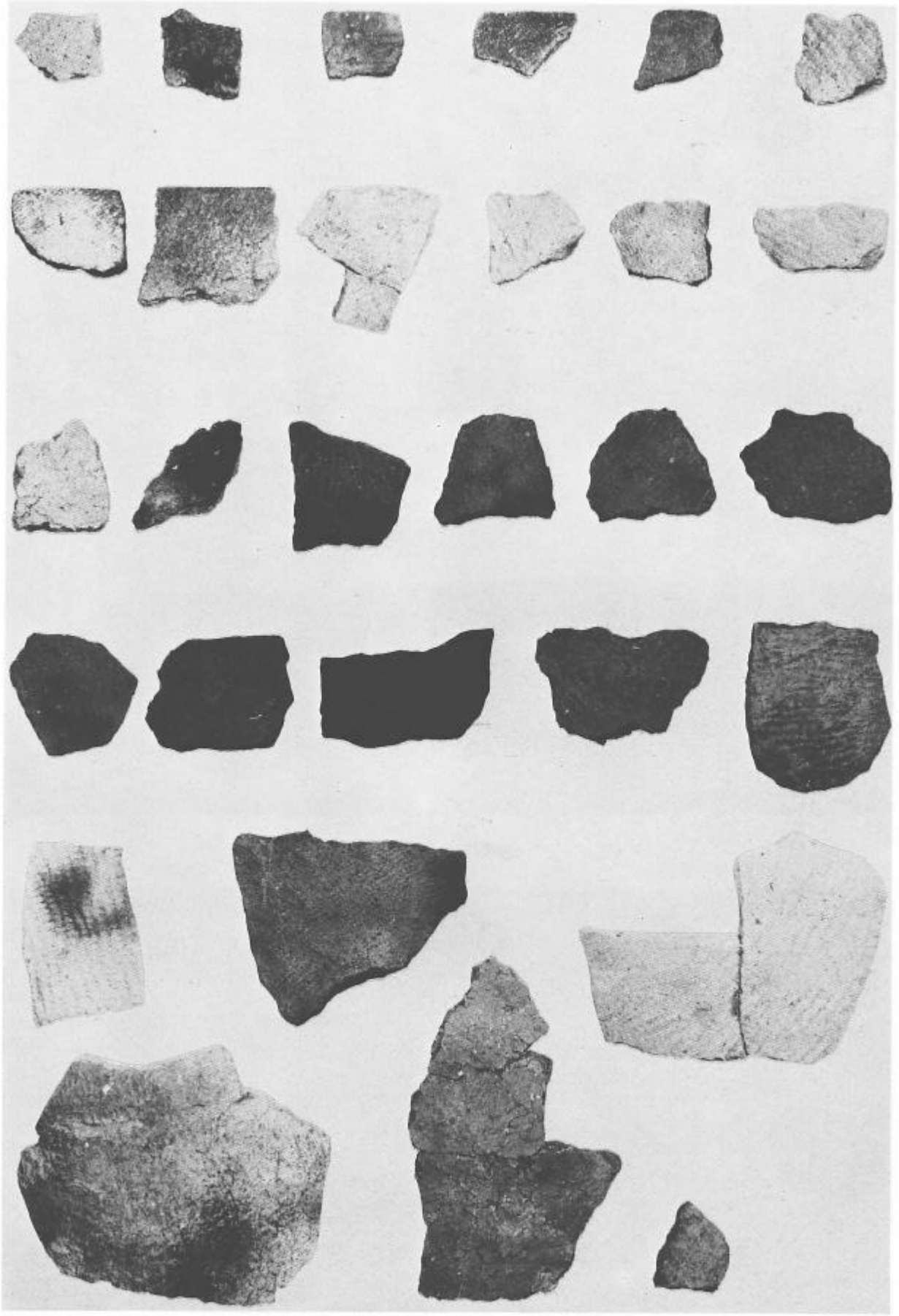
図版26　遺構外遺物出土状況

遺構外遺物出土状況

図版27　　遺構外遺物出土状況

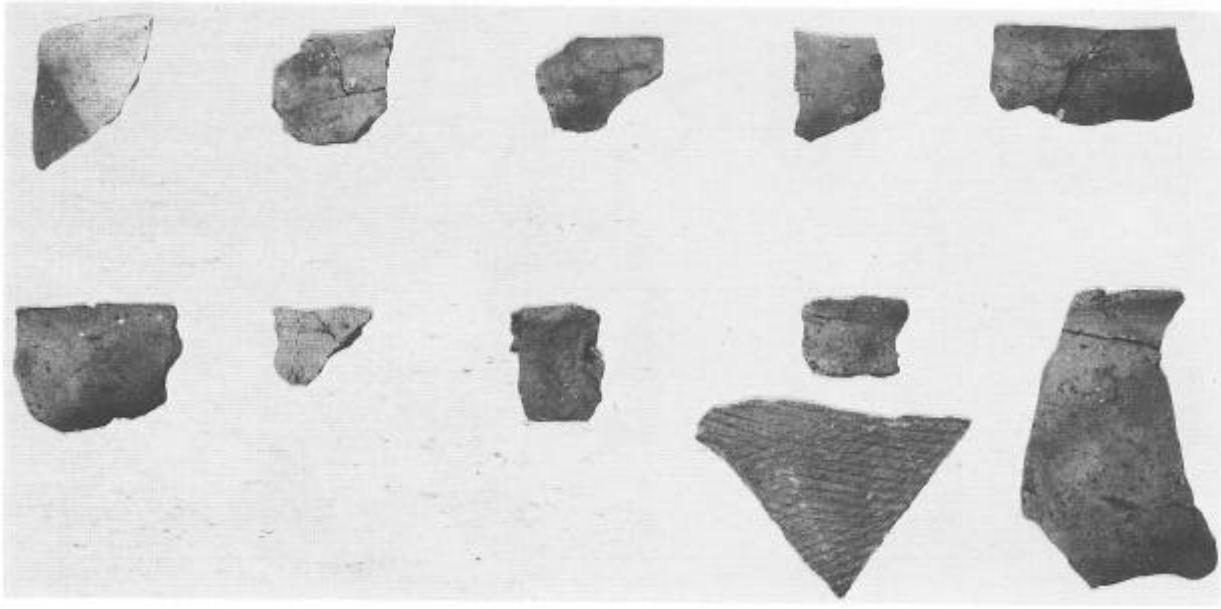


図版28　　遺構外出土遺物

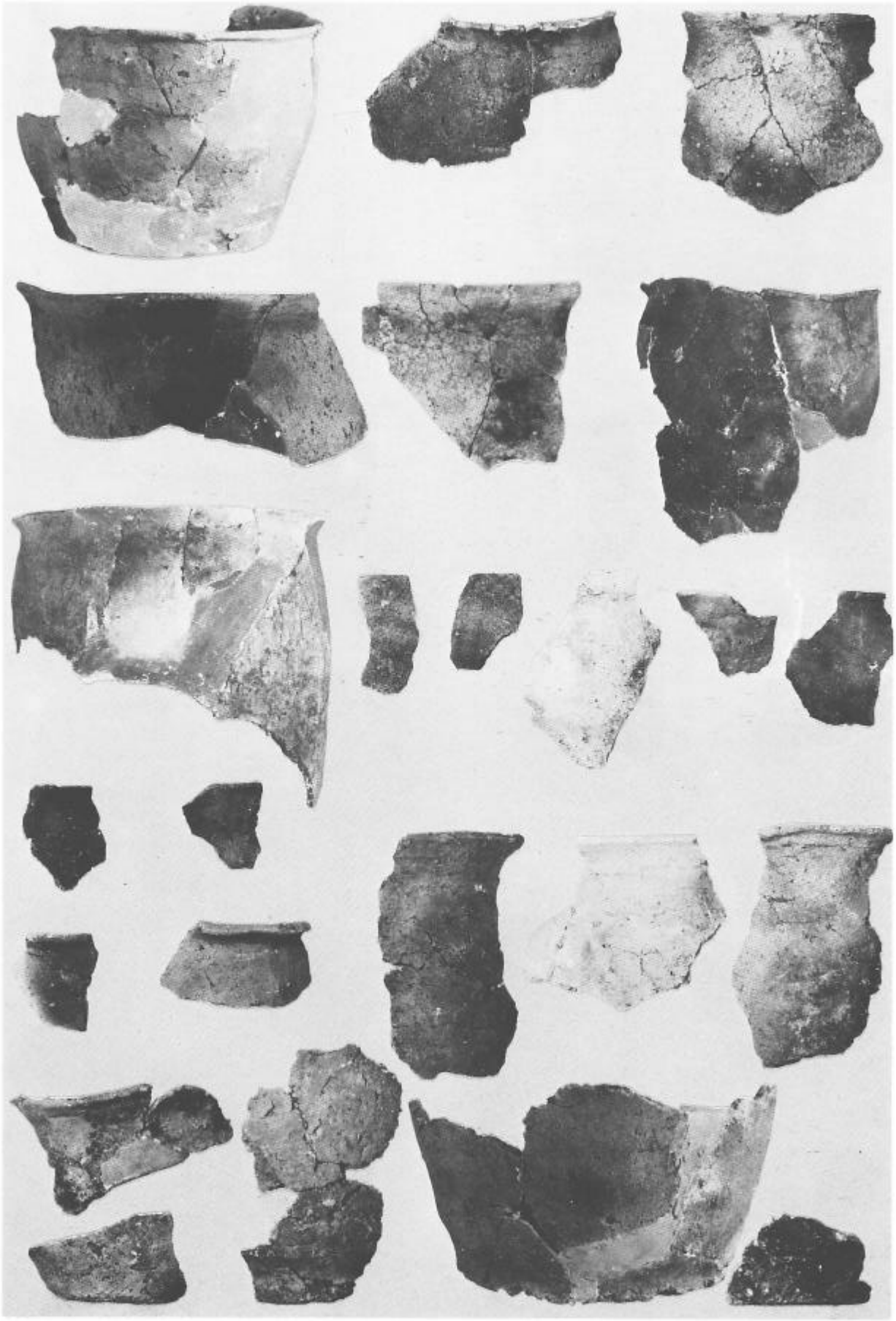


図版29　　遺構外出土遺物

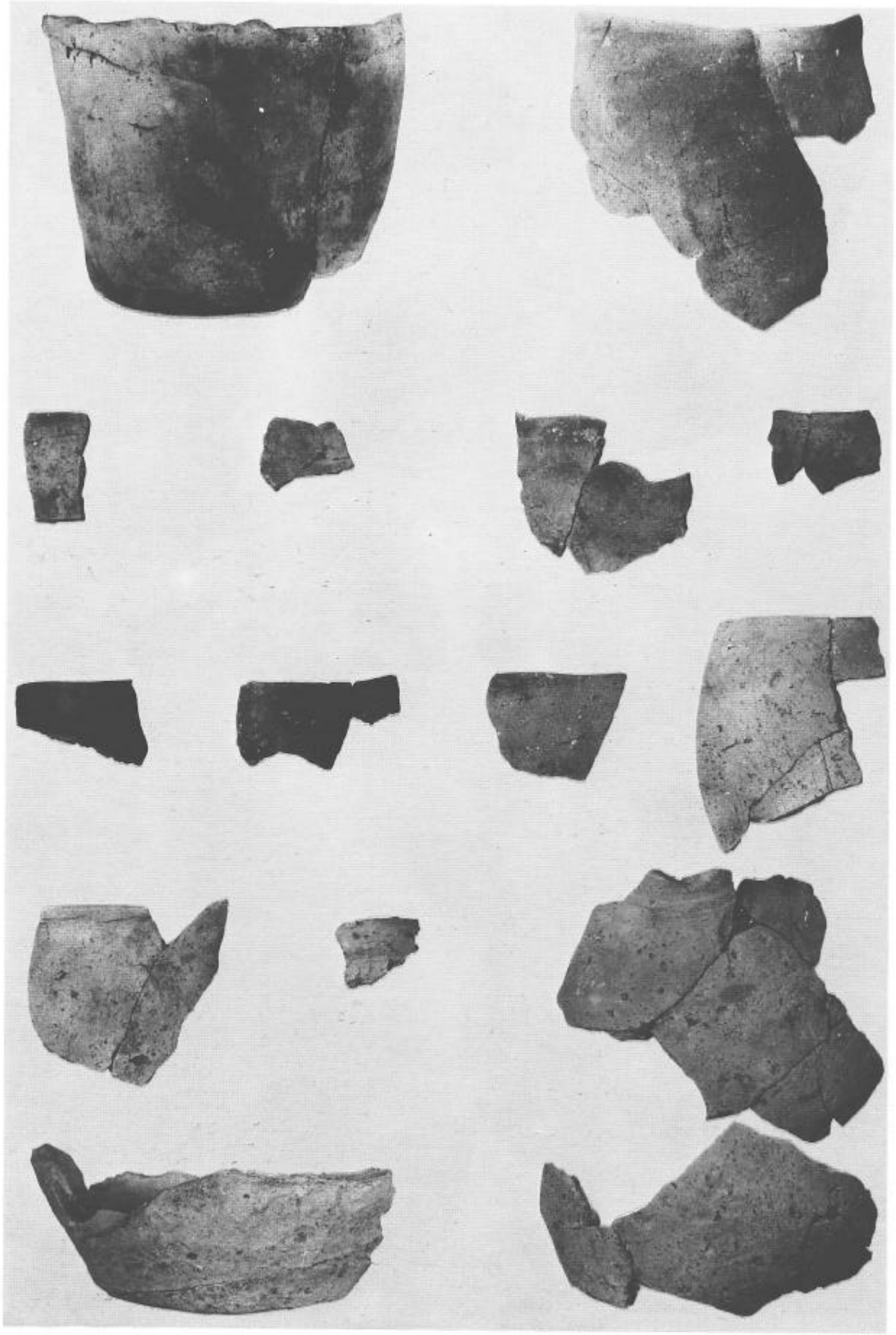
遺構外出土遺物



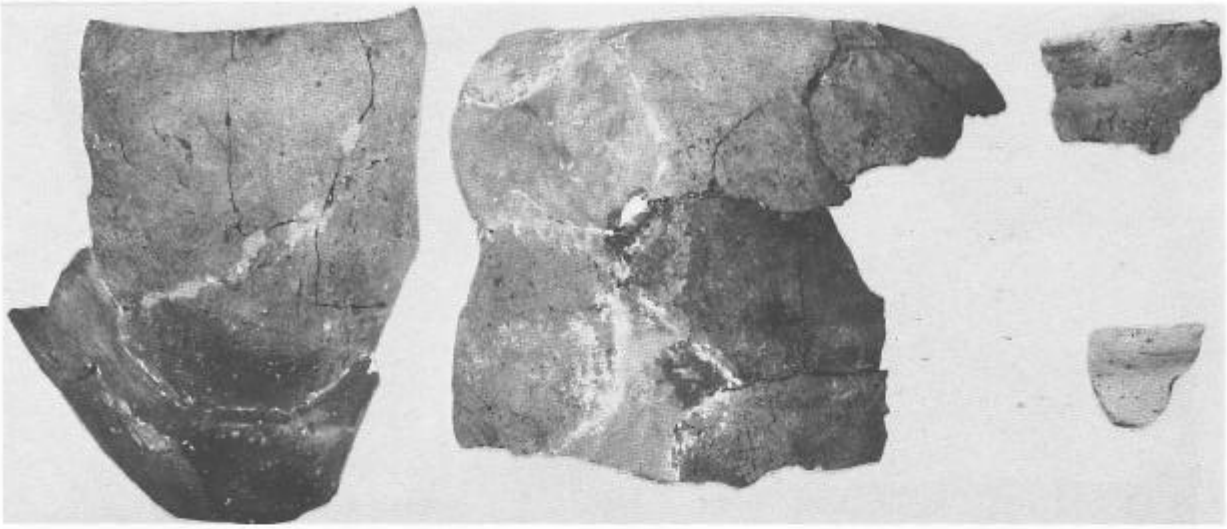
図版30　　第１号住居跡出土遺物



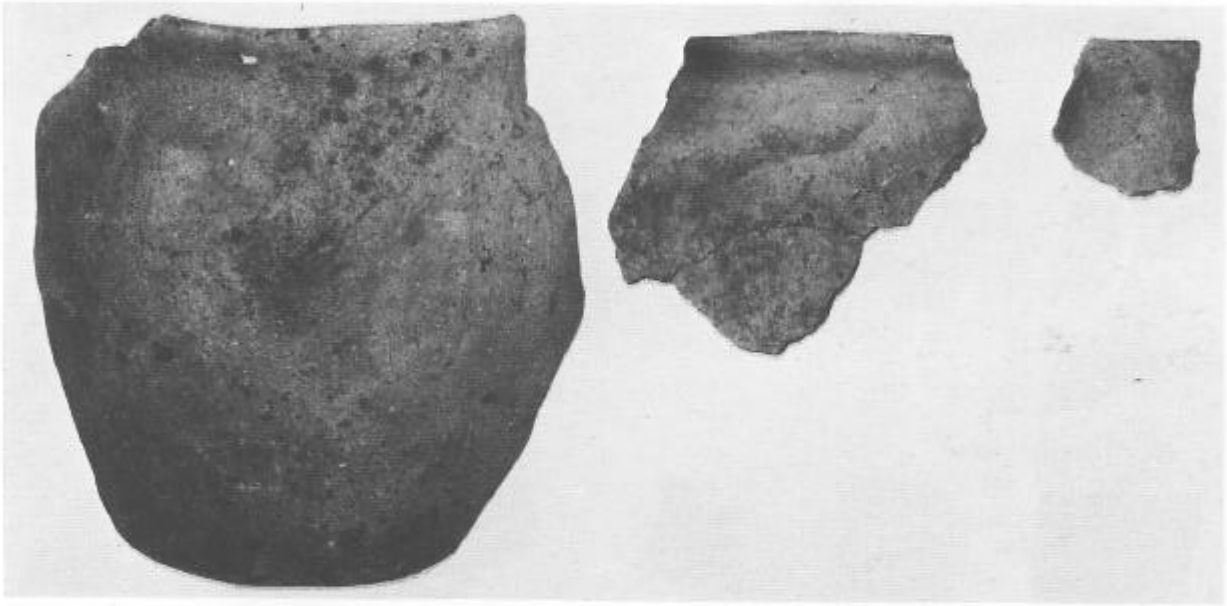
図版31　第2号住居跡出土遺物



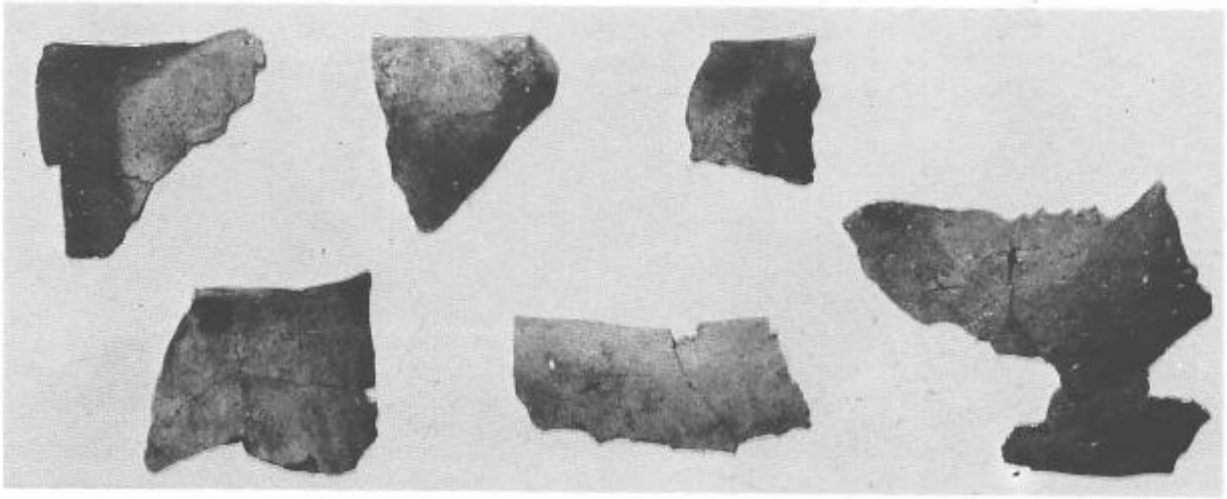
図版32　　第3号住居跡出土遺物



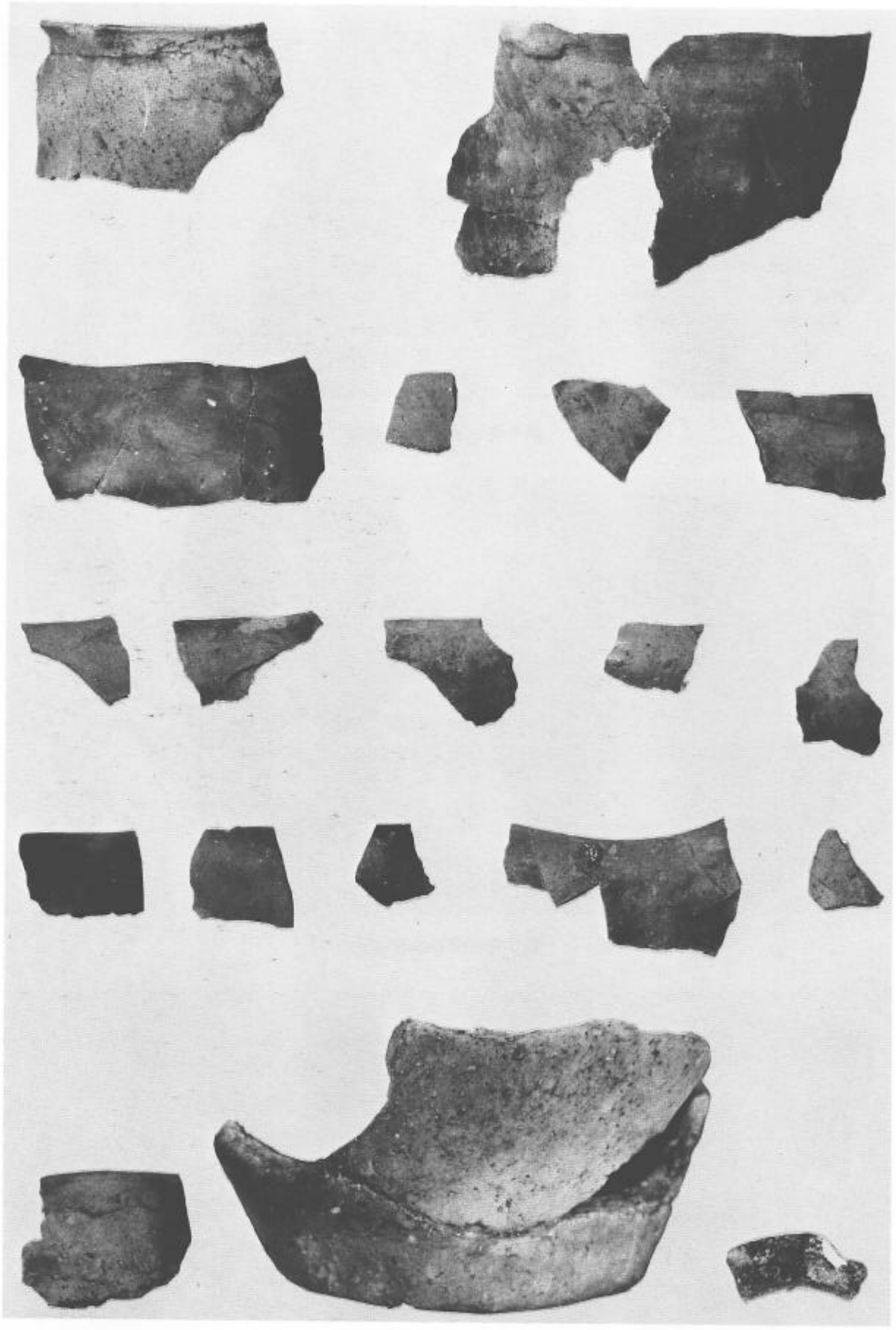
第４号住居跡出土遺物



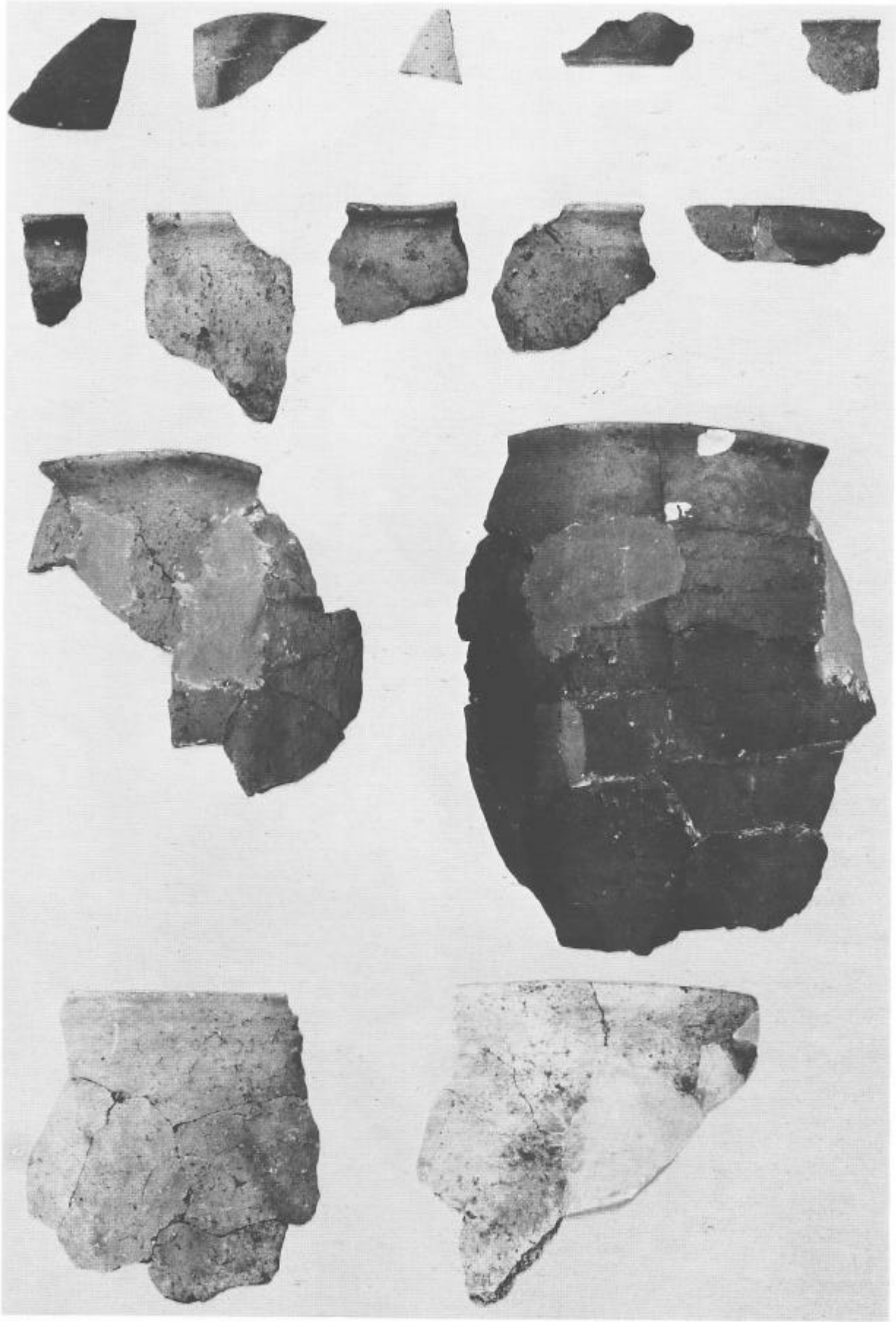
第５号住居跡出土遺物



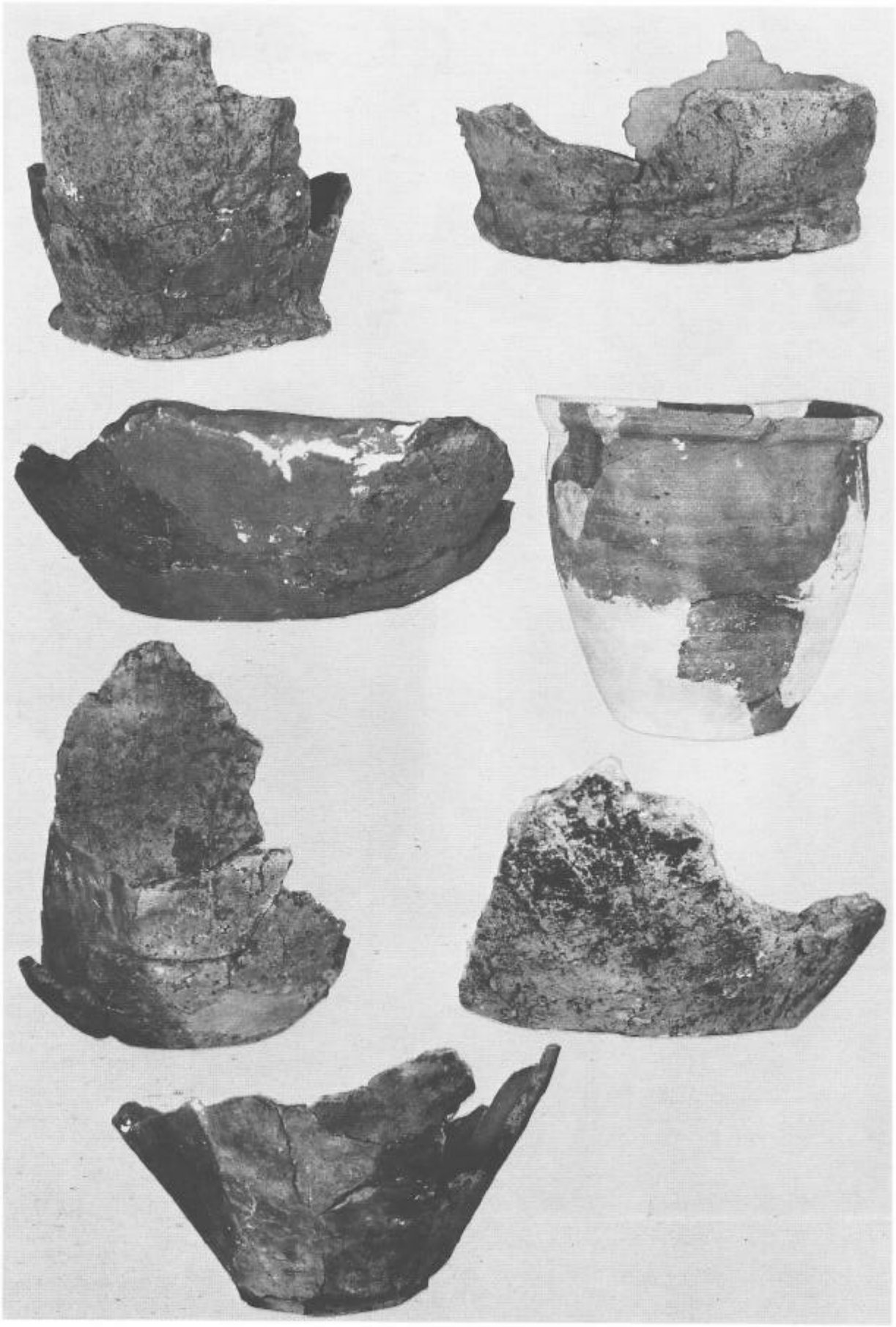
第６号住居跡出土遺物



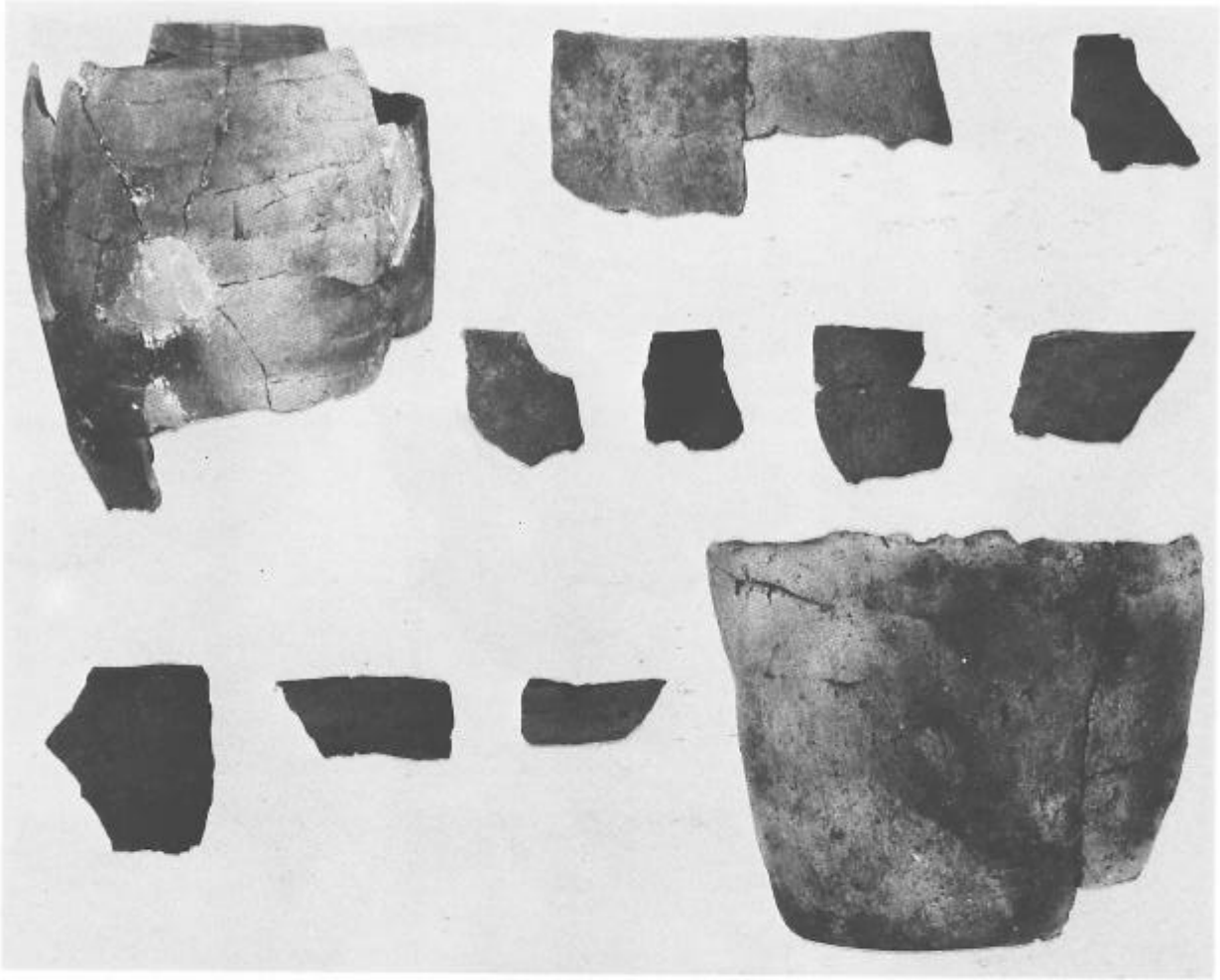
図版34　　第7号住居跡出土遺物



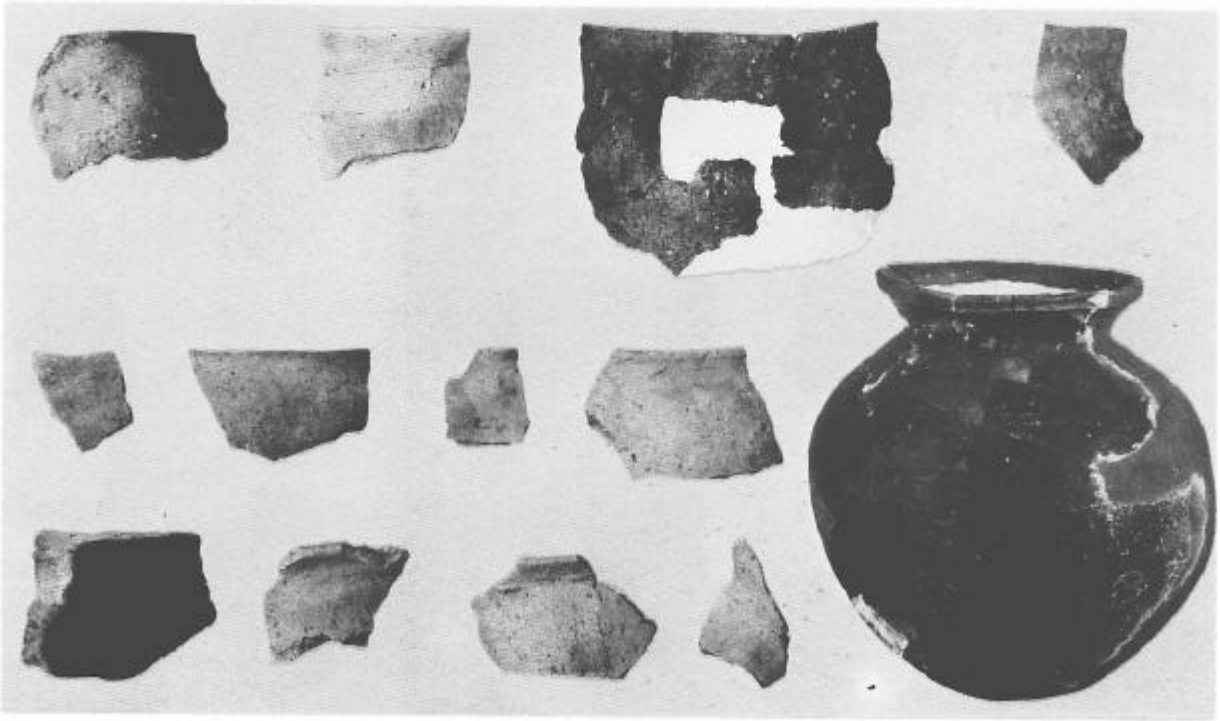
図版35　　第8号住居跡出土遺物



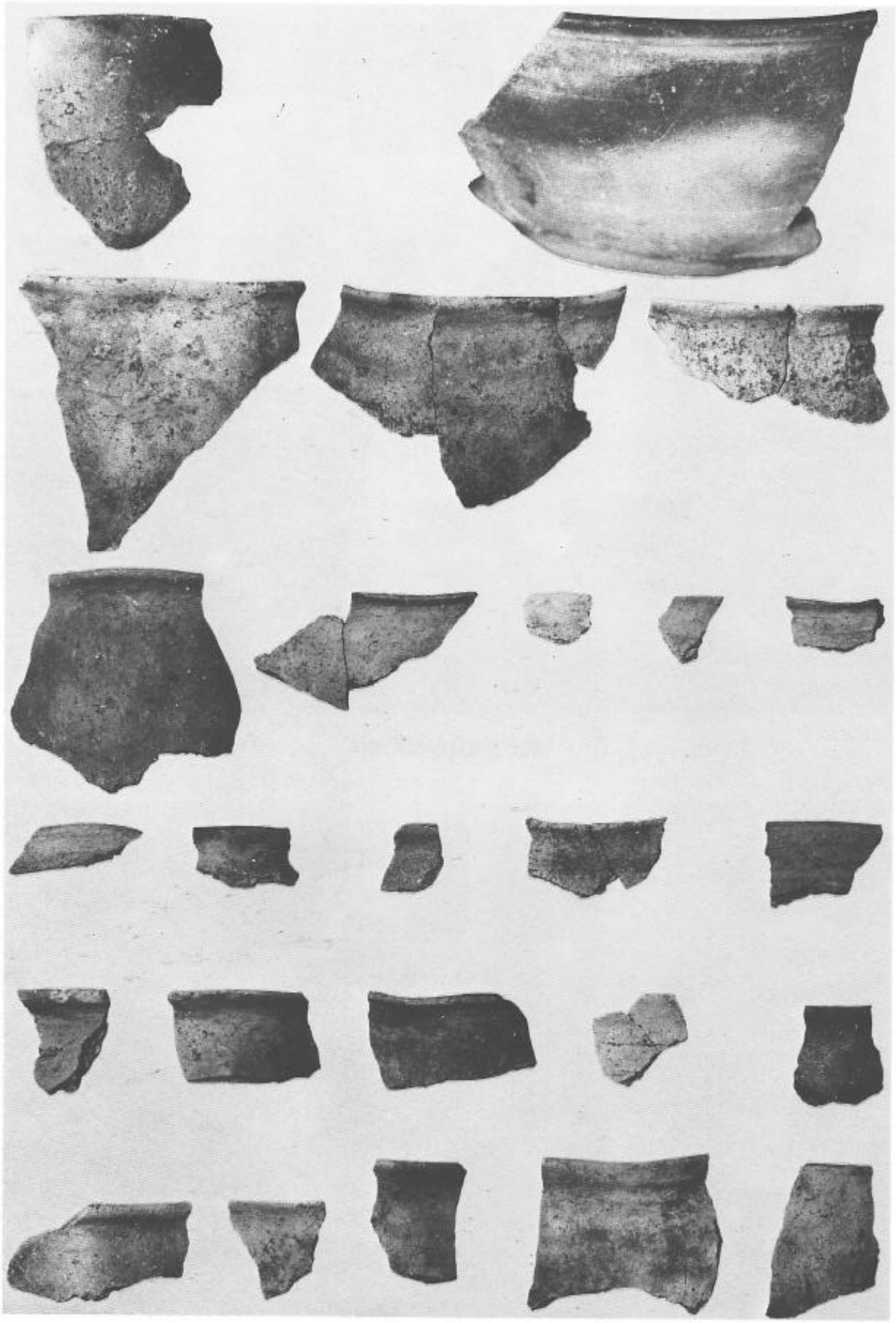
図版36　　第8号住居跡出土遺物



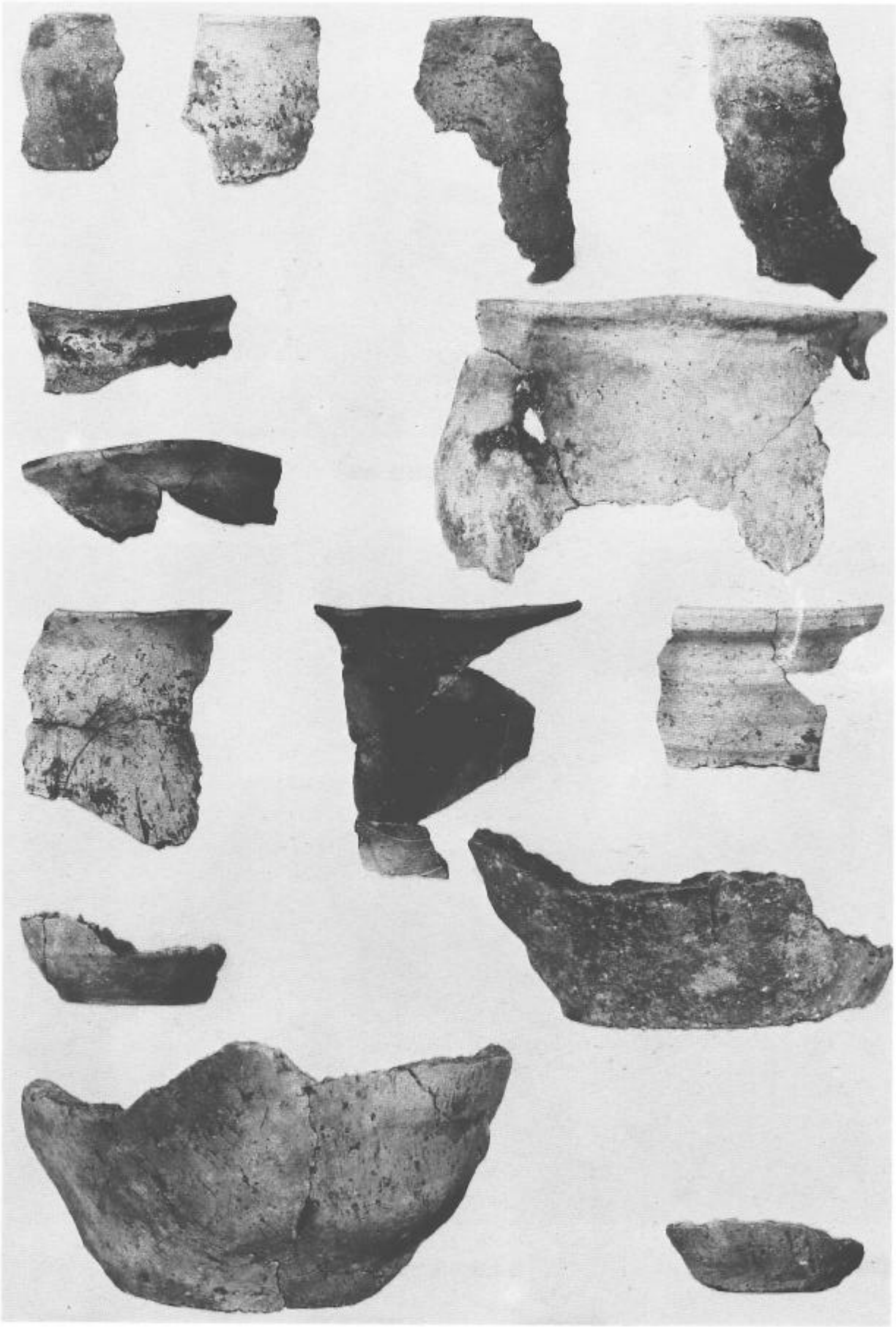
第９号住居跡出土遺物



第10号住居跡出土遺物



図版38　　第11号住居跡出土遺物

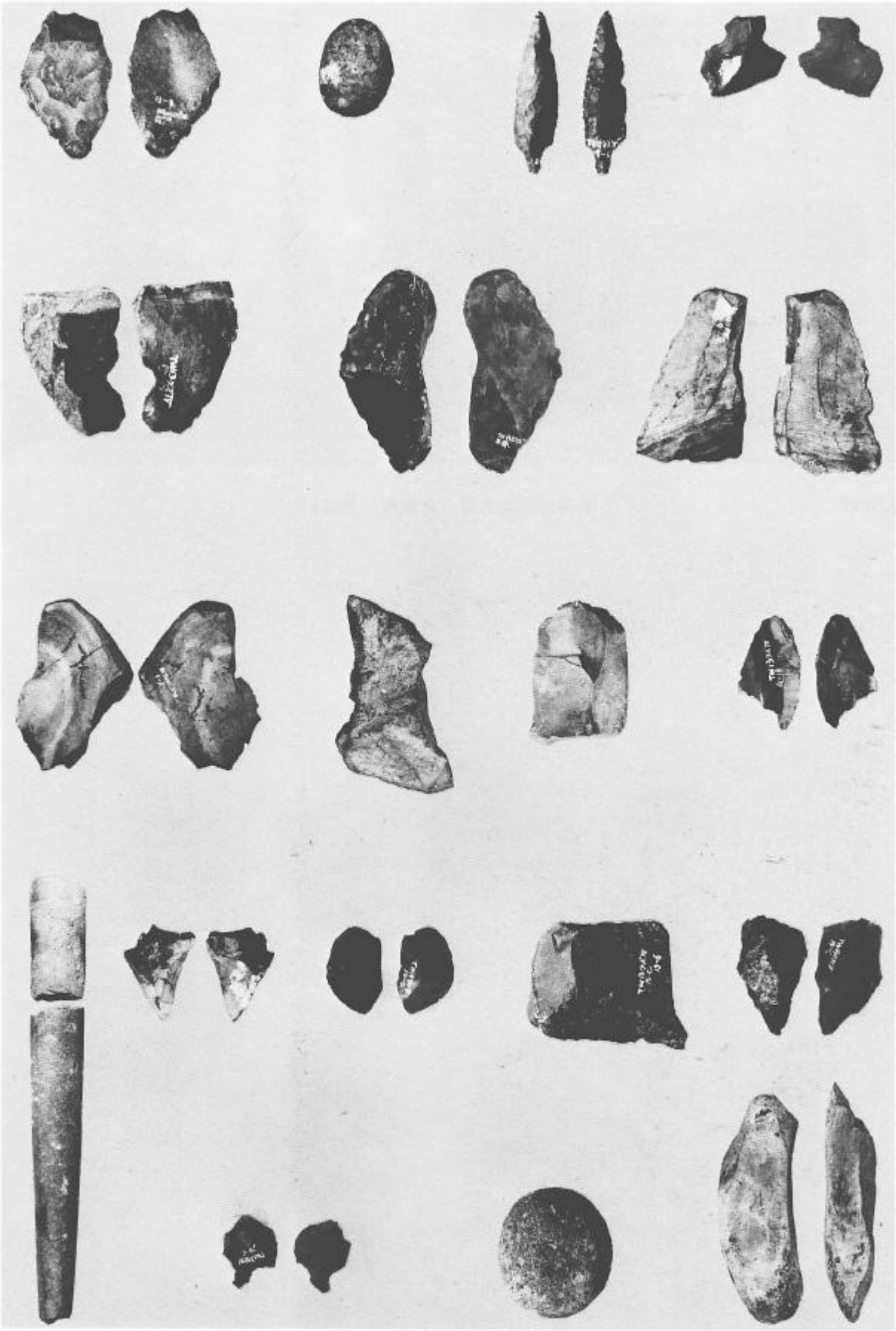


図版39　　第11号住居跡出土遺物

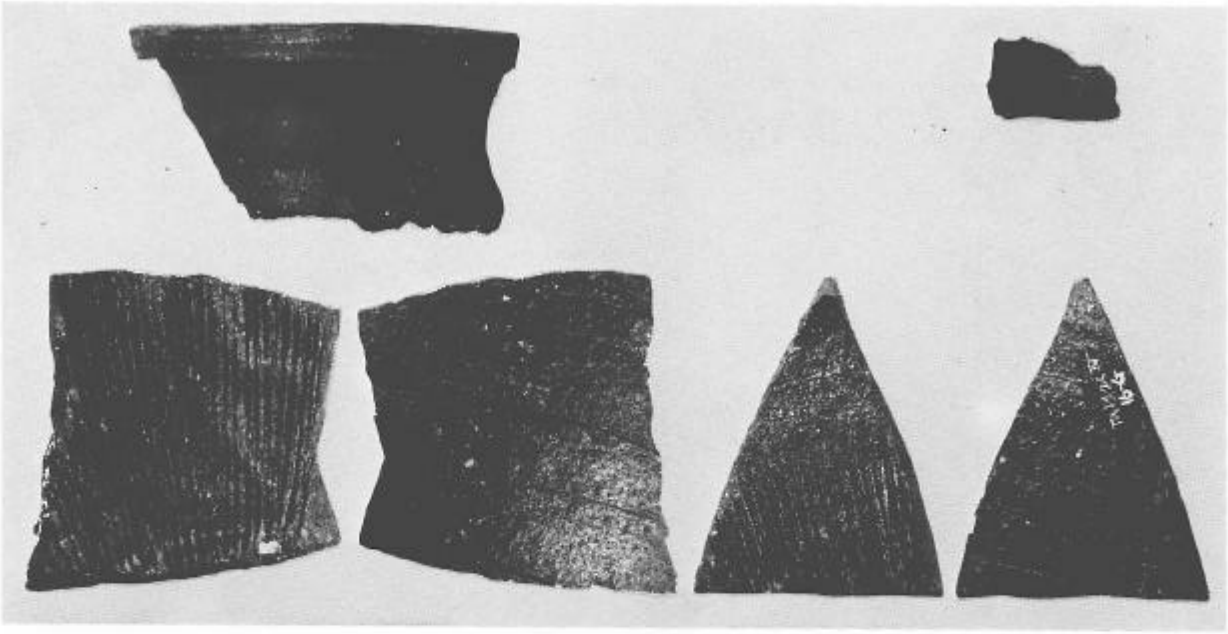
第12号住居跡出土遺物

図版40

各土壙内出土遺物



図版41　　遺構外出土石器



図版42　　遺構外出土土器（須恵器，陶器）

駒　林　遺　跡

遺跡番号	No.14
所在地	鹿角市八幡平字駒林
調査期間	昭和55年4月7日～6月16日
発掘調査予定面積	2,400㎡
発掘面積	2,450㎡

1．遺跡の概観

遺跡は，国鉄陸中花輪駅南方2.7km，米代川右岸の標高150ｍの台地上に位置する。遺跡の立地する台地は，米代川の第２段丘であり，沖積面，第３段丘との比高はそれぞれ10ｍ，25ｍをはかる。遺跡のある第２段丘及び下位の沖面積は現在水田として利用されており，上位の第３段丘は山林である。

遺跡の周辺，東側には通称「下モ館」と呼ばれる地がある。この地は，地形図で見る限り，２本の沢と，それに繋がる空掘に区切られた大小四つの郭と推測される平坦面があり，その標高は190～200ｍ程である。

また，遺跡の南方0.5kmの台地上には，「人形森」と呼ばれる地があり，伝聞ではあるが，縄文時代後晩期の遺物を出土したとされている。

米代川の対岸，標高160ｍの台地には縄文時代晩期の東在家遺跡がある。

2．調査の方法

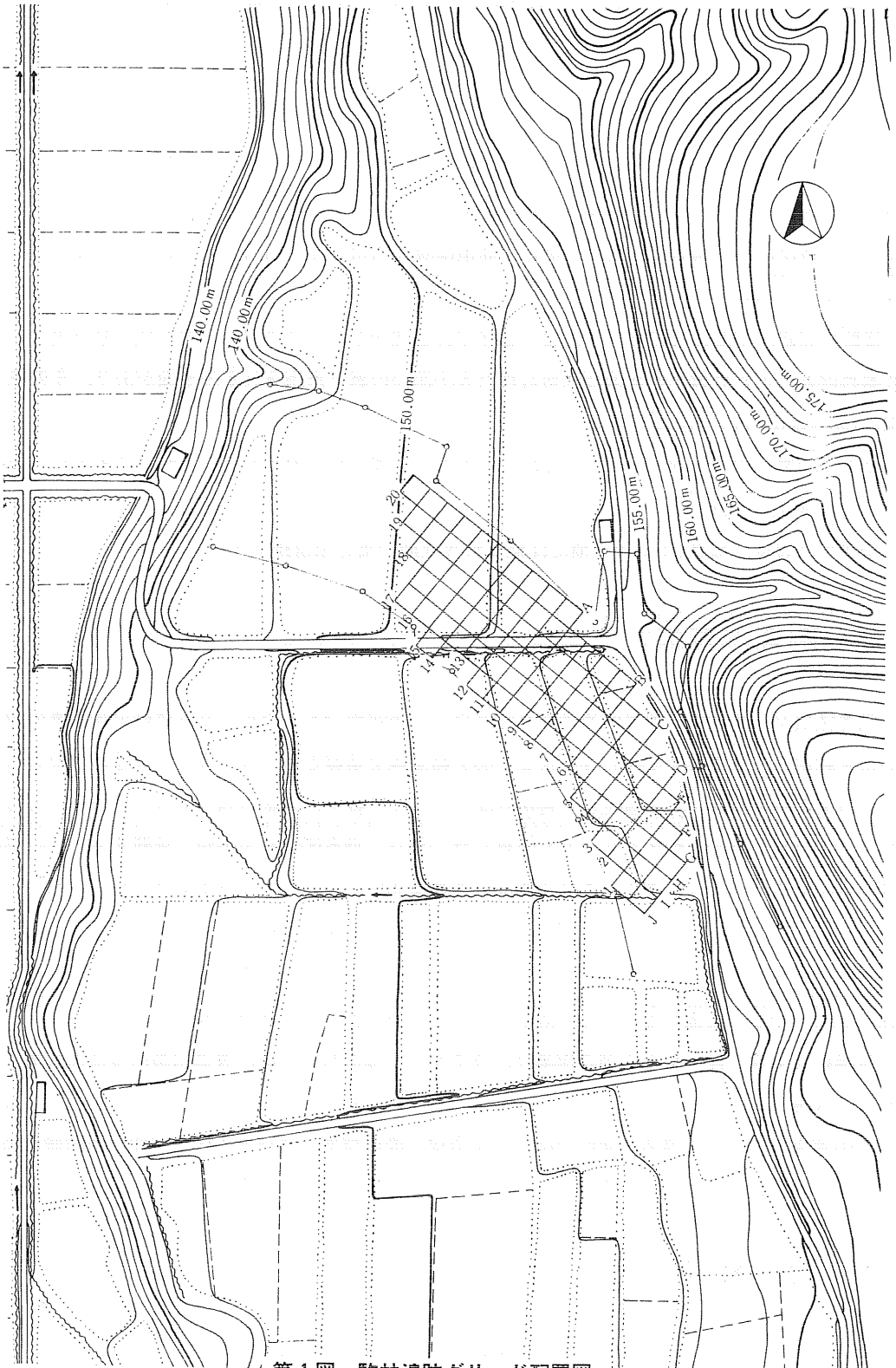
調査区域が，自動車道本線に通ずるランプウェイ予定地であるため，日本道路公団設置の中心杭を利用し，ＳＴＡ２＋40とＳＴＡ２＋80を結ぶ線を基線とし，ＳＴＡ２＋40を基準点として５ｍ×５ｍのグリッドを設定し，南から北へアラビア数字，東から西へアルファベットを付して，その組み合わせで各グリッドを呼称した。また，調査区域を中央から分断するように農道が東西に走っており，便宜上農道北側区，農道南側区というような呼称も併せて用いた。

前年度に行った試掘によって，調査区域の所謂地山面が東から西への緩傾斜をなしていることがわかっており，およその表土厚も知ることができていたので，表土除去に際しては，その深い箇所を中心に重機を用いての作業を行い，その後人力による作業に移行した。

重機による表土除去後の粗掘の作業は，各グリッド毎に行ったが，農道南側区では基盤層である砂礫層まで予想外に深く，３－Ｃグリッドから10－Ｃグリッドまで幅５ｍのトレンチを掘っての調査を行った。農道北側区では，水田造成の際の整地，及びその後の耕作が遺構確認面である地山層にまで及んでいる個所があり，それらの攪乱層の除去を粗掘作業の目安とした。

3．調査経過

昭和54年12月12日に，トレンチと坪掘りによる試掘調査を調査区域内に於いて実施した。



第１図　駒林遺跡グリッド配置図

翌55年4月7日からの本調査経過は概ね以下の通りである。

4月7日～4月14日	重機による表土除去作業，テント設営，杭打作業
4月15日	プレハブ設置，粗掘作業開始
4月23日	第1号住居跡検出
5月2日	第2号住居跡検出
5月6日	調査区西側に工事用道路建設開始
	調査区との境に，フェンス設置
5月17日	農道南側区に重機により幅5mのトレンチ掘削
5月31日	掘立柱建物跡検出
6月6日	第3号住居跡検出
6月16日	調査区域全体写真撮影　調査終了

重機による表土除去は，試掘調査結果をもとにおよそ調査区域全域で行ったが，特に表土の厚かった西側に重点を置いた。次いで人力による粗掘作業は遺物の出土の多かった農道北側区を中心に行ったが，調査当初から調査区西側に幅10m程度で工事用道路建設が計画されていたため，その計画予定地を事前に調査終了する必要があった。幸い，工事用道路予定地が狭かったのと，遺構検出がなかったために，その区域での調査は滞りなく終了した。

農道南側区では，重機による表土除去後，人力による粗掘りによって遺構の検出に務めた。しかし北側区とほぼ同位のレベルに於いても遺構は確認されず，出土する遺物も少量であったので，遺跡地基盤層までのトレンチ調査によって，主に層位と遺物の在り方の観察に主眼をおいた。

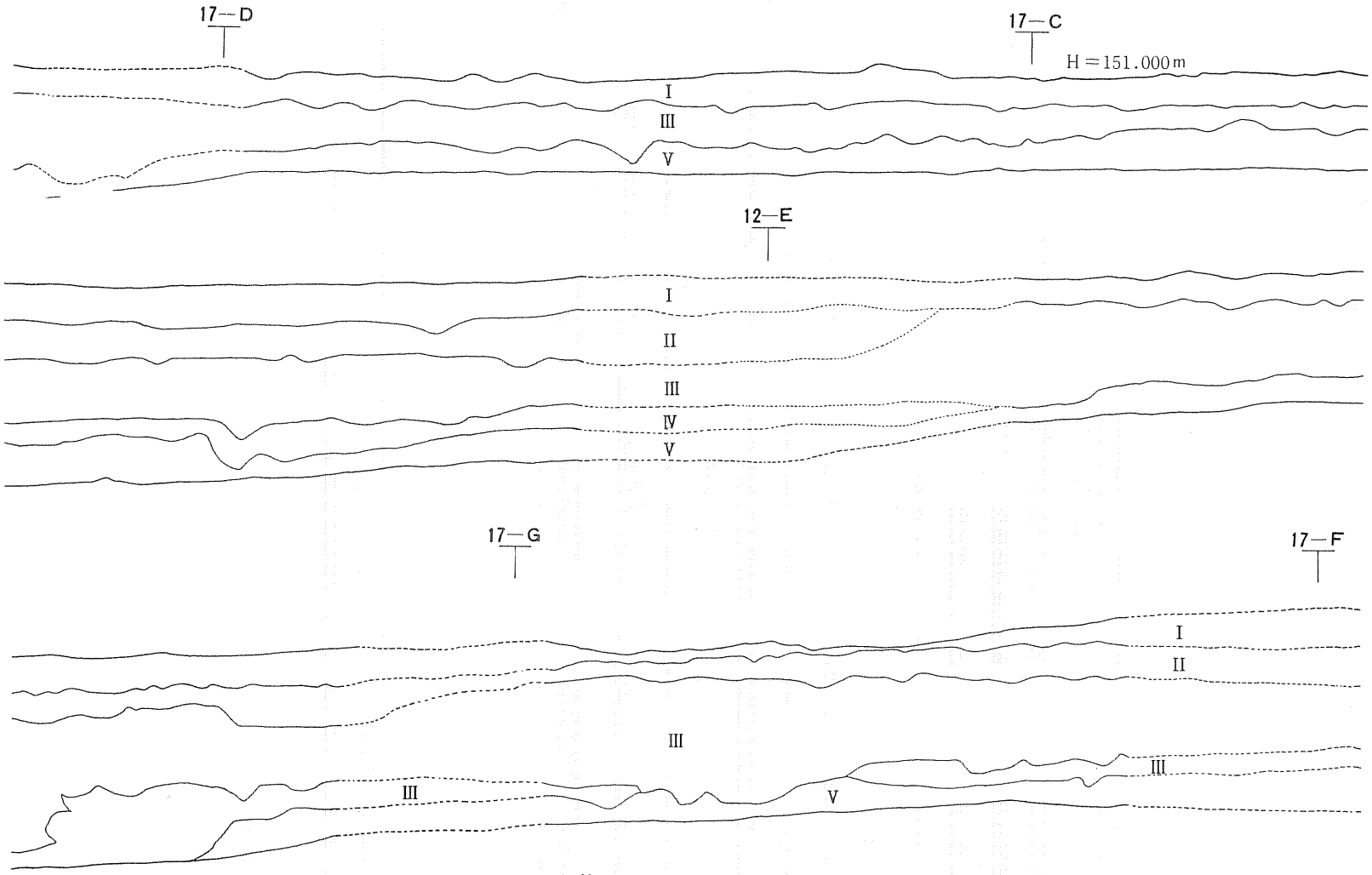
4．遺跡の層位

本遺跡の土層堆積状態を観察するため，17ライン上にトレンチを設定し土層断面図を作成した。本遺跡は水田跡地であり，耕作による土層全体の攪乱が激しく，土壌自体は著しくグライ化している。そのため非常に細かく分類されるが，基本的には以下にあげるⅠ～Ⅴの5つの層に分類できる。

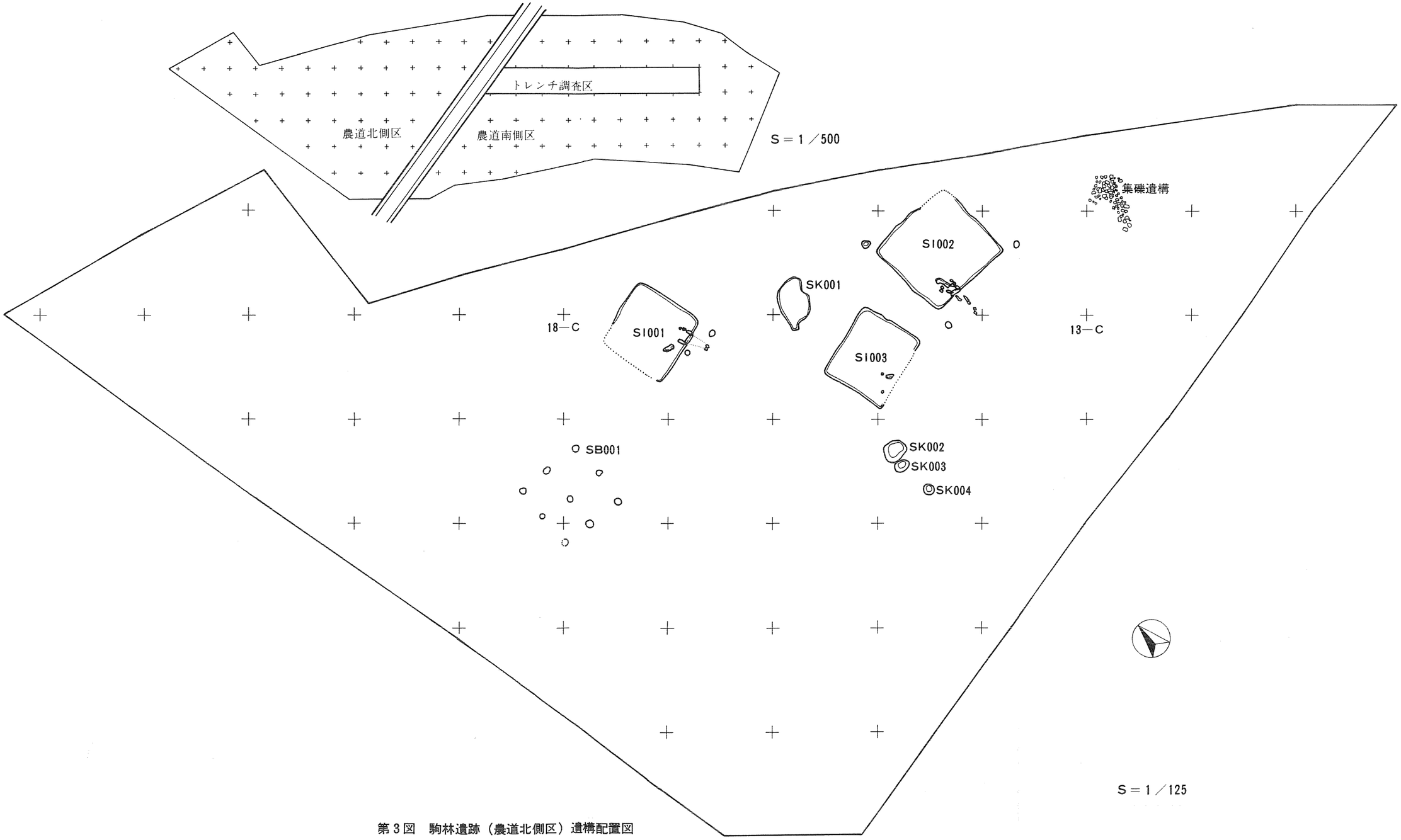
Ⅰ層：色調は黒褐色～暗褐色を呈する。調査区域全体に広がる耕作土であり，黄褐色～赤褐色の酸化した鉄分と思われる粒を含む。

Ⅱ層：色調は黄褐色～褐色を呈する。径1～50mmの軽石及び粘土よりなるが，軽石の占める割合が大きく，若干炭化物を含む。

Ⅲ層：色調は黒色～暗褐色を呈する。粘性があり，径1～30mm程の軽石を15～30%程含む。


17—D
17—C
H＝151.000m
I
III
V
12—E
I
II
III
IV
V
17—G
17—F
I
II
III
III
III
V

第２図　遺跡の層位



第３図　駒林遺跡（農道北側区）遺構配置図

赤褐色の酸化した鉄分を僅かに含む。

Ⅳ層：色調は暗褐色～赤褐色を呈する。径10～40mm程の軽石及び礫よりなる砂礫層である。

Ⅴ層：色調は黒褐色～暗褐色を呈する。粘性があり，赤褐色の酸化した鉄分を含む。また水成堆積によると思われる色調が褐色の砂質土をブロック状に含む。

以上各層のうち，平安時代の遺物（土師器片）はⅢ層に，縄文時代の遺物はⅣ層に包含されており，遺構の確認はⅣ層中，部分的にⅤ層上面によって行われている。

5．遺構と遺物

(1) 縄文時代

ア．集礫遺構（**第4図**）

12—A，12—Bグリッド第Ⅴ層面で検出した。大きいもので径25cm程，小さいもので3cm程の礫の集合からなる。

全体の形状は，北に向いた「矢印」の形を呈し，「先端部」での東西の指しわたしが，約255cm，「尾」の部分では約70cm，全体の長さ約320cmを計る。各々の礫は第Ⅴ層に埋ったような状態で検出され，断面の形状を見ても，組まれた若しくは積みあげられたというような検出状況を呈してはいない。

礫は，赤褐色に変色していたがそれも火熱による変化したものと思われる。

遺物は，僅かに縄文の施されただけの破片が礫の間から数片出土したに停った。

イ．遺構外出土の遺物

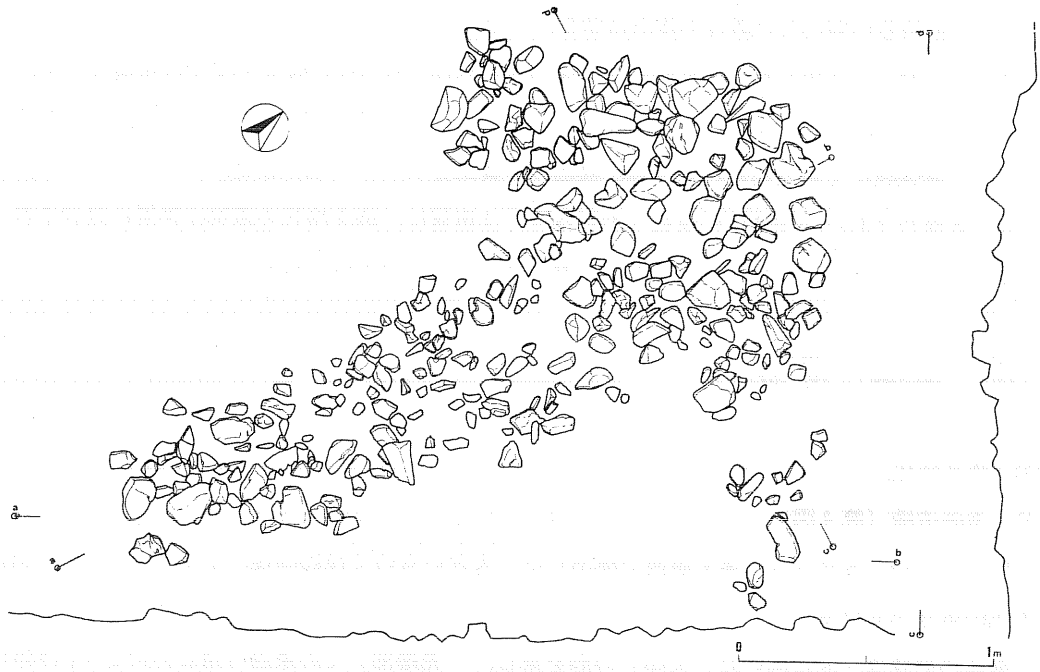
縄文時代の遺物は遺構外で出土したものが多く，粗掘作業の段階で断片的に検出され，殆どが他所からの流れ込みによって遺跡地に運れたと思われるものである。

また，農道南側のトレンチ調査区では，平安時代遺構確認面よりも，下位の礫床上面から時期を異する遺物が出土しており，これらの遺物も遺構に伴うものではなく，礫床を覆う第Ⅱ層，第Ⅲ層と相俟って，他所から運び込まれた状況を示す。

〈土器〉

主に前期末葉，後期中葉～後葉，晩期中葉～後葉の三時期に大別し得る。

第6図1～5は前期末葉円筒下層d式に比定できる。**1**，**3**，**4**は同一個体であるが，口縁部に計6条の絡縄体の圧痕が施され，胴部以下には多軸絡縄体が回転押捺される。器形は，頸部に微隆起をもち稍外反する。**2**は，LR，RLの結束第1種の羽状縄文の施された稍外反する口縁部破片である。**5**は，横位に不整撚糸文の施された底部破片であるが，底面との輪積痕跡が明瞭に残っている。



第４図　集礫遺構

6は，唯一中期末大木10式に比定されるものである。口縁の内湾するキャリパー状を呈する鉢形土器胴部片と思われるが，ＬＲ原体を横位回転施文した後に，粘土紐による微隆起線を配した磨消縄文手法が用いられている。胎土は非常に堅緻であり，焼成も良好である。若干の雲母を含む。

7～**16**は，後期前葉十腰内Ｉ式に比定し得るが，**7**と**8**のように沈線と縄文を用いた類と，**9**～**16**のような沈線のみによる文様構成をとる類とに分けられる。概して後者は，沈線が細く鋭く**9**～**12**のように２条の沈線間が微隆帯となるものもある。**17**は，後期中葉加曽利Ｂ式期に比定できる。**第12図１**は，所謂橋状把手部分の破片であるが，上下２条づつの沈線によって狭まれた微隆帯が，把手上で連結する。３条の平行沈線が波状口線に沿ってめぐらされ，波頂下では，Ｓ字状沈線によって連結される。全体には磨消縄文手法を用いての文様構成がとられる。**第６図18**及び，**第13図１**は後期後葉の貼瘤土器，入組文系土器に比定できる。**18**は沈線による入組文が描かれた後に細かなＬＲ原体が横位回転施文されている。**１**は，口縁部から底部までほぼ直線的におりる鉢形土器である。口縁には，３個１組の突起が４単位付される。胴部上半は文様帯であろうが，文様帯内は殆ど磨滅しており，上下限を画する点列の加えられた２条づつの平行沈線が現存するのみである。下限をめぐる沈線上には，口縁の突起と対応して，円形のボタン状突起が付され，口縁及び文様帯下限に設けられた突起とも十字に切り込みが入れられている。胎土は砂粒を混じえてあり，全体に磨滅が著しい。

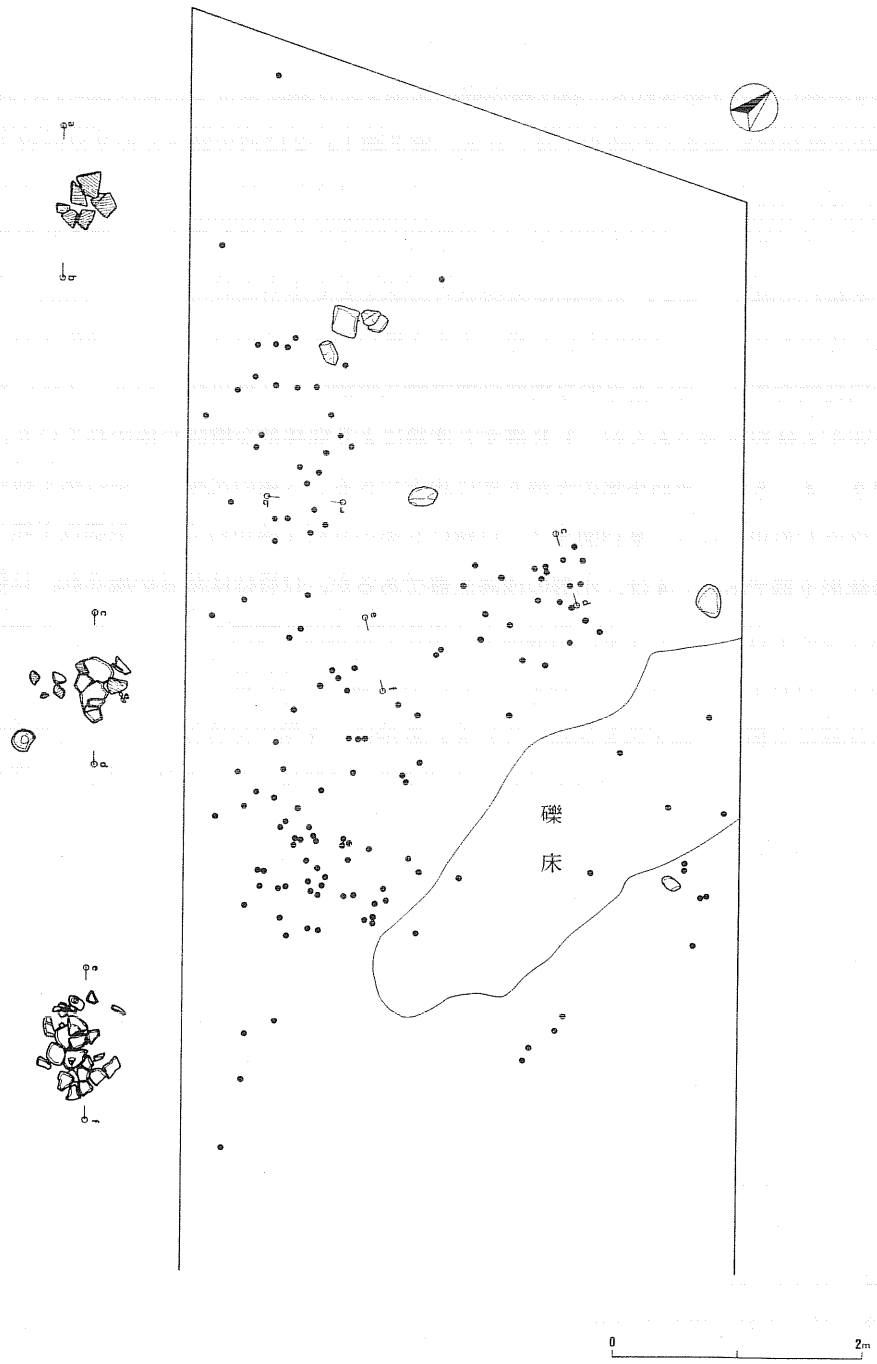
第6図19～22は，晩期中葉大洞C_1式～C_2式に比定できる。いづれも口唇上に刻目が加えられ**20**のように所謂Ｂ突起が付されたりもするが，口縁に２～３条の平行沈線がめぐる他は，以下に地文以外の文様は認められない。地文は細密なＬＲ原体を横位回転施文したものである。**第7図１～５**は大洞C_2式に比定される。**23**は楕円形の区画文が沈線によって二重に描かれ，沈線間にＬＲ原体の横位回転施文した地文が残される。**第7図１，２**は同一個体であり口縁以下ゆるやかに膨みながら降りる鉢形土器である。口縁１箇所にＢ突起が付され，口縁以下１cm程の間は無文帯として研磨される。無文帯以下の文様帯内には地文としてＬＲ縄文が施された後に，斜位沈線が交錯して施されるが，全体には矢羽状の構図をとるものと思われる。**３**は，ＬＲ縄文が横位回転施文された後に比較的太い沈線による文様が描かれている。**４**は，細密なＬＲ原体が，横位回転施文された後に直線的な構図が磨消縄文手法により描かれている。**５**は，頸部で大きく屈曲する鉢形土器であるが，ＬＲ縄文と沈線により曲線的な構図が描かれている。**６**及び**第13図３，４，５**は，晩期後葉の大洞Ａ式に比定できる。３条の沈線と２個の粘土粒の貼付により工字文が作出される。**第13図３**は，口縁に５条の平行沈線がめぐり，胴部以下無文研磨される浅鉢形土器である。**４**は，小形の浅鉢土器であるが，口唇には刻目が施され，口縁，底部に２条づつの平行沈線がめぐる。胴部はＬＲ原体が横位回転施文される。**５**は，小形の壺形土器である。口唇１箇所には，Ｂ突起が付され，口縁部に２条頸部に３条の平行沈線がめぐる。頸部の沈線は１箇所で工字文を作出している。底部は，４箇所が突出しており，所謂四足の形状を呈している。**７～８**は，大洞A′式に比定できる。口縁は大きな波状を呈し，波頂部は突起となる。口頸部には，口縁の突起と対応して所謂変形工字文が作出される。**９**は，やはり大洞Ａ式，A′式に比定し得る台付鉢台部破片であるが，Ｔ字形の陰刻を組み合わせての工字文が作出される。**第７図10～18，第８図**，及び**第９図１～７**は晩期後半期に伴う土器であるが，**10～18，第８図１～３**のように口頸部に１～数条の平行沈線がめぐり，以下全面縄文の施されるもの，**第８図４～８**のように口唇が小波状を呈し，口縁の無文研磨されるもの，**第８図９～19**のように口縁がやや内湾し，全面縄文の施されるもの，**第９図１～７**のように全面縦位の条線文の施されるものなどがある。

第９図８～12と第10図は，全面縄文の胴部破片であり，時期を特定することは難しいが，原体が殆どＬＲを用いていることから，やはり晩期後半期に伴うものと思われる。

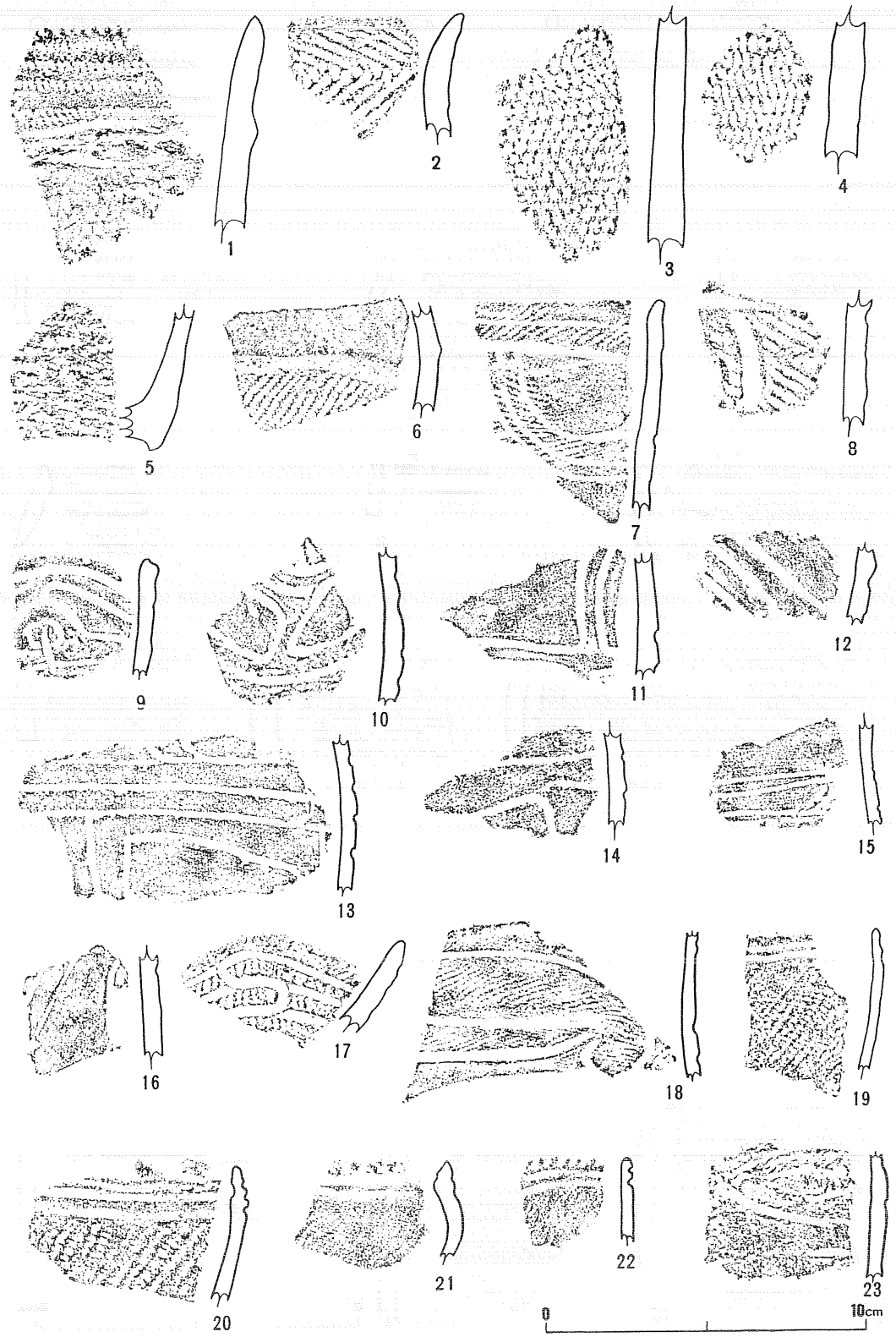
第12図２～15は，縄文時代出土土器底部であるが，**３～８**は縄文時代晩期中葉～後葉のものであり，**９～15**もそれに伴う土器底部と思われる。

〈石器〉

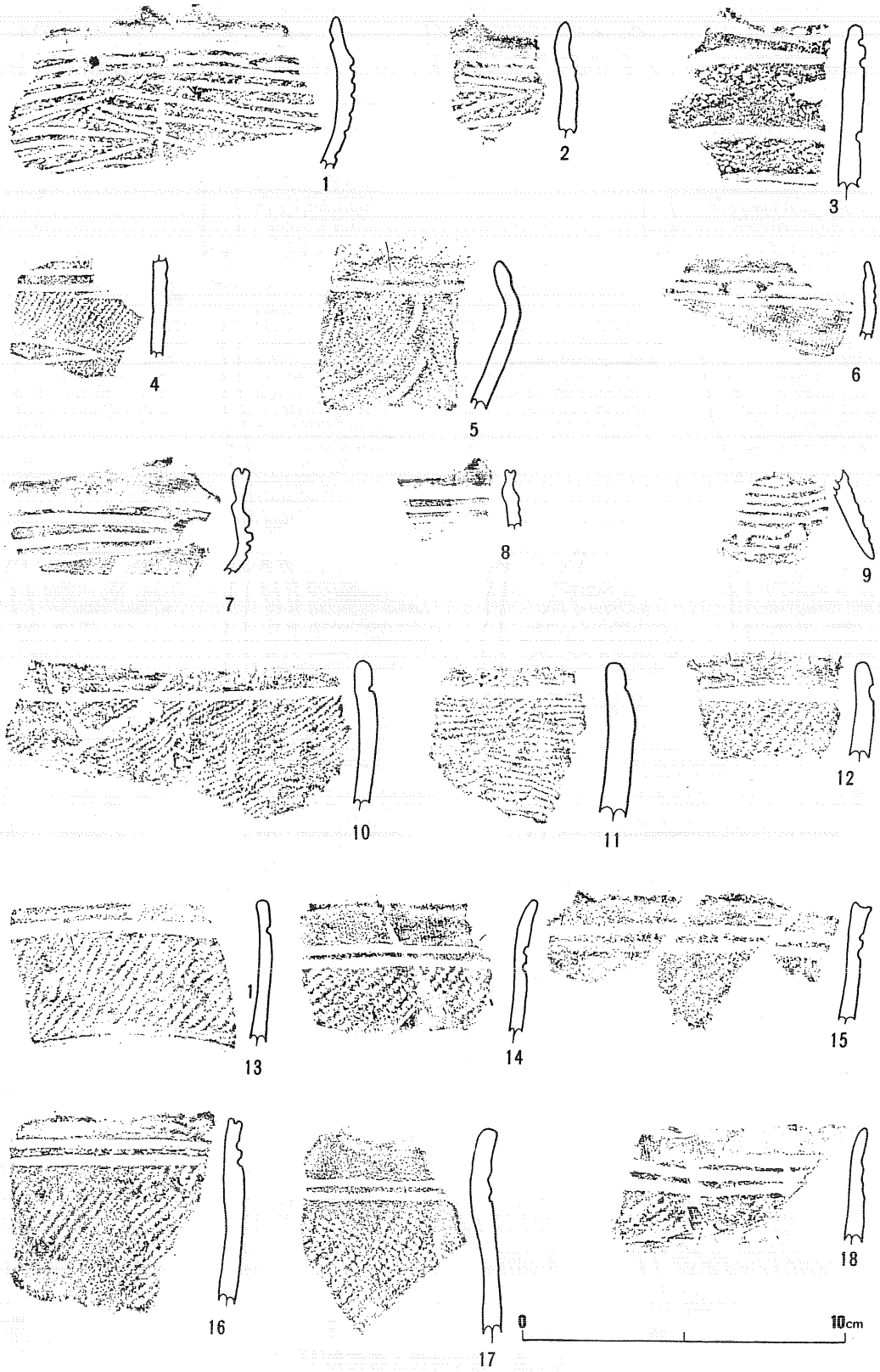
出土した石器点数は，石鏃２，石匙１，磨製石斧１，剥片９の計13点である。石質は，磨製石斧を除いて全て硬質頁岩である。



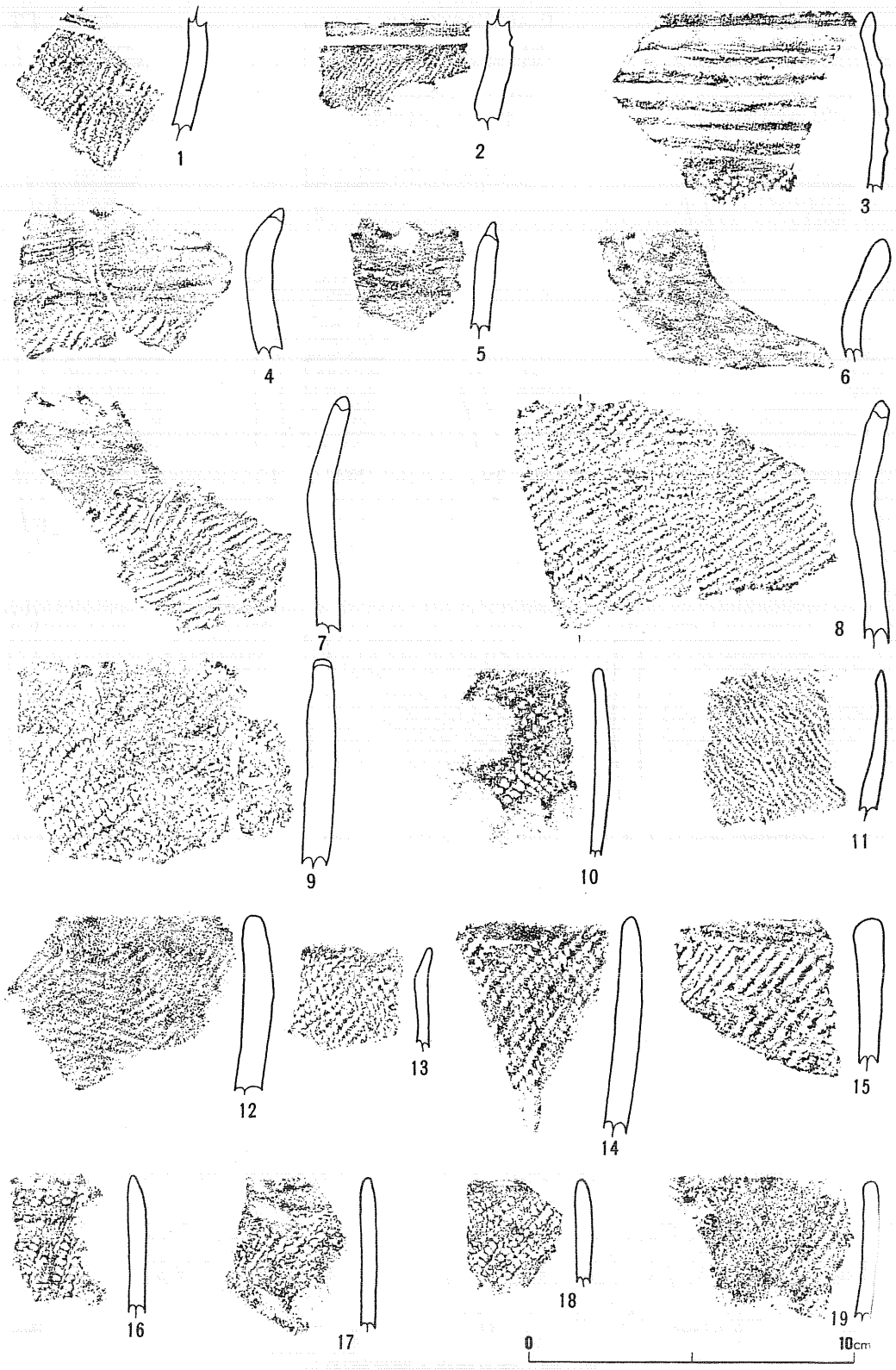
第5図　トレンチ内遺物出土状況図



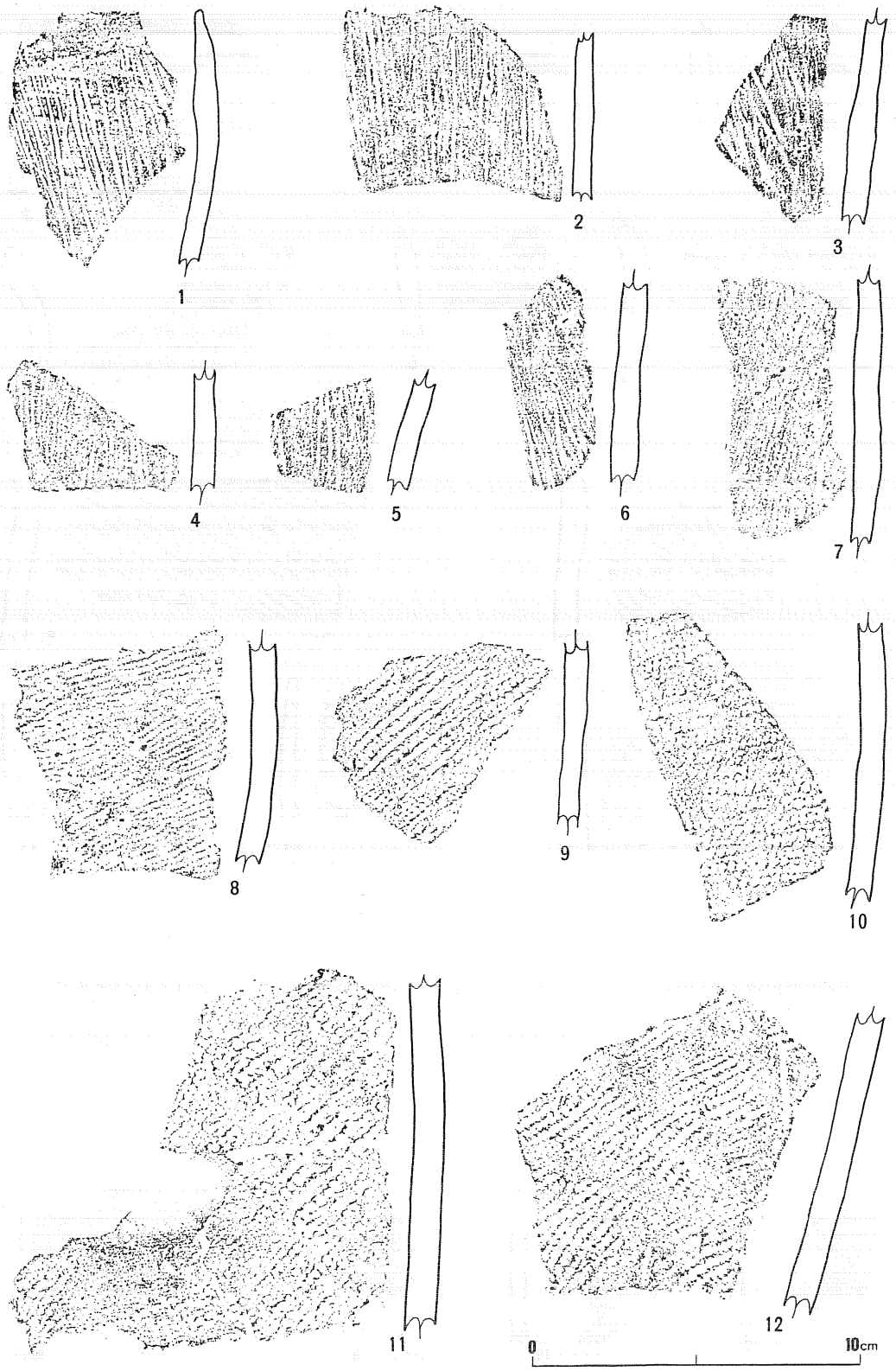
第6図　縄文時代土器拓影(1)



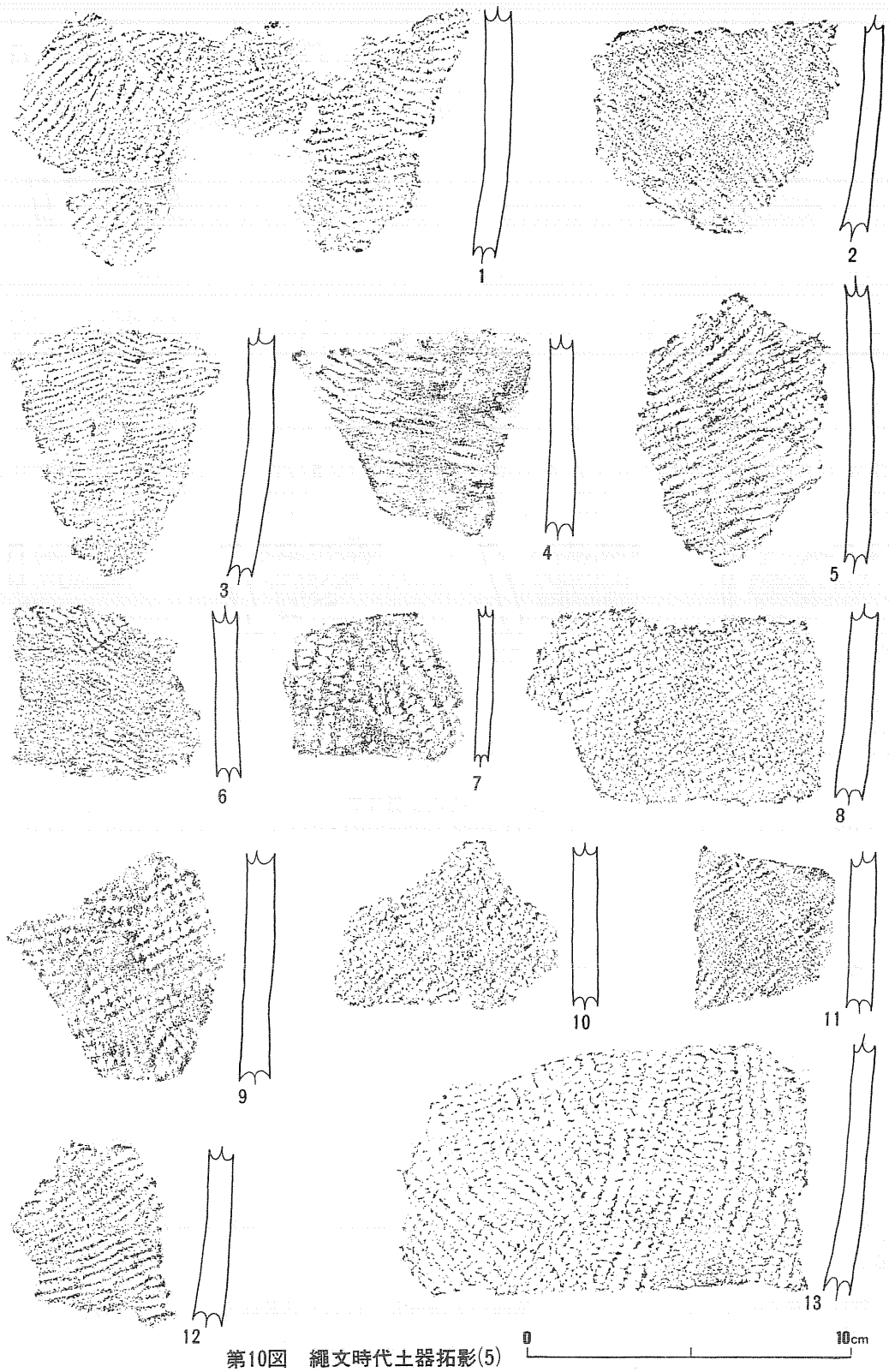
第７図　縄文時代土器拓影(2)



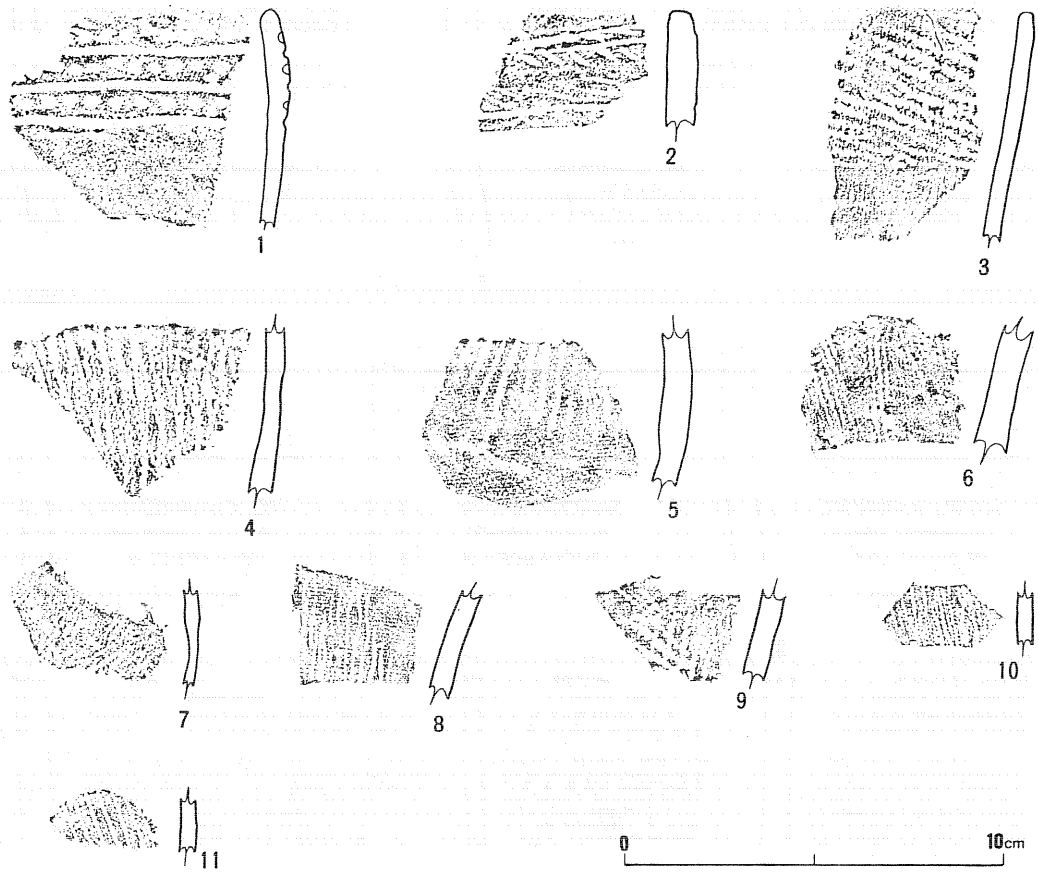
第８図　縄文時代土器拓影(3)



第９図　縄文時代土器拓影(4)



第10図　縄文時代土器拓影(5)



第11図　弥生時代土器拓影

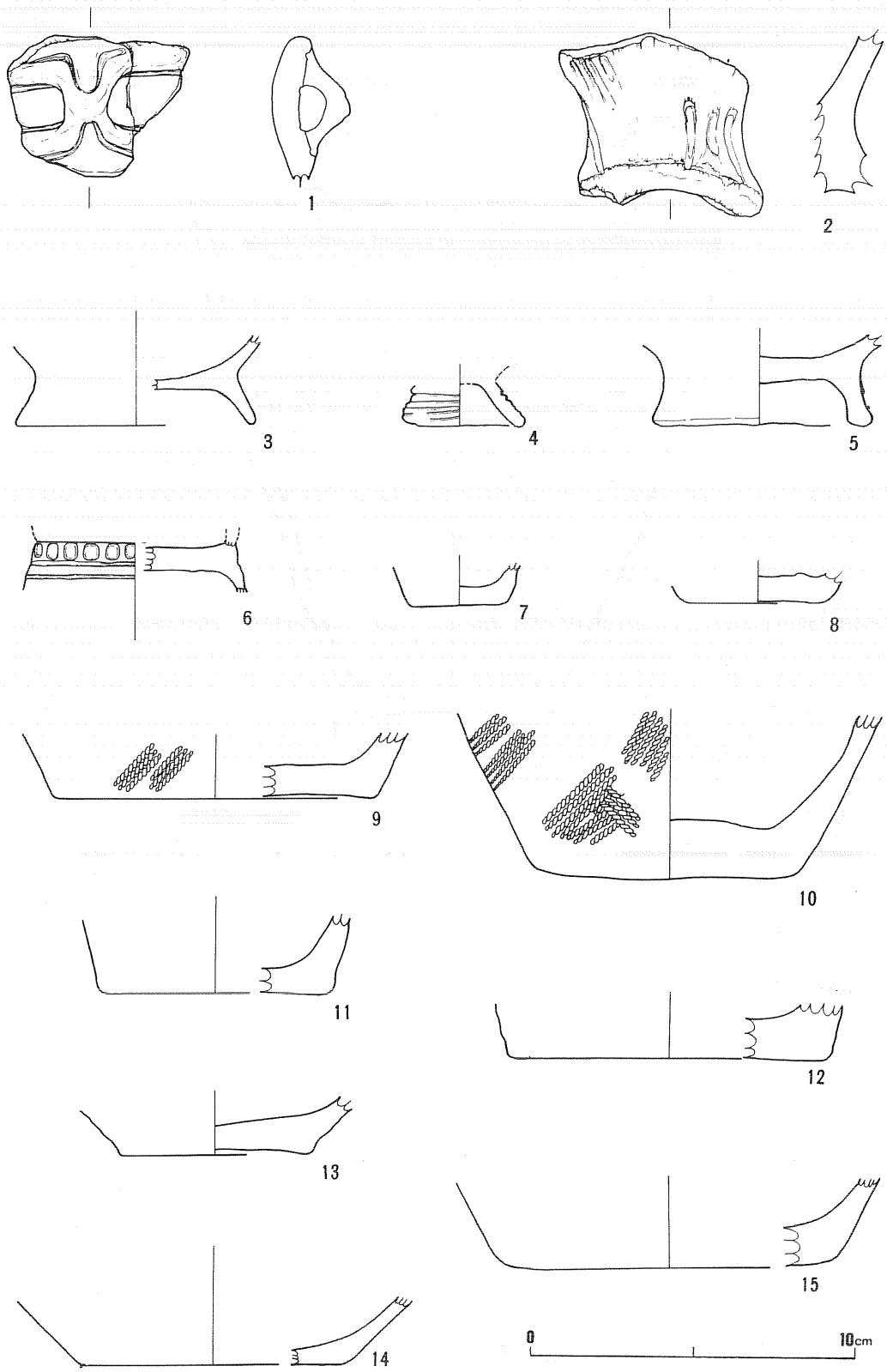
第14図1，最大長24mm，最大幅12mm，最大厚4mm，有茎の石鏃である。両面に丹念な整形のための剥離が施されるが，一方の面中央に第1次剥離面が残される。

第14図2，最大長40mm，最大幅13mm，最大厚4mm，有茎の石鏃であるが，本体から基部を作出するための抉り込み部分がさ程顕著ではない。

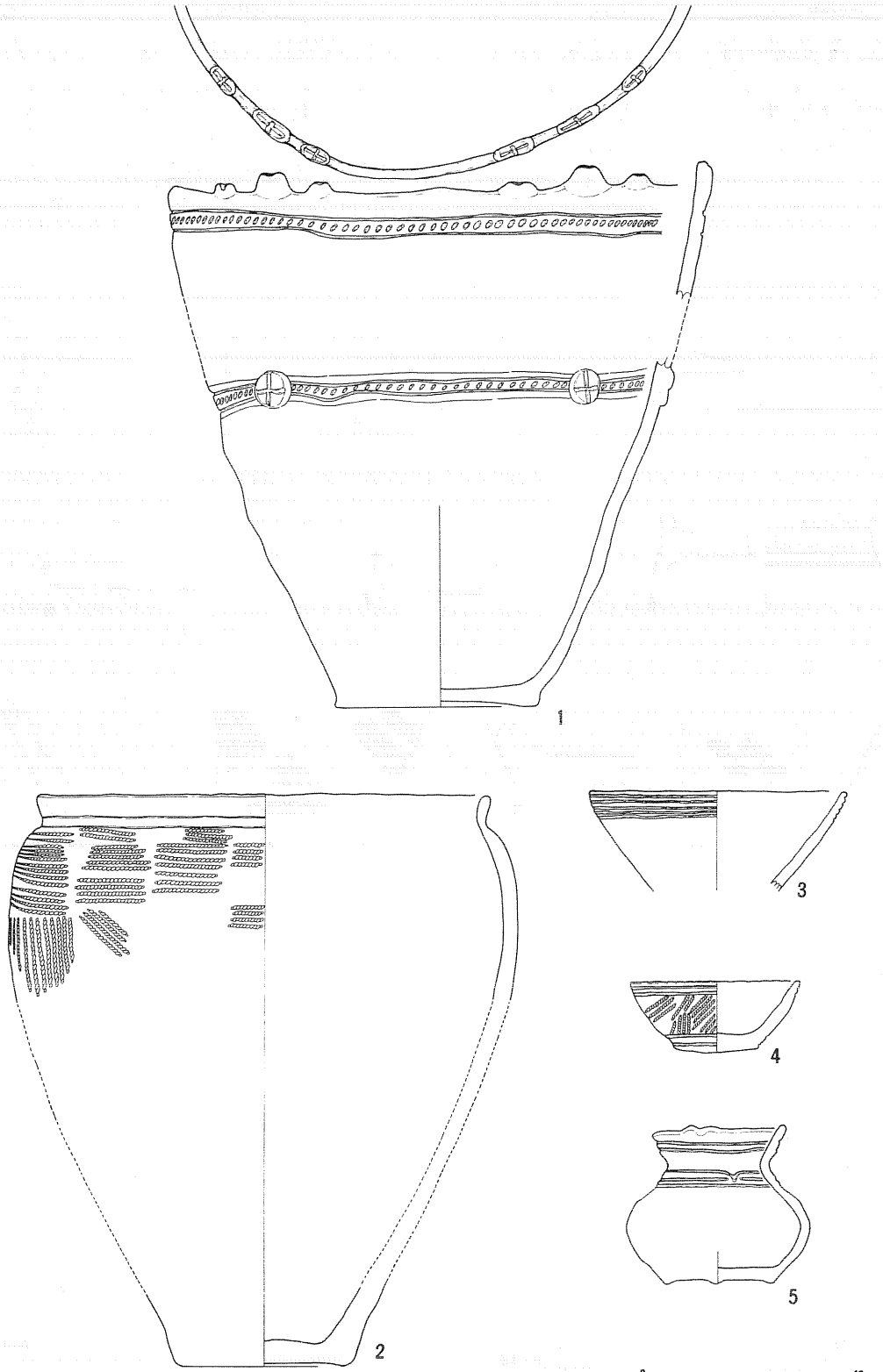
第14図3，最大長39mm，最大幅65mm，最大厚10mm，横形の石匙である。刃部の作出は本体部分底辺で顕著であるが，ほぼ全周に亘って行われている。つまみ部分は第1次剥片の打面近くに作出されているが，背面からのつまみ部作出のための抉りは，第1次剥片の打瘤剥除の効果も合わせて行われている。

剥片には，**第14図4**，**第15図2**，8のように第1次剥片に若干の調整剥離を施したものもある。

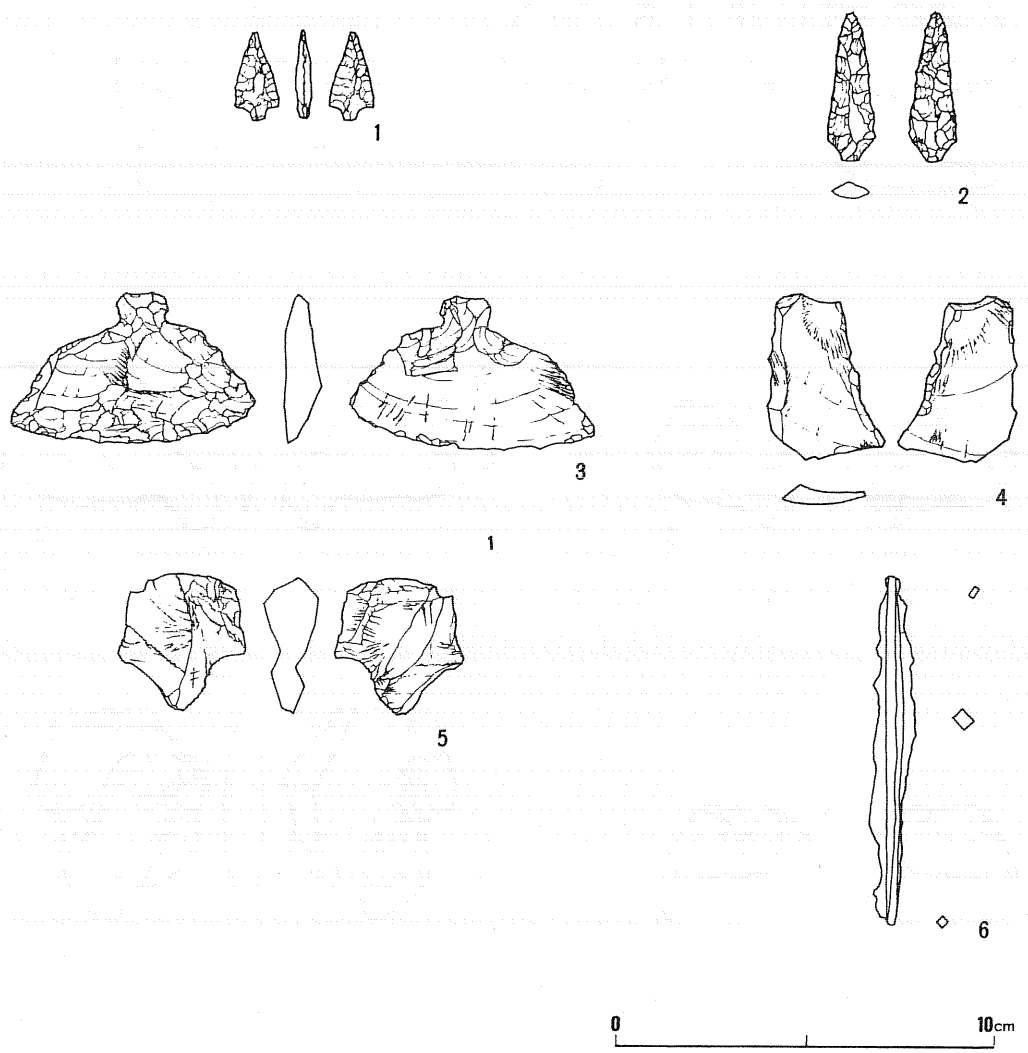
他に，縄文時代のものではないが，断面形が四角形の釘状の鉄製品も出土している。



第12図　縄文時代土器実測図(1)



第13図　縄文時代土器実測図(2)



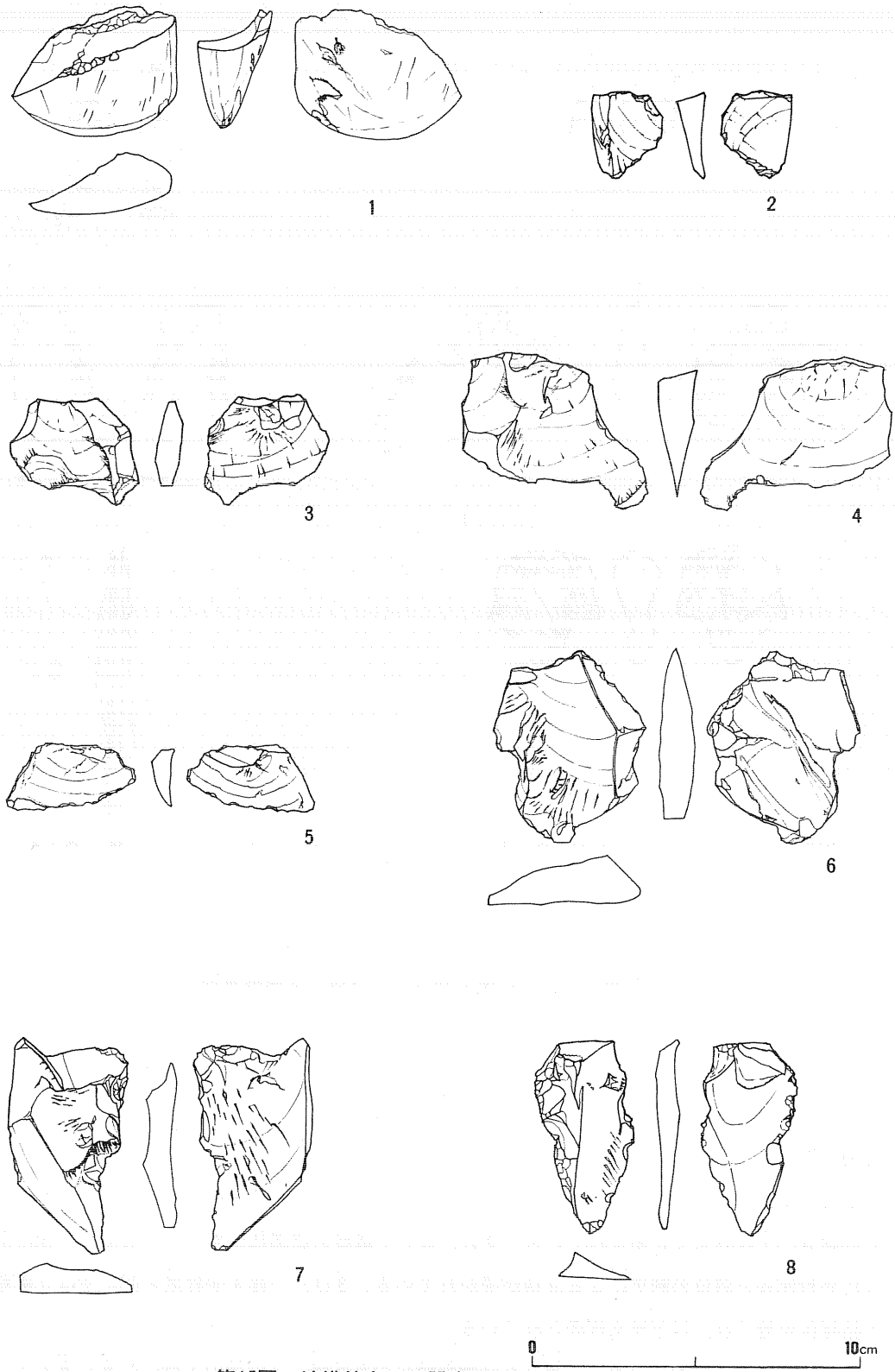
第14図　トレンチ調査区内出土石器・鉄器実測図

(2)　弥生時代

弥生時代の遺物も，縄文時代のものと同様，遺構内から出土したものではなく，縄文時代の遺物に混じって出土したものである。

第11図 1 は，口縁に 3 条の平行沈線と刺突列の文様帯が設けられている。口唇上には，縄軸の絡縄体による撚糸文が施されている。**2** は，同じく縄軸の絡縄体が施された後に，口縁に沿った平行沈線と斜位の刺突による文様が描かれている。**3** は，口縁 4 cm程度の間にやはり縄軸の結縄体が施され，以下無文研磨されている。

4～**11**は，同様縄軸の絡縄体が施された胴部破片であるが，この類の土器には **6**，**8** のように絡縄体が単位をなして施されるものもある。



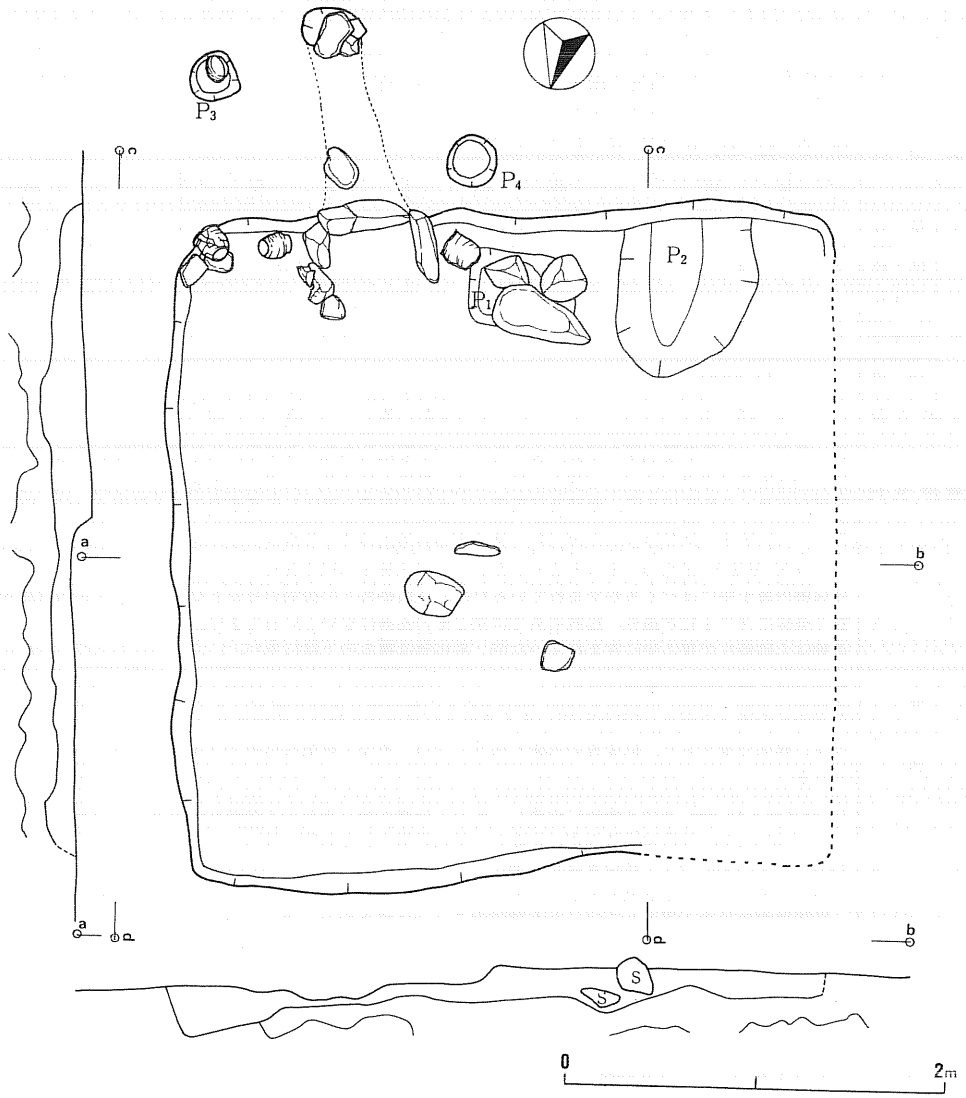
第15図　遺構外出土石器実測図

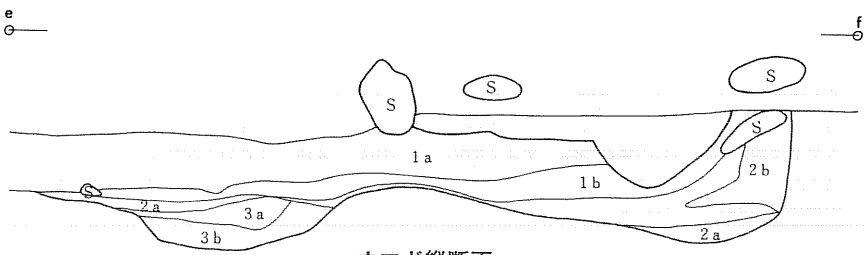
第1表　第1号住居跡観察表

第1号住居跡	挿図	16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23
	図版	4, 5, 6, 14, 15

検出区	17—C, 18—C, 17—B, 18—B			
法量	東壁	西壁	南壁	北壁
壁長	360	〈370〉	358	〈348〉
壁高	36	——	26.7	——
周溝幅	——	——	——	——
周溝深	——	——	——	——
面積	〈12.30m²〉			
主軸方位	N—16°—W	形態	方形	

確認状況	17—Cグリット第Ⅳ層上面の精査により先ずカマド煙出孔の焼土及び煙出孔を覆う円礫を検出し，次いで住居跡南壁及び東壁のプランを検出した。しかし西壁及び北壁のプラン一部は耕作のため壊わされており，明確なプランを検出できず，南壁及び東壁から大体の規模を推定して遺構内の精査を行った。また，住居跡プランの検出と同時にカマド芯材の一部と小形の甕2個体を検出している。
覆土	10YR3/4 暗褐色 褐色のパミスを2～5%含み，炭化物1%程度含む。 住居跡内覆土中にはパミスが含まれているため，住居跡外との識別の目安となった。しかし水田耕作の影響で全体にグライ化が進み，色調の点では殆どその差異はないといってよい。 遺物は土師器片が覆土中に含まれていた他，炭化物は覆土の下層に多い。
壁	西壁及び北壁の一部は検出できず。 南壁及び東壁で床面との傾斜角108°～131°を計る。壁材等の遺材は検出していない。
床	非常に脆弱な面であり，貼床等の処置も施されない。カマド燃焼部付近では炭化物，焼土の広がりが認められる。
ピット	P_1 65×55×15.5cm カマド西側に位置し，ピット内覆土から多量の土師器片が出土している。 P_2 43×37×19cm 住居跡南壁西寄に位置し，壁に付設された状態で検出 P_3 27×28×45cm カマド煙道東側から検出 P_4 25×26×38cm 煙道西側南壁近くに検出 住居跡内に柱穴と思われるピットを確認することはできなかった。
カマド 位置	南壁東寄り
カマド 覆土	1a 10YR3/3 暗褐色 住居跡内覆土 1b 5YR5/8 赤褐色 カマド天井部からの崩落した焼土 1c 10YR3/4 暗褐色 若干の焼土粒を含む 2a 10YR1/7 黒色 炭化物層 2b 10YR3/2 黒褐色 炭化物 焼土粒を含む 3a 7.5YR5/6 明褐色 粘質 燃焼部の焼土層 3b 5YR5/8 明赤褐色 10mm程度の礫を含む焼土層
カマド	本体部分は河原石を芯材として用いられている。両袖部は計6個の扁平な礫を立てて芯材としており，煙道と本体部分の境には，長大な河原石を両袖部芯材にさしわたして天井部の補強に用いている。煙道は断面をほぼ円形にくりぬいた所謂トンネル式のもので，長さは100cmを計る。
遺物	覆土中の遺物は，カマドを中心とした住居跡内南側に主に分布している。 カマド東側からは小形の甕2個体，煙道東側のP_3から坏が1個体ほぼ完形の状態で出土している。その他覆土からは土師器壺・甕・坏が出土し，それらに混って縄文土器片も出土している。土器以外にはフイゴの羽口の出土があげられる。

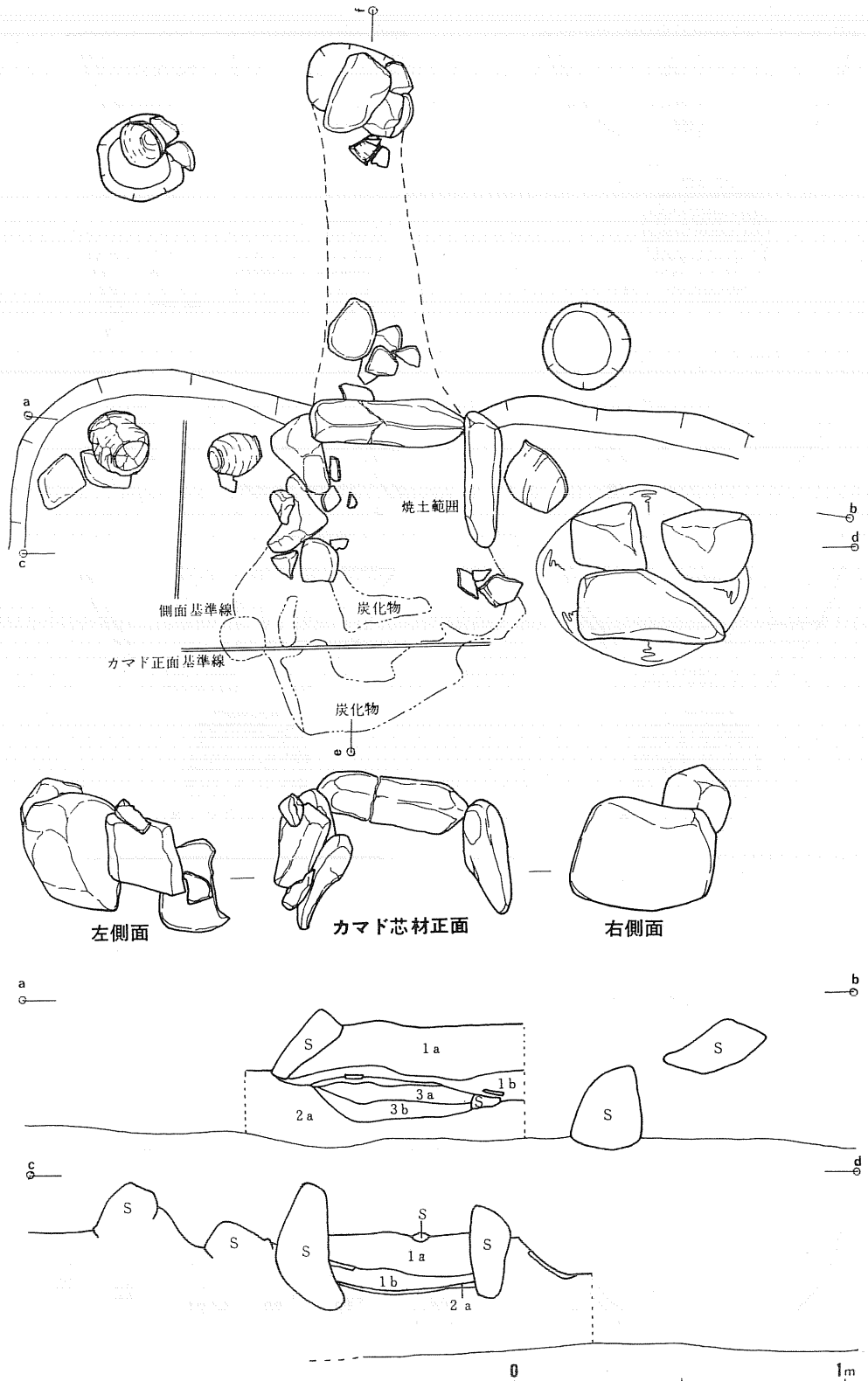




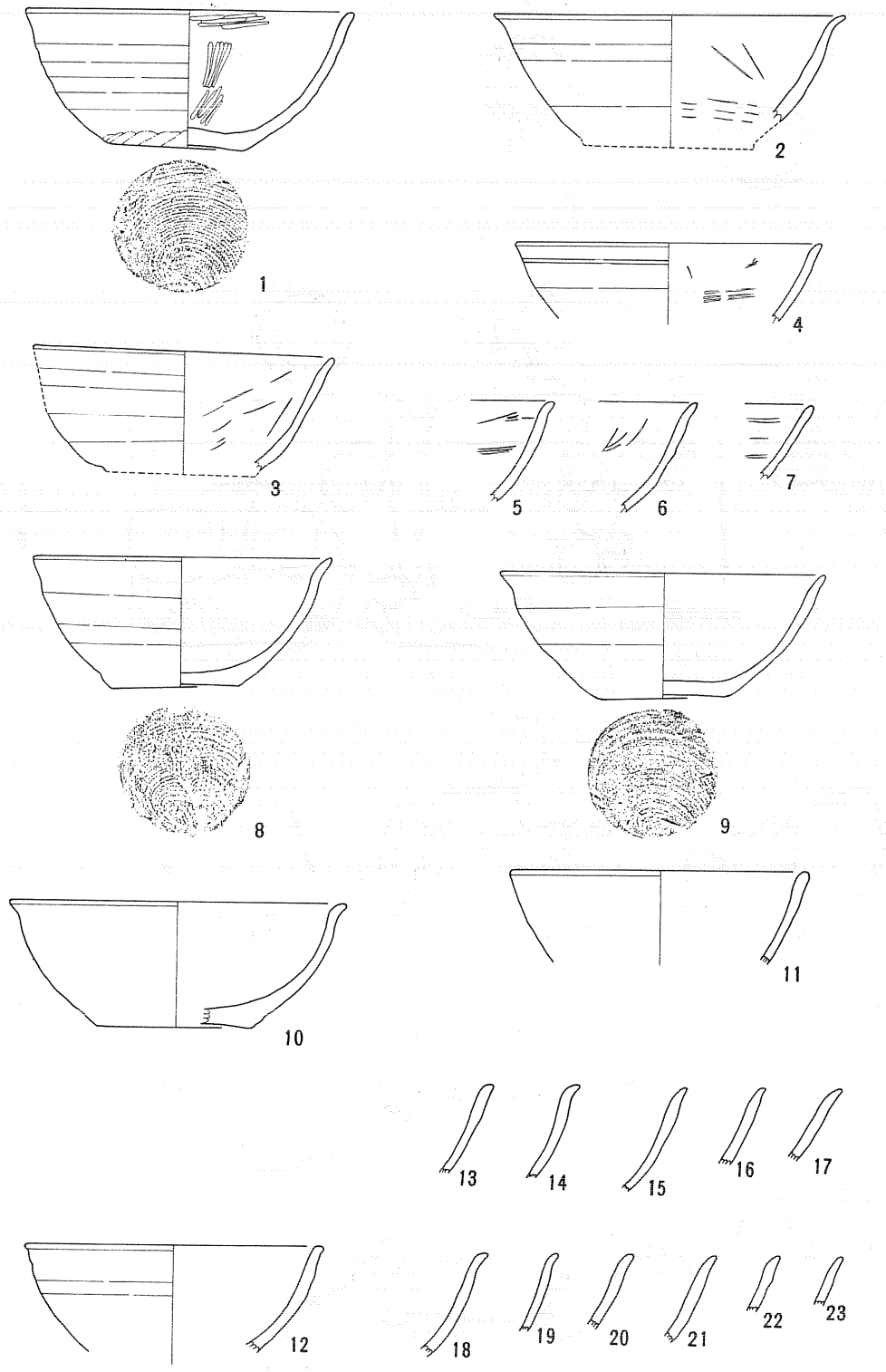
カマド縦断面

0　1m

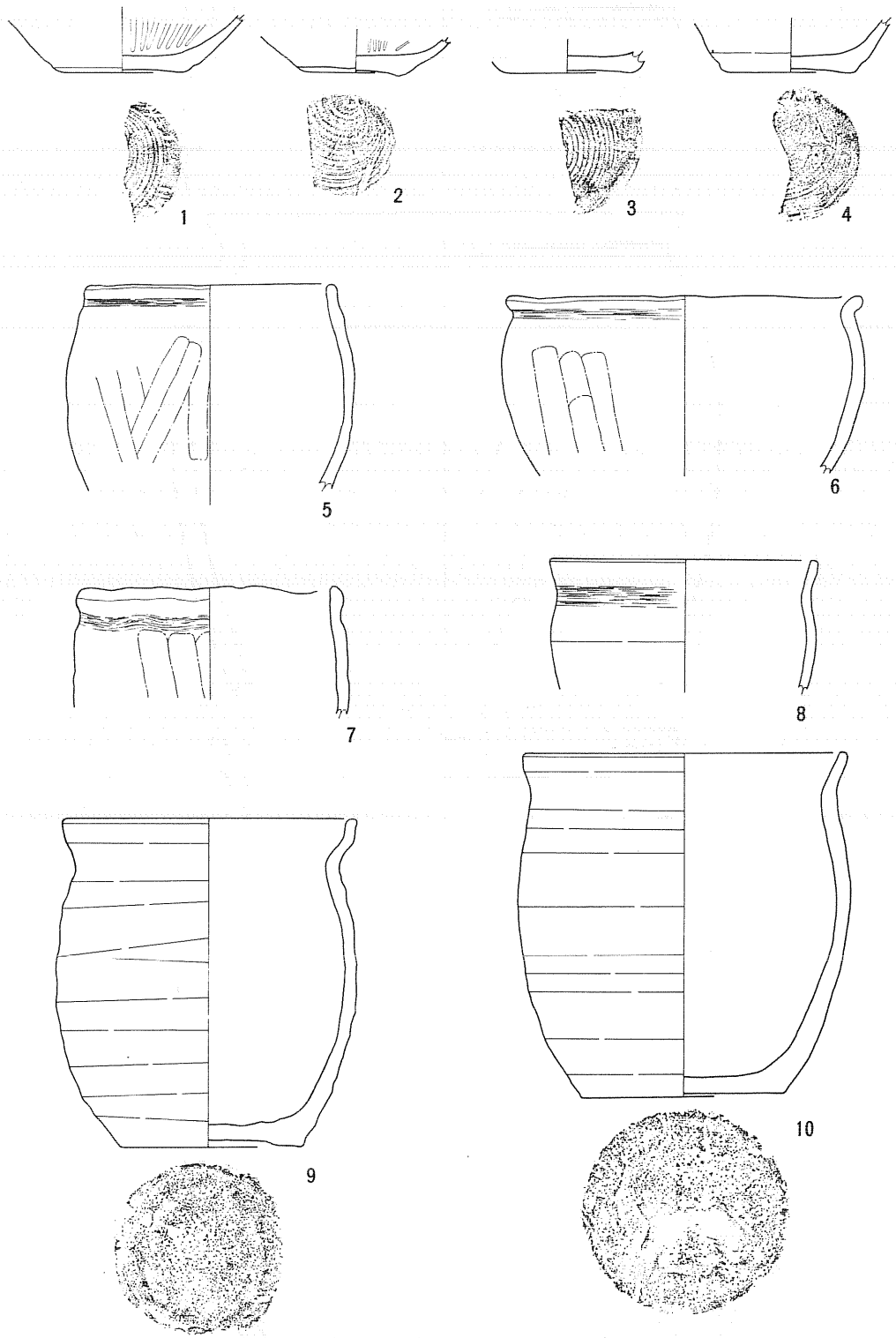
第16図　第1号住居跡



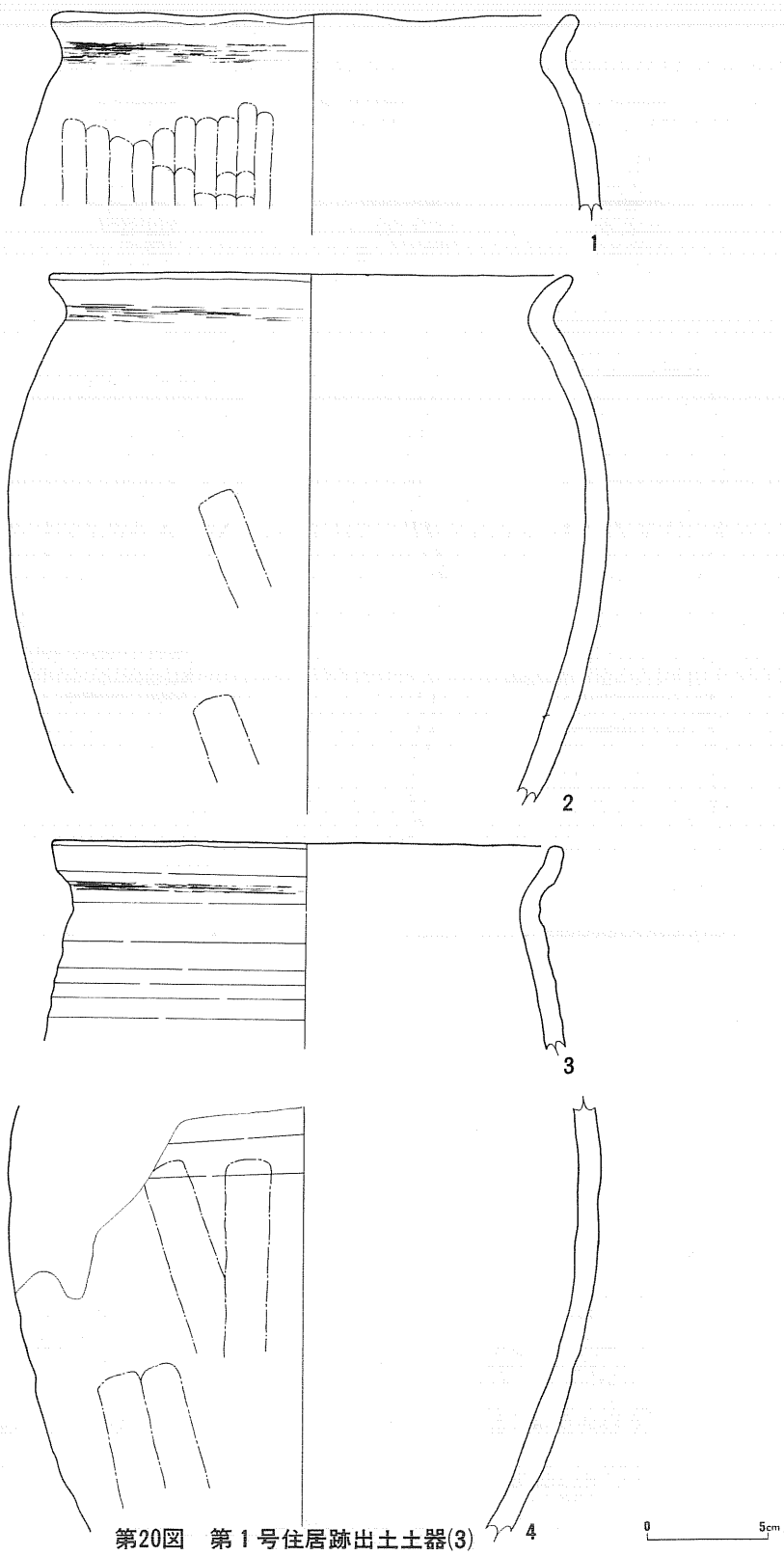
第17図　第1号住居跡カマド



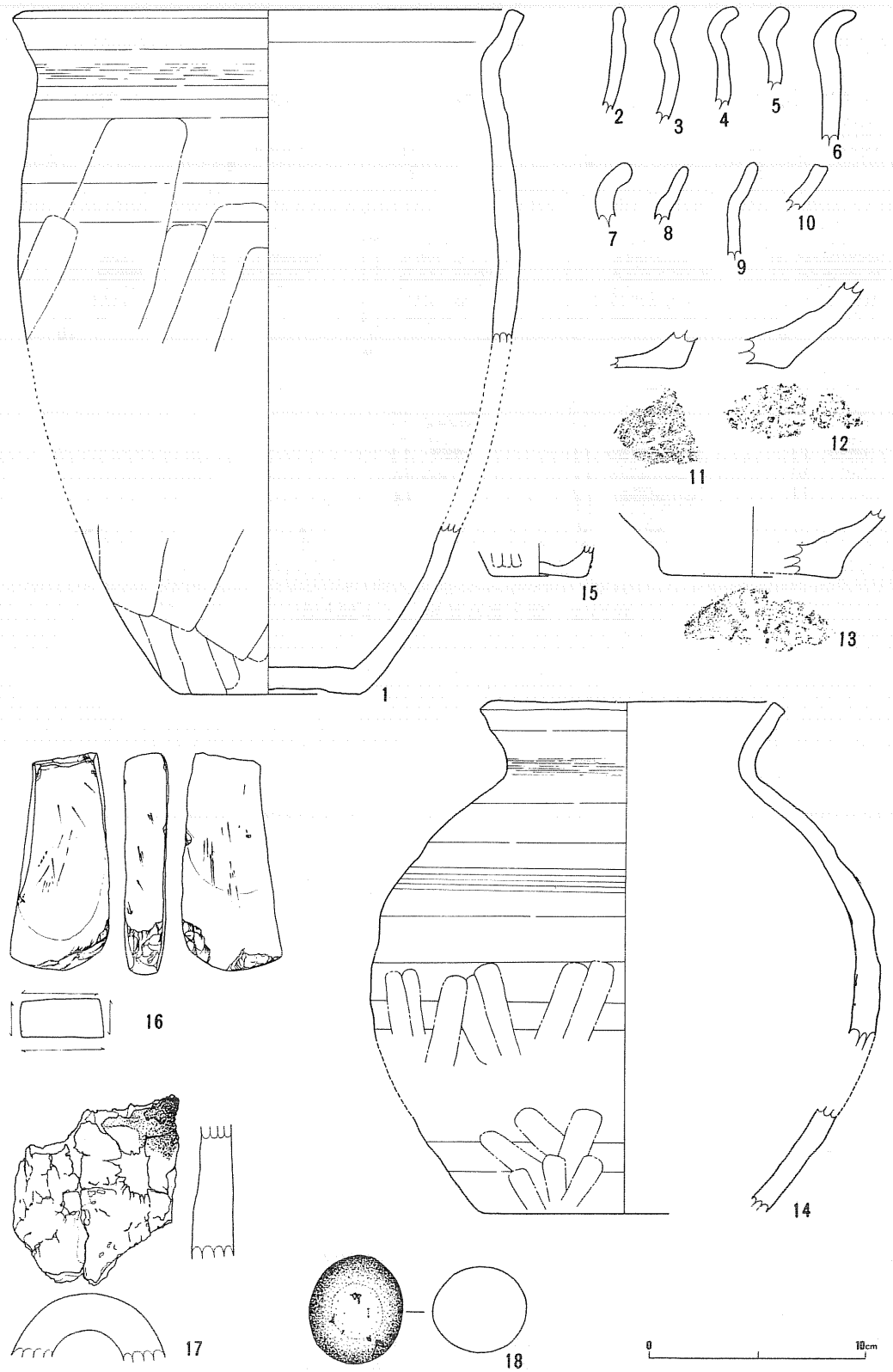
第18図　第１号住居跡出土土器(1)



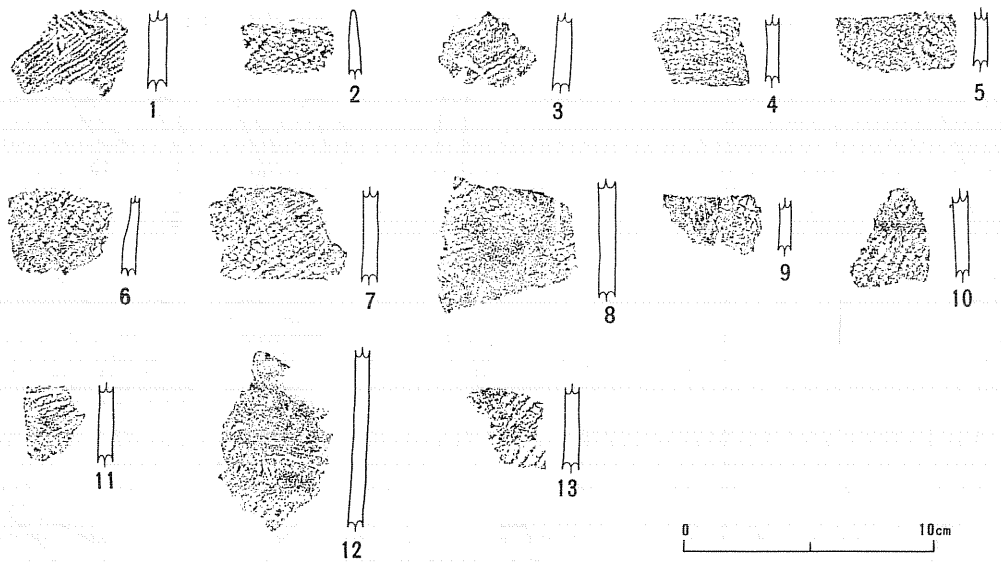
第19図　第１号住居跡出土土器(2)



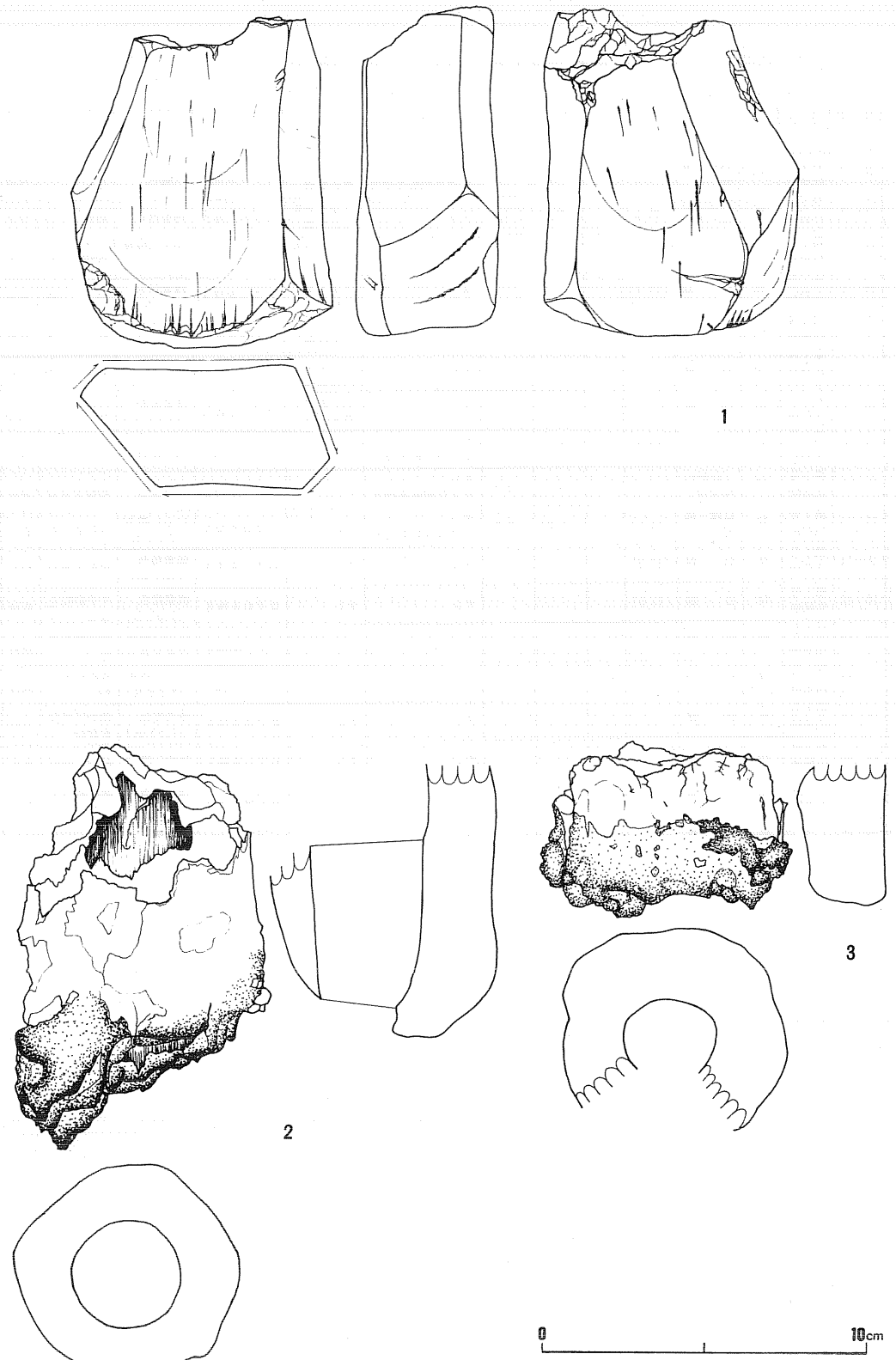
第20図　第１号住居跡出土土器(3)



第21図　第１号住居跡出土土器(4)



第22図　第１号住居跡出土土器拓影



第23図　第１号住居跡出土石器・土製品

第2表　第1号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量（cm）				調整（地文）		成形	色調	胎土	焼成
				口径	体径	底径	器高	外面	内面				
18—1	第1号住居跡	坏	口縁～底部	14.3		5.9	6.0	ナシ ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水挽き	灰褐色	やや砂粒を含む	良好
18—2	第1号住居跡	坏	口縁～胴部	15.4		(7.4)	(5.8)	ナシ	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
18—3	第1号住居跡	坏	口縁	(13.1)		(6.5)	(5.4)	ナシ	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水挽き	にぶい黄橙色	砂粒を含む	良好
18—4	第1号住居跡	坏	口縁	(13.4)				ナシ	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色 (7.5YR)	精選	良好
18—5	第1号住居跡	坏	口縁					ナシ	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色 (7.5YR)	精選	良好
18—6	第1号住居跡	坏	口縁					ナシ	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色 (7.5YR)	精選	良好
18—7	第1号住居跡	坏	口縁					ナシ	ヘラミ·ガキ 黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色 (7.5YR)	精選	良好
18—8	第1号住居跡	坏		13.0		5.6	5.7	ナシ ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
18—9	第1号住居跡	坏	(口縁の⅓欠損)	14.2		5.5	5.5	ナシ ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
18—10	第1号住居跡	坏	口縁～底部	(14.8)		(6.8)	5.5	ナシ ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	にぶい橙色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
18—11	第1号住居跡	坏	口縁	(13.2)				ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	明黄褐色 (10YR)	砂粒を含む	良好
18—12	第1号住居跡	坏	口縁	(13.0)				ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色 (7.5YR)	やや砂粒を含む	良好
18—13	第1号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	にぶい橙色 (5YR)	細砂粒を含む	良好
18—14	第1号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	にぶい橙色 (7.5YR)	細砂粒を含む	良好
18—15	第1号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色 (7.5YR)	微かに砂粒を含む	良好
18—16	第1号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	にぶい橙色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
18—17	第1号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色 (10YR)	やや砂粒を含む	良好
18—18	第1号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
18—19	第1号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	にぶい橙色 (7.5YR)	細砂粒を含む	良好
18—20	第1号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
18—21	第1号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色 (10YR)	砂粒を含む	良好
18—22	第1号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	にぶい橙色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
18—23	第1号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	にぶい橙色 (7.5YR)	細砂粒を含む	良好
19—1	第1号住居跡	坏	底部			(5.6)		ヘラケズリ ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色 (7.5YR)	精選	良好
19—2	第1号住居跡	坏	底部			4.4		ナシ ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色 (7.5YR)	精選	良好

第3表　第1号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量(cm) 口径	体径	底径	器高	調整(地文) 外面	内面	成形	色調	胎土	焼成
19—3	第1号住居跡	坏	底部			(5.8)		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	淡橙色(5YR)	精選	良好
19—4	第1号住居跡	坏	底部			(6.0)		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色(7.5YR)	精選	良好
19—5	第1号住居跡	小形の甕	口縁	(11.2)	(13.0)			ナデ，ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	灰褐色～橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
19—6	第1号住居跡	甕	口縁	(16.0)	(16.3)			ナデ，ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい黄褐色(10YR)	砂粒を含む	良好
19—7	第1号住居跡	小形の甕	口縁	(11.9)	(12.4)			ナデ，ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
19—8	第1号住居跡	小形の甕	口縁	(11.9)	(12.0)			ナデ	ナデ	積み上げ法(後，ロクロ使用)	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
19—9	第1号住居跡	小形の甕	(口縁～胴部にかけて一部欠損)	13.2	13.5	8.1	14.8	ナデ，砂底	ナデ	積み上げ法(後，ロクロ使用)	浅黄橙色～橙色	砂粒を含む	良好
19—10	第1号住居跡	小形の甕	(胴部の一部と底部の一部が欠損)	14.5	15.0	10.1	15.5	ナデ，砂底	ナデ	積み上げ法(後，ロクロ使用)	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
20—1	第1号住居跡	甕	口縁	(21.6)				ナデ，ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色(10YR)	砂粒を含む	良好
20—2	第1号住居跡	甕	口縁～胴部	(21.4)	(24.5)			ナデ，ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色～にぶい褐色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
20—3	第1号住居跡	甕	口縁	(20.8)				ナデ	ナデ	積み上げ法	淡橙色(5YR)	砂粒を含む	良好
20—4	第1号住居跡	甕	胴部					ナデ，ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	橙色～褐灰色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
21—1	第1号住居跡	甕		(23.5)	(23.1)	(8.5)	(31.8)	ナデ，ヘラケズリ砂底	ナデ	積み上げ法(後，ロクロ使用)	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
21—2	第1号住居跡	甕	口縁					ナデ，ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色(5YR)	砂粒を含む	良好
21—3	第1号住居跡	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	にぶい褐色	砂粒を含む	良好
21—4	第1号住居跡	甕	口縁					ナデ，ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色(5YR)	砂粒を含む	良好
21—5	第1号住居跡	甕	口縁					ナデ，ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	灰白色(5YR)	砂粒を含む	良好
21—6	第1号住居跡	甕	口縁					ナデ，ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
21—7	第1号住居跡	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色(10YR)	砂粒を含む	良好
21—8	第1号住居跡	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法(後，ロクロ使用)	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
21—9	第1号住居跡	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法(後，ロクロ使用)	淡橙色(5YR)	微かに砂粒を含む	良好
21—10	第1号住居跡	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法(後，ロクロ使用)	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
21—11	第1号住居跡	甕	底部					ヘラケズリ，木葉痕	ナデ	積み上げ法	灰白色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
21—12	第1号住居跡	甕	底部					ナデ，ヘラケズリ，木葉痕	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
21—13	第1号住居跡	甕	底部					ナデ，木葉痕	ナデ	積み上げ法	にぶい褐色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
21—14	第1号住居跡	壺	口縁～胴部(底部欠損)	14.0	(23.6	(13.1)	(23.8)	ナデ，ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色	精選	良好
21—15	第1号住居跡	鉢	底部			4.6		ヘラケズリ	ナシ	積み上げ法	にぶい黄橙色(10YR)	砂粒を含む	良好

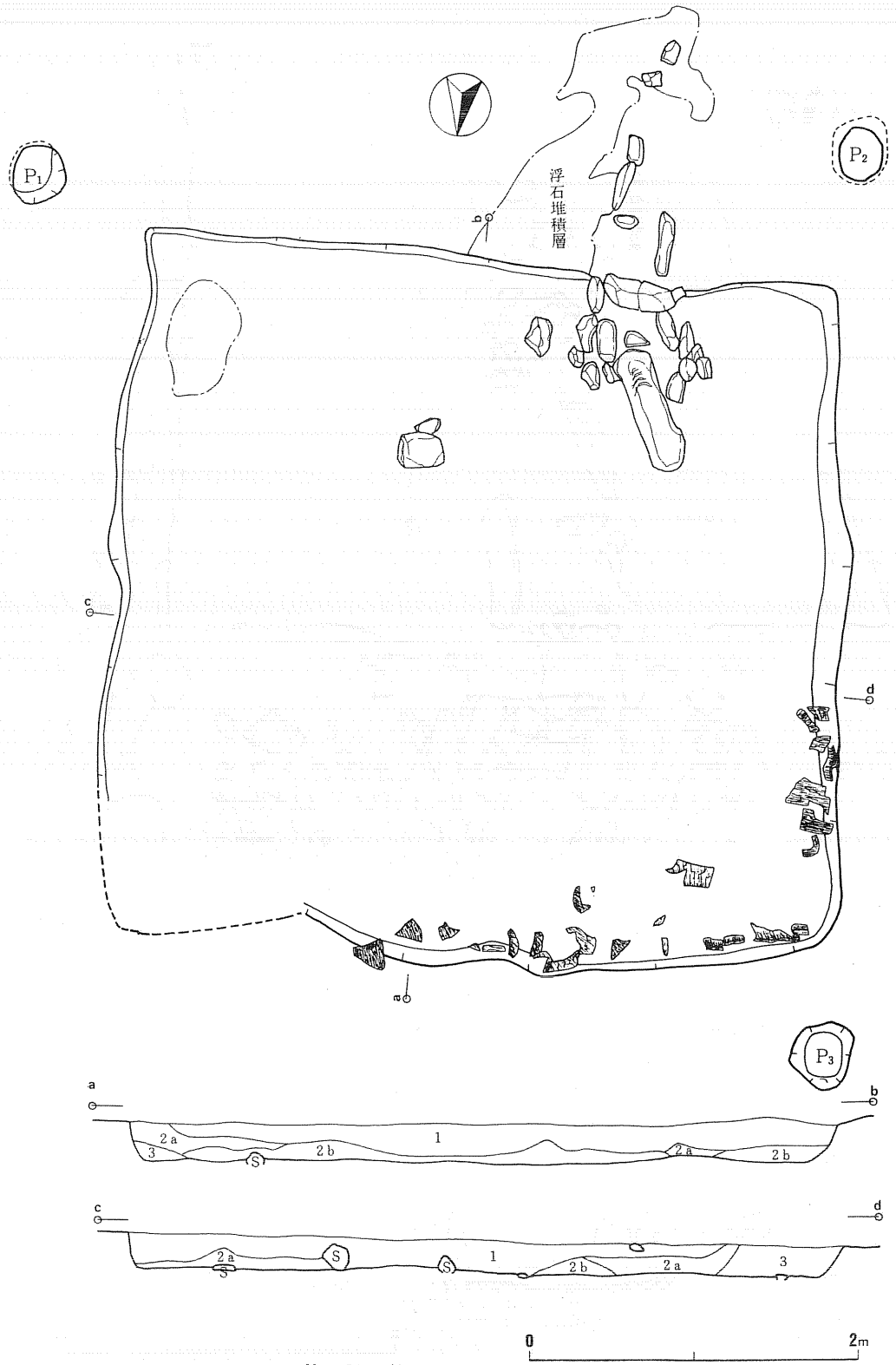
第4表　第2号住居跡観察表

第2号住居跡	挿図	24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34
	図版	7, 8, 16, 17, 18, 19

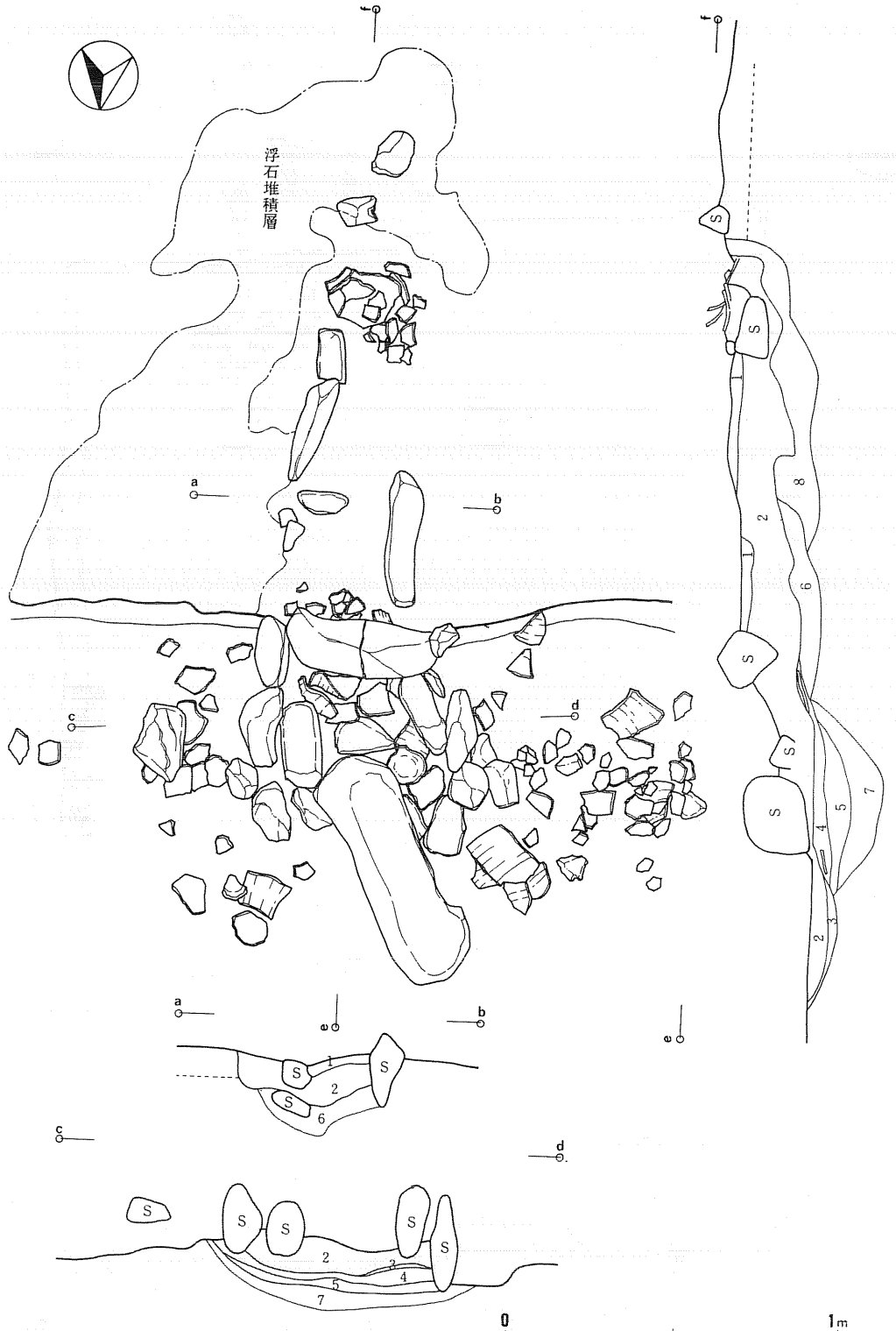
検出区	14—A, 14—B, 13—B			
法量	東壁	西壁	南壁	北壁
壁長	〈438〉	436	446	〈470〉
壁高	23.0	20.0	28.5	23.5
周溝幅	——	——	——	——
周溝深	——	——	——	——
面積	18.54m²			

主軸方位	N—0.5°—E	形態	方形

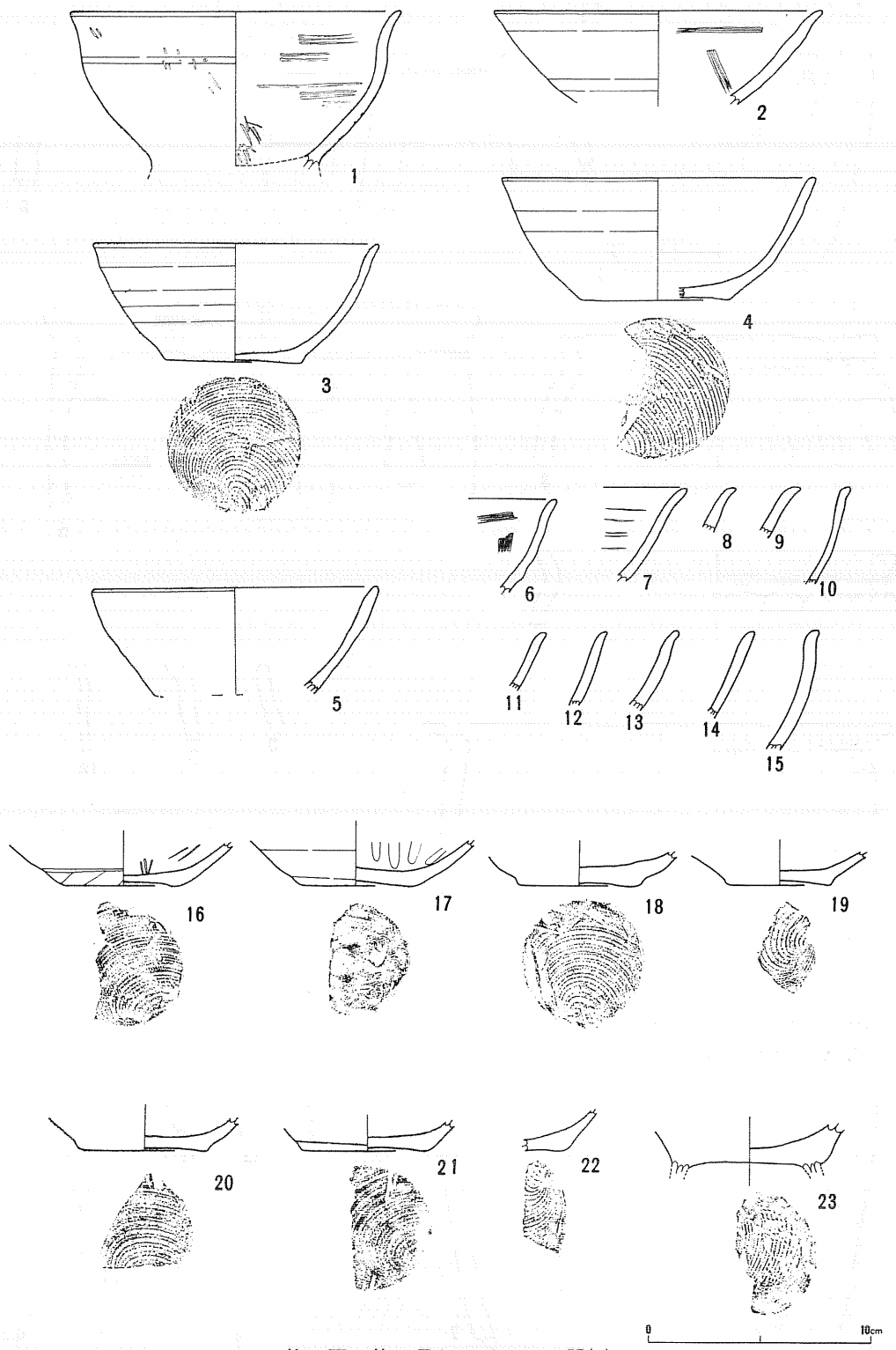
確認状況	第Ⅳ層上面において，先ずカマド燃焼部・煙道部に用いられた芯材である河原石を検出し，次いで住居跡輪郭を確認した。確認面である第Ⅳ層上面はグライ化しており，住居跡内覆土と色調の点で識別するのは困難であったが，住居跡北西隅に壁材に用いられたと考えられる炭化材の一部が露出していたのと，カマド東側の壁の一部が浮石を切り込んで構築されていたため大まかな規模の推定は可能であった。住居跡北西隅は水田のため調査できなかった。
覆土	1．10YR5/3 にぶい黄褐色 パミス混入 孔隙多 2a．10YR3/3 暗褐色 軽石2～3%混入 若干の焼土粒を含む 2b．10YR3/4 暗褐色 軽石若干量混入 孔隙少く締っている 3．10YR3/2 黒褐色 粘性強く孔隙少い 覆土は，全体的に拳大程度の礫を多量に含み，赤褐色に変化している個所もある。
壁	傾斜角97°～118°を計る。 北西隅からは炭化した壁材を検出している。
床	覆土中から床面直上にかけて径5cm～15cm程度の礫が非常に多い。床面自体は第　層を掘り込んで構築されており，硬くしまった個所は認められない。貼床も認められない。東南隅に白色粘土の堆積が認められ，径40×70cm 厚さ1～13cm，南北方向に長い楕円形プランで検出された。
ピット	P_1 32×38×43.0 東南隅外側 P_2 28×34×34.5 西南隅外側 P_3 38×40×37.5 西北隅外側 住居跡内に柱穴と思われるピットはなく，P_1～P_3とも住居跡各隅壁際から80cm程度外側に1個所づつ検出された。覆土はいづれも白色の砂質土が多く混入する。
カマド 位置	南壁西寄り
カマド 覆土	1．10YR3/4 暗褐色 粘質 軽石含む 2．7.5YR3/4 暗褐色 砂質 孔隙多 3．10YR3/3 黒褐色 粘質 孔隙少 4．7.5YR5/6 褐色 焼土粒含む 5．7.5YR5/8 明褐色 砂質 6．7.5YR3/3 暗褐色 粘質 炭化物含む 7．7.5YR5/8 明褐色 焼土 8．7.5YR3/4 暗褐色 粘質しまっている
カマド	カマド左右両袖は径20～30cm程度，厚さ8～12cm程度の扁平な石を立てて芯材としている。燃焼部と煙道部の境，袖部芯材の上には長さ45cm，幅18cm，厚さ18cm程の石が置かれている。焚口前部には，長さ74cm幅20～24cm，厚さ19cm程の長大な河原石が置かれている。煙道部はその掘り方の両壁に径15～40cm，厚さ7～9cm程度の扁平な石が立てられ補強材となっている。
備考	カマド東側壁，煙道部掘り方は，浮石堆積層を切り込んで構築されているが，この浮石堆積層は自然の窪みに溜った再堆積層の可能性がある。



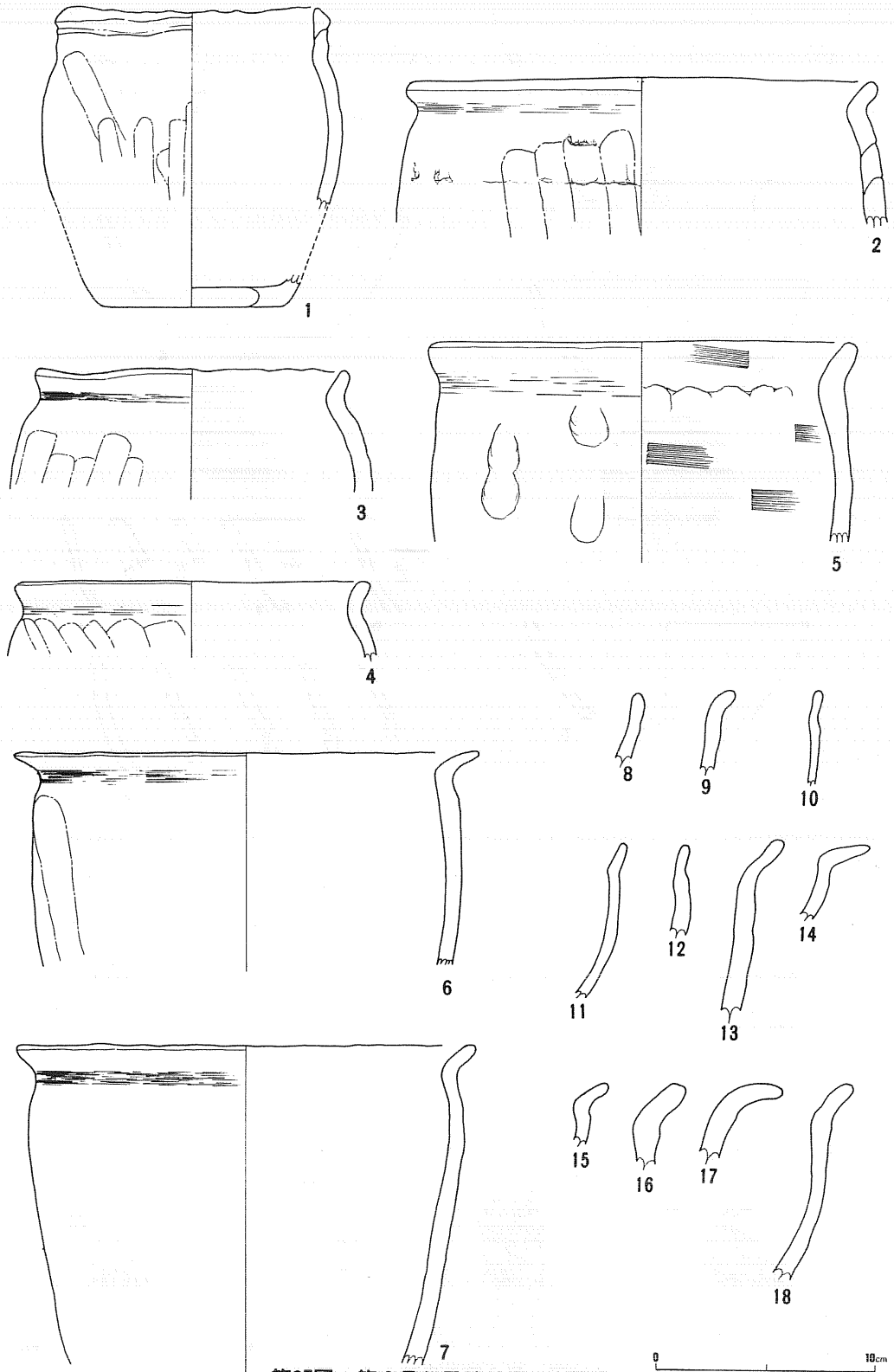
第24図　第２号住居跡



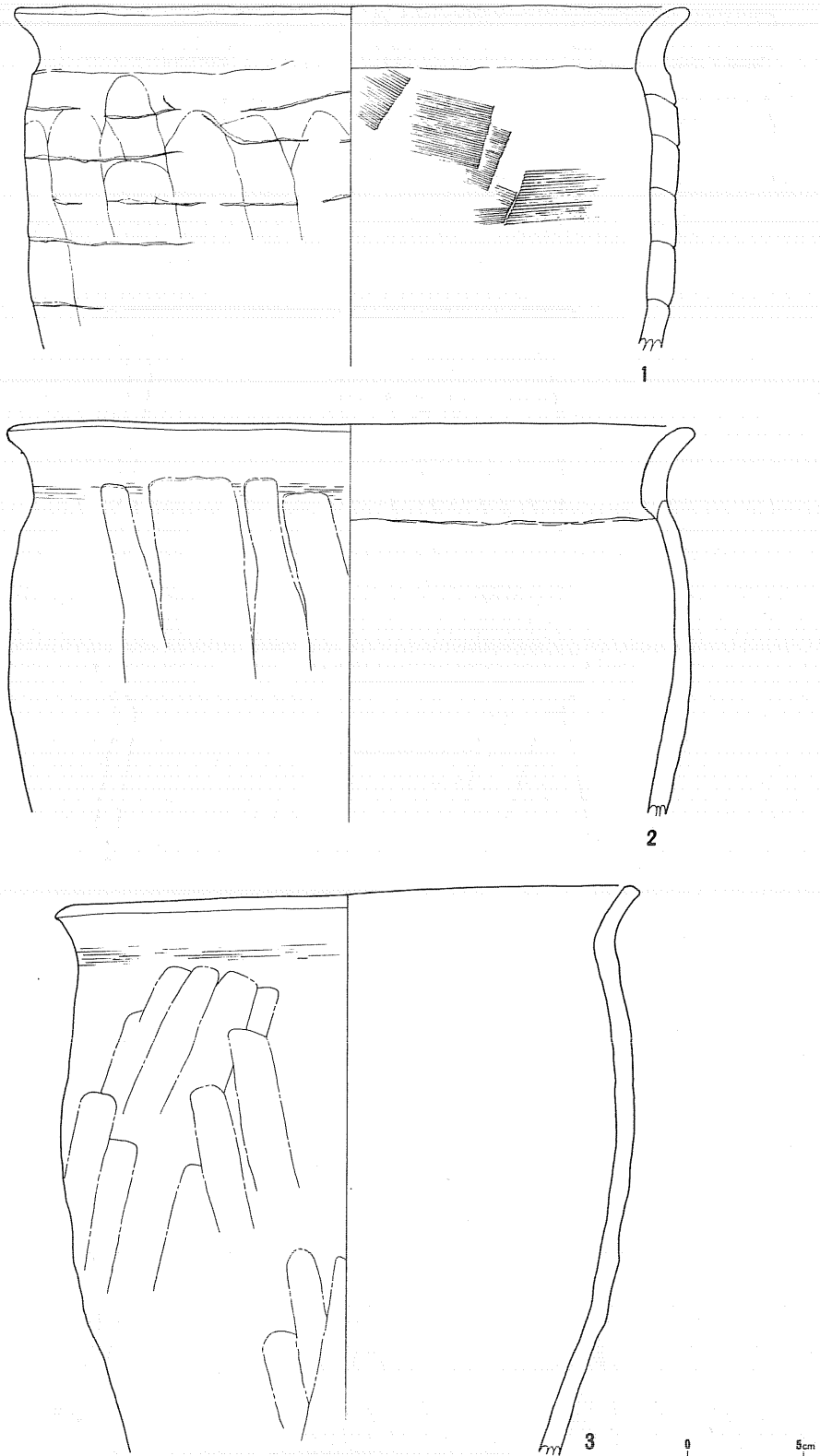
第25図　第２号住居跡カマド



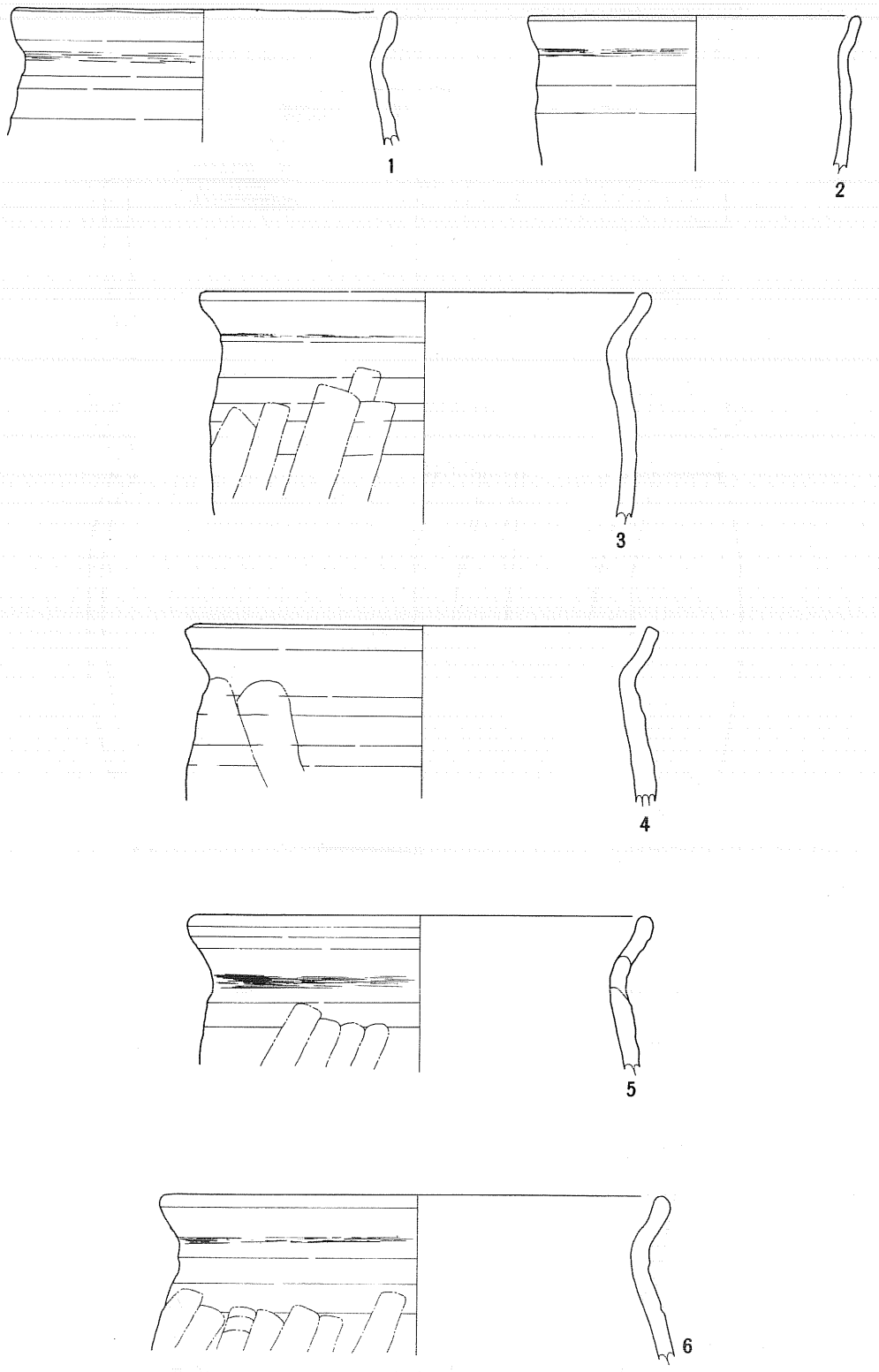
第26図　第２号住居跡出土土器(1)



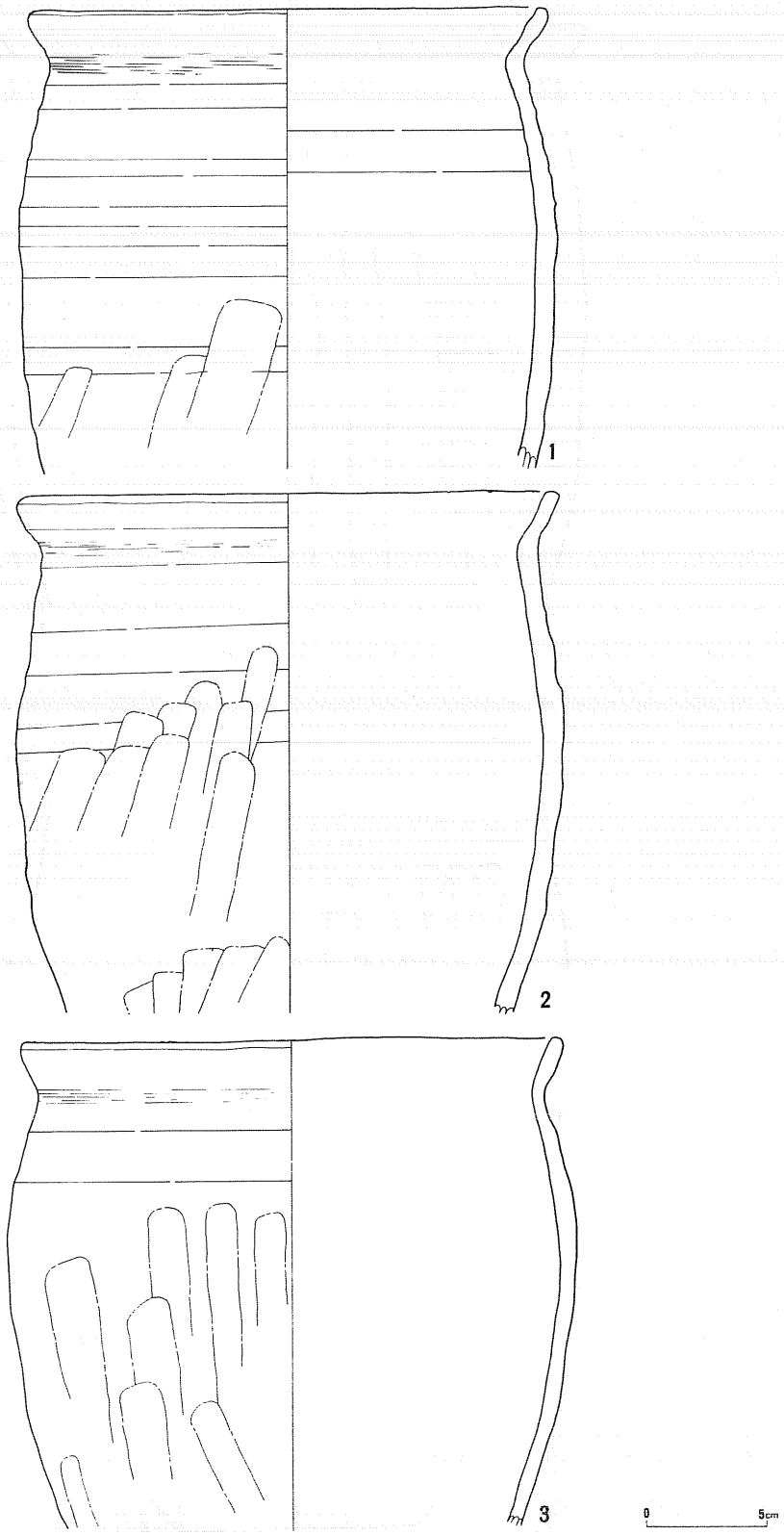
第27図　第２号住居跡出土土器(2)



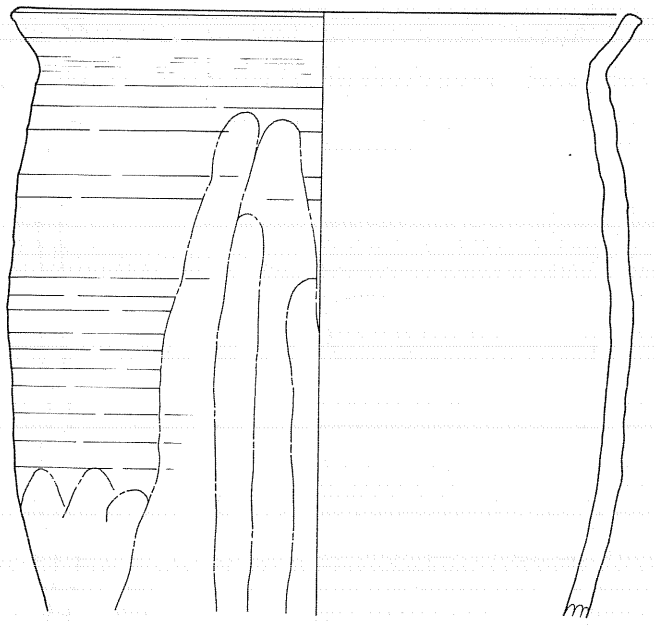
第28図　第２号住居跡出土土器(3)



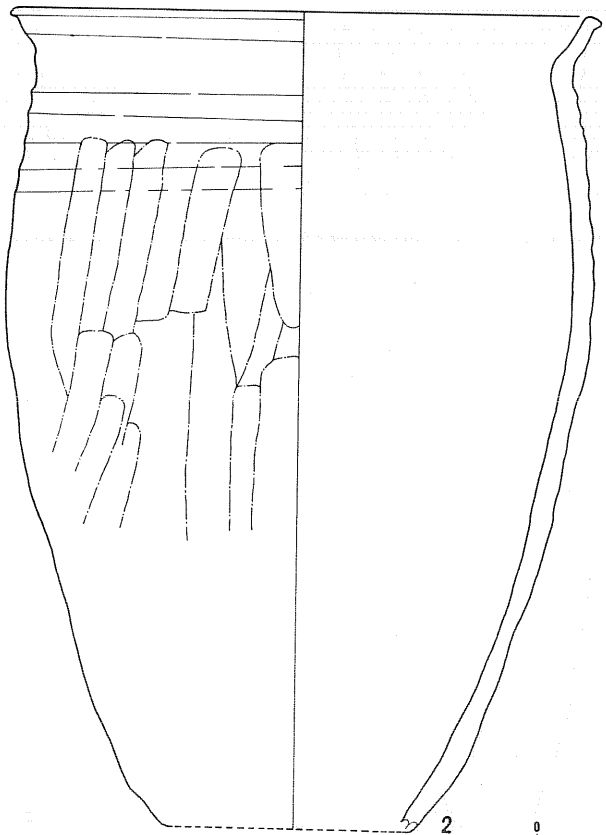
第29図　第２号住居跡出土土器(4)



第30図　第２号住居跡出土土器(5)



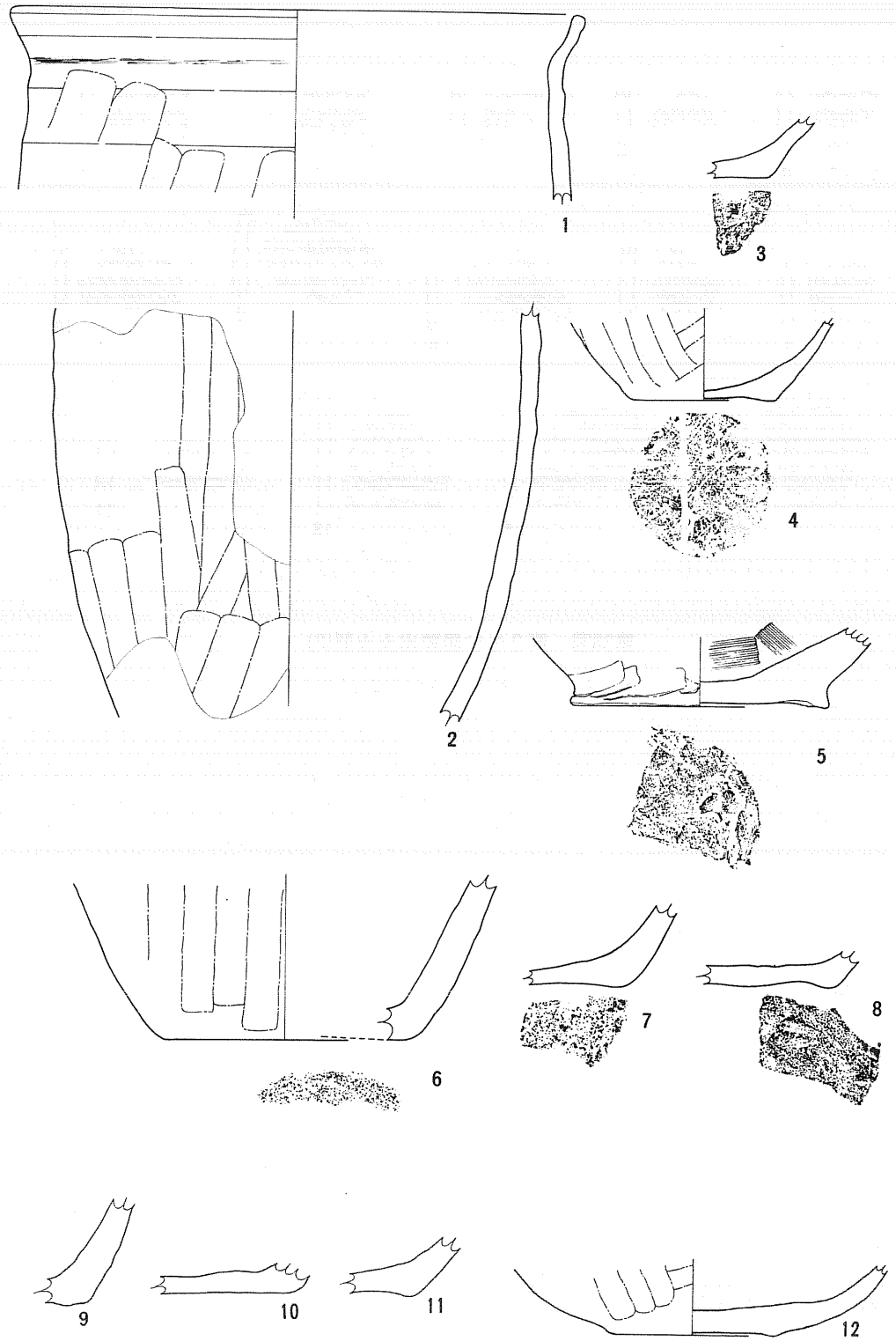
1



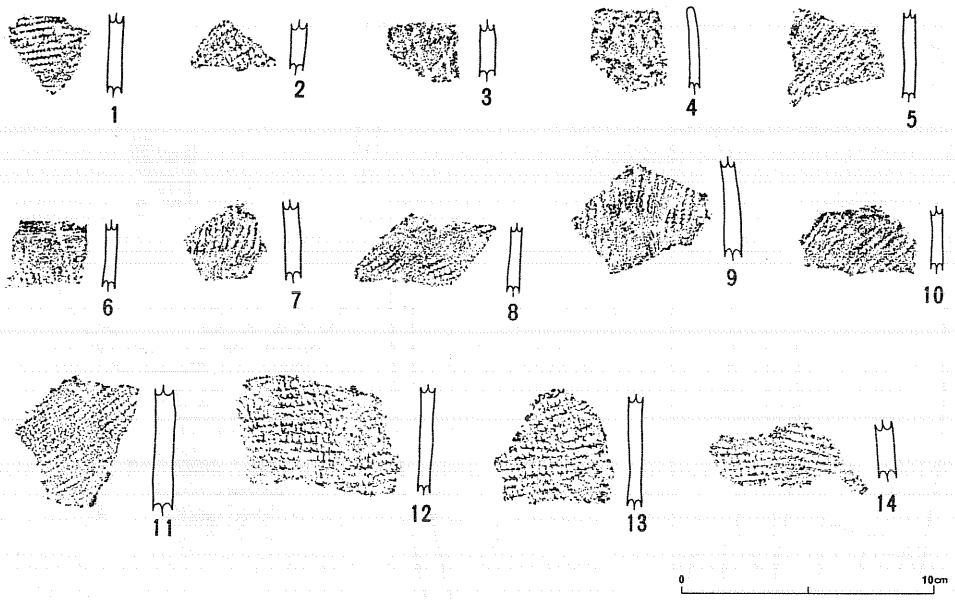
2

0　　10cm

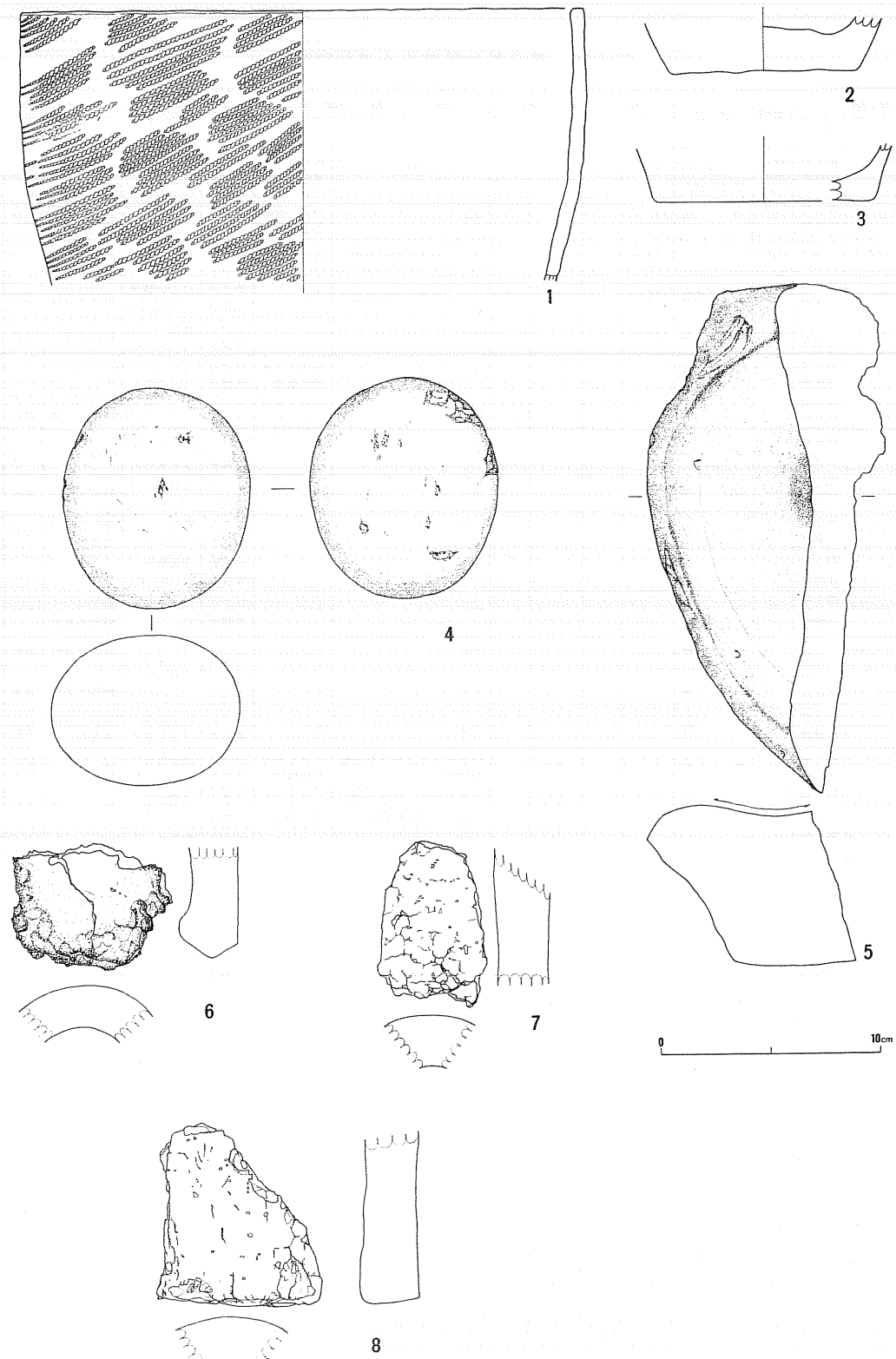
第31図　第２号住居跡出土土器(6)



第32図　第２号住居跡出土土器(7)



第33図　第２号住居跡出土土器(8)



第34図　第２号住居跡出土土器・石器

第5表　第2号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量（cm）				調整（地文）		成形	色調	胎土	焼成
				口径	体径	底径	器高	外面	内面				
26—1	第2号住居跡	高台付坏	口縁（口縁～底部にかけて欠損）	14.8				ヘラミガキ(?)	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	オリーブ灰（10Y）	精選	良好
26—2	第2号住居跡	坏	口縁	(14.8)				ナシ	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5YR）	精選	良好
26—3	第2号住居跡	坏		12.9		6.1	5	ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	橙色	砂粒を含む	良好
26—4	第2号住居跡	坏	¼～⅓残存	(14.2)		(6.6)	5	ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
26—5	第2号住居跡	坏	口縁	(13.0)				ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
26—6	第2号住居跡	坏	口縁					ナシ	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色	精選	良好
26—7	第2号住居跡	坏	口縁					ナシ	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	にぶい橙色（7.5YR）	精選	良好
26—8	第2号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	淡橙色（5YR）	砂粒を含む	良好
26—9	第2号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
26—10	第2号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	橙色（5YR）	微かに砂粒を含む	良好
26—11	第2号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
26—12	第2号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	にぶい黄橙色	細かい砂粒を含む	良好
26—13	第2号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	明赤褐色（5YR）	砂粒を含む	良好
26—14	第2号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
26—15	第2号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	明赤褐色（5YR）	微かに砂粒を含む	良好
26—16	第2号住居跡	坏	底部			5.0		ヘラケズリ，ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5YR）	精選	良好
26—17	第2号住居跡	坏	底部			4.9		ヘラケズリ，ロクロ回転糸切りの後に再調整	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	淡黄橙色（5YR）	精選	良好
26—18	第2号住居跡	坏	底部			5.4		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	橙色（5YR）	精選	良好
26—19	第2号住居跡	坏	底部			(4.8)		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	にぶい黄橙色（7.5YR）	精選	良好
26—20	第2号住居跡	坏	底部			(5.8)		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	橙色（5YR）	精選	良好
26—21	第2号住居跡	坏	底部			5.6		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5YR）	精選	良好
26—22	第2号住居跡	坏	底部					ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	褐灰色（7.5YR）	精選	良好
26—23	第2号住居跡	高台付坏	底部					ナシ，ロクロ静止糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	淡橙色（5YR）	砂粒を含む	良好

第6表　第2号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量（cm）				調整（地文）		成形	色調	胎土	焼成
				口径	体径	底径	器高	外面	内面				
27—1	第2号住居跡	小形の甕	口縁～底部（胴部欠損）	12.5	(13.7)	8.2	(13.5)	ナデ ヘラナデ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色	微かに細砂粒を含む	良好
27—2	第2号住居跡	甕	口縁	(21.4)				ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色	砂粒を含む	良好
27—3	第2号住居跡	小形の甕	口縁	(14.4)				ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	明赤褐色	砂粒を含む	良好
27—4	第2号住居跡	甕	口縁	(16.2)				ナデ ケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色	微かに砂粒を含む	良好
27—5	第2号住居跡	甕	口縁	(19.6)				ナデ 指頭圧痕	ハケメ	積み上げ法	にぶい橙色	微かに砂粒を含む	良好
27—6	第2号住居跡	甕	口縁～胴部	(21.4)				ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色（10YR）	砂粒を含む	良好
27—7	第2号住居跡	甕	口縁～胴部	(21.0)	(20.0)			ナデ	ナデ	積み上げ法	(外)橙色 にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
27—8	第2号住居跡	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	褐灰色	砂粒を含む	良好
27—9	第2号住居跡	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
27—10	第2号住居跡	甕	口縁					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい赤褐色（5YR）	砂粒を含む	良好
27—11	第2号住居跡	甕	口縁					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	褐灰色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
27—12	第2号住居跡	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	淡黄色（2.5YR）	砂粒を含む	良好
27—13	第2号住居跡	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
27—14	第2号住居跡	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
27—15	第2号住居跡	甕	口縁					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい赤褐色	砂粒を含む	良好
27—16	第2号住居跡	甕	口縁					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色（5YR）	砂粒を含む	良好
27—17	第2号住居跡	甕	口縁					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
27—18	第2号住居跡	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
30—1	第2号住居跡	甕	口縁～胴部	(21.4)	(22.1)	(19.5)		ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	灰白色	微かに砂粒を含む	良好
30—2	第2号住居跡	甕	口縁～胴部	22.3	22.5			ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法（後ロクロ使用）	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
30—3	第2号住居跡	甕	口縁～胴部	(22.4)	(23.4)	(20.8)		ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	橙色	微かに砂粒を含む	良好
28—1	第2号住居跡	甕	口縁～胴部	(29.0)	28.1	(26.8)		ナデ ヘラケズリ	ナデ ハケメ	積み上げ法	にぶい橙色	微かに砂粒を含む	良好
28—2	第2号住居跡	甕	口縁～胴部	(29.5)	29.2	27.2		ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色	砂粒を含む	良好
28—3	第2号住居跡	甕	口縁～胴部	25.1	25.1			ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	橙色	砂粒を含む	良好
29—1	第2号住居跡	甕	口縁	(17.2)	(17.4)	(16.0)		ナデ	ナデ	積み上げ法	灰白色	精選，微かに砂粒を含む	良好

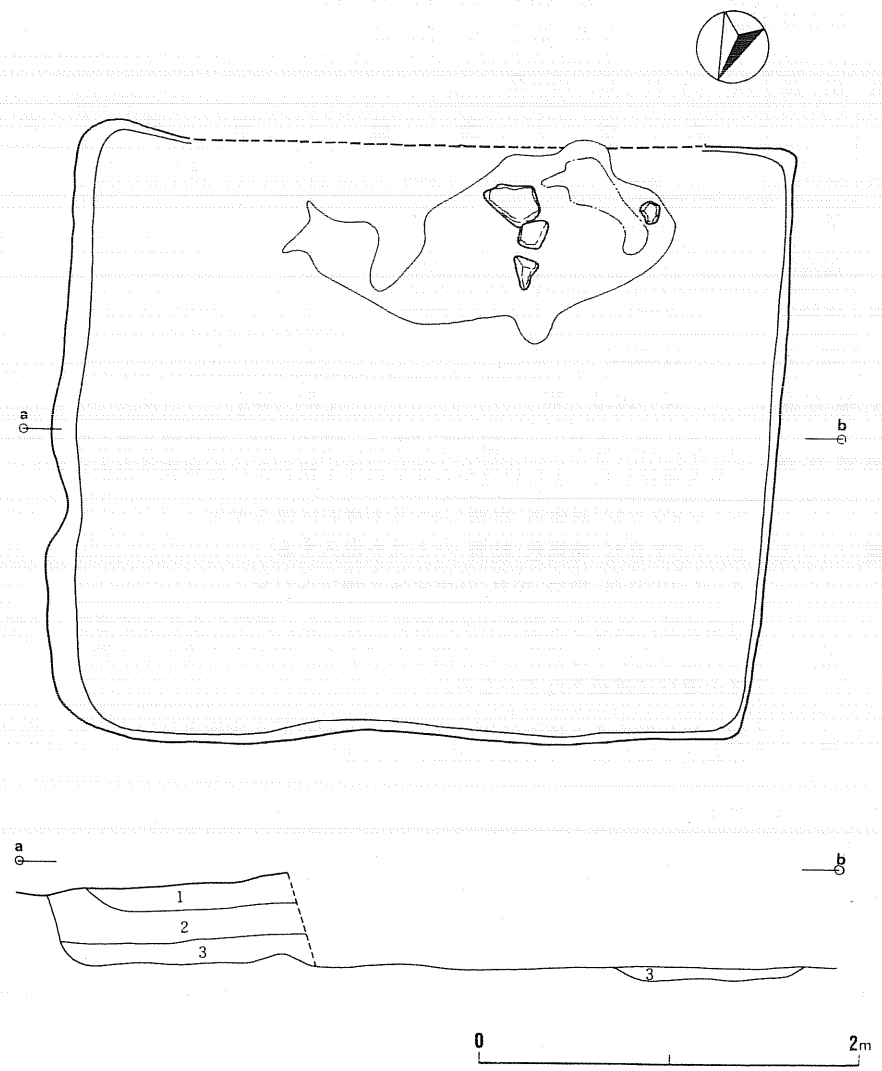
第7表　第2号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量(cm) 口径	体径	底径	器高	調整(地文) 外面	内面	成形	色調	胎土	焼成
29—2	第2号住居跡	小形の甕	口縁	(14.8)	(13.8)			ナデ	ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色(10YR)	微かに砂粒を含む	良好
29—3	第2号住居跡	甕	口縁～胴部	(20.1)	(18.8)			ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法(後，ロクロ使用)	淡橙色(5YR)	砂粒を含む	良好
29—4	第2号住居跡	甕	口縁	(21.2)	(19.0)			ナデ	ナデ	積み上げ法	灰白色	精選(微かに砂粒を含む)	良好
29—5	第2号住居跡	甕	口縁	(20.8)				ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法(後，ロクロ使用)	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
29—6	第2号住居跡	甕	口縁	(22.6)				ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法(後，ロクロ使用)	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
31—1	第2号住居跡	甕	口縁～胴部	(30.0)	(30.0)	(27.8)		ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法(後，ロクロ使用)	灰白色	微かに砂粒を含む	良好
31—2	第2号住居跡	甕	口縁～胴部	23.1	23.1	(9.9)	(32.3)	ナデ	ナデ	積み上げ法(後，ロクロ使用)	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
32—1	第2号住居跡	甕	口縁	(25.8)				ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法(後，ロクロ使用)	淡橙色(5YR)～橙色(5YR)	砂粒を含む	良好
32—2	第2号住居跡	甕	胴部					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
32—3	第2号住居跡	甕	底部					ヘラケズリ 木葉痕	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
32—4	第2号住居跡	甕	底部			6.4		ヘラケズリ 木葉痕	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
32—5	第2号住居跡	甕	底部			11.6		ヘラケズリ 木葉痕	ハケメ	積み上げ法	浅黄橙色	微かに砂粒を含む	良好
32—6	第2号住居跡	甕	底部			(10.8)		ヘラケズリ 砂底	ナデ	積み上げ法	橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
32—7	第2号住居跡	甕	底部					ヘラケズリ 砂底	ナデ	積み上げ法	橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
32—8	第2号住居跡	甕	底部					ナデ，砂底	ナデ	積み上げ法	灰白色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
32—9	第2号住居跡	甕	底部					ナデ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
32—10	第2号住居跡	甕	底部					ナデ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色(7.5YR)～褐灰色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
32—11	第2号住居跡	甕	底部					ナデ	ナデ	積み上げ法	にぶい橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
32—12	第2号住居跡	壺	底部			7.4		ヘラケズリ	?	積み上げ法	灰褐色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
34—1	第2号住居跡	鉢	口縁～胴部	(25.8)	(26.0)			RL縦位		積み上げ法	外—褐色 橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
34—2	第2号住居跡	鉢	底部			8.6		ヘラケズリ LR斜位	?	積み上げ法	橙色(5YR)	細砂粒を含む	良好
34—3	第2号住居跡	鉢	底部			(9.8)		?	?	積み上げ法	にぶい黄橙色(10YR)	砂粒を含む	良好

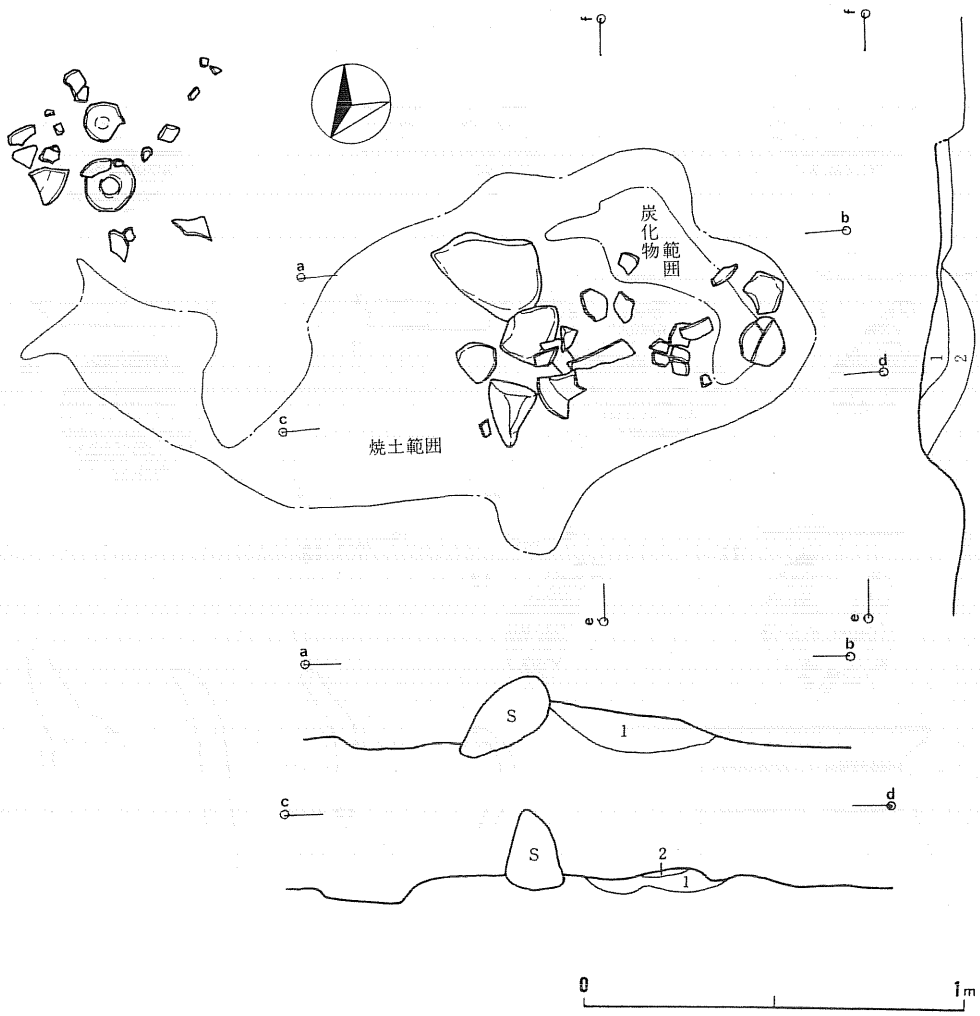
第8表　第3号住居跡観察表

第3号住居跡	挿図 図版	35，36，37，38 9，10，20

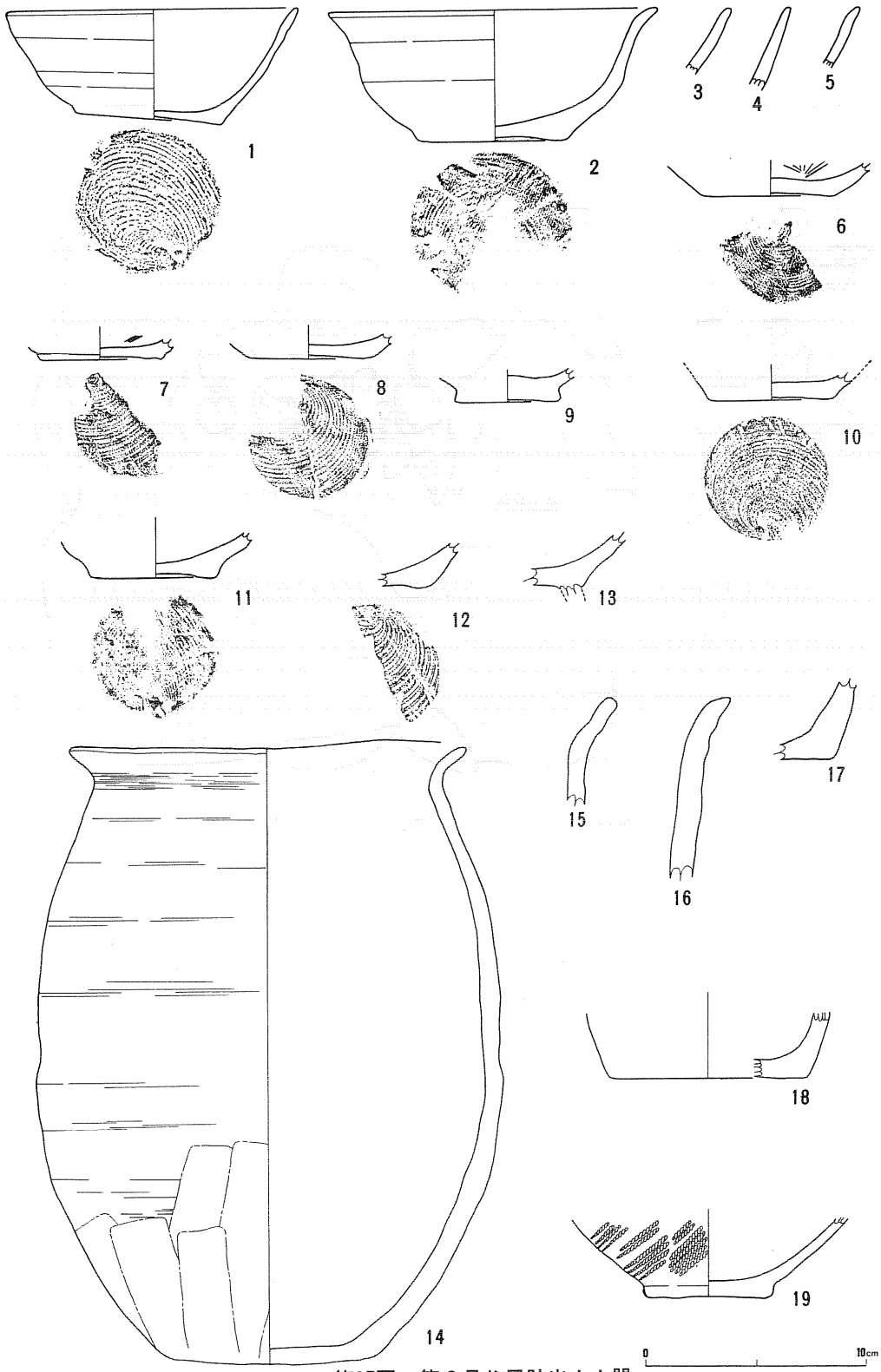
検出区		14—C，15—C，15—B			
法量		東壁	西壁	南壁	北壁
	壁長	332	320	388	378
	壁高	44.5	19	——	4.5
	周溝幅	——	——	——	——
	周溝深	——	——	——	——
	面積	11.98m²			
主軸方位		N—19.5°—W	形態	方形	
確認状況		14—C，15—Cグリット掘り下げ中に，径10～20cm程の礫2個と焼土及び炭化物の広がりを確認した。また付近から完形の坏1個が伏せた状態で出土した。			
覆土		1．7.5YR3/4 暗褐色 砂質 パミスを僅かに混入する 2．7.5YR4/4 暗褐色 粘質 パミスを混入する 3．7.5YR4/6 褐色 粘質 孔隙少なく締っている			
壁		遺存状態の良好な東壁で108°の傾斜を見せる。西壁の全体及び南壁・北壁の大部分は，壁の立ち上がりは耕作のため壊されており，床面から僅かしか残っておらない。壁材等の遺材は確認されていない。			
床		覆土に比較すると僅かに硬いという程度で良好な床面とはいえない。カマド付近は炭化物を多量に混じえた層が分布している。			
ピット		検出できず			
カマド	位置	南壁西寄り			
	覆土	1．10YR4/4 褐色 粘質 やや孔隙有 炭化物僅かに含む 2．5YR4/8 赤褐色 粘質 焼土			
		耕作のため壊されており遺存状態は非常に悪い。おそらくは左袖部分芯材と思われる径10～30cm程度の礫を中心に東西に広がる炭化物層が検出されてた。煙道及び煙出し孔は検出できなかった。			
遺物		カマド本体の位置から1m程東側に完形の坏が1箇出土している。その他に，坏破片，カマド本体内からは甕破片が出土している。			



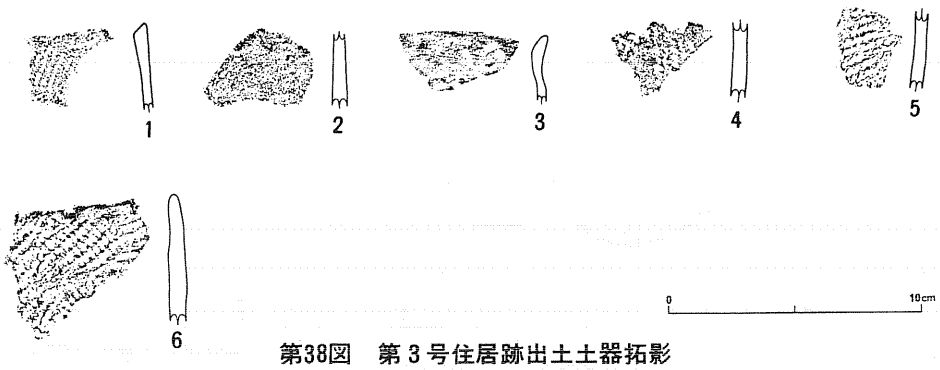
第35図　第３号住居跡



第36図　第３号住居跡カマド



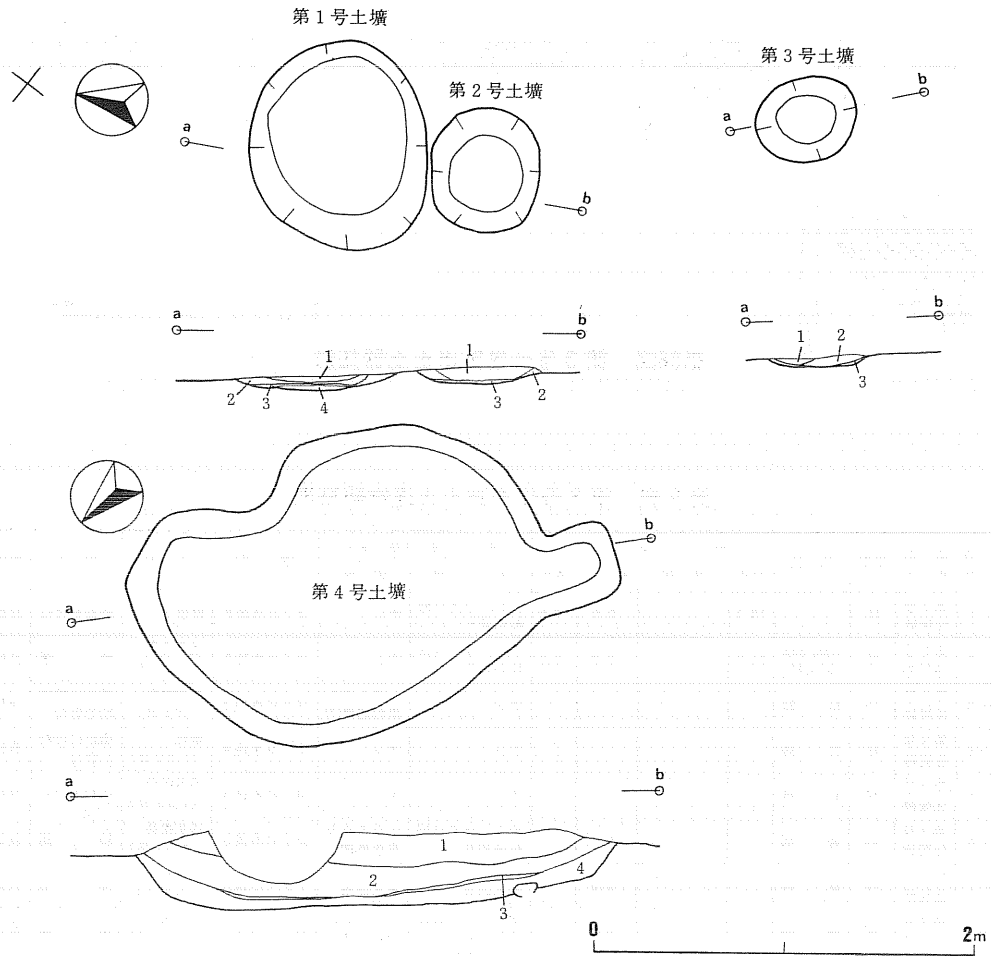
第37図　第３号住居跡出土土器



第38図　第３号住居跡出土土器拓影

第９表　第３号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量（cm）				調整（地文）		成形	色調	胎土	焼成
				口径	体径	底径	器高	外面	内面				
37—1	第３号住居跡	坏		13.3		5.0	6.5	ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	橙色	砂粒を含む	良好
37—2	第３号住居跡	坏	口縁，胴部（¼欠損）	14.9		6.0	6.6	ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5YR）	精選	良好
37—3	第３号住居跡	坏	口縁					ナシ	ヘラミガキ黒色処理(?)	ロクロ水挽き	浅黄橙色（10YR）	微かに細砂粒を含む	良好
37—4	第３号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	橙色（7.5YR）	微かに砂粒を含む	良好
37—5	第３号住居跡	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
37—6	第３号住居跡	坏	底部			(5.7)		ナシ，ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5YR）	精選	良好
37—7	第３号住居跡	坏	底部			5.6		ナシ，ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	淡橙色（5YR）	精選	良好
37—8	第３号住居跡	坏	底部			5.4		ナシ，ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5YR）	精選	良好
37—9	第３号住居跡	坏	底部			4.8		ナシ，ロクロ回転糸切り（後，再調整あり）	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	灰色	精選	良好
37—10	第３号住居跡	坏	底部			5.4		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
37—11	第３号住居跡	坏	底部			5.6		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5YR）	精選	良好
37—12	第３号住居跡	坏	底部					ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色（7.5YR）	精選	良好
37—13	第３号住居跡	高台付坏	底部					ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	淡橙色（5YR）	精選	良好
37—14	第３号住居跡	甕	½欠損	18.0	ケイ(15.8) ドウ(20.5)	9.2	28.1	ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	橙色（5YR）	砂粒を含む	良好
37—15	第３号住居跡	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	橙色（5YR）	砂粒を含む	良好
37—16	第３号住居跡	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色	精選	良好
37—17	第３号住居跡	甕	底部					ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色（7.5YR）	砂粒を含む	良好
37—18	第３号住居跡	鉢	底部			(8.8)		?	?	積み上げ法	にぶい橙色（7.5YR）	細砂粒を含む	良好
37—19	第３号住居跡	鉢	底部			5.6		LR横位	?	積み上げ法	明黄褐色（10YR）	砂粒を含む	良好



第39図　第１号土壙～第４号土壙

イ．土壙（**第39図**）

計４基検出している。第１号土壙～第３号土壙は，径45～ 112 cm程の円形プラン，第４号土壙は，長径260cm，短径160cmの張出しをもった楕円形プランを呈し，いづれも浅い皿状の断面形をもつ。各土壙とも覆土中の焼土中に焼土及び炭化物の層が認められ，土師器片，フイゴ羽口，鉄滓を出土している。

覆土注記は，以下の通り。

第１号土壙（検出区　14―Ｄ）

１．10ＹＲ3/3暗褐色，孔隙多い，炭化物，焼土を僅かに含む。

２．10ＹＲ1.7/1黒色，稍粘質，炭化物層であるが焼土を僅かに含む，若干の灰も混入する。

３．10ＹＲ4/1褐灰色，キメ細く稍粘質，灰層であるが，暗褐色土，炭化物も若干混入する。

4．7.5ＹＲ5/8明褐色，粘質，焼土層

第２号土壙（検出区　14―Ｄ）

1．10ＹＲ2/2黒褐色，粘性弱く，孔隙多い。多量の炭化物及び僅かながら焼土を含む。

2．7.5ＹＲ5/8明褐色，粘質，焼土層，暗褐色土，炭化物僅かに混入する。

3．10ＹＲ8/2灰白色及び，10ＹＲ1.7/1黒色，キメ細く粘質，上部灰層，下部炭化物層。

第３号土壙（検出区　14―Ｄ）

1．7.5ＹＲ5/8明褐色，粘性弱く孔隙多い。多量の炭化物，暗褐色土を含む。

2．10ＹＲ3/2黒褐色，粘性弱く孔隙多い。僅かに炭化物を混入する。

3．10ＹＲ1.7/1黒色，炭化物層。

第４号土壙（検出区　13―Ｂ）

1．10ＹＲ2/3黒褐色，パミスを僅かに混入する。

2．7.5ＹＲ2/3極暗褐色，パミスを混入する。

3．10ＹＲ1.7/1黒色，キメ細く，粘質，薄い炭化物層。

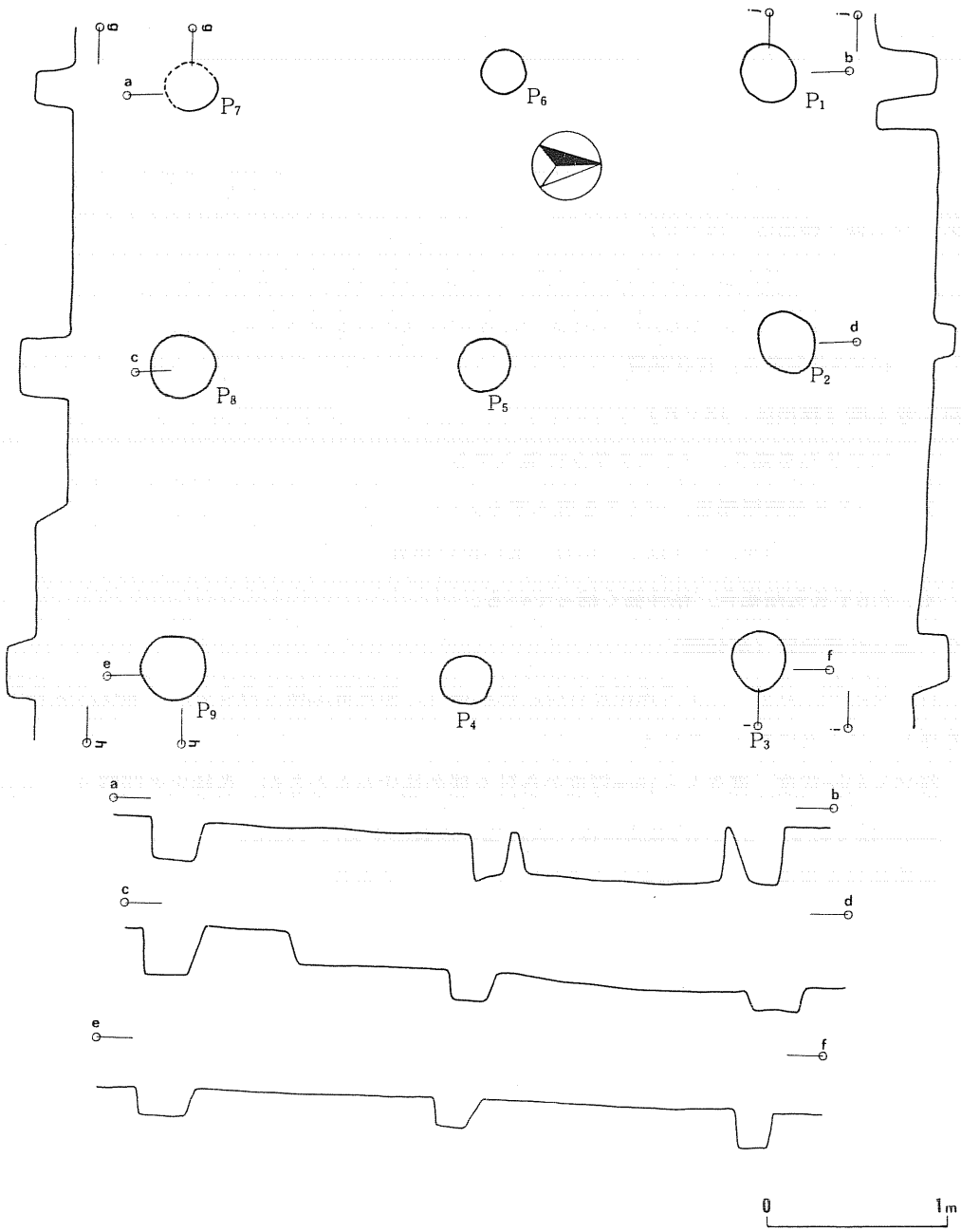
4．7.5ＹＲ3/4暗褐色，粘性強く締っている。

ウ．掘立柱建物跡（**第40図**）

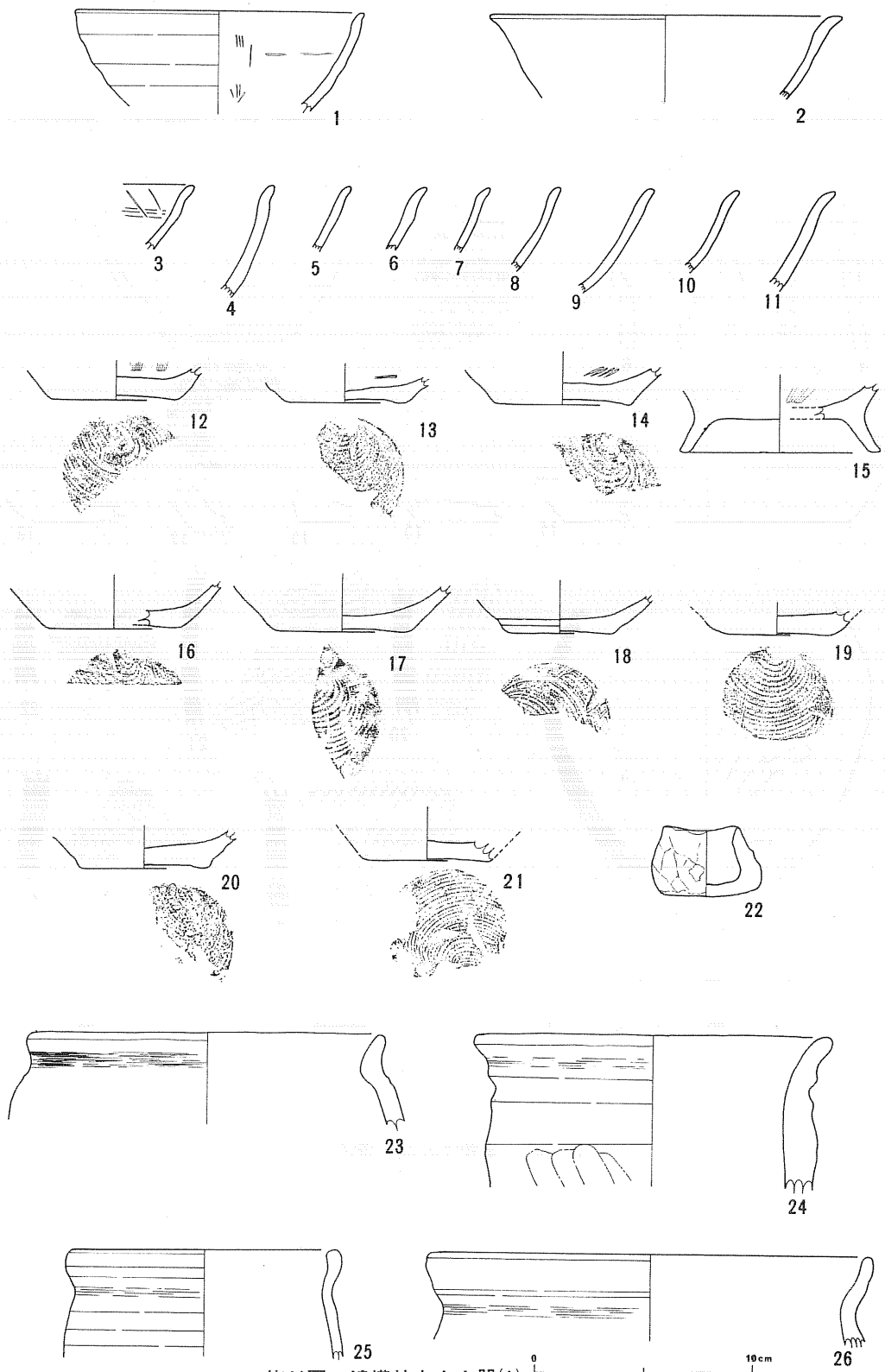
17―Ｄ，18―Ｄグリッドで検出された。検出面は，第Ⅳ層上面であるが，一部柱穴は第Ⅳ層を掘り下げた後に検出している。

径15～40cm程度，深さ５～18cm程度の合計９個の柱穴からなるが，各柱穴の間隔は，160 cm～180cm程である。各柱穴内覆土には，灰白色の砂質土が認められた。

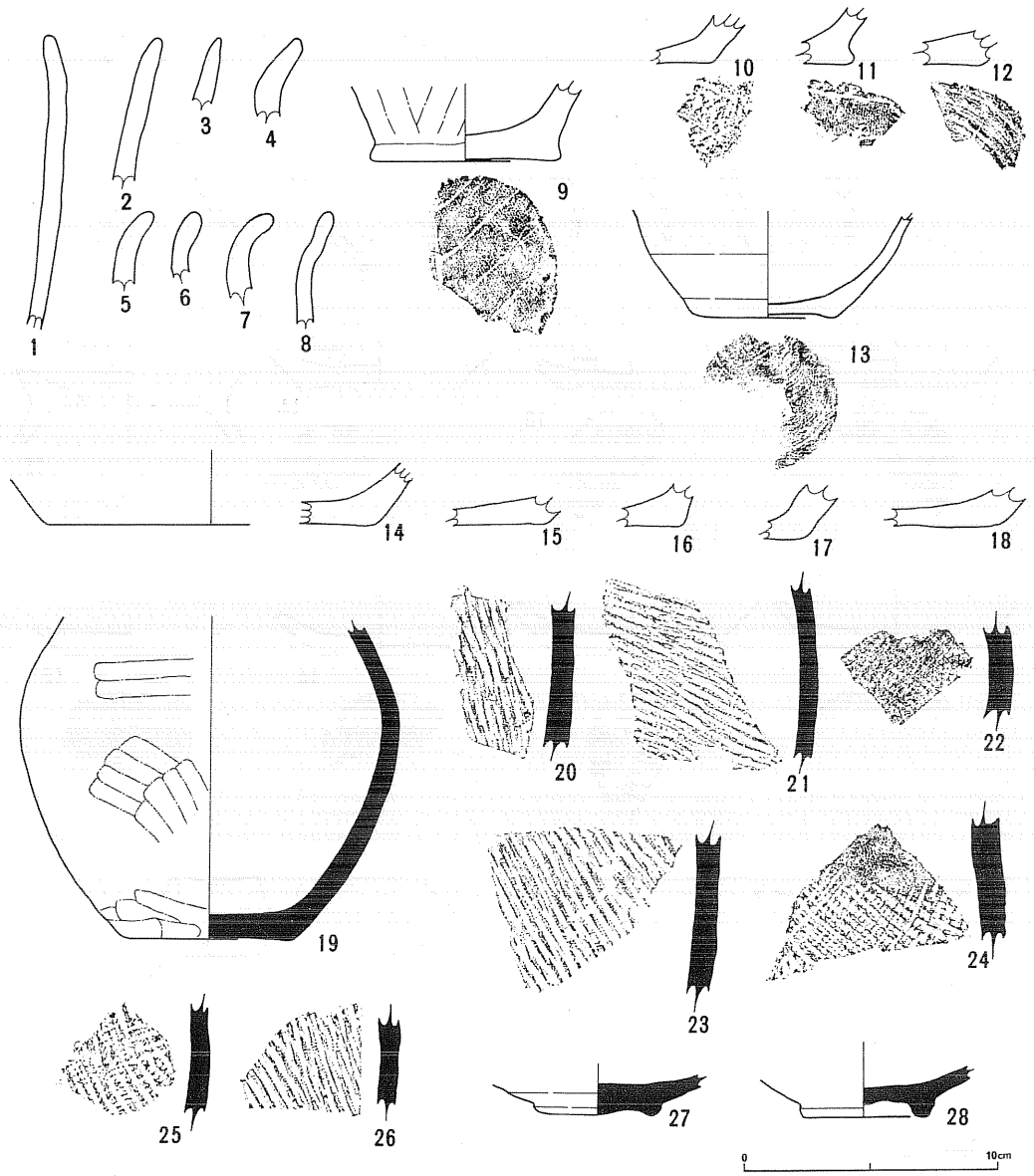
南側柱列を規準としての磁北とのずれはＮ―7°―Ｅである。



第40図　掘立柱建物跡



第41図　遺構外出土土器(1)



第42図　遺構外出土土器(2)

第10表　遺構外出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量（cm）				調整（地文）		成形	色調	胎土	焼成
				口径	体径	底径	器高	外面	内面				
41—1	9—C～11—C	坏	口縁	(13.2)				ナシ	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	灰褐色(?)(2.5YR)	精選	良好
41—2	14—A	坏	口縁	(16.2)				ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
41—3	13—B	坏	口縁					ナシ	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色(7.5YR)	精選	良好
41—4	Aトレンチ	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
41—5	14—D	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	にぶい橙色(7.5YR)	細砂粒を含む	良好
41—6	14—D	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色(7. YR)	砂粒を含む	良好
41—7	15—D	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色(7.5YR)	細砂粒を含む	良好
41—8	15—E	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色(7.5YR)	細砂粒を含む	良好
41—9	15—E	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
41—10	16—D	坏	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色(7.5YR)	細砂粒を含む	良好
41—11	16—D	坏	口縁					ナシ（口縁に鉄粉を含む）	ナシ	ロクロ水挽き	にぶい橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
41—12	4—C	坏	底部			(5.5)		ナシ，ロクロ回転糸切り）	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
41—13	15—D	坏	底部			(5.3)		ナシ，ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色(7.5YR)	精選	良好
41—14	18—E	坏	底部			(6.1)		ナシ，ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	黄橙色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
41—15	16—D	高台付坏	底部			(9.2)		ナシ，ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ黒色処理	ロクロ水挽き	浅黄橙色(7.5YR)	精選	良好
41—16	14—D	坏	底部			(6.1)		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	橙色(7.5YR)	精選	良好
41—17	15—D 16—D	坏	底部			(6.1)		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色(7.5YR)	精選	良好
41—18	16—F	坏	底部			(5.0)		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	にぶい黄橙	精選	良好
41—19	16—F	坏	底部			5.1		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	淡橙色(5YR)	精選	良好
41—20	17—D	坏	底部			(5.9)		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色	細砂粒を含む	良好
41—21	17—E	坏	底部			5.8		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	浅黄橙色(7.5YR)	精選	良好
41—22	17—E	手捏ねミニチュア		3.5	5.0	4.5	3.1	ヘラケズリ	ナデ	手捏ね	橙色	精選	良好
41—23	15—B	甕	口縁	(16.4)				ナデ	ナデ	積み上げ法	褐色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
41—24	13—B	甕	口縁	(16.4)				ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色	精選	良好
41—25	13—B	小形の甕	口縁	(12.6)				ナデ	ナデ	積み上げ法（後ロクロ使用）	灰褐色	精選	良好
41—26	13—C	甕	口縁	(20.5)				ナデ	ナデ	積み上げ法（後ロクロ使用）	にぶい橙色	1mm位の砂粒を微かに含む	良好

第11表　遺構外出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	法量(cm) 口径	体径	底径	器高	調整(地文) 外面	内面	成形	色調	胎土	焼成
42—1	15—B 16—B	甕	口縁					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
42—2	表採	甕	口縁					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
42—3	Aトレンチ	甕	口縁					ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	褐灰色～橙色	砂粒を含む	良好
42—4	20—D	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	橙色	精選	良好
42—5	13—C	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法 (後，ロクロ使用)	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
42—6	16—B	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	にぶい黄橙色	砂粒を含む	良好
42—7	16—B	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
42—8	17—D	甕	口縁					ナデ	ナデ	積み上げ法 (後，ロクロ使用)	橙色	砂粒を含む	良好
42—9	13—B	甕	底部			(7.5)		ヘラケズリ 木葉痕	ナデ	積み上げ法		砂粒を含む	良好
42—10	15—B～ 16—B	甕	底部					ヘラケズリ 木葉痕	ナデ	積み上げ法	褐灰色	砂粒を含む	良好
42—11	18—E	甕	底部					ヘラケズリ 木葉痕	ナデ	積み上げ法		砂粒を含む	良好
42—12	18—E ベルト	甕	底部					ナデ，回転ヘラ切り(?)	ナデ	積み上げ法	淡橙色	砂粒を含む	良好
42—13	16—C 17—D	小形の甕(?)	底部			5.6		ナシ，ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水挽き	灰色（N）	砂粒を含む	良好
42—14	15—E～ 16—E	甕	底部			(13.0)				積み上げ法	にぶい黄橙色	砂粒を含む	良好
42—15	F_3トレンチ	甕	底部					ナデ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
42—16	F_3トレンチ	甕	底部					ナデ	ナデ	積み上げ法	橙色	砂粒を含む	良好
42—17	14—E	甕	底部					ナデ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
42—18	13—A	甕	底部					ナデ	ナデ	積み上げ法	浅黄橙色	砂粒を含む	良好
42—9	15—B 16—B	須恵器壺(?)	胴部～底部		(14.9)	6.6		ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法 (後，ロクロ使用)	灰白色	精選	良好
42—20	Aトレンチ	須，甕	胴部					叩き目		積み上げ法	灰色N5/	精選	良好
42—21	14—C	須，甕	胴部					叩き目		積み上げ法	灰色N5/	精選	良好
42—22	15—B	須，甕	胴部					叩き目		積み上げ法	灰色N5/	精選	良好
42—23	15—B	須，甕	胴部					叩き目		積み上げ法	灰色N5/	精選	良好
42—24	15—D 16—D	須，甕	胴部					叩き目		積み上げ法	灰色N4/	精選	良好
42—25	15—E	須，甕	胴部					叩き目		積み上げ法	灰色N4/	精選	良好
42—26	18—E ベルト	須，甕	胴部					叩き目		積み上げ法	灰色N5/	精選	良好
42—27	16—C	(陶器)皿	底部							ロクロ使用		精選	良好
42—28	16—F	(陶器)皿	底部							ロクロ使用		精選	良好

6．まとめ

駒林遺跡は，米代川の右岸に形成された河岸段丘上に営まれた遺跡であり，主な生活の場として使用された時期は概ね平安時代である。

平安時代住居跡は計３棟確認されている。

個々の住居跡のその構造的な復元は，遺存状態が必ずしも充分であるとは言えず，要約するのに困難な点も多いのであるが，可能な限り観察し得た項目を列挙すれば以下の通りである。

1．カマドの構築壁を基準にした主軸方位は最大でも20度程度ずれているだけでほぼ磁北と一致している。

2．カマドは，その本体部分に芯材として礫を用いており，煙道部分は，長いトンネル式のものである。

3．壁構は，確認できなかったが，住居跡には板材が用いられている。

4．第２号住居跡周辺のピット，第１号住居跡カマド煙出孔周辺のピット等に示されるように住居跡外周にも上屋を支えたり，カマドを覆う構造物を支えたりする柱を想定できる。

また，住居跡内から出土している土器は，甕，坏がその組成の主体をなしているが，甕については，

1．器高が30cmを越える大形のもの，15cm程度の小形のものと，その大きさにバラエティがあること。

2．最大径は，胴部にあるものが殆どであるが，器高の大きいものになると器高の⅓以下の口縁部が外反し，最大径＝口径となるものもある。

3．口縁部の外反するものでは，口縁全体が弧状に反りかえるものと，口縁部中程に屈曲部をもつものがある。

4．成形は，粘土帯の積み上げによって行われるが，その後の器面の調整は，全体にロクロにより水挽きの調整のされたものと，その後に縦位のヘラケズリの施されたものがある。

5．底部は，夥しい砂粒の付着する「砂底」のものと，木葉痕のものがある。

坏については，

1．器形全体のバランスを決定する口径，底径，器高の測定値割合は，凡そ２：１：１の比率を中心に分布し，また，ゆるやかに張り出す体部曲線は，その最大曲率点が体部下半に求められることが多い。

2．成形はロクロ水挽によるが，調整について外面は再調整されることはない。内面はヘラミガキの施される場合と，再調整の施されない場合があり，前者では黒色処理の行われた

ものも多い。

3．底部は，回転糸切りによるもので，その後の再調整は認められない。

また，甕，坏といった組成の主体をなす土器の他に第1号住居跡出土例の土師器壺がある。この土器の胎土は非常に精選したものが用いられており，砂粒を殆ど混えない。胎土の点では坏によく似ており，甕の胎土が粗い砂粒を著しく混入しているのと対照的である。壺形の土器では，他に遺構外からではあるが，色調の灰白色を呈する須恵器と認め得る1点の出土例があり，色調を除いては胎土，成形，調整等前述の壺形の土器と大差ない。

すなわち，住居内出土土器に於いてその組成の中心をなす，甕と坏，それに付随した壺の三者では，製作過程の第1段階である粘土選択の時点で甕に使用される粘土と坏及び壺に使用される粘土とに分けられていたことが看取される。

また，同じ平安時代の遺構としては，4基の土壙があるが，これらの土壙は覆土中にかなりの量の炭化物と焼土を混じえており，フイゴ羽口，鉄滓が出土していることを考え併せると，小規模な鍛冶工房的な役割を果していたのではないかと思われる。

掘立柱建物跡については，各柱穴の遺存状態が必ずしも良好ではなく，また時期を決定する遺物も欠けている。ただ，磁北との振れが7度程度と小さく，三基の住居跡と方向は一致している。その点では，住居跡と同時期に住居と何らかの関連をもって構築された遺構と考えることもできる。

遺構外からは，縄文時代各時期の遺物が出土しているが，調査区内で見える限りこれらの各時期の生活の痕跡を残しているものとは思われず，他所から調査区域へ流れ込んだと考える方が妥当である。したがって駒林遺跡が生活の場として選定されたのは，検出された遺構・遺物が示す平安時代のある一時期に特定できる。

付

本遺跡第１号土壙出土炭化物の^{14}C 測定を日本アイソトープ協会に依頼した。結果は以下の通りである。

測定結果報告書

昭和56年１月23日に受取りましたＣ―14試料24個の測定結果がでましたのでご報告します。

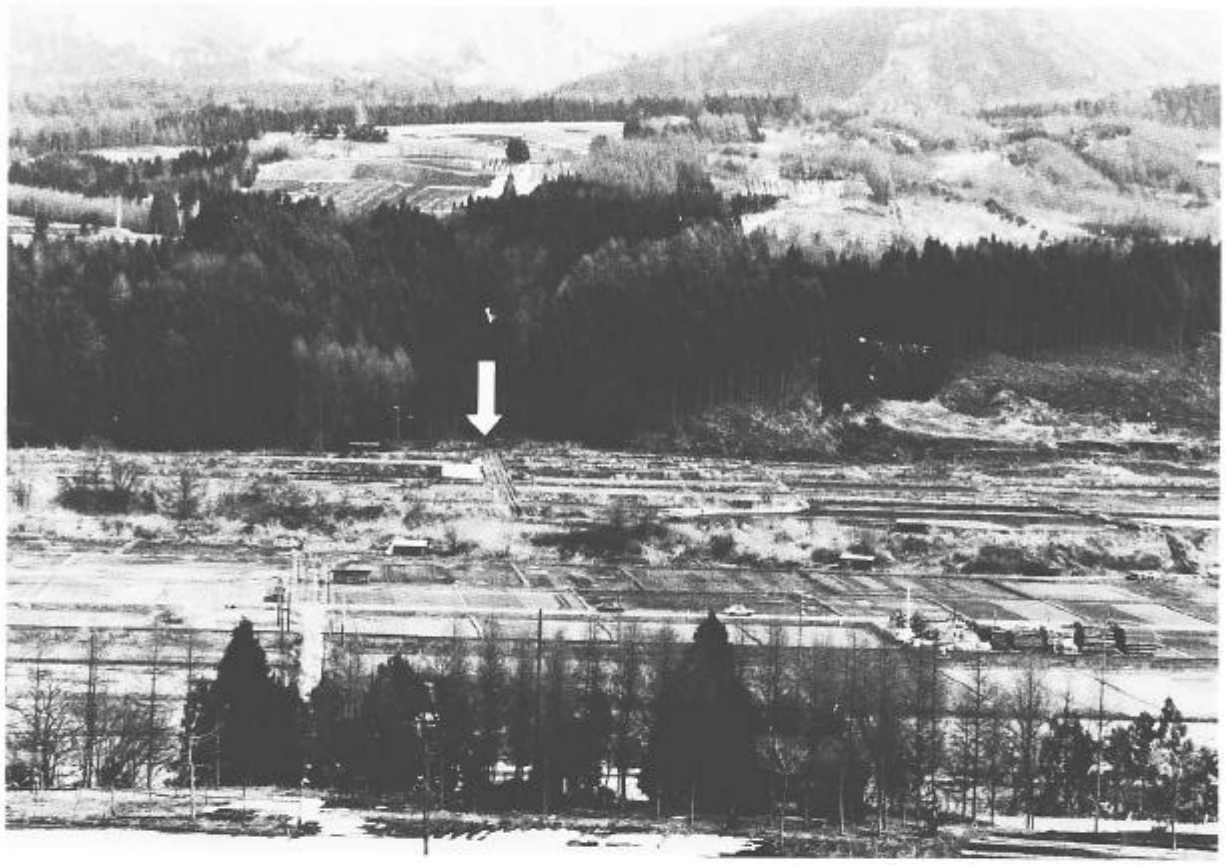
当方のコード	依頼者のコード	Ｃ―14年代
Ｎ―4134	ＴＷ14 14Ｂ15ＢＳＸ(1)	
	001	1240±75yB.P.（1200±70yB.P.）

年代は^{14}Ｃの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され，西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は，放射線計数の統計誤差と，計数管のガス封入圧力および温度の読取りの誤差から計算されたもので，^{14}C年代がこの範囲に含まれる確率は約70％です。この範囲を２倍に拡げますと確率は約95％となります。なお^{14}C 年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。（御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。）

調査参加者

畠山　末治　　神田　良勇　　井上　政治　　奥村　一三　　梅戸　正次郎　　川又　秀也
川又　武司

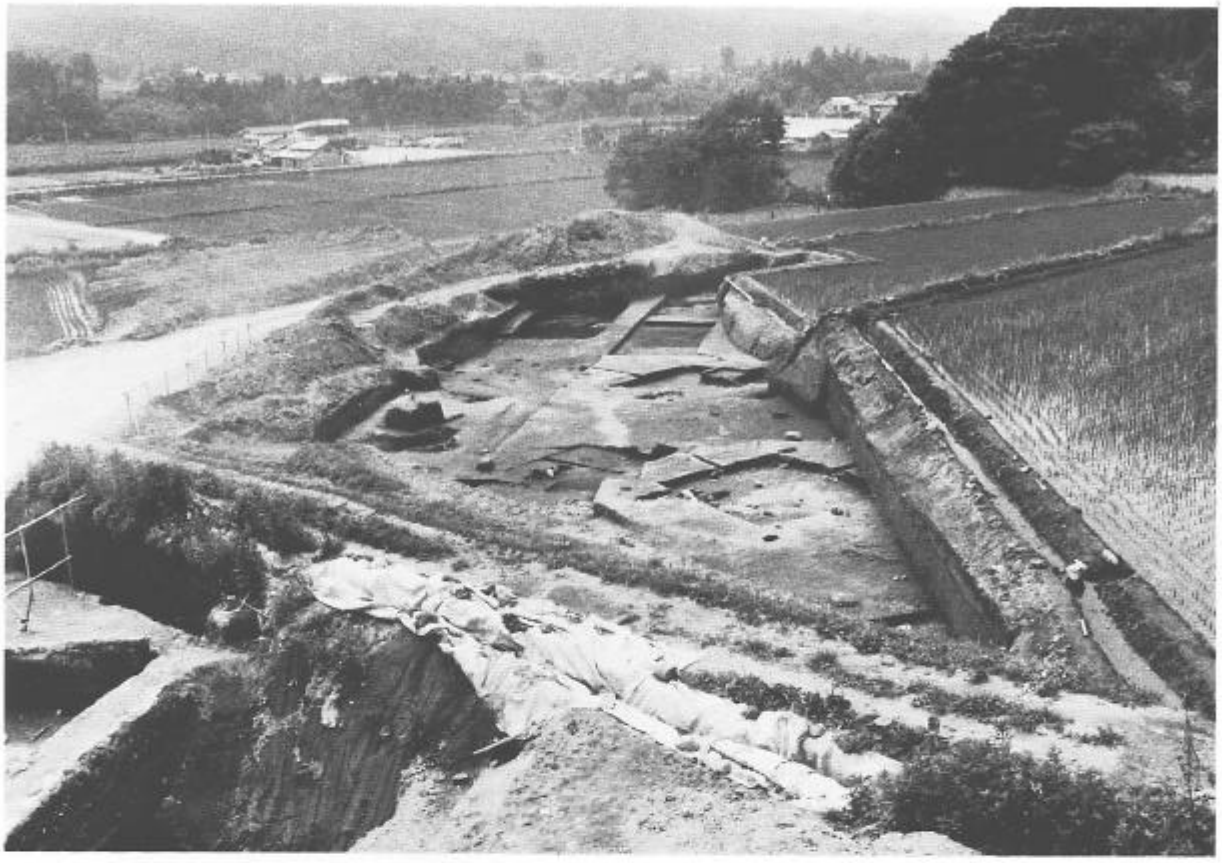
豊田　よ里　　浅石　恵留子　　相川　金子　　川又　ヤエ　　兎沢　キヨエ　　奥村　初恵
中西　リチ　　相川　リヨ　　賀川　政子　　石鳥谷　妙子　　柳沢　ヤス　　三ヵ田　孝子
田中　ヨシエ　　作山　ミエ　　苗代沢　ノブ　　津江　和子　　金沢　ハルエ
小田島　礼子　　畠山　陽子　　阿部　シガ　　小田島　キク　　斉藤　キヨエ
浅石　タミ　　井上　トミエ　　工藤　スミ　　工藤　キヌ　　工藤　イツ　　阿部　シマ
佐藤　キエ　　松岡　トキヨ　　高畑　サキ　　阿部　シモ　　三上　美子　　三上　トヨ
柳沢　ヤス　　安保　柳



遺跡遠景

図版 1

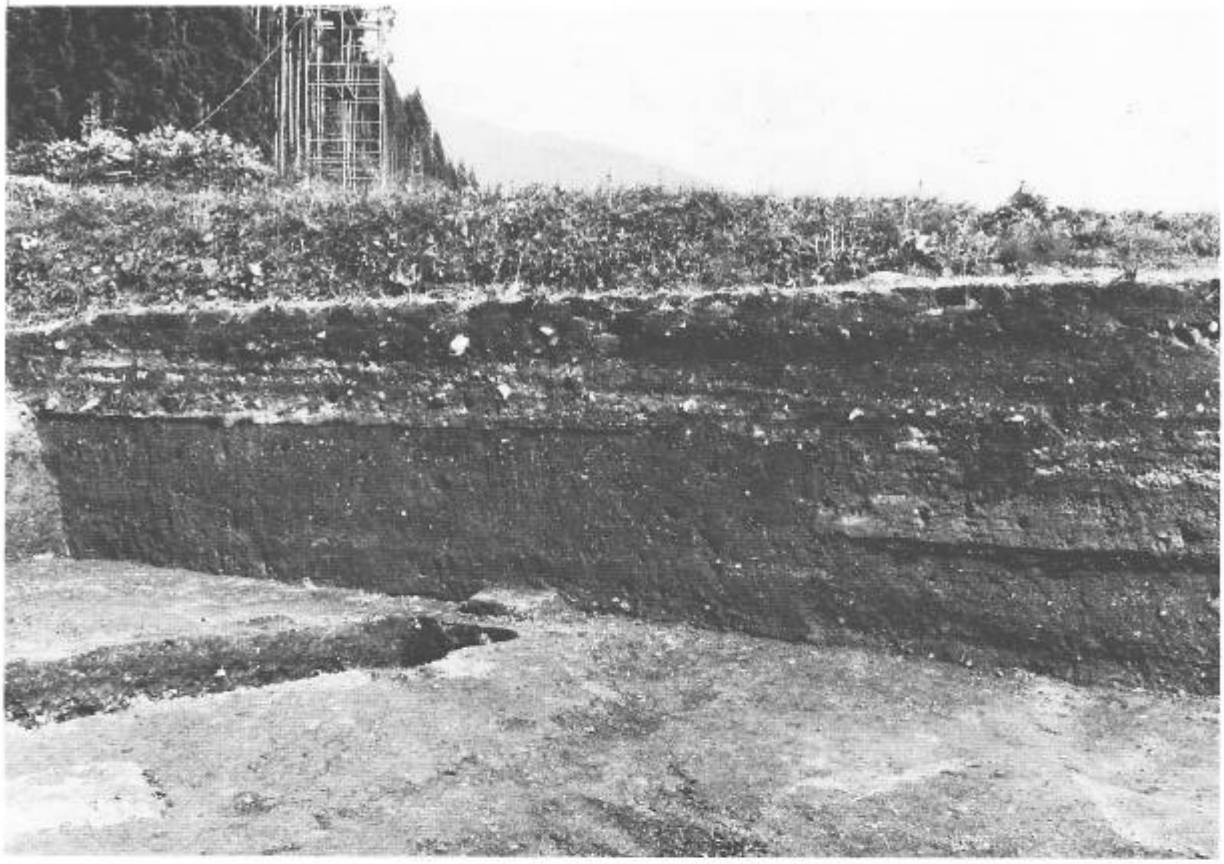
遺跡全景



農道北側調査区

農道南側調査区

図版 2



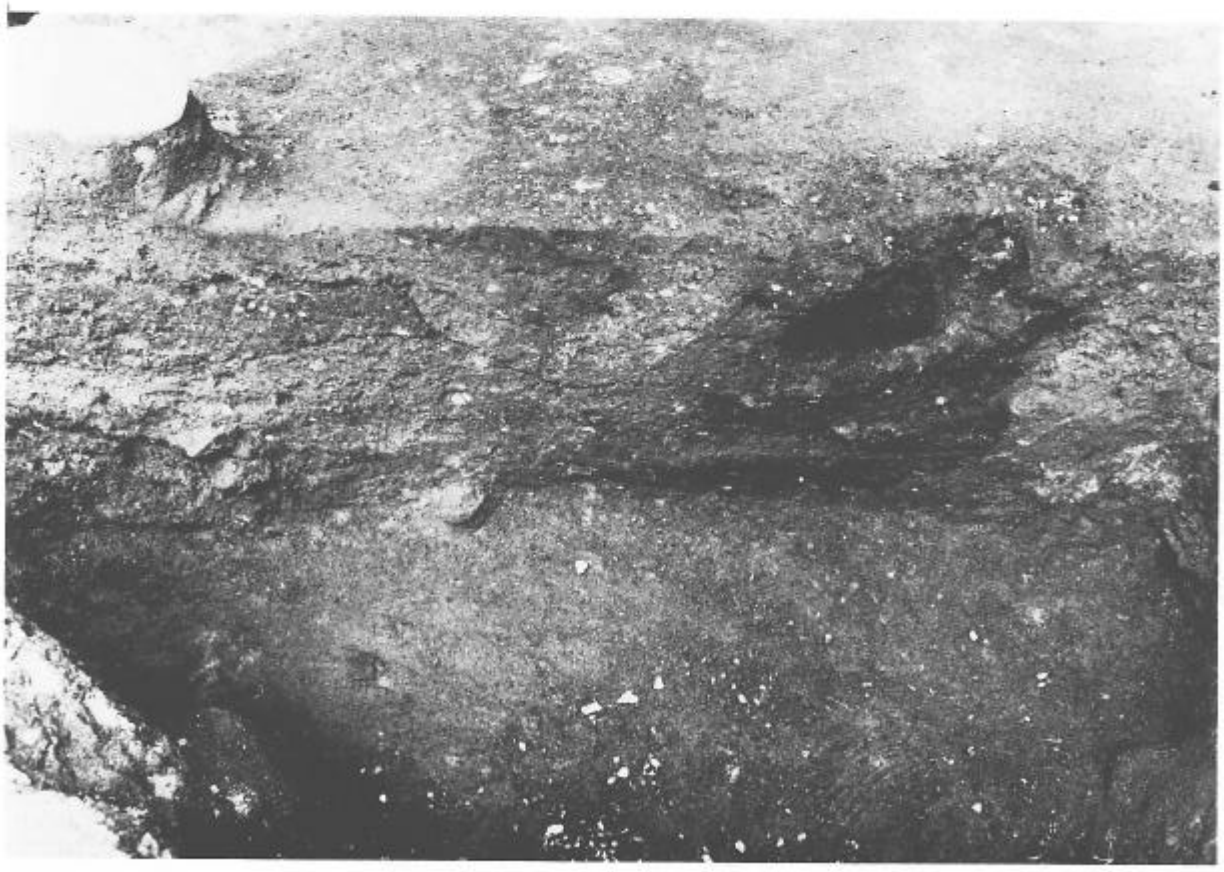
農道北側区層序

図版 3　　農道南側区トレンチ内層序

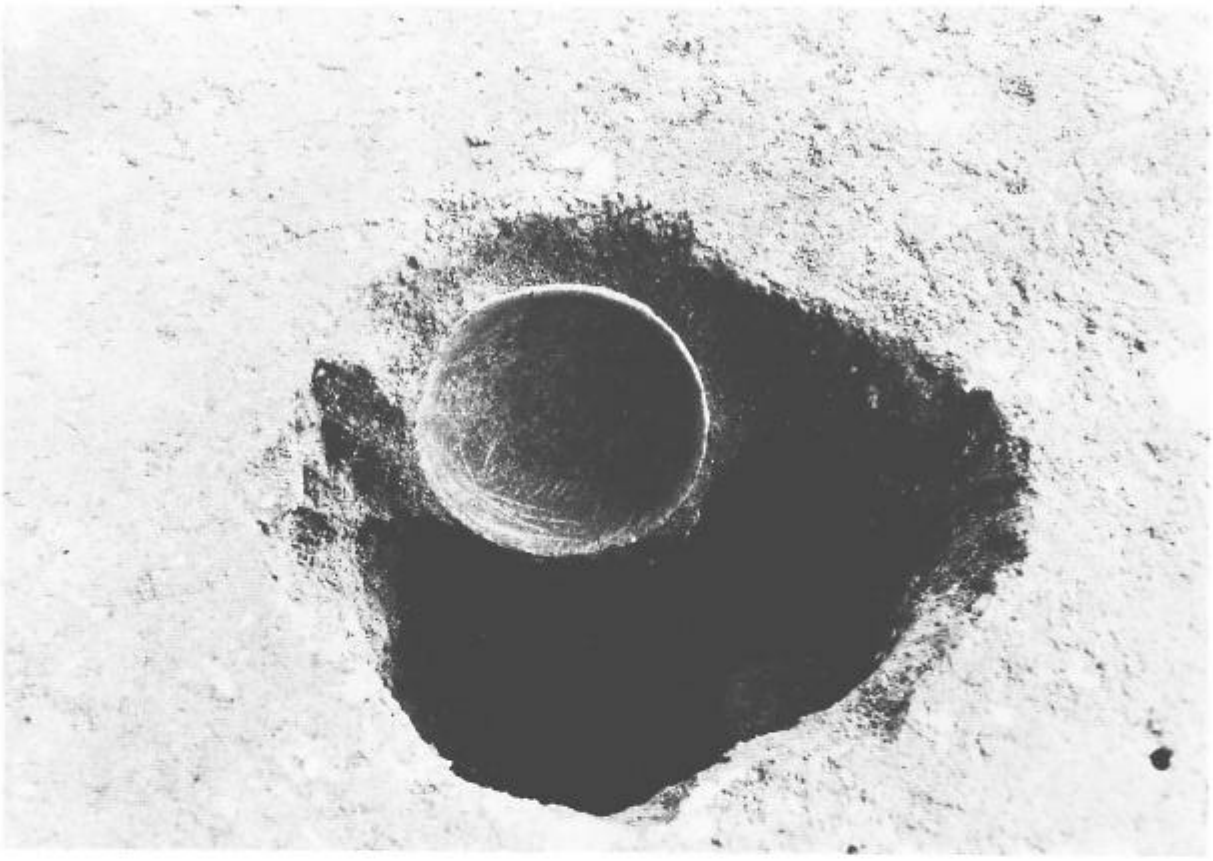
第１号住居跡完掘状況

図版４　　第１号住居跡カマド

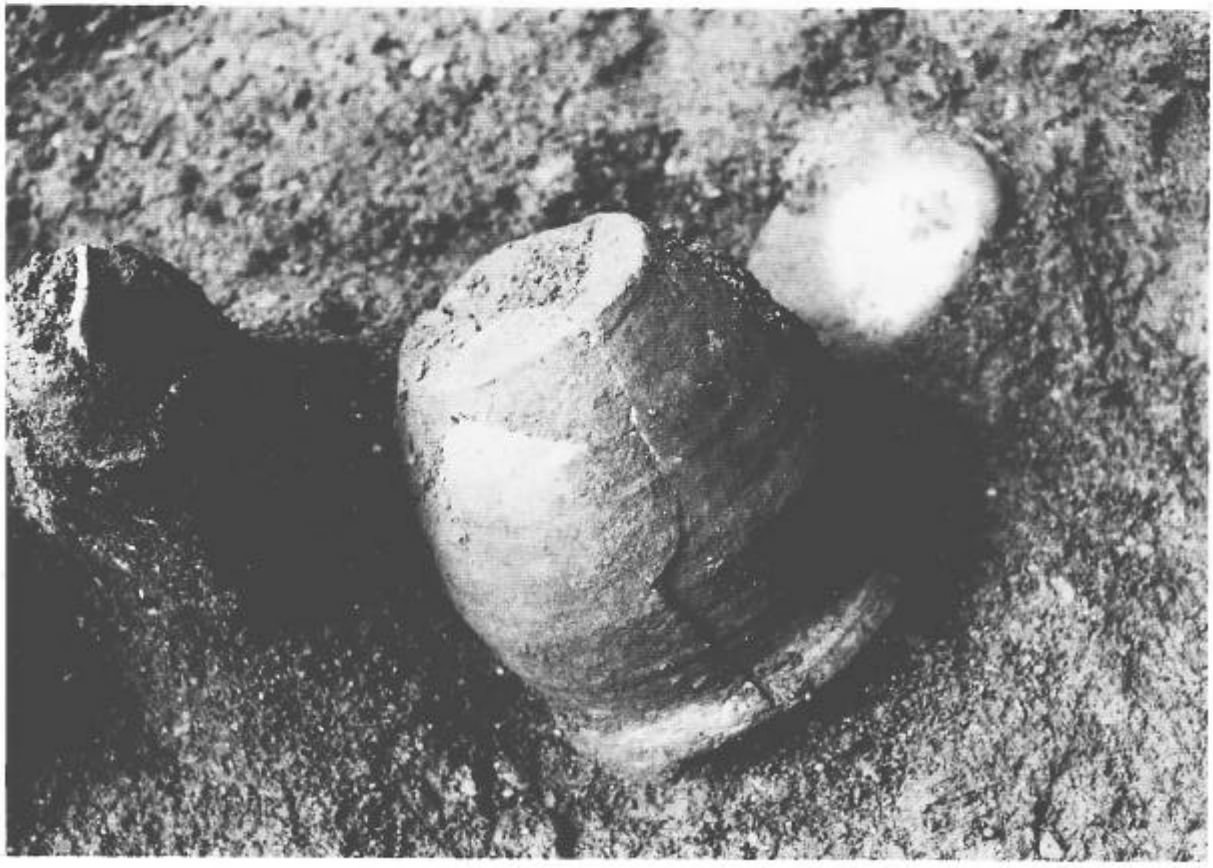
第１号住居跡カマドセクション



図版５　　第１号住居跡カマド煙道



第１号住居跡ピット内出土土師器杯

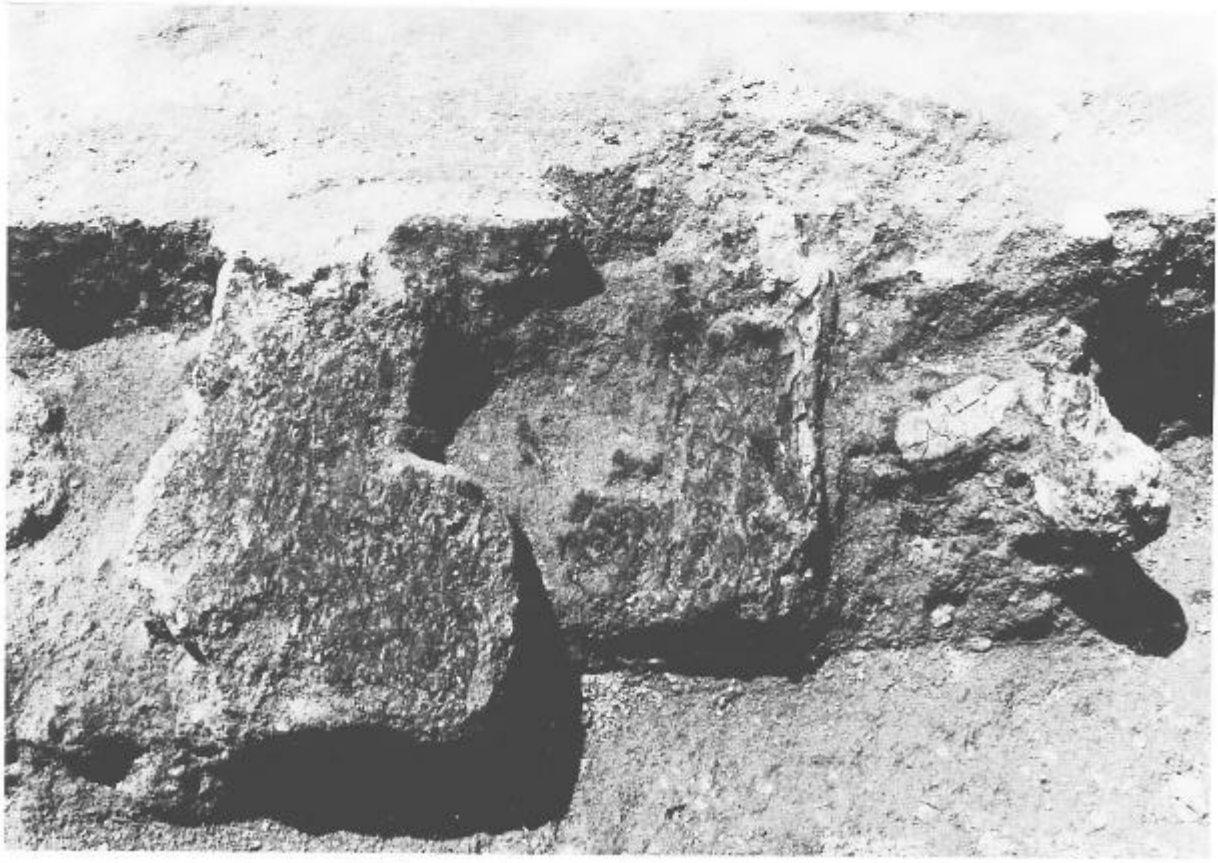


図版６　　第１号住居跡覆土内出土土師器甕

第２号住居跡完掘状況

図版７　　第２号住居跡カマド

第２号住居跡カマド内遺物出土状況



図版８

第２号住居跡炭化材出土状況

第３号住居跡確認状況

図版 9

第３号住居跡完掘状況

第３号住居跡カマド遺物出土状況

図版10　　掘立柱建物跡

第1号土壙完掘状況

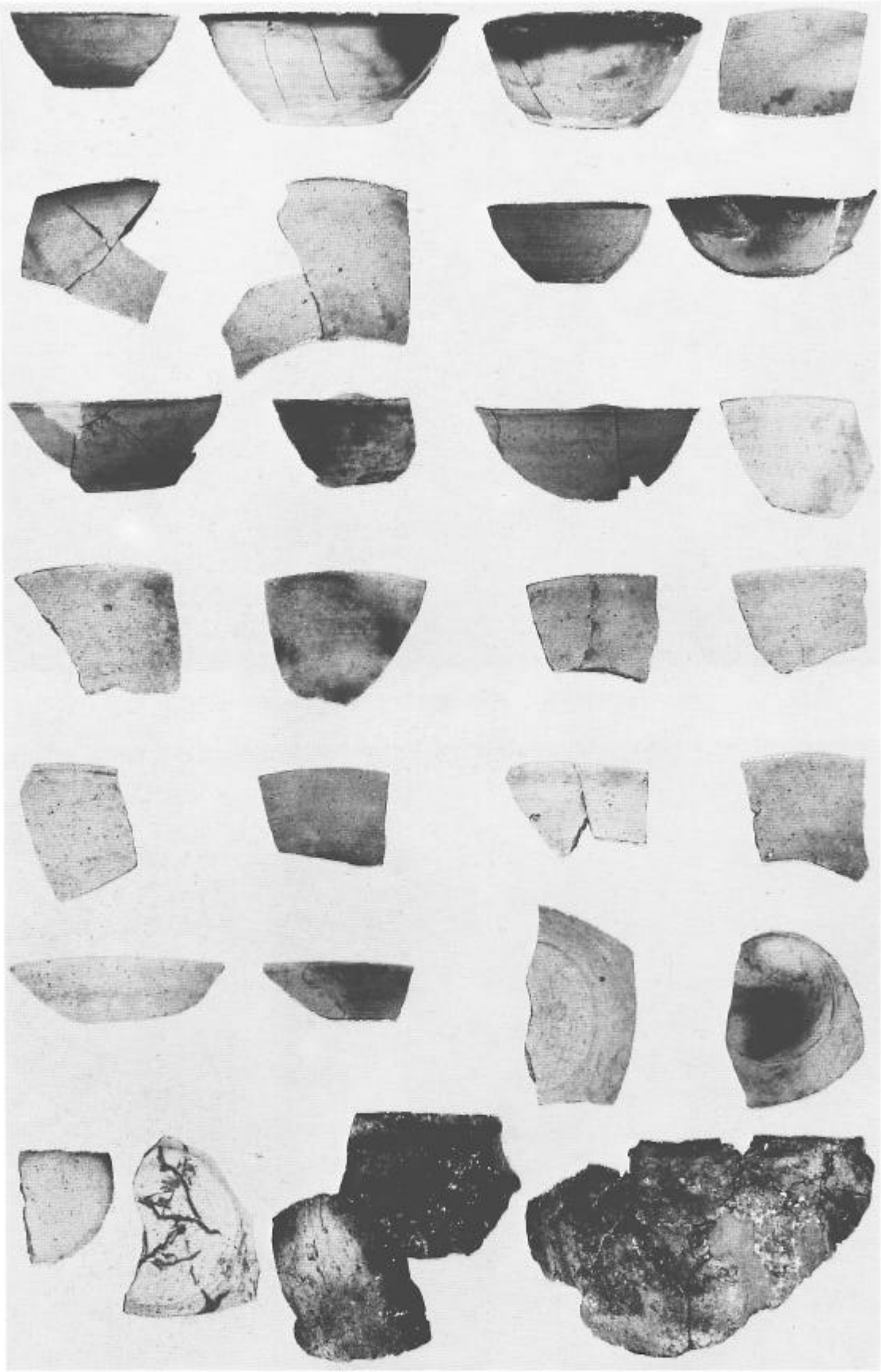
図版11　　集礫遺構

遺構外遺物出土状況

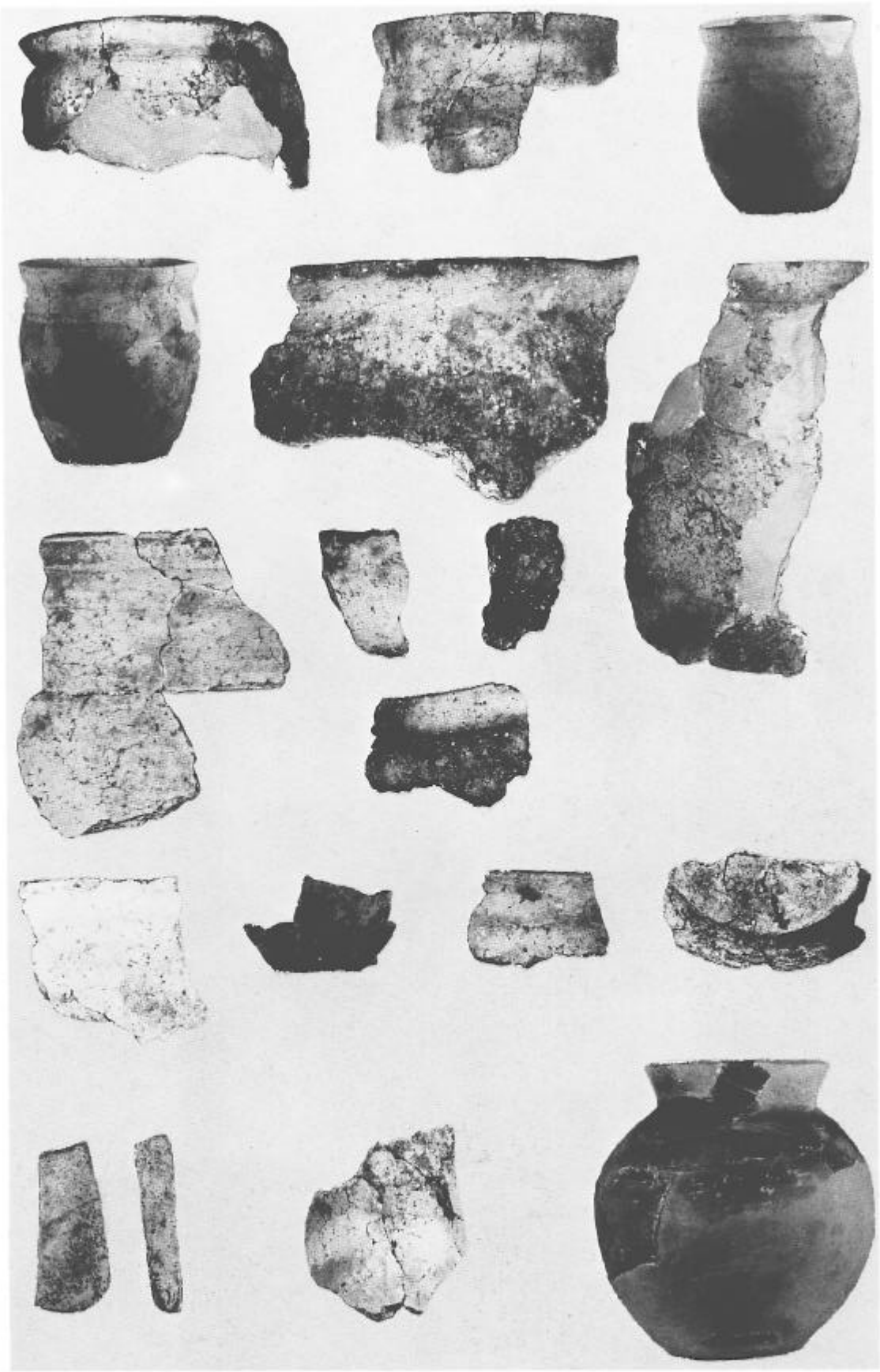
図版12　　遺構外(トレンチ内)遺物出土状況

遺構外(トレンチ内)遺物出土状況

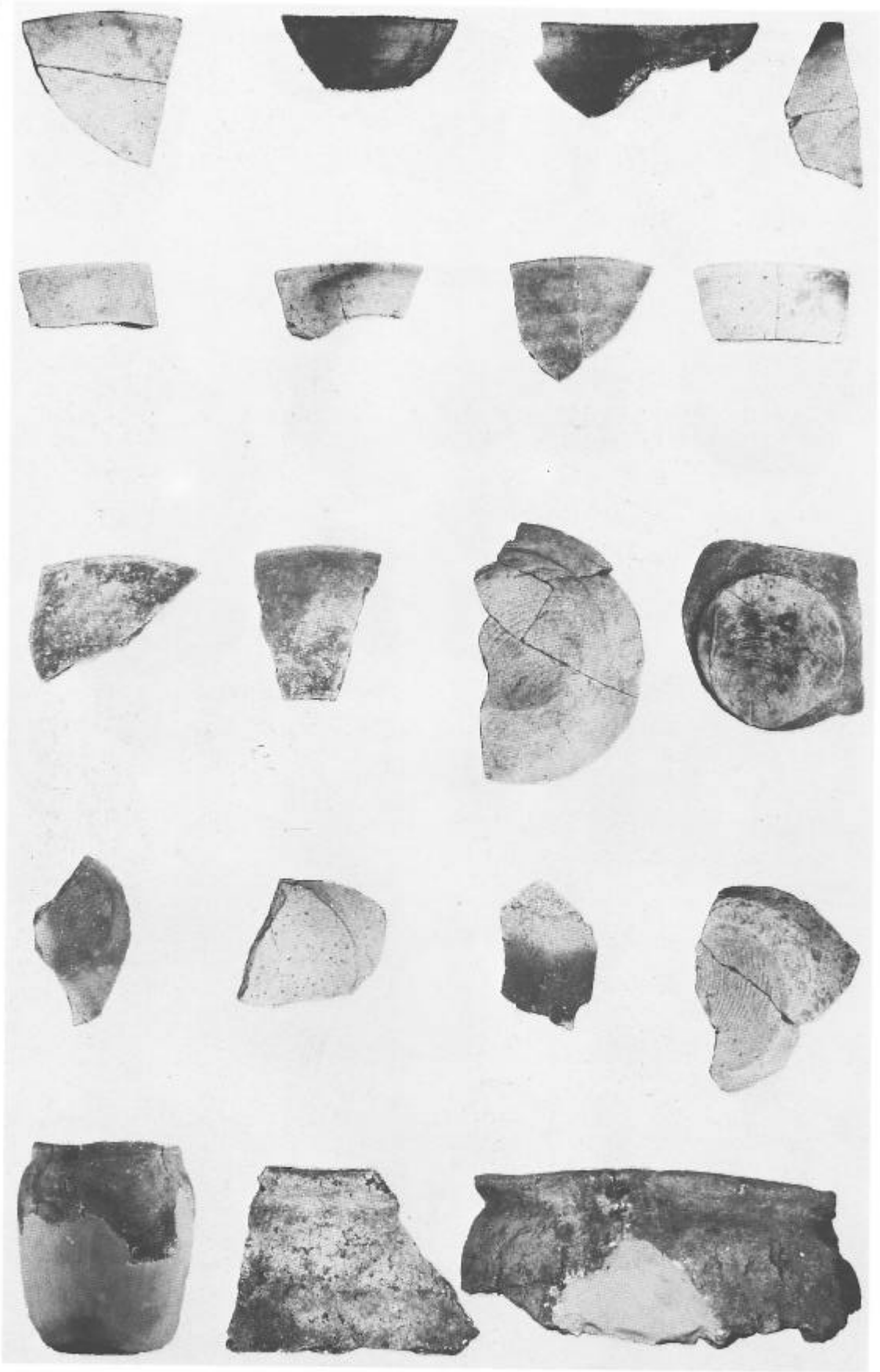
図版13　遺構外(トレンチ内)遺物出土状況



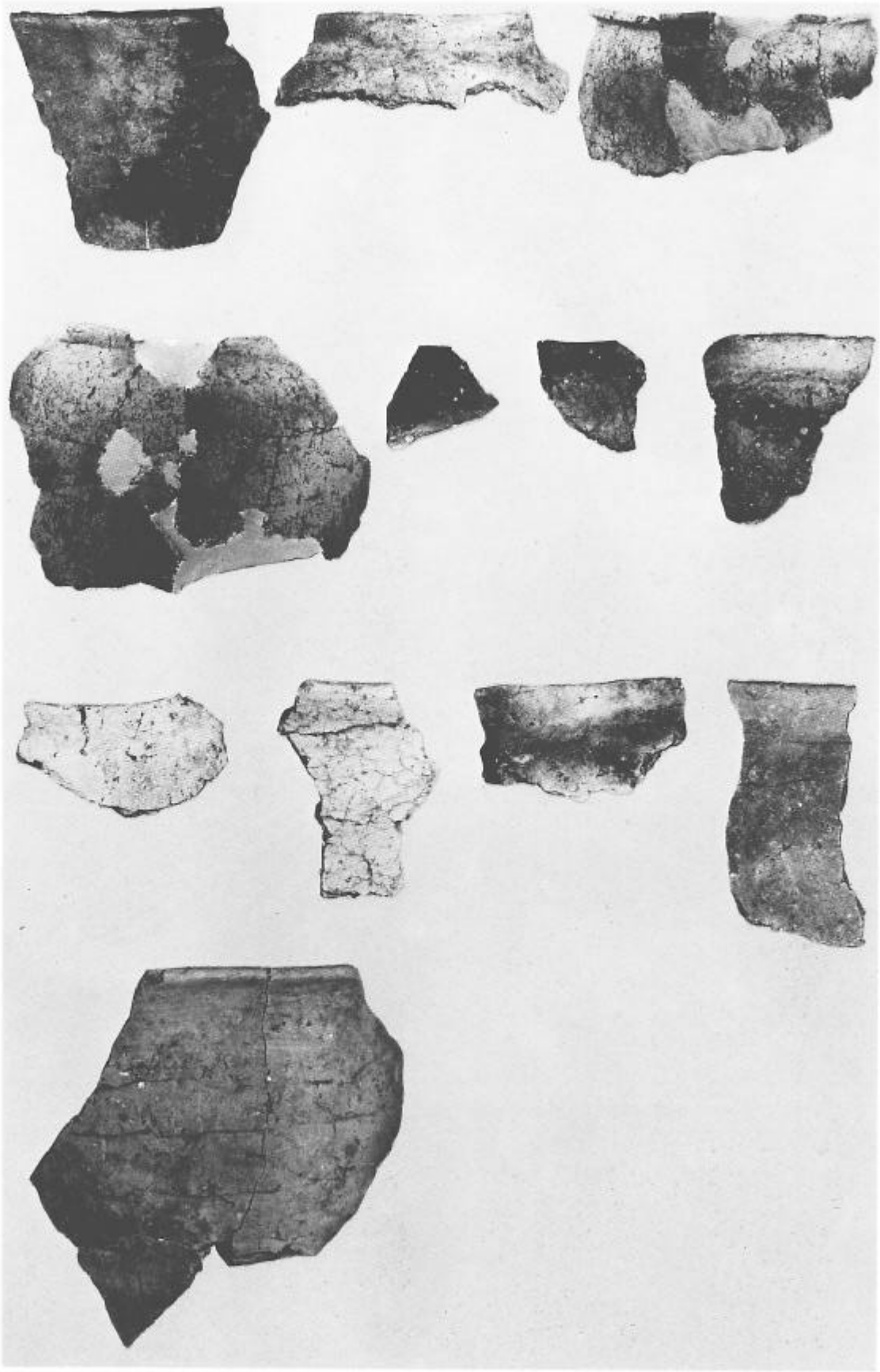
図版14　　第1号住居跡出土遺物



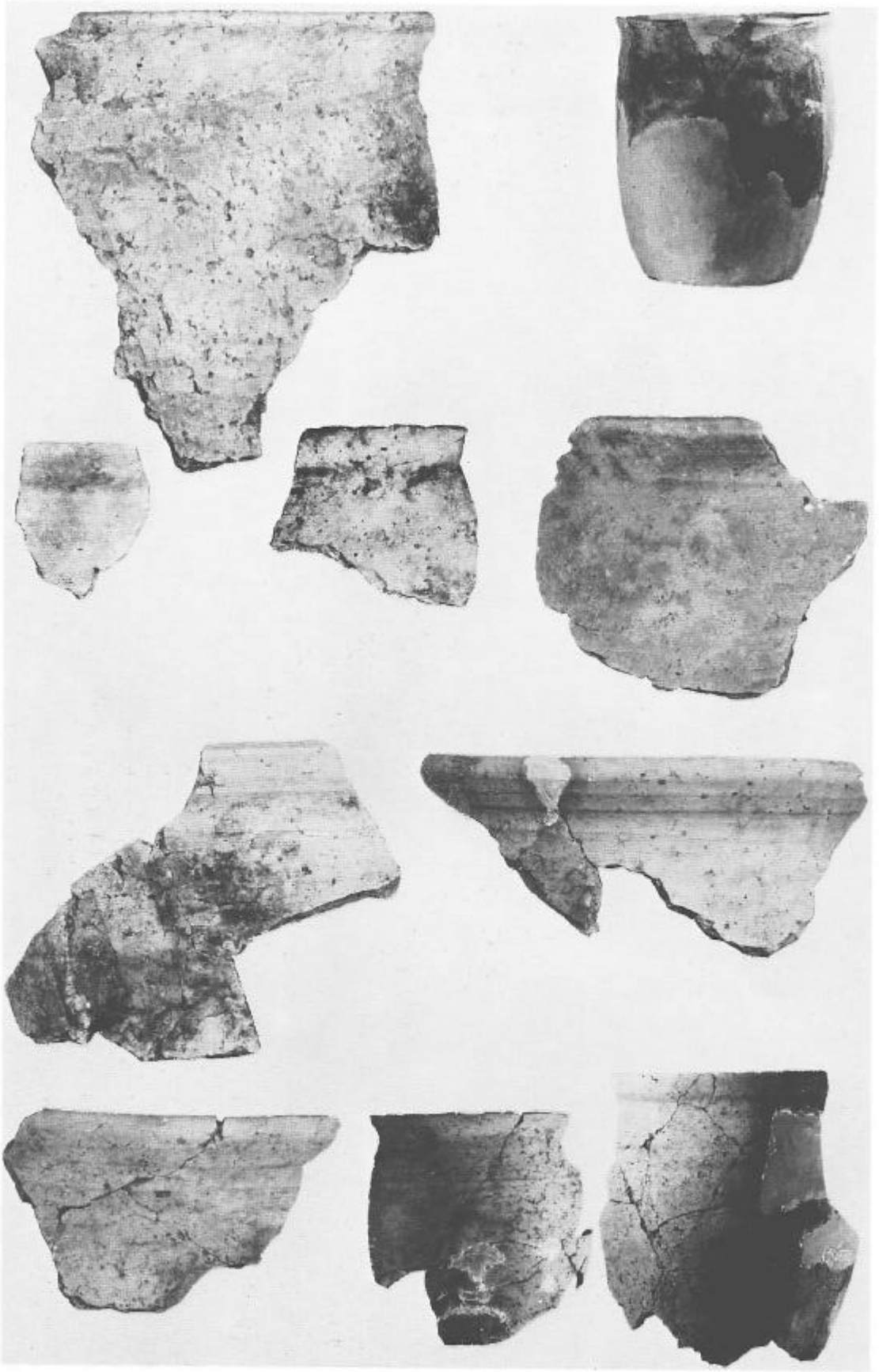
図版15　　第１号住居跡出土遺物



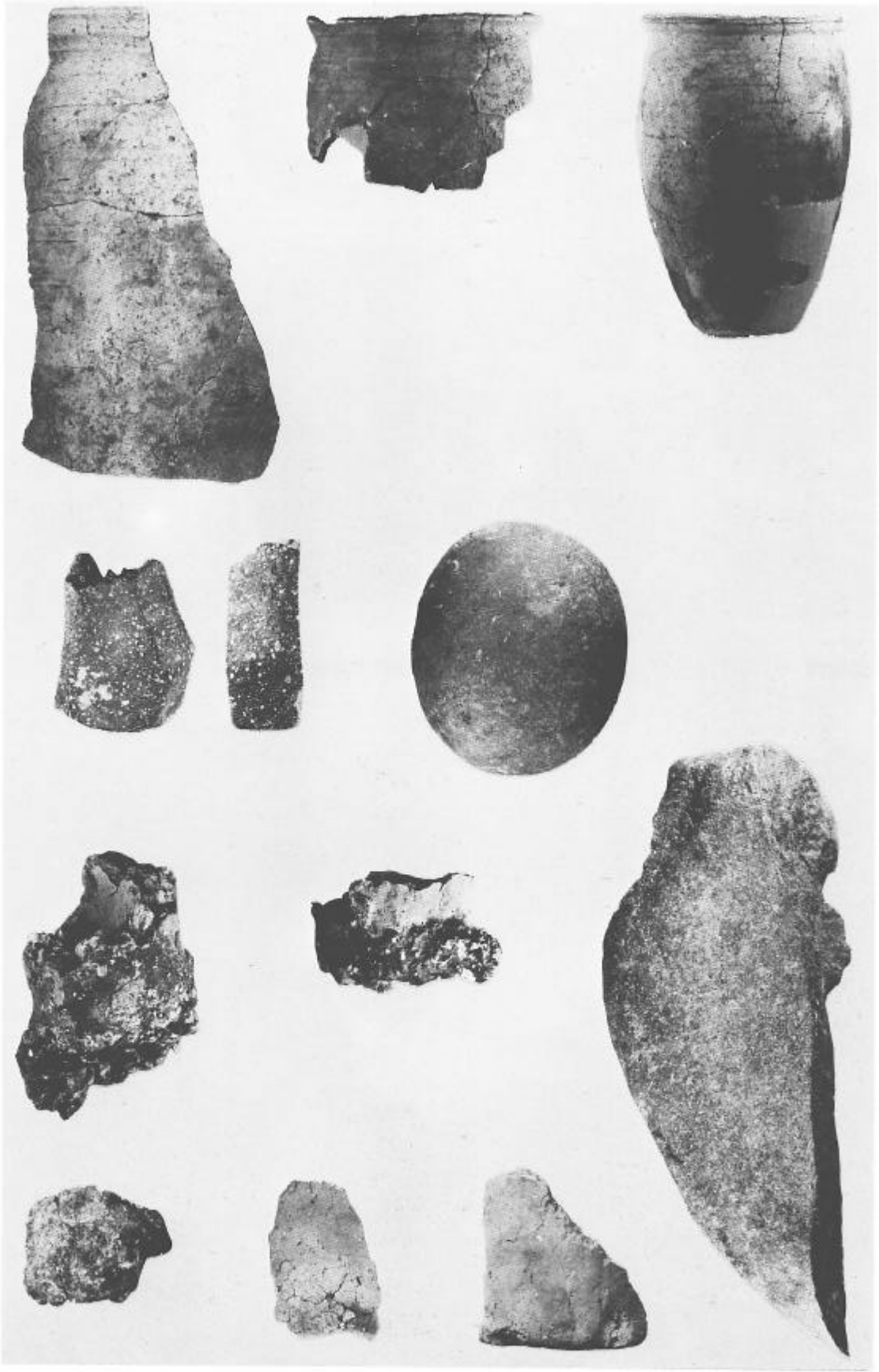
図版16　第２号住居跡出土遺物



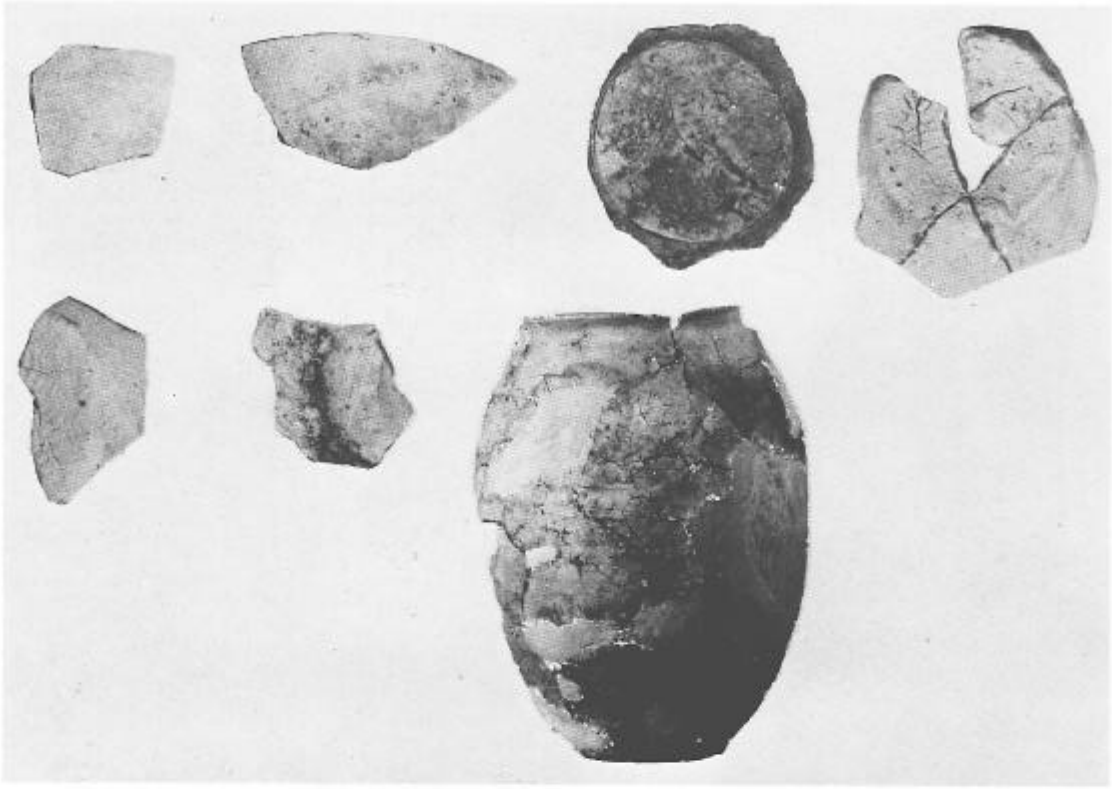
図版17　　第2号住居跡出土遺物



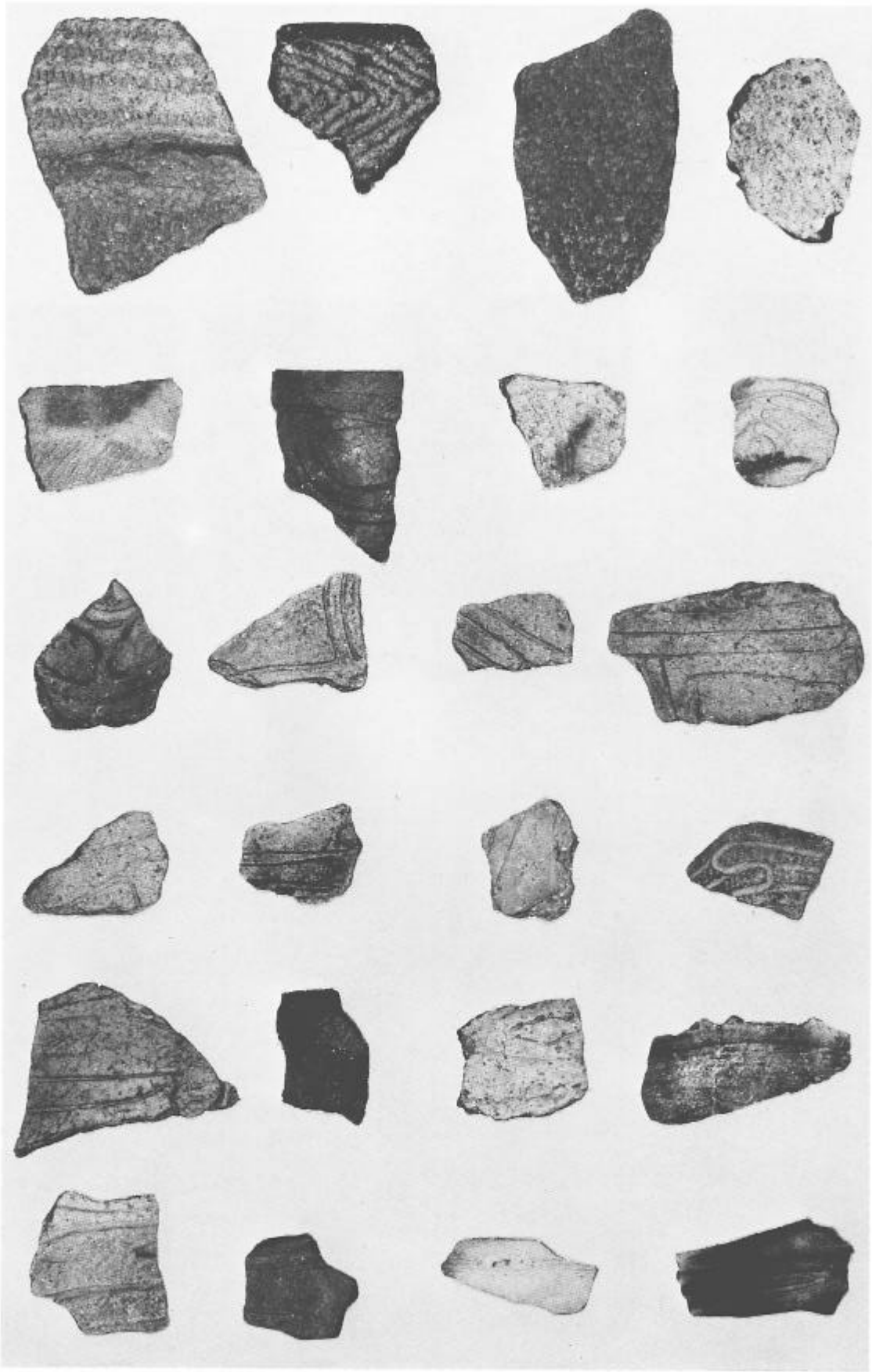
図版18　　第2号住居跡出土遺物



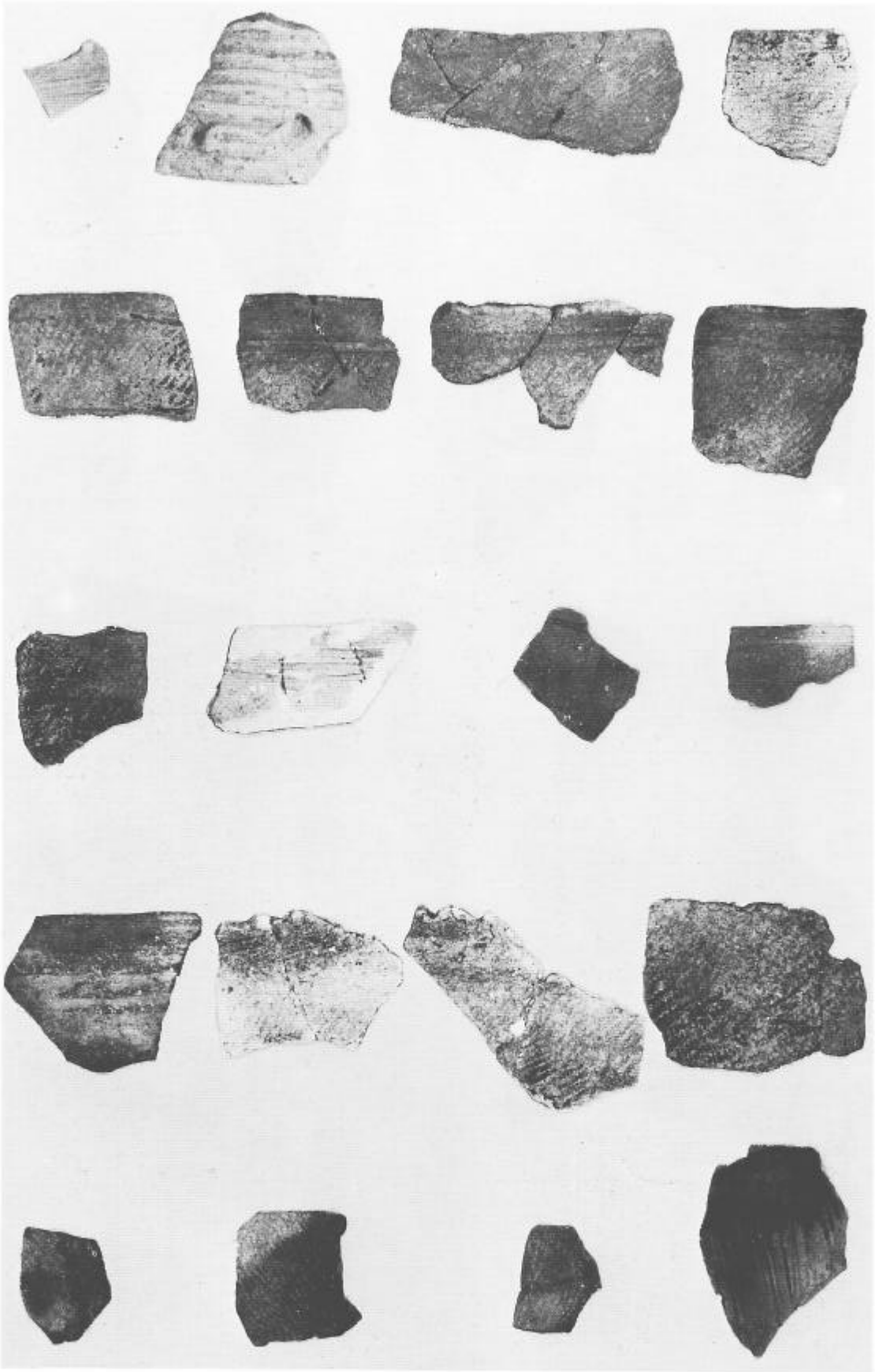
図版19　　第2号住居跡出土遺物



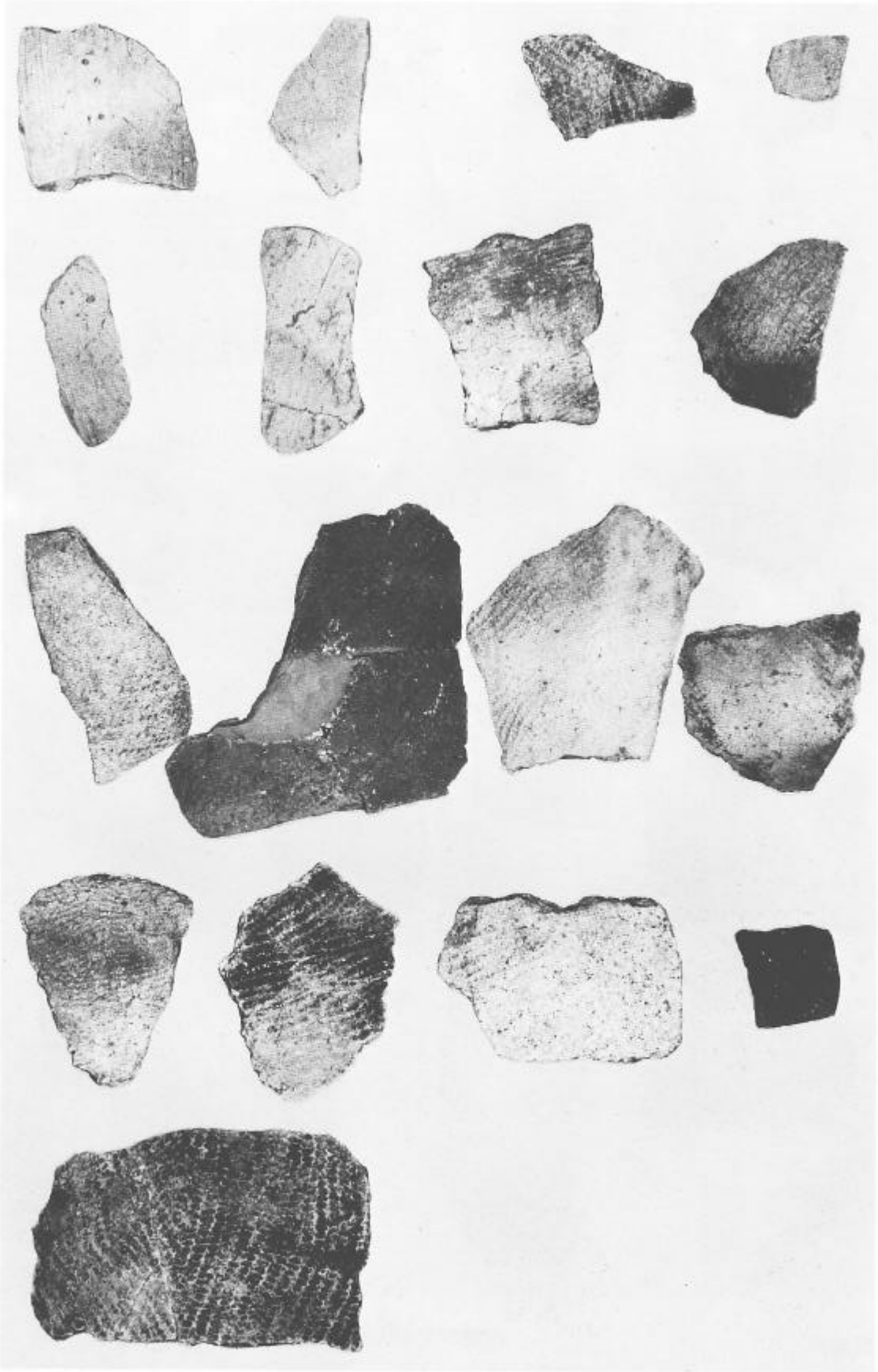
図版20　　第3号住居跡出土遺物



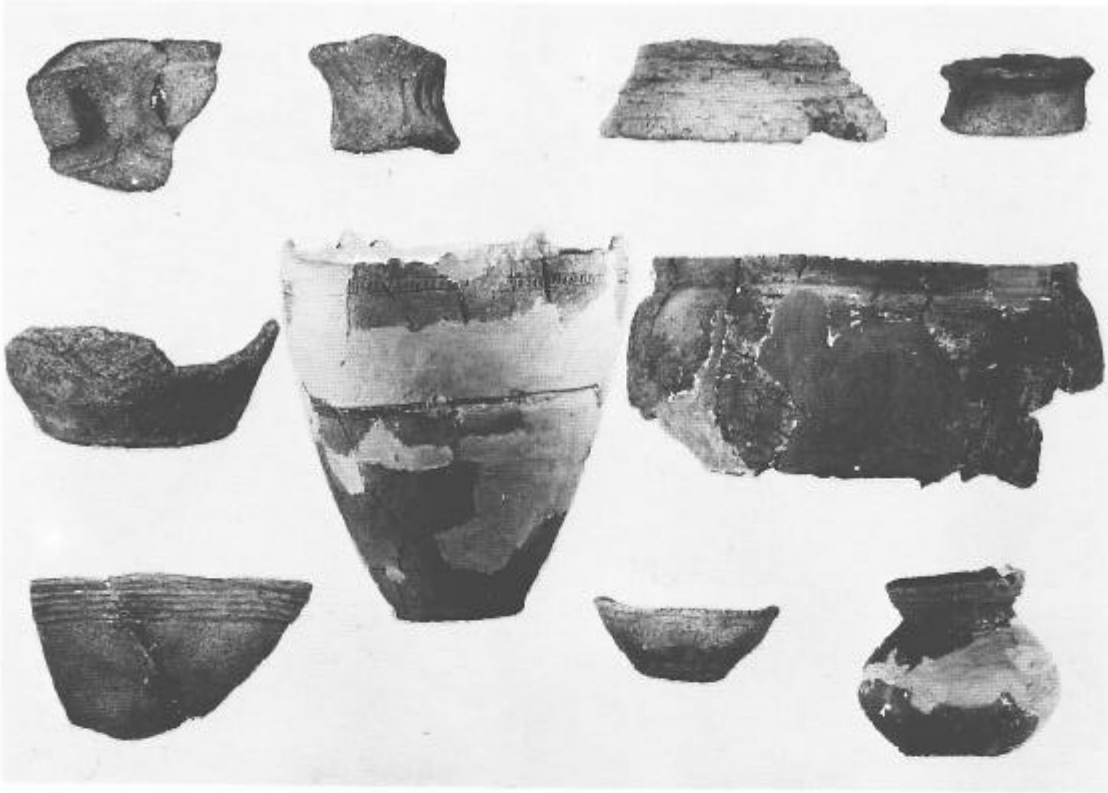
図版21　　遺構外出土縄文時代土器



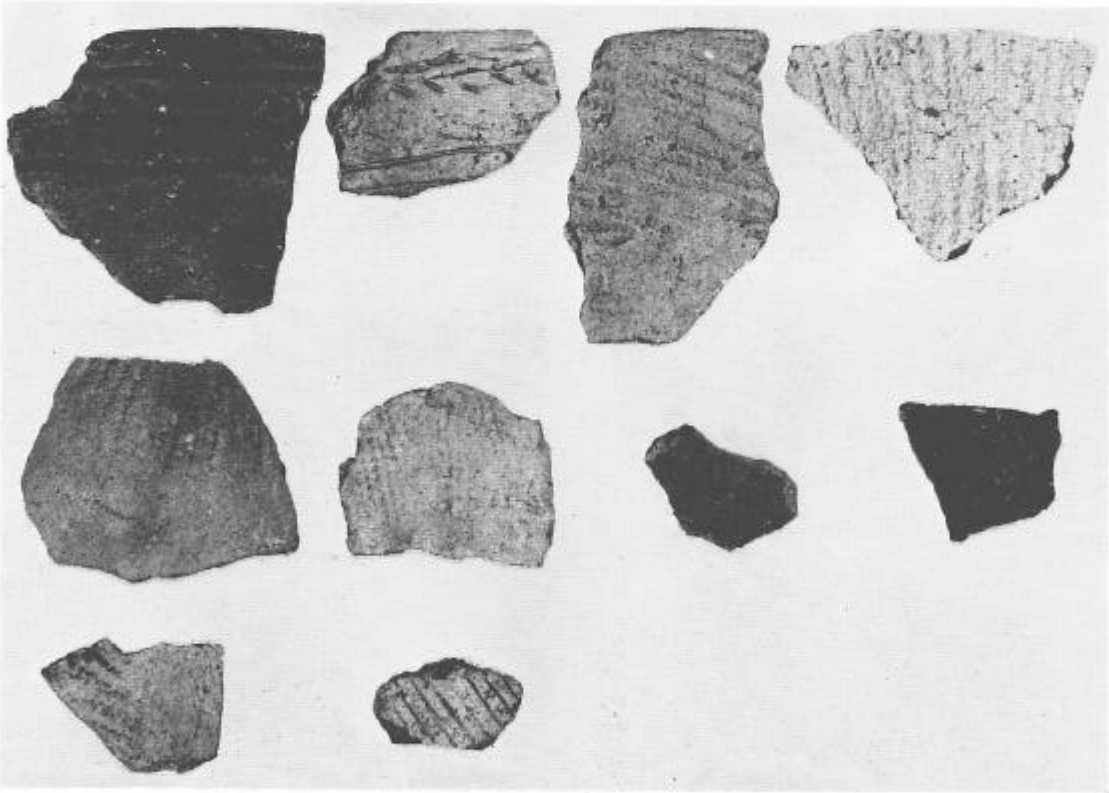
図版22　　遺構外出土縄文時代土器



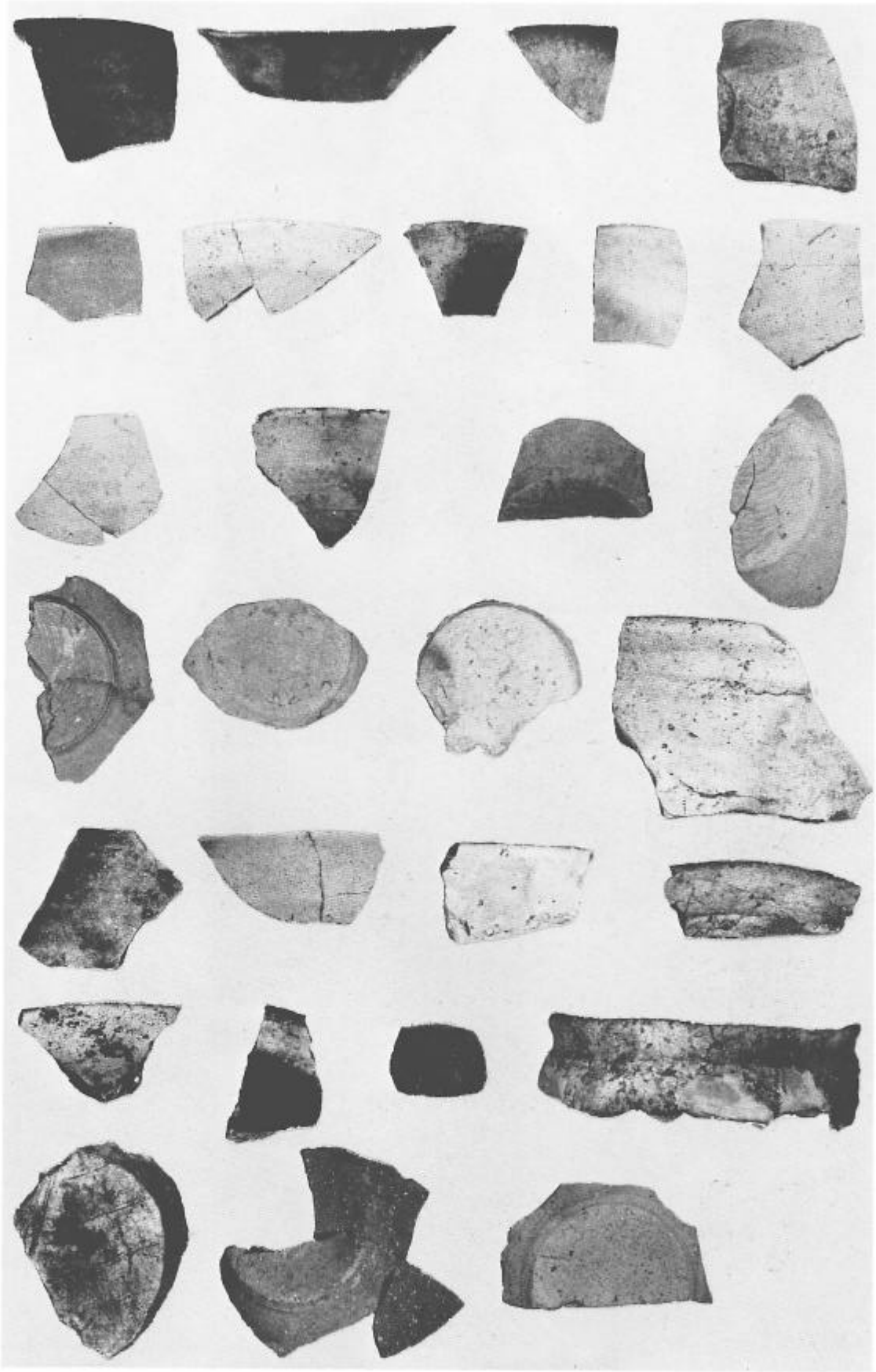
図版23　　遺構外出土縄文時代土器



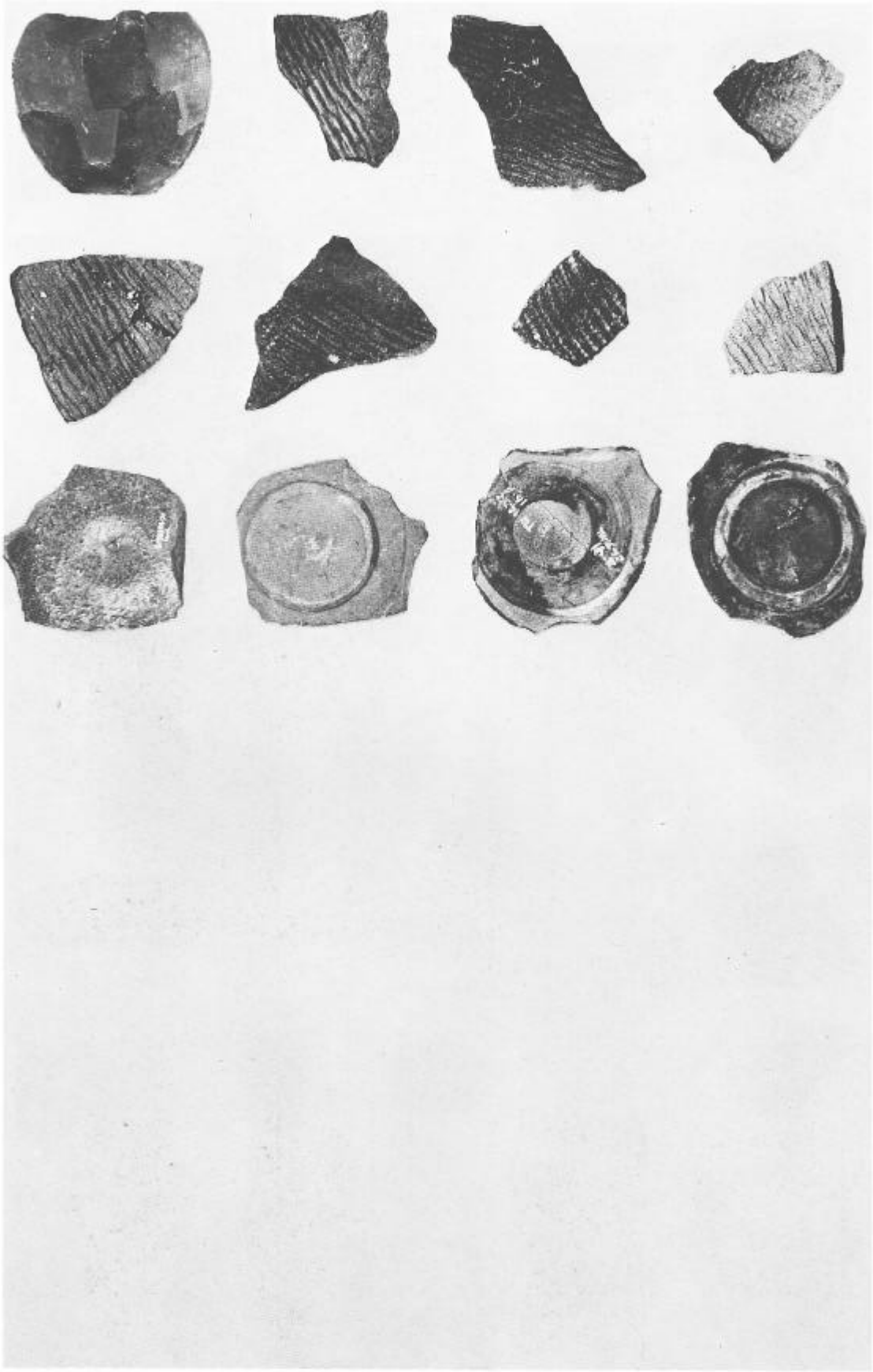
遺構外出土縄文時代土器



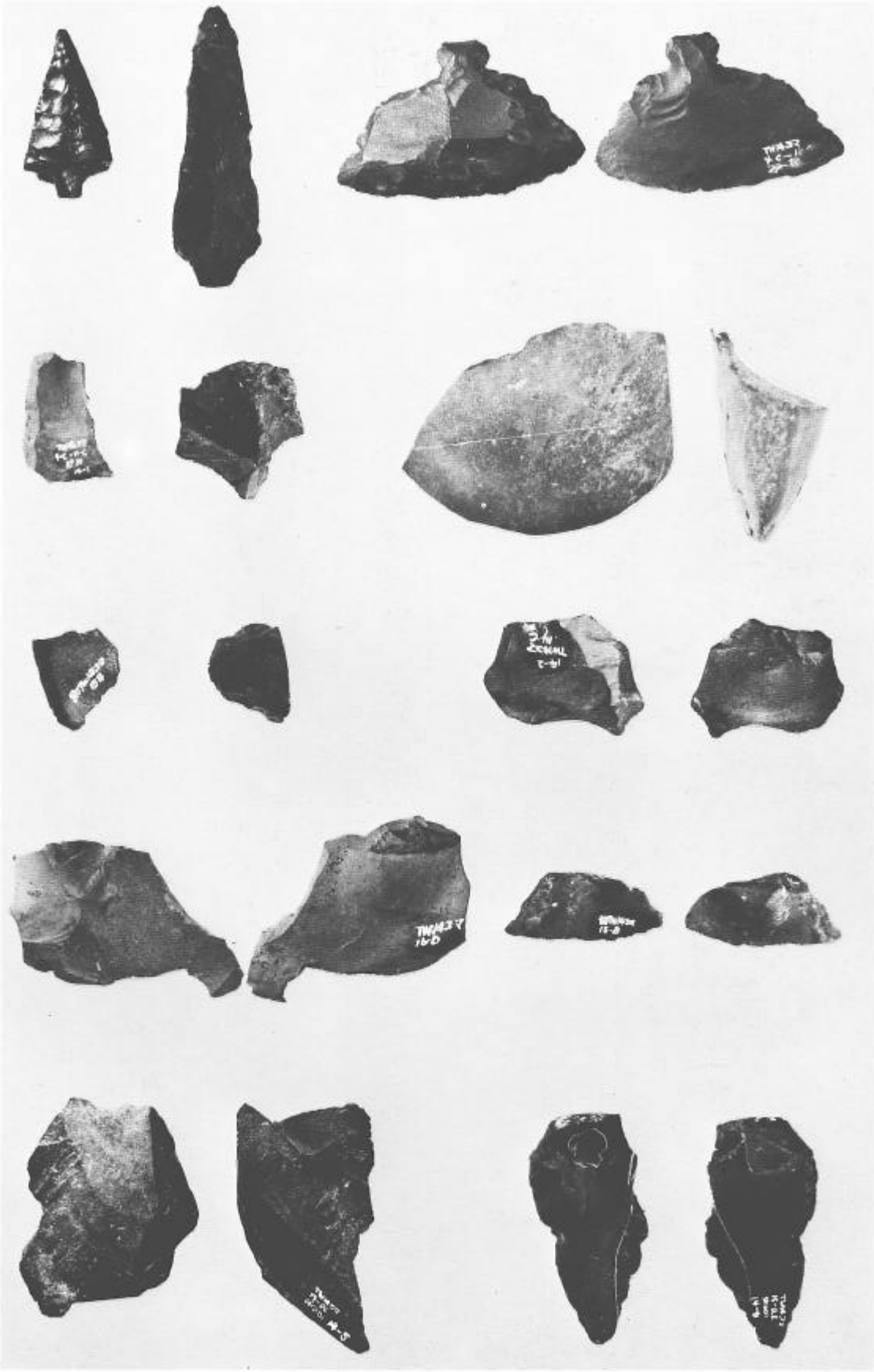
遺構外出土弥生時代土器



図版25　　遺構外出土土器(土師器)



図版26　　遺構外出土土器(須恵器，陶器)



図版27　　遺構外出土石器

案　内　II　遺　跡

遺　跡　番　号	No.19
所　　在　　地	鹿角市花輪字案内
調　査　期　間	昭和55年９月16日～12月５日
発掘調査予定面積	5,724㎡
発　掘　面　積	5,550㎡

1．遺跡の概観

遺跡は，国鉄花輪線陸中花輪駅東北東2.25kmの標高約210ｍ前後の台地南端近くに位置する。遺跡の立地する台地は，花輪盆地の東側に広がる標高200～300ｍの一連の台地の一つであり，南側１km程には福士川が西流する。

調査区は，南及び西側へ向う緩斜面上に設定された。調査以前は，上部平坦面は畑地として耕作され，斜面はアカシア等の雑木林となっていた。また，調査区南側斜面を降りると標高200ｍ前後の比較的緩い斜面があり，杉林として利用されていた。

遺跡地に隣接する遺跡としては，標高185ｍ程の水田を狭んだ南側の標高200ｍ前後の台地上に，縄文時代後期と平安時代の複合遺跡である案内Ⅰ遺跡（東北縦貫自動車道関係遺跡番号No.18，55年度調査）があり，本遺跡と同一の台地北側400ｍには，縄文時代後晩期の猿ヶ平Ⅰ遺跡（No.20，55年度調査，本報告書所収）がある。また，西方１km程の標高170ｍ前後の台地には，縄文時代と平安時代の複合遺跡である御休堂遺跡（鹿角市教委，55年度調査）がある。さらに，東北縦貫自動車道関係遺跡では，本遺跡調査中に南側斜面下の緩斜面が，縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが確認され，案内Ⅲ遺跡（No.34，56年度調査）として加えられている。

2．調査の方法

日本道路公団設置の，東北縦貫自動車道予定地内道路中心抗ＳＴＡ139とＳＴＡ140を結ぶ直線を基線とし，ＳＴＡ139を基準点として方眼抗を設置し，５ｍ×５ｍのグリッドを設定した。グリッド設定のために引いた各ラインには，南から北へ３～30までのアラビア数字，東から西へＤ～Ｙのアルファベットを付し，各グリッドはその東南隅の方眼抗によって呼称した。

遺構等の実測は，設置した方眼抗を利用しての簡易遣方測量によったが，配石遺構の実測には本遣方測量を用いた。また，遺構外出土の遺物のとりあげも各グリッド毎に行った。

調査区がアカシア等の雑木の多く生えている所であったのと，全体に緩い斜面であったために人力による粗掘作業以前に抜根を兼ねて重機による除土作業を行うこととした。その際失われる表土から地山面までの土層観察は，調査区東際の畑地での観察で補うこととした。

粗掘作業以後の地山面の精査は，本調査に入る以前の踏査等により縄文時代土器片を確認していた上部平坦面から遺構確認を目的として行った。また，北側の23～30，Ｑ～Ｙの各ラインのグリッドは，遺構確認後の拡張を想定して東西方向に計５本のトレンチを設定して調査を行った。

3．調査経過

本調査は，昭和55年９月16日から開始しているが，７月23日から１週間，雑木及び下草の刈払いと重機による除土作業の目安とするため，トレンチを設定して試掘を行った。また，８月23日から約１週間重機による除工と抜根作業を行い，９月11日には方眼抗設置の作業を行っている。

９月16日以降の本調査経過は概ね以下の通りである。

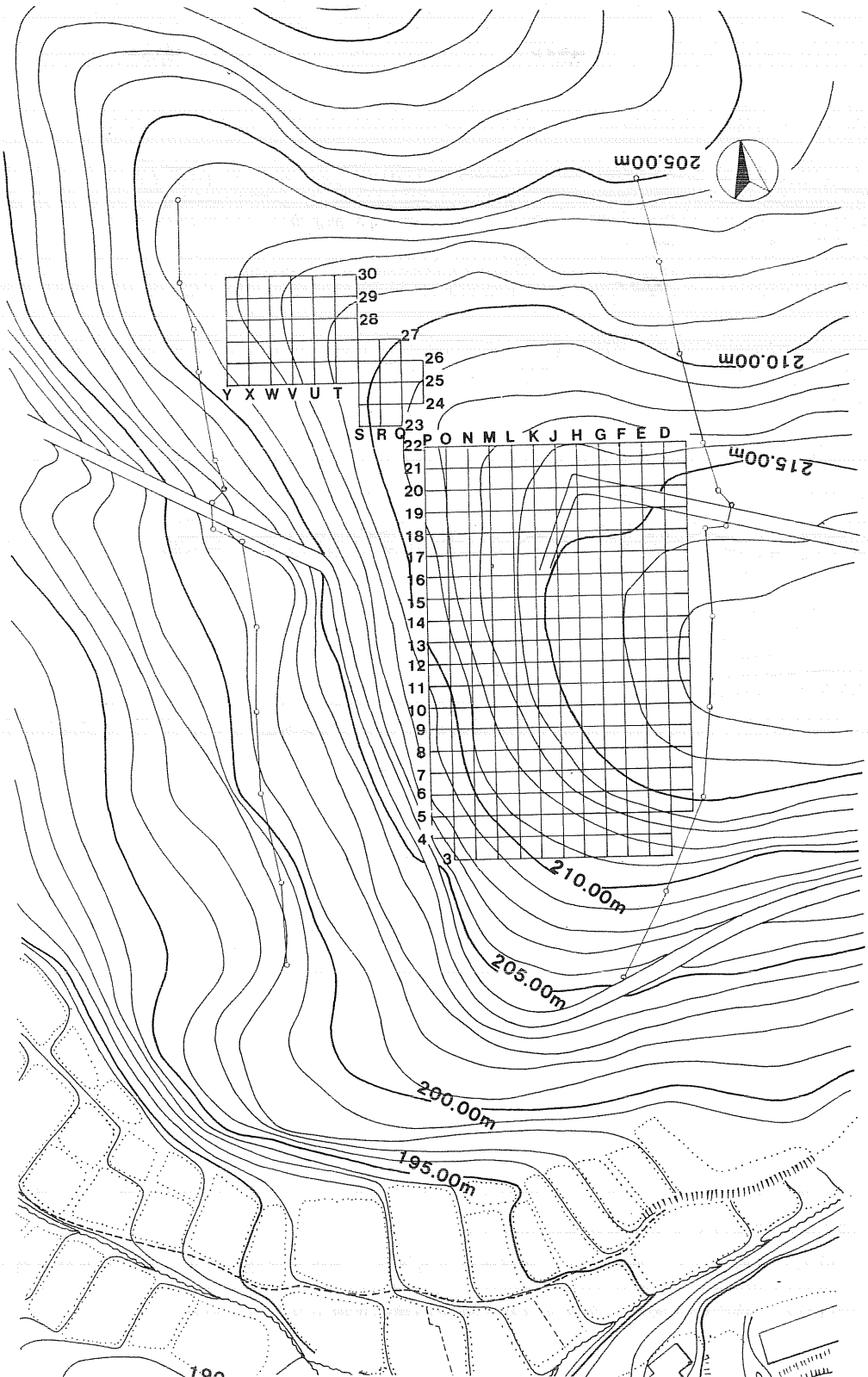
９月16日～９月23日	重機除土後の盛土の除土作業
９月24日～	上部平坦面から遺構確認面精査
10月３日	第12号土壙確認
10月６日	埋設土器遺構，第１号住居跡確認
	北側調査区にトレンチ設定
10月７日	配石遺構確認，精査開始
10月11日	第２号住居跡確認
10月17日	第３号第４号住居跡確認
10月24日	北側調査区トレンチ粗掘作業終了
10月31日～11月８日	第１号，２号，３号，７号，８号，10号土壙確認
11月５日～11月22日	第５号，９号，11号土壙確認精査
12月２日	調査区域全体写真撮影，調査終了

調査全行程には78日間を費しているが，この間11月10日には南側斜面下の緩斜面に７本のトレンチを設定，11月27日までの間に平安時代竪穴住居跡２棟と，縄文時代竪穴住居跡１棟を検出し，案内Ⅲ遺跡（遺跡番号No.34）として翌年度本調査を実施することを決めている。

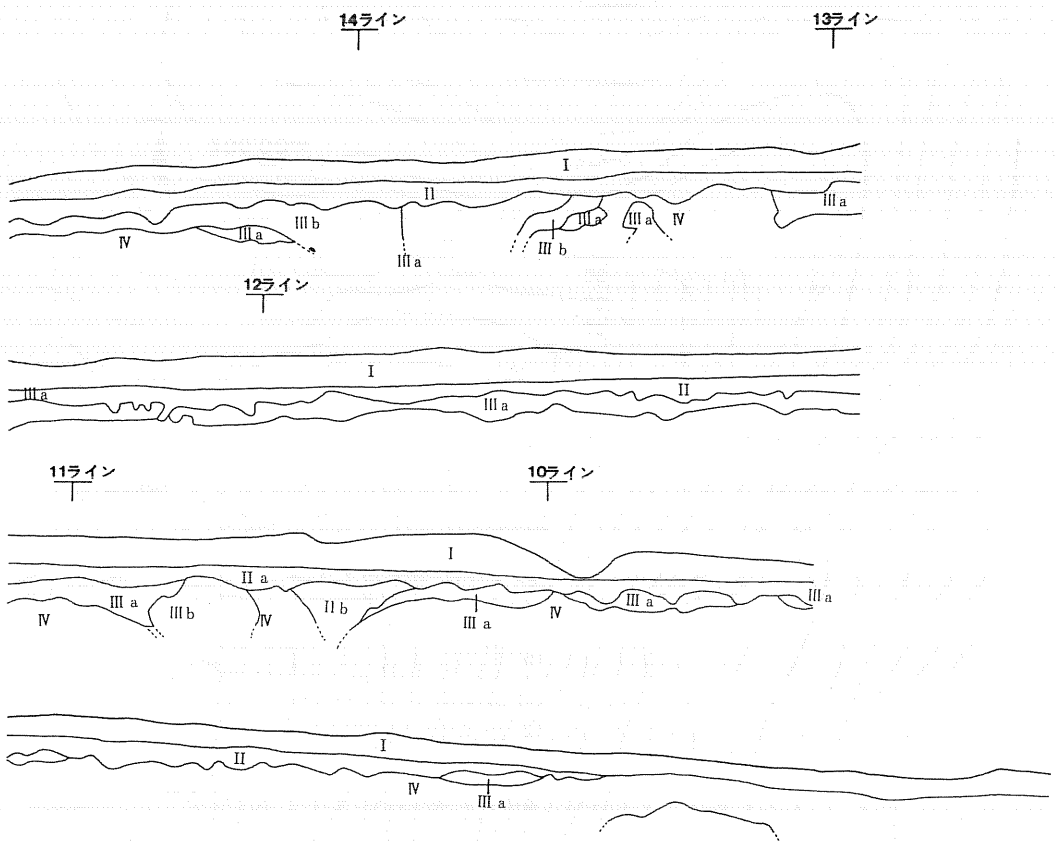
4．遺跡の層位

本遺跡の土層堆積状態を観察するため，調査区の東側にトレンチを設定し，土層断面図を作成した。本遺跡層位は基本的には，４層に分類される。ただし，Ⅲ層は生成因が同じと思われるが，砂粒の大きさが異なるため，あえてⅢａ層，Ⅲｂ層の２つに分けており（ところどころⅢａ，Ⅲｂが逆転している）これらを含めた分類では，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲａ，Ⅲｂ，Ⅳ層の５つに分けられる。

Ⅰ層：色調は黒褐色を呈する。調査区全域に広がる耕作土であり，有機物を多量に含み，ま



第１図　案内Ⅱ遺跡グリッド配置図



第２図　遺跡の層位

た，かなり粒径の大きい（７～10mm程度）のパミスが僅かに混じる。

II層：色調は黒褐色を呈するが，黄褐色土及びＩ層の黒褐色土がブロック状に入り込むため，かなり明るい印象をうける。また，耕作や植物根による攪乱がかなりはいる。

III ａ層：色調は黄褐色を呈する。砂質であるが，かなり良くしまっており，層自体は非常に硬い。

III ｂ層：色調は黄褐色を呈する。砂礫層であり，径0.1～2.0mm程度までの砂及び礫よりなる。かなり部分的にしか認められない層である。

IV層：色調はにぶい黄褐色～明褐色を呈する。非常にキメ細かく，粘性に富む。IV層下部には色調，明褐色を呈する酸化層が存在する。

以上，各層のうち，遺物は主にII層中に包合され，遺構の確認は，III ａ層上面及びIV層上面で行われ，特に竪穴床面，フラスコ状土壙壁面等はIV層よりなっている。

5．遺構と遺物

ア．住居跡

第1号住居跡

〈検出区〉　5－H

〈規　模〉　長径320cm　短径268cm

〈形　状〉　楕円形

〈確認状況〉

南側斜面に於いて周囲よりも稍暗い色調を呈し，炭化物，焼土，土器片を含むプランを検出した。プランを示すラインは不明瞭であり，正確な形状を把握することはできなかった。

〈覆　土〉

1．10YR$^{2}/_{3}$，黒褐色，稍粘質，孔隙は少ない，径5～12mm程度の炭化物，焼土粒を混入する

2．10YR$^{3}/_{1}$，黒褐色，粘性弱，孔隙は比較的多い，炭化物，僅かに混入する。

3．10YR$^{3}/_{4}$，暗褐色，粘性大，孔隙少，黄褐色土粒，黒褐色土粒の混り合ったもの，炭化物，焼土粒僅かに混入する。

4．10YR$^{2}/_{3}$，黒褐色，粘性大，孔隙少，キメ細かく比較的均質，炭化物僅かに混入。

5．10YR$^{4}/_{6}$，褐色，稍粘質，壁の崩落土と思われる。

〈壁〉

住居跡が斜面上で確認されたため，南側壁の遺存状態は悪い。残存する壁高は北壁で約24cm，南壁で約9cm，東壁で27cm，西壁で11cmを計る。傾斜角は約118°～128°である。

〈床〉

全体に軟弱であり，根による攪乱も数箇所に認められる。

〈柱　穴〉

$P_1$22×24×9.6cm，$P_2$20×16×5cm　明確に柱穴と判断できるピットは少なく，図面上に記された他のピットは根の攪乱痕跡の可能性もある。

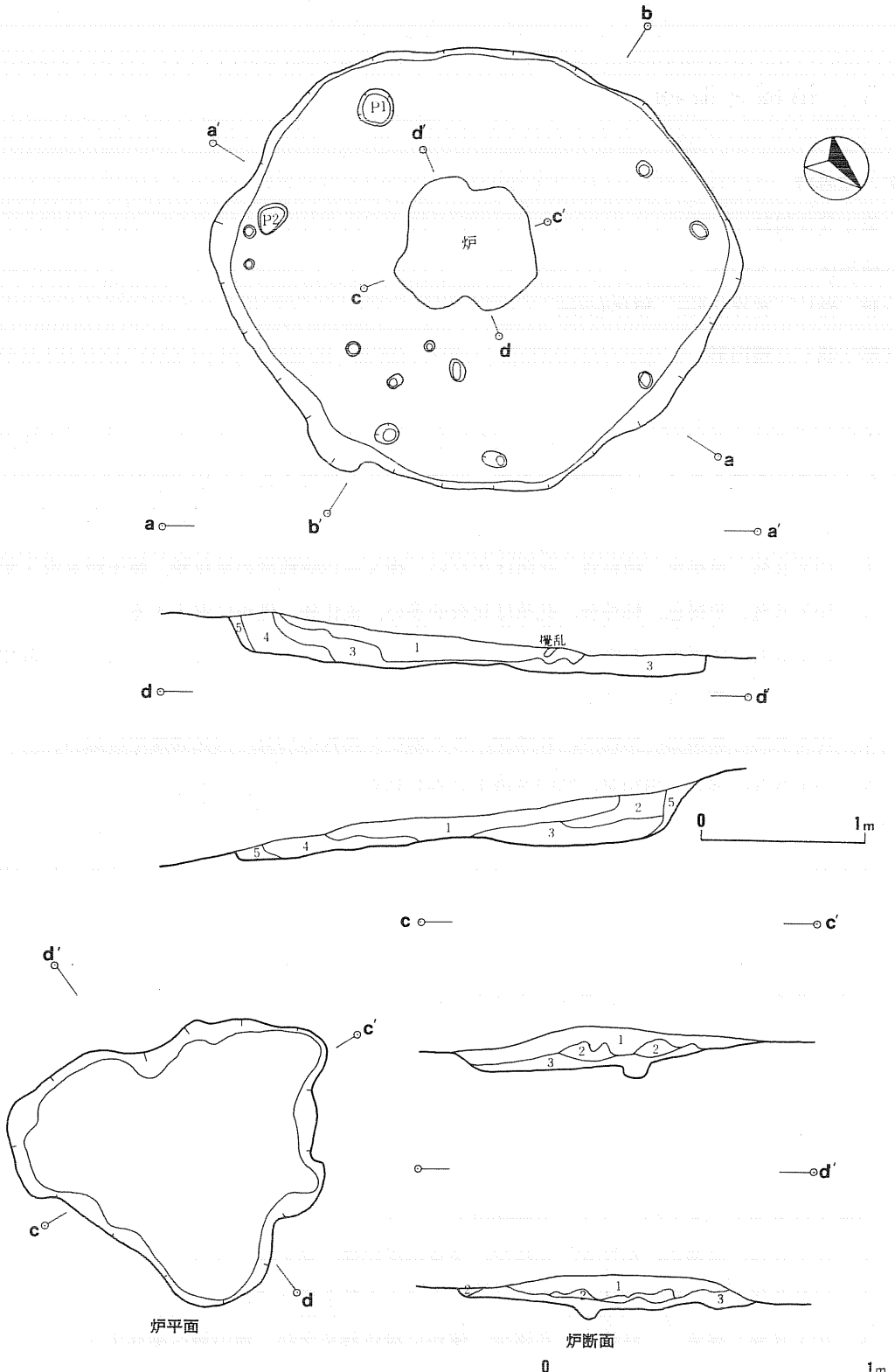
〈炉〉

床面上に焼土が確認されただけの所謂地床炉である。

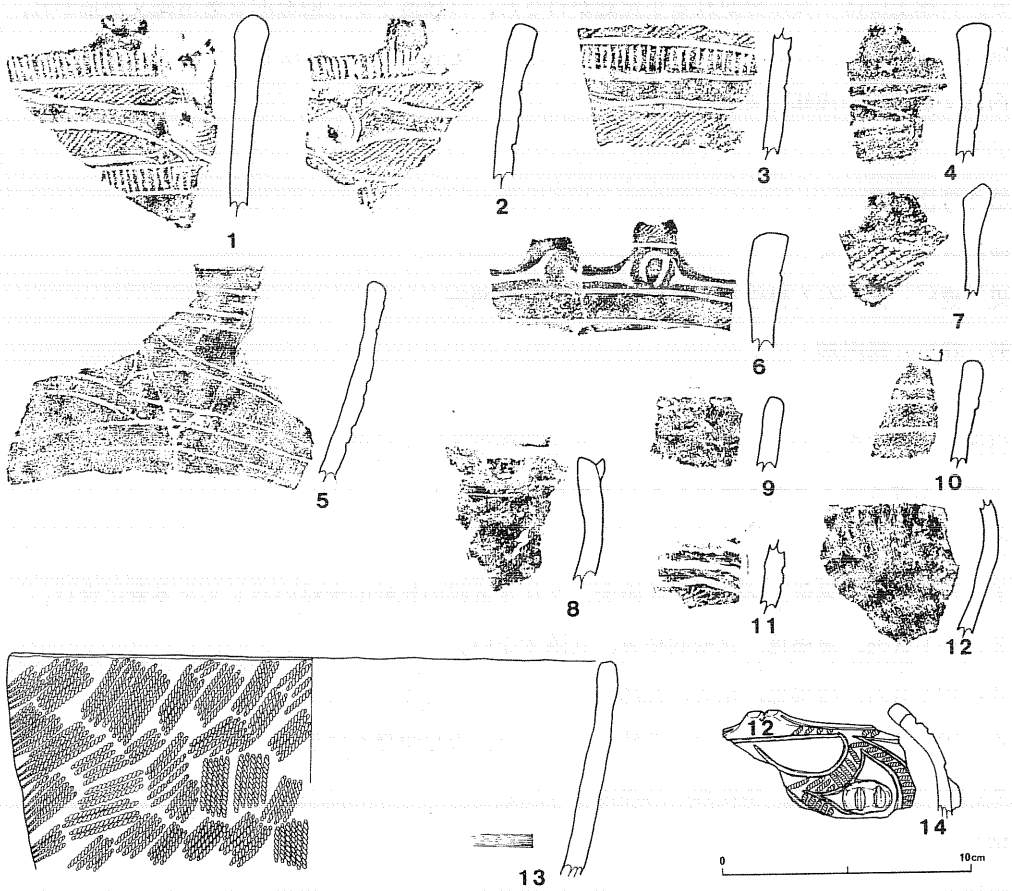
1．10YR$^{3}/_{4}$，暗褐色，粘性大，孔隙少，多量の炭化物，焼土粒を含む。

2．10YR$^{4}/_{8}$，赤褐色，粘性大，孔隙少，最も良く火熱を受けている。

3．10YR$^{4}/_{6}$，褐色，　粘性大，孔隙少，僅かに炭化物を含む，地山層へ漸移する。


b
a′
d′
P1
P2
炉
c′
c
d
a
b′
a
a′
5
4
3
1
攪乱
3
d
d′
2
5
1
3
5
4
0
1m
c
c′
d′
c′
1
2
2
3
c
d
d′
炉平面
1
2
3
炉断面
0
1m

第３図　第１号住居跡



第４図　第１号住居跡出土土器

〈遺　物〉

遺物は全て土器片であり，平面分布は若干東側へ偏る傾向が認められるものの覆土全体に含まれる状態で出土している。

土器片は，東北地方縄文時代後期後葉を特徴づける貼瘤文土器を主としている。

第４図１～３は同一個体である。口縁上に魚尾状の突起が付される。文様帯は口縁部に限り上下限は刻目帯で画される。文様帯中には磨消縄文手法で入組文が描かれ，入組部分には縦位に２個の瘤が貼付される。文様帯下には幅１cm程で無文帯が設けられ，以下縄文が施される。使用された原体はＬＲである。**４**は**１～３**同様，突起をもち入組文の描かれたものである。**５**は，無文地の上に沈線によって入組文が描かれている。**６**は，口縁上に付された突起に対応して所謂玉抱きの三叉文が描かれている。**７～12**もやはり入組文の描かれる破片と思われるが，**12**のように地に無文が選ばれる場合もあるようである。**13**は全面縄文の施されたものであるが，後期後葉に伴出する粗製土器と思われる。**14**は遺跡中唯一の破片であるが，安行２式に比定で

きる。口縁上には二又に分かれる小突起が付され，口縁直下から曲線的な磨消縄文が描かれ，1個所に所謂「ぶた鼻」状の瘤が貼付される。地文に使用される原体はＬＲであり，器形は口縁の内湾する小形の浅鉢と思われる。

第２号住居跡

〈検出区〉　７－Ｋ

〈規　模〉　柱穴から推定した長径316cm，短径298cm

〈形　状〉　楕円形

〈確認状況〉

斜面上の暗褐色土除去の際，炉である焼土の検出によって確認された。プランが甚だ不明瞭で，覆土を掘り込んで壁を検出しながら形状を確認した。

〈覆土〉

１．10ＹＲ2/1，黒色，粘性弱，孔隙大，２～３ｍ程の比較的大粒のパミスを多量に含む。

２．10ＹＲ2/2，黒褐色，比較的粘質，孔隙少ない。

３．10ＹＲ3/4，暗褐色，粘質，孔隙少なく，パミスを僅かに含む。

４．10ＹＲ3/2，黒褐色，粘質，孔隙少なく均質，炭化物僅かに混入。

５．10ＹＲ4/4，褐色，粘性弱，孔隙は少ない。

〈壁〉

斜面上に位置するため，南壁は表土除去の際取除かれている。残存する壁高は北壁で2.4cm，東壁で19cm，西壁で10cmを計る。傾斜角は，116°程度である。

〈床〉

比較的良好な床面である。根などによる攪乱も殆どなく，平坦である。

〈柱　穴〉

P_1 28×28×11cm，P_2 28×22×11cm，P_3 25×27×18cm，P_4 20×20×７cm，P_5 20×18×８cm，北壁及び東西壁際では柱穴と思われるような良好なピットを検出できなかった。

〈炉〉

床面中央部にほぼ円形の焼土プランが確認された。

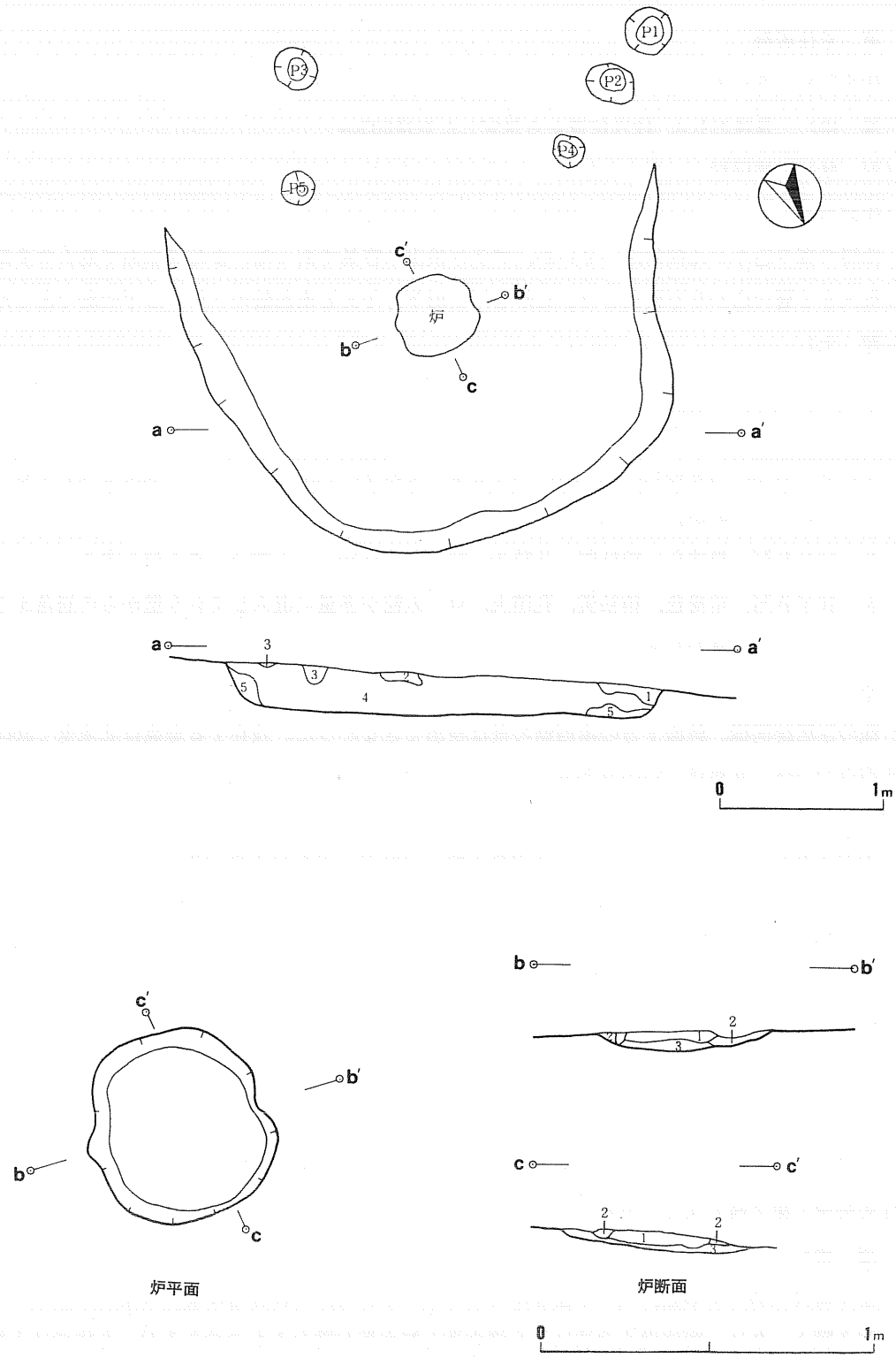
１．５ＹＲ4/8，赤褐色，粘性強，孔隙少，最も良く火熱を受けている。

２．10ＹＲ2/3，黒褐色，粘性弱，孔隙比較的多

３．7.5ＹＲ5/6，明褐色，粘性強，孔隙少，地山層へ漸移する。

〈遺　物〉

全面縄文の施された土器片が数点出土している。



第5図　第2号住居跡

第３号住居跡

〈検出区〉　５－Ⅰ

〈規　模〉　長径311cm，柱穴位置から推定した短径265cm

〈形　状〉　楕円形

〈確認状況〉

住居の掘り込みが比較的深いせいか，プラン検出は容易であった。また確認面で焼土の多量に混入する層の広がりを検出した。しかし，斜面下方である南西側のプランは不明瞭であった。

〈覆　土〉

１．10ＹＲ2/2，黒褐色，稍粘質，孔隙は比較的少ない。若干の焼土粒，炭化物を含むが，下層程混入割合が大きい。

２．５ＹＲ5/8，明赤褐色，焼土層，固くしまっており，孔隙は少い。炉の焼土と関係するものか。

３．10ＹＲ2/3，黒褐色，稍粘質，孔隙少，若干の炭化物ロームブロックを混入する。

４．10ＹＲ3/3，暗褐色，稍粘質，孔隙大，ローム粒が多量に混入しており壁からの崩落土と思われる。

〈壁〉

他の住居跡同様，斜面下方の南西側の壁は検出できなかった。残存する壁高は北東壁で26cm，北西壁で13cm，南東壁で21cmを測る。

〈床〉

床面の遺存状態は概して悪い。植物根等の攪乱が床面まで及び凸凹が著しい。

〈柱　穴〉

$P_1$26×30×35cm，$P_2$24×20×42cm，$P_3$22×22×５cm，$P_4$20×22×12cm，$P_5$26×24×44cm，$P_6$20×17×23cm，$P_7$26×26×36cm，$P_8$18×20×21cm，$P_9$18×18×22.3cm

住居跡壁内周にめぐるように柱穴と思われるピットが検出された。他の住居跡のものに比較して掘り込みも深く，しっかりしたものである。

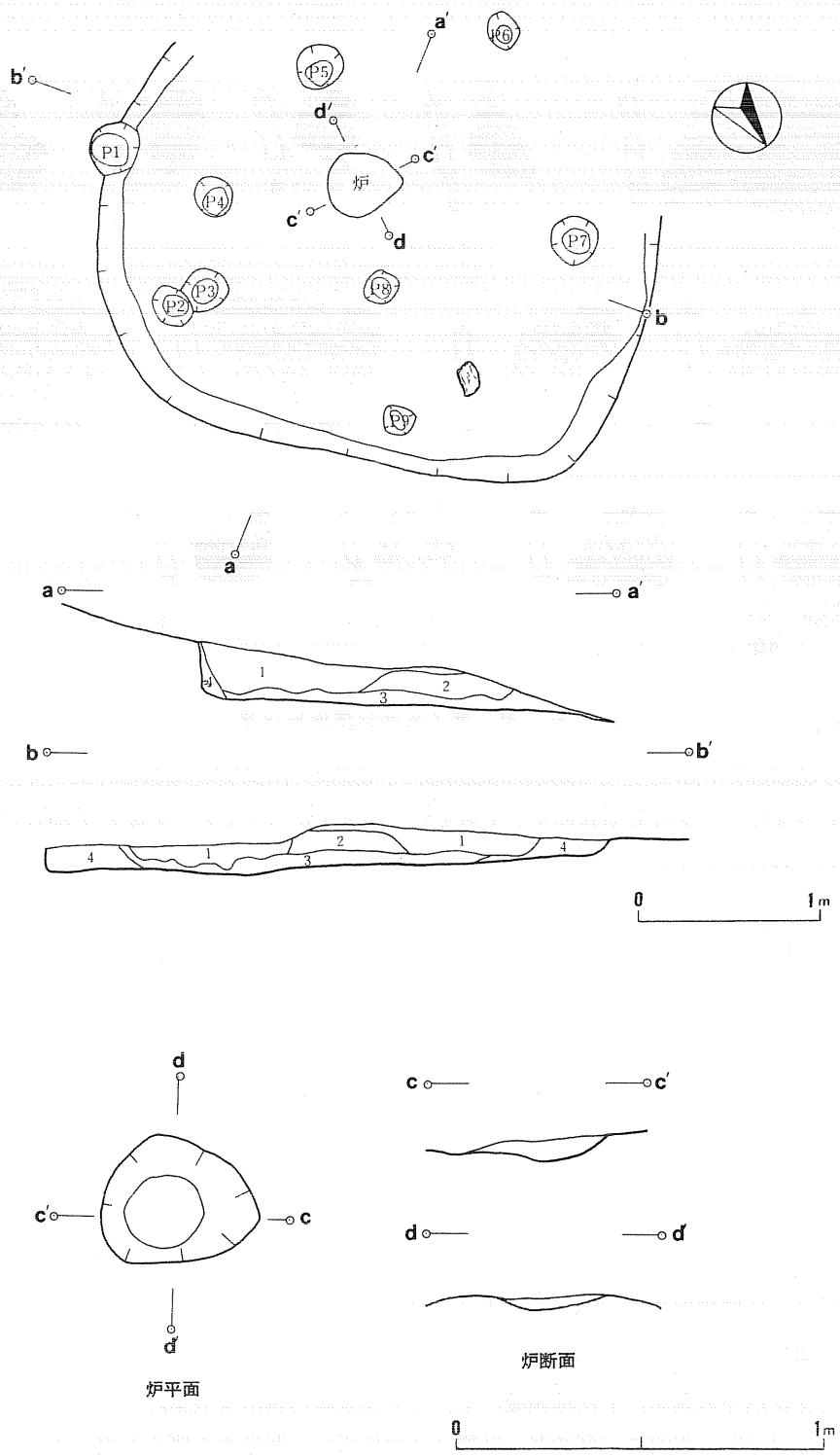
〈炉〉

床面中央部に焼土の広がりを確認した。所謂地床炉である。焼土層は１層で土色，土質とも住居跡覆土第２層と同じである。

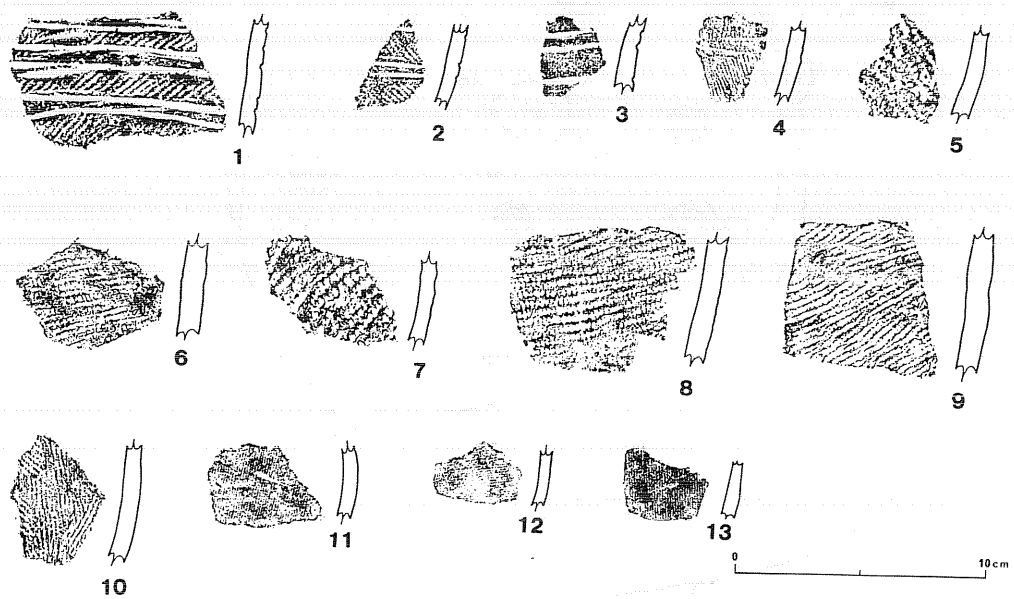
〈遺　物〉

全て縄文土器片である。覆土中全体から出土したもので，平面分布に偏りは認められない。

第７図１～３は，磨消縄文手法により縄文帯と無文帯が重なるものであるが，全体では入組文での構図をとると思われ，縄文時代後期後葉に位置づけられる。**４～10**は全面縄文の施され


a′
P6
b′
P5
d′
P1
c′
炉
P4
c′
d
P7
P3
P2
P8
b
P9
a
a
a′
1
2
3
4
b
b′
2
1
4
1
3
4
0
1m
d
c
c′
c′
d
d′
d′
炉平面
炉断面
0
1m

第6図　第3号住居跡



第７図　第３号住居跡出土土器

た破片であるが，やはり同時期のものであり，縄文の粗いことから判断して粗製土器と思われる。11～13は無文のものである。

第４号住居跡

〈検出区〉　７－Ｇ，７－Ｈ

〈規　模〉　柱穴位置から推定した長径525cm，短径350cm

〈形　状〉　長円形

〈確認状況〉

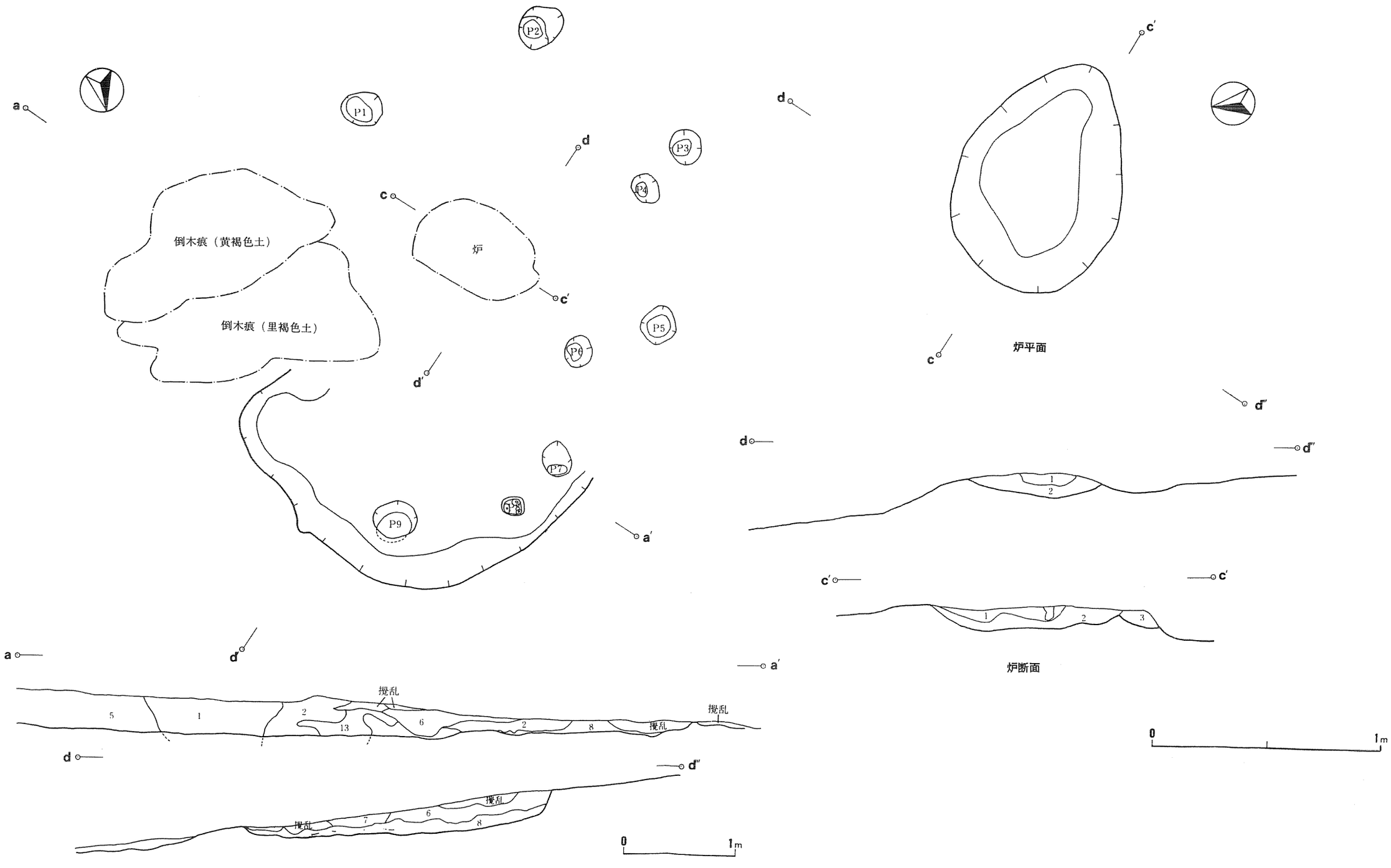
先ず周囲よりも若干暗い色調を呈する暗褐色土の広がりが検出され，次いで炉と思われる焼土が検出された。しかし，住居跡東側は倒木痕によって壊されており，全体の規模，プランの確定には，住居跡内覆土の除去を必要とした。

〈覆　土〉

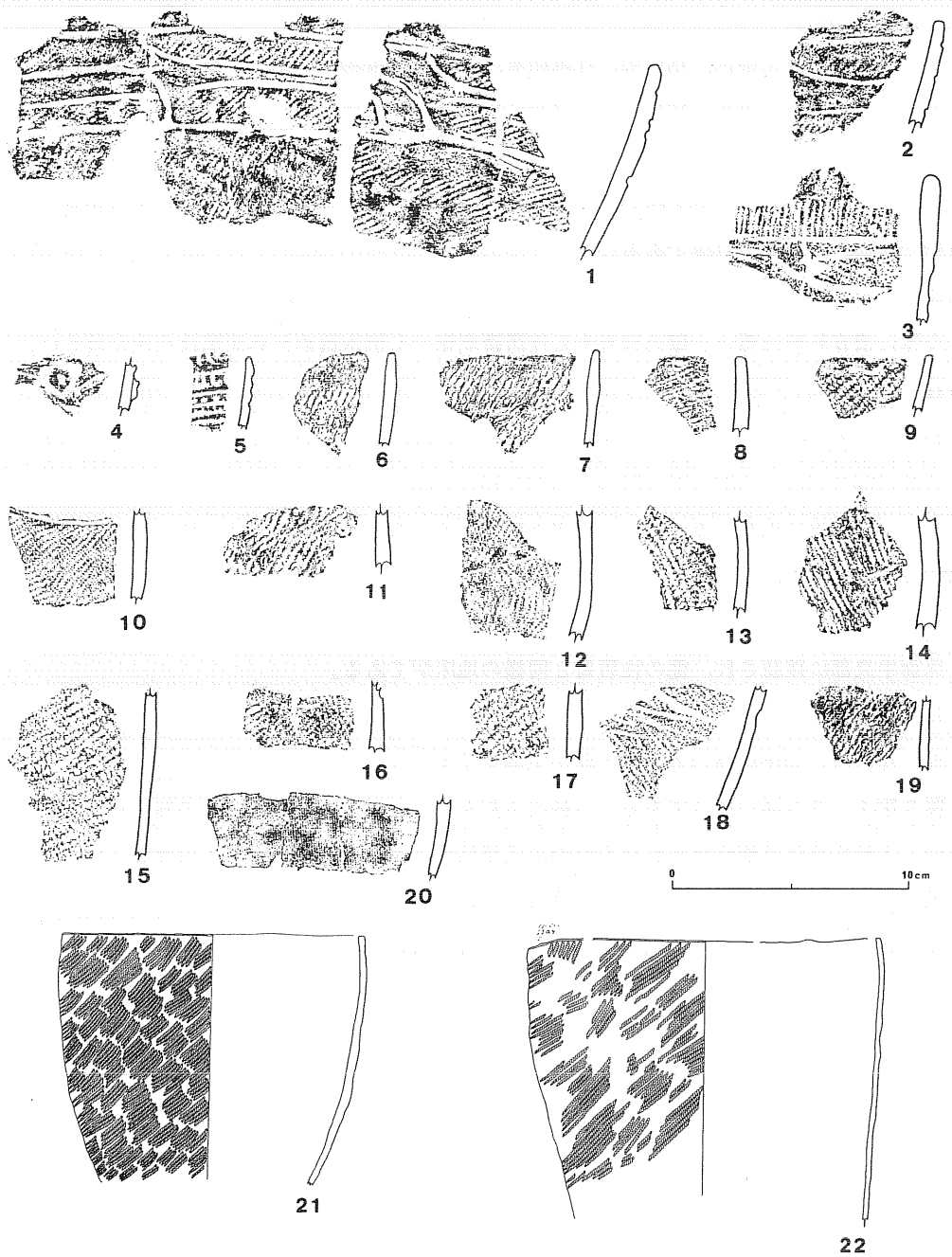
１～４は倒木痕覆土，５は地山層，６～８が住居跡内覆土である。

１．10ＹＲ2/3，黒褐色，粘性弱，孔隙は比較的少い，若干の土器片を出土する。

２．10ＹＲ5/6，黄褐色，粘性強，通常５層の下に認められるが倒木により逆転したもの。



第８図　第４号住居跡



第９図　第４号住居跡出土土器　0　20m

３．10ＹＲ3/4，暗褐色，粘性強，孔隙少，ロームブロックの混入著しい。

４．10ＹＲ4/6，褐色，粘性強，稍孔隙有，暗褐土粒混入。

５．土色土性とも遺跡基本層位第IIIa層と同じである。

６．10ＹＲ2/2，黒褐色，粘性弱，孔隙大。

7．10YR3/2，黒褐色，粘性弱，孔隙稍有，出土した遺物は主にこの層中に包含される。

8．10YR3/4，暗褐色，粘性弱，孔隙少，地山層へ漸移する。

〈壁〉

斜面上に位置するのと倒木痕のために，半分以上の壁は失われている。残存する壁高は，北東壁で14cm，北西壁で11cmである。

〈床〉

全体に遺存状態は悪い。壁の残存する住居跡北側でも倒木痕のため床面は凸凹が著しい。

〈柱　穴〉

$P_1$30×36×12cm，$P_2$42×34×45cm，$P_3$30×32×14cm，$P_4$22×28×23cm，$P_5$36×32×50cm，$P_6$30×24×16cm，$P_7$32×27×51cm，$P_8$20×18×6cm

ピットは全体に掘り込みが深く，柱穴と認め得るものが多い。P_2，P_4，P_5，P_7が主柱穴に相当すると思われる。

〈炉〉

床面中央部に確認され，他の住居跡と同様の地床炉である。

〈遺　物〉

他の住居跡と同様貼瘤の入組文土器が主体をなす。

第9図1，2は同一個体である。口縁に突起をもち，口縁直下に入組文の施される文様帯をもつ。入組文自体は簡略化されたもので，入組部分は殆ど上下を結ぶ一本の沈線と化している。地文に使用された原体はＬＲである。**3**はやはり口縁に突起をもち，文様帯内に入組文の施されるものであるが，口縁と文様帯間に刻目帯が設けられている。**4**は貼瘤の施された破片であるが，瘤上には刺突がなされている。**5**は時期的に稍異なるものである。口縁に刻みが施され，口縁下の文様帯には，平行沈線間にＣ字状の刻目，点列等が充塡される。**6**～**19**，**21**，**22**は全面縄文の施された粗製の土器である。

イ．土壙

〈各土壙内出土遺物〉

第15図1は，大洞Ｂ式に比定可能な無文の注口土器である。全面横位のミガキが丹念に施されている。唯一の文様として注口部分を中心に渦巻状の浮彫文が描かれ，注口部に向う三又状陰刻が中に入れられる。**2**～**4**も同様大洞Ｂ式に比定できる鉢形土器である。**4**は口縁部に所謂Ｂ突起をもち，口縁部文様帯には入組三叉文が描かれる。胴部以下には撚りの緩いＬＲ原体が横位に回転押捺される。

5は口縁に突起をもち，平行沈線間に刻目の施されたものである。全体としては入組文の構

第1表　第1号土壙観察表

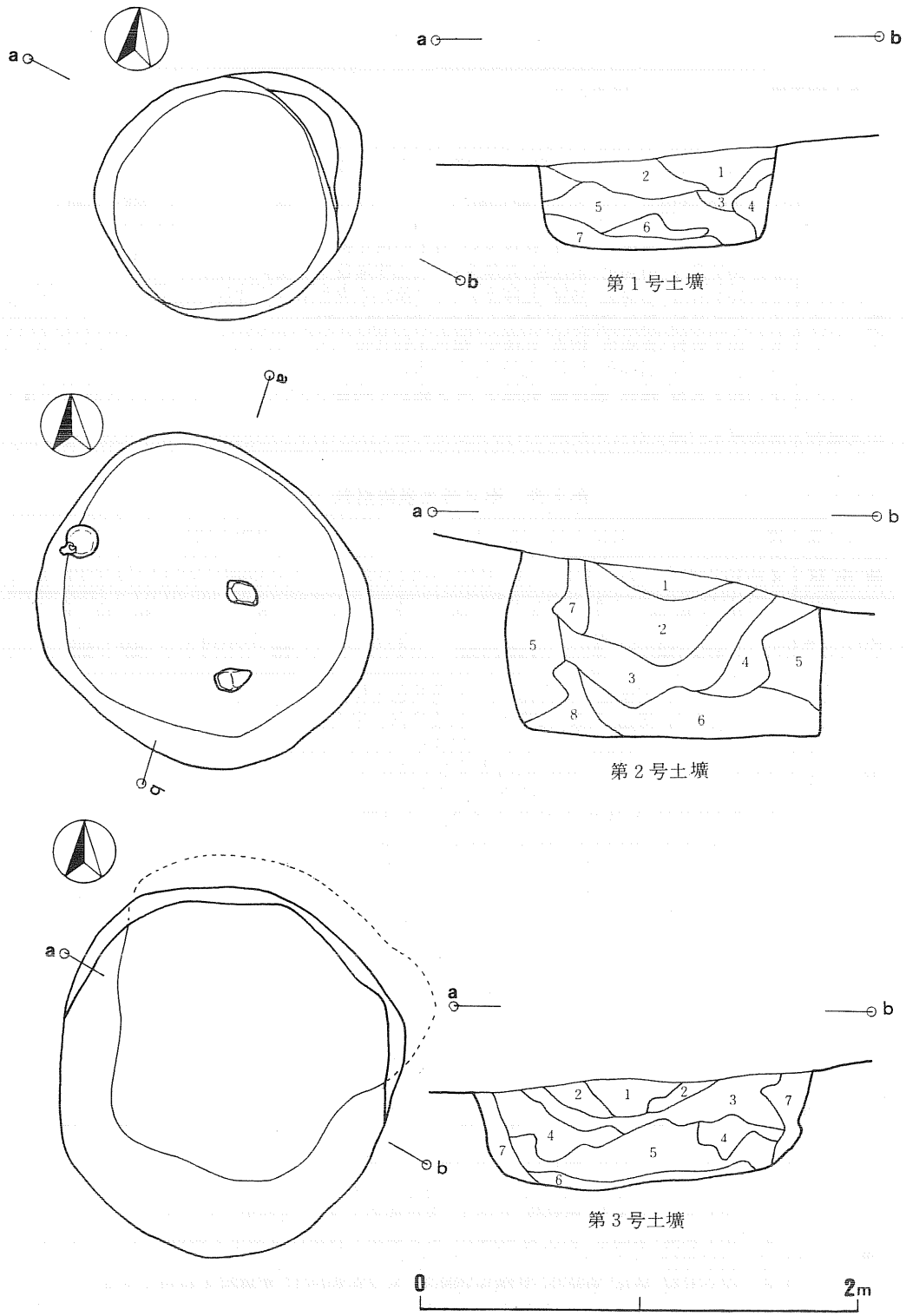
第1号土壙	挿図	10	図版	9
検出区	6－L			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	122×110	96×96	42	93°～100°
覆土	1．10YR3/3 暗褐色 粘質 孔隙少い 若干の炭化物混入 2．10YR3/4 暗褐色 粘性強 孔隙少い 炭化物褐色土粒僅かに含む 3．10YR3/4 暗褐色 粘質 孔隙多い キメ細かく褐色土多く含む 4．10YR4/4 褐色 粘質 孔隙多く僅かに暗褐色土含む 5．10YR2/3 黒褐色 粘質 孔隙少 褐色土粒含む 6．10YR3/4 暗褐色 粘質 孔隙多 キメ粗い 7．10YR4/6 褐色 粘性強 孔隙少 キメ細かく均質			
出土遺物	全面縄文の施された土器数片が出土している			

第2表　第2号土壙観察表

第2号土壙	挿図	10，15－1	図版	18
検出区	4－L			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	152×136	132×124	76	90°～91°
覆土	1．10YR3/3 暗褐色 粘質 孔隙少い 黄褐色土粒混入する 2．10YR4/4 褐色 粘質 孔隙多い 炭化物混入する 3．7.5YR3/4 暗褐色 粘性強い 孔隙多い 4．10YR2/3 黒褐色 粘質 炭化物褐色土粒混入 5．10YR4/4 褐色 粘質 孔隙多い 黒褐色土混入 6．7.5YR3/3 暗褐色 粘性強 孔隙多い キメ粗い 7．7.5YR2/3 極暗褐色 粘質 孔隙少ない 攪乱 8．10YR2/3 黒褐色 粘質 孔隙少ない 炭化物僅かに混入			
出土遺物	床面直上西側壁近くから注口土器(第15図1)が倒立した状態で出土している			

第3表　第3号土壙観察表

第3号土壙	挿図	10	図版	10
検出区	5－K，5－L			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	164×158	146×154	48	69°～128°
覆土	1．10YR3/4 暗褐色 稍粘質 孔隙比較的小 黄褐色土粒が混入する 2．10YR5/6 明褐色 粘性大 孔隙小 均質キメ細い 3．10YR2/3 黒褐色 稍粘質 孔隙大 炭化物若干含む 黄褐色土粒若干混入 4．10YR3/2 黒褐色 粘性大 孔隙小 キメ細かく僅かに黄褐色土粒の混入するものの均 5．10YR4/4 6．10YR4/4 褐色 粘性大 孔隙比較的大 キメ比較的大 黒褐色土粒混入する 7．10YR5/6 褐色 粘性 孔隙大 キメ荒い 明褐色 粘性大 均質であり底面黄褐色土へ漸移			



第1号土壙

第2号土壙

第3号土壙

第10図　第1号土壙～第3号土壙

第4表　第4号土壙観察表

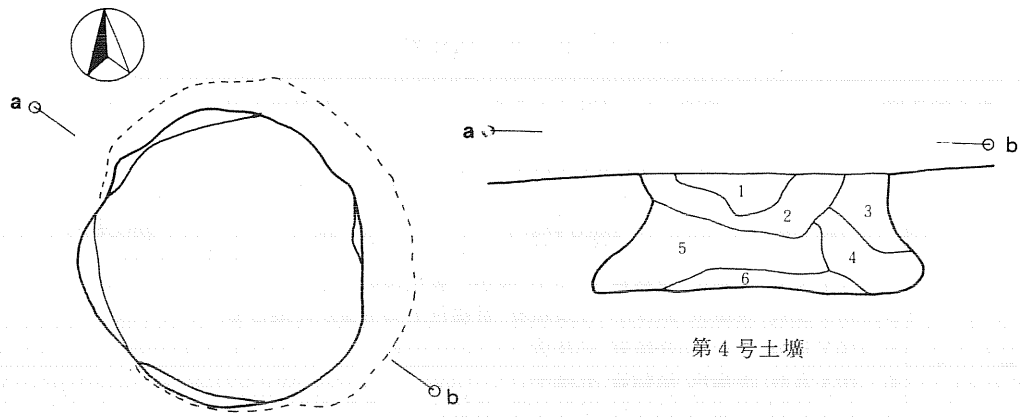
第4号土壙	挿図	11，15—(2～4)	図版	18
検出区	7—H，7—I			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	118×112	138×122	46	49°～52°
覆土	1．10YR3/3 暗褐色 稍粘質 孔隙小 僅かに炭化物を含む 2．10YR2/3 黒褐色 粘性小 孔隙稍有 黄褐色土粒子僅かに混じる 3．10YR4/4 褐色 粘性稍有 孔隙大 4．10YR3/2 黒褐色 稍粘質 孔隙小 5．10YR3/3 黒褐色 粘性弱 孔隙稍有 黄褐色土粒若干含む 6．10YR4/4 褐色 粘性大 孔隙稍有 黒色土粒 褐色土粒のまじったもの			

第5表　第5号土壙観察表

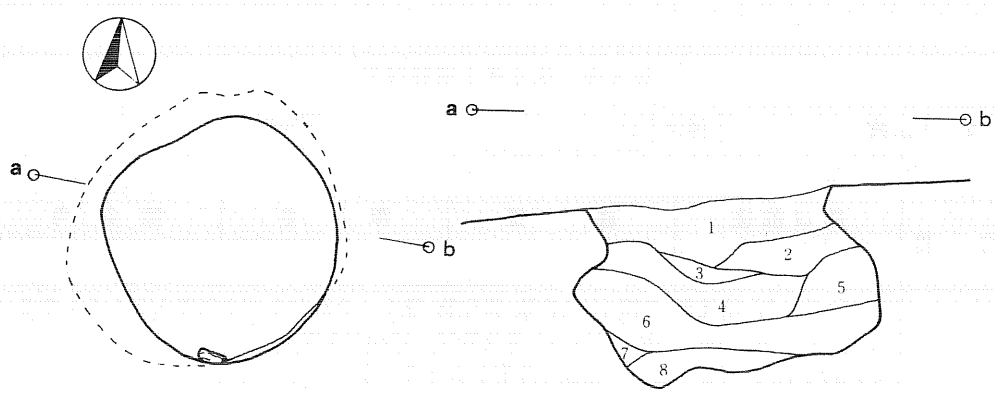
第5号土壙	挿図	11	図版	10
検出区	7—M			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	94×96	114×106	68	——
覆土	1．10YR3/4 暗褐色 孔隙小 粘性強 炭化物 径1～2㎜が1～2％混入かたくしまる 2．10YR4/4 褐色 孔隙中 粘性弱 炭化物10～12㎜が1％混入 3．10YR4/4 褐色 孔隙小 粘性やや有しまっている 4．10YR4/4 褐色 孔隙中 粘性やや有 炭化物3～4㎜1～2％混入 5．10YR3/3 暗褐色 孔隙小 粘性弱 比較的もろい 10YR4/6 褐色土が25～30％固状に混入 6．1CYR3/4 暗褐色 孔隙大 粘性弱 非常にもろい炭化物1～2％混入 7．10YR4/6 褐色 孔隙小 粘性強 8．10YR4/6 褐色 孔隙小 粘性強 非常にかたくしまって均質である			

第6表　第6号土壙観察表

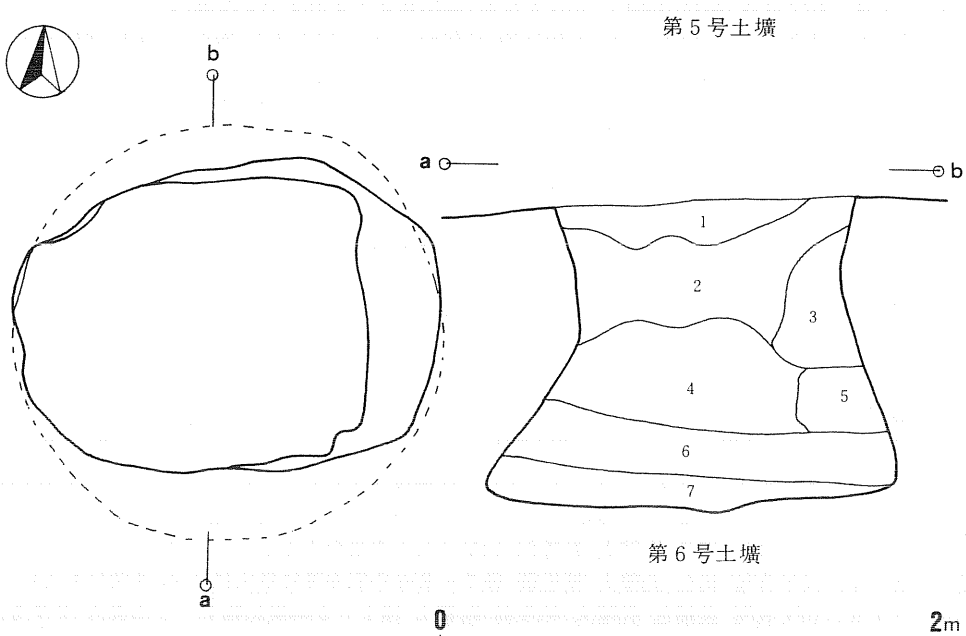
第6号土壙	挿図	11	図版	12
検出区	7—L，7—M			
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角
	169×120	170×164	124	54°～72°
覆土	1．10YR3/4 暗褐色 孔隙小 粘性強 炭化物径（5～6㎜）が1～2％混入 植物根混入 2．10YR5/6 黄褐色 孔隙中 粘性小 もろい径3～4㎜の石が混入 3．10YR4/6 褐色 孔隙大 粘性弱 10YR2/3の黒褐色土が2～3％混入 もろい 4．10YR4/6 褐色 孔隙大 粘性弱 径7～8㎜小石全体に混入に非常 非常にもろい 5．10YR5/6 黄褐色 孔隙大 粘性弱 砂質土 径1～2㎜炭化物1～2％混入 ややもろい 6．10YR3/4 暗褐色 孔隙大 粘性強 炭化物 5層とのさかいに部分的に混入 もろい			



第４号土壙



第５号土壙



第６号土壙

第11図　第４号土壙～第６号土壙

第7表　第7号土壙観察表

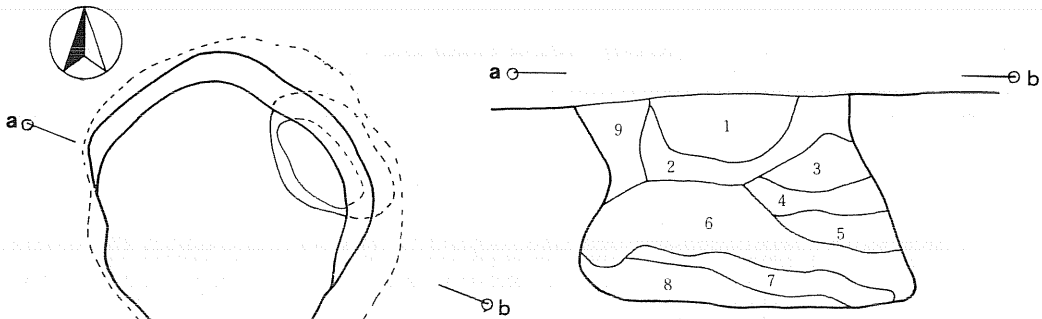
第7号土壙	挿　図	12，15―5	図　版	18
検出区	5―L			
法　量	開口部径	底　径	深　さ	傾斜角
	110×108	132×122	84	61～66
覆　土	1．10YR3/2 黒褐色 孔隙性小 粘質性やや強 炭化物(径5～7㎜)を1～2％含む 植物根を含む 2．10YR3/3 孔隙性少なく7.5YR4/6褐色土が塊状(径5～6㎝)に含まれる(フラスコピットの崩れたものと思われる)粘質性強 植物根を含む 3．10YR3/3 黒褐色 孔隙性が少ない 粘質性弱でボソボソした所も感じられる 4．10YR4/6 褐色 粘質性弱 孔隙性大 7.5YR4/4褐色土を50％含む(フラスコピットの崩れたものと思われる。 5．10YR3/2 黒褐色 粘質性弱 ボソボソしている 炭化物(径3～4㎜)を1～2％含む 6．7.5YR3/2 黒褐色 粘質性弱 径2～3㎜の粒子(礫土)層である 孔隙性大 炭化物(径4～5㎜)が3～5％含まれる 7．7.5YR3/2 黒褐色 孔隙性小 粘質性強で均質 8．7.5YR3/4 暗褐色 孔隙性大 粘質性中 径2～3㎜の粒子が全体に混入しており非常にもろい 9．7.5YR4/4 褐色 孔隙性小 粘質性ややあり 均質(フラスコピットの崩れたものと思われる)			
出土遺物	覆土中から後期後葉の土器片を出土している。			
備　考	底面東側に径60×40㎝，深さ10㎝程度のピットをもつ。			

第8表　第8号土壙観察表

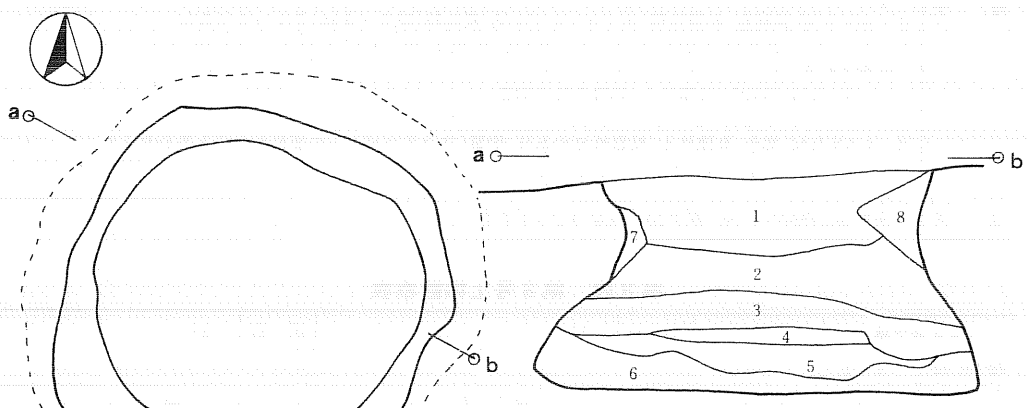
第8号土壙	挿　図	12	図　版	13
検出区	5―L			
法　量	開口部径	底　径	深　さ	傾斜角
	144×148	170×196	84	40°～53°
覆　土	1．10YR3/3 黒褐色 粘質性で孔隙やや有 炭化物黄褐色土粒若干混入 2．10YR3/2 黒褐色 粘質性で孔隙大 黄褐色土粒混入 一部かたくしまる 3．10YR4/6 褐色 粘質性でぼそぼそしている ロッムブロック混入 4．10YR3/3 暗褐色 粘質性でぼそぼそしている 黄褐色土粒混入 5．10YR3/2 粘質性でキメが荒い メが荒い 6．10YR3/4 暗褐色 粘質性 キメこまかい しまっている 7．10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質性 しまりかたい 8．10YR3/3 暗褐色 粘質性でキメ細かい 黒褐色土炭化物若干混入			

第9表　第9号土壙観察表

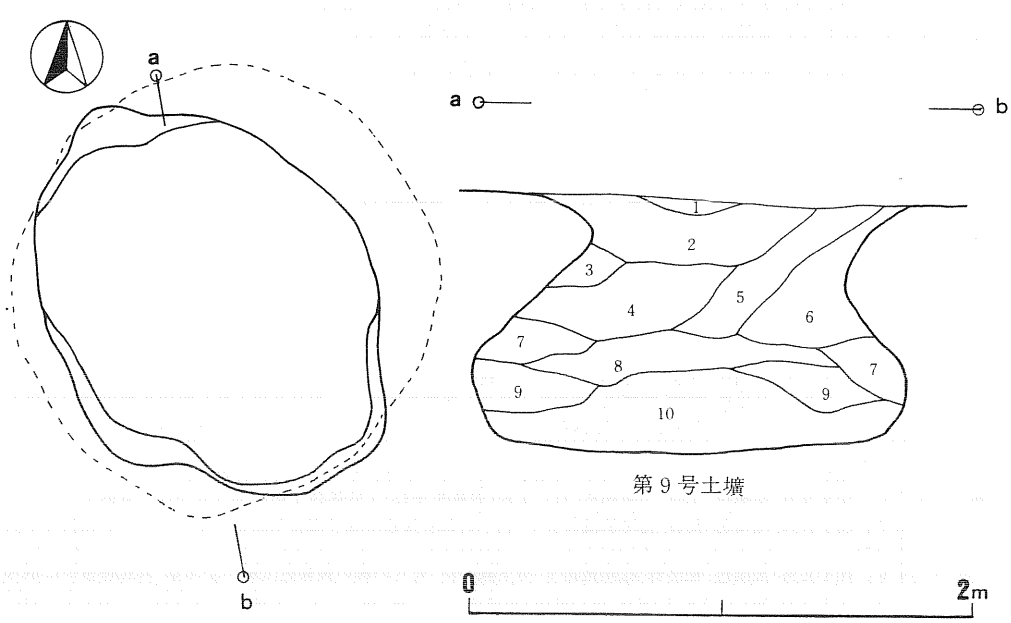
第9号土壙	挿　図	12，15―(6～9)	図　版	18
法　量	開口部径	底　径	深　さ	傾斜角
	174×130	168×168	100	44°～50°
覆　土	1．10YR3/3 黒褐色 稍粘質 孔隙小 耕作土からの沈下と思われる10～20㎜程度の礫を含む 2．10YR3/3 暗褐色 粘質 孔隙小 径2～7㎜程度のローム粒及び炭化物粒を含む 3．10YR3/4 暗褐色 粘質 孔隙大 黄褐色土粒子と暗褐色土粒子の混じり合ったもので土壙頸部の崩落土 4．10YR3/3 黒褐色 稍粘性 孔隙比較的小 1bに比較してキメ細く2～7㎜程度のローム粒炭化物粒を含む 5．10YR3/2 黒褐色 稍粘質 孔隙小 黄褐色土粒の混入が僅かなため全体に黒色に近く見える 6．10YR3/4 暗褐色 粘質 孔隙稍有 ローム粒(黄褐色土粒)と暗褐色土粒の混じり合った崩落土 7．10YR3/4 暗褐色 粘質 孔隙極端に多い ローム粒暗褐色土粒の混じり合ったものであり炭化物若干量含む 8．10YR3/3 黒褐色 粘性弱 孔隙稍あり キメ細かい キメの細い黄褐色土粒子が少量 炭化物僅かに混入 9．10YR4/6 褐色 粘質 孔隙大 殆ど地山(土壙掘り込み層)土のブロック僅かに暗褐色土が混じる 炭化物極僅かに混入 10．10YR3/2 黒褐色 粘質弱 孔隙稍有 炭化物が僅かに混入する			



第７号土壙



第８号土壙



第９号土壙

第12図　第７号土壙～第９号土壙

第10表　第10号土壙観察表

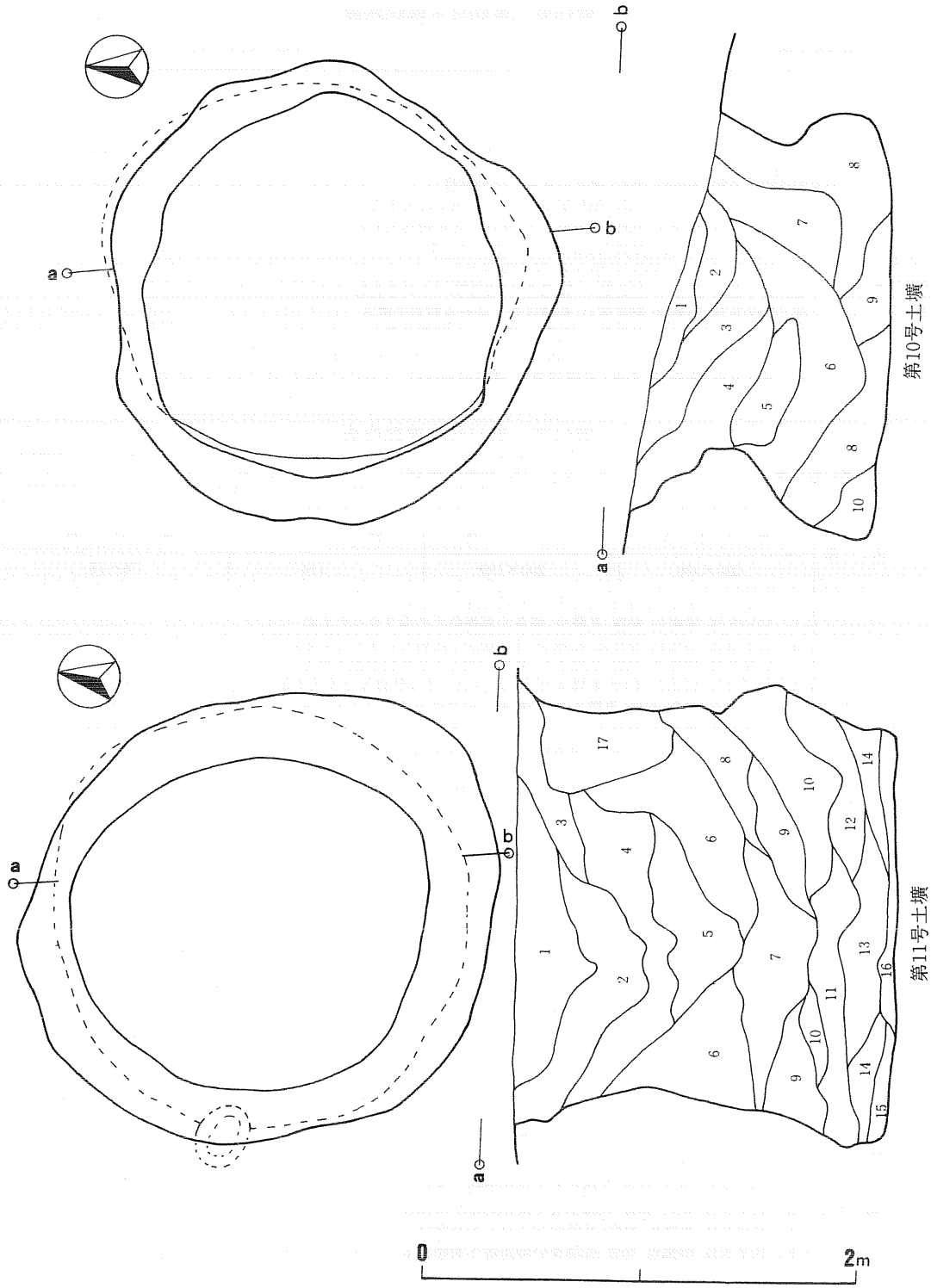
第10号土壙	挿　図	13	図　版	14
検出区	4－L			
法　量	開口部径	底　径	深　さ	傾斜角
	210×204	196×172	100	36°～45°
覆　土	1．10YR2/2 黒褐色 粘質 硬くしまっていて均質 2．10YR2/3 黒褐色 粘質 稍孔隙がある 炭化物を混入する 3．10YR3/4 暗褐色 粘質 孔隙がある 僅かに炭化物混入する 4．10YR3/3 暗褐色 粘質 孔隙は少くしまっている 5．10YR4/6 褐色 粘質 孔隙ある 壁の崩落土？ 6．10YR2/3 黒褐色 粘性強い 孔隙あり 炭化物パミスを含む 7．10YR3/3 暗褐色 粘性強い 孔隙は少くローム粒若干混入 8．10YR2/2 黒褐色 粘性強い 孔隙あり ローム粒若干混入 9．10YR3/4 暗褐色 粘性非常に強く孔隙は少い 多量のローム混入 10．10YR4/6 褐色 粘性弱く孔隙は多い 非常にもろい			

第11表　第11号土壙観察表

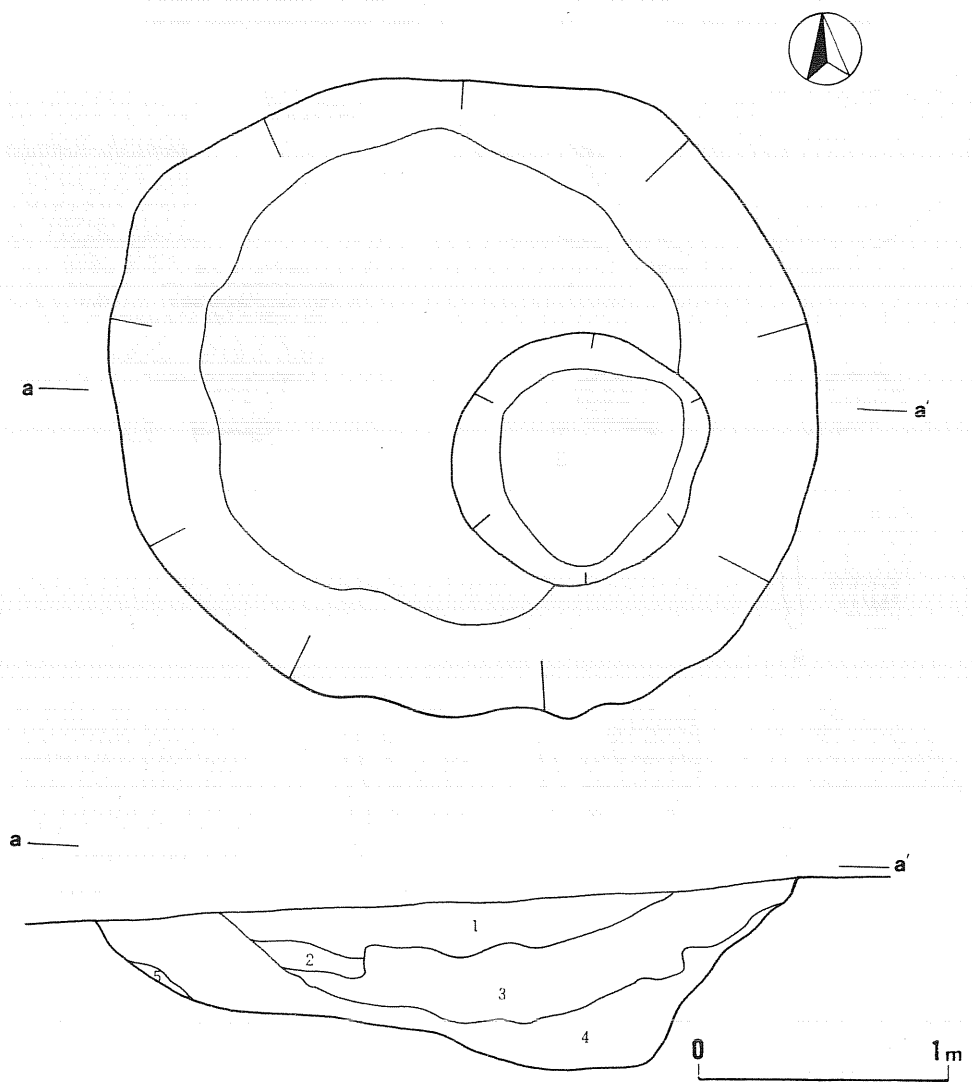
第11号土壙	挿　図	13，15―(10～18)	図　版	18
検出区	7－N，8－N			
法　量	開口部径	底　径	深　さ	傾斜角
	230×206	200×190	174	76～77
覆　土	1．10YR2/1 黒色 粘質 孔隙は少い 細礫を僅かに含む 2．10YR3/3 暗褐色 粘質 孔隙少 褐色土黒褐色土の混り合ったもの 3．10YR3/4 暗褐色 粘性強 孔隙少 キメ細かく比較的しまっている。 4．10YR3/4 暗褐色 粘質 孔隙あり 色調稍明るく炭化物が混入する 5．10YR3/4 暗褐色 粘質 孔隙あり 色調は暗い 炭化物僅かに混入する 6．10YR4/6 褐色 粘性 孔隙あり 暗褐色土がブロック状に混入する　質 7．10YR3/4 暗褐色 粘性強くよくしまっている 8．10YR3/2 黒褐色 粘質 孔隙多い 炭化物少量混入 9．10YR4/6 褐色 粘質 孔隙少なくよくしまっている 10．10YR3/2 黒褐色 粘質 孔隙多く炭化物少量混入 11．10YR4/6 褐色 粘質 孔隙小 よくしまったブロック状部分と孔隙の多い部分に分けられる 12．10YR3/3 暗褐色 粘質 孔隙多い 褐色土粒混入 13．10YR3/2 黒褐色 粘質 孔隙多い 14．10YR4/6 褐色 ブロック状であり暗褐色土が隙を埋める 15．10YR4/6 褐色 孔隙は多いが均質である 16．10YR2/3 黒褐色 粘質で孔隙多い 炭化物多く混入 17．10YR4/6 褐色 壁面の未崩落土			
出土遺物	全面縄文の施された土器片が出土している（第　図10～18）			

第12表　第12号土壙観察表

第12号土壙	挿　図	14，15―(19～20)）	図　版	
法　量	開口部径	底　径	深　さ	傾斜角
	284×248	190×180	52	124°～149°
覆　土	1．10YR2/2 黒褐色 粘質 孔隙少なく少量のパミスを含む 2．10YR3/4 褐色 粘質 孔隙少なく炭化物極く僅かに含む 3．10YR2/1 黒色 粘質 孔隙少なく炭化物僅かに含む 4．10YR2/3 黒褐色 粘質 孔隙少なくパミスを含む 5．10YR2/4 暗褐色 粘質 孔隙多い地山層へ漸移する			
出土遺物	第4層中から全面縄文の施された破片を出土			
備　考	底面・壁面とも軟弱である。底面東側に径87×100cm，深16cm程のピットをもつ			

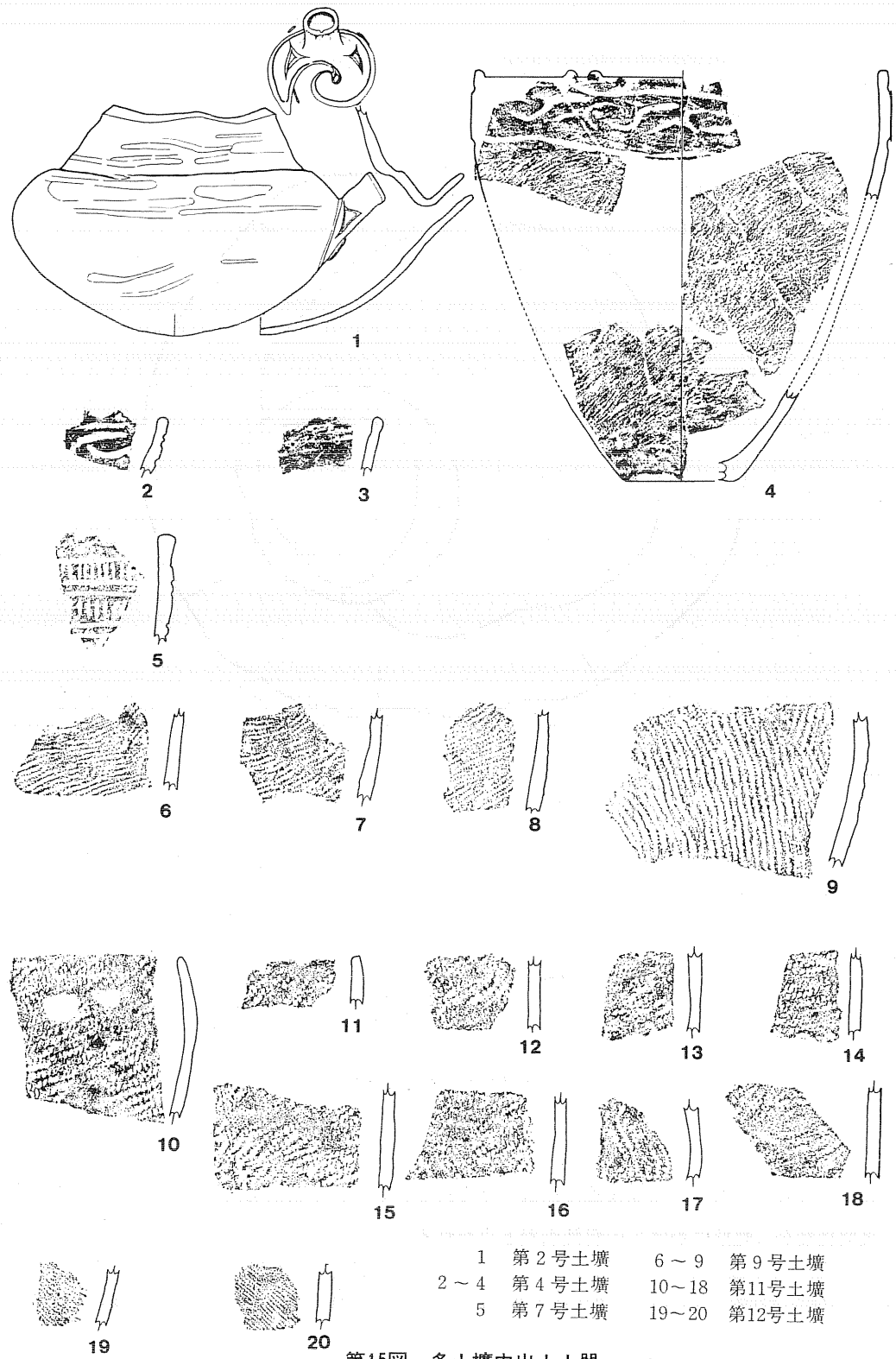


第13図　第10号土壙～第11号土壙



第14図　第12号土壙

図をとるものであり，後期後葉に位置づけられる。6～20は全面縄文の施された破片であり，後期後葉から晩期にかけての粗製土器と思われる。



1　第２号土壙　　6～9　第９号土壙
2～4　第４号土壙　　10～18　第11号土壙
5　第７号土壙　　19～20　第12号土壙

第15図　各土壙内出土土器

0　10cm

ウ．埋設土器遺構 **（第16図，第17図）**

第１号住居跡南側　４－Ｈで検出された。

２個の埋設土器とも押潰された状態で確認された。

ＳＸ(U)01：全体の⅓程度が欠失した状態で検出された。断面では，押潰されて大きく開いた形状を呈する。埋置のためのピットは殆ど浅くしか掘り込まれておらない。覆土は，色調10ＹＲ⅔暗褐色を呈し，下部では地山層に漸移する。

土器は，口縁に12単位の突起をもち胴部半ばに屈曲部をもつ鉢形土器である。口縁の突起は，山形のものと頂部が二叉に分かれるものとが６単位づつ交互に配置され，突起下に沿って刻目帯がめぐる。文様帯は，胴部半ばの屈曲部を境として上段と下段に分かれるが，上段では刻目，下段では縄文による入組文が描かれる。いづれも無文部分にはミガキが施されているが，沈線自体の描き方は非常に粗雑である。縄文はＬＲ原体を使用している。

ＳＸ(U)02：口縁部から胴部上半にかけての破片が，胴下半の破片と重なるように沈下している。特に南側の胴下半部は大きく内側に陥没している。埋置するために用いられたピットは埋設土器と殆ど同じ程度の規模しかもっておらない。ピット内の覆土は色調10ＹＲ¾暗褐色を呈し，粘質で僅かながら炭化物を含む。

土器は，口縁部に８単位の３個１組の突起をもつ鉢形土器である。各突起頂部は二叉に分かれる。文様帯には平行沈線と刻目によって入組文が描かれるが，左傾する入組文の各入組部分は口縁部突起と対応する位置に設けられる。胴部はＲＬ原体が横位に回転押捺されるが，底部近くの７cm程は無文となる。底部はその中心で１cm程抉り取られ極端な上げ底を呈する。

エ．配石遺構 **（第18図，第19図）**

〈確認状況〉

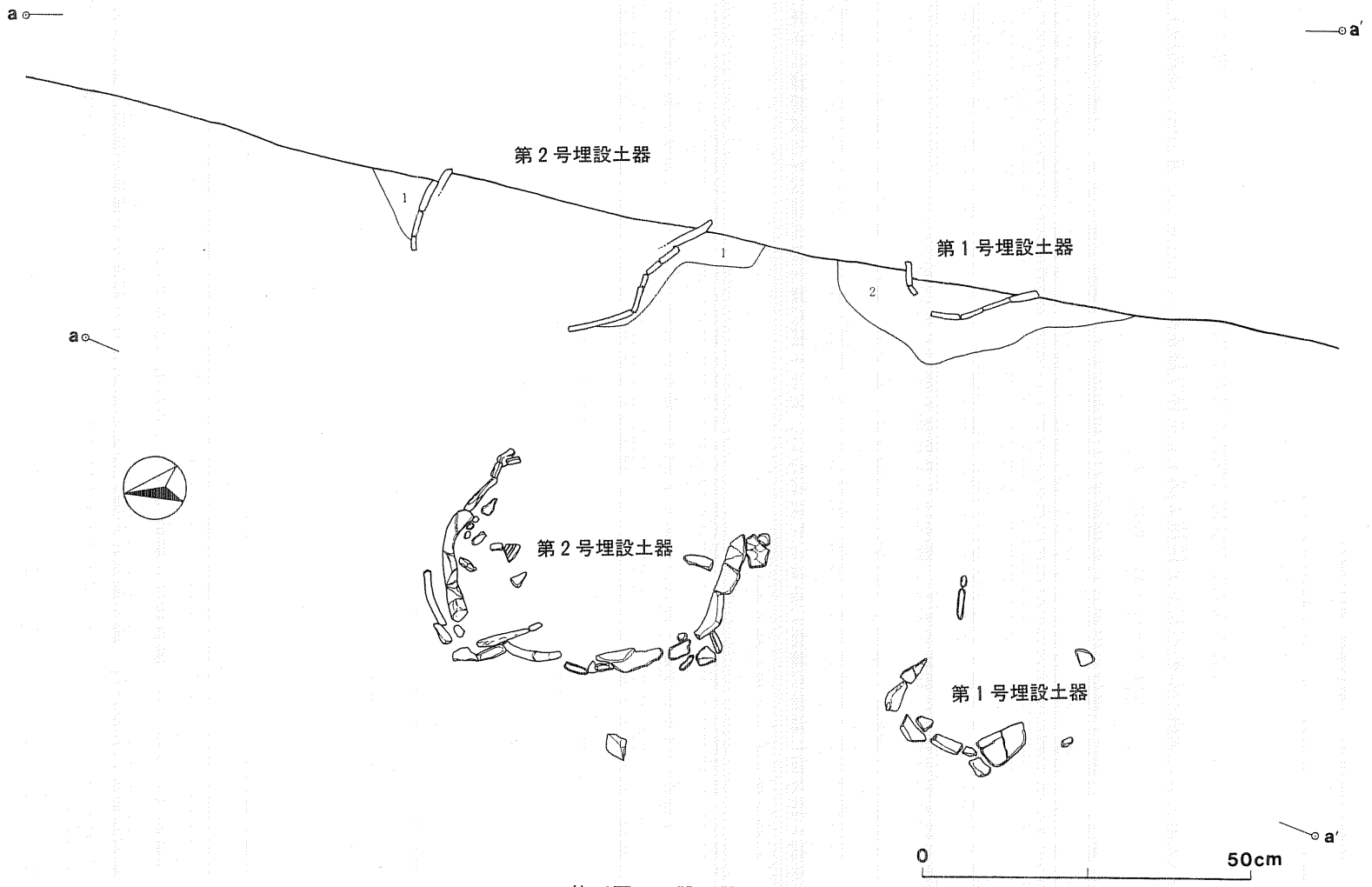
調査区のほぼ中央10－Ｊ，９－Ｊで確認された。

環状に礫を配した礫のまとまりと，その外周を弧状に囲むように配された10数個の礫からなる。中央部に位置するまとまりは長径が250cm前後，短径が190cm前後の範囲に礫の配されたものであるが，外縁に比較的長大な礫を並べた後，内部に扁平な礫を西側から重ねるように立てて充塡している。

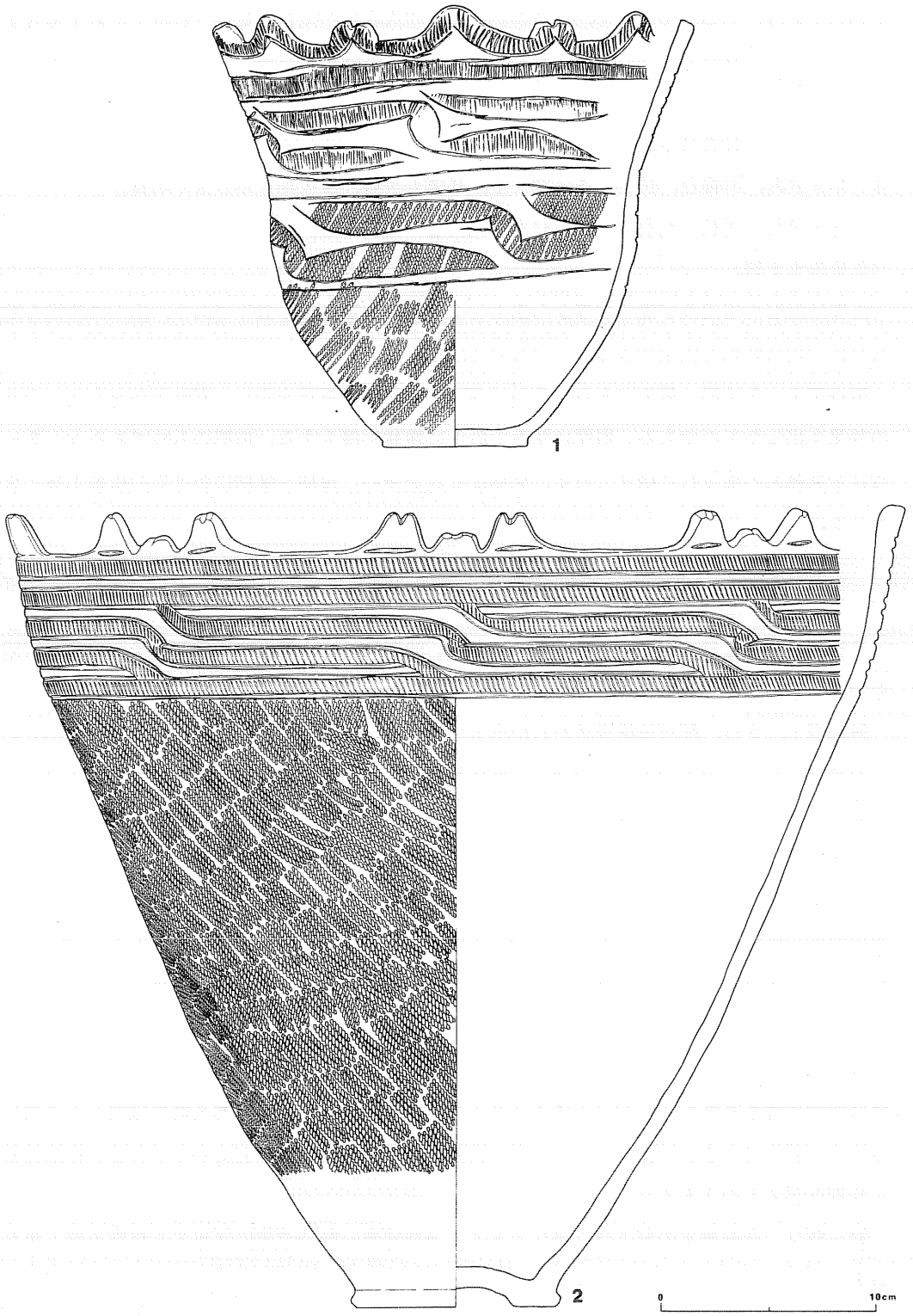
外周を囲む礫は，中央部に位置する礫のまとまりの東側の東側に弧状に配されており，西側では確認されなかった。礫自体は比較的大きいものが用いられている。

配石を取除いた後には，礫が置かれた浅い窪みが認められた程度で土壙等の施設は検出されなかった。

配石の覆土註記は以下の通りである。



第16図　埋設土器遺構



第17図　埋設土器

1．10ＹＲ$^{2}/_{1}$，黒色，粘性弱く，孔隙多い，粒径の大きいパミス（径７～10㎜）が若干量含まれる。耕作によると思われる有機物の混入も甚しい。

2．10ＹＲ$^{3}/_{2}$，黒褐色，粘性弱く，孔隙も多い。粒径の小さいパミス（径３～５㎜）が若干量含まれる。

3．10ＹＲ$^{3}/_{2}$，黒褐色，粘質，キメ細かく，孔隙も少い，混入物も殆どなく均質。

4．10ＹＲ$^{4}/_{4}$，褐色，粘質，孔隙少なく，地山層へ漸移する。

〈周辺出土土器〉

土器は配石の周辺及び礫の間等から出土している。土器は全て破片であり，出土の状況も配石自体の構築時期を決定できるようなものではない。

第19図１，２は同一個体である。Ｒ$\left\{\begin{matrix}L\\L\\L\end{matrix}\right.$と思われる多条の原体を用い，回転方向を変えて羽状の効果を出したものである。器厚は厚手で胎土に繊維を混入する。前期のものであろう。**３～12**は全面縄文の施された破片である。原体はＬＲが多い。後期～晩期にかけての粗製土器と思われる。

オ．遺構外出土遺物

遺構外からの遺物出土量はそれ程多くはない。時期的には，縄文時代前期，後期前葉，後期中葉に大きく分けられる。

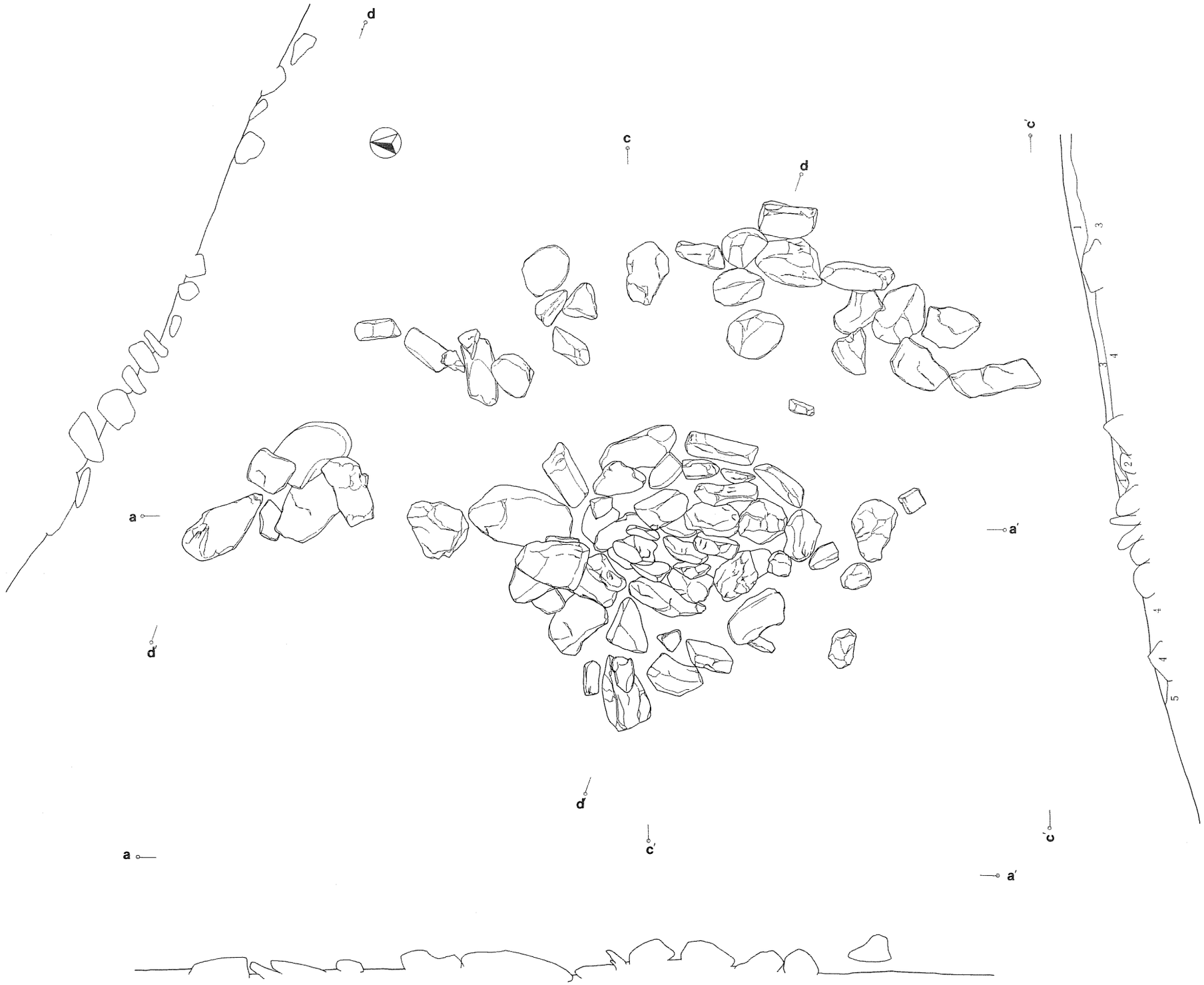
第20図１，２は，配石遺構周辺からの出土であり**第19図１，２**と同一個体である。**３**はトレンチ調査区からの出土である。全面ＬＲ原体が横位に回転押捺される。胎土には繊維が含まれており，**１，２**同様前期のものであろう。

４～11は，地文としての縄文が施された後に比較的太い沈線で，平行沈線文，曲線文が描かれたものである。後期前葉に位置すると思われる。**12，13**は，無文地の上に２本１組の沈線で幾何学的な文様が描かれている。沈線間は微隆帯となる。十腰内Ｉ式に比定される。**14，15**は地文として細かなＬＲ原体が回転押捺された上に，細い沈線によって平行沈線文の描かれたものである。やはり後期前葉に位置すると思われる。

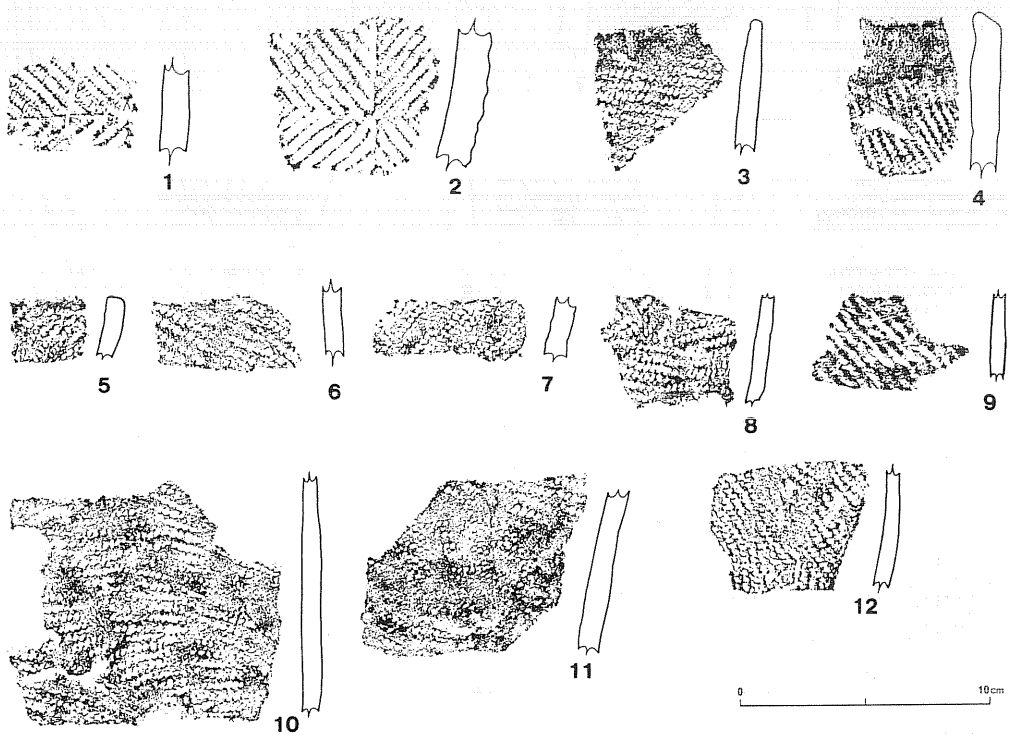
16～22は，住居跡等からの出土しているのと同様の入組文の施された土器である。入組文中には縄文の施されたもの，刻目の施されたものがある。**23**は無文の壺形土器口縁部から頭部にかけての破片である。口縁上には，山形の突起が付され突起上には刺突がなされる。後期後葉～晩期前葉のものであろう。

24～33は，全面縄文の施された破片である。後期後葉～晩期前葉に伴出する粗製土器と思われる。

34は，トレンチ調査区内で出土したヘラ状石器である。頁岩を素材として両面が丹念に剝離

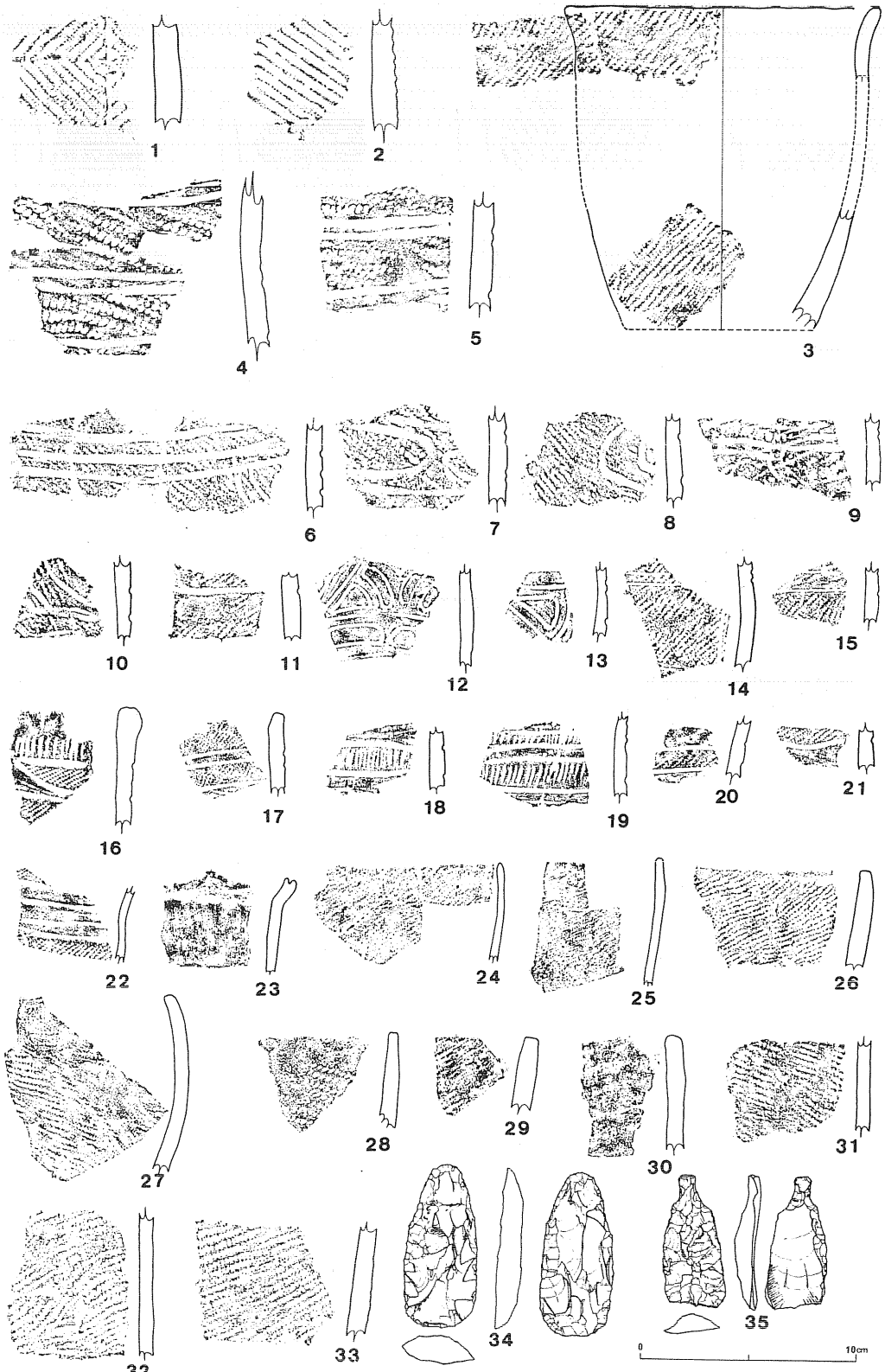


第18図　配石遺構



第19図　配石遺構周辺出土土器

され，母岩からの第１次剥離の際の主要剥離面は残っていない。35もやはりトレンチ調査区内で出土した石匙である。やはり頁岩を素材としている。つまみ部分には第１次剥離の際の打面が残り，左側縁及びつまみ部分のくびれには背面からも調整剥離が施される。



第20図　遺構外出土遺物

6．まとめ

案内II遺跡からは，住居跡，土壙，埋設土器遺構及び配石遺構等が検出されている。これら遺構は台地上部の平坦面ではなく，南及び南西側に面した緩斜面上に検出されたものである。

配置図が示すように，4棟の住居跡は半径10m前後の円弧上に載る形で配置されているが，これは住居跡の占地する台地地形，即ち図面上で見る等高線に沿ったものではない。4棟の住居跡を通る円弧は，むしろ等高線に交わる形で引くことができる。また，案内II遺跡で検出された遺構の中で数量的に大きな比重を占める土壙は，第1号～第3号，第7号，第8号，第10号の6基からなる群と，第5号，第6号，第9号，第11号の4基からなる群という2つの群に分かれて，住居跡を通る円弧の外側，西側のより下位の斜面上に存在する。

このような遺跡における住居跡の占地形態を，県内の他の遺跡について比較のため見てみたい。能代市杉沢台遺跡は，縄文時代前期の大型住居跡4棟を検出した遺跡であるが，大型から小型のものまで計44棟の住居跡，ほぼ同時期とされる108基のフラスコ状土壙を検出している。杉沢台遺跡の調査区は北東へ向う台地とその斜面が選定されているが，4基の大型住居跡は台地の中央寄りに，他の中型・小型の住居跡は台地縁辺部に，フラスコ状土壙は斜面上に位置している。4棟の大型のものを除いては台地縁辺部に住居跡が並ぶため，住居跡全体の配列は弧状を呈する。

また，男鹿市大畑台遺跡は，縄文時代中期の住居跡51棟，フラスコ状土壙10基を検出しており，計6基の変遷が考えられている遺跡である。遺跡の調査区は舌状に張り出した台地1つが選ばれており，各期の住居跡はほぼ台地縁辺に環状に近い形で配列されている。フラスコ状土壙は6期のうち前半期に限られるが，主に住居跡の並ぶ円周の外側，南東側の縁辺部に群をなして存在している。

案内II遺跡の場合はどうであろうか。前述したように案内II遺跡の4棟の住居跡は等高線に沿った配置がとられていない。つまり，地形に応じての住居の占地が行われてはいない。そして，遺跡の立地する台地全体の中にあって，住居跡の配置から求められる面的拡がりとしての空間の割合は極く小さなものとなっている。このような住居跡の占地形態では，台地全体で住居の密集空間がその内と外を画することなく，したがって「広場」的な空間が形成されることもない。

縄文時代の住居跡は，概して舌状に張り出した台地縁辺部で検出されることが多い。したがって住居跡の配置自体は台地の形状に応じて弧状，馬蹄形，環状といった形をとることになる。さらに，このような住居跡の配置がとられると，同一の台地（1つの集団の共通の生活領域の

核的存在と考えることも可能である）の中で住居の密集する空間とそうではない空間とが生まれてくる。そして住居跡の検出される遺跡にあって，後者のような空間は「広場」とい概念が与えられ，集団の構成員が共用しうる空間とする見方がある。そうした考え方に立脚した場合，杉沢台遺跡，大畑台遺跡とも地形に応じてそれぞれ弧状，環状といった形で住居跡の密集する空間が形成され，それに囲まれた住居の非密集空間として前者では4棟の大型住居跡，後者では文字通りの「広場」的な遺構の存在しない空間が形づくられているのである。

しかし，このような「広場」的な空間の形成にはある程度の長期的な台地の利用を前提としている。大畑台遺跡の場合はⅥ期の変遷があって成立しており，杉沢台遺跡の場合も6期の変遷が認められている。翻えって案内Ⅲ遺跡の場合には出土する遺物から見る限り，長期に亘って台地が利用されたとは考えにくく，時期は縄文時代後期後葉の一時期に限定することができる。したがって確認された住居跡も少なく，占地する空間も狭少なものに限られていると思われる。一つの可能性として留めておくが，案内Ⅱ遺跡の4棟の住居は同時に存在した単位として認識し得ると思われ，その単位が何時期かを経ることにより最終的には杉沢台，大畑台のような住居の占地形態に発達すると考える。即ち，検出された4棟の住居跡は縄文時代後期後葉に営まれた1つの単位であり，このような単位が，何期かを経て後に地形に即応した住居跡の配置をもって検出されるようになると思われる。無論，縄文時代遺跡の住居跡群の形成には様々なパターンがあり，弧状，馬蹄形，環状の配置をとる遺跡であっても，案内Ⅱ遺跡から推測されるように結果として「広場」的空間が作られる場合と，遺跡が生活の場として選定された当初から「広場」的空間を作りながら住居跡の数を増す場合等々あろう。また，時期的な特徴が住居群の占地形態に表われる場合も考え得る。

いづれ遺跡に於ける住居群の占地形態という現象は，その背後にある遺跡を担った人間集団を考える時大きな手掛りとなり得るものであろうし，そうした問題を含めて今後課題としてゆきたい。

付

本遺跡第１号住居跡（コードＳＩ003），第10号土壙（コードＳＫ(f)018）出土炭化物の^{14}Ｃ測定を日本アイソトープ協会に依頼した。結果は以下の通りである。

測定結果報告書

昭和56年１月23日に受取りましたＣ―14試料の測定結果がでましたのでご報告します。

Ｎ―4135	ＴＷ19　ＳＫ(f)018	2800±80yB.P.（2720±75yB.P.）
Ｎ―4136	ＴＷ19ＳＩ003	2980±80yB.P.（2900±80yB.P.）

年代は^{14}Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され，西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は，放射線計数の統計誤差と，計数管のガス封入圧力および温度の読取りの誤差から計算されたもので，^{14}Ｃ年代がこの範囲に含まれる確率は約70％です。この範囲を２倍に拡げますと確率は約95％となります。なお^{14}Ｃ年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。（御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。）

調査参加者

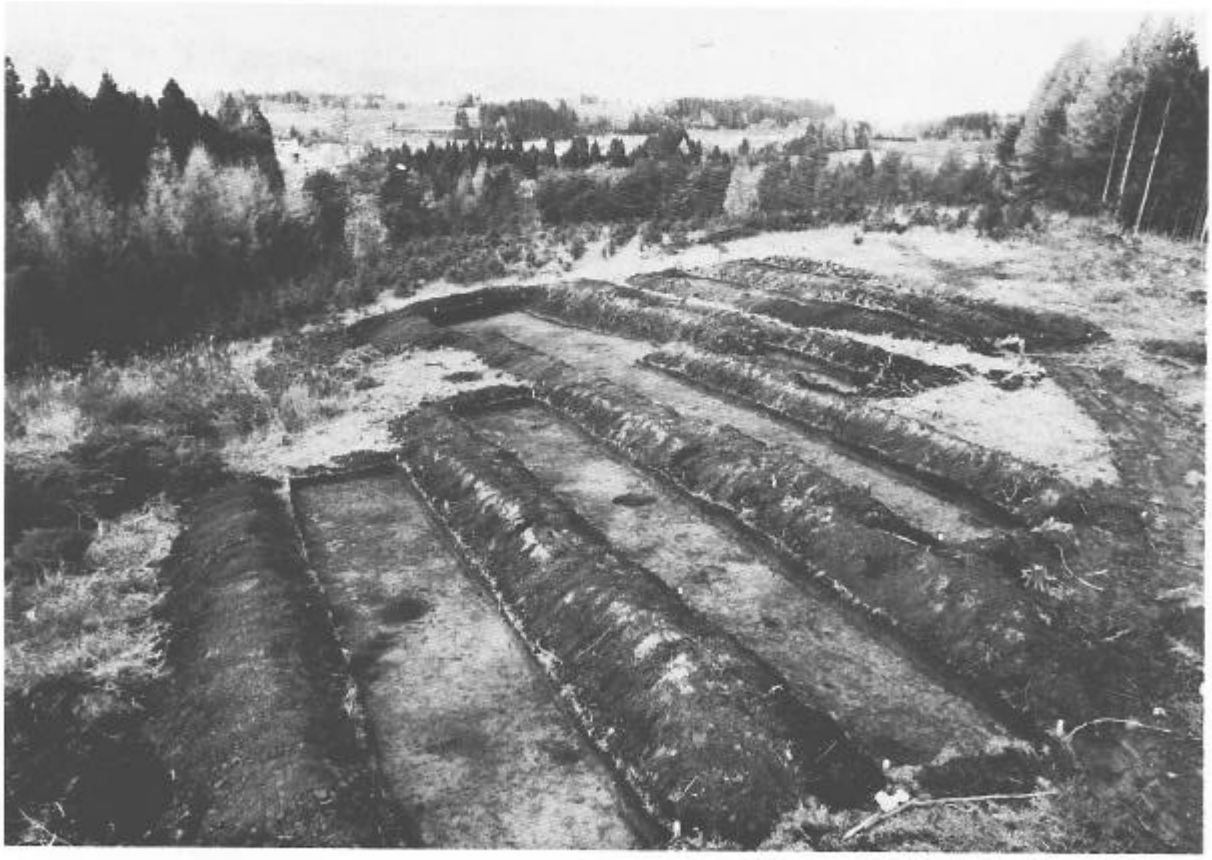
畠山　末治　　神田　良勇　　井上　政治　　奥村　一三　　梅戸　正次郎　　川又　秀也
川又　武司

豊田　よ里　　浅石　恵留子　　相川　金子　　川又　ヤエ　　鬼沢　キヨエ　　奥村　初恵
中西　リチ　　相川　リヨ　　賀川　政子　　石鳥谷　妙子　　柳沢　ヤス　　三ヵ田　孝子
田中　ヨシエ　　作山　ミエ　　苗代沢　ノブ　　津江　和子　　金沢　ハルエ
小田島　礼子　　畠山　陽子　　阿部　シガ　　小田島　キク　　斉藤　キクエ
浅石　タミ　　井上　トミエ　　工藤　スミ　　工藤　キヌ　　工藤　イツ　　阿部　シマ
佐藤　キエ　　松岡　トキヨ　　高畑　サキ　　阿部　シモ　　三上　美子　　三上　トヨ
柳沢　ヤス　　安保　柳

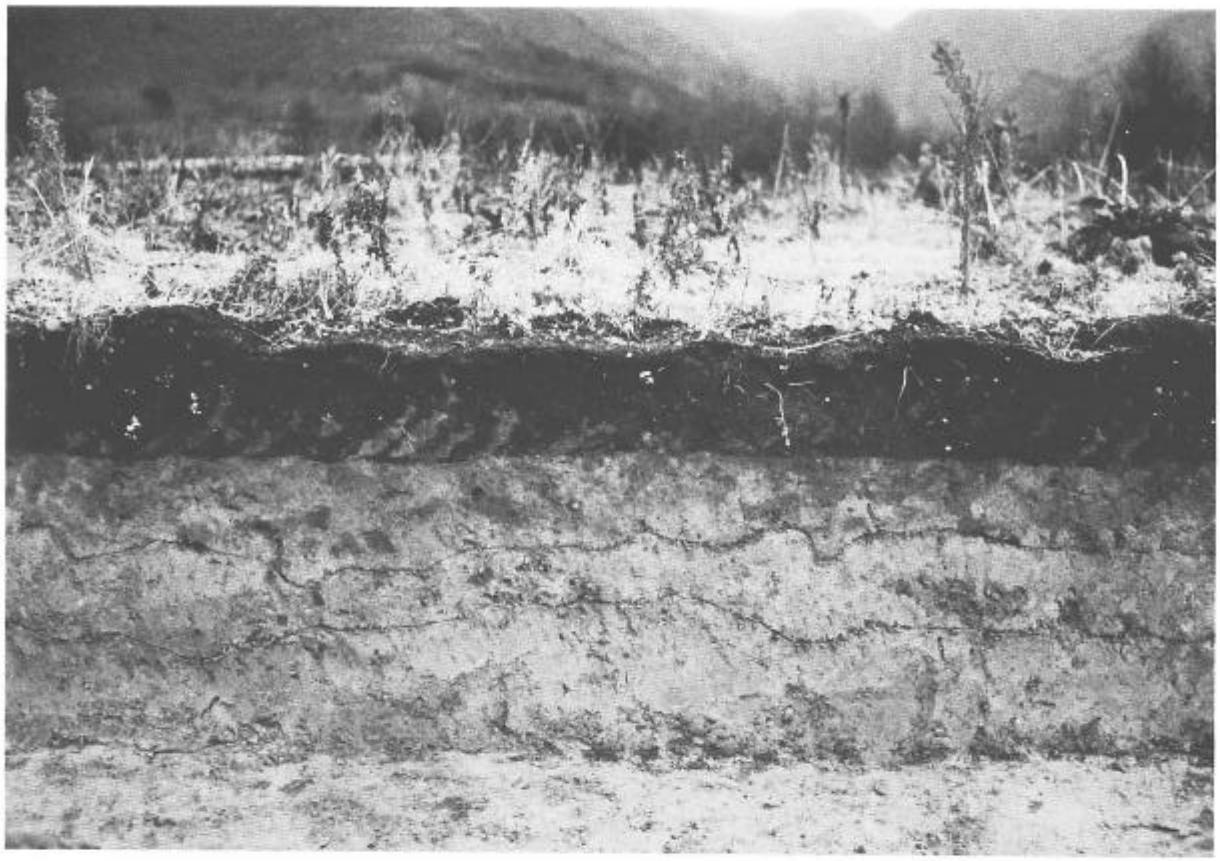
遺跡遠景

図版 1　　遺跡近景

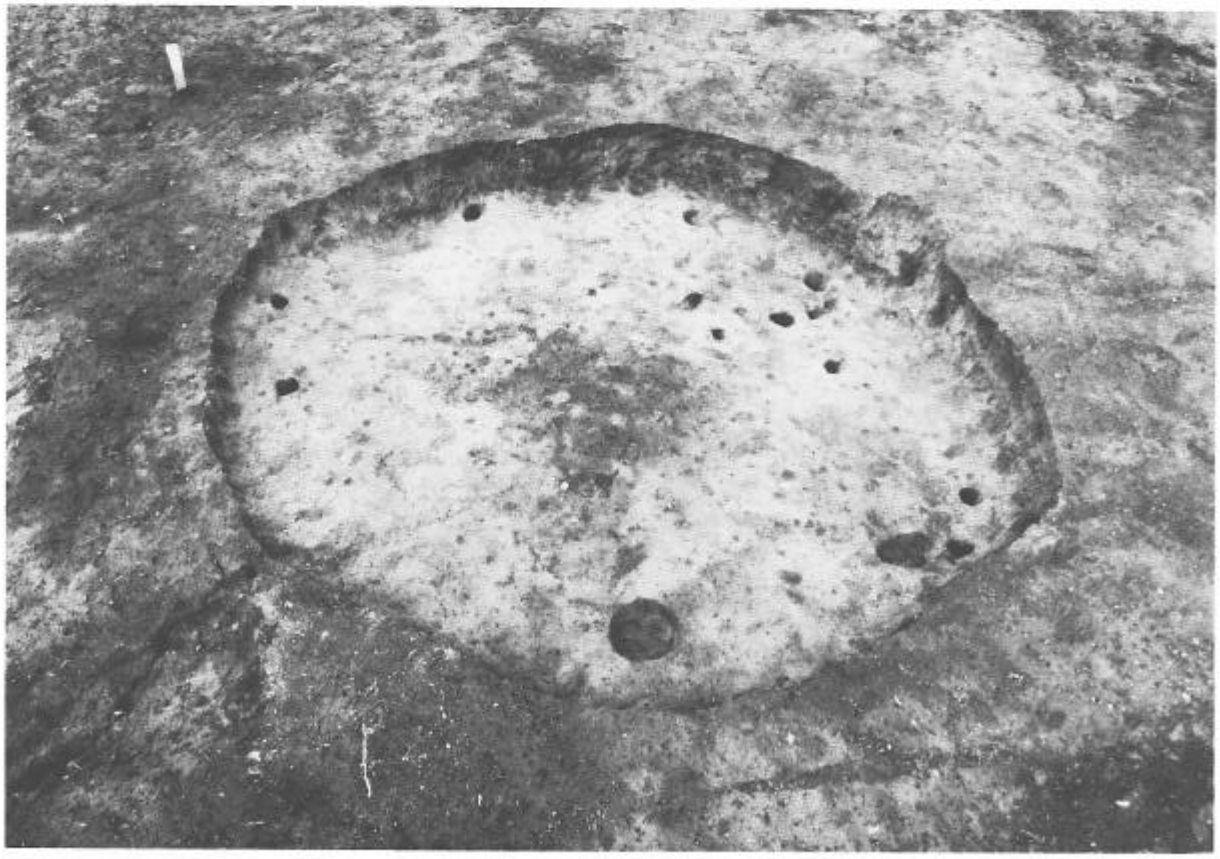
遺跡全景



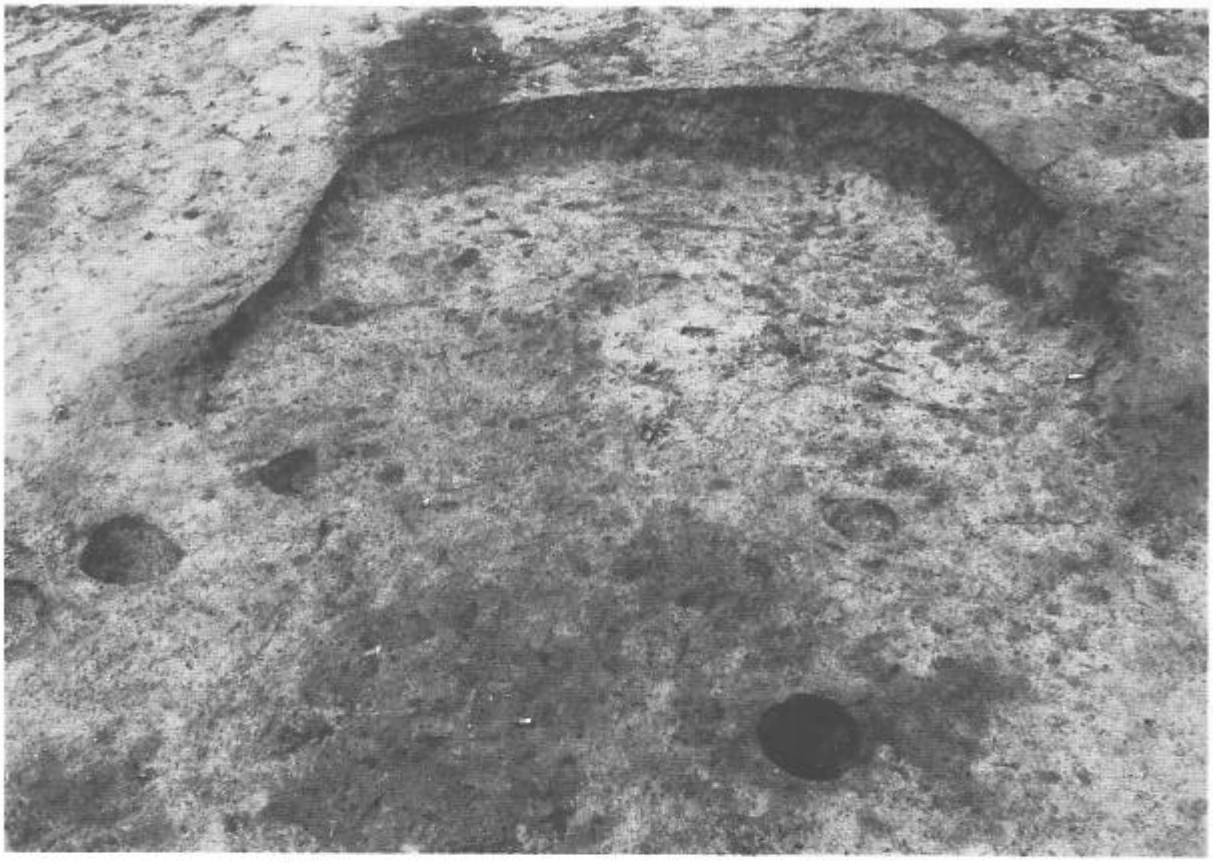
図版 2　　トレンチ調査区



遺跡層序



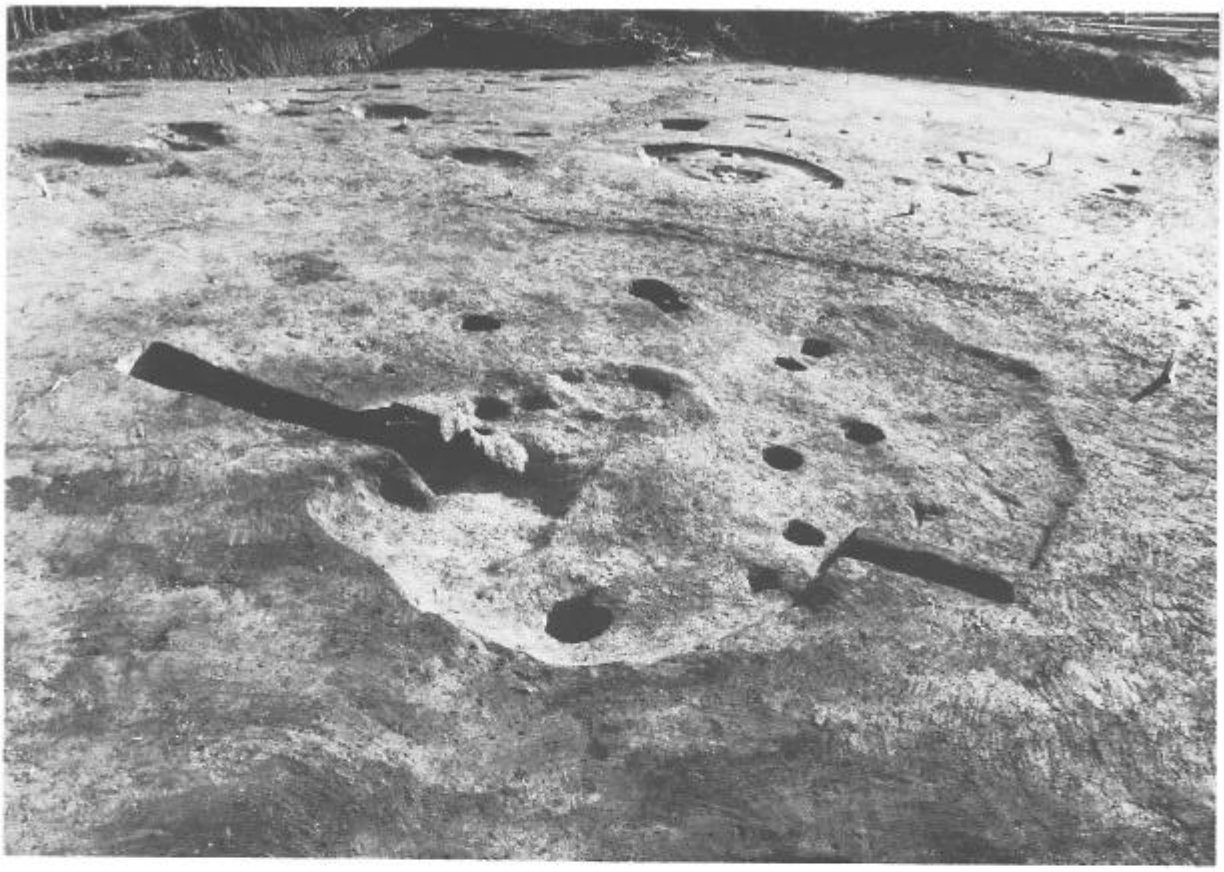
図版 3　　第 1 号住居跡完掘状況



第2号住居跡完掘状況

図版4

第3号住居跡完掘状況



第4号住居跡完掘状況

図版5　　第4号住居跡内遺物出土状況

土器埋設遺構

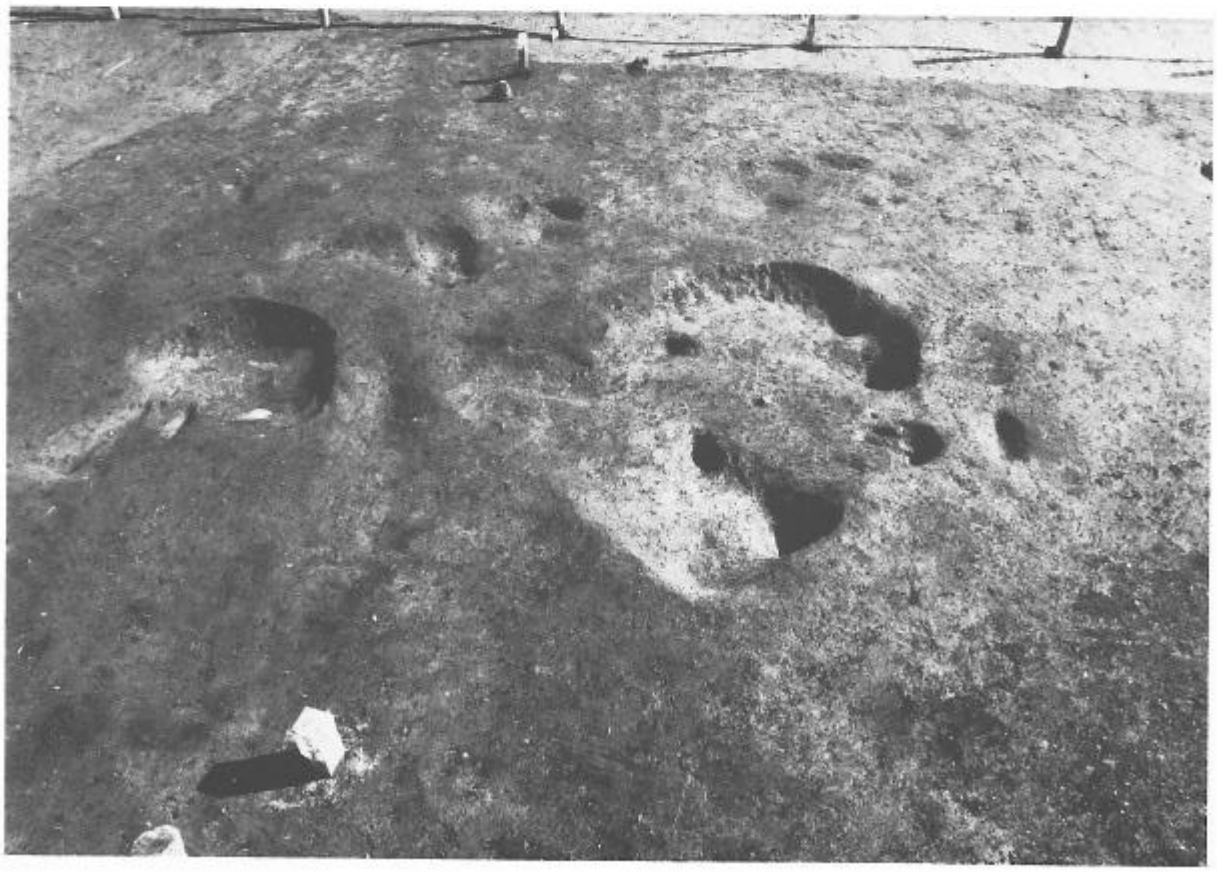
図版 6　　同断面

配石遺構

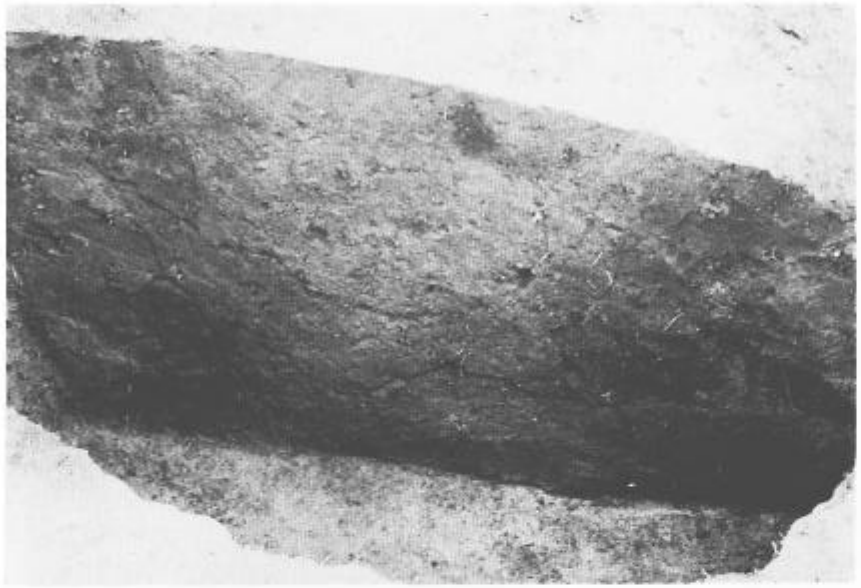
図版 7

配石遺構近接

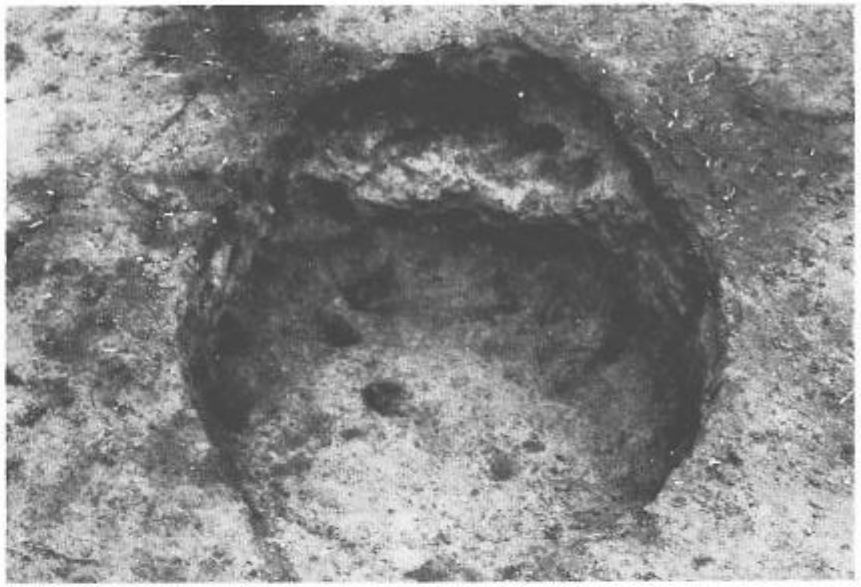
配石遺構配石状況



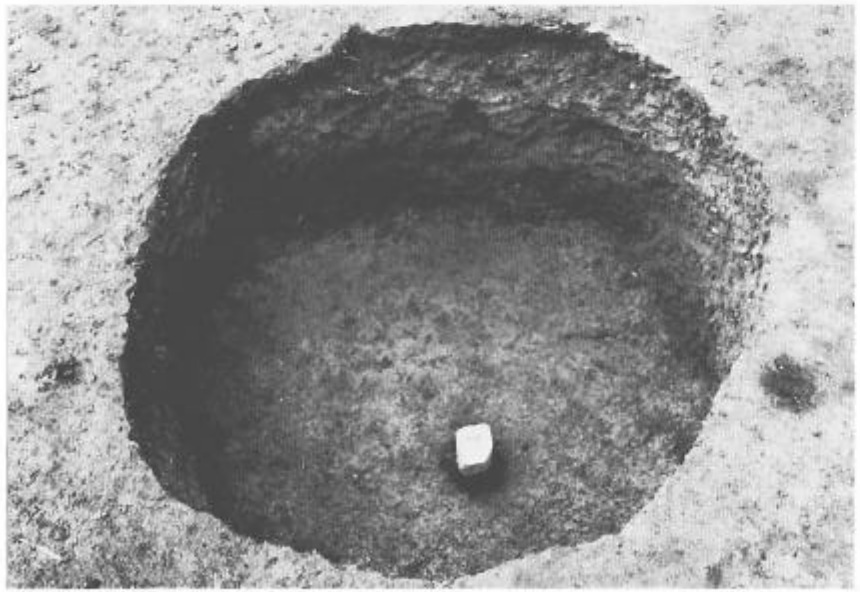
図版 8　　同配石除去後



第2号土壙断面



第1号土壙完掘状況

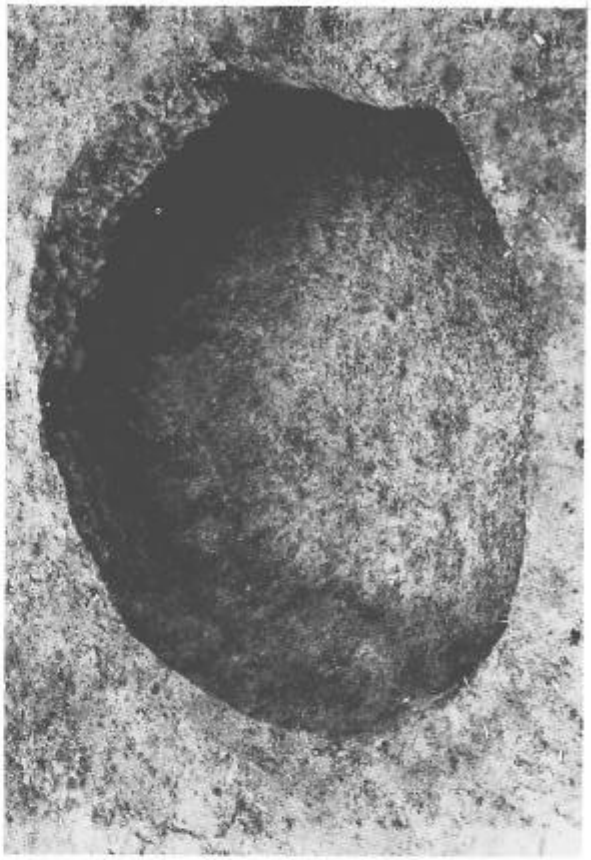


第2号土壙完掘状況

第2号土壙遺物出土状況

図版 9

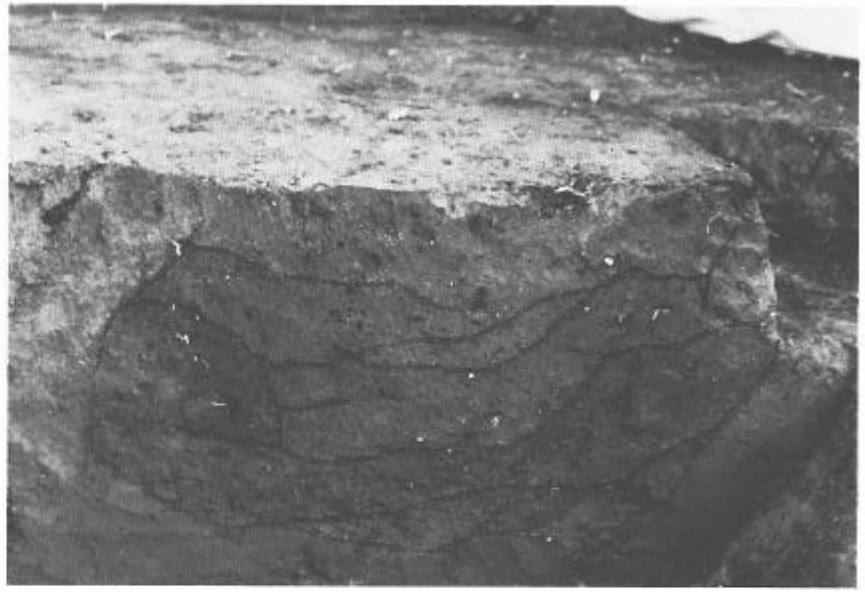
第3号土壙断面



第3号土壙完掘状況

図版10　　第5号，第6号土壙完掘状況

第6号土壙断面

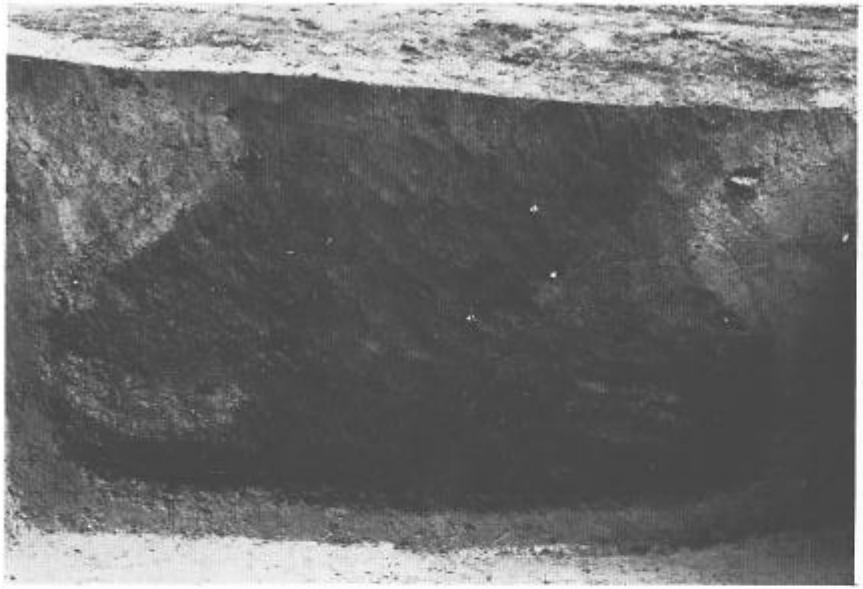


第5号土壙断面

第6号土壙完掘状況

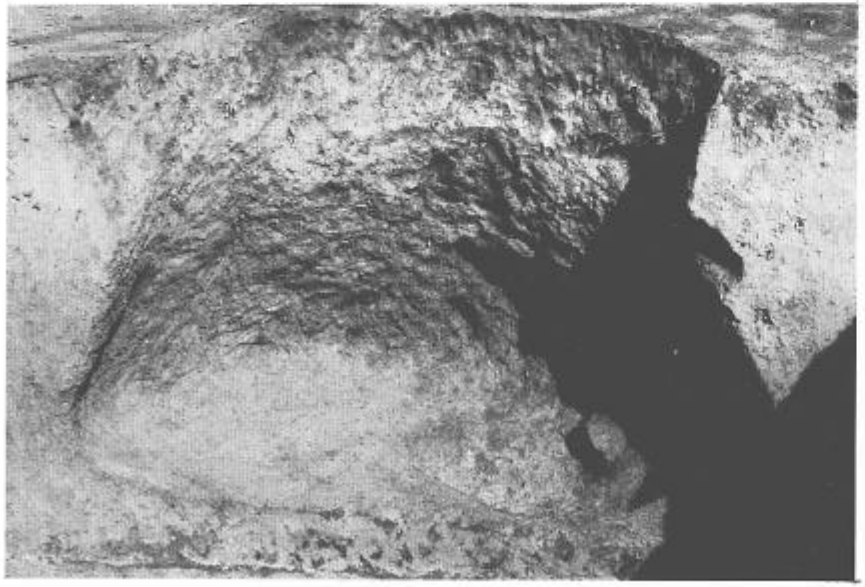
第5号土壙完掘状況

図版11

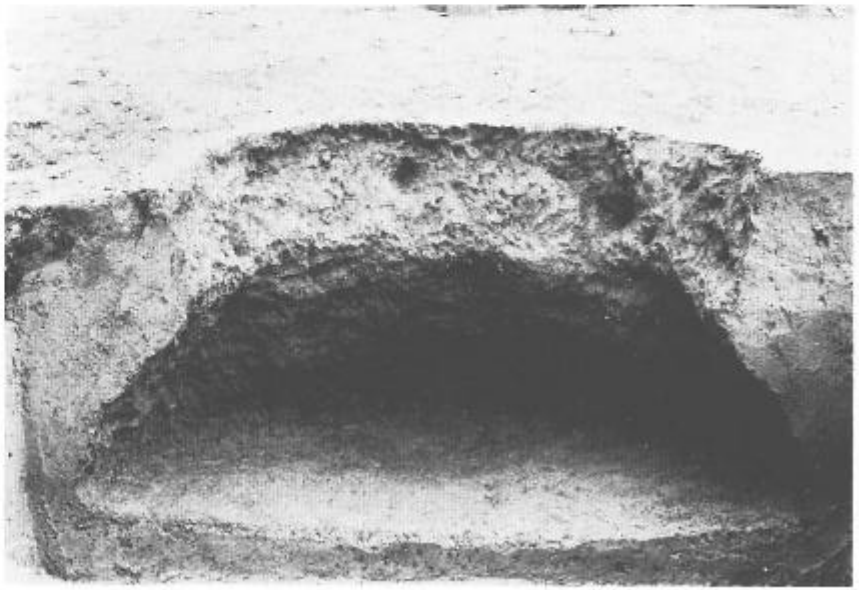


第9号土壙断面

第8号土壙断面

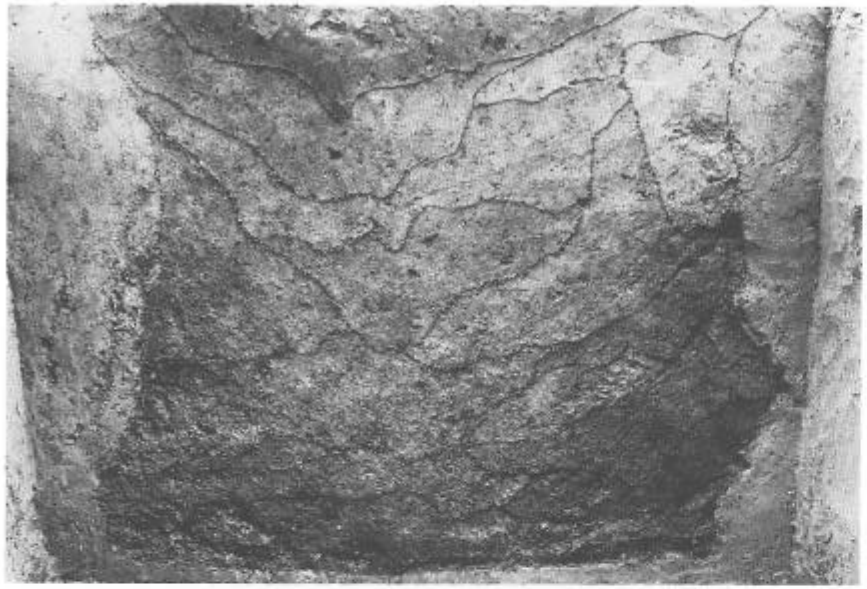


第9号土壙完掘状況

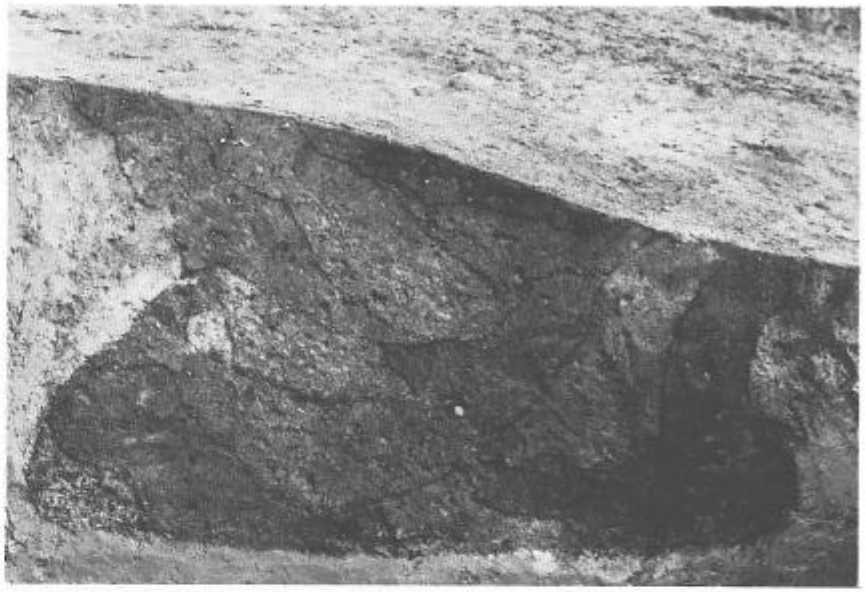


第8号土壙完掘状況

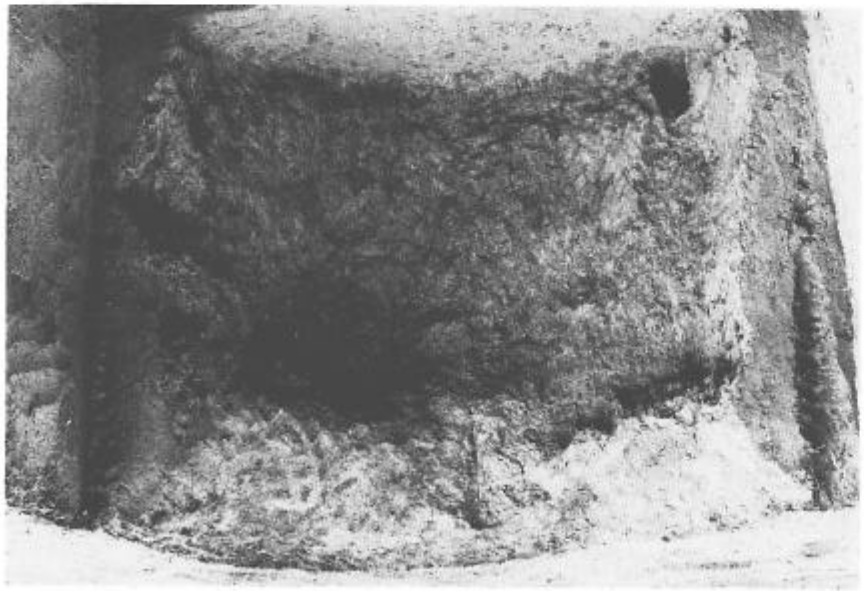
図版12



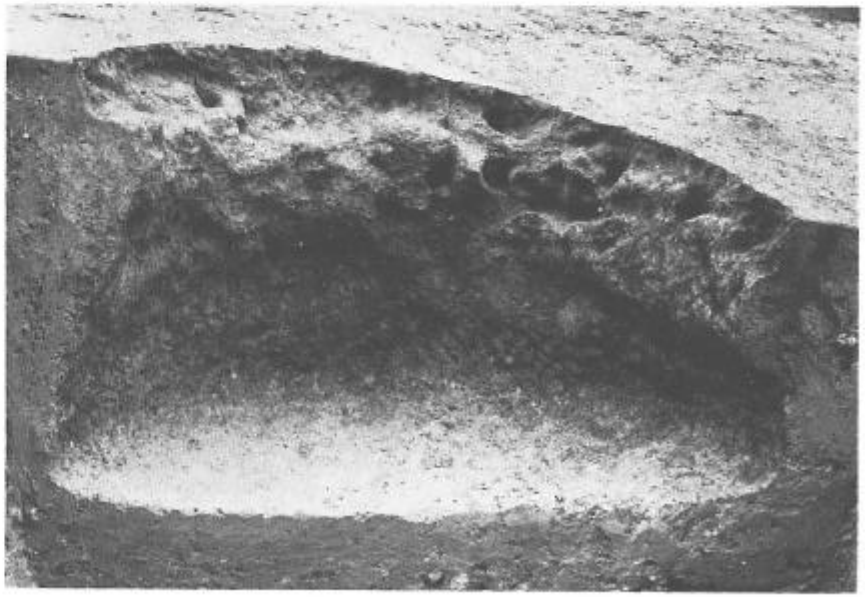
第10号土壙断面



第11号土壙断面

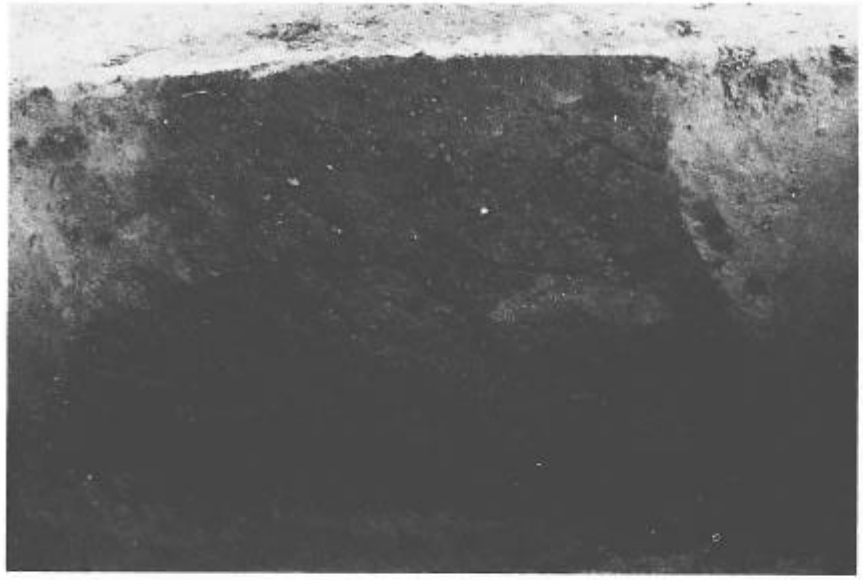


第10号土壙完掘状況

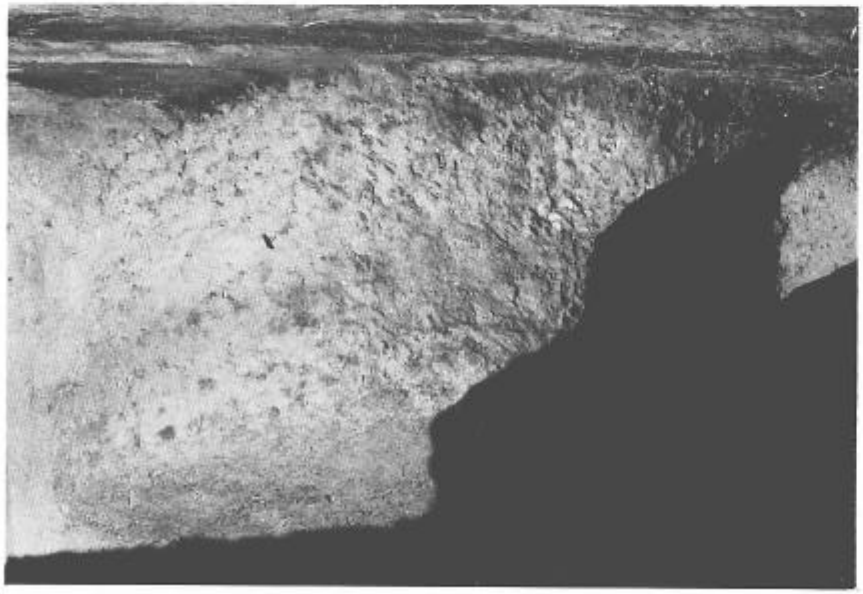


第11号土壙完掘状況

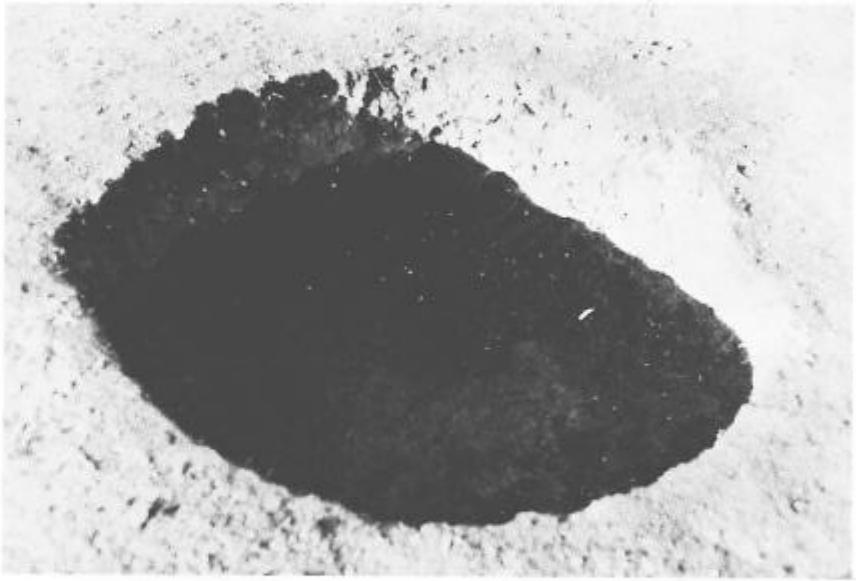
図版13



第7号土壙断面

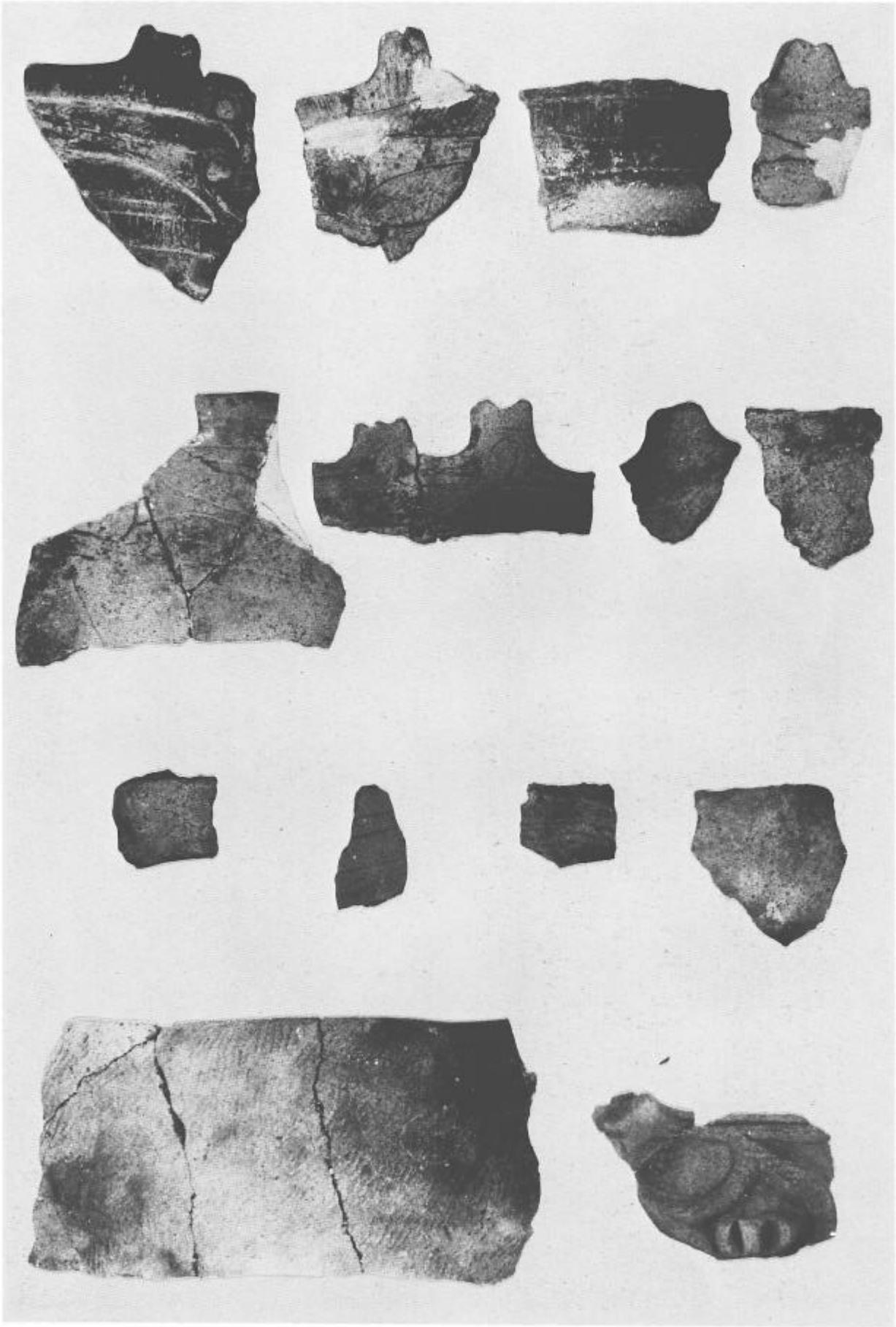


第7号土壙完掘状況

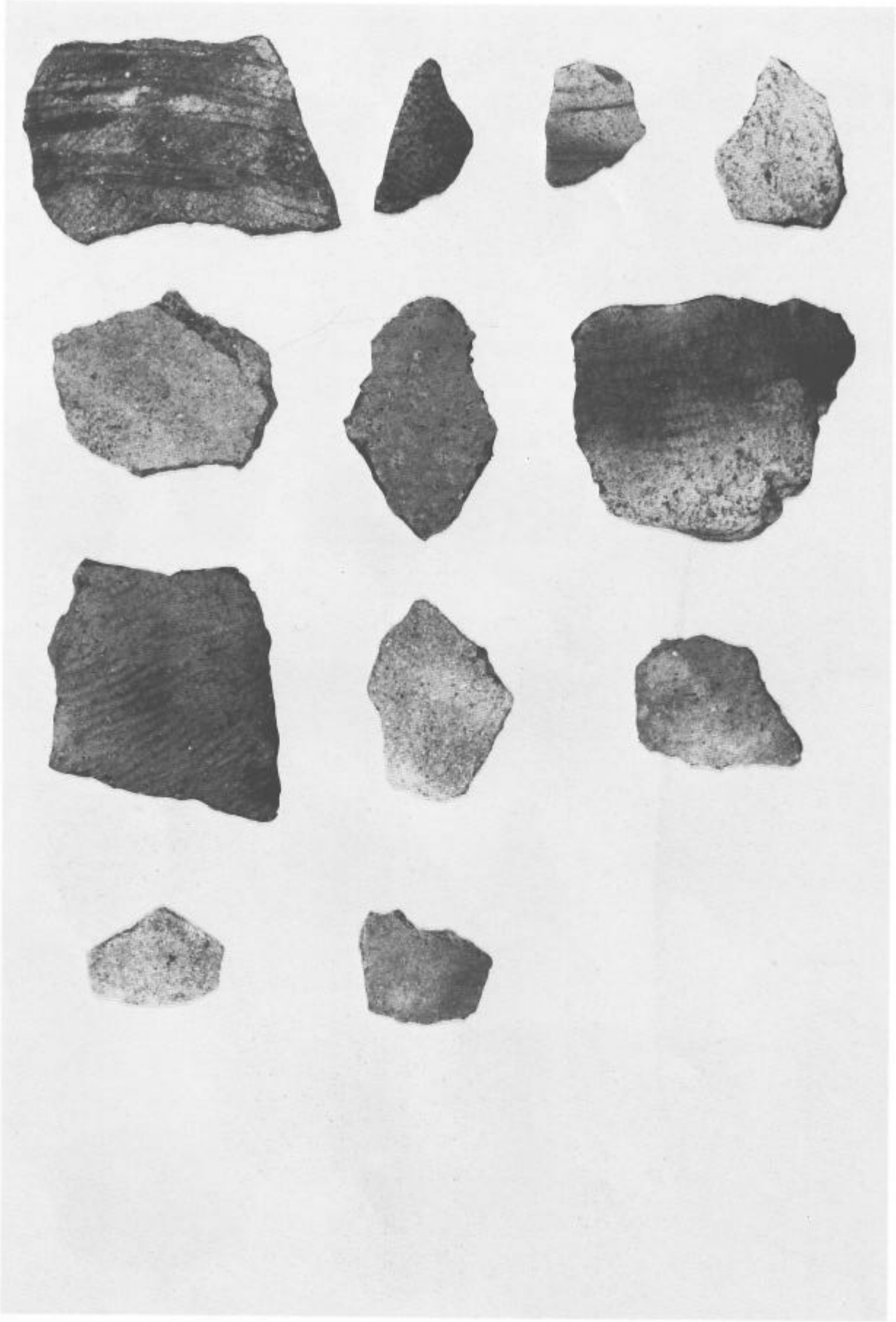


第4号土壙完掘状況

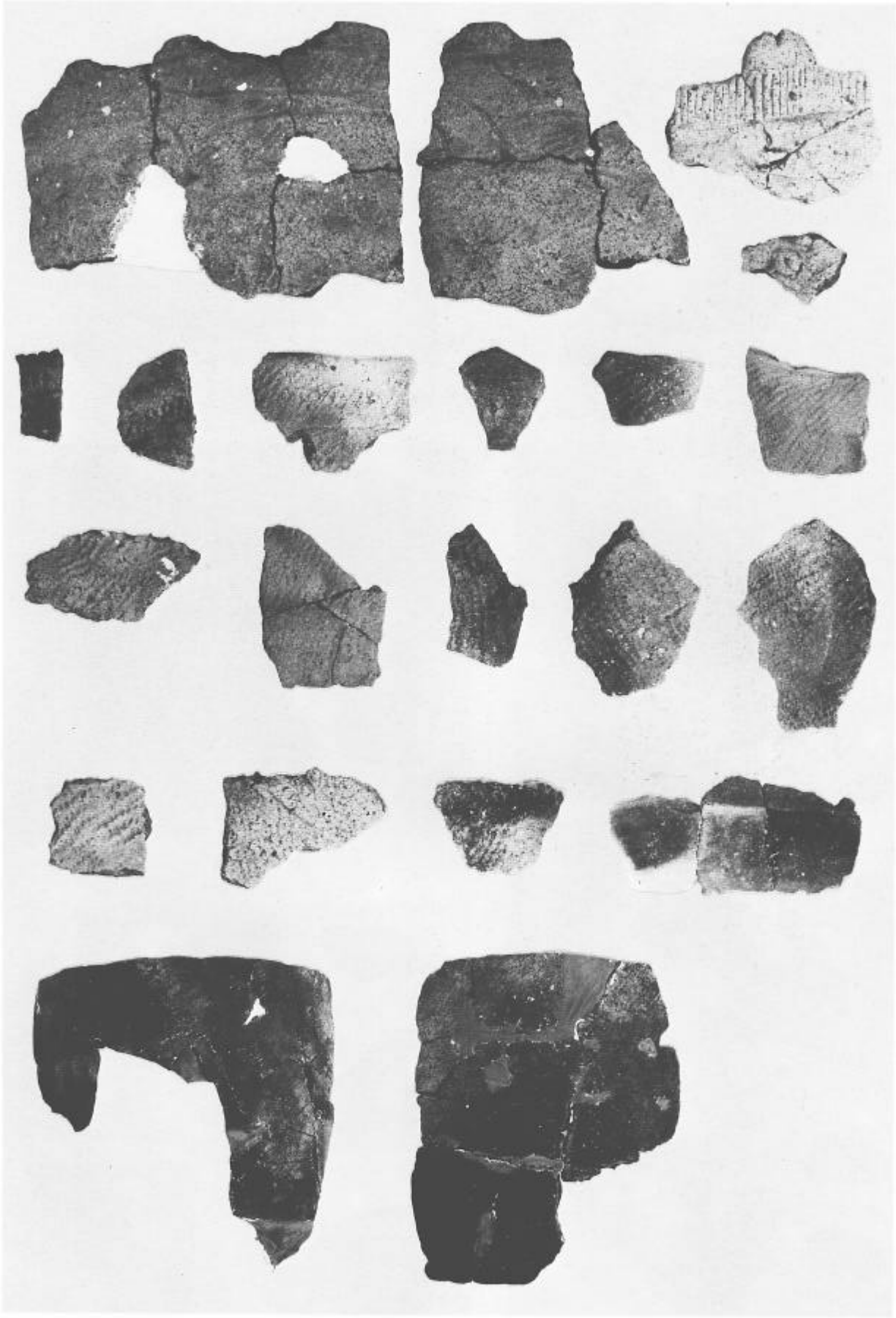
図版14



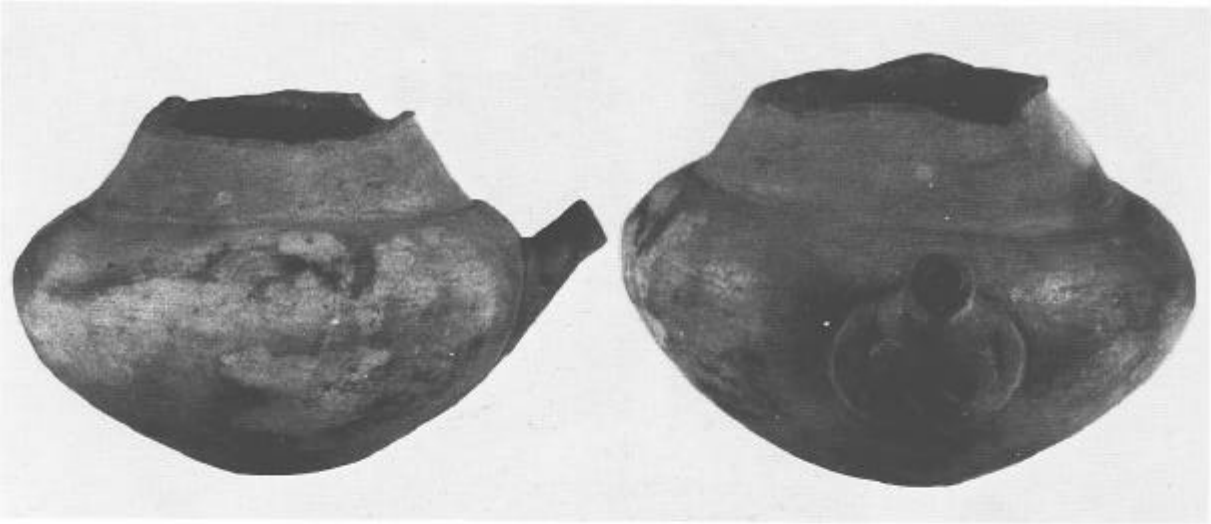
図版15　　第1号住居跡出土土器



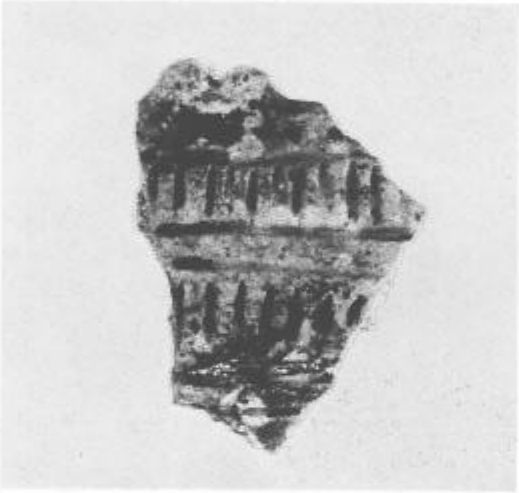
図版16　　第3号住居跡出土土器



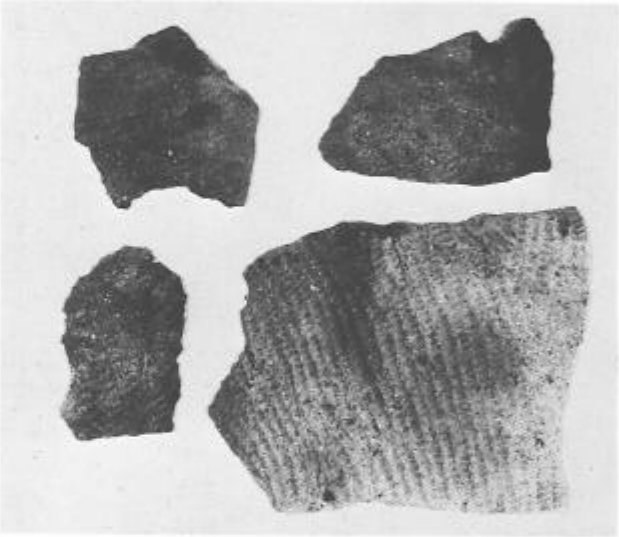
図版17　　第4号住居跡出土土器



第2号土壙

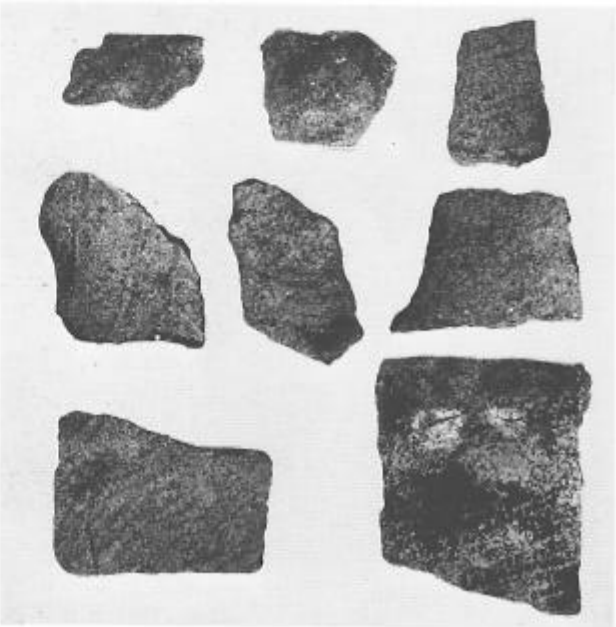


第4号土壙



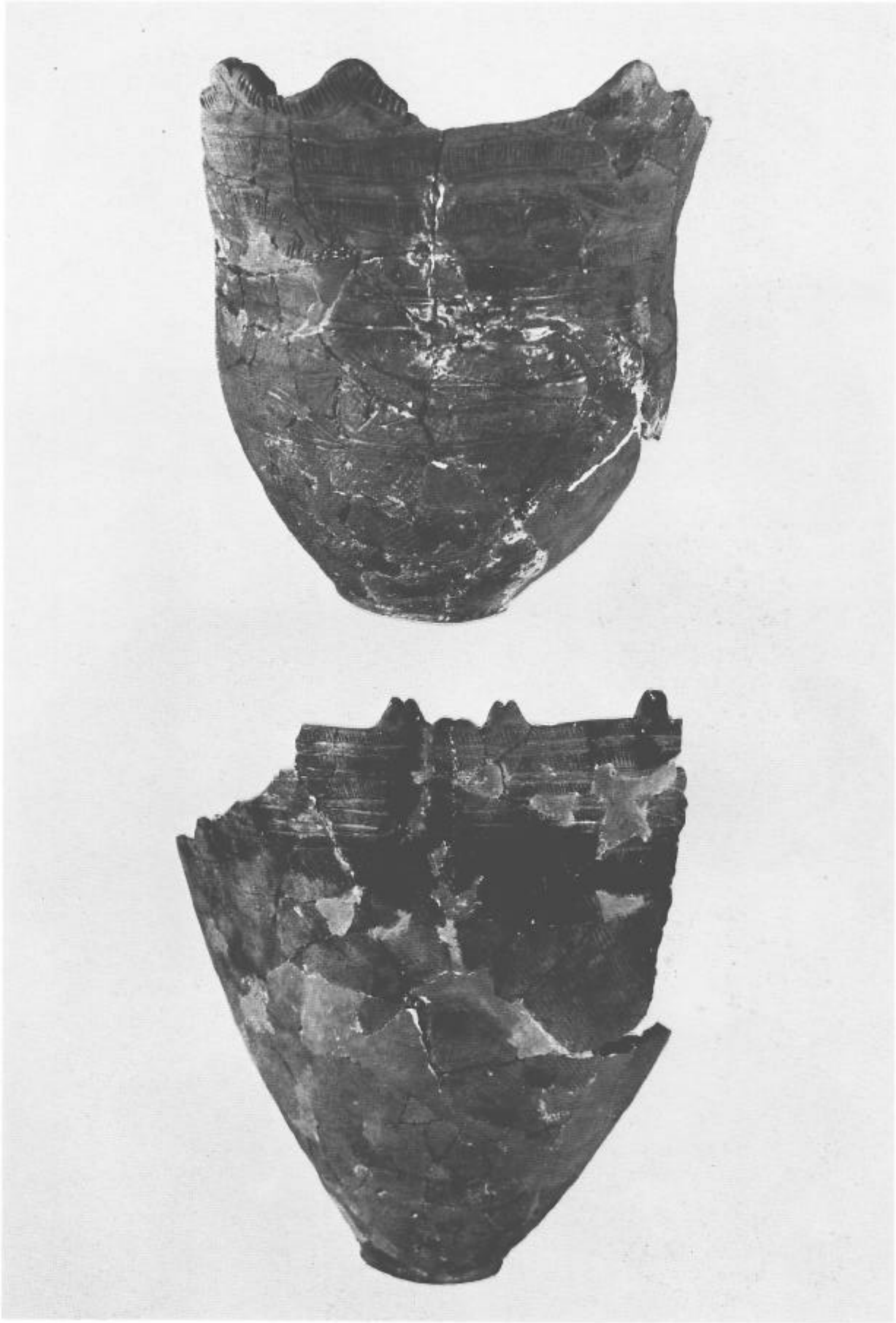
第9号土壙

第4号土壙

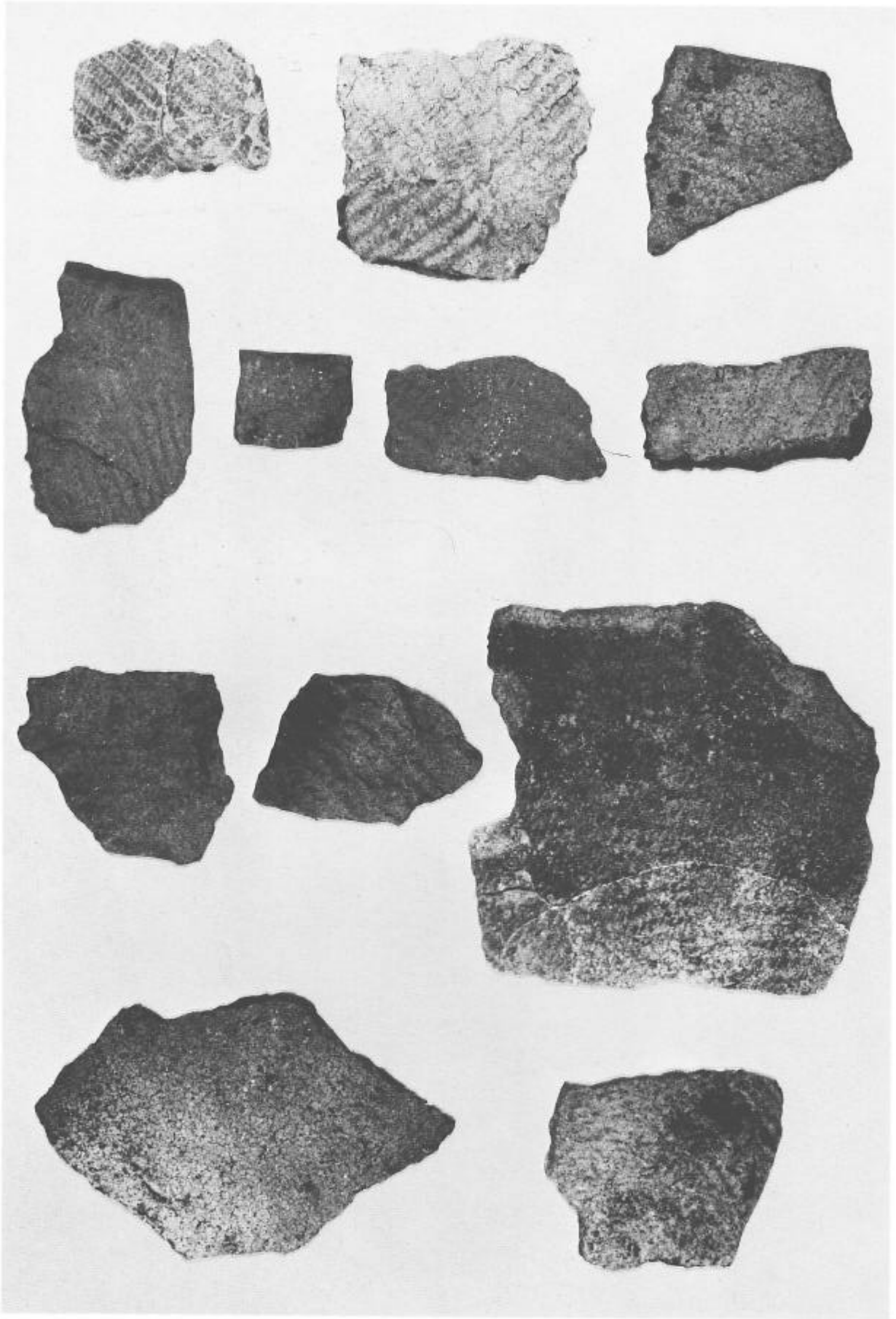


第7号土壙

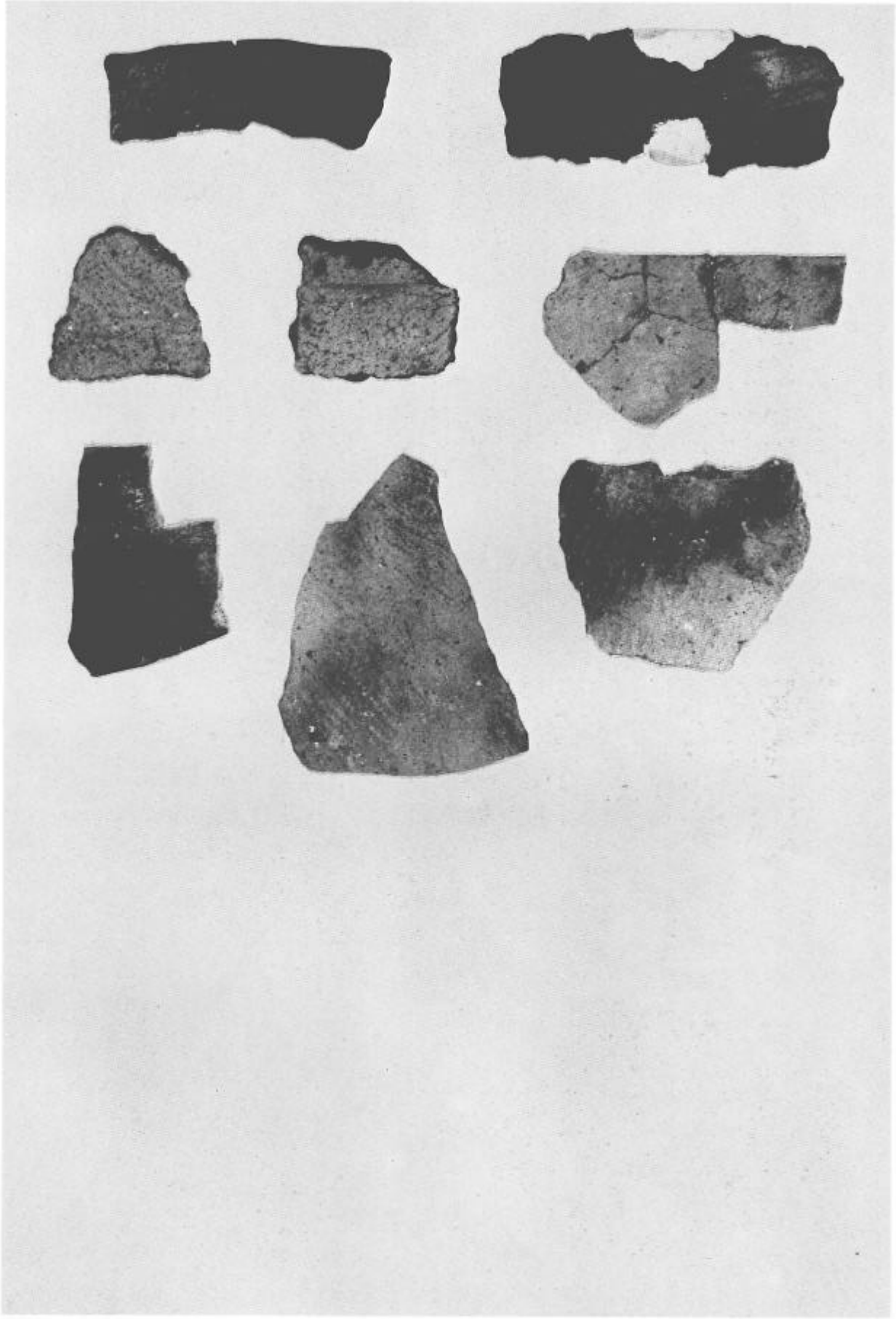
図版18　　各土壙内出土土器



図版19　　埋設土器



図版20　配石遺構周辺出土土器



図版21　　遺構外出土土器

猿ヶ平Ⅰ遺跡

遺跡番号	No.20
所在地	鹿角市花輪字猿ヶ平26の93他
調査期間	昭和55年10月4日～12月6日
発掘予定面積	6,199㎡
発掘調査面積	4,100㎡

1．遺跡の概観

猿ヶ平Ⅰ遺跡は秋田県鹿角市花輪字猿ヶ平26の93他に所在する。この地は国鉄花輪線陸中花輪駅東北東2.6km，花輪東山住宅団地の北0.7kmの地点で，北緯40度11分45秒，東経140度48分45秒，標高は200～204mである。

遺跡地は奥羽山脈の一峰をなす二ッ森（標高895m）の西側斜面よりなだらかに延びる馬の背状の地形で，雑木林と原野から成り，地形学的には花輪中位段丘と呼ばれる面である。原野は終戦後開畑されその後放置された経緯を持ち，地続きの南方0.5kmの地点には案内II遺跡(遺跡番号No.19)が位置する。

2．調査の方法

グリッドは遺跡の調査対象区域に設定されている東北縦貫自動車道の路線中心杭ＳＴＡ143とＳＴＡ143＋60の2基点を結ぶ直線及びその延長線を基準にし，これに直交する線を設け5m×5mのものを設定した。グリッドの呼称は東西軸にアルファベットで東からＧからＹまで南北軸にアラビア数字で南から3～15を付し，3－Ｇグリッドの如く両者の組合せにし，グリッド南東隅の交点（杭）をグリッド名称とした。

発掘調査によって確認された遺構には，その性格ごとに確認順に通し番号を付し，実測図作成は簡易遺り方測量に依った。

3．調査経過

8月6日から3日間，調査対象区の刈払いと試掘を行い，9月下旬に重機を投入して表土除去を行う。

10月3日北の林遺跡から移転して来た調査員，補佐員，補助員，作業員によって発掘現場に到る農道の整備をし，プレハブに器材を搬入す。10月4日調査区北東隅の13－Ｇグリッド部分から地山面まで黒色土の掘り下げを開始す。10月15日この日までの調査では黒色土層中に部分的に大湯浮石層の広がりは認められるが遺構と遺物の検出は無い。

11月4日調査区南西部の発掘に入り多数の縄文土器片の出土を見る。11月5日発掘区の下方斜面に排土の流出を防ぐ「しがらみ」を構築，11－Ｓ，12－Ｓグリッド地山面に竪穴住居跡と考えられる円形の黒色土の落ち込み（ＳＩ001）を確認す。11月10日にはフラスコ状ピット（Ｓ

ＫＦ01）を発見，11日には埋設土器１個検出，その後調査区西側張出部で土壙とフラスコ状ピットが数多く検出される。11月22日には竪穴住居跡（ＳＩ001）完掘，実測も完了。11月29日好天のため発掘区の全景と遺構の群集部分の写真撮影を行う。

12月１日寒気つのり，午後ついに降雪となる。新たに調査区南東部で土壙（ＳＫ016）を確認。12月４日掘り下げた土壙の床面北壁近くから晩期大洞Ｂ式甕形土器が横位で出土。降雪の中で実測を続行。12月６日土壙（ＳＫ016）の実測と写真撮影を最後に，残った発掘器材を搬収し調査を終了する。

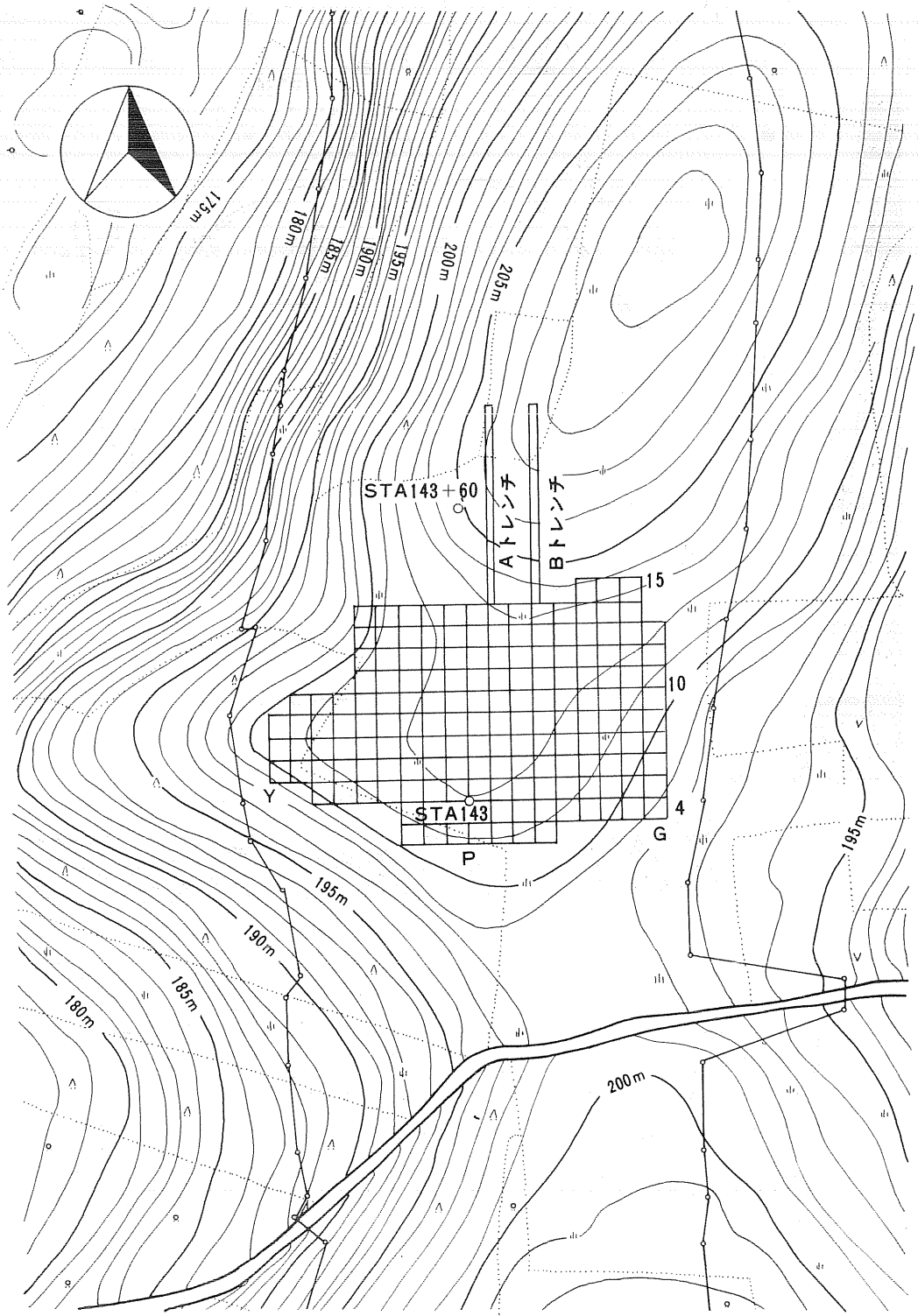
４．遺跡の層位

遺跡は北側から南側に緩傾斜の地形を示しており，基本的層位は２層に分層される。

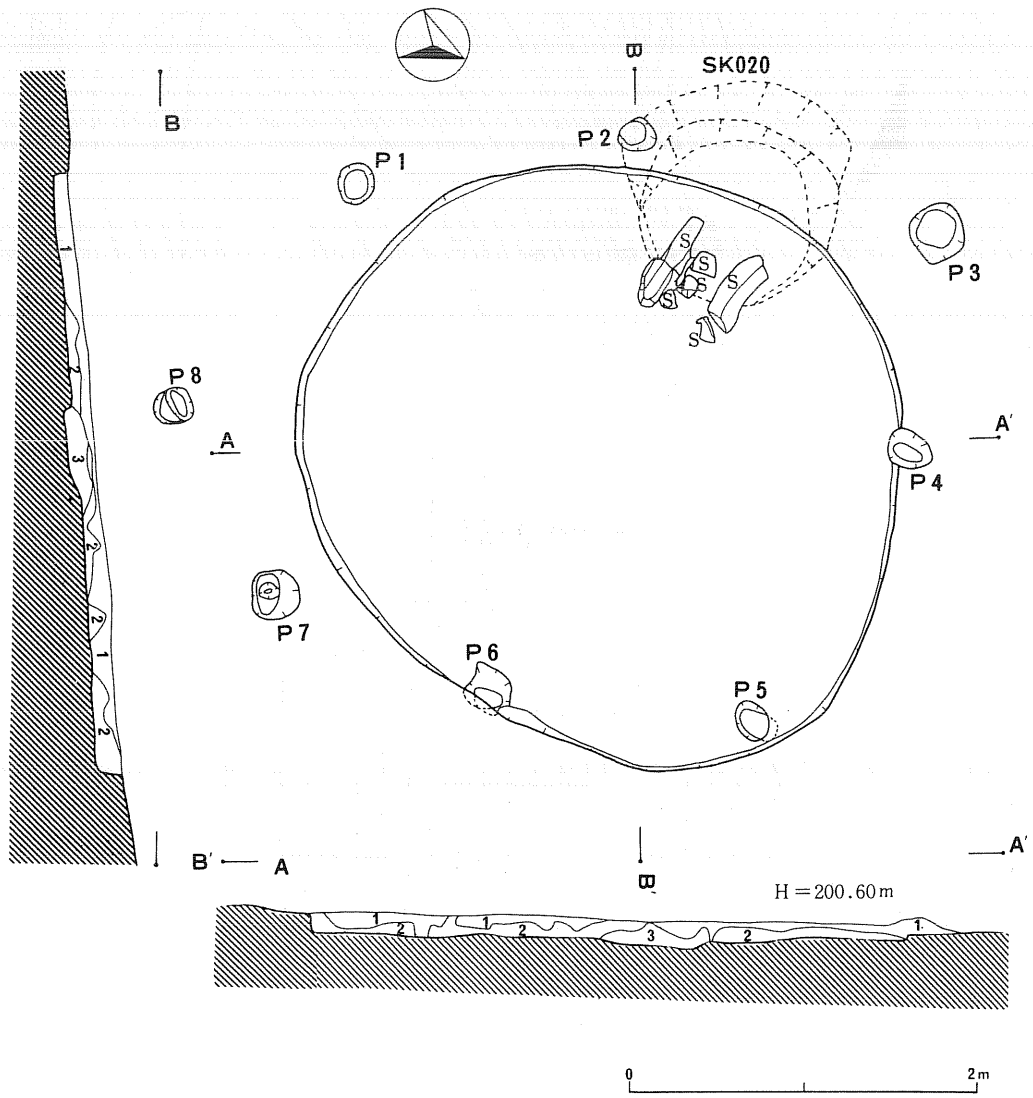
第Ｉ層：黒褐色土

第II層：黄褐色土で地山を構成している。

基本的層位は以上の如くであるが，部分的に第Ｉ層中に薄い大湯浮石の堆積層が認められた。遺物は第Ｉ層下部と遺構内からの出土である。

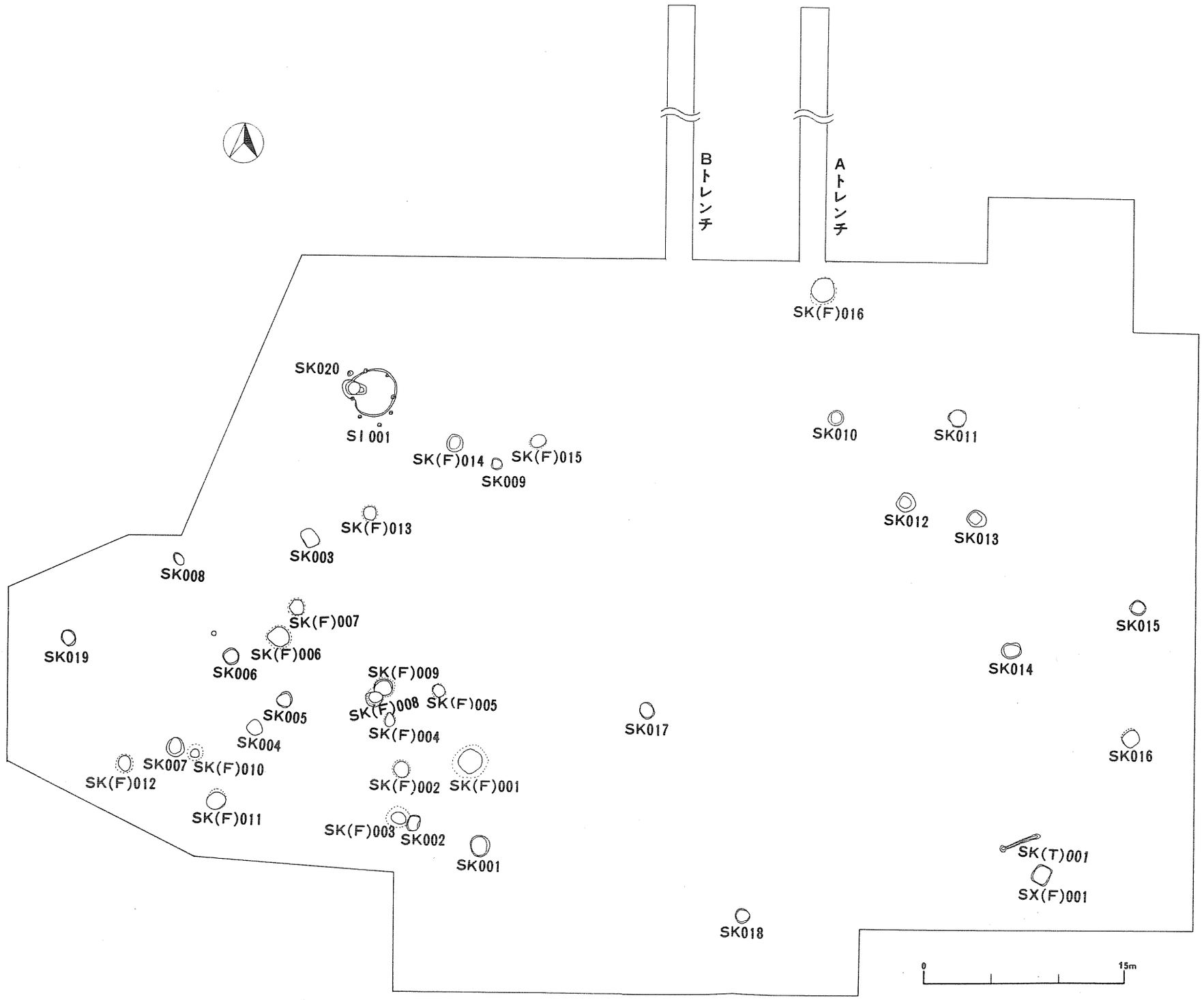

175m
180m
185m
190m
195m
200m
205m
STA143＋60
Aトレンチ
Bトレンチ
15
10
4
Y
STA143
P
G
195m
190m
185m
180m
200m
195m
0
50m

第1図　グリッド配置図



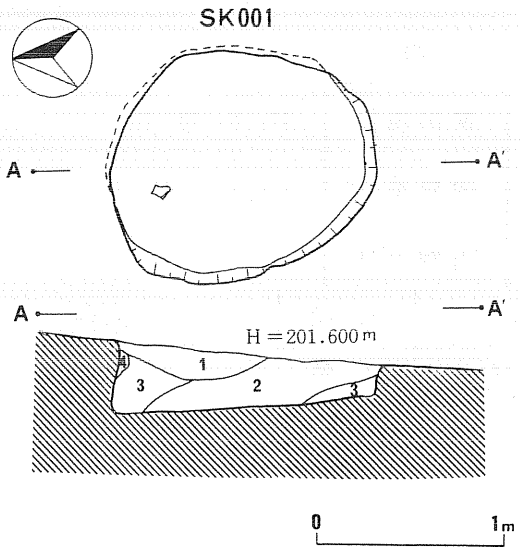
層	土　　色	備　　考
1	黒　　色（7.5YR2/1）	炭化物、黄褐色土粒子微量混入
2	極暗褐色（7.5YR2/3）	炭化物微量混入
3	褐　　色（7.5YR4/6）	炭化物微量混入

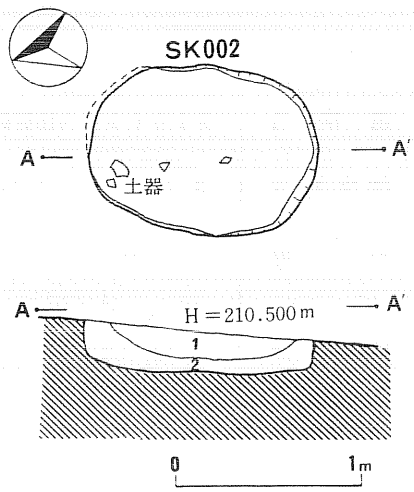
第3図　SI 001竪穴住居跡実測図


Bトレンチ
Aトレンチ
SK(F)016
SK020
SI 001
SK(F)014
SK(F)015
SK009
SK010
SK011
SK(F)013
SK003
SK008
SK012
SK013
SK(F)007
SK(F)006
SK006
SK019
SK015
SK014
SK(F)009
SK(F)008
SK(F)005
SK(F)004
SK005
SK004
SK017
SK016
SK007
SK(F)010
SK(F)012
SK(F)002
SK(F)001
SK(F)011
SK(F)003
SK002
SK001
SK(T)001
SX(F)001
SK018
0
15m

第２図　遺構配置図

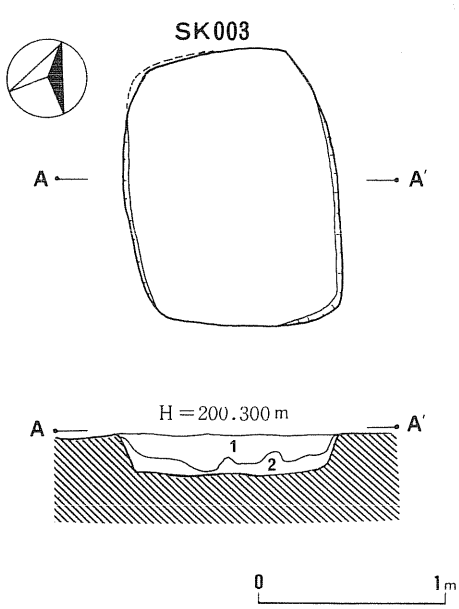
第　1　表				
遺構名	ＳＩ００１竪穴住居跡		検出地区	11—Ｓ，12—Ｓ
挿図番号	3		図版番号	
形態	円　形		主軸方向	
法量	長軸	373cm	短軸	338cm
	壁高	3～15cm	面積	10.3m²
確認	地山上面で確認した。			
壁	東西南壁で10～12cmの壁高を計り，ほぼ垂直に立ち上がるが，北壁においては，地山面からの掘り込みは浅い。			
床面	平坦で堅くしまっている。 床面中央部に焼土（80cm×72cm）の広がりがみられた。			
ピット	床面に１個，壁に２個，住居跡外に５個のピットを確認した。 各ピットは床面より10cm～20cmである。			
炉	住居跡西側に大小の石６個を使用し，「こ」字状に組んだ炉が存在する。			
遺物とその出土状態	埋土中に散在して出土した。 縄文土器（後期初頭）が十数点			
備考	当住居跡は，ＳＫ020を切って構築している。			

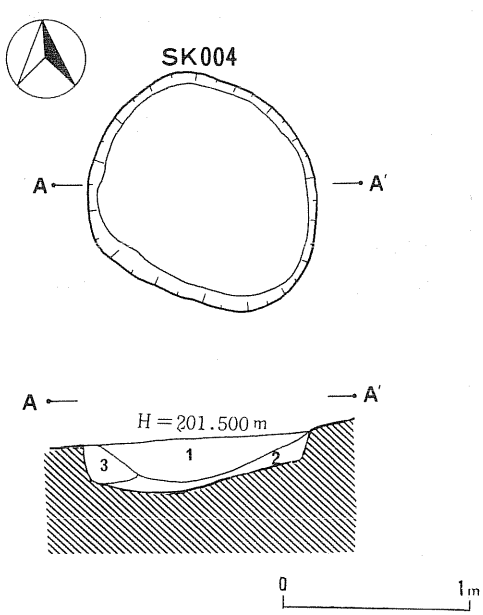




層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR 2/1）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	黒 褐 色（10YR 3/2）	硬度：弱 黄褐色粒子少量 炭化物微量混入
3	暗 褐 色（10YR 3/3）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
4	黄 褐 色（10YR 5/6）	暗褐色粒子微量混入

層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR 2/1）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	黒 褐 色（10YR 3/3）	硬度：弱 黄褐色粒子少量 暗赤褐色ブロック混入





層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR 2/1）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	暗 褐 色（10YR 3/2）	黄褐色粒子、炭化物微量混入

層	土　　色	備　　考
1	黒 褐 色（10YR 3/2）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	暗 褐 色（10YR 3/4）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	黄 褐 色（10YR 5/6）	粘性：強 黒褐色粒子微量混入

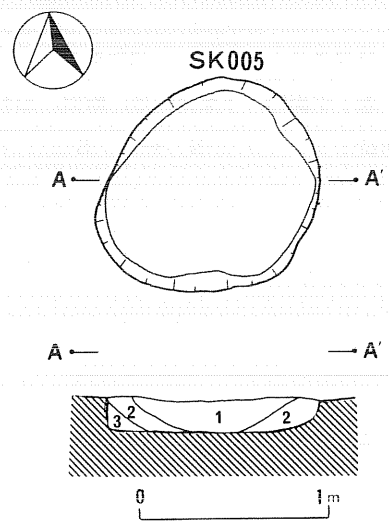
第４図　SK001，002，003，004土壙実測図

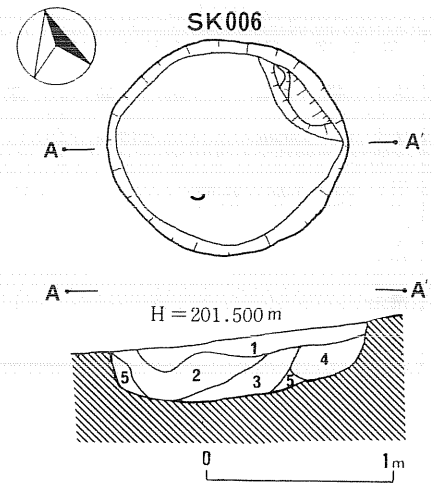
第 2 表	遺構名	ＳＫ００１	出土地区	５－Ｑ	挿図番号	第４図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面図，不整楕円形，断面，箱形			
	135cm	117cm	29cm	主軸方位	Ｎ ⟷ Ｓ			
出土遺物	縄文土器（後期）							
備考								

第 3 表	遺構名	ＳＫ００２	出土地区	５－Ｒ	挿図番号	第４図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，小判形，断面形，箱形			
	120cm	89cm	20cm	主軸方位	Ｎ ⟷ Ｓ			
出土遺物	縄文土器（後期）							
備考								

第 4 表	遺構名	ＳＫ００３	出土地区	９－Ｔ	挿図番号	第４図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，長方形，断面形，台形			
	149cm	112cm	20cm	主軸方位	ＮＷ ⟷ ＳＥ			
出土遺物	縄文土器（後期）							
備考								

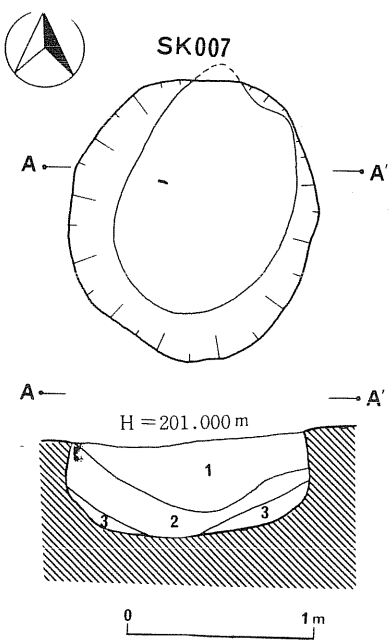
第 5 表	遺構名	ＳＫ００４	出土地区	６－Ｕ	挿図番号	第４図	図版番号	５下
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，不整円形，断面形，台形			
	122cm	119cm	28cm	主軸方位	ＮＷ ⟷ ＳＥ			
出土遺物	縄文土器（後期）							
備考								

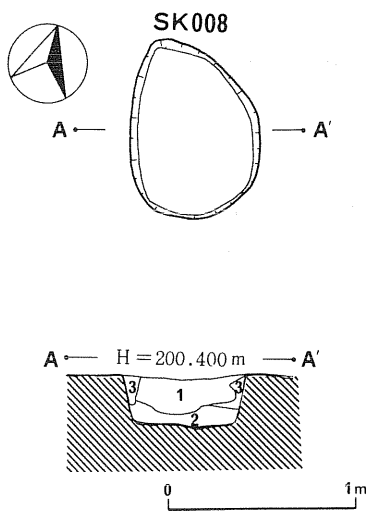




層	土　　色	備　　考
1	黒 褐 色（10YR 2/3）	粘性：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	暗 褐 色（10YR 3/4）	粘性：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	褐　　色（10YR 5/4）	黒褐色粒子微量混入

層	土　　色	備　　考
1	暗 褐 色（10YR 3/3）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	褐　　色（10YR 5/6）	硬度：弱 炭化物、礫微量混入
3	褐　　色（7.5YR 5/4）	炭化物微量混入
4	褐　　色（7.5YR 5/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
5	黄 褐 色（10YR 5/6）	粘性：強 褐色土粒子微量混入





層	土　　色	備　　考
1	褐 褐 色（10YR 3/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	褐　　色（10YR 5/4）	炭化物微量混入
3	褐　　色（10YR 5/6）	粘性：強

層	土　　色	備　　考
1	黒　　色（10YR 2/1）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	黒 褐 色（10YR 3/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	暗 褐 色（10YR 3/3）	炭化物微量混入

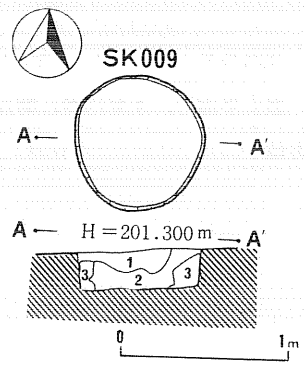
第5図　SK005，006，007，008土壙実測図

第 6 表	遺構名	ＳＫ００５	出土地区	７－Ｔ	挿図番号	第５図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，不整円形，断面形，皿形			
	113cm	112cm	15cm	主軸方位	←→			
出土遺物								
備考								

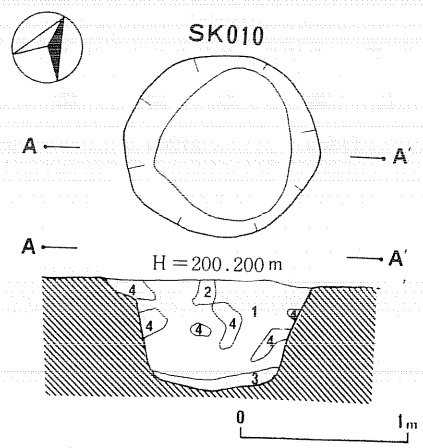
第 7 表	遺構名	ＳＫ００６	出土地区	７－Ｕ ８－Ｕ	挿図番号	第５図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，円形，断面形，皿形			
	127cm	116cm	30cm	主軸方位	←→			
出土遺物								
備考								

第 8 表	遺構名	ＳＫ００７	出土地区	６－Ｖ	挿図番号	第５図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，楕円形，断面形，鍋底形			
	148cm	124cm	49cm	主軸方位	N ←→ S			
出土遺物	縄文土器（後期）							
備考								

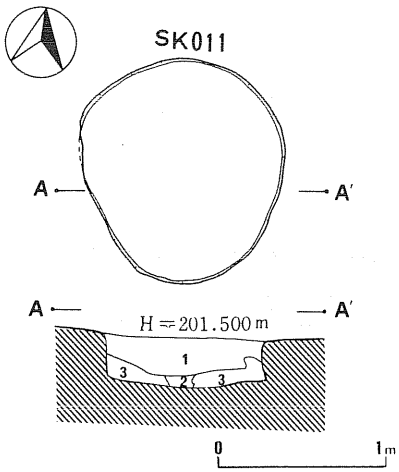
第 9 表	遺構名	ＳＫ００８	出土地区	９－Ｖ	挿図番号	第５図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，不整円形，台形形，台形			
	97cm	68cm	24cm	主軸方位	N ←→ S			
出土遺物								
備考								



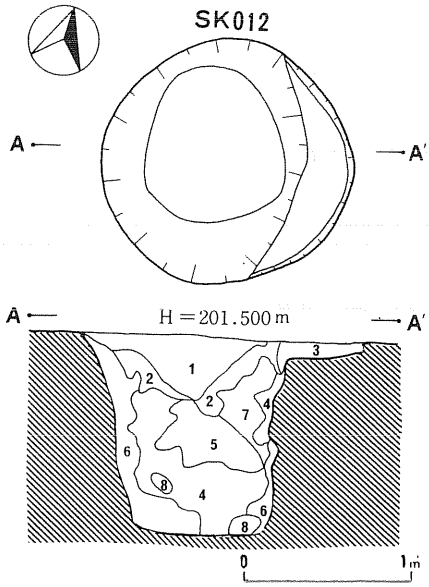
層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR 2/1）	黄褐色粒子微量混入
2	黒 褐 色（10YR 3/2）	黄褐色粒子微量混入
3	暗 褐 色（10YR 3/4）	黄褐色粒子微量混入



層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR 2/1）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	黒　色（10YR 1.7/1）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	黒 褐 色（10YR 3/3）	黄褐色粒子少量混入
4	暗 褐 色（10YR 3/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入



層	土　　色	備　　考
1	黒 褐 色（10YR 3/2）	黄褐色粒子、小石微量混入
2	黒 褐 色（10YR 3/3）	黄褐色土少量混入
3	褐　色（10YR 5/6）	小石微量混入



層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR 1.7/1）	黄褐色粒子、炭化物、小石微量混入
2	黒 褐 色（10YR 3/3）	硬度：強　黄褐色粒子、炭化物、小石微量混入
3	黒 褐 色（10YR 3/3）	硬度：強　炭化物、小石微量混入
4	暗 褐 色（10YR 3/3）	硬度：強　炭化物、小石微量混入
5	暗 褐 色（10YR 3/3）	
6	褐　色（10YR 5/6）	硬度：強　粘性：強　火山墳出物微量混入
7	暗 褐 色（10YR 3/4）	硬度：強　小石微量混入
8	黄 褐 色（10YR 5/8）	硬度：強　粘性：強

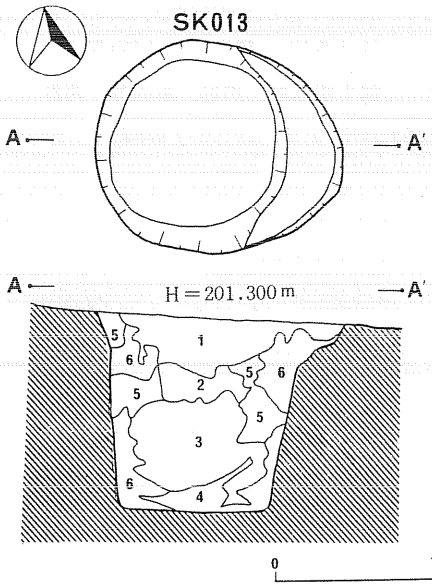
第6図　SK009，010，011，012土壙実測図

第 10 表	遺構名	ＳＫ００９	出土地区	10－Ｑ	挿図番号	第６図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，円形，断面形，箱形			
	79cm	76cm	23cm	主軸方位	←→			
出土遺物								
備考								

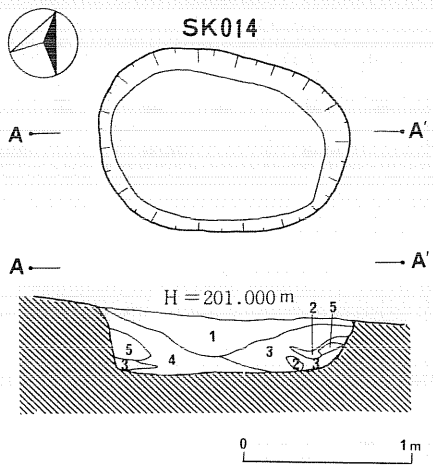
第 11 表	遺構名	ＳＫ０１０	出土地区	11－Ｌ	挿図番号	第６図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，円形，断面形，台形			
	116cm	108cm	66cm	主軸方位	←→			
出土遺物								
備考								

第 12 表	遺構名	ＳＫ０１１	出土地区	11－Ｊ	挿図番号	第６図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，不整楕円形，断面形，箱形			
	133cm	111cm	38cm	主軸方位	N ←→ S			
出土遺物								
備考								

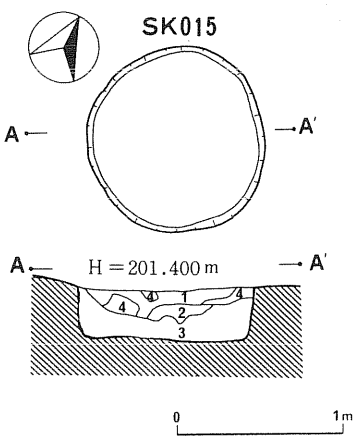
第 13 表	遺構名	ＳＫ０１２	出土地区	10－Ｋ	挿図番号	第６図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，円形，断面形，台形			
	149cm	143cm	120cm	主軸方位	←→			
出土遺物								
備考								



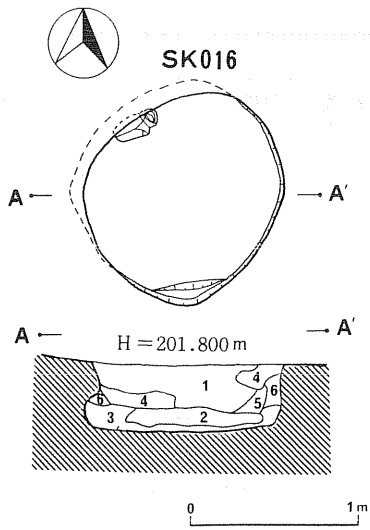
層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR1/7）	炭化物、黄褐色粒子、小石微量混入
2	黒　色（10YR3/1）	硬度：強 黄褐色粒子、小石微量混入
3	黒 褐 色（10YR3/3）	硬度：強 黄褐色粒子微量混入
4	黒 褐 色（10YR3/1）	炭化物、黄褐色粒子微量混入
5	黒 褐 色（10YR3/2）	黄褐色粒子微量混入
6	褐　色（10YR5/6）	硬度：強 小石微量混入



層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR3/1）	黄褐色粒子、炭化物、火山噴出物微量混入
2	黒　色（10YR1/7）	炭化物、火山噴出物微量混入
3	黒 褐 色（10YR3/2）	硬度：強 黄褐色粒子 炭化物 火山噴出物微量混入
4	暗 褐 色（10YR3/3）	硬度：強 黄褐色粒子、炭化物微量混入
5	褐　色（10YR4/4）	硬度：強 黄褐色粒子、火山噴出物微量混入



層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR3/1）	炭化物、火山墳出物微量混入
2	黒　色（10YR1/7）	炭化物、火山墳出物微量混入
3	褐　色（10YR4/4）	硬度：強 小石微量混入
4	黒 褐 色（10YR3/3）	黄褐色粒子微量混入



層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR3/1）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	暗 褐 色（10YR3/3）	硬度：強 黄褐色粒子、炭化物小石微量混入
3	褐　色（10YR4/4）	硬度：強 火山噴出物　小石微量混入
4	黄 褐 色（10YR5/6）	硬度：強 火山噴出物微量混入
5	暗 褐 色（10YR3/4）	硬度：強 火山噴出物、小石微量混入
6	褐　色（10YR4/6）	硬度：強 火山噴出物

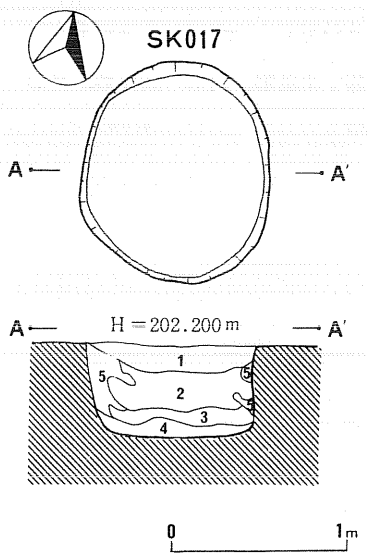
第７図　SK013，014，015，016土壙実測図

第 14 表	遺構名	ＳＫ０１３	出土地区	10－Ｊ	挿図番号	第７図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，円形・断面形，台形			
	147cm	124cm	116cm	主軸方位	←→			
出土遺物								
備考								

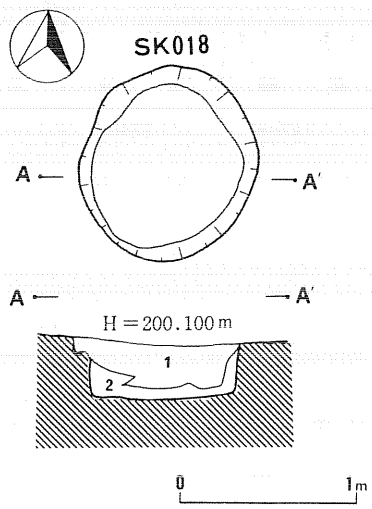
第 15 表	遺構名	ＳＫ０１４	出土地区	８－Ｉ	挿図番号	第７図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，小判形・断面形，台形			
	149cm	110cm	22cm	主軸方位	Ｅ ←→ Ｗ			
出土遺物								
備考								

第 16 表	遺構名	ＳＫ０１５	出土地区	８－Ｇ	挿図番号	第７図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，円形・断面形，箱形			
	111cm	106cm	29cm	主軸方位	←→			
出土遺物								
備考								

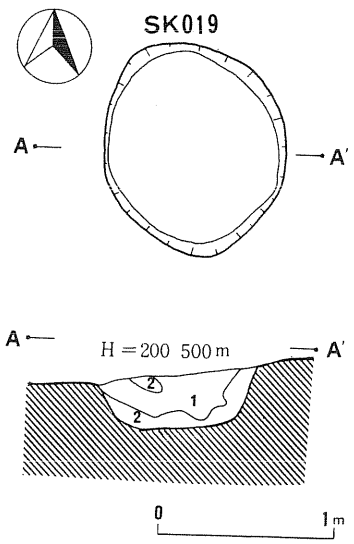
第 17 表	遺構名	ＳＫ０１６	出土地区	６－Ｇ ６－Ｈ	挿図番号	第７図	図版番号	６
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，円形・断面形，鍋底形			
	124cm	119cm	39cm	主軸方位	←→			
出土遺物	縄文土器（大洞Ｂ式）							
備考								



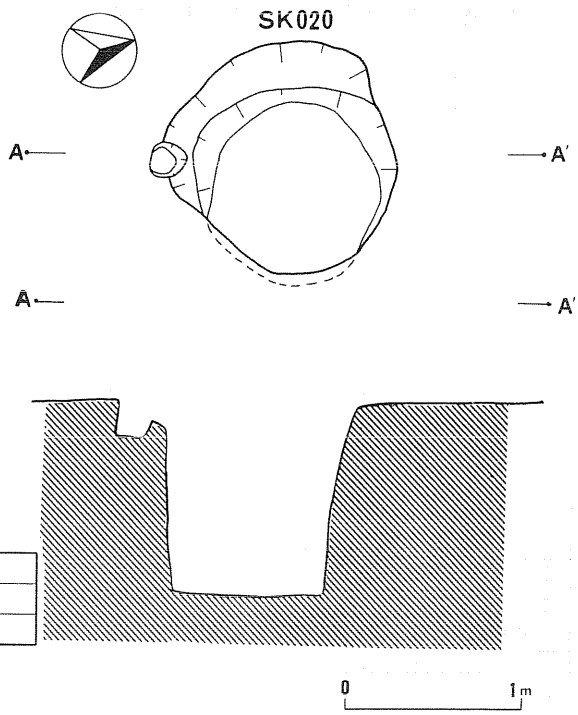
層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR3/1）	炭化物、黄褐色粒子、小石微量混入
2	黒褐色（10YR3/2）	炭化物、黄褐色粒子、微量混入
3	黒褐色（10YR3/2）	炭化物、黄褐色粒子微量混入
4	褐　色（10YR4/6）	小石微量混入
5	暗褐色（10YR3/3）	炭化物、黄褐色粒子微量混入



層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR3/1）	炭化物、黄褐色粒子微量混入
2	黒褐色（10YR3/2）	硬度：強 炭化物、黄褐色粒子微量混入



層	土　　色	備　　考
1	褐　色（10YR3/4）	炭化物、黄褐色粒子微量混入
2	にぶい黄褐色（10YR5/3）	炭化物微量混入



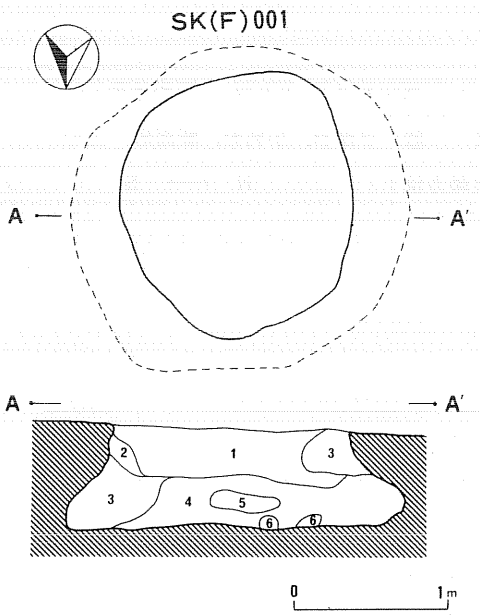
第8図　SK017，018，019，020土壙実測図

第 18 表	遺構名	ＳＫ０１７	出土地区	７－Ｏ	挿図番号	第８図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，小判形，断面形，台形			
	125cm	105cm	51cm	主軸方位	N ⟷ S			
出土遺物								
備考								

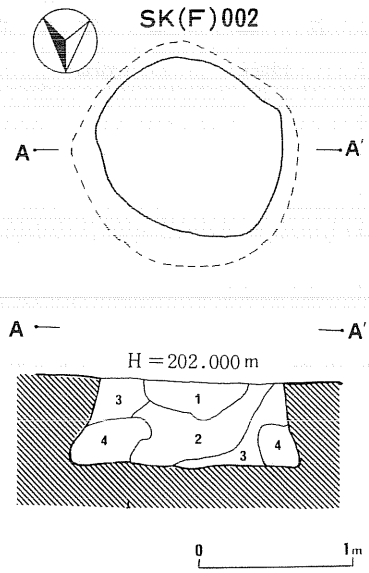
第 19 表	遺構名	ＳＫ０１８	出土地区	４－Ｍ	挿図番号	第８図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，楕円形，断面形，箱形			
	110cm	100cm	31cm	主軸方位	N ⟷ S			
出土遺物								
備考								

第 20 表	遺構名	ＳＫ０１９	出土地区	８－Ｘ	挿図番号	第８図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面図，楕円形，断面形，鍋底形			
	118cm	103cm	30cm	主軸方位	N ⟷ S			
出土遺物								
備考								

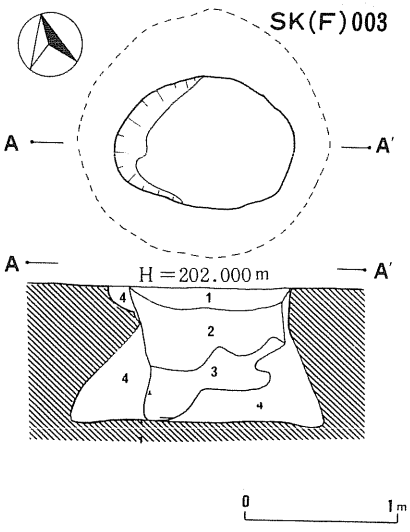
第 21 表	遺構名	ＳＫ０２０	出土地区	12－Ｓ	挿図番号	第８図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，円形，断面形，台形			
	100cm	96cm	97cm	主軸方位	⟷			
出土遺物								
備考	ＳＩ001 竪穴住居跡が，本遺構東側を切って構築されている。							



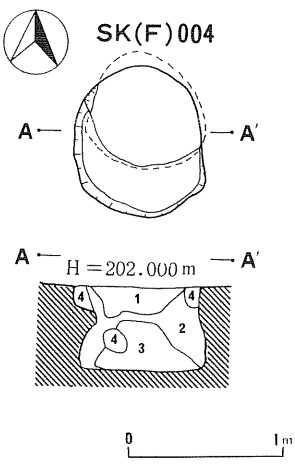
層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR1/7）	粘性：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	暗 褐 色（10YR3/3）	粘性：弱 黄褐色粒子少量混入
3	黄 褐 色（10YR5/6）	暗褐色粒子微量混入
4	黒 褐 色（10YR2/3）	褐色土微量混入
5	褐　色（7.5YR4/3）	黒褐色度微量混入
6	明黄褐色（10YR6/6）	粘性：強 黒褐色土微量混入



層	土　　色	備　　考
1	褐　色（10YR4/4）	粘性：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	黒 褐 色（10YR3/3）	粘性：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘性：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
4	黄 褐 色（10YR5/8）	黒褐色土微量混入



層	土　　色	備　　考
1	黒 褐 色（10YR3/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	暗 褐 色（10YR3/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	暗 褐 色（7.5YR3/4）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
4	赤 褐 色（10YR5/6）	炭化物微量混入



層	土　　色	備　　考
1	黒 褐 色（10YR3/2）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	暗 褐 色（10YR3/3）	硬度：弱 黄褐色粒子、黒褐色粒子微量混入
3	黒 褐 色（10YR3/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
4	黄 褐 色（10YR5/8）	

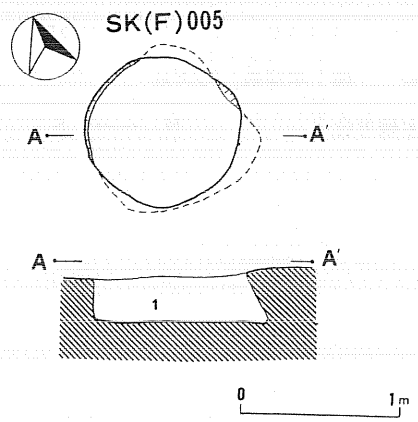
第9図　SK(F)001，002，003，004フラスコ状ピット実測図

第 2 表	遺構名	S K (F) 001	出土地区	7 — S	挿図番号	第 9 図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，楕円形			
	165cm	150cm	65cm	主軸方位	N ←→ S			
出土遺物	縄文土器（後期）							
備考								

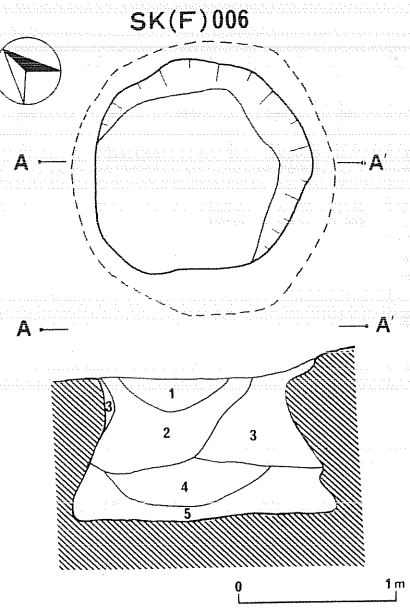
第 23 表	遺構名	S K (F) 002	出土地区	6 — R	挿図番号	第 9 図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，楕円形			
	126cm	106cm	56cm	主軸方位	N W ←→ S E			
出土遺物								
備考								

第 24 表	遺構名	S K (F) 003	出土地区	5 — R	挿図番号	第 9 図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，楕円形			
	116cm	85cm	86cm	主軸方位	E ←→ W			
出土遺物								
備考								

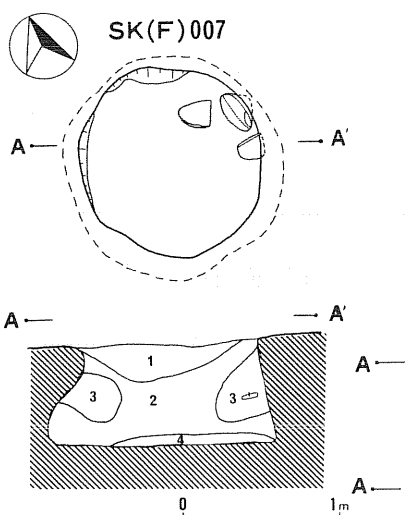
第 25 表	遺構名	S K (F) 004	出土地区	6 — S 7 — S	挿図番号	第 9 図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，楕円形			
	100cm	82cm	53cm	主軸方位	N ←→ S			
出土遺物								
備考								



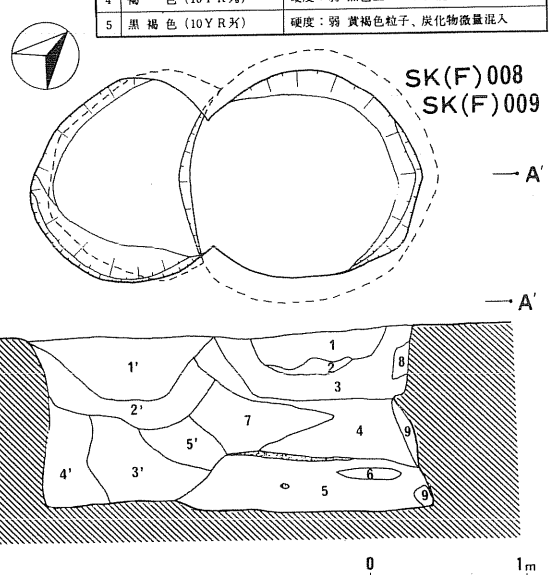
層	土　　色	備　　考
1	暗 褐 色（10YR3/4）	粘性：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入



層	土　　色	備　　考
1	黒 褐 色（10YR3/2）	黄褐色粒子、炭化物、礫微量混入
2	黒 褐 色（10YR3/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入 褐色土ブロック混入
3	褐　色（10YR4/4）	黄褐色粒子ブロック、炭化物微量混入
4	褐　色（10YR4/6）	硬度：弱 黒色土ブロック混入
5	黒 褐 色（10YR3/4）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入



層	土　　色	備　　考
1	暗 褐 色（10YR3/4）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	黒 褐 色（10YR3/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	褐　色（10YR4/6）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
4	にぶい黄褐色（10YR5/3）	炭化物、粗砂微量混入



層	土　　色	備　　考
1	黒 褐 色（10YR3/2）	炭化物、黄褐色粒子、礫微量混入
2	黒　色（10YR1/2）	硬度：弱 炭化物、黄褐色粒子微量混入
3	暗 褐 色（10YR3/4）	硬度：強 黄褐色土ブロック、炭化物微量混入
4	褐　色（10YR5/4）	黄褐色土ブロック、炭化物、礫微量混入
5	褐　色（7.5YR5/4）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
6	褐　色（7.5YR5/6）	硬度：弱 炭化物微量混入
7	黒 褐 色（10YR3/4）	炭化物、黄褐色粒子微量混入
8	褐　色（7.5YR5/3）	礫微量混入
9	褐　色（10YR5/6）	

層	土　　色	備　　考
1′	黒 褐 色（10YR3/2）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
2′	黒 褐 色（10YR3/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
3′	暗 褐 色（10YR3/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
4′	黒 褐 色（10YR3/2）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
5′	にぶい黄褐色（10YR5/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入

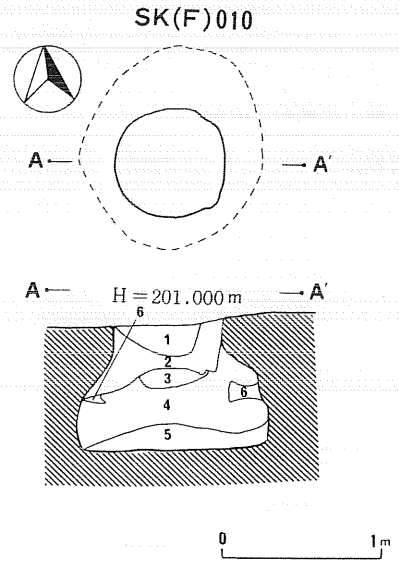
第10図　SK(F)005，006，007，008，009フラスコ状ピット実測図

第 26 表	遺構名	ＳＫ(F)005	出土地区	7－R	挿図番号	第10図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，円形			
	96cm	94cm	28cm	主軸方位	←→			
出土遺物	縄文土器（後期）							
備考								

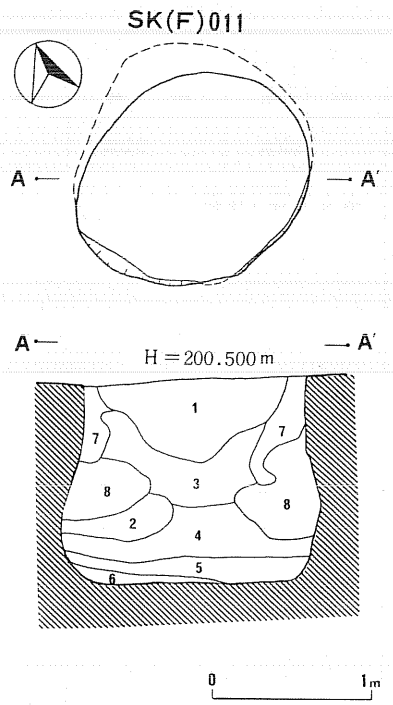
第 27 表	遺構名	ＳＫ(F)006	出土地区	8－T	挿図番号	第10図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，不整形			
	135cm	130cm	90cm	主軸方位	E ←→ W			
出土遺物	縄文土器（後期）							
備考								

第 28 表	遺構名	ＳＫ(F)007	出土地区	8－T	挿図番号	第10図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，円形			
	120cm	114cm	64cm	主軸方位	←→			
出土遺物	縄文土器（後期）							
備考								

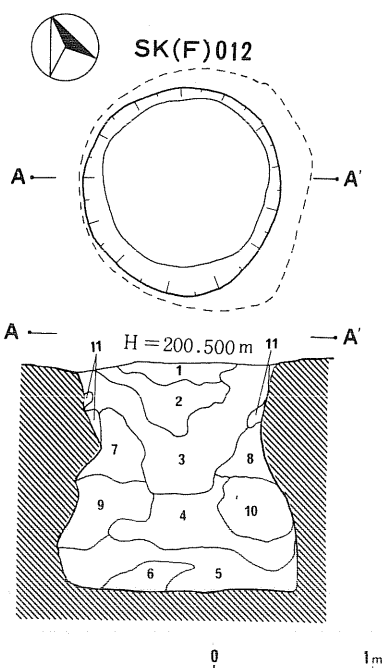
第 29 表	遺構名	ＳＫ(F)008	出土地区	7－S	挿図番号	第10図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，不整形			
	129cm	(120)cm	104cm	主軸方位	N ←→ S			
出土遺物								
備考	ＳＫ(F)009が本遺構を切って構築されている。							



層	土　　色	備　　考
1	黒 褐 色（10YR3/2）	粘性：弱 黄褐色粒子、炭化物、礫微量混入
2	黒 褐 色（10YR3/3）	黄褐色土ブロック粒子、炭化物、礫微量混入
3	黒 褐 色（10YR3/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
4	黒 褐 色（10YR3/1）	硬度：弱 粘性：弱 黄褐色粒子、礫微量混入
5	黒 褐 色（10YR3/2）	硬度：弱 黄褐色粒子少量混入
6	褐　　色（10YR4/6）	黄褐色粒子、炭化物微量混入



層	土　　色	備　　考
1	暗 褐 色（10YR3/4）	黄褐色粒子、炭化物、礫微量混入
2	暗 褐 色（10YR3/4）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	暗 褐 色（7.5YR3/3）	硬度：弱 黄褐色炭化物、礫微量混入
4	褐　　色（7.5YR4/4）	黒色粒子、炭化物、礫微量混入
5	褐　　色（7.5YR4/6）	黄褐色土ブロック、炭化物微量混入
6	褐　　色（7.5YR4/3）	硬度：弱 黄褐色土ブロック、炭化物微量混入
7	褐　　色（10YR4/6）	黒褐色粒子、炭化物微量混入
8	明 褐 色（7.5YR3/3）	硬度：弱 褐色土ブロック混入



層	土　　色	備　　考
1	黒　　色（10YR3/1）	硬度：弱 粘性：弱 黄褐色粒子、礫微量混入
2	暗 褐 色（10YR3/4）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物、礫微量混入
3	暗 褐 色（10YR3/3）	黄褐色粒子、炭化物、礫微量混入
4	暗 褐 色（7.5YR3/4）	黄褐色土ブロック状に混入 炭化物微量混入
5	黒 褐 色（10YR3/3）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物、礫微量混入
6	暗 褐 色（10YR3/3）	炭化物、礫微量混入
7	暗 褐 色（7.5YR3/4）	硬度：弱 黄褐色土ブロック 炭化物礫微量混入
8	暗 褐 色（7.5YR3/4）	硬度：弱 褐色土ブロック 黒色粒子微量混入
9	褐　　色（7.5YR4/4）	炭化物微量混入
10	褐　　色（7.5YR4/4）	暗褐色土ブロック 炭化物微量混入
11	黄 褐 色（10YR5/8）	ブロック状

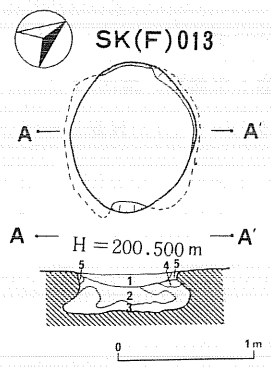
第11図　SK(F)010，011，012フラスコ状ピット実測図

第 30 表	遺構名	ＳＫ(F)009	出土地区	7 ― S	挿図番号	第10図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，楕円形			
	(140)cm	130cm	112cm	主軸方位	ＮＥ ⟷ ＳＷ			
出土遺物								
備考	ＳＫ(F)008が本遺構を切って構築されている。							

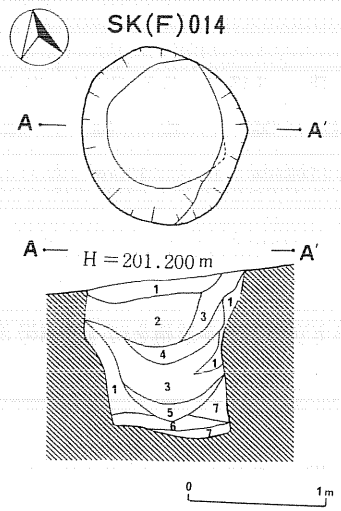
第 31 表	遺構名	ＳＫ(F)010	出土地区	6 ― U 6 ― V	挿図番号	第11図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，円形			
	69cm	68cm	78cm	主軸方位	⟷			
出土遺物								
備考								

第 32 表	遺構名	ＳＫ(F)011	出土地区	5 ― U	挿図番号	第11図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，楕円形			
	150cm	115cm	127cm	主軸方位	Ｅ ⟷ Ｗ			
出土遺物								
備考								

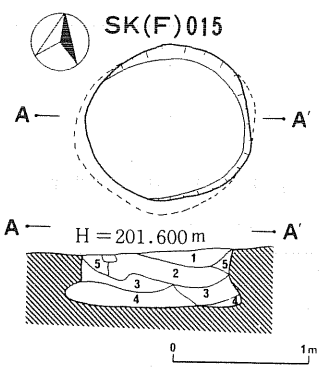
第 33 表	遺構名	ＳＫ(F)012	出土地区	6 ― W 6 ― X	挿図番号	第11図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，楕円形			
	131cm	124cm	142cm	主軸方位	ＮＥ ⟷ ＳＷ			
出土遺物								
備考								



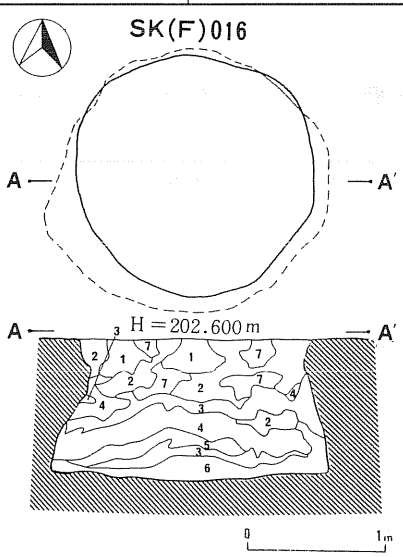
層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR1/7）	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	黒　色（10YR3/7）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	暗褐色（10YR3/3）	黄褐色土ブロック、炭化物微量混入
4	黒褐色（10YR3/2）	黄褐色土ブロック状に混入
5	黄褐色（10YR5/8）	硬度：弱



層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR3/7）	黄褐色粒子、炭化物、小石微量混入
2	黒褐色（10YR3/2）	黄褐色土ブロック粒子、炭化物微量混入
3	暗褐色（10YR3/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
4	暗褐色（10YR3/4）	硬度：強 黄褐色土ブロック、炭化物微量混入
5	にぶい黄褐色（10YR6/3）	炭化物、小石微量混入
6	褐　色（10YR5/4）	黄褐色土少量 小石微量混入
7	褐　色（10YR5/6）	硬度：強 小石微量混入



層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR3/7）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	暗褐色（10YR3/2）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	暗褐色（10YR3/3）	黄褐色粒子、炭化物微量混入
4	褐　色（10YR3/3）	硬度：強 黄褐色土、小石微量混入
5	褐　色（10YR5/4）	硬度：強 黄褐色土、炭化物微量混入



層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR3/7）	炭化物微量混入
2	黒褐色（10YR3/2）	炭化物微量混入
3	黒　色（10YR1/7）	炭化物微量混入
4	褐　色（10YR5/6）	
5	暗褐色（10YR3/3）	
6	黄褐色（10YR5/6）	
7	にぶい黄褐色（10YR5/4）	小石微量混入

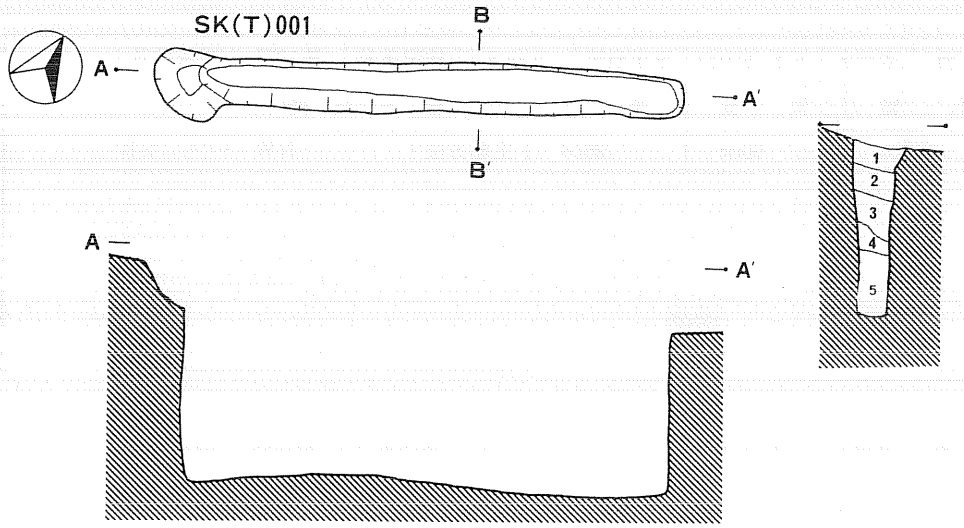
第12図　SK(F)013，014，015，016フラスコ状ピット実測図

第 34 表	遺構名	S K (F) 013	出土地区	9 — S	挿図番号	第12図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，楕円形			
	110cm	90cm	26cm	主軸方位	NW ⟷ SE			
出土遺物								
備考								

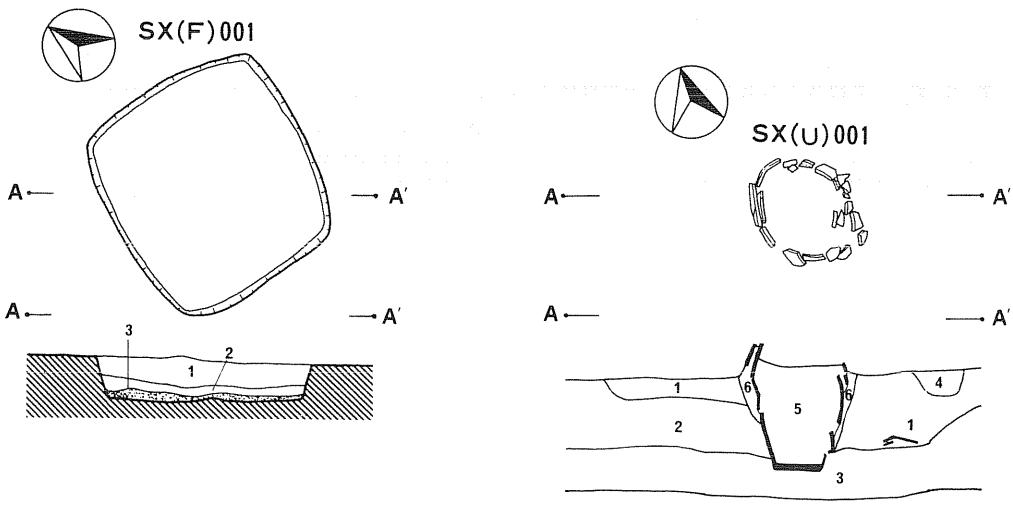
第 35 表	遺構名	S K (F) 014	出土地区	11 — R	挿図番号	第12図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，楕円形			
	131cm	118cm	112cm	主軸方位	N ⟷ S			
出土遺物								
備考								

第 36 表	遺構名	S K (F) 015	出土地区	11 — P 11 — Q	挿図番号	第12図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，円形			
	120cm	114cm	40cm	主軸方位	⟷			
出土遺物								
備考								

第 37 表	遺構名	S K (F) 016	出土地区	13 — L	挿図番号	第12図	図版番号	
法量	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	平面形，円形			
	198cm	172cm	104cm	主軸方位	⟷			
出土遺物								
備考								



層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR1/7）	
2	黒褐色（10YR3/1）	
3	黒褐色（10YR3/2）	
4	黄褐色（10YR5/6）	
5	暗褐色（10YR3/3）	



層	土　　色	備　　考
1	にぶい黄橙色（10YR6/4）	浮石
2	黒褐色（10YR3/2）	浮石を含む
3	炭化物	

層	土　　色	備　　考
1	暗褐色（10YR3/4）	
2	褐　色（10YR4/4）	
3	褐　色（10YR4/6）	
4	褐　色（10YR4/4）	
5	暗褐色（10YR3/3）	炭化物を含む
6	にぶい黄褐色（10YR4/3）	

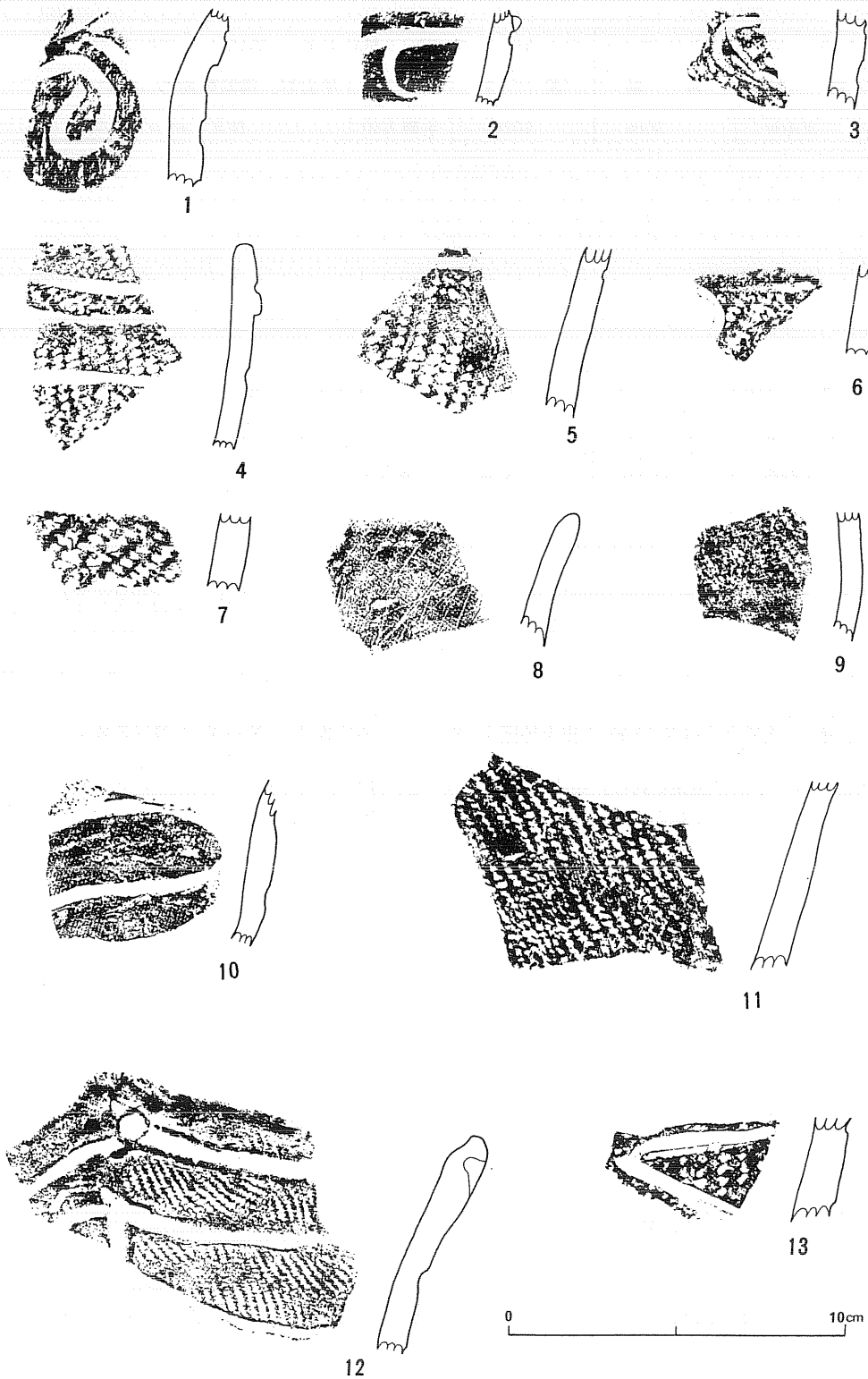
0　　1m

第13図　SK(T)001落し穴状遺構，SX(F)001焼土遺構，SX(U)001埋設土器　，

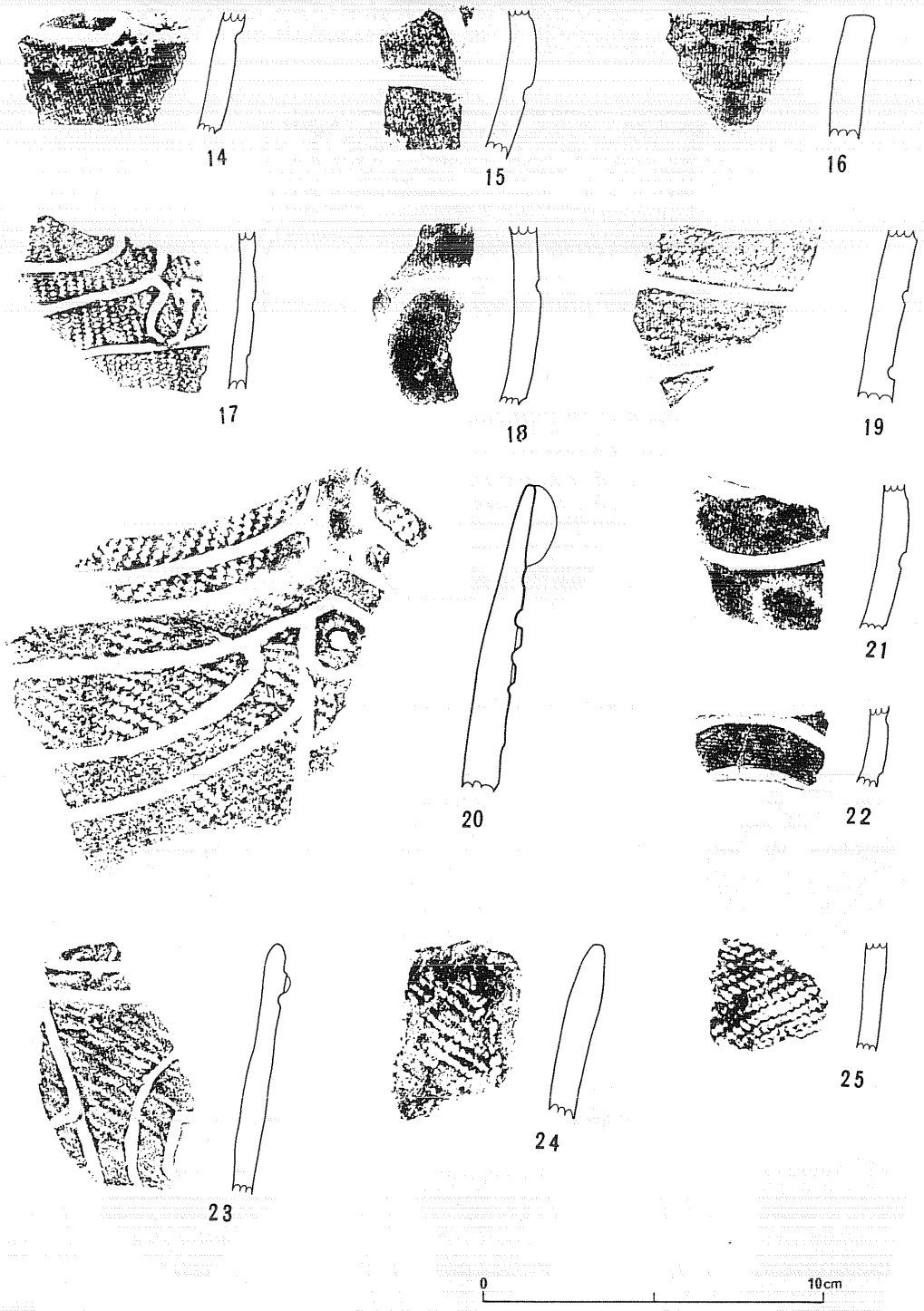
第 38 表	遺構名	ＳＫ(T)001	出土地区	5－Ⅰ	挿図番号	第13図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，溝状断面形，台形			
	304cm	30cm	102cm	主軸方位	ＮＥ ⟷ ＳＷ			
出土遺物								
備考								

第 39 表	遺構名	ＳＸ(F)001	出土地区	4－Ⅰ 5－Ⅰ	挿図番号	第13図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形，方形，断面形，台形			
	130cm	119cm	26cm	主軸方位	Ｎ ⟷ Ｓ			
出土遺物								
備考								

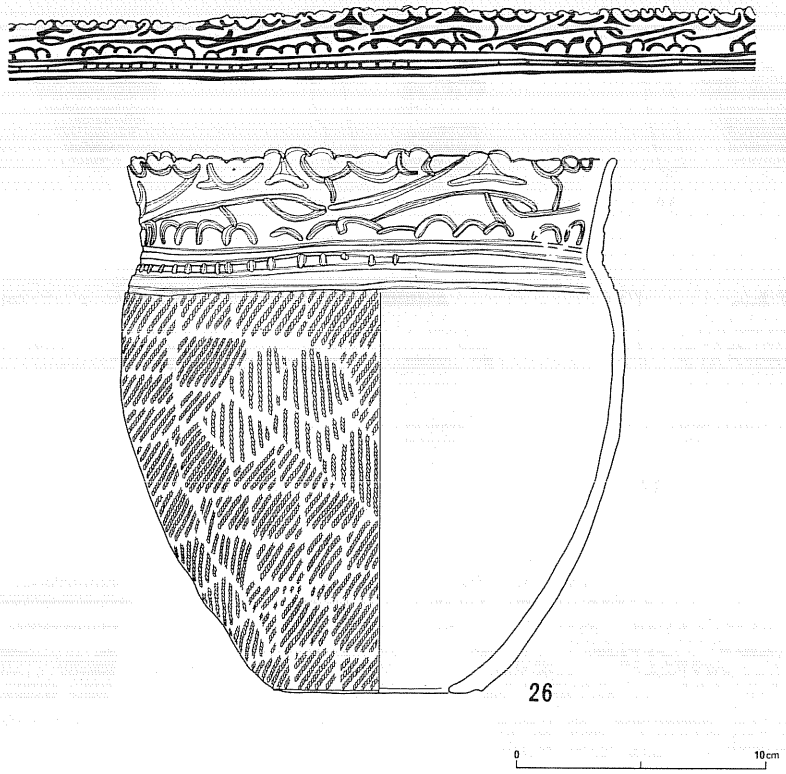
第 40 表	遺構名	ＳＸ(U)001	出土地区	8－U	挿図番号	第13図	図版番号	
調査区西側で単独に検出された。埋設のための掘り込みは小さい。 土器は口縁部を欠く深鉢形である。土器埋土中には炭化物の含有が少量見られた。								



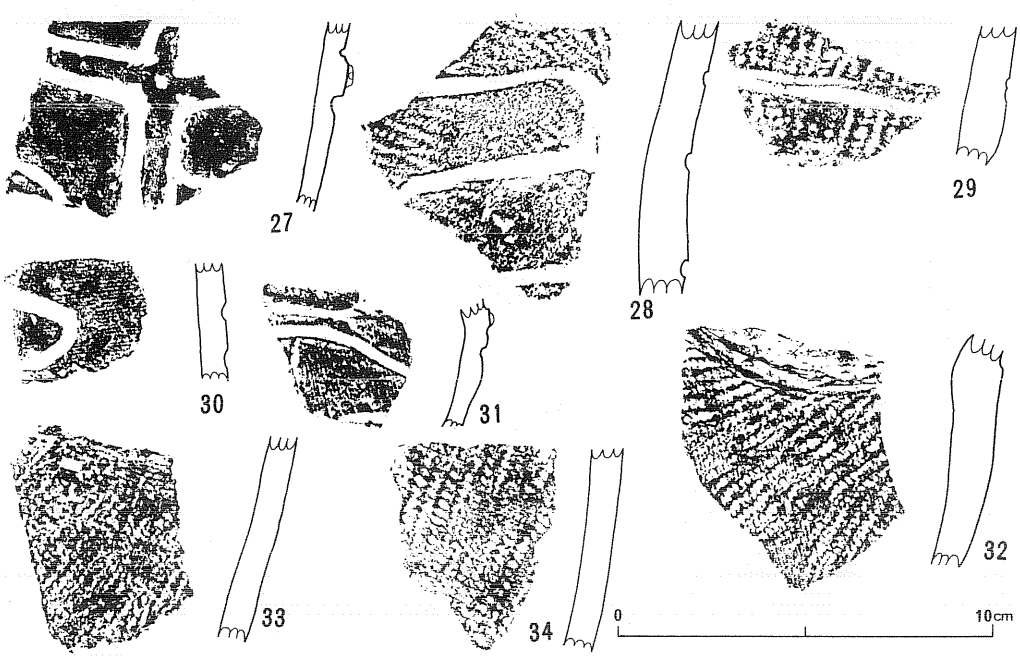
第14図　SI 001竪穴住居跡，SK001，002土壙出土土器(1)



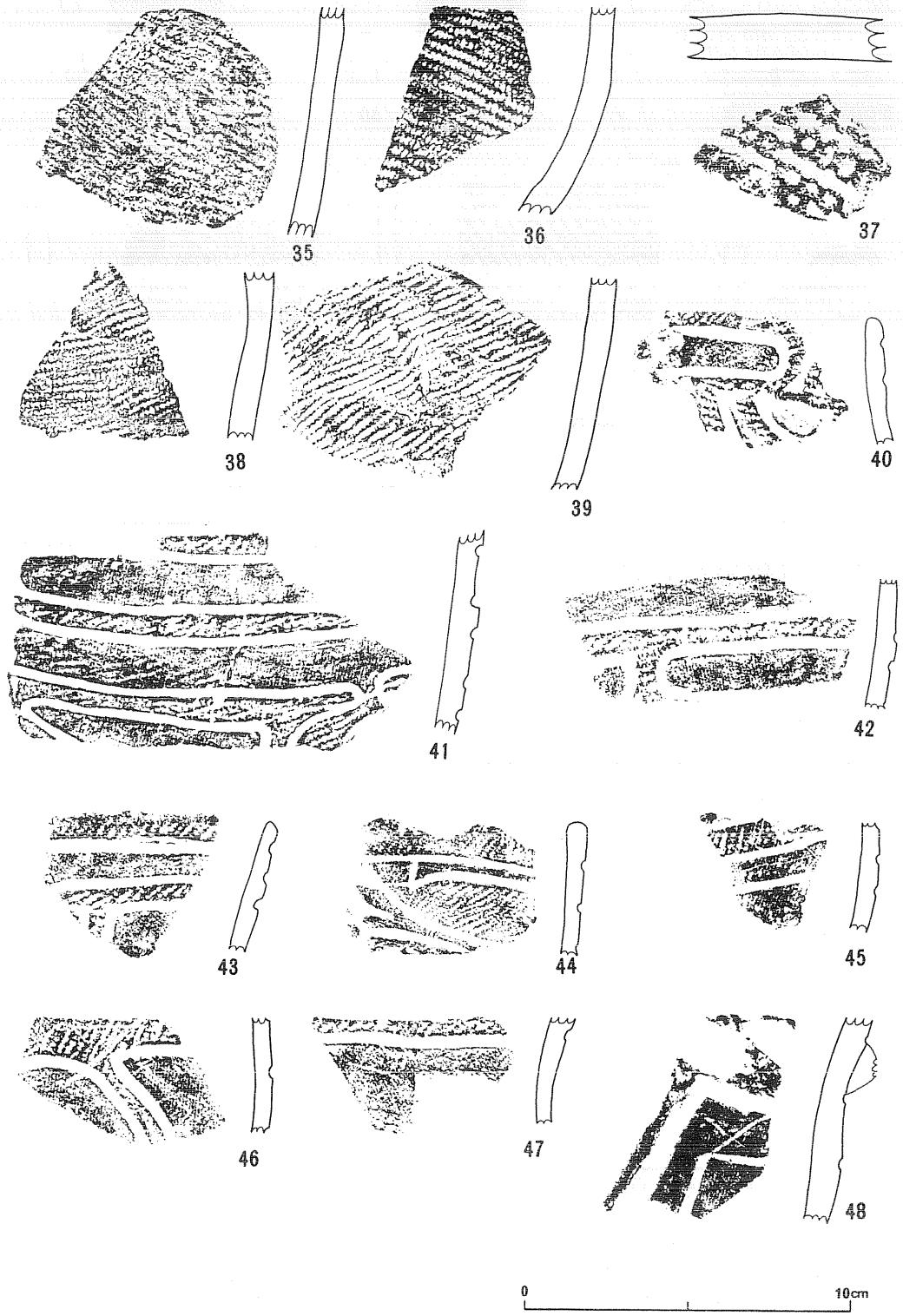
第15図　SK002，003，004土壙出土土器(2)



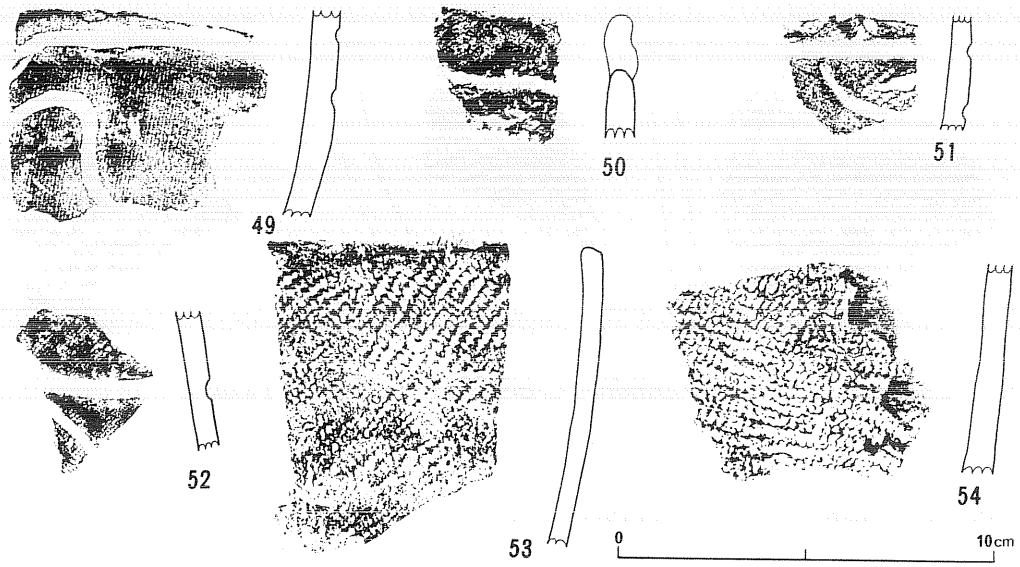
第16図　SK016土壙出土土器(3)



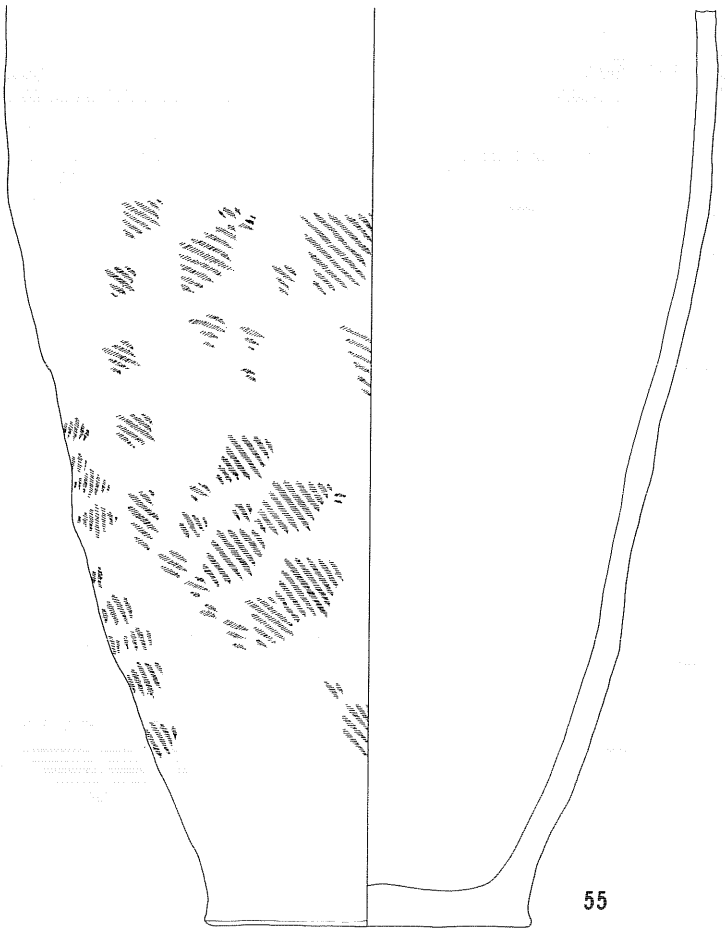
第17図　SK(F)001フラスコ状ピット出土土器(4)



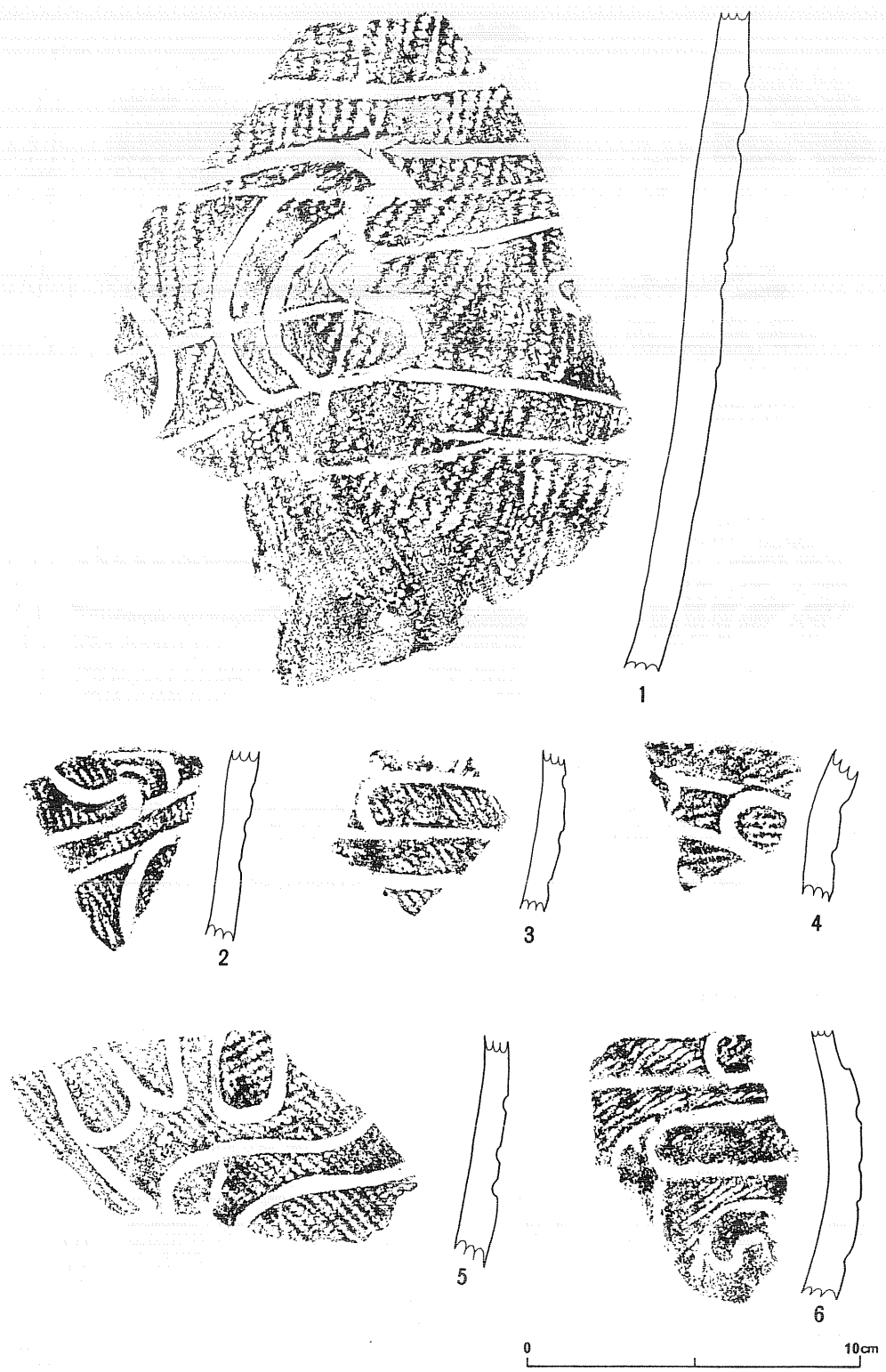
第18図　SK(F)005，006フラスコ状ピット出土土器(5)



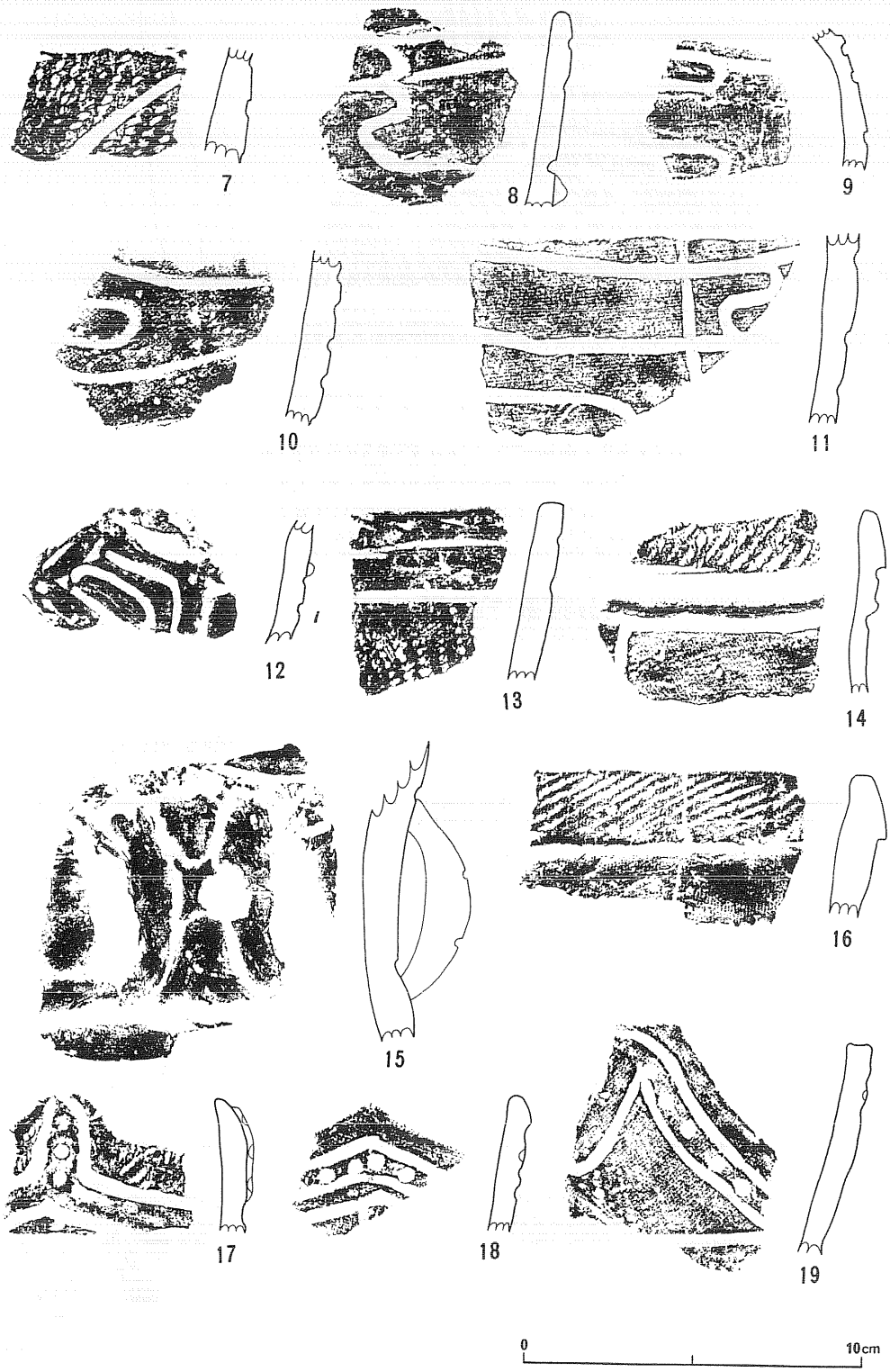
第19図　SK(F)007，009フラスコ状ピット出土土器(6)



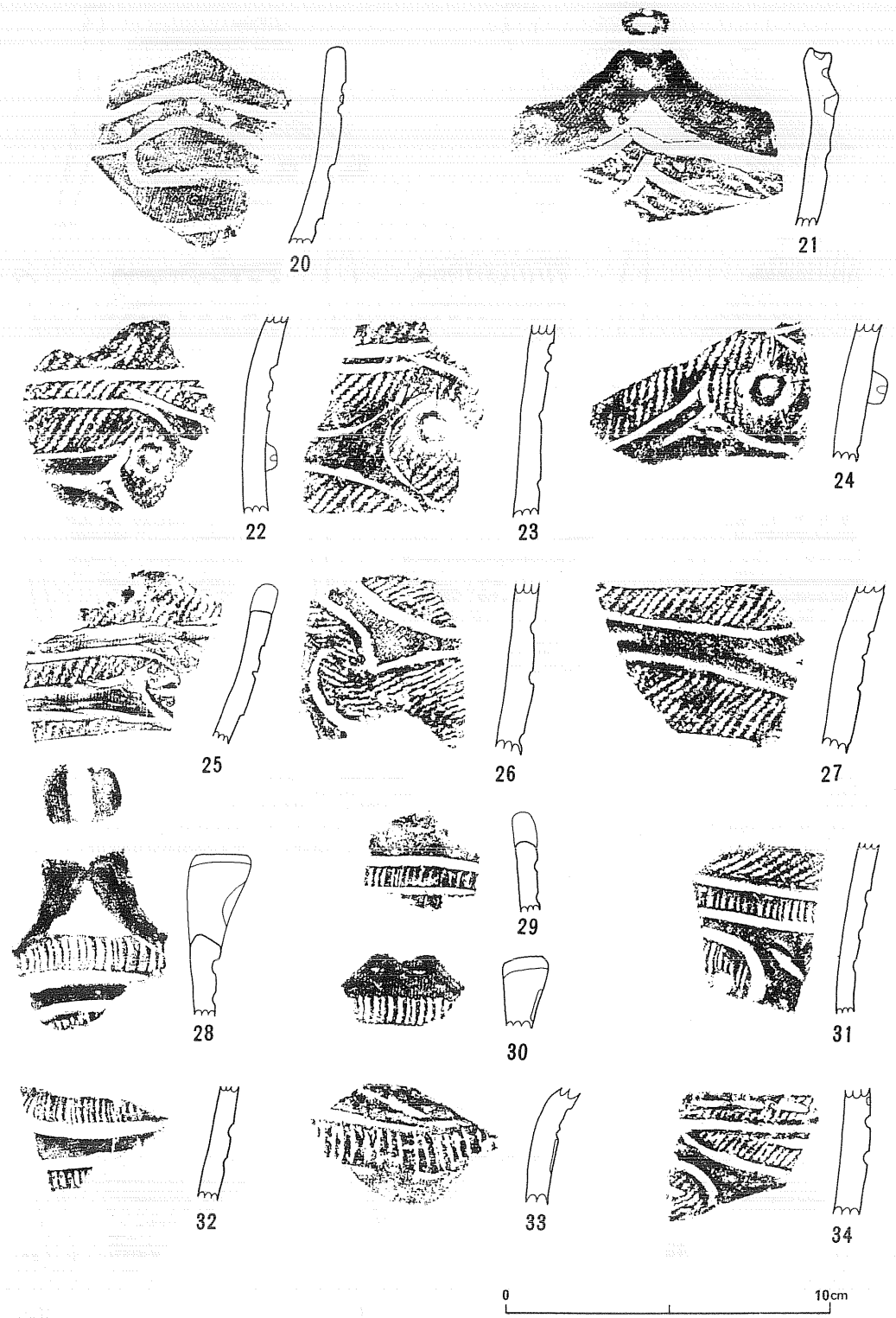
第20図　SX(U)001埋設土器実測図(7)



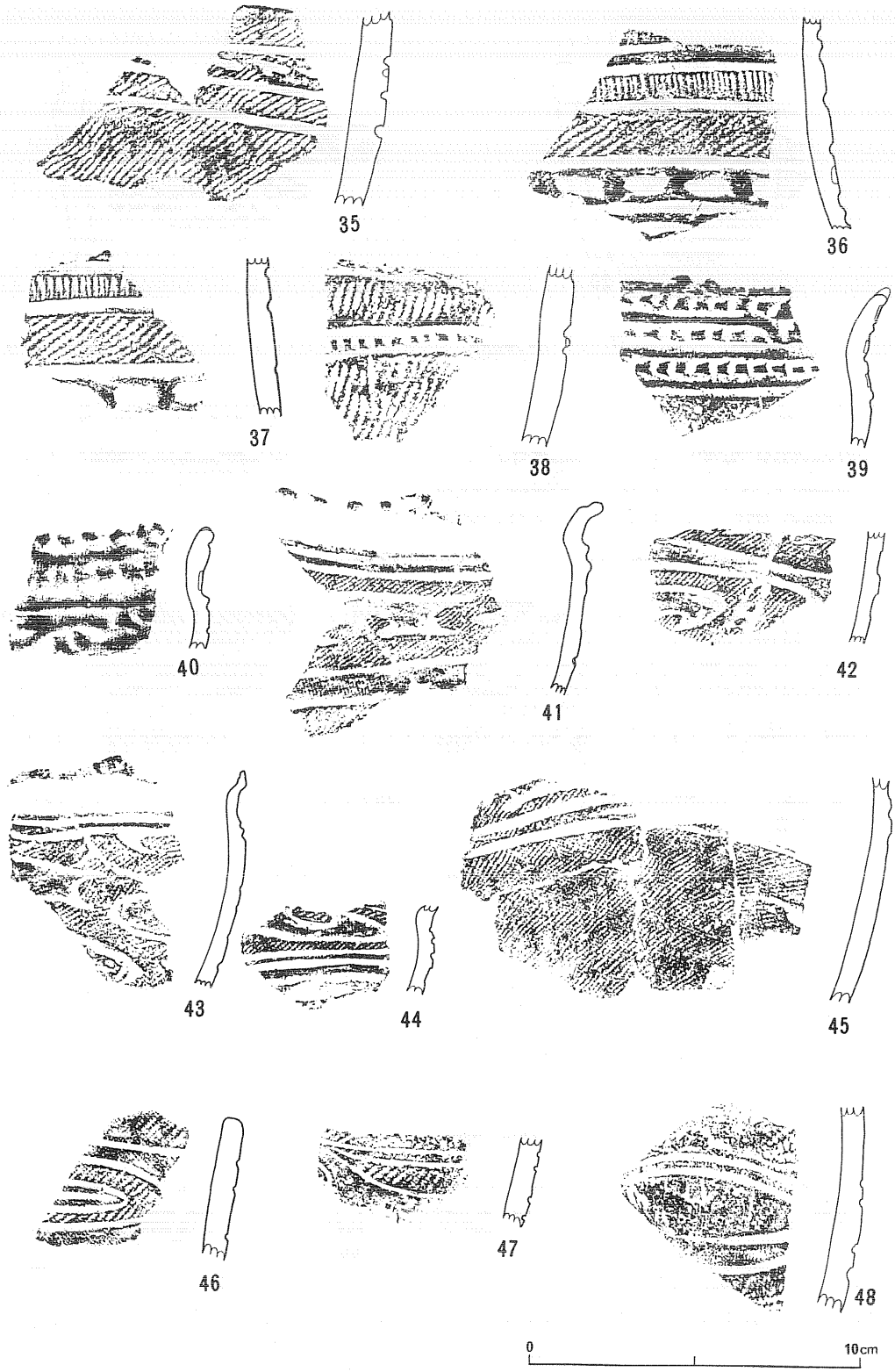
第21図　遺構外出土土器(1)



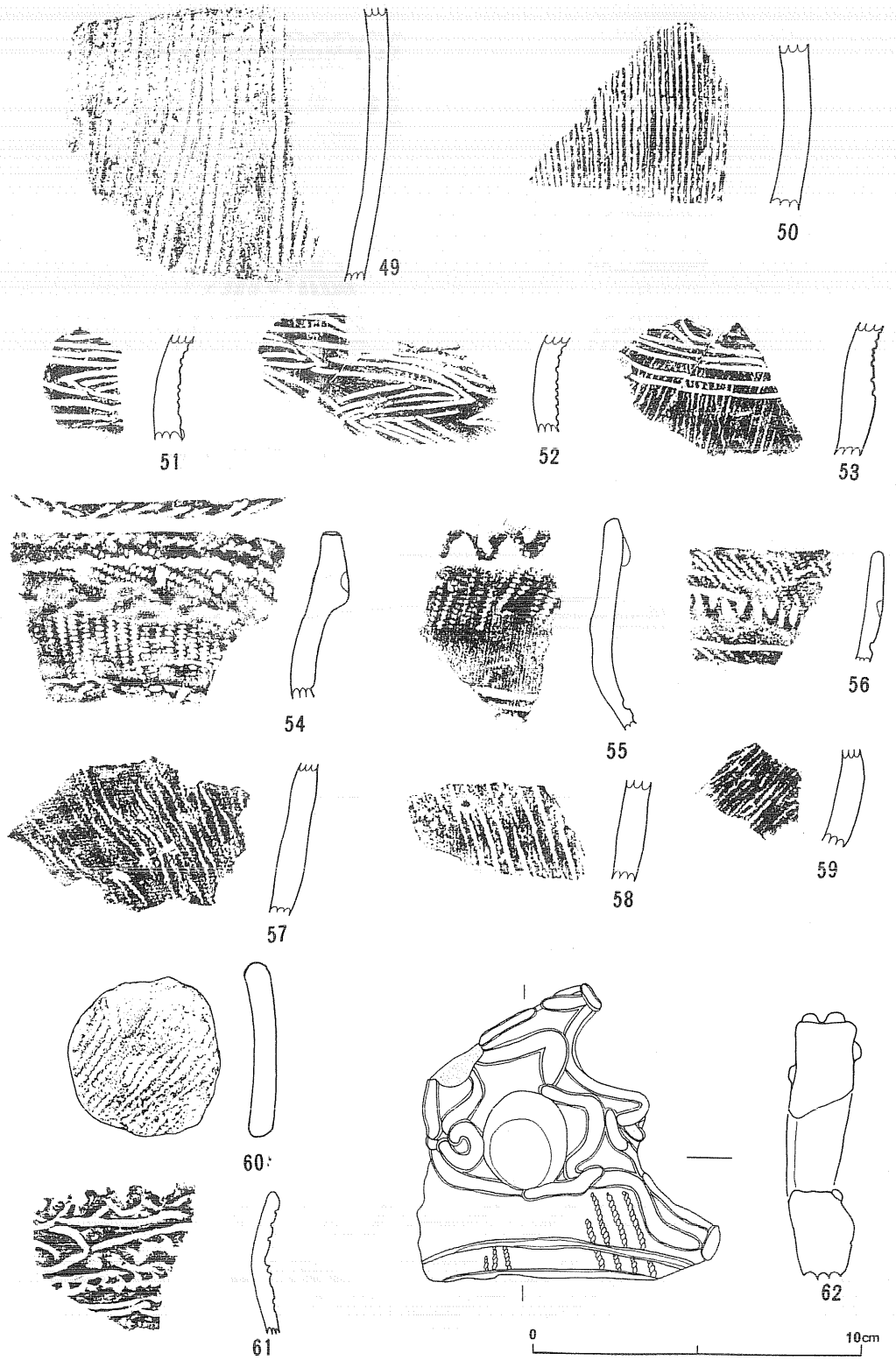
第22図　遺構外出土土器(2)



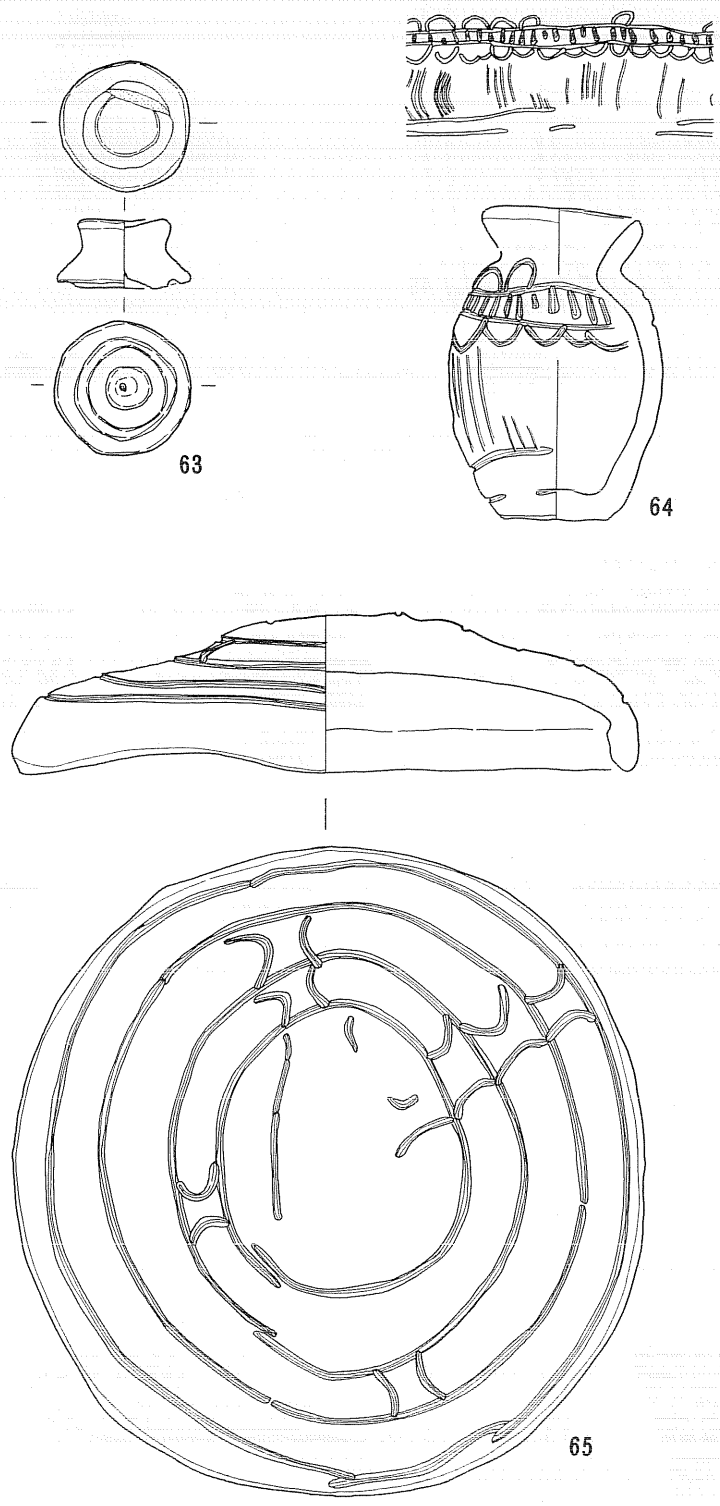
第23図　遺構外出土土器(3)



第24図　遺構外出土土器(4)

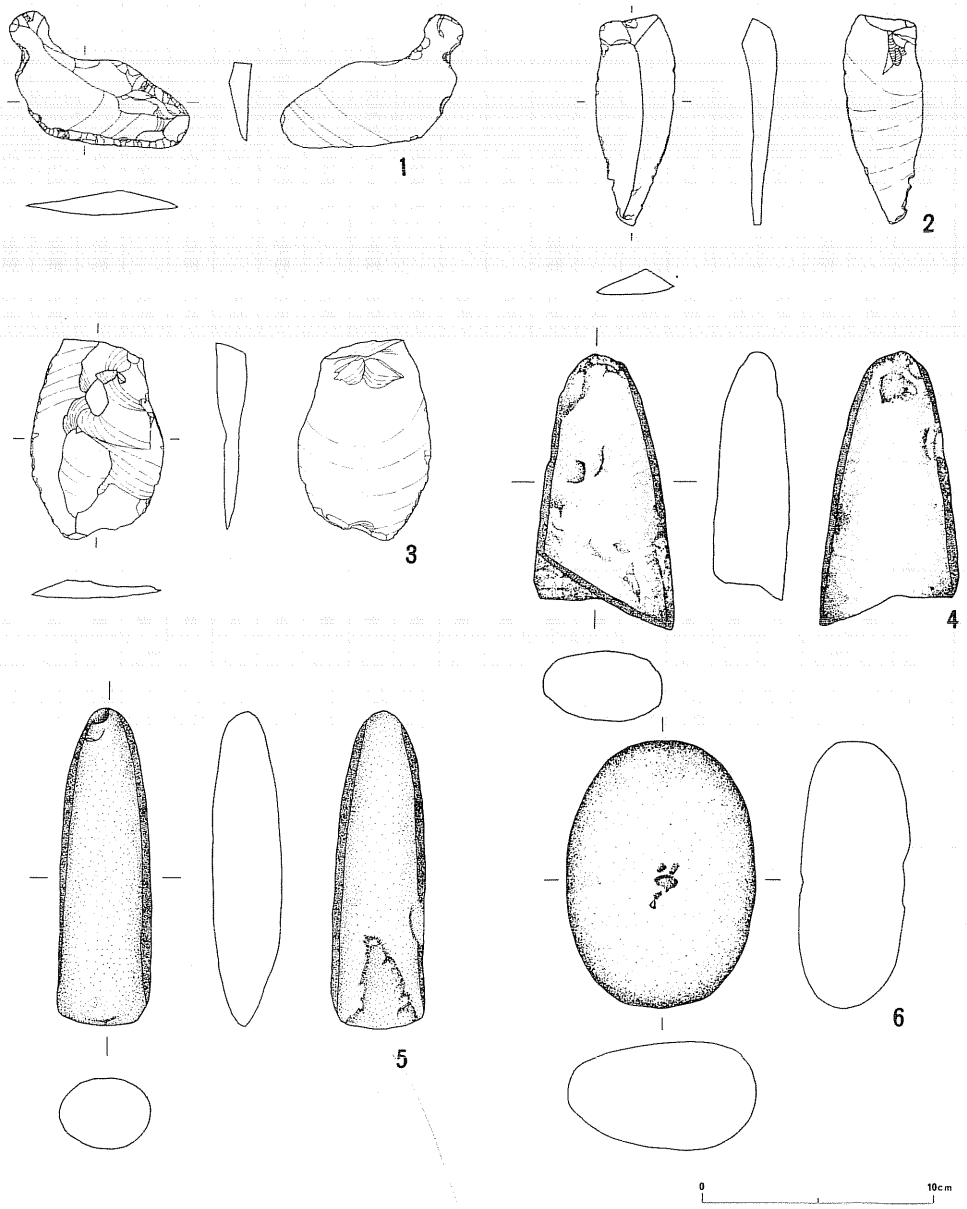


第25図　遺構外出土土器(5)



第26図　遺構外出土土器(6)

0　5cm



第27図　遺構外出土石器

第41表　竪穴住居跡・土壙・フラスコ状ピット出土土器観察表(1)

挿図番号	拓番	出土地点	RP番号	層位	部位	外面 文様	外面 色調	内面 調整	内面 色調	器厚(mm)	胎土	焼成	備考
14—1	32	SI001			胴部	RL縄文縦位回転→沈線	にぶい橙 7.5YR7/4	横位	褐 7.5YR5/1	9	石英・長石 密	良好	
2	27	SI001			胴部	沈線→磨消	にぶい黄橙 7.5YR7/3	斜位	にぶい橙 7.5YR6/4	7	石英・長石・雲母 密	良好	
3	25	SI001			胴部	縄文→沈線	浅黄橙 10YR8/3	縦位	浅黄橙 10YR8/4	10	石英・長石 密	良好	
4	167	SI001	5		口縁部	RL縄文縦位回転→沈線（折り返し口縁）	にぶい橙 7.5YR6/4	横位	にぶい橙 7.5YR6/4	8	石英・長石 粗	良好	
5	19	SI001			胴部	RL縄文横位回転→沈線	褐灰 7.5YR5/1	斜位	にぶい黄橙 10YR7/3	9	石英・長石 密	良好	
6	29	SI001			胴部	RL縄文縦位回転→沈線	浅黄橙 10YR8/3	斜位	にぶい黄橙 10YR7/3	10	石英・長石 密	良好	
7	30	SI001			胴部	RL縄文縦位回転	浅黄 2.5YR7/3	横位	にぶい黄橙 10YR7/3	9	石英・長石 密	良好	
8	28	SI001	8		口縁部	斜位・横位の線条痕	にぶい橙 5YR6/4	縦位	にぶい橙 5YR6/3	6	石英・長石・雲母 密	良好	
9	31	SI001			胴部		にぶい橙 5YR6/3	横位	にぶい橙 7.5YR6/3	7	石英・長石 密	良好	
10	70	SK001			胴部	沈線→磨消	灰褐 7.5YR5/2	横位	灰褐 7.5YR6/2	7	石英・長石 密	良好	
11	69	SK001	3		胴部	LR縄文縦位回転	にぶい橙 5YR6/4	横位	にぶい橙 5YR7/3	10	石英・長石 密	良好	
12	58	SK002			口縁部	LR縄文縦位回転→沈線→刺突	極暗赤褐 2.5YR2/3	横位	暗赤褐 2.5YR3/3	8	石英・長石・雲母 密	良好	外面スス付着
13	60	SK002	1		胴部	LR縄文横位回転→沈線	にぶい橙 7.5YR6/4	横位	にぶい橙 5YR6/4	10	石英・長石 密	良好	
15—14	57	SK002	2		胴部	沈線→磨消	にぶい橙 7.5YR6/3	斜位	にぶい橙 7.5YR6/4	7	石英・長石・雲母 密	良好	内面一部朱塗り
15	59	SK002	2		胴部	沈線→磨消	にぶい褐 7.5YR6/3	斜位	にぶい橙 7.5YR7/3	7	石英・長石 密	良好	
16	61	SK002	4		口縁部	磨消	褐灰 7.5YR5/1	横位	褐灰 7.5YR4/1	9	石英・長石・雲母 密	良好	
17	114	SK003			胴部	RL縄文縦位回転→沈線	にぶい赤褐 2.5YR5/4	縦位	赤灰 2.5YR4/1	6	石英・長石 密	良好	
18	143	SK003			胴部	沈線→磨消	暗赤褐 5YR3/2	縦位	明赤褐 2.5YR5/6	10	石英・長石・雲母 密	良好	
19	155	SK004	4		胴部	LR縄文斜位回転→沈線	にぶい褐 7.5YR5/3	斜位	にぶい橙 7.5YR6/4	11	石英・長石・雲母 密	良好	
20		SK004			口縁部	LR縄文斜位回転→貼付→沈線→刺突	にぶい褐 7.5YR6/3	斜位	にぶい褐 7.5YR5/3	11	石英・長石・雲母 密	良好	

第42表　土壙・フラスコ状ピット出土土器観察表(2)

挿図番号	拓番	出土地点	RP番号	層位	部位	外面 文様	外面 色調	内面 調整	内面 色調	器厚(mm)	胎土	焼成	備考
15—21	44	SK 007			胴部	沈線→磨消→朱塗り(?)	にぶい褐 7.5YR5/3	斜位	にぶい橙 7.5YR7/3	7	石英・長石 密	良好	
22	46—48	SK 007			胴部	沈線→磨消→朱塗り(?)	にぶい黄橙 10YR7/3	横位	にぶい橙 7.5YR7/3	7	石英・長石 密	良好	
23	43	SK 007			口縁部	L縄文縦位回転→沈線	灰褐 7.5YR5/2	横位→縦位	にぶい褐 7.5YR6/3	6	石英・長石・雲母 密	良好	
24	45	SK 007			口縁部	LR縄文縦位回転	橙 5YR6/6	斜位	橙 5YR6/8	8	石英・長石 密	良好	
25	47	SK 007			胴部	RL縄文横位回転	にぶい黄橙 10YR6/4	斜位	にぶい橙 7.5YR7/4	7	石英・長石 密	良好	
16—26		SK 016			完形	LR縄文横位斜位回転→沈線→刻目	にぶい褐 7.5YR5/4	横位	にぶい褐 7.5YR6/3	8	石英・長石 密	良好	
17—27	67	SK(F)01			胴部	隆線（刺突）→沈線→磨消	にぶい黄橙 10YR7/4	横位	にぶい橙 7.5YR6/3	7	石英・長石・雲母 密	良好	
28	2	SK(F)01	9		胴部	LR縄文横位回転→沈線	にぶい黄橙 10YR7/4	横位	橙 5YR6/6	13	石英・長石・雲母 密	良好	
29	62	SK(F)01			胴部	RL縄文縦位回転→沈線	にぶい橙 7.5YR7/3	斜位	橙 5YR6/6	11	石英・長石・雲母 密	良好	
30	169	SK(F)01	3		胴部	沈線→磨消	褐灰 7.5YR4/1	縦位	にぶい赤褐 10YR6/3	8	石英・長石・雲母 密	良好	
31	3	SK(F)01	9		胴部	沈線→磨消	橙 5YR6/6	横位	にぶい橙 7.5YR7/4	7	石英・長石 密	良好	
32	1	SK(F)01	5		胴部	LR縄文横位回転→沈線	にぶい黄橙 10YR7/4	横位	にぶい黄橙 10YR7/3	11	石英・長石 密	良好	
33	5	SK(F)01			胴部	LR縄文横位回転	にぶい橙 5YR6/4	横位	にぶい橙 7.5YR6/4	9	石英・長石・雲母 密	良好	
34	65	SK(F)01			胴部	LR縄文横位回転	にぶい橙 7.5YR6/4	縦位	にぶい褐 7.5YR6/3	8	石英・長石・雲母 密	良好	
18—35	53	SK(F)01			胴部	LR縄文横位回転	橙 7.5YR6/6	斜位	橙 7.5YR6/6	8	石英・長石 密	良好	
36	54	SK(F)01			胴部	LR縄文横位回転	にぶい黄橙 10YR7/3	横位	にぶい黄橙 10YR6/4	9	石英・長石 密	良好	
37	64	SK(F)01			底部	網代痕	橙 2.5YR6/6	—	橙 2.5YR6/6	11	石英・長石 密	良好	
38	41	SK(F)05	3		胴部	LR縄文横位回転	にぶい褐 7.5YR6/3	斜位→横位	にぶい黄橙 10YR7/3	8	石英・長石 密	良好	
39	38	SK(F)05	2		胴部	RL縄文縦位回転→沈線	にぶい橙 7.5YR6/4	斜位	にぶい黄橙 10YR7/4	7	石英・長石 密	良好	
40	151	SK(F)06			口縁部	隆線→LR縄文縦位斜位回転→沈線→磨消	にぶい赤褐 5YR5/4	横位	にぶい橙 7.5YR6/4	6	石英・長石 密	良好	

第43表　フラスコ状ピット出土土器・埋設土器観察表(3)

挿図番号	拓番	出土地点	RP番号	層位	部位	外面 文様	外面 色調	内面 調整	内面 色調	器厚(mm)	胎土	焼成	備考
18—41	127	SK(F)05			胴部	RL縄文横位回転→沈線→磨消	黒褐 10YR3/1	横位	にぶい橙 7.5YR6/4	7	石英・長石・雲母 密	良好	
42	150	SK(F)05			胴部	LR縄文横位回転→沈線→磨消	にぶい橙 7.5YR6/4	横位	にぶい橙 7.5YR6/4	6	石英・長石・雲母 密	良好	
43	147	SK(F)06			口縁部	RL縄文縦位回転→沈線→磨消	橙 5YR6/6	横位	にぶい赤褐 5YR5/4	6	石英・長石 密	良好	
44	149	SK(F)06			口縁部	波状口縁（貼コブ），RL縄文横位回転→沈線→磨消	にぶい橙 7.5YR6/4	横位	にぶい褐 7.5YR5/3	6	石英・長石 密	良好	
45	148	SK(F)06			口縁部	LR縄文横位回転→沈線→磨消	にぶい褐 7.5YR5/4	横位	黒褐 10YR3/1	6	石英・長石 密	良好	
46	152	SK(F)06			胴部	LR縄文縦位回転→沈線→磨消	にぶい褐 7.5YR5/3	横位	にぶい褐 7.5YR5/4	6	石英・長石 密	良好	
47	145	SK(F)06	4		胴部	RL縄文縦位回転→沈線→磨消	橙 7.5YR6/6	横位	にぶい橙 7.5YR6/4	8	石英・長石・雲母 密	良好	
48	146	SK(F)07			胴部	隆線→沈線→磨消	にぶい橙 7.5YR6/4	縦位	にぶい赤褐 5YR5/4	10	石英・長石 密	良好	
19—49	144	SK(F)07			胴部	沈線→磨消	にぶい赤褐 2.5YR5/4	縦位→横位	明赤褐 2.5YR5/6	9	石英・長石・雲母 密	良好	
50	159	SK(F)09	2		口縁部	（折り返し口縁）	灰赤 2.5YR5/2	横位	にぶい橙 5YR6/4	9	石英・長石・雲母 密	良好	
51	164	SK(F)09			胴部	RL縄文縦位回転→沈線→磨消	にぶい橙 7.5YR6/4	横位	にぶい黄褐 10YR5/3	6	石英・長石 密	良好	
52	160	SK(F)09			胴部	沈線→磨消→朱塗り(?)	にぶい橙 7.5YR6/4	横位	にぶい橙 7.5YR6/1	7	石英・長石・雲母 密	良好	
53	163	SK(F)09	2		口縁部	LR縄文横位回転	黒褐 5YR3/1	横位→斜位	にぶい褐 7.5YR5/3	6	石英・長石 密	良好	
54	165	SK(F)09	1		胴部	LR縄文横位回転	にぶい橙 7.5YR6/4	斜位→横位	にぶい褐 7.5YR5/3	8	石英・長石 密	良好	
20—55	—	SX(U)01			～底部	L縄文縦位回転	にぶい橙 7.5YR7/4	横位	橙 5YR6/6	10	石英・長石 密	良好	外面一部スス付着

第44表　遺構外出土土器観察表(1)

挿図番号	拓番	出土地点	RP番号	層位	部位	外面 文様	外面 色調	内面 調整	内面 色調	器厚(mm)	胎土	焼成	備考
21—1	168				胴部	LR縄文斜位回転→沈線	橙 7.5YR6/6	横位	にぶい橙 7.5YR6/4	12	石英・長石 密	良好	
2	109	9—S			胴部	LR縄文縦位回転→沈線	にぶい橙 7.5YR6/4	斜位	にぶい橙 5YR6/4	8	石英・長石 密	良好	
3	98	9—V SK08			胴部	LR縄文横位回転→沈線	黒褐 5YR3/1	横位	灰褐 7.5YR4/2	8	石英・長石 粗	不良	外面スス付着
4	110	9—S			胴部	LR縄文縦位回転→沈線	にぶい橙 7.5YR7/4	斜位	灰黄褐 10YR5/2	9	石英・長石 密	良好	
5	105 135	10—T			胴部	LR縄文縦位回転→沈線	褐灰 7.5YR4/1	縦位	にぶい橙 7.5YR6/4	10	石英・長石 密	良好	外面スス付着
6	51	6—T			胴部	LR縄文横位回転→沈線→磨消	黒褐 10YR3/1	斜位	にぶい橙 7.5YR6/4	10	石英・長石 粗	不良	
22—7	100	9—V			胴部	RL縄文縦位回転→沈線	にぶい橙 7.5YR6/4	横位	にぶい橙 7.5YR6/4	11	石英・長石・雲母 密	良好	外面スス付着
8	139	10—T			口縁部	隆線→沈線→磨消	にぶい橙 5YR6/4	斜位	にぶい赤褐 5YR5/3	9	石英・長石・雲母 密	良好	
9	39	7—R			胴部	沈線→磨消	橙 5YR6/6	横位	橙 7.5YR6/6	7	石英・長石 密	良好	
10	128	11—S			胴部	沈線→磨消	にぶい褐 7.5YR5/3	縦位	にぶい橙 7.5YR7/4	9	石英・長石 密	良好	外面朱塗り
11	103	9—T			胴部	沈線→磨消	黒褐 5YR3/1	斜位	明赤褐 2.5YR5/6	10	石英・長石・雲母 密	良好	
12	92	9—R	47		胴部	隆線（刺突）→沈線→磨消	橙 7.5YR6/6	横位	橙 5YR6/6	7	石英・長石・雲母 密	良好	
13	108	9—T			口縁部	RL縄文縦位回転→沈線→磨消	橙 5YR6/6	横位	橙 5YR6/6	8	石英・長石 密	良好	
14	116	10—T			口縁部	L縄文横位回転→沈線→磨消	灰赤 2.5YR4/2	横位	灰赤 2.5YR4/2	6	石英・長石・雲母 密	良好	外面スス付着
15	142	10—T			胴部	沈線　橋状把手	にぶい橙 5YR6/4	横位	にぶい赤褐 5YR5/4	12	石英・長石・雲母 密	良好	
16	123	9—T	一括		口縁部	L縄文横位回転→磨消 折り返し口縁	にぶい橙 5YR6/4	横位	灰褐 5YR5/2	11	石英・長石・雲母 密	良好	外面スス付着
7	106	10—T			口縁部	山形突起 L縄文縦位→沈線→刺突→磨消	黒褐 7.5YR3/1	横位	灰褐 5YR4/2	7	石英・長石 密	良好	外面スス付着
18	107	9—U			口縁部	波状口縁→沈線→刺突→磨消	にぶい赤褐 5YR5/3	横位	灰褐 5YR5/2	7	石英・長石・雲母 密	良好	外面スス付着
19	104	9—U			口縁部	山形突起 LR縄文縦位→沈線→刺突→磨消	にぶい赤褐 2.5YR5/3	斜位	灰褐 5YR5/2	8	石英・長石 密	良好	外面スス付着
23—20	138	9—U	一括		口縁部	波状口縁・沈線→刺突→磨消	にぶい赤褐 5YR5/3	横位	にぶい赤褐 5YR5/4	7	石英・長石 密	良好	

第45表　遺構外出土土器観察表(2)

挿図番号	拓番	出土地点	RP番号	層位	部位	外面 文様	外面 色調	内面 調整	内面 色調	器厚(mm)	胎土	焼成	備考
23—21	113	9—S	一括		口縁部	山形突起（刺突） L縄文縦位→沈線→刺突→磨消	褐灰 10YR4/1	横位	にぶい橙 7.5YR7/3	8	石英・長石　密	良好	
22	111	9—S	一括		胴部	沈線→刻目	にぶい橙 7.5YR7/4	横位	にぶい褐 7.5YR6/3	7	石英・長石　密	良好	
23	119	9—S	19		胴部	RL縄文縦位回転 貼コブ（刺突）→沈線→磨消	灰赤 2.5YR5/2	横位	にぶい赤褐 5YR5/3	8	石英・長石・雲母　密	良好	外面スス付着
24	101	9—S			胴部	LR縄文縦位回転 貼コブ（刺突）→沈線→磨消	にぶい褐 7.5YR6/3	横位	にぶい橙 7.5YR7/4	7	石英・長石・雲母　粗	不良	
25	68	8—K			口縁部	RL縄文縦位回転 山形突起→沈線→磨消	にぶい赤褐 5YR5/4	斜位	明赤褐 5YR5/6	7	石英・長石　密	良好	外面スス付着
26	115	9—S	45		胴部	LR縄文横位回転→沈線→磨消	にぶい橙 7.5YR6/4	横位	にぶい黄褐 0YR6/3	7	石英・長石　密	良好	
27	152	SK(F)06	一括		胴部	LR縄文縦位回転→沈線→磨消	にぶい褐 7.5YR5/3	横位	にぶい褐 7.5YR5/4	6	石英・長石　密	良好	
28	166	7—S			口縁部	山形突起（刻目）沈線→刻目→磨消	灰褐 7.5YR6/2	横位	灰褐 7.5YR5/3	7	石英・長石・雲母　密	良好	外面スス付着
29	131	9—S	一括		口縁部	波状口縁・沈線→刻目→磨消	にぶい橙 7.5YR6/4	横位	灰褐 7.5YR5/2	7	石英・長石　密	良好	外面スス付着
30	137	9—S	一括			波状口縁・刻目	にぶい橙 7.5YR6/4	斜位	黒褐 5YR3/1	8	石英・長石　密	良好	
31	130	9—U	一括		胴部	LR縄文横位回転→沈線→刻目→刺突→磨消	にぶい橙 7.5YR6/4	斜位	にぶい褐 7.5YR6/3	6	石英・長石　密	良好	内面スス付着
32	108	9—T			口縁部	RL縄文縦位回転→沈線→磨消	橙 5YR6/6	横位	橙 5YR6/6	8	石英・長石　密	良好	
33	111	9—S	一括		胴部	沈線→刻目	にぶい橙 7.5YR7/4	横位	にぶい褐 7.5YR6/3	7	石英・長石　密	良好	
34	117	9—S	一括		胴部	LR縄文横位回転→沈線→刺突→磨消	にぶい黄褐 10YR5/2	斜位	灰黄褐 10YR6/2	8	石英・長石・雲母　密	良好	
24—35	120	9—S	一括		胴部	LR縄文横位回転→沈線→刺突	にぶい黄橙 10YR7/4	斜位	灰褐 7.5YR5/2	9	石英・長石　密	良好	外面スス付着
36	134	9—S	一括		胴部	LR縄文横位回転→沈線→刺突・刻目	灰褐 7.5YR5/2	横位	にぶい褐 7.5YR6/3	7	石英・長石　密	良好	
37	136	9—S			胴部	LR縄文横位回転→沈線→刺突・刻目	にぶい褐 7.5YR5/3	横位	灰褐 7.5YR5/3	7	石英・長石　密	良好	外面スス付着
38	121	9—S	一括		胴部	LR縄文縦位回転→沈線→刻目	にぶい橙 7.5YR6/4	斜位	にぶい橙 7.5YR7/4	8	石英・長石　密	良好	
39	112	6—P			口縁部	口唇部刻み LR縄文横位回転→沈線→刻目	にぶい橙 7.5YR6/4	横位	灰褐 5YR5/2	4	石英・長石・雲母　密	良好	外面スス付着
40	88	9—R	26		口縁部	口唇部に刻目と沈線→刻目	橙 2.5YR6/6	横位	黒褐 5YR3/1	5	石英・長石　密	良好	

第46表　遺構外出土土器観察表(3)

挿図番号	拓番	出土地点	RP番号	層位	部位	外面 文様	外面 色調	内面 調整	内面 色調	器厚(mm)	胎土	焼成	備考
24—41	75 83	9—R	45		口縁部	LR縄文横位回転 口唇部波状刻み→沈線→磨消	にぶい赤褐 2.5YR5/4	横位	にぶい赤褐 5YR5/4	5	石英・長石　密	良好	
42	87	9—R	44		胴部	LR縄文横位回転→沈線→磨消	明赤褐 5YR5/6	横位	にぶい赤褐 5YR5/4	5	石英・長石・雲母　密	良好	
43		9—R			口縁部	LR縄文横位回転→沈線→磨消	明赤褐 5YR5/6	横位	明赤褐 5YR5/6	5	石英・長石・雲母　密	良好	
44	80	9—R	44		胴部	RL縄文縦位回転→沈線	橙 5YR6/6	横位	明赤褐 5YR5/6	5	石英・長石・雲母　密	良好	
45	90	9—R	44		胴部	LR縄文横位回転→沈線	明赤褐 5YR5/6	斜位	にぶい赤褐 5YR5/4	6	石英・長石　密	良好	
46	126	9—S	一括		口縁部	LR縄文縦位回転 (波状口縁)→沈線→磨消	にぶい橙 5YR6/4	横位	にぶい赤褐 5YR5/3	7	石英・長石・雲母　密	良好	
47	125	10—T			胴部	RL縄文縦位回転→沈線→磨消	明赤褐 2.5YR5/6	横位	にぶい赤褐 2.5YR4/3	6	石英・長石・雲母　密	不良	外面スス付着
48	122	9—T	一括		胴部	LR縄文横位回転→沈線→磨消	にぶい赤褐 2.5YR5/4	横位→斜位	橙 7.5YR6/6	7	石英・長石・雲母　密	良好	外面スス付着
25—49	153	8—S			胴部	条痕	にぶい褐 10YR7/3	斜位	にぶい黄褐 10YR7/4	8	石英・長石　密	良好	外面スス付着
50	140	9—I			胴部	線条痕（櫛目状の条痕）	橙 7.5YR6/6	横位	橙 7.5YR6/6	10	石英・長石　密	良好	
51	97	7—O			胴部	沈線→磨消	にぶい黄橙 10YR7/3	横位	にぶい橙 5YR6/4	7	石英・長石　密	良好	
52	34 96	7—O			胴部	L撚紋→沈線→磨消	にぶい橙 7.5YR7/4	斜位	にぶい橙 7.5YR7/3	6	石英・長石　密	良好	
53	42 95	7—O			胴部	L撚紋→沈線	にぶい橙 5YR6/4	横位	にぶい橙 5YR6/3	7	石英・長石　密	良好	
54	124	10—T			口縁部	隆線→RL縄文縦位斜位回転→RL縄文左痕 沈線→刺突・口唇部小波状突起・刻目	灰褐 5YR4/2	横位	灰褐 7.5YR4/2	7	石英・長石・雲母　密	良好	外面スス付着
55	129	9—U			口縁部	隆線→RL縄文縦位回転→刺突・沈線	にぶい橙 7.5YR7/4	横位	にぶい褐 7.5YR5/3	8	石英・長石・雲母　密	良好	内面スス付着
56	133	9—S	一括		口縁部	RL縄文縦位回転→交互刺突・沈線	にぶい赤褐 5YR5/3	横位	にぶい橙 5YR6/4	6	石英・長石・雲母　密	良好	外面スス付着
57	72	10—K			胴部	L撚紋	にぶい橙 7.5YR7/4	横位	にぶい橙 7.5YR7/4	6	石英・長石　密	良好	
58	73	4—R			胴部	L撚紋	暗赤褐 2.5YR3/2	斜位	にぶい赤褐 2.5YR5/4	8	石英・長石　密	良好	外面スス付着
59	94	7—O			胴部	撚紋	にぶい黄橙 10YR6/3	横位	にぶい橙 5YR6/4	6	石英・長石　密	良好	
60	132	7—S				LR縄文（円盤状製品）	灰褐 7.5YR5/2	縦位	にぶい橙 7.5YR6/4	8	石英・長石　密	良好	

第47表　遺構外出土土器観察表(4)

挿図番号	拓番	出土地点	RP番号	層位	部位	外面 文様	外面 色調	内面 調整	内面 色調	器厚(mm)	胎土	焼成	備考
25—61	175	表採			口縁部	沈線→刻み	黒褐 7.5YR3/1	横位	黒褐 7.5YR3/2	5	石英・長石・雲母 密	良好	
62	—	表採			把手	LR縄文縦位回転→沈線・隆線	にぶい橙 7.5YR6/4		にぶい橙 7.5YR6/4	18	石英・長石 密	良好	
26—63	—					耳飾り	浅黄褐 10YR8/3			18	密	良好	
64	—				完形	沈線→刺突	にぶい黄褐 10YR7/3		浅黄橙 10YR8/3	7	密	良好	
65	—				完形	沈線	浅黄橙 10YR8/3		浅黄橙 10YR8/4	15	密	良好	

第48表　遺構外出土石器観察表

図版番号	挿図番号	名　称	出土地域	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　質	備　考
14	27—1	石　匙	試掘トレンチ	6.5	2.5	1.0	29.5	頁　岩	
14	27—2	掻　器	13 — P	8.9	3.3	1.4	29.0	砂　岩	
14	27—4	掻　器	13 — J	8.1	5.7	1.3	43.8	砂　岩	
14	27—4	磨製石斧	4 — P	10.5	5.0	3.0	295.0		
14	27—5	磨製石斧	SK(F)002	13.7	3.9	3.0	260.0	安山岩	
14	27—6	凹　石	7 — T	11.6	8.0	4.6	680.0	安山岩	

6．遺構と遺物

(1) 遺構

本遺跡においては，36基におよぶ土壙とフラスコ状ピットが検出されているが，時期の判別できるものは縄文後期の9基，晩期の1基にすぎない。しかし，調査区西側に集中する土壙群は，遺構外の出土土器からみても多くは縄文後期と考えられる。平面形はいずれも円形，楕円形を基調とするもので，長方形を呈しているものも1例ある。フラスコ状ピットは，断面形において明確なくびれ部分が見られない袋状と言われるものが大部分である。

晩期の土壙は調査区東側にみられ，後期の土壙群と位置を異にしている。ＳＫ016としたこの土壙からは，完形の土器が出土している。出土状態からみて，土壙構築後に壁際の袋状を呈している部分に埋納されたような状態で横倒しになって検出されたものである。土器は，内湾して立ちあがる胴部が頸部で若干ひきしまり，外反気味に口縁部に至る甕形土器である。口唇部には2個1対の小突起が見られる。底面は焼成後に打ち欠かれた状態を呈している。頸部の4条の平行沈線は，口縁部と胴部の文様帯を分ける。口縁部は，6単位の入組文を中心に上下に連弧状文，三叉文を配している。また，外面体上半部には煤状炭化物の付着が見られる。

埋設土器は，調査区西側で単独に正立して検出された。埋設のための掘り込みは小さく，下部ではほとんど土器と密着していた。土器は底部から外反しながらまっすぐ立ちあがる深鉢形で，口縁部を欠く。無節の縄文のみが施されているものである。なお，土器埋土中には炭化物の含有が認められた。

本調査で確認された1棟の住居跡は，多くのフラスコ状ピットや土壙群と時期を一にしている。しかし，集落跡が住居群を中心に構成されていると考えるならば，この遺跡におけるような住居が1棟のみで，残りは貯蔵穴，墓壙と考えられる土壙群が占めていることは不自然で，さらに地形から見て南北に伸びるであろうとされていたこの遺跡が，調査区以外の広がりがほとんど認められないことを考えあわせると，検出された1棟の住居跡は，少し離れた居住地と密接な関係をもつ狩猟時のキャンプサイト的役割をもった施設と考えられる。晩期においては，台地南端東側の一部を墓域として利用していたことが，大洞Ｂ式土器埋納の土壙の検出で理解できる。

(2) 土器・土製品について

本遺跡で出土した土器は，縄文土器と弥生土器である。遺構内出土土器は僅少で，あるため，遺構外出土土器を中心にした分類にしたがって見ていきたい。

第Ⅰ群土器（21図，22図７～16）

縄文後期初頭～前葉に比定されるものである。磨消手法の有無で２分類される。

第１類（21図，22図７）

磨消手法を施さないもので，横位の平行沈線を基軸にその間を曲線，弧線で結ぶものである。地文の縄文は単節，無節があり，条の広いものも見られる。

第２類（22図８～16，26図64・65）

磨消縄文の行われているもので，基本的には１類と同じ文様構成を持つ。沈線を結ぶ曲線には逆「Ｓ」字状の蛇行文も見られる。隆起帯があり，その屈曲部に刺突を持つもの，最大径が体部下半にくる壺形土器の頸部に付く橋状把手や蓋形土製品もこの類に入るものであろう。蓋形を呈するものは完形品であり，径が16.5～17.5cmの平面がほぼ円形のもので，そこに同心円文が４条，それを埋めるように「x」字状の弧線を配しているものである。なおこの類の土器には朱塗の痕跡の見られるものもある。器高8.3cmのミニチュア土器もこの類である。

第Ⅱ群土器（22図17～19，23図20・21）

口縁部の山形突起に刺突の入る一群である。突起頂下に刺突が施されているものと，口縁部に沿う２本の沈線間に間隔を置いて刺突の入るものとがある。

第Ⅲ群土器（23図22～27）

縄文後期末葉～晩期初頭に比定される貼瘤文土器である。刺突の入った瘤を中心に磨消手法を用いた入組状文（帯状文）が施されるもので，入組部分が三叉状を呈しているものもある。

第Ⅳ群土器（23図28～34，24図35～37）

縦位の連続する刻目のあるものである。平行沈線間に刻目が入る場合が多いようである。これらには斜行縄文や横位の刺突が加わる。口縁部は山形や波状を呈しており，第Ⅲ群の口縁部や体部の文様帯を構成するものと思われる。

第Ⅴ群土器（24図39）

晩期大洞Ｂ式に比定されるものである。口縁部から頸部にかけて平行沈線に刻目を入れたものを３列施文している。口唇部は２個１対の小突起を配している。胴部は斜縄文である。

第Ⅵ群土器（24図41～45）

頸部を磨消により無文化させ，その下に平行沈線を施すもので，体部には磨消による雲形文が見られるものである。

第Ⅶ群土器（24図46～48）

磨消手法により器面に凸レンズ状もしくは木葉状に沈線で描出されているもので，地文として斜行縄文が施されている。

第Ⅷ群土器（25図49・50）

縦位の条痕をもつもので2片出土した。1片は貝殻によるもので，居熊井遺跡ＳＸ(U)001に類例が見られる。もう1片は櫛状工具によるものと思われる条の細いものである。前者は後期，後者は晩期と考えられる。

第Ⅸ群土器（25図51～59）

弥生時代後期のものである。

第1類（25図51～56）

交互刺突文の見られるもので，天王山式に比定されるものである。粘土紐上に刺突を施すものと，刺突のみで交互させているものがある。刺突下には縦位の縄文と横位の沈線が走る。体部は縦位の撚糸文に重菱形の沈線が施され，その後磨消を行うものとそうでないものがある。

第2類（25図57～59）

条の広い撚糸文を施すもので，小坂Ｘ式に比定されるものである。

なお，表採においては，縄文時代中期中葉と考えられる孔を有する把手（25図62）がある。

土製品（25図60，26図63）

土製品としては円盤状土製品，耳飾りがある。耳飾りは上下面とも凹み，下面は1条の円形文と中央部に一孔が施文されておりスタンプ状を呈する。

7．まとめ

猿ヶ平Ⅰ遺跡は秋田県鹿角市花輪字猿ヶ平に所在し，地形的には花輪盆地東側山地末端に形成された標高200ｍの花輪中位段丘上に立地する縄文時代と弥生時代の複合遺跡である。

縄文時代の遺構としては，後期の石組炉を有する円形の竪穴住居跡1棟，フラスコ状ピット16基，土壙19基，晩期の土壙1基，時期不明のＴピット1基である。

出土遺物としては，中期大木8b式，後期初頭～中葉の磨消文土器，末葉の貼瘤文土器，晩期大洞Ｂ式土器が出土しているが，ほとんど破片である。これらのいずれかに伴うと考えられる石器としては，石鏃，石斧，不定形石器，土製品として耳飾，円盤状土製品がある。

後期の遺構・遺物は，住居跡と少しはなれた西に張り出す台地上に集中して検出され，なかんずくフラスコ状ピットが目についた。いわゆる居住地外に集中するパターンに属するものである。このフラスコ状ピットは頸部のくびれの小さいもので，出土遺物は僅少であった。

底部に穿孔の認められる晩期大洞Ｂ式土器を出土した土壙は，調査区東隅で発見された。

弥生時代の遺構は発見されず，遺物は小坂Ｘ式と呼ばれる撚糸文土器片と交互刺突文の施文された天王山式土器で，縄文後期・晩期の遺構の検出をみた地区の中間位置で少量発見された。このことから，時代によって人々の居住区の違いが看取された。

〈主要参考文献〉

奥山潤・安保彰　「十和田湖西南部（小坂鉱山）の弥生式文化とその後続形態（上・下）『考古学雑誌第49巻２・３号』　1963年

田村誠一　「大曲１号遺跡」『岩木山』　1968年

安保彰・奥山潤　『小坂環状列石墳墓』　小坂町教育委員会　1969年

鈴木克彦　『中の平遺跡』　青森県教育委員会　1974年

古市豊司　『中の沢西張遺跡・古街道長根遺跡』　青森県教育委員会　1975年

安保　彰　『小坂のあけぼの　縄文期・弥生期』　1975年

古市豊司　『水木沢遺跡』　青森県教育委員会　1977年

工藤竹久　「東北北部における弥生時代の諸問題」『北奥古代文化第10号』　1978年

興野義一　「宮城県大穴遺跡の弥生式土器」『北奥古代文化第10号』　1978年

草間俊一　「岩手県の弥生文化」『北奥古代文化第10号』　1978年

葛西　励　『蛍沢遺跡（後期編）』　青森市蛍沢遺跡発掘調査団　1979年

中村良幸　『立石遺跡』　大迫町教育委員会　1979年

富樫泰時　『塚の下遺跡』　秋田県教育委員会　1979年

葛西　励　「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥古代文化第11号』　1979年

橘　善光　「入門講座・弥生土器―北東北３・４―」『考古学ジャーナル166・168号』　1979年

安孫子昭二　「コブ付土器様式から亀ヶ岡土器様式への変遷過程」『考古風土記５号』　1980年

永瀬福男　「秋田県内におけるフラスコ状ピットについて」『秋田地方史論集』半田教授退官記念会　1981年

秋田県教育委員会　「居熊井遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ』　1981年

発掘調査参加者

浅石　三郎，浅石　松蔵，安保　富蔵，安保　富福，小田島政美，金沢　　武，川又　繁治，川又　忠治，田中慶太郎，兎沢　一三，成田　惣太，成田　与吉，畠山精次郎，松岡　武男，松岡　徳良

浅石　容子，阿部　チエ，阿部　テル，安保テイ子，石井ヨシエ，石川　リサ，稲垣　キワ，井上　ミヲ，金沢　ミキ，川村千鶴子，川又　ヨリ，木村　サダ，木村　チエ，木村　ミキ，木村　良子，金田一實津子，工藤　イネ，工藤　ミツ，工藤　ヤエ，佐藤　シミ，関　　キワ，田中　タマ，津江　ミナ，津江　良子，成田　キヌ，成田　クニ，似鳥　キサ，畠山　スエ，畠山千代美，畠山　トヨ，松岡　テイ，柳沢　テル，柳沢　敏江　　（五十音順）

猿ケ平Ⅰ遺跡

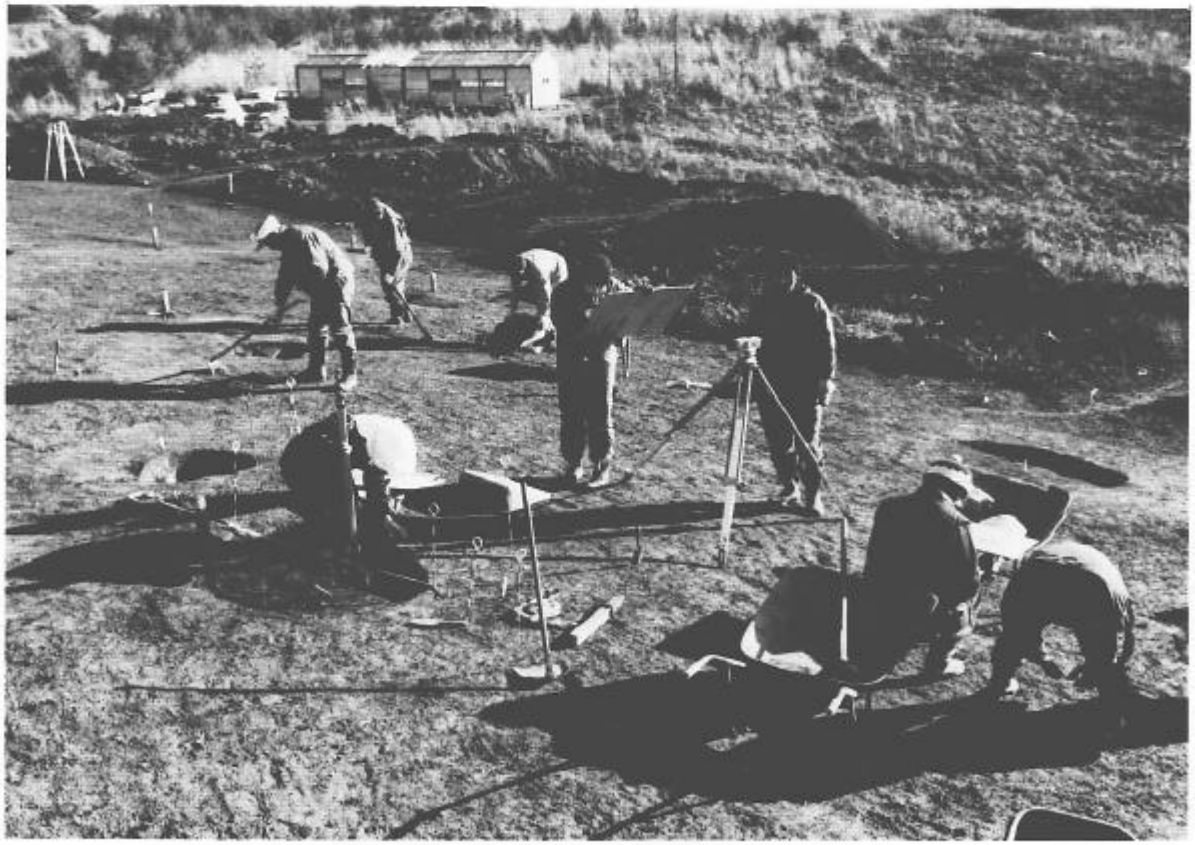
遺跡全景(北▶南)　上・発掘調査前　下・発掘調査後

図版1

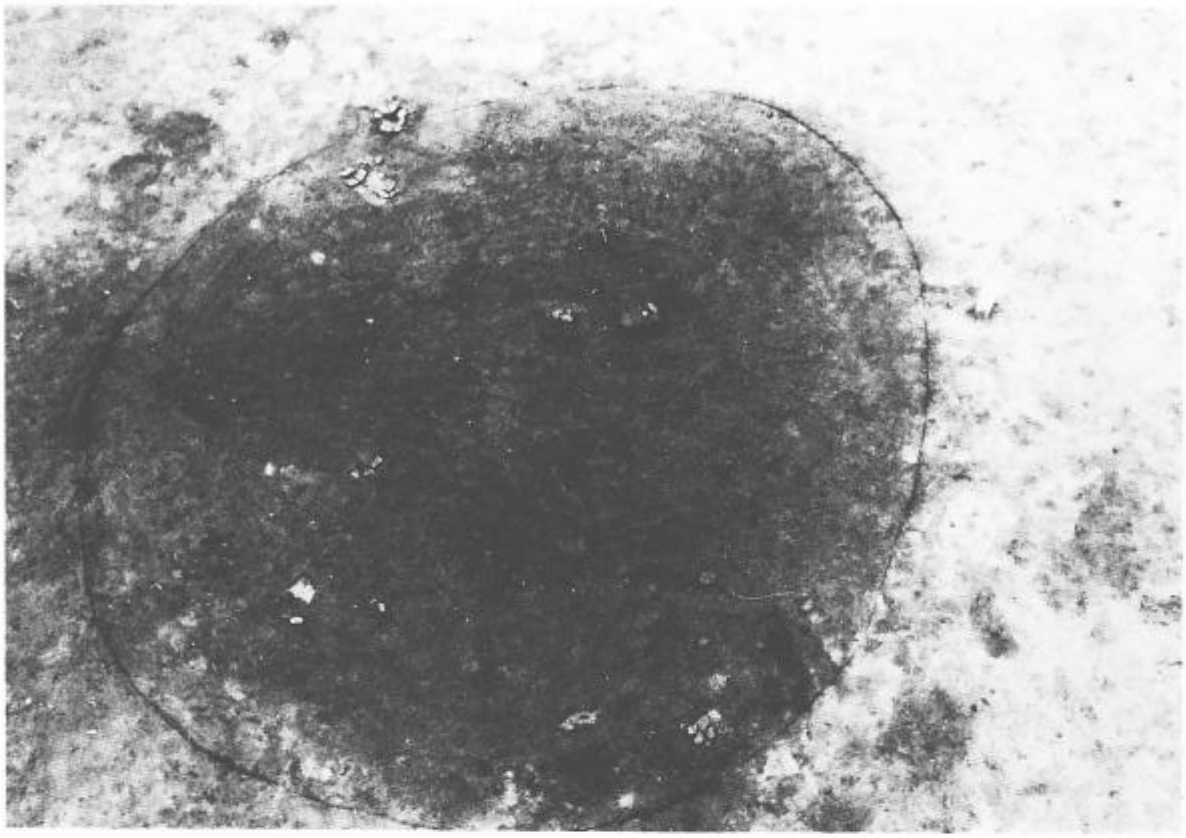
調査終了後遺跡全景(南東▶北西)

図版 2　　調査終了後遺跡全景(東▶西)

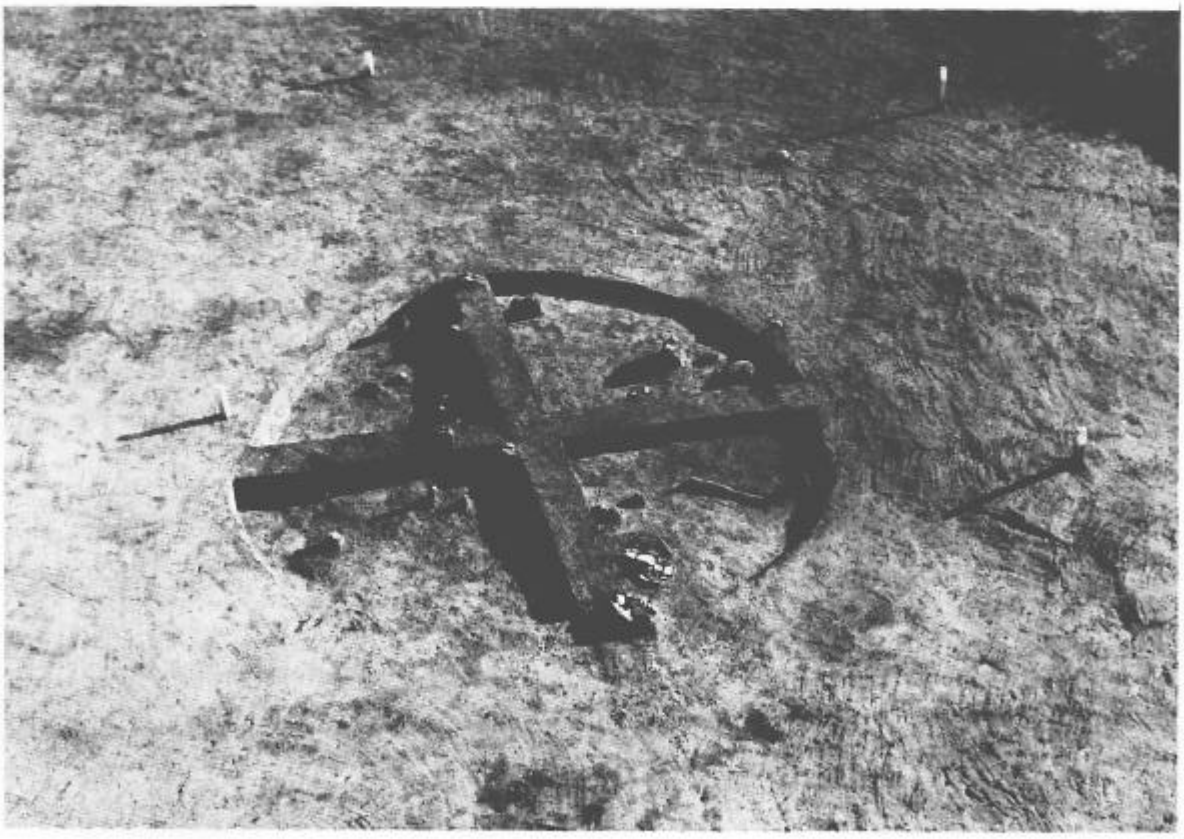
調査風景



図版 3　　調査風景

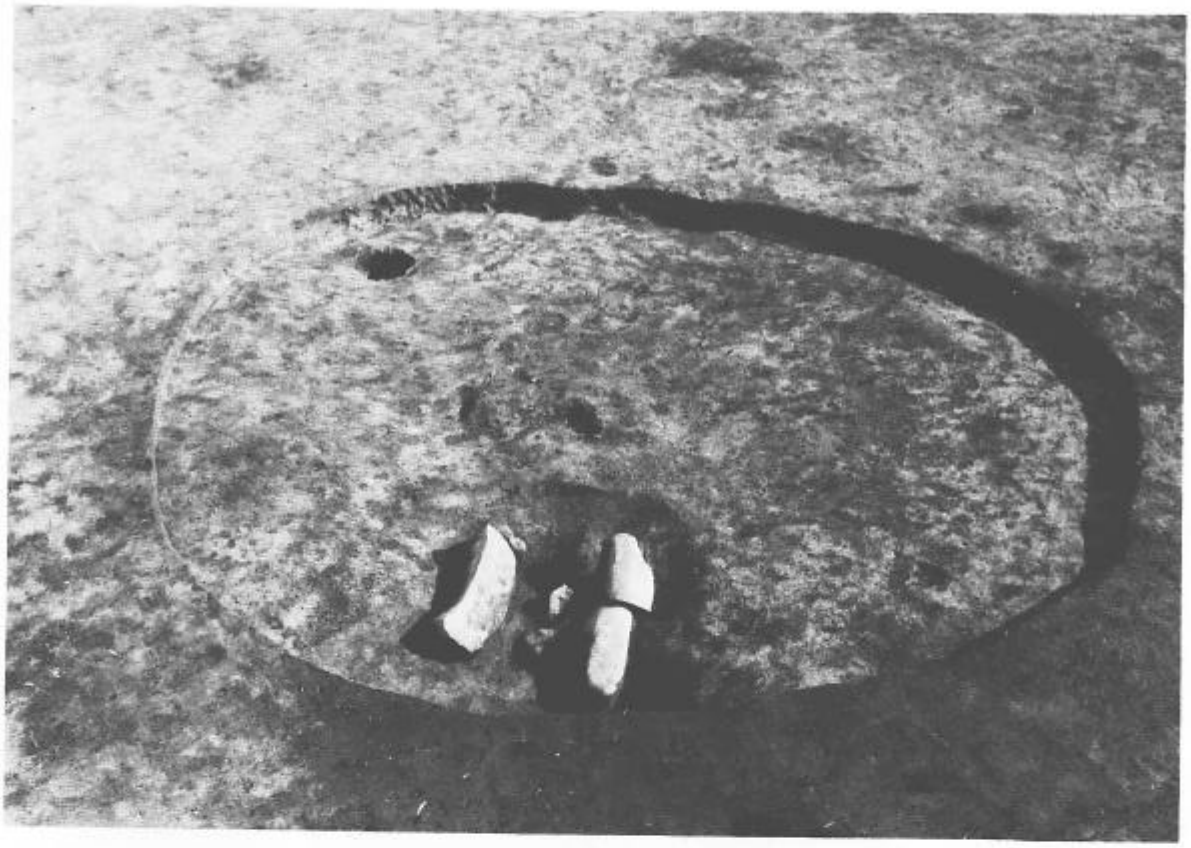


S1001 竪穴住居跡確認状況(南▶北)



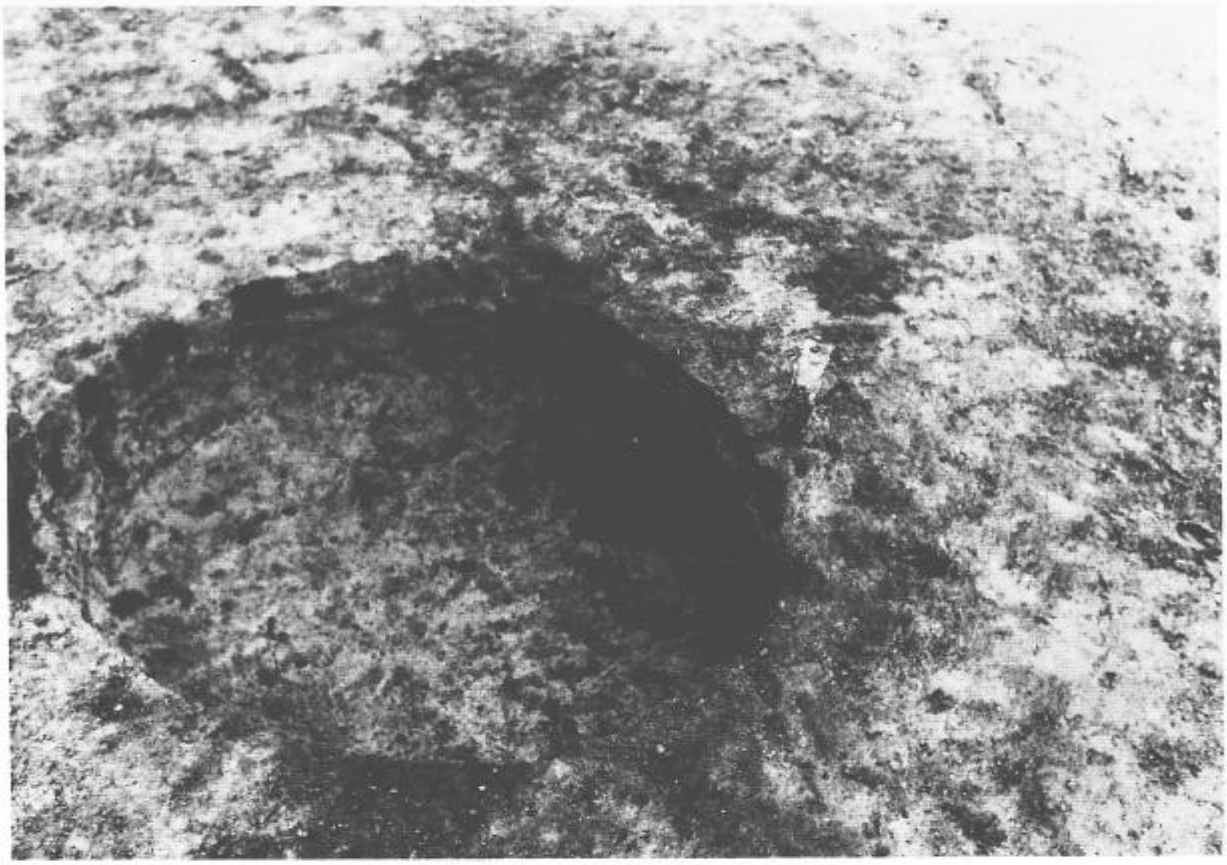
図版 4

S1001竪穴住居跡(北▶南)

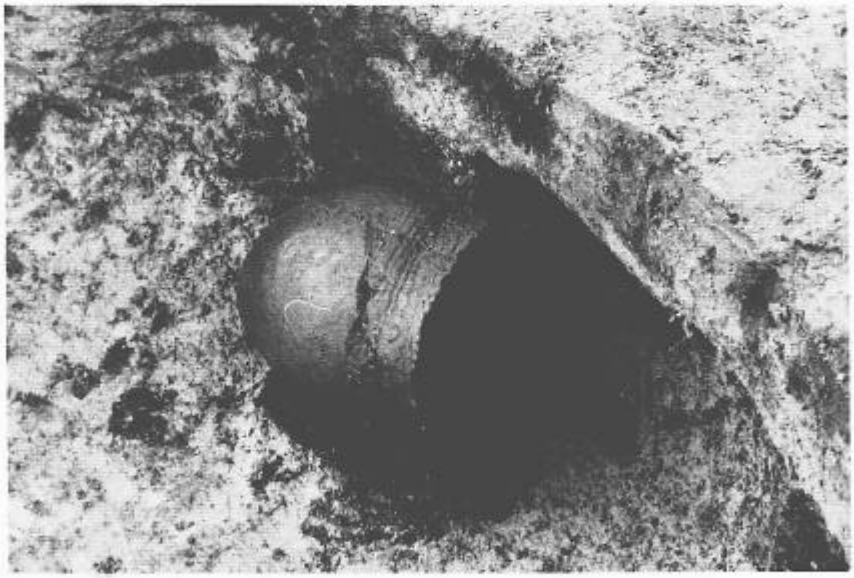


S1001 竪穴住居跡と炉(西▶東)

図版 5　　S1001 竪穴住居跡・炉の下のSK020土壙(西▶東)



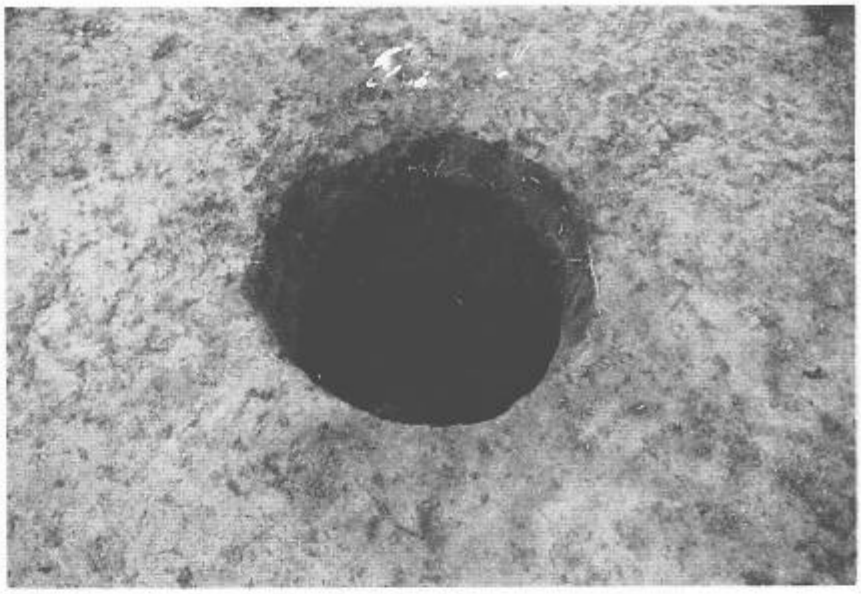
▲ SK016土壙（東▼西）

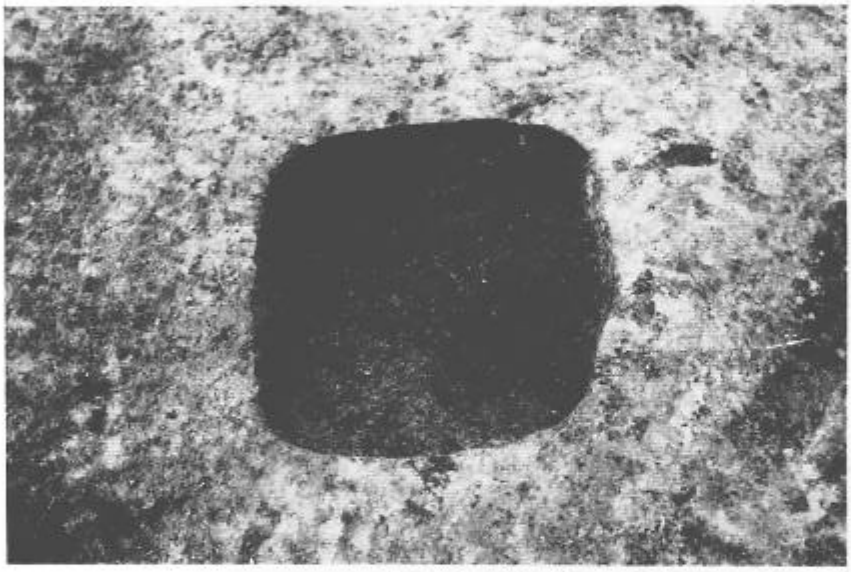


◀ SK016 土壙土器出土状況

図版 6

SK(F)012
フラスコ状ピット(南▶北) ▶



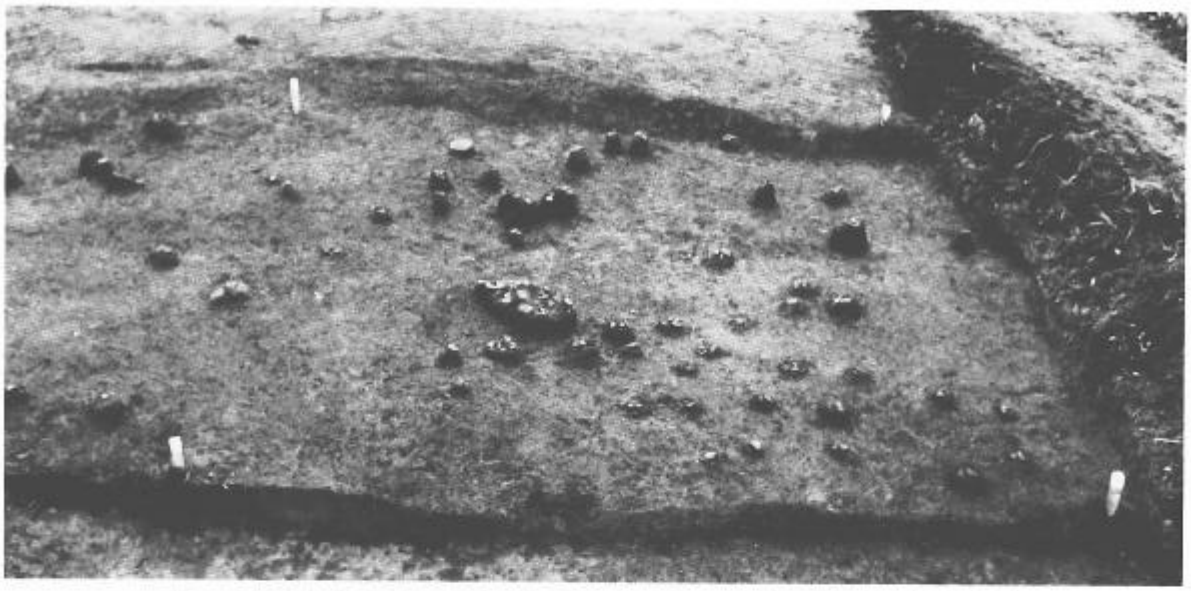


◀SX(F)001
焼土遺構(南東▶北西)

SX(U)001
埋設土器(南▶北) ▶

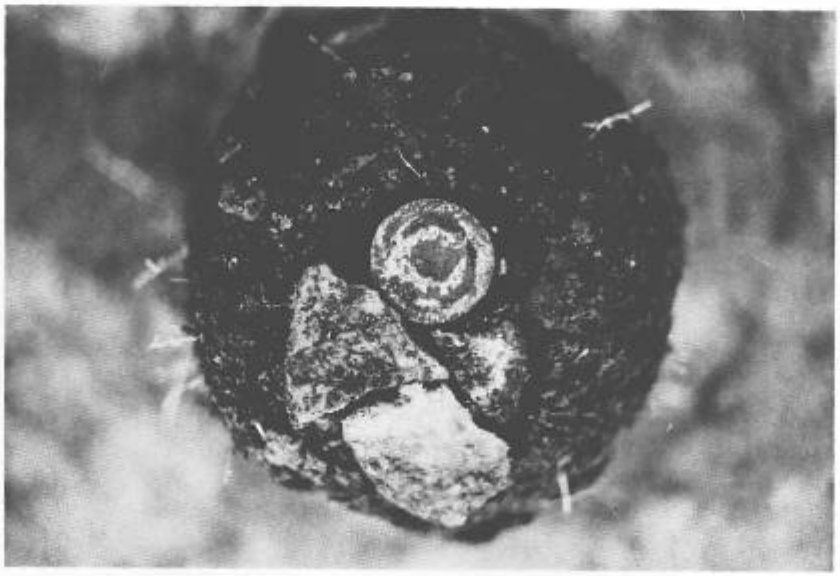
図版 7

猿ケ平I遺跡



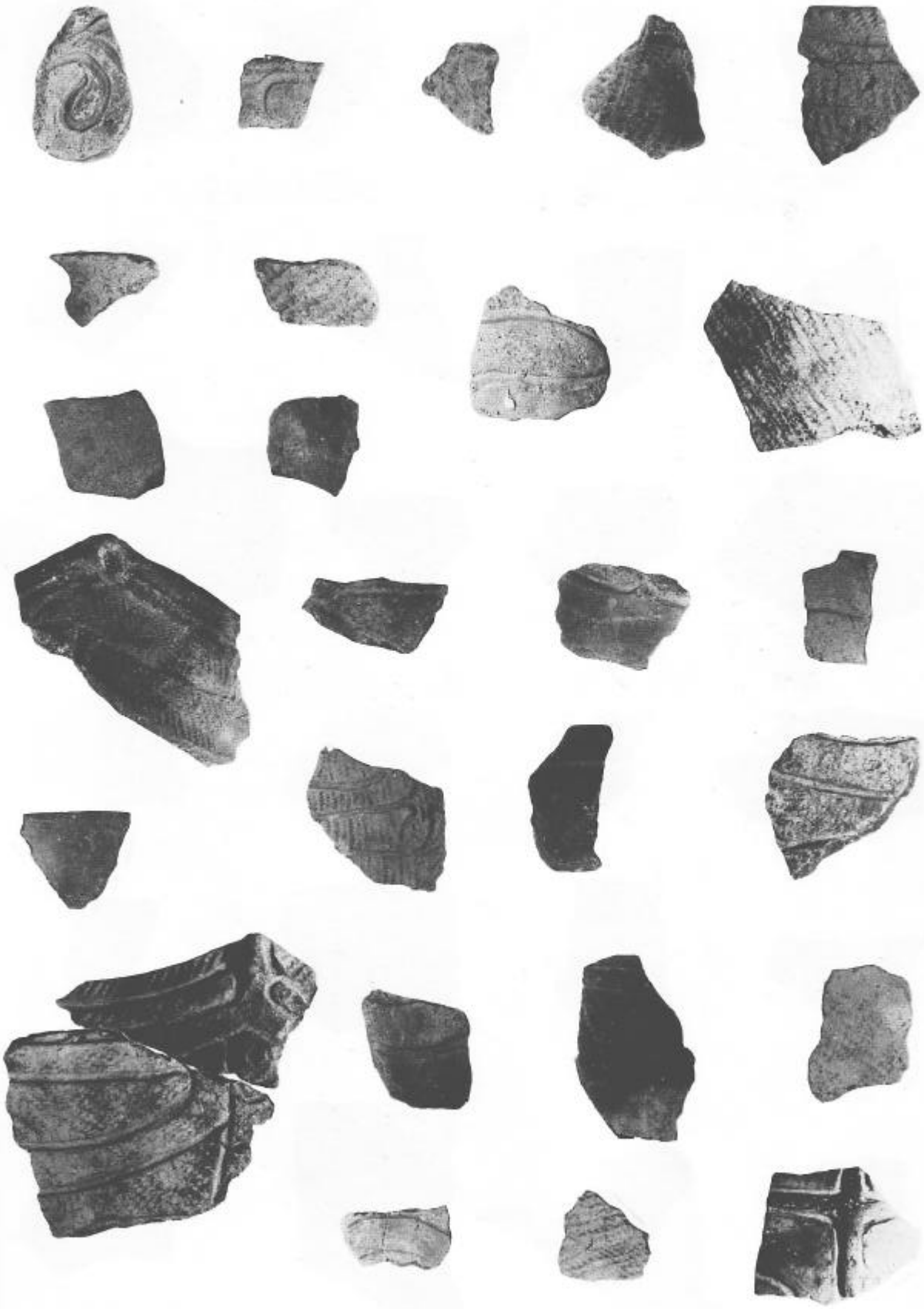
▲9—Sグリッド土器出土状況

◀蓋出土状況



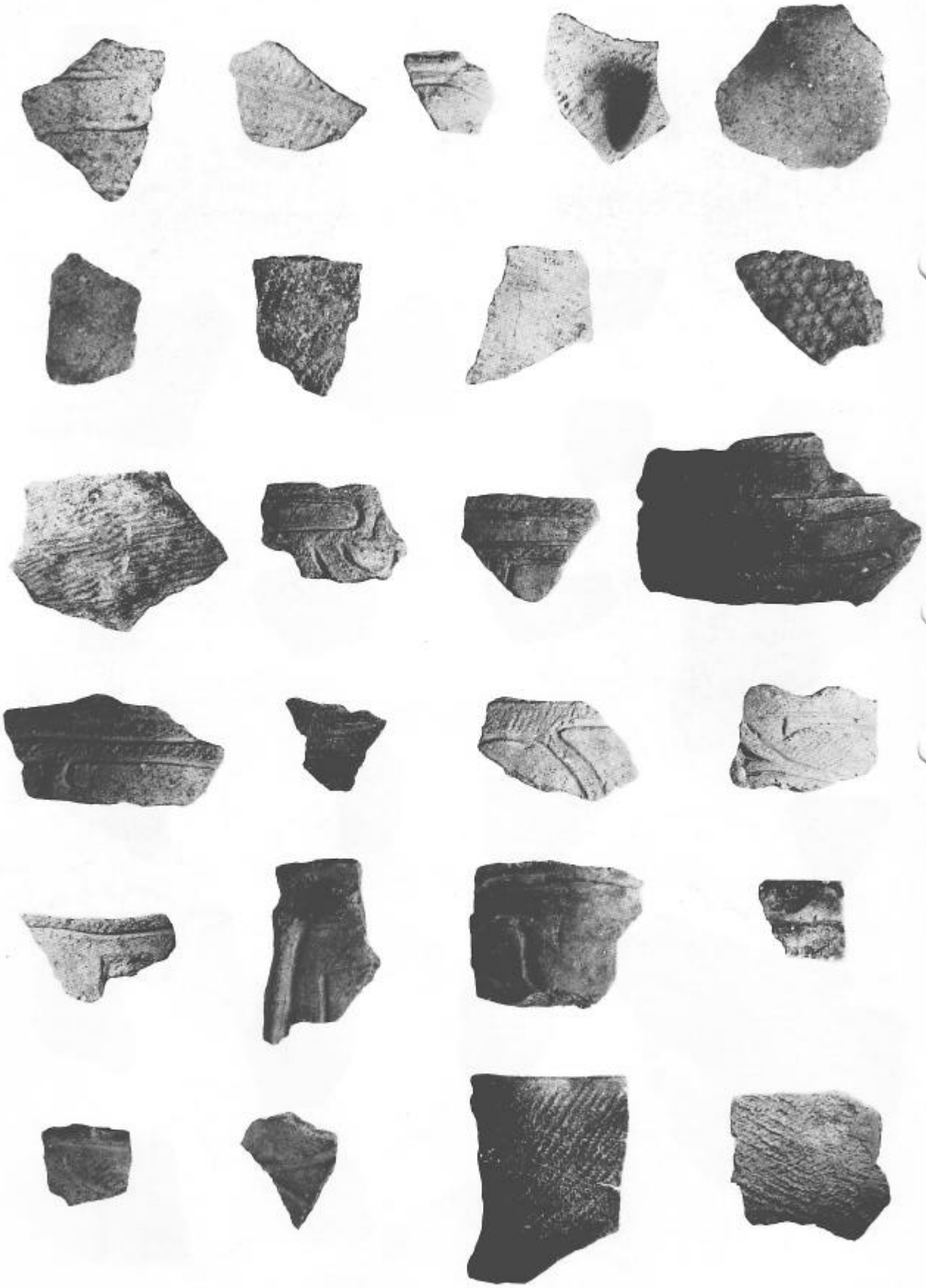
◀耳飾出土状況

図版 8



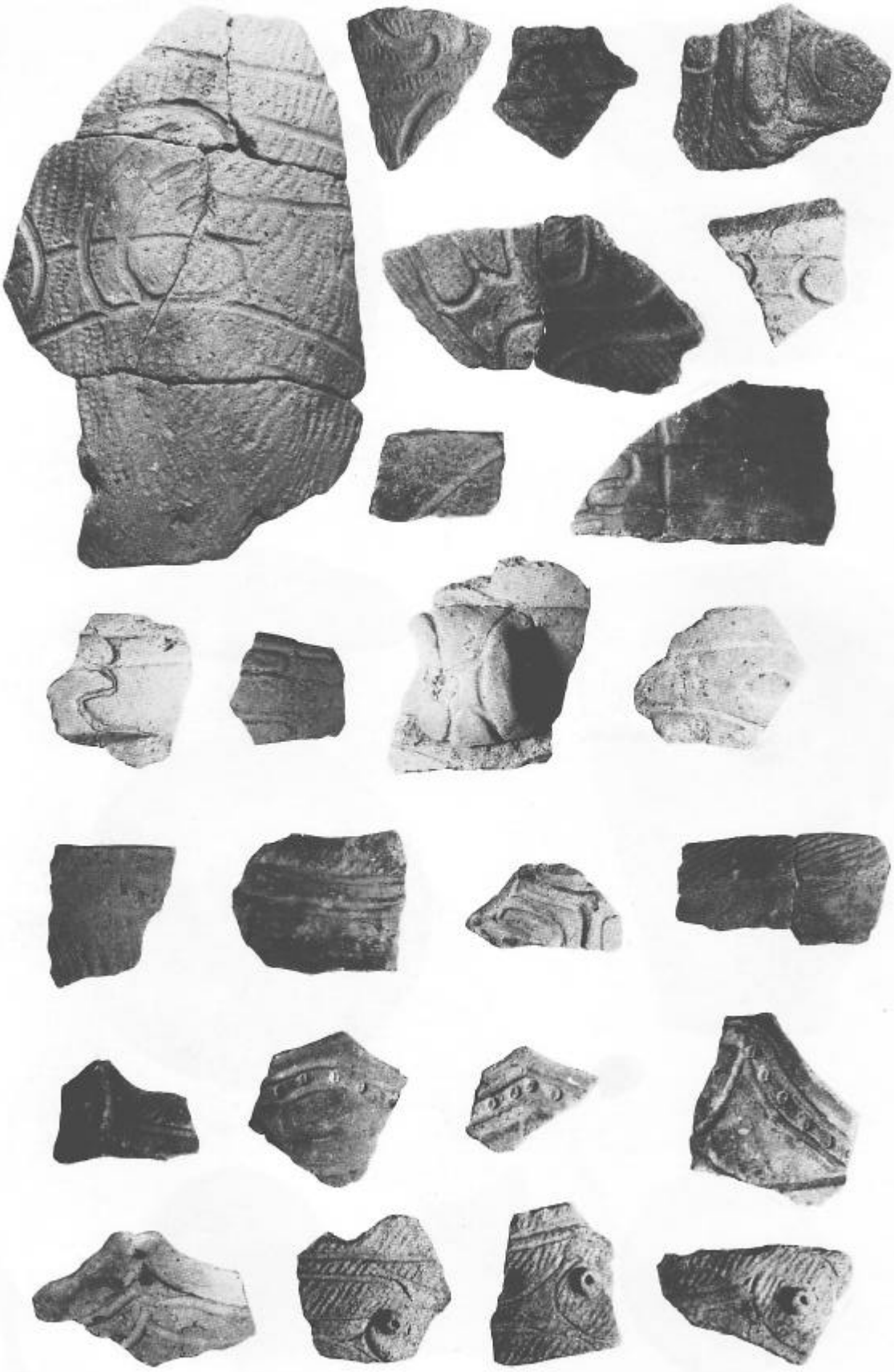
図版 9

ＳＩ001 竪穴住居・ＳＫ001，002，003，004土壙
ＳＫ（Ｆ）001 フラスコ状ピット出土土器（１）

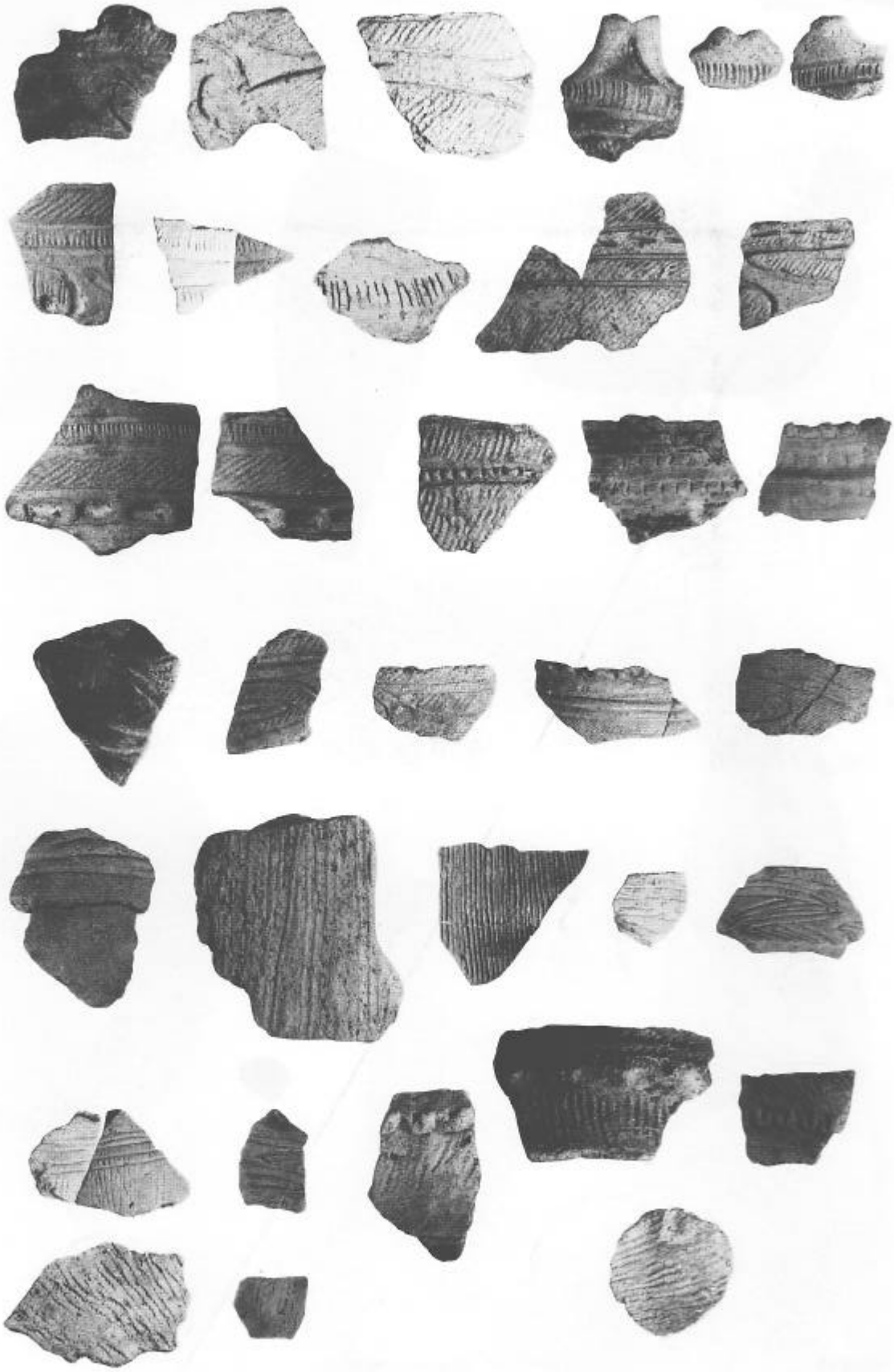


図版10　　SK(F)005，006，007，009フラスコ状ピット出土土器(2)

図版11　　SK016 土壙，SX(U)001 埋設土器，遺構外出土土器・土製品(3)

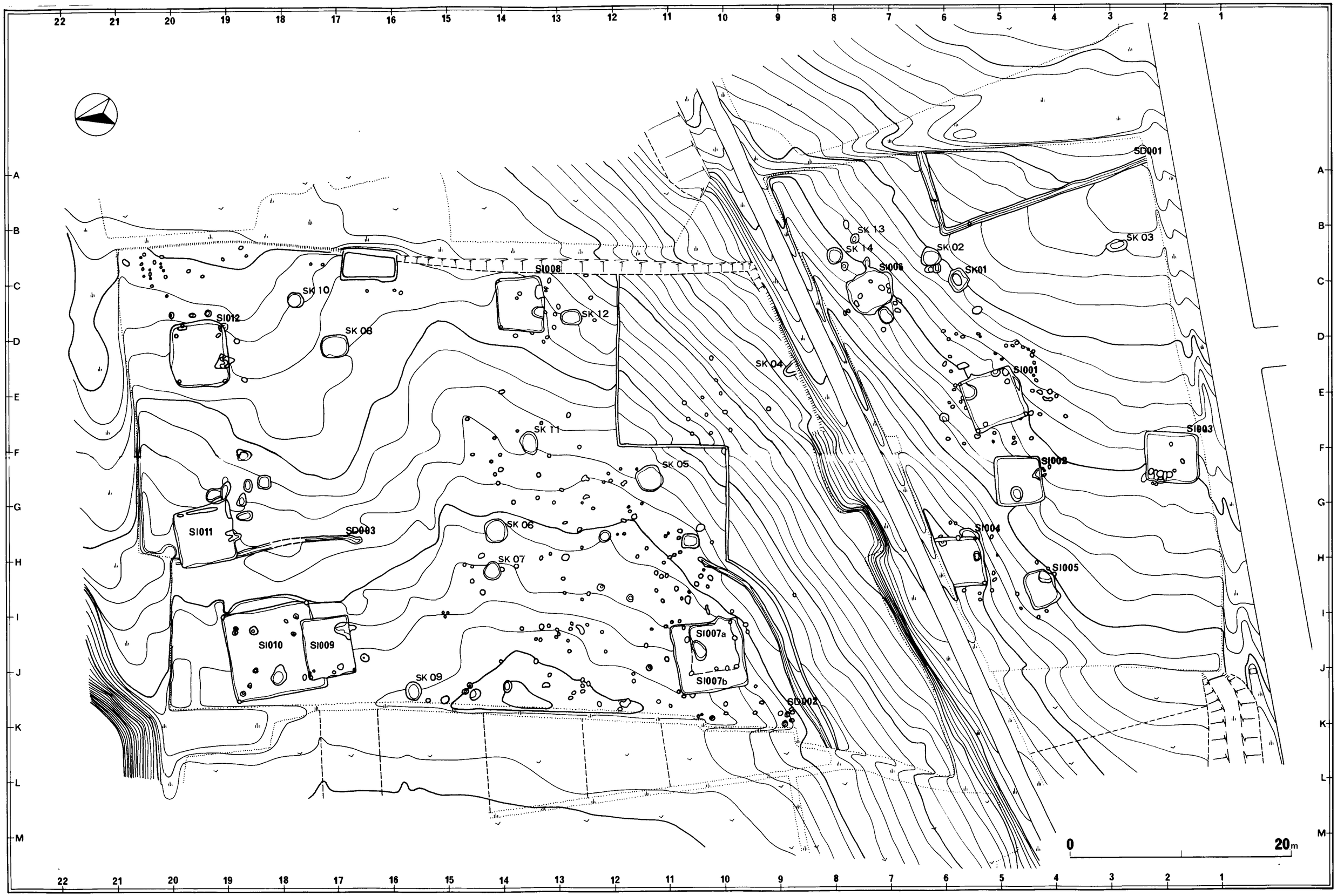


図版12　　遺構外出土土器(4)

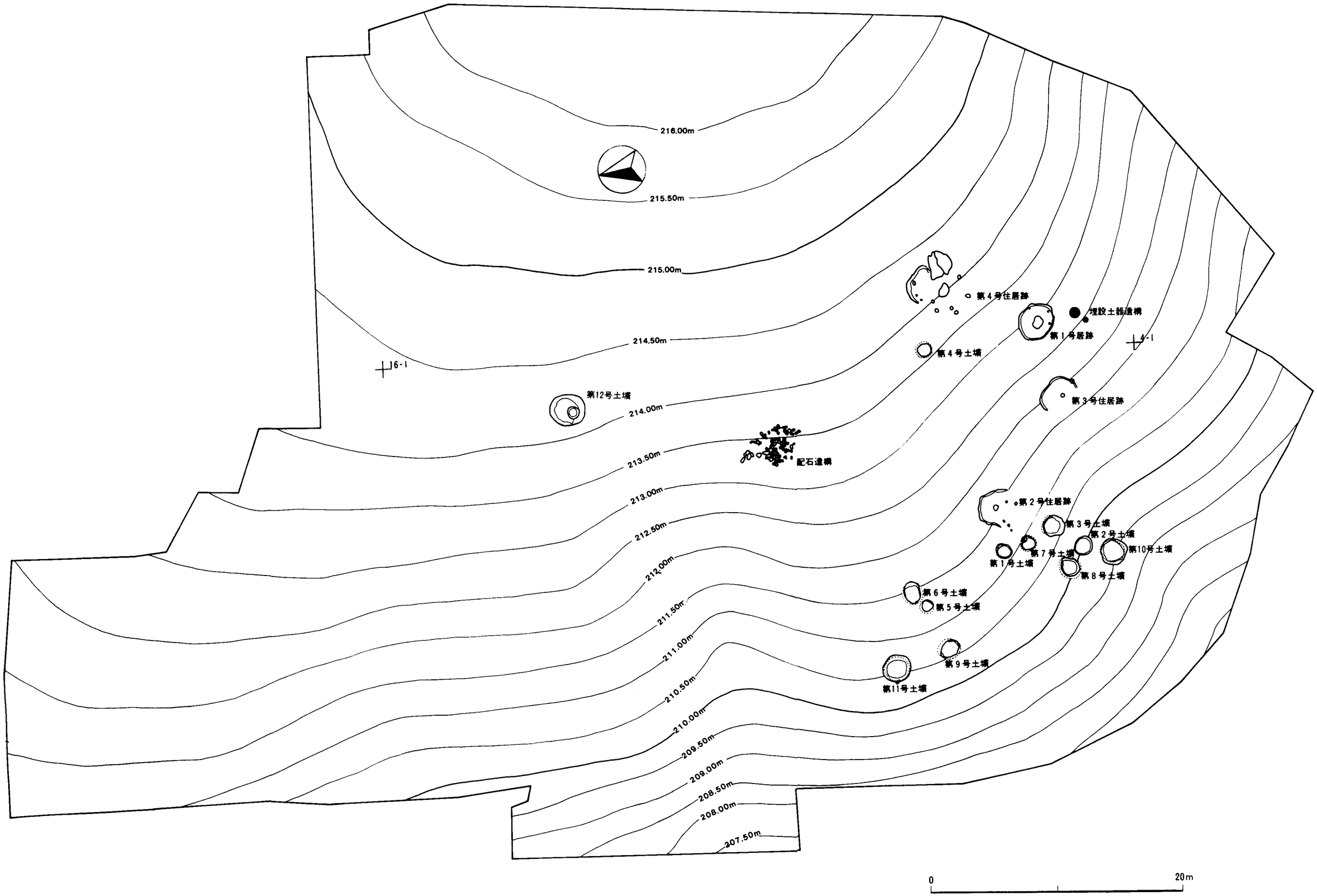


図版13　　遺構外出土土器(5)

図版14　　遺構外出土石器



付図１　上蔦岡Ⅳ遺跡遺構配置図



付図2　案内II遺跡遺構配置図